

小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集

柏原遺跡群
関口A・関口B・下柏原
(第二次)

—— 長野県小諸市関口A・関口B・下柏原遺跡発掘調査報告書 ——

1991. 3

小諸市教育委員会

小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集

柏原遺跡群
関口 A・関口 B・下柏原
(第二次)

—— 長野県小諸市関口 A・関口 B・下柏原遺跡発掘調査報告書 ——

1991. 3

小諸市教育委員会



関口A・関口B・下柏原遺跡



関口A・関口B遺跡



下柏原遺跡



掘立柱建物址群と柵址 (関口 A 遺跡)



金銅製飾り金具



奈良三彩と緑釉陶器

序 文

小諸市教育委員会

教育長 矢 島 正 一

この調査は、関口A、関口B、下柏原の三遺跡の発掘で、周辺一帯の圃場整備のために行なわれたものです。その場所は、三岡経由で野沢に至る県道の森山区東側一帯に広がる水田地帯の中にあります。

近くを繰矢川が流れる平坦の地で、所々に平地林が茂り、田切りの変化が加わり、今も野鳥や小動物が豊かに生息しています。北に浅間連峰、南に立科、八ヶ岳が連なり、西にアルプスが遠望できる一大パノラマの中に位置するすばらしい場所です。

調査面積は、延10,745㎡であり、調査期間は、平成元年4月17日より9月14日まででありました。調査の結果、主な遺構として、竪穴住居址58棟、掘立柱建物址71棟、中世の土坑墓1基などが確認されました。主な遺物としては、金銅製飾り金具、これは古墳時代後期のものと推定され、東日本の竪穴住居址では初めての出土ではなかろうかと評価されております。また、奈良三彩、緑釉陶器をはじめ畿内地方で作られたと考えられる土器も出土しており、何らかの中央との交流が行なわれていたのではないかと推定されます。

遺跡に立って見れば、古墳時代より平安時代に至る頃、われわれの先祖がこの地でどのような生活をしていたであろうかと、様々に思い廻らされます。出土したものを基盤として、科学的思考による歴史研究の資料に生かされることが期待されます。

本発掘にあられた小淵武一団長、花岡 弘学芸員、快く作業に参加して下さった老人会の皆様、また御代田町教育委員会のご協力、事業に対し深いご理解ご協力を頂いた多くの方々に心からお礼を申しあげ序にかえる次第です。

例 言

- 1 本書は、平成元年4月17日～9月14日までにわたって発掘調査された、長野県小諸市大字森山字関口、大字甲字東道木に所在する関口A遺跡^{せきぐち}、関口B遺跡、大字森山字柏原^{かしわばら}に所在する柏原遺跡群下柏原遺跡の発掘調査報告書である。このうち、関口B遺跡は、昭和54年に発掘調査が行なわれており、前回調査分を第一次、今回報告分を第二次とした。
- 2 本調査は、東信土地改良事務所の委託を受け、小諸市教育委員会が実施した。
- 3 本調査は、花岡 弘を発掘担当者とし、長野県考古学会員、有識者を調査員とし、地元東山区の方々のご協力を得て実施した。
- 4 遺構実測図の作成は、次の者が行なったほか、堤 隆氏、新日本航業株式会社の協力を得た。井出喜八、小淵武一、太田史夫、小山内玲子、小野山 清、佐藤君代、鳥居 亮、伴野有希子、花岡 弘
- 5 遺物実測図の作成・トレースは、太田史夫、岡田悦子、塩川峰子、古谷里江、花岡 弘が行なったほか、株式会社パスコの協力を得た。
遺構実測図のトレースは、太田史夫、太田洋子、星野保彦が行なった。
- 6 遺構・遺物の写真撮影は、小淵武一・鳥居 亮・花岡 弘が行なった。航空写真・遺構全体図の作成は新日本航業株式会社によるものである。
- 7 本書の執筆は、第II章1第V章3を小淵武一が、他を花岡 弘が行なった。
- 8 本書の付編については以下の各位より玉稿を賜わった（受付順）。
パリノ・サーヴェイ株式会社 「関口A・B遺跡出土材の樹種同定」
西沢寿晃 「関口A遺跡第3号土坑出土人骨について」
宮崎重雄 「関口B遺跡の獣骨類について」
- 9 本書の編集は、花岡 弘が行ない、小淵武一がこれを校閲、監修した。
- 10 本遺跡の出土資料は、小諸市教育委員会の責任下に保管されている。
発掘調査および報告書作成に際しては、次の方々に御指導・御配慮・御協力を賜わった。ここ

に御芳名を記して厚く御礼申し上げる（50音順、敬称略）。

石川日出志、桐原 健、市川隆之、児玉卓文、小林三郎、早乙女雅博、小山岳夫、諏訪間 伸、立花 実、堤 隆、原 明芳、望月幹夫

（関係機関） 御代田町教育委員会、株式会社パスコ、新日本航業株式会社、パリノ・サーヴェイ株式会社、有限会社堀籠重機

凡 例

- 1 各遺構の略号は、次のとおりである。

竪穴住居址——S B 掘立柱建物址——S T 溝——S D 土坑——S K 井戸址——S E
柵址——S X

- 2 遺構実測図の縮尺は、次のとおりである。

竪穴住居址・掘立柱建物址・土坑——1/80（但し、第33号掘立柱建物址は1/100） 溝——1/200（但し、関口A遺跡第1号溝址は1/400、関口B遺跡第1号溝址は1/300） カマド——1/40、遺構全体図——1/500

- 3 遺物実測図の縮尺は、次のとおりである。

土器——1/4 砥石・石斧・鉄器・鞆羽口等——1/3（但し、第268図1は1/2） 紡錘車・銭貨——1/2 石鏃・石匙・金銅製品——2/3

- 4 遺構平面図における点のスクリーントーンは、竪穴住居址ではカマド・焼土を、掘立柱建物址では柱痕を表わす。

- 5 土器実測図において使用した点のスクリーントーンは黒色土器を表わし、断面を黒塗したもの、点のスクリーントーンを貼付したものは須恵器・灰釉陶器・奈良三彩・青磁を表わす。また、鉄器実測図に使用したスクリーントーンは木質部の残存を表わす（但し、第152図1は、赤色塗彩を表わす）。

- 6 水系レベルの原点は、次のとおりである。

関口A遺跡——692.190m、694.190m 関口B遺跡——692.158m、692.803m 下柏原遺跡——684.520m

7 図版中、遺物の縮尺は次のとおりである。

土器——約1/4 砥石・鉄器——約1/3 紡錘車・銭貨——約1/2 石鏃——約1/1 五輪塔——約1/5

8 図版中では遺物番号を簡略化した。例えば、第8図1は8-1と表わす。

9 出土土器の一覧表の法量は、上から口径、高さ、底径の順に記載し、——不明、()現存値あるいは推定値、・丸底を表わす。

10 土層および遺物胎土の色調は『新版 標準土色帖』の表示に基づいて示した。

本文目次

巻頭図版

序 文

例 言

凡 例

本文目次

付表目次

挿図目次

図版目次

I 発掘調査の経緯	1
1 調査に至る動機	1
2 調査の概要	2
3 調査の経過	2
II 遺跡の概観	6
1 遺跡の自然的環境	6
2 遺跡の歴史的環境	8
III 層 序	12
IV 遺構と遺物	13
1 関口A遺跡	
(1) 竪穴住居址	13
1) 第1号住居址	13
2) 第2号住居址	14
3) 第3号住居址	14
4) 第4号住居址	15
5) 第5号住居址	17
6) 第6号住居址	18
7) 第7号住居址	20
(2) 掘立柱建物址	21
1) 第1号掘立柱建物址	21
2) 第2号掘立柱建物址	21
3) 第3号掘立柱建物址	21
4) 第4号掘立柱建物址	22

5) 第5号掘立柱建物址	22
6) 第6号掘立柱建物址	29
7) 第7号掘立柱建物址	29
8) 第8号掘立柱建物址	29
9) 第9号掘立柱建物址	30
10) 第10号掘立柱建物址	31
(3) 柵址	31
1) 第1号柵址	31
(4) 井戸址	32
1) 第1号井戸址	32
(5) 溝址	33
1) 第1号溝址	33
(6) 土坑	34
(7) 遺構外出土遺物	39
2 関口B遺跡	
(1) 竪穴住居址	40
1) 第1号住居址	40
2) 第2号住居址	42
3) 第3号住居址	43
4) 第4号住居址	46
5) 第5号住居址	47
6) 第6号住居址	48
7) 第7号住居址	49
8) 第8号住居址	51
9) 第9号住居址	52
10) 第10号住居址	56
11) 第11号住居址	59
12) 第12号住居址	61
13) 第13号住居址	63
14) 第14号住居址	63
15) 第15号住居址	64
16) 第16号住居址	65
17) 第17号住居址	68
18) 第18号住居址	70

19) 第19号住居址	73
20) 第20号住居址	74
21) 第21号住居址	77
22) 第22号住居址	79
23) 第23号住居址	80
24) 第24号住居址	82
25) 第25号住居址	84
26) 第26号住居址	87
27) 第27号住居址	89
28) 第28号住居址	91
29) 第29号住居址	92
30) 第30号住居址	95
31) 第31号住居址	98
32) 第32号住居址	99
33) 第33号住居址	102
34) 第34号住居址	104
35) 第35号住居址	107
36) 第36号住居址	108
37) 第37号住居址	110
38) 第38号住居址	112
39) 第39号住居址	113
40) 第40号住居址	114
41) 第41号住居址	116
42) 第42号住居址	118
43) 第43号住居址	119
44) 第44号住居址	123
45) 第45号住居址	124
46) 第46号住居址	125
47) 第47号住居址	126
48) 第49号住居址	128
49) 第50号住居址	129
50) 第51号住居址	130
51) 第52号住居址	131
(2) 掘立柱建物址	132

1) 第 1 号掘立柱建物址	132
2) 第 2 号掘立柱建物址	132
3) 第 4 号掘立柱建物址	134
4) 第 5 号掘立柱建物址	135
5) 第 6 号掘立柱建物址	135
6) 第 7 号掘立柱建物址	136
7) 第 8 号掘立柱建物址	136
8) 第 9 号掘立柱建物址	137
9) 第 10 号掘立柱建物址	137
10) 第 11 号掘立柱建物址	138
11) 第 12 号掘立柱建物址	139
12) 第 13 号掘立柱建物址	139
13) 第 14 号掘立柱建物址	140
14) 第 15 号掘立柱建物址	141
15) 第 16 号掘立柱建物址	141
16) 第 17 号掘立柱建物址	143
17) 第 18 号掘立柱建物址	145
18) 第 19 号掘立柱建物址	146
19) 第 20 号掘立柱建物址	149
20) 第 21 号掘立柱建物址	149
21) 第 22 号掘立柱建物址	149
22) 第 23 号掘立柱建物址	150
23) 第 24 号掘立柱建物址	155
24) 第 25 号掘立柱建物址	155
25) 第 26 号掘立柱建物址	155
26) 第 27 号掘立柱建物址	156
27) 第 28 号掘立柱建物址	156
28) 第 29 号掘立柱建物址	157
29) 第 30 号掘立柱建物址	158
30) 第 31 号掘立柱建物址	165
31) 第 32 号掘立柱建物址	165
32) 第 33 号掘立柱建物址	165
33) 第 34 号掘立柱建物址	166
34) 第 35 号掘立柱建物址	166

35) 第36号掘立柱建物址	166
36) 第37号掘立柱建物址	168
37) 第38号掘立柱建物址	168
38) 第39号掘立柱建物址	171
39) 第40号掘立柱建物址	172
40) 第41号掘立柱建物址	173
41) 第42号掘立柱建物址	173
42) 第43号掘立柱建物址	177
43) 第44号掘立柱建物址	177
44) 第45号掘立柱建物址	177
45) 第46号掘立柱建物址	177
46) 第47号掘立柱建物址	178
47) 第48号掘立柱建物址	179
48) 第49号掘立柱建物址	180
49) 第50号掘立柱建物址	181
50) 第51号掘立柱建物址	183
51) 第53号掘立柱建物址	183
52) 第54号掘立柱建物址	184
53) 第55号掘立柱建物址	185
54) 第56号掘立柱建物址	185
55) 第57号掘立柱建物址	186
56) 第58号掘立柱建物址	186
57) 第59号掘立柱建物址	186
58) 第60号掘立柱建物址	187
59) 第61号掘立柱建物址	187
60) 第62号掘立柱建物址	187
61) 第63号掘立柱建物址	189
(3) 井戸址	190
1) 第1号井戸址	190
(4) 溝址	193
1) 第1号溝址	193
2) 第2号溝址	195
3) 第3号溝址	196
4) 第4号溝址	196

5) 第5号溝址	198
6) 第6号溝址	198
7) 第7号溝址	201
8) 第8号溝址	201
(5) 土坑	202
(6) 遺構外出土遺物	204
3 下柏原遺跡	205
(1) 竪穴住居址	205
1) 第1号住居址	205
(2) 遺構外出土遺物	207
V 総括	208
(1) 土器群の様相	208
(2) 石製品・土製品・鉄製品	214
(3) 金銅製透彫飾り金具について	215
(4) 自然遺物について	215
(5) 遺構の変遷	217
引用参考文献	
付編1 関口A・B遺跡出土材の樹種同定	245
付編2 関口A遺跡第3号土坑出土土人骨について	255
付編3 関口B遺跡の獣骨類について	258

付表目次

第1表 関口A・関口B・下柏原遺跡とその周辺遺跡	10	表1 関口A・B遺跡出土材の樹種	251
第2表 関口A遺跡土坑一覧表	34	表2 関口A・B遺跡の遺構ごとの樹種構成	254
第3表 関口B遺跡土坑一覧表	202	付編3	
第4表 出土土器一覧表	225	第1表 関口B遺跡出土獣骨類一覧表	261
付編1			

挿図目次

第1図 遺跡の位置 (1:50,000)	1	第5図 遺跡と周辺遺跡分布図 (1:10,000)	9
第2図 発掘調査経過図	4	第6図 層序模式図	12
第3図 調査区 (1:5,000)	5	関口A遺跡	
第4図 遺跡付近の地質図	6	第7図 第1号住居址実測図	13

第8図	第1号住居址出土遺物	13
第9図	第2号住居址実測図	14
第10図	第2号住居址出土遺物	14
第11図	第3号住居址実測図	15
第12図	第3号住居址出土遺物	15
第13図	第4号住居址実測図	15
第14図	第4号住居址カマド実測図	16
第15図	第4号住居址出土遺物	16
第16図	第5号住居址実測図	17
第17図	第5号住居址カマド実測図	18
第18図	第5号住居址出土遺物	18
第19図	第6号住居址実測図	19
第20図	第6号住居址カマド実測図	19
第21図	第6号住居址出土遺物(A)	20
第22図	第6号住居址出土遺物(B)	20
第23図	第7号住居址実測図	20
第24図	第1号掘立柱建物址実測図	21
第25図	第4号掘立柱建物址出土遺物	22
第26図	第2号掘立柱建物址実測図	23・24
第27図	第3・4号掘立柱建物址実測図	25・26
第28図	第5・6・7・8号掘立柱建物址実測図	27・28
第29図	第9号掘立柱建物址実測図	30
第30図	第10号掘立柱建物址実測図	31
第31図	第1号柵址実測図	31
第32図	第1号井戸址実測図	32
第33図	第1号井戸址出土遺物	32
第34図	第1号溝址実測図	33
第35図	第1号溝址出土遺物	33
第36図	第1～第7号土坑実測図	35・36
第37図	第8～第13号土坑実測図	35・36
第38図	第14～第19号土坑実測図	37・38
第39図	第20～第25号土坑実測図	37・38
第40図	第3号土坑出土遺物	39
第41図	第4号土坑出土遺物	39
第42図	第23号土坑出土遺物	39
第43図	第24号土坑出土遺物	39
第44図	遺構外出土遺物	39
関口B遺跡		
第45図	第1号住居址カマド実測図	40
第46図	第1号住居址実測図	41

第47図	第1号住居址出土遺物(A)	42
第48図	第1号住居址出土遺物(B)	42
第49図	第2号住居址カマド実測図	42
第50図	第2号住居址実測図	43
第51図	第2号住居址出土遺物	43
第52図	第3号住居址カマド実測図	44
第53図	第3号住居址実測図	45
第54図	第3号住居址出土遺物(A)	45
第55図	第3号住居址出土遺物(B)	45
第56図	第4号住居址実測図	46
第57図	第4号住居址出土遺物(A)	47
第58図	第4号住居址出土遺物(B)	47
第59図	第4号住居址出土遺物(C)	47
第60図	第5号住居址実測図	47
第61図	第6号住居址実測図	48
第62図	第6号住居址出土遺物	49
第63図	第7号住居址カマド実測図	49
第64図	第7号住居址実測図	50
第65図	第7号住居址出土遺物(A)	50
第66図	第7号住居址出土遺物(B)	51
第67図	第7号住居址出土遺物(C)	51
第68図	第8号住居址カマド実測図	51
第69図	第8号住居址実測図	52
第70図	第8号住居址出土遺物	52
第71図	第9号住居址実測図	53・54
第72図	第9号住居址カマド実測図	55
第73図	第9号住居址出土遺物(A)	55
第74図	第9号住居址出土遺物(B)	56
第75図	第10号住居址カマド実測図	57
第76図	第10号住居址実測図	58
第77図	第10号住居址出土遺物(A)	58
第78図	第10号住居址出土遺物(B)	59
第79図	第11号住居址実測図(新)	59
第80図	第11号住居址カマド実測図	60
第81図	第11号住居址実測図(旧)	60
第82図	第11号住居址出土遺物	61
第83図	第12号住居址カマド実測図	61
第84図	第12号住居址実測図	62
第85図	第12号住居址出土遺物	62
第86図	第13号住居址実測図	63

第87図	第14号住居址実測図	63	第127図	第26号住居址カマド実測図(北)	88
第88図	第15号住居址カマド実測図	64	第128図	第26号住居址出土遺物	89
第89図	第15号住居址実測図	65	第129図	第27号住居址カマド実測図	89
第90図	第15号住居址出土遺物	65	第130図	第27号住居址実測図	90
第91図	第16号住居址実測図	66	第131図	第27号住居址出土遺物(A)	91
第92図	第16号住居址カマド実測図	67	第132図	第27号住居址出土遺物(B)	91
第93図	第16号住居址出土遺物(A)	67	第133図	第28号住居址実測図	92
第94図	第16号住居址出土遺物(B)	68	第134図	第28号住居址出土遺物	92
第95図	第17号住居址実測図	68	第135図	第29号住居址カマド実測図	93
第96図	第17号住居址カマド実測図	69	第136図	第29号住居址実測図	94
第97図	第17号住居址出土遺物(A)	69	第137図	第29号住居址出土遺物(A)	94
第98図	第17号住居址出土遺物(B)	70	第138図	第29号住居址出土遺物(B)	95
第99図	第18号住居址実測図	70	第139図	第30号住居址カマド実測図	95
第100図	第18号住居址カマド実測図	71	第140図	第30号住居址実測図	96
第101図	第18号住居址出土遺物(A)	71	第141図	第30号住居址出土遺物(A)	97
第102図	第18号住居址出土遺物(B)	72	第142図	第30号住居址出土遺物(B)	97
第103図	第19号住居址実測図	73	第143図	第30号住居址出土遺物(C)	98
第104図	第19号住居址カマド実測図	73	第144図	第31号住居址カマド実測図	98
第105図	第19号住居址出土遺物	74	第145図	第31号住居址実測図	99
第106図	第20号住居址カマド実測図	75	第146図	第32号住居址実測図	100
第107図	第20号住居址実測図	76	第147図	第32号住居址カマド実測図	101
第108図	第20号住居址出土遺物(A)	76	第148図	第32号住居址出土遺物(A)	101
第109図	第20号住居址出土遺物(B)	77	第149図	第32号住居址出土遺物(B)	102
第110図	第21号住居址カマド実測図	77	第150図	第33号住居址カマド実測図	103
第111図	第21号住居址実測図	78	第151図	第33号住居址実測図	103
第112図	第21号住居址出土遺物	78	第152図	第33号住居址出土遺物(A)	104
第113図	第22号住居址実測図	79	第153図	第33号住居址出土遺物(B)	104
第114図	第22号住居址カマド実測図	79	第154図	第34号住居址カマド実測図	104
第115図	第22号住居址出土遺物	80	第155図	第34号住居址実測図	105
第116図	第23号住居址カマド実測図	80	第156図	第34号住居址出土遺物(A)	106
第117図	第23号住居址実測図	81	第157図	第34号住居址出土遺物(B)	106
第118図	第23号住居址出土遺物(A)	81	第158図	第34号住居址出土遺物(C)	107
第119図	第23号住居址出土遺物(B)	82	第159図	第35号住居址実測図	107
第120図	第24号住居址実測図	83	第160図	第36号住居址カマド実測図	108
第121図	第24号住居址カマド実測図	84	第161図	第36号住居址実測図	109
第122図	第25号住居址カマド実測図	85	第162図	第36号住居址出土遺物(A)	109
第123図	第25号住居址実測図	86	第163図	第36号住居址出土遺物(B)	110
第124図	第25号住居址出土遺物	86	第164図	第37号住居址カマド実測図	110
第125図	第26号住居址実測図	87	第165図	第37号住居址実測図	111
第126図	第26号住居址カマド実測図(東)	88	第166図	第37号住居址出土遺物(A)	111

第167図	第37号住居址出土遺物(B) ……………	112	第207図	第52号住居址出土遺物 ……………	131
第168図	第38号住居址カマド実測図 ……………	112	第208図	第1号掘立柱建物址実測図 ……………	132
第169図	第38号住居址実測図 ……………	112	第209図	第2号掘立柱建物址実測図 ……………	133
第170図	第39号住居址カマド実測図 ……………	113	第210図	第4号掘立柱建物址実測図 ……………	134
第171図	第39号住居址実測図 ……………	114	第211図	第5号掘立柱建物址実測図 ……………	135
第172図	第40号住居址カマド実測図 ……………	114	第212図	第6号掘立柱建物址実測図 ……………	135
第173図	第40号住居址実測図 ……………	115	第213図	第7号掘立柱建物址実測図 ……………	136
第174図	第40号住居址出土遺物 ……………	116	第214図	第8号掘立柱建物址実測図 ……………	137
第175図	第41号住居址カマド実測図 ……………	116	第215図	第9号掘立柱建物址実測図 ……………	138
第176図	第41号住居址実測図 ……………	117	第216図	第10号掘立柱建物址実測図 ……………	138
第177図	第41号住居址出土遺物 ……………	117	第217図	第11号掘立柱建物址実測図 ……………	139
第178図	第42号住居址カマド実測図 ……………	118	第218図	第12号掘立柱建物址実測図 ……………	139
第179図	第42号住居址実測図 ……………	119	第219図	第13号掘立柱建物址実測図 ……………	140
第180図	第42号住居址出土遺物(A) ……………	119	第220図	第14号掘立柱建物址実測図 ……………	141
第181図	第42号住居址出土遺物(B) ……………	119	第221図	第15号掘立柱建物址実測図 ……………	142
第182図	第43号住居址カマド実測図 ……………	120	第222図	第16号掘立柱建物址実測図 ……………	143
第183図	第43号住居址実測図 ……………	121	第223図	第17号掘立柱建物址実測図 ……………	144
第184図	第43号住居址出土遺物(A) ……………	121	第224図	第18号掘立柱建物址実測図 ……………	145
第185図	第43号住居址出土遺物(B) ……………	122	第225図	第19号掘立柱建物址実測図 ……………	146
第186図	第44号住居址カマド実測図 ……………	123	第226図	第20号掘立柱建物址実測図 ……………	147・148
第187図	第44号住居址実測図 ……………	123	第227図	第21号掘立柱建物址実測図 ……………	147・148
第188図	第44号住居址出土遺物 ……………	124	第228図	第19号掘立柱建物址出土遺物 ……………	149
第189図	第45号住居址実測図 ……………	124	第229図	第22号掘立柱建物址実測図 ……………	150
第190図	第45号住居址カマド実測図 ……………	124	第230図	第23号掘立柱建物址実測図 ……………	150
第191図	第45号住居址出土遺物 ……………	125	第231図	第24号掘立柱建物址実測図 ……………	151・152
第192図	第46号住居址カマド実測図 ……………	125	第232図	第25号掘立柱建物址実測図 ……………	151・152
第193図	第46号住居址実測図 ……………	126	第233図	第26号掘立柱建物址実測図 ……………	153・154
第194図	第46号住居址出土遺物 ……………	126	第234図	第24号掘立柱建物址出土遺物 ……………	155
第195図	第47号住居址カマド実測図 ……………	126	第235図	第27号掘立柱建物址実測図 ……………	156
第196図	第47号住居址実測図 ……………	127	第236図	第28号掘立柱建物址実測図 ……………	157
第197図	第47号住居址出土遺物(A) ……………	127	第237図	第29号掘立柱建物址実測図 ……………	158
第198図	第47号住居址出土遺物(B) ……………	128	第238図	第30号掘立柱建物址実測図 ……………	159・160
第199図	第47号住居址出土遺物(C) ……………	128	第239図	第31号掘立柱建物址実測図 ……………	159・160
第200図	第49号住居址実測図 ……………	128	第240図	第32号掘立柱建物址実測図 ……………	161・162
第201図	第49号住居址カマド実測図 ……………	128	第241図	第33号掘立柱建物址実測図 ……………	163・164
第202図	第49号住居址出土遺物 ……………	129	第242図	第34号掘立柱建物址実測図 ……………	167
第203図	第50号住居址実測図 ……………	129	第243図	第35号掘立柱建物址実測図 ……………	168
第204図	第51号住居址実測図 ……………	130	第244図	第36号掘立柱建物址実測図 ……………	168
第205図	第51号住居址出土遺物 ……………	130	第245図	第38号掘立柱建物址実測図 ……………	169・170
第206図	第52号住居址実測図 ……………	131	第246図	第37号掘立柱建物址実測図 ……………	171

第247図	第39号掘立柱建物址実測図	172	第278図	第1号溝址出土遺物(B)	195
第248図	第40号掘立柱建物址実測図	172	第279図	第1号溝址出土遺物(C)	195
第249図	第41号掘立柱建物址実測図	173	第280図	第2号溝址出土遺物	195
第250図	第41号掘立柱建物址出土遺物	173	第281図	第3号溝址出土遺物(A)	196
第251図	第42号掘立柱建物址実測図	174	第282図	第3号溝址出土遺物(B)	196
第252図	第43号掘立柱建物址実測図	175・176	第283図	第3号溝址出土遺物(C)	197
第253図	第44号掘立柱建物址実測図	178	第284図	第6号溝址出土遺物	198
第254図	第45号掘立柱建物址実測図	179	第285図	第4～8号溝址実測図	199・200
第255図	第46号掘立柱建物址実測図	179	第286図	第7号溝址出土遺物	201
第256図	第47号掘立柱建物址実測図	180	第287図	第8号溝址出土遺物	201
第257図	第48号掘立柱建物址実測図	181	第288図	第1～6号土坑実測図	202
第258図	第49号掘立柱建物址実測図	181	第289図	第2号土坑出土遺物(A)	203
第259図	第50号掘立柱建物址実測図	182	第290図	第2号土坑出土遺物(B)	203
第260図	第51号掘立柱建物址実測図	183	第291図	第5号土坑出土遺物	203
第261図	第53号掘立柱建物址実測図	183	第292図	遺構外出土遺物(A)	204
第262図	第54号掘立柱建物址実測図	184	第293図	遺構外出土遺物(B)	204
第263図	第55号掘立柱建物址実測図	185	第294図	遺構外出土遺物(C)	204
第264図	第56号掘立柱建物址実測図	185		下柏原遺跡	
第265図	第57号掘立柱建物址実測図	186	第295図	第1号住居址実測図	205
第266図	第58号掘立柱建物址実測図	186	第296図	第1号住居址カマド実測図	206
第267図	第59号掘立柱建物址実測図	187	第297図	第1号住居址出土遺物	207
第268図	第60号掘立柱建物址出土遺物	187	第298図	遺構外出土遺物	207
第269図	第60号掘立柱建物址実測図	188			
第270図	第61号掘立柱建物址実測図	188	第299図	土器の変遷	211・212
第271図	第62号掘立柱建物址実測図	189	第300図	紡錘車の大きさ	214
第272図	第63号掘立柱建物址実測図	189	第301図	遺構毎の樹種分布	216
第273図	掘立柱建物址出土遺物	189	第302図	下柏原遺跡遺構全体図	218
第274図	第1号井戸址実測図	190	第303図	関口A遺跡遺構全体図	219・220
第275図	第1～3号溝址実測図	191・192	第304図	関口B遺跡遺構全体図	221・222
第276図	第1号井戸址出土遺物	193			
第277図	第1号溝址出土遺物(A)	194			

図版目次

巻頭図版

- 1 関口A・関口B・下柏原遺跡
- 2 関口A・関口B遺跡 下柏原遺跡
- 3 掘立柱建物址群と柵址(関口A遺跡)
- 4 金銅製飾り金具 奈良三彩と緑釉陶器

関口A遺跡

- | | | | |
|-----|--------|---------------|-----------|
| 図版1 | 第1号住居址 | 第2号住居址 | 第3号住居址 |
| 図版2 | 第4号住居址 | 第5号住居址 | 第6号住居址 |
| 図版3 | 第7号住居址 | 第1号掘立柱建物址(掘形) | 第2号掘立柱建物址 |

- 図版4 第3号掘立柱建物址 第4号掘立柱建物址(掘形)
第5号掘立柱建物址
- 図版5 第6号掘立柱建物址 第7号掘立柱建物址 第9
号掘立柱建物址
- 図版6 第10号掘立柱建物址(掘形) 掘立柱建物址群と
第1号柵址(左) 第1号井戸址
- 図版7 第1号溝址 第1号土坑 第2号土坑 第3号土
坑 第3号土坑礫出土状態
- 図版8 第3号土坑人骨出土状態 第4号土坑 第5号
土坑 第6号土坑 第7号土坑 第8号土坑 第
9号土坑 第10号土坑
- 図版9 第11号土坑 第12号土坑 第13号土坑 第14号土
坑 第15号土坑 第16号土坑 第17号土坑 第18
号土坑
- 図版10 第19号土坑 第20号土坑 第21号土坑 第22号土
坑 第23号土坑 第24号土坑 第25号土坑
- 関口B遺跡
- 図版11 第1号住居址 第2号住居址 第3号住居址
- 図版12 第4号住居址 第5号住居址 第6号住居址
- 図版13 第7号住居址 第8号住居址 第9号住居址
- 図版14 第9号住居址(旧) 第10号住居址 第11号住居
址
- 図版15 第11号住居址(旧) 第12号住居址 第13号住居
址
- 図版16 第14号住居址 第15号住居址 第16号住居址
- 図版17 第17号住居址 第18号住居址 第19号住居址
- 図版18 第20号住居址 第21号住居址 第22号住居址
- 図版19 第23号住居址 第24号住居址 第25号住居址
- 図版20 第26号住居址 第27号住居址 第28号住居址
- 図版21 第29号住居址 第30号住居址 第31号住居址
- 図版22 第32号住居址 第33号住居址 第34号住居址
- 図版23 第35号住居址 第36号住居址 第37号住居址
- 図版24 第38号住居址 第39号住居址 第40号住居址
- 図版25 第41号住居址 第42号住居址 第43号住居址
- 図版26 第44号住居址 第45号住居址 第46号住居址
- 図版27 第49号住居址 第50号住居址 第51号住居址
- 図版28 第52号住居址 第1号掘立柱建物址(掘形) 第
2号掘立柱建物址
- 図版29 第4号掘立柱建物址 第5号掘立柱建物址 第6
号掘立柱建物址
- 図版30 第7号掘立柱建物址 第8号掘立柱建物址(掘形)
第9号掘立柱建物址
- 図版31 第10号掘立柱建物址 第11号掘立柱建物址 第12
号掘立柱建物址
- 図版32 第13号掘立柱建物址 第15号掘立柱建物址 第16
号掘立柱建物址
- 図版33 第17号掘立柱建物址 第18号掘立柱建物址 第19
号掘立柱建物址
- 図版34 第20号掘立柱建物址 第21号掘立柱建物址 第22
号掘立柱建物址
- 図版35 第23号掘立柱建物址 第24号掘立柱建物址 第25
号掘立柱建物址
- 図版36 第26号掘立柱建物址 第27号掘立柱建物址 第28
号掘立柱建物址
- 図版37 第29号掘立柱建物址 第30号掘立柱建物址 第31
号掘立柱建物址
- 図版38 第32号掘立柱建物址 第33号掘立柱建物址 第34
号掘立柱建物址
- 図版39 第35号掘立柱建物址 第36号掘立柱建物址 第37
号掘立柱建物址
- 図版40 第38号・第39号掘立柱建物址 第40号掘立柱建物
址 第41号掘立柱建物址
- 図版41 第42号掘立柱建物址 第43号掘立柱建物址(西・掘
形) 第43号掘立柱建物址(東)
- 図版42 第44号掘立柱建物址 第45号掘立柱建物址 第46
号掘立柱建物址
- 図版43 第47号掘立柱建物址 第48号掘立柱建物址 第50
号掘立柱建物址
- 図版44 第51号掘立柱建物址(掘形) 第53号掘立柱建物
址 第54号掘立柱建物址
- 図版45 第55号掘立柱建物址 第56号掘立柱建物址(掘形)
第57号掘立柱建物址(掘形)
- 図版46 第58号掘立柱建物址(掘形) 第59・第61号(前)
掘立柱建物址 第60号掘立柱建物址(掘形)
- 図版47 第62号掘立柱建物址(掘形) 第63号掘立柱建物
址(掘形) 第1号井戸址
- 図版48 第1号溝址遺物出土状態 第1号溝址 第2号溝
址
- 図版49 第3号溝址 第4号溝址
- 図版50 第5号溝址 第6号溝址

図版51 第7号溝址 第8号溝址

図版52 第1号土坑 第2号土坑 第3号土坑 第4号土坑
第5号土坑 第6号土坑 下柏原遺跡第1号
住居址

図版53 関口A・下柏原遺跡出土遺物

関口B遺跡

図版54 第1・2・3・4・6号住居址出土遺物

図版55 第6・7・8・9・10号住居址出土遺物

図版56 第10・11・12・15・16・17号住居址出土遺物

図版57 第17・18・19号住居址出土遺物

図版58 第19・20・21・22・23号住居址出土遺物

図版59 第25・26・27号住居址出土遺物

図版60 第27・28・29・30号住居址出土遺物

図版61 第30・32号住居址出土遺物

図版62 第32・33・34号住居址出土遺物

図版63 第34・36・37号住居址出土遺物

図版64 第37・40・41・42・43号住居址出土遺物

図版65 第43号住居址出土遺物

図版66 第45・46・47・49・51・52号住居址、第20号掘立柱建
物址、第1号井戸址出土遺物

図版67 第1号溝址出土遺物

図版68 第1・2・3号溝址出土遺物

図版69 第3号溝址出土遺物

図版70 第3・6・7・8号溝址、第2号土坑、遺構外出土
遺物

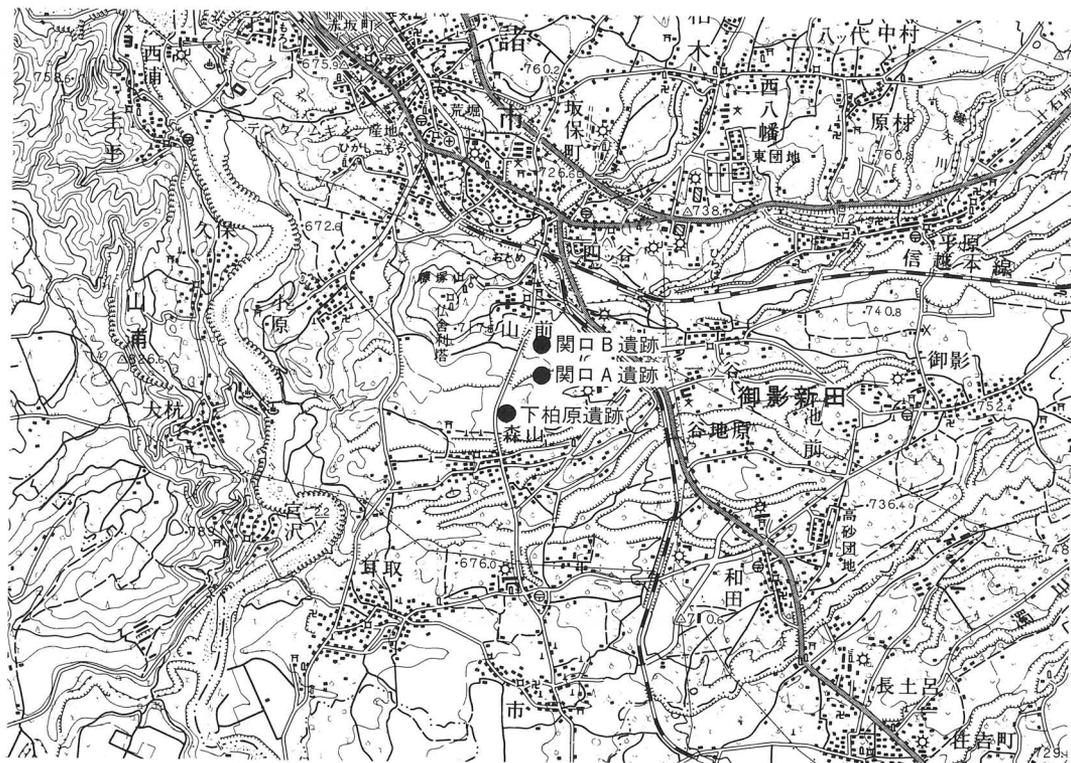
図版71～75 材の顕微鏡写真

I 発掘調査の経緯

1 調査に至る動機

東信土地改良事務所は、森山地区の農業の近代化に即応するため、耕地、農道、水路全般を対象として、昭和60年度より圃場整備事業を開始した。

この地籍内にある東山区関口、森山区柏原も計画領域となった。この対象地域内には、関口A・関口B遺跡、柏原遺跡群が存在する。計画によると、この事業により破壊されるため、緊急調査の必要が生じた。昭和63年6月21日、長野県教育委員会文化課指導主事児玉卓文先生の御指導を受け、東信土地改良事務所と協議を行なった。対象地域内での三遺跡の範囲は約22,800㎡に及ぶため、昭和63年11～12月に遺構の状況を把握するため、昭和63年度事業対象地の宮裏遺跡を含め試掘調査を行なった。このうち、宮裏遺跡の住居址については後述するように盛土保存されることとなった。他の三遺跡については、試掘結果をもとに再度協議を行ない、小諸市教育委員会は、東信土地改良事務所の依頼を受理し、平成元年4月17日より調査に着手した。



第1図 遺跡の位置 (1:50,000)

2 調査の概要

- 遺跡名 関口A遺跡・関口B遺跡・柏原遺跡群下柏原遺跡
- 所在地 長野県小諸市大字森山字関口307-1、308、309、311、312番地(関口A遺跡)、大字甲字東道木524-1、526-1・4、528、529-1、530-1番地(関口B遺跡)、大字森山下柏原287-1・2・5・6(下柏原遺跡)

○調査期間 平成元年4月17日～9月14日

○調査に関する事務局の構成組織は下記のとおりである。

山田英男 小諸市教育委員会教育次長
宮崎龍太郎 // 社会教育課長
武藤勝光 // 社会教育課長補佐、社会教育係長(平成2年4月1日付転任)
荒井章雄 // 社会教育係長
前田洋子

○調査団の構成組織は下記のとおりである。

顧問 中村幸則 小諸市教育委員会教育委員長
美斉津昌夫 // (平成2年10月9日就任)
依田公一 小諸市教育委員会教育長
矢島正一 // (平成2年1月1日就任)

団長 小淵武一 小諸市文化財審議委員長

担当者 花岡 弘 小諸市教育委員会学芸員

調査主任 鳥居 亮

調査員 井出喜八、小野山 清、高瀬武男、山浦 実

調査補助員 佐藤君代、伴野有希子、星野保彦

参加者 相場さ代子、甘利昭平、太田史夫、太田洋子、岡田悦子、小山内玲子、小林基江、斉藤 彰、塩川峰子、萩原真由美、古谷里江、松本甲子雄、望月妙子、小山保雄、塩川いち子、塩川省三、塩川宗吾、塩川勇三、土屋三郎、三井義隆(東山老人クラブ)、高瀬忠勝、工藤 恵、清水美幸(北佐久農業高校生徒)(遺物整理作業を含む)

3 調査の経過

調査日誌(抄)

業を開始する(関口A遺跡)。

4月17日(月) 晴

4月18日(火) 晴

重機による試掘トレンチを入れ、範囲確認作

北東部から重機により拡張を始める(関口A

遺跡)。

4月21日(火) 晴

重機による削土作業に併行して遺構検出作業を始める。第1号住居址、第1号井戸址の掘り下げを始める(関口A遺跡)。

4月28日(金) くもり時々雪

雪が時々舞う中、第3・5・6号住居址、第3号土坑の掘り下げなどを行なう(関口A遺跡)。

5月1日(月) くもり後雨

第1号溝址の掘り下げを始める(関口A遺跡)。

5月8日(月) 晴

重機により東側の拡張を行なう。遺構実測、写真撮影、遺構検出作業を行なう(関口A遺跡)。午後から重機により関口B遺跡のトレンチ掘りを開始する。

5月11日(木) 雨

雨の中、重機による削土作業を行なう(関口B遺跡)。

5月12日(金) くもり時々雨

住居址・土坑の掘り下げ、カマド切開、土坑の実測を行なう(関口A遺跡)。重機による削土作業、遺構の検出作業のほか、第1号溝址の掘り下げを始める(関口B遺跡)。

5月18日(木) 雨後くもり

掘立柱建物址群の掘り下げを始める(関口A遺跡)。重機による削土作業、第1号溝址の掘り下げを行なう(関口B遺跡)。

6月1日(土) 晴

遺構検出作業のほか第1号住居址の掘り下げを行なう(関口B遺跡)。

6月12日(月) くもり後晴

井戸址、溝の写真撮影を行なう(関口A遺跡)。

6月15日(木) くもり一時雨

第7号住居址から飾り金具出土(関口B遺跡)。

6月26日(月) くもり

第10号住居址実測、第26・32号住居址・溝の掘り下げなどを行なう(関口B遺跡)。

7月4日(火) くもり後雨

第16・20号住居址、掘立柱建物址柱穴掘り下げ。第15・33号住居址の実測などを行なう(関口B遺跡)。

7月14日(金) 晴

第37号住居址の掘り下げ、第11号住居址の実測などを行なう(関口B遺跡)。

7月21日(金) 晴一時雨

第12・29・30号住居址の掘り下げ、第21号住居址の実測などを行なう(関口B遺跡)。

8月1日(火) 雨

掘立柱建物址の掘り下げなどを行なう(関口B遺跡)。

8月9日(水) 晴

第26号掘立柱建物址の実測、写真撮影、掘り下げ、第12号住居址の掘り下げ、実測などを行なう(関口B遺跡)。

8月17日(木) 雨後晴

重機によるトレンチ掘りを開始する(下柏原遺跡)。

8月23日(水) 晴

航空測量の準備を始める。

8月30日(木) くもり一時雨

第24・25号土坑の実測、写真撮影(関口A遺跡)。第45・46号掘立柱建物址の実測、カマド切開(関口B遺跡)。第1号住居址の掘り下げを始める(下柏原遺跡)。

9月1日(金) 晴後くもり

航空測量。

9月9日(土) 晴後くもり

第1号住居址のカマド切開を行なう(下柏原遺跡)。

9月13日(水) くもり

第7・41号住居址のカマド切開、第62・63号

掘立柱建物址の実測などを行ない、現場での作業をすべて終える(関口B遺跡)。

9月14日(木) 雨後くもり

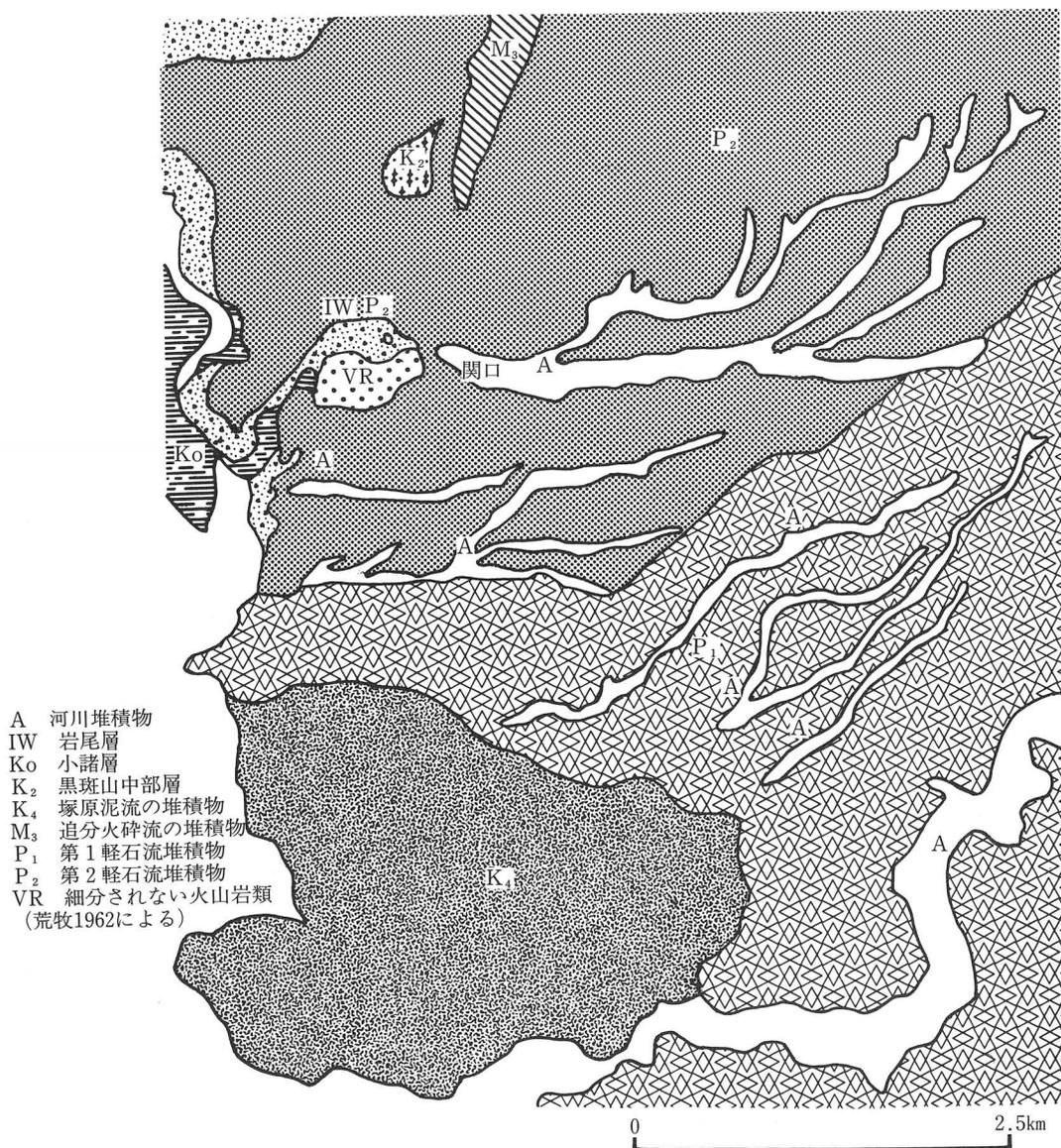
器材撤収。調査終了後～平成2年度において報告書作成作業を行なった。



第3図 調査区(1:5,000)

II 遺跡の概観

1 遺跡の自然的環境



第4図 遺跡付近の地質図

関口A・関口B・下柏原遺跡は、小諸市山^{やまのまえ}前地籍と森山地籍にまたがる。旧行政区画では二分されていたが、今度の調査対象は両地籍である。この地に接している地字名は北方が北道木、東は釜神と道木、南側は上柏原、中柏原から下柏原と続く。西は原田、東諸山、上山前、下山前である。

この地籍は、北方に現在もさかんに火山活動を続け噴煙を吐く浅間山（標高2,560m）の南斜面で、佐久平の北西に位置する。西方には、南北に流れる千曲川がある。現地は標高700m前後の緩傾斜で、畑地と水田地帯である。

遺跡がある地層の基盤は千曲層群、第四紀洪積世の初期のものと言われている。その後、火山活動が活発になり、浅間山（三重式成層火山）の第一次の活動である黒斑山の噴出物の火山弾、火山砂等の堆積があり、その後に続く蛇堀爆裂火口、長坂爆裂火口から押し出された泥流が小諸付近に堆積した。また、仏岩爆裂火口から軽井沢町の借宿や追分周辺では、火山弾を含む泥流が堆積していると言われている。

この浅間山の裾野に展開する沖積平坦地が佐久平である。この佐久平は、下位と上位の二層からなり、前者は佐久市中佐都、高瀬および浅科村中津地籍で上に薄い砂礫層が載ることもある侵蝕平坦地である。後者は小諸市三岡、佐久市岩村田以北から浅間山の裾野までの地域にわたり、表面には、軽石流の厚い層が載った堆積した平坦地である。

軽石流の堆積する地域の地層は、流水の侵蝕作用によって切り立った両壁と谷部の平坦地のある特異な谷が形成されている。この地形を田切り地形と呼んでいる。

関口A・B遺跡は、田切りの高い所は畑地と一部は原野であり、谷の部分と北部は水田地帯になっている。また、調査地の北西には糠塚山（745m）があり、小諸層（Ko）と岩尾層（IW）が重なり、その上に一部分第2軽石流（P₂）が載っている。

付近の河川は、遺跡の北方600～700mに繰矢川（流程9.5km）があり、急流順位は北佐久の第3位で相当に侵蝕が進んでいる。また、水田地帯の灌漑用には、繰矢川上流から揚水した水流が利用されている。関口A遺跡とB遺跡の間の田切りには、細流ながら湧水を水源とした清水が流れ、ホタルの幼虫の餌になるカワニナ等が生息している。

植物相は、木本は高木のケヤキ、オニグルミ、イヌザクラが北側斜面に少数あり、低木には、ヌルデ、ノダフジ、ツルウメモドキ、アケビ、ズミ、ノイバラ、クロツバラ、ニシキギ、オニウコギ等がある。

草本は、南斜面の畦畔にはススキ、オガルカヤ、チガヤ、ヨモギ、ギシギシ、カワラマツバ、ホタルカズラ、カワラナデシコ、アカツメクサ、ノハラアザミ等があり、水田地帯には、タカサブrou、アメリカセンダングサ、オモダカ、コナギ、セリ、オヘビイチゴ、ムラサキサギゴケが見られる。これらの草も次第に帰化植物の繁殖に押され、植生も変化しつつある。

2 遺跡の歴史的環境

市内の遺跡立地を概観した場合、東南部地域においては、佐久平に特有な田切り地形をひかえた台地上に位置する場合が顕著である。

関口A・関口B・下柏原遺跡を中心とした地域では、これまで、関口B遺跡、宮ノ反遺跡群宮ノ反遺跡、同・竹花遺跡、宮裏遺跡が調査されている。以下、これらの遺跡の調査成果、分布調査をもとに関口A・関口B・下柏原遺跡とその周辺遺跡について、時代・時期別に概観してみたい。

まず、縄文時代では、住居址等の検出例はないが、関口B遺跡で打製石斧、石匙（第一次）、石鏃、黒曜石剝片（第二次）が、関口A遺跡で石鏃、磨製石斧が出土している。また、宮ノ反遺跡、竹花遺跡では、後期の堀ノ内式土器の破片のほか、石鏃、打製石斧、石匙が出土している。

こうした点からすると、これらの地域は少なくとも狩猟・採集の地であったと考えられ、縄文時代中期後半から後期初頭（加曾利E期～堀ノ内期）に認められる遺跡数の増加に関連するものと思われる。

弥生時代については不明な点が多い。宮ノ反遺跡で中期の栗林式土器壺、後期の箱清水式土器甕の小片、竹花遺跡で箱清水式土器壺の破片が出土している程度にすぎない。

古墳時代前期の住居址は、竹花遺跡で3棟検出されている。このうちの1棟からは、在地系土器とともに小型器台、S字状口縁台付甕、縄文の施された甕などが出土している⁽⁵⁾。

中期では、同じく竹花遺跡で2棟の住居址が検出され、1棟からは勾玉形の石製模造品が1点出土している。

後期にはいと、田切りをひかえた台地上の遺跡分布が顕著となってくる。また、この時期は、いわゆる後期古墳群の築造と大きく関連する時期でもある。

該期の住居址は、関口B遺跡で3棟、宮ノ反遺跡で4棟、さらに竹花遺跡で20棟以上が検出されている。特に竹花遺跡では6世紀中頃に比定される住居址から鈴鏡を模したと考えられる土製模造鏡が出土しており注目される。

一方、古墳は距離を隔てているものの、乙女古墳がある。おそらく、横穴式石室をもつ円墳であったと考えられるが、現存せず詳細については不明である。

奈良時代では、関口B遺跡で1棟、宮ノ反遺跡で1棟のほか、竹花遺跡で数多くの住居址が検出されている。このうち、竹花遺跡では、畿内系と考えられる杯・小型甕、足金具、円面硯の破片などが出土している。

平安時代の住居址は、関口B遺跡で2棟、宮ノ反遺跡で5棟、宮裏遺跡で2棟のほか、竹花遺跡で10棟以上が検出されている。このうち、宮裏遺跡の住居址は、土地改良事務所のご理解を頂き、盛土により保存されている。また、竹花遺跡では、炭化米、四耳壺、円面硯の破片などが出



第5図 遺跡と周辺遺跡分布図 (1 : 10,000)

第1表 関口A・関口B・下柏原遺跡とその周辺遺跡

番号	遺跡名	所在地	立地	縄文	弥生	古墳	歴史	中世	近世	備考
1	乙女古墳	大字甲字上繰矢川	台地			○				現存せず
2	繰矢川城跡	大字甲字上繰矢川・中島	〃					○		
3	山ノ前遺跡	大字甲字山ノ前・北道木	〃			○	○			昭和54年発掘調査 昭和59年・平成2年発掘調査 昭和63年発掘調査
4	南諸山遺跡	大字甲字南諸山	山麓				○			
5	北諸山遺跡	大字甲字北諸山	〃				○			
6	上山ノ前遺跡	大字甲字上山ノ前	台地				○			
7	関口B遺跡	大字甲字関口	〃			○	○			
8	釜神遺跡	大字御影新田字釜神	〃			○	○			
9	宮ノ反A遺跡群	大字御影新田字宮ノ反・池尻・塚ノ前・竹花・一丁田・穴ノ前	〃			○	○			
10	関口A遺跡	大字甲字関口	〃			○	○			
11	山神遺跡	大字森山・道木・釜神	〃			○	○			
12	宮裏遺跡	大字森山字宮裏	〃			○	○			
13	柏原遺跡群	大字森山字上柏原・中柏原・下柏原	〃			○	○			
14	西城跡	大字森山字西城	〃					○		
15	森山城跡	大字森山字久保田	〃					○		
16	矢田頭遺跡	大字森山字矢田頭	〃				○			
17	大塚原遺跡群	大字御影新田字大塚原・大字耳取字大平・下平	〃			○	○			

土している。

中世では、繰矢川城跡、西城跡、森山城跡が知られている。

繰矢川城跡は、北側に堀切を設け、東、南、西は地形から自然の堀となっている。また、城跡と繰矢川を隔てた南側には、標高およそ740mの糠塚山ぬかづかやまがあり、山頂からは佐久平を眺望することができる。また、この位置は森山から佐久平へ通じる道路をおさえる要衝の地で、柏木城、加増乙女城にとっても城の護りとなる要の場所であるとされる。現在残る「乙女」の地名は「大遠見」が転訛したものだといわれる⁽⁶⁾。

森山城跡、西城跡は、近江国守山から郷名を名乗る守山氏が守山に入居し、その居城がこのいずれかにあったとされる。詳細は省くが、後、松平氏が上野国藤岡に移封になった際、森山氏は松平氏に隋って藤岡に移り、森山城は廃城となっている⁽⁷⁾。

一方、口碑伝説として次のような話が残されている。

金鶏長者（伏屋の長者⁽⁸⁾）

小諸町（現小諸市）字山の前の旧栗島神社の跡に広さ約百二、三十平方メートルくらいの池がある。この辺を長者屋敷と呼んでいる。むかし源義家の家来であったとかいう男が、ここで炭を焼いて小諸の花川の宿へ売ることを業としていた。

ある日の帰りに唐松（地名）へさしかかったとき、突然金の鶏が足元から飛び出した。後を追いかけて、夕方になったがついに捕えることが出来なかった。家へ帰って炭籠^{かご}を見たところが不思議にも炭が残らず金になっていた。

一躍百万長者になった彼は、その金で一羽の鶏を作り家宝としたという。この近くを流れている繰矢川^{くりや}を厨川とも書く。それは長者の家の勝手元の下水を流したことからおこった名前だという（大池勇二郎50里老）。

註

- (1) 小諸市教育委員会 1980 『関口B』
- (2) 小諸市大字御影新田字宮ノ反。小諸市教育委員会 1985 『宮ノ反』
- (3) 小諸市大字御影新田字竹花。平成2年（1990年）に発掘調査が行なわれ、約80棟の竪穴住居址などが検出されている。
- (4) 小諸市教育委員会 1987 『小諸市遺跡詳細分布調査報告書』
- (5) この時期に後続し、小型丸底土器を伴う段階の住居址が、田切りを隔てた北側の三子塚遺跡群大下原遺跡で検出されている。平成2年（1990年）発掘調査。
- (6) 小諸市誌編纂委員会編 1984 『小諸市誌 歴史篇(二)』 小諸市教育委員会
- (7) 註(6)の文献。
- (8) 山本武雄他 1934 『北佐久郡口碑伝説集』 北佐久教育会

III 層 序

第I層 黒褐色土層 (10Y R2/2)

第II層 にふい黄褐色土層
(10Y R5/4)

第III層 明褐色土層 (7.5Y R5/6)

第IV層 にふい黄橙色土層
(10Y R7/4)

関口A・B、下柏原遺跡は、いずれも南北を田切りにはさまれた台地上に位置する。

標高は、関口A遺跡が690~697m、関口B遺跡が695m前後、下柏原遺跡が682m前後である。

第I層は、耕作土層で、層厚は50~70cmを測る。

関口A遺跡東側、下柏原遺跡はおよそ20cmと薄い。

第II層は、水田の床土で、層厚は20cm前後である。関口B遺跡で認められた。

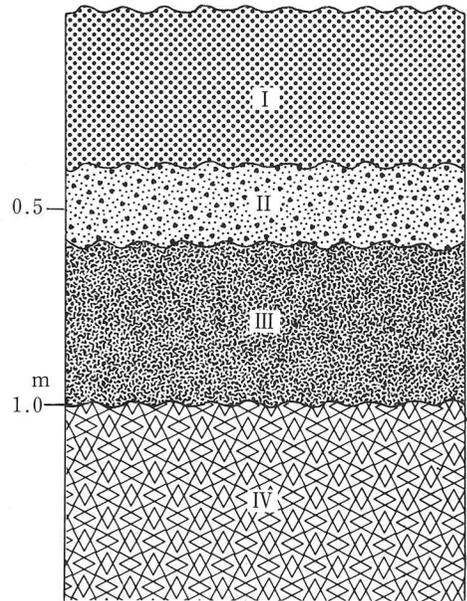
第III層は、第2軽石流(P₂)の頂部に当たる。遺構の確認は、本層上面において行なった。

φ0.5~18cm前後のパミスを含み、締まっていない。

第IV層は、にふい黄橙色を呈し、φ0.5cm前後のパミスを含む。第III層に比べ、締まっている。

第1軽石流は、その後に流出した第2軽石流(P₂)との間に厚さ約10cmの黒褐色土があること(1)から、両軽石流の噴出には数百年の隔たりがあったと考えられている。

また、二つの軽石流は、1.0~1.1万年前に浅間火山の硬質安山岩マグマの活動により噴出されたものとされている。(2)



第6図 層序模式図

註

(1) 田中邦雄監修・降旗和雄編 1979 『長野県地学のガイド』 コロナ社

(2) 註(1)の文献に同。

IV 遺構と遺物

1 関口 A 遺跡

(1) 竪穴住居址

1) 第 1 号住居址

遺構 (第 7 図、図版 1)

本住居址は、D・E-1・2 グリッドに位置する。他遺構との重複関係はないが、北壁で攪乱を受けている。

東西 451cm、南北 398cm を測り、平面プランは隅丸方形を呈する。

カマドは確認されなかった。また、床面は全体的に軟弱であった。

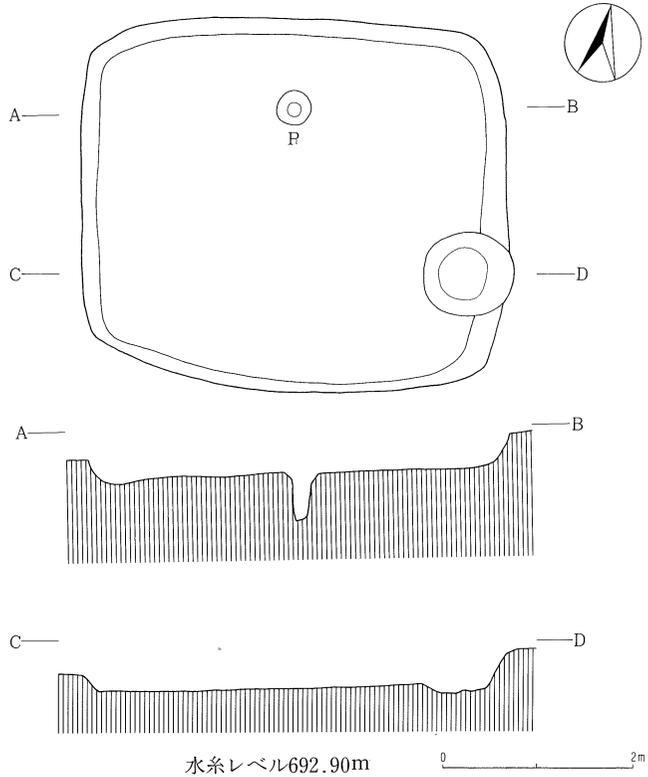
なお、柱穴・周溝は検出されなかった。

遺物 (第 8 図、図版 53)

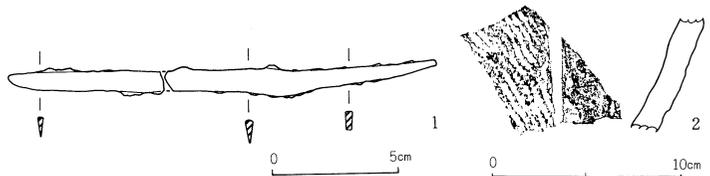
本住居址からは、縄文土器片、土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品が出土している。このうち、図示し得たものは、縄文土器片、刀子各 1 点である。

縄文土器は、後期の深鉢の破片で、覆土からの出土である。

本住居址の所産期は、平安時代と考えられる。

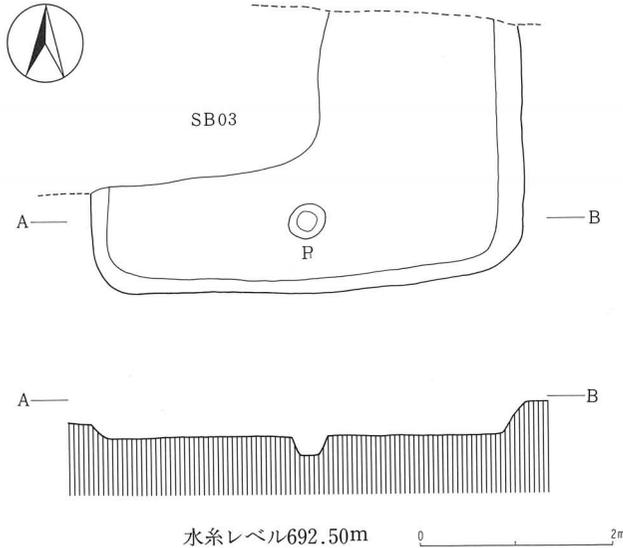


第 7 図 第 1 号住居址実測図

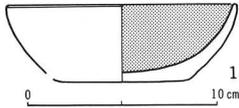


第 8 図 第 1 号住居址出土遺物

2) 第2号住居址



第9図 第2号住居址実測図



第10図 第2号住居址出土遺物

を測る。ピットは1基検出された。柱穴かどうかははっきりしない。周溝は検出されなかった。

遺物 (第10図、図版53)

本住居址からは、土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。このうち、図示し得たものは、黒色土器杯1点だけである。本住居址の所産期は、平安時代と考えられる。

3) 第3号住居址

遺構 (第11図、図版1)

本住居址は、D-1グリッドに位置する。第2号住居址と重複関係を有し、第2号住居址により切られている。

東西636cm、南北は残存部で280cmを測る。平面プランはおそらく隅丸方形、あるいは隅丸長方形を呈するものと思われる。

カマドは調査範囲では認められず、北壁に設けられていたと考えられる。

確認面からの壁高は、57~65cmを測る。床面は全体的に堅緻であった。ピットは検出されなかった。周溝は、調査し得た部分では全周している。

遺物 (第12図、図版53)

本遺構からは土師器片、須恵器片が出土している。

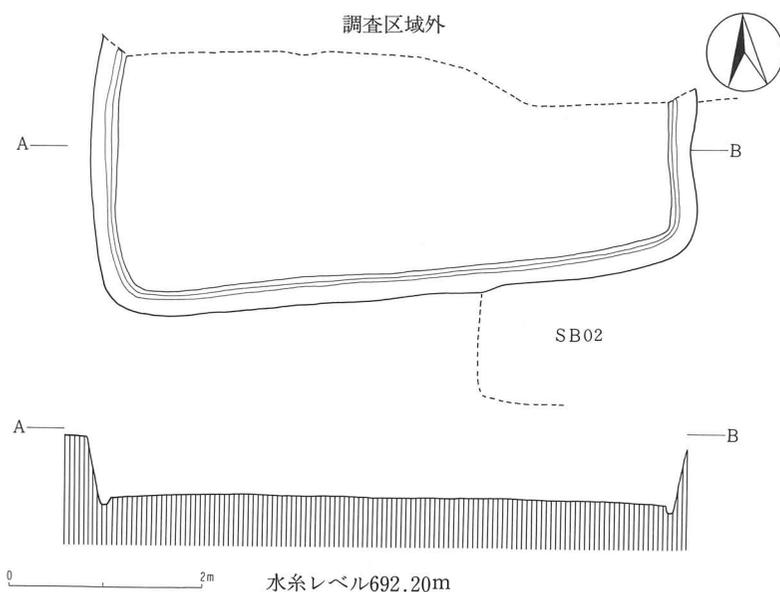
遺構 (第9図、図版1)

本住居址は、D-1グリッドに位置する。第3号住居址と重複関係を有し、第3号住居址を切って構築されている。また、中央部で攪乱を受けている。

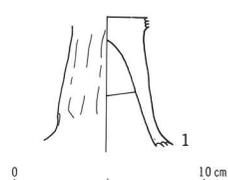
東西460cm、南北は残存部において299cmを測り、平面プランは隅丸方形、あるいは隅丸長方形を呈するものと思われる。

調査範囲ではカマドは認められず、おそらく北壁に設けられていたものと思われる。

確認面からの壁高は、16~30cm



第11図 第3号住居址実測図



第12図
第3号住居址出土遺物

このうち、図示し得たものは黒色土器高杯1点である。

本住居址の所産期は、奈良時代と考えられる。

4) 第4号住居址

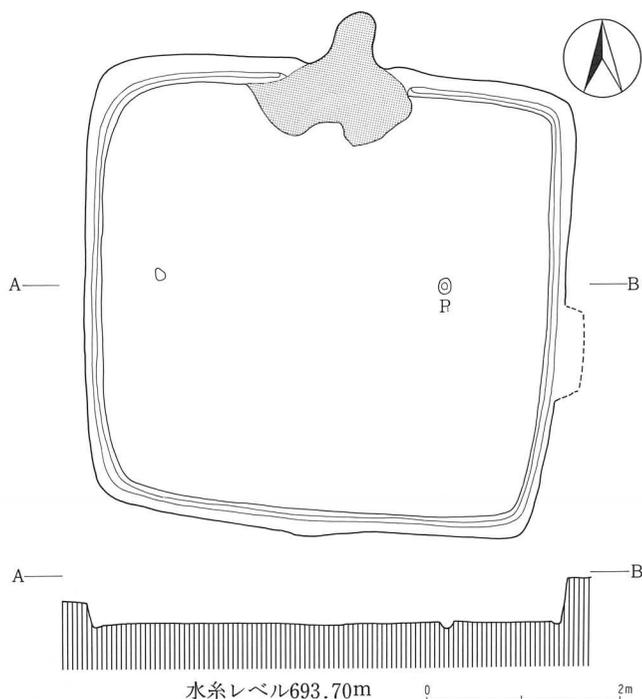
遺構 (第13・14図、図版2)

本住居址は、E-1グリッドに位置する。第3号土坑、第1・9号掘立柱建物址と重複関係を有し、各々の遺構に切られている。

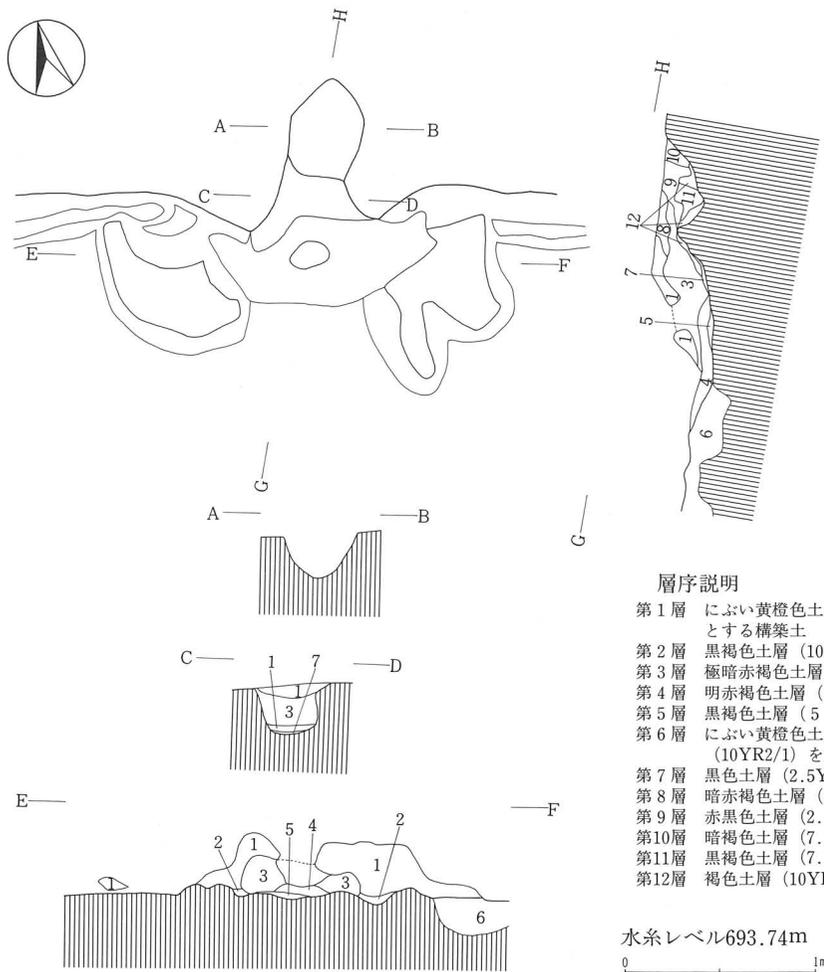
カマドを中心とする主軸方位は、 $N-3^{\circ}-E$ を示す。東西507cm、南北491cmを測り、平面プランは隅丸方形を呈する。

確認面からの壁高は、25~45cmを測る。

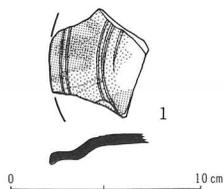
カマドは北壁ほぼ中央に位置する。残存状態は比較的良く、袖部・天井部・煙道部を比較的良くとどめていた。カマド構築材は、白色粘土を主体としていた。支脚石等の石材は検出されなかった。



第13図 第4号住居址実測図



第14図 第4号住居址カマド実測図



第15図
第4号住居址出土遺物

床面は中央部が堅緻で、壁際では軟弱であった。

ピットは1基検出されたにとどまる。一応柱穴として考えたが、対応するものは検出されなかった。

周溝は、カマド部分を除き全周する。

遺物 (第15図、巻頭図版4)

土師器片、黒色土器片、須恵器片、奈良三彩の破片が出土している。このうち図示し得たものは、奈良三彩1点である。椀とセットとなると思われる蓋の破片である。口径は、残存部から推して14cm前後になるものと思われる。畿内産であろう。

本住居址出土土器片は、第5号住居址のものと同期的にはほとんど変わらないと思われ、本住居址の所産期は、奈良時代前半に比定される。

5) 第5号住居址

遺構 (第16・17図、図版

2)

本住居址は、E・F-1グリッドに位置する。第1号溝址、第4号土坑と重複関係を有し、第1号溝址、第4号土坑により切られている。

カマドを中心とする主軸方位は、 $N-2^{\circ}-W$ を示す。

東西566cm、南北598cmを測り、平面プランは隅丸方形を呈する。

確認面からの壁高は、44~50cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は、比較的良好であった。袖部は、加工した軽石を芯に用いて、白色粘土により構築されていた。支脚石は認められなかった。

柱穴は、総計4基検出された。

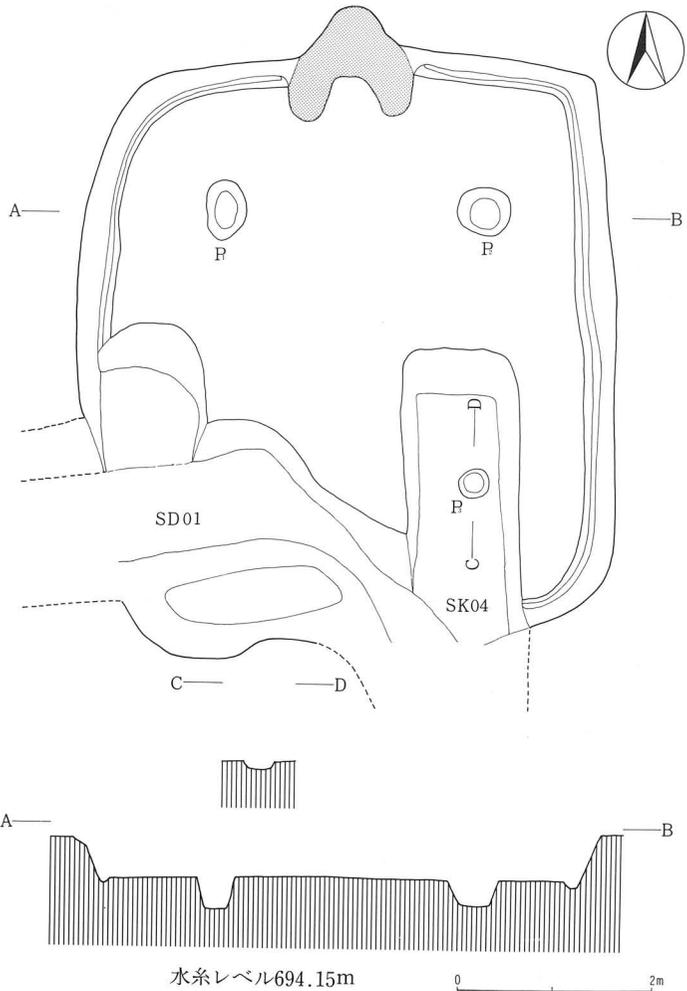
床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱である。

周溝は、カマド部分を除き全周する。

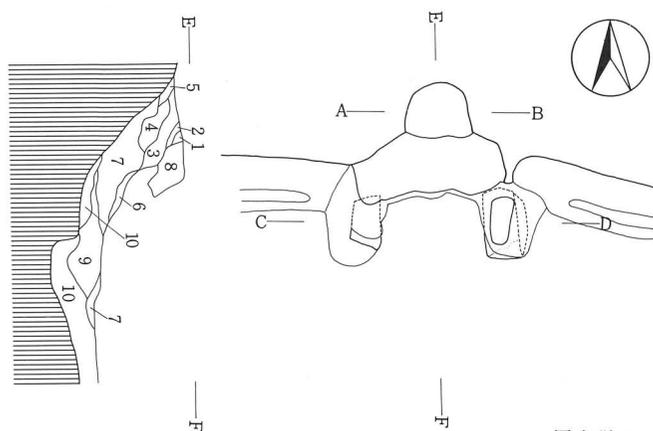
遺物 (第18図、図版53)

本住居址からは、縄文土器片、土師器片、須恵器片、石製品のほか、自然遺物としてカマドからケヤキ、床面からコナラ節の一種とされる炭化材が出土している。このうち、図示し得たものは、土師器甕1点、須恵器杯2点、砥石1点、縄文土器片1点である。

土師器甕は、いわゆる武蔵型の長胴の甕の底部である。



第16図 第5号住居址実測図

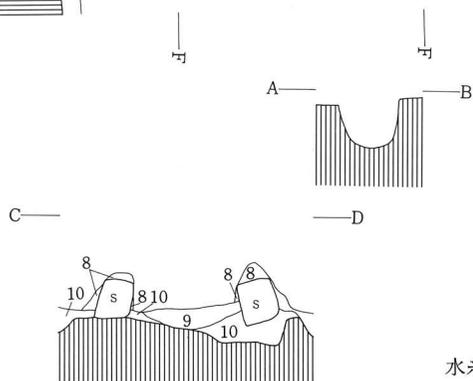


須恵器杯は、いずれも底部へラキリがなされる。

砥石は砂岩製で、重さ50gを計る。

縄文土器はP₁から出土したもので、後期のものであろう。

本住居址の所産期は、奈良時代前半に比定される。



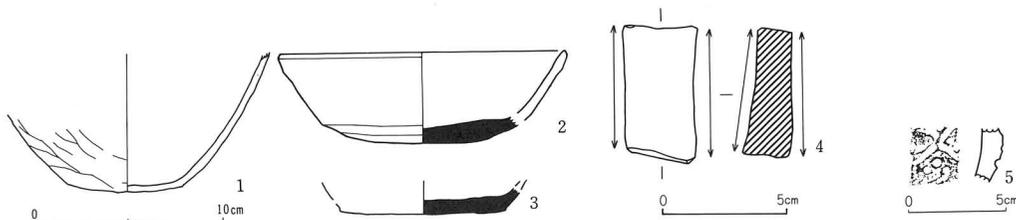
層序説明

- 第1層 極暗赤褐色土層 (2.5YR2/3) 焼土を若干含む。やや粘性有り
- 第2層 にぶい褐色土層 (7.5YR5/3) 白色粘土を多量に含む
- 第3層 極暗赤褐色土層 (2.5YR2/3) 焼土を若干含む。粘性なし
- 第4層 赤黒色土層 (2.5YR2/1) 白色粘土を若干含む
- 第5層 褐色土層 (10YR4/4) ロームを多量に含む
- 第6層 黒色土層 (7.5YR2/1)
- 第7層 極暗赤褐色土層 (5 YR2/4) 焼土を多量に含む
- 第8層 灰褐色土層 (5 YR5/2) 白色粘土
- 第9層 明赤褐色土層 (5 YR5/8) 焼土層
- 第10層 明黄褐色土層 (10YR6/6) のロームと黒褐色土層 (10YR2/3) が混じりあった埋土

水系レベル694.14m

0 1m

第17図 第5号住居址カマド実測図



第18図 第5号住居址出土遺物

6) 第6号住居址

遺構 (第19・20図、図版2)

本住居址は、F-1グリッドに位置する。

他遺構との重複関係はない。

カマドを中心とする主軸方位は、N-17°-Eを示す。

東西424cm、南北399cmを測り、平面プランは東西に長い隅丸長方形を呈する。

確認面からの壁高は、22~32cmを測り、壁は比較的緩やかに立ち上がる。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。カマドの遺存状態は悪い。袖部で袖石の抜き取り痕が

認められたことから、軽石などの石材を芯とし、黒褐色土（第5・6層）により構築されていたと考えられる。

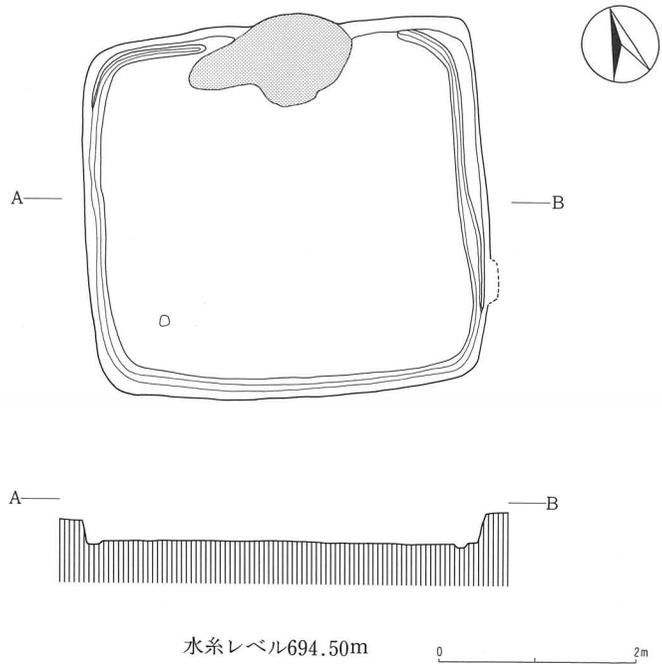
床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。また、東側は周溝外側に東西約19cm、南北305cmの張り出しが認められた。

柱穴は検出されなかった。

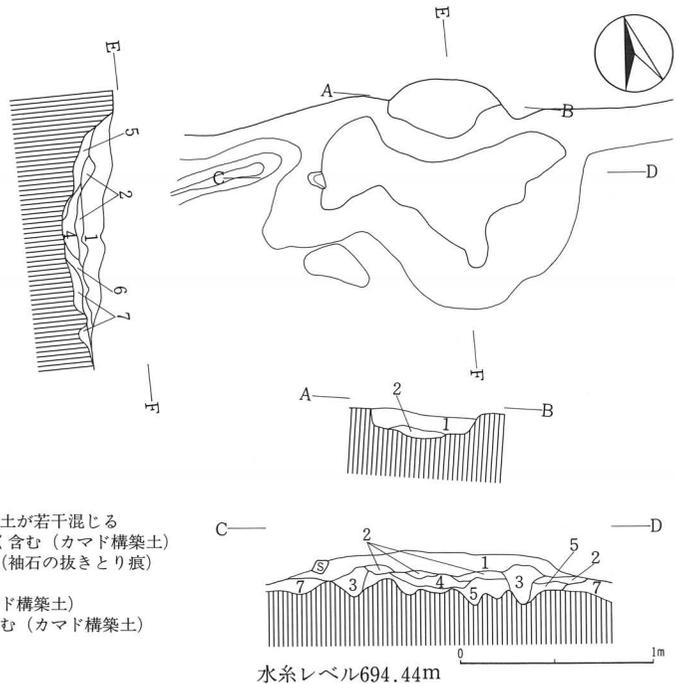
周溝は、カマド部分を除き全周する。

遺物（第21・22図、図版53）

本住居址からは、縄文土器片、土師器片、須恵器片、鉄製品、石器、自然遺物が出土している。



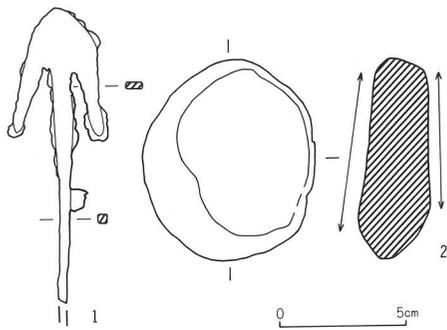
第19図 第6号住居址実測図



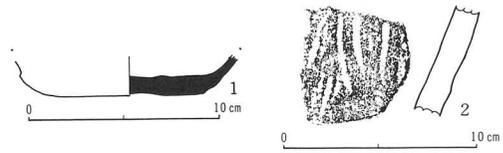
層序説明

- 第1層 褐灰色土層（5 YR5/1）白色粘土に焼土が若干混じる
- 第2層 暗赤褐色土層（2.5 YR3/3）焼土をよく含む（カマド構築土）
- 第3層 黒色土層（7.5 YR2/1）パミスを含む（袖石の抜きとり痕）
- 第4層 明赤褐色土層（5 YR5/8）焼土層
- 第5層 黒褐色土層（10 YR3/1）構築土（カマド構築土）
- 第6層 黒褐色土層（5 YR3/1）焼土を若干含む（カマド構築土）
- 第7層 黒褐色土層（7.5 YR3/1）貼り床

第20図 第6号住居址カマド実測図



第21図 第6号住居址出土遺物 (A)



第22図 第6号住居址出土遺物 (B)

このうち、図示したものに、須恵器杯、鉄鏃、石器、縄文土器片がある。

須恵器杯は、底部へラキリが行なわれるものである。

石器は軽石製で、磨石として使われたものと考え

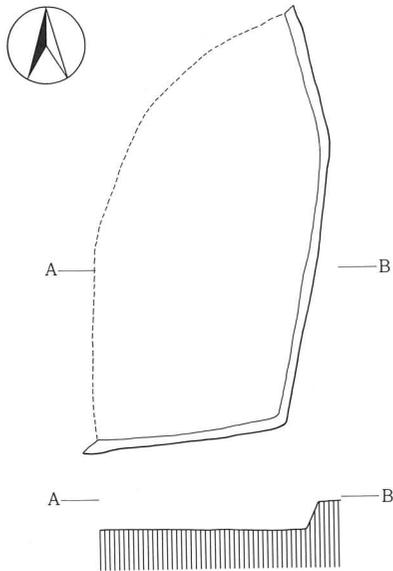
られる。重さ78gを計る。鉄鏃は、五角形式のものである。

自然遺物には、カマドから出土した炭化材があり、オニグルミと同定された。

縄文土器は、後期の深鉢の破片である。胴下半部付近の破片と考えられ、沈線、磨消縄文が施文される。

本住居址の所産期は、図示し得なかったが、「コ」の字状に近い口辺部の土師器甕の破片、糸切り底の須恵器杯の破片も認められることから、奈良時代でも後出する時期と考えられる。

7) 第7号住居址



第23図 第7号住居址実測図

遺構 (第23図、図版3)

本住居址は、A・B-2グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

調査し得た部分は、全体の約1/3と考えられ、残存部で東西250cm、南北447cmを測り、平面プランはおそらく隅丸長方形を呈すると思われる。

確認面からの壁高は、30cmを測る。

カマドは検出されなかった。

床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。

ピット、周溝は検出されなかった。

遺物

本住居址からは、土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土しているが、図示し得るものはない。土器片からすると平安時代の所産と考えられる。

(2) 掘立柱建物址

1) 第1号掘立柱建物址

遺構 (第24図、図版3)

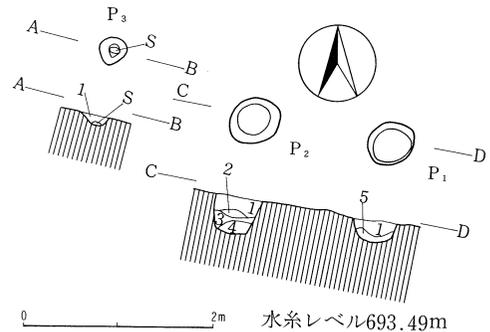
E-1グリッドに位置する。第4号住居址と重複関係を有し、第4号住居址を切って構築されている。

総計3基のピットが検出されたが、P₃については本遺構に伴うものかどうかははっきりしない。

また、柱痕は明確でなかった。

遺物

P₂・P₃から土師器片、灰釉陶器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器、重複関係から平安時代以降と考えられる。



層序説明

- 第1層 黒褐色土層 (7.5YR2/2) 少量のパミスとローム粒子を含む
- 第2層 黒色土層 (7.5YR2/1)
- 第3層 褐色土層 (7.5YR4/4) ローム粒子とφ2cmのパミスを含む
- 第4層 黒褐色土層 (7.5YR3/2) パミスを少量含む
- 第5層 暗褐色土層 (7.5YR3/3) パミスを少量含む

第24図 第1号掘立柱建物址実測図

2) 第2号掘立柱建物址

遺構 (第26図、図版3)

C-1グリッドに位置する。第3号掘立柱建物址と重複関係を有し、第3号掘立柱建物址を切って構築されている。

2間×3間の側柱式の掘立柱建物址で、東西582cm、南北434cmを測り、平面プランは長方形を呈する。柱間は、東西で146~180cm、南北136~213cmを測る。

南北軸の方位は、N-3.5°-Eを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形を呈する。

埋土は、黒色土と明褐色土を主体としている。

遺物

P₂・P₄・P₈・P₁₀から土師器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、土器片から奈良・平安時代以降と考えられる。

3) 第3号掘立柱建物址

遺構 (第27図、図版4)

C・D-1グリッドに位置する。第2・4号掘立柱建物址と重複関係を有し、第2号掘立柱建物址に切られ、第4号掘立柱建物址を切って構築されている。

2間×3間の側柱式の掘立柱建物址で、東西650cm、南北503cmを測り、平面プランは長方形を呈する。柱間は東西で135～244cm、南北190～208cmを測る。

南北軸の方位は、N-4°-Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形を呈する。埋土は、黒色土と黄褐色土を主体とし、堅く締まっていた。

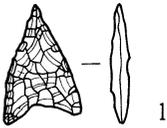
遺物

埋土中より奈良時代と考えられる黒色土器杯の破片が1点出土している。したがって、本遺構の所産期は奈良時代以降と考えられる。

4) 第4号掘立柱建物址

遺構 (第27図、図版4)

C-1グリッドに位置する。第3号掘立柱建物址と重複関係を有し、第3号掘立柱建物址により切られている。2間×3間の側柱式の掘立柱建物址で、東西628cm、南北487cmを測り、平面プランは長方形を呈する。柱間は、東西で150～246cm、南北で202～208cmを測る。南北軸の方位は、N-3°-Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形を呈する。



0 5 cm

第25図 第4号掘立柱建物址
出土遺物

遺物 (第25図、図版53)

埋土中より、チャート製の石鎌が1点出土している。重さ2.7gを計る。本遺構の所産期については、重複関係から奈良時代以降と考えられる。

5) 第5号掘立柱建物址

遺構 (第28図、図版4)

C-1グリッドに位置する。第8号掘立柱建物址と重複関係を有し、第8号掘立柱建物址を切って構築されている。ピットは総計6基検出された。全体を窺うことはできないが、2間×3間の掘立柱建物址ではないと思われる。

東西555cm、南北266cmを測り、平面プランは長方形を呈すると思われる。

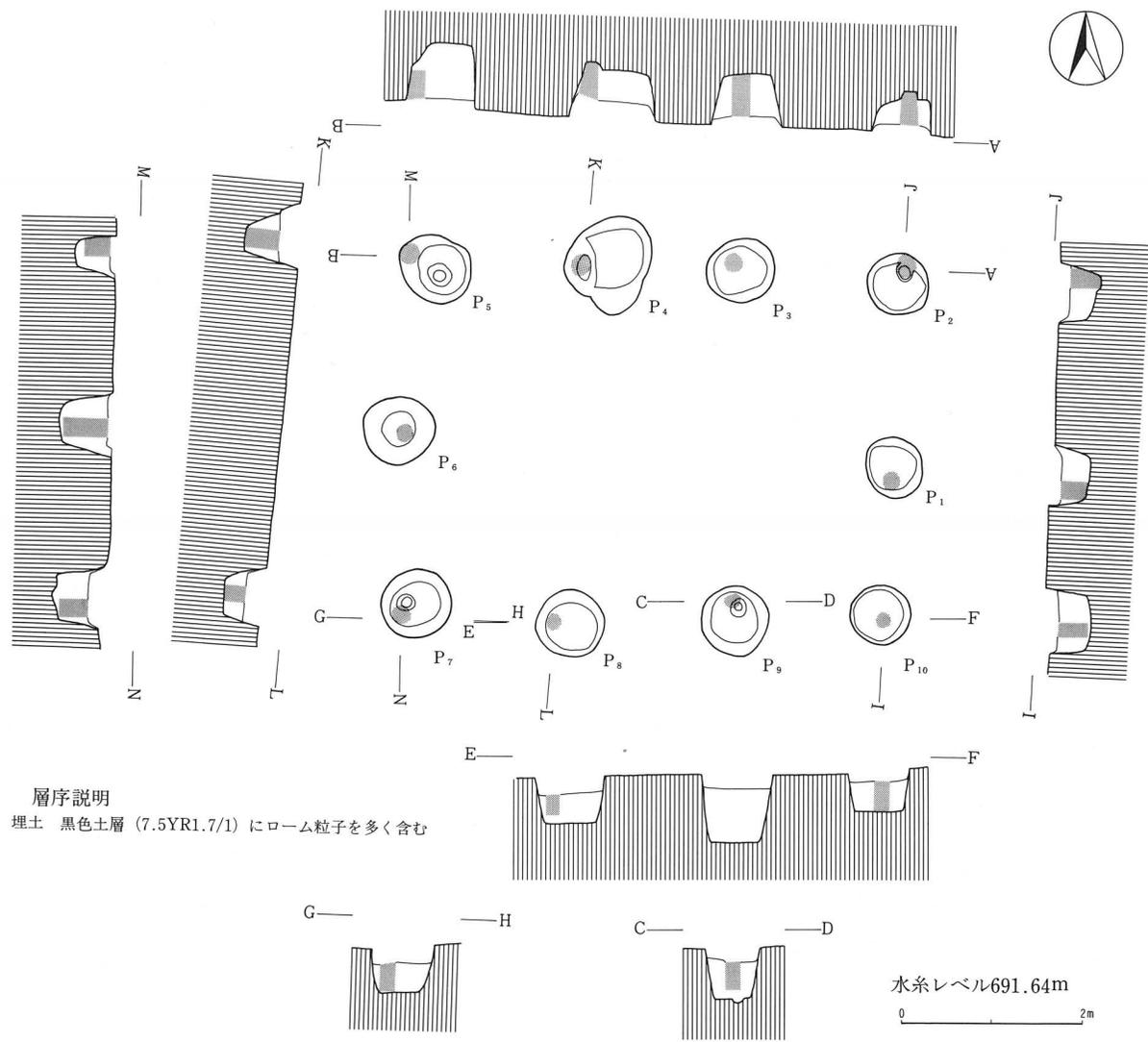
柱間は南北が208cm、東西155～170cmを測る。

南北軸の方位は、N-5.5°-Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形を呈する。

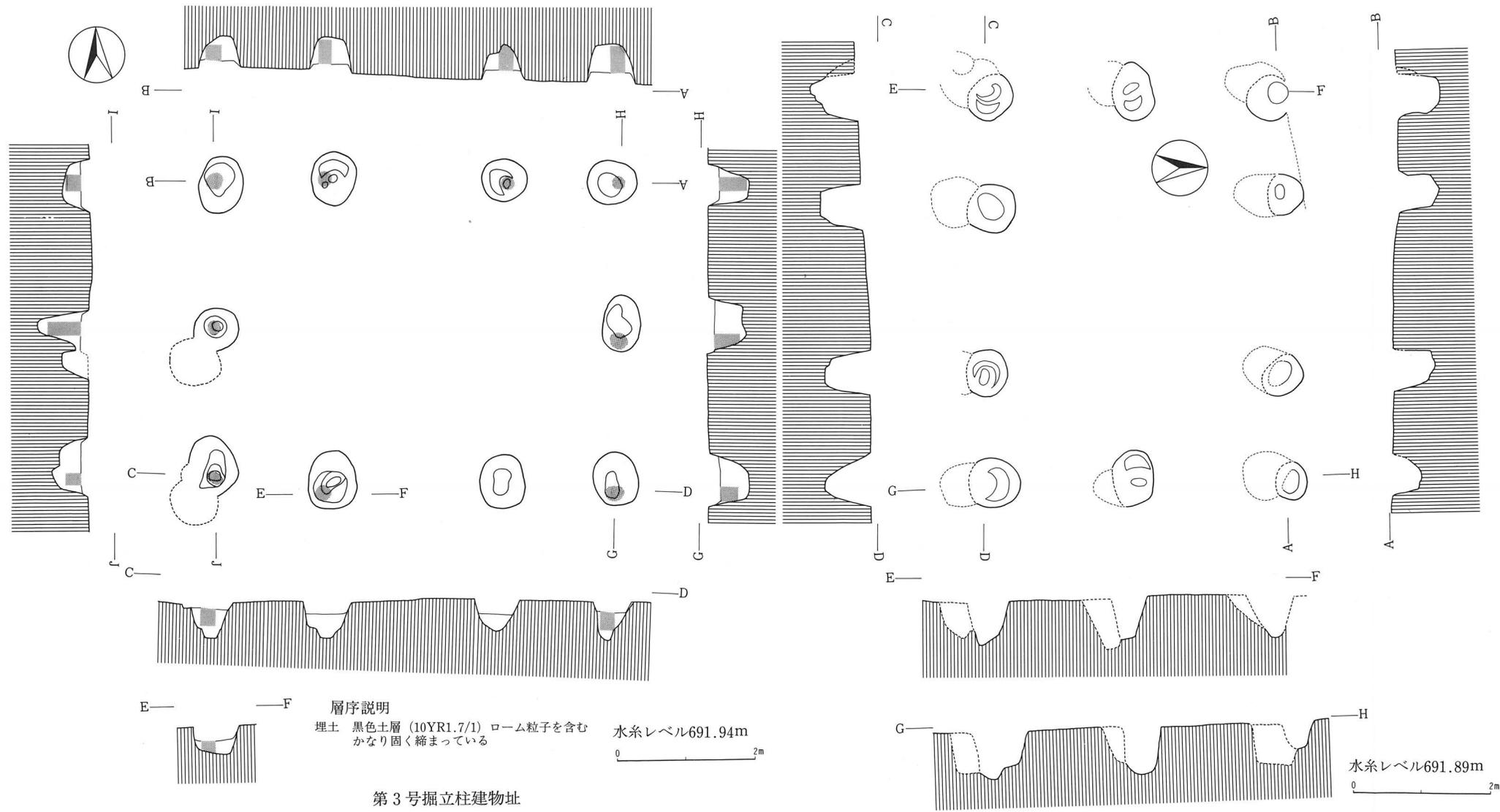
埋土は、黒色土と明褐色土を主体とするものである。

遺物

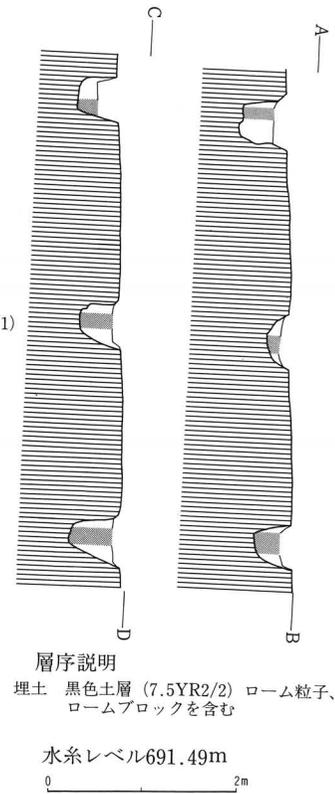
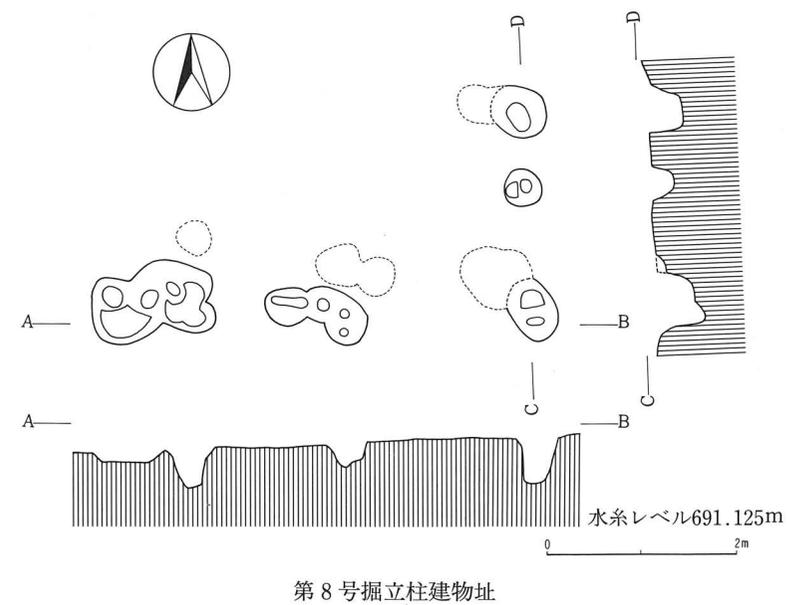
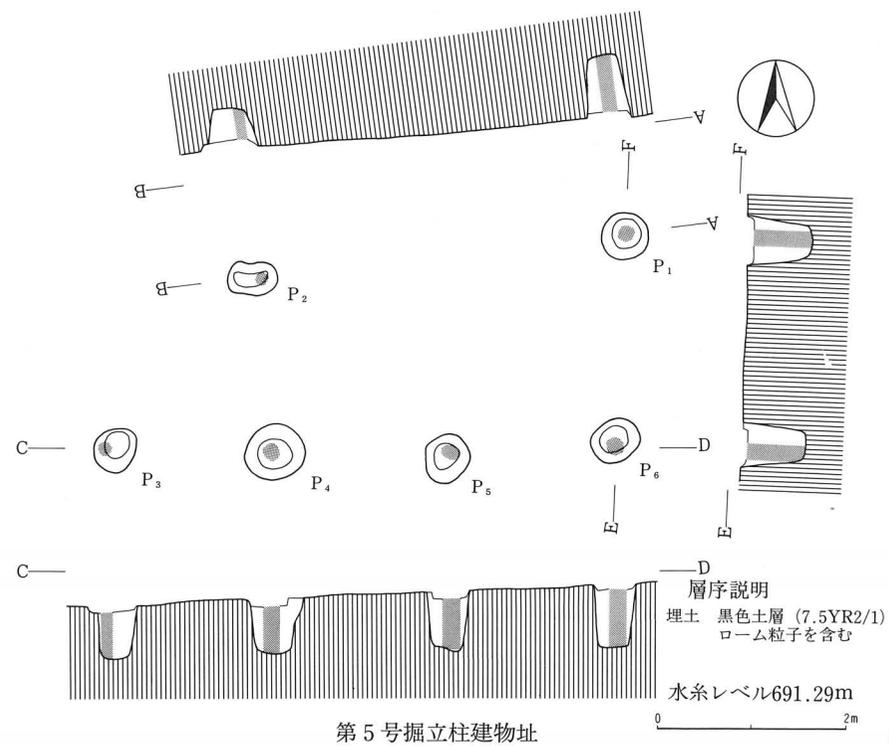
P₄から須恵器杯の破片が1点出土している。奈良時代後半～平安時代前葉以降と考えられる。



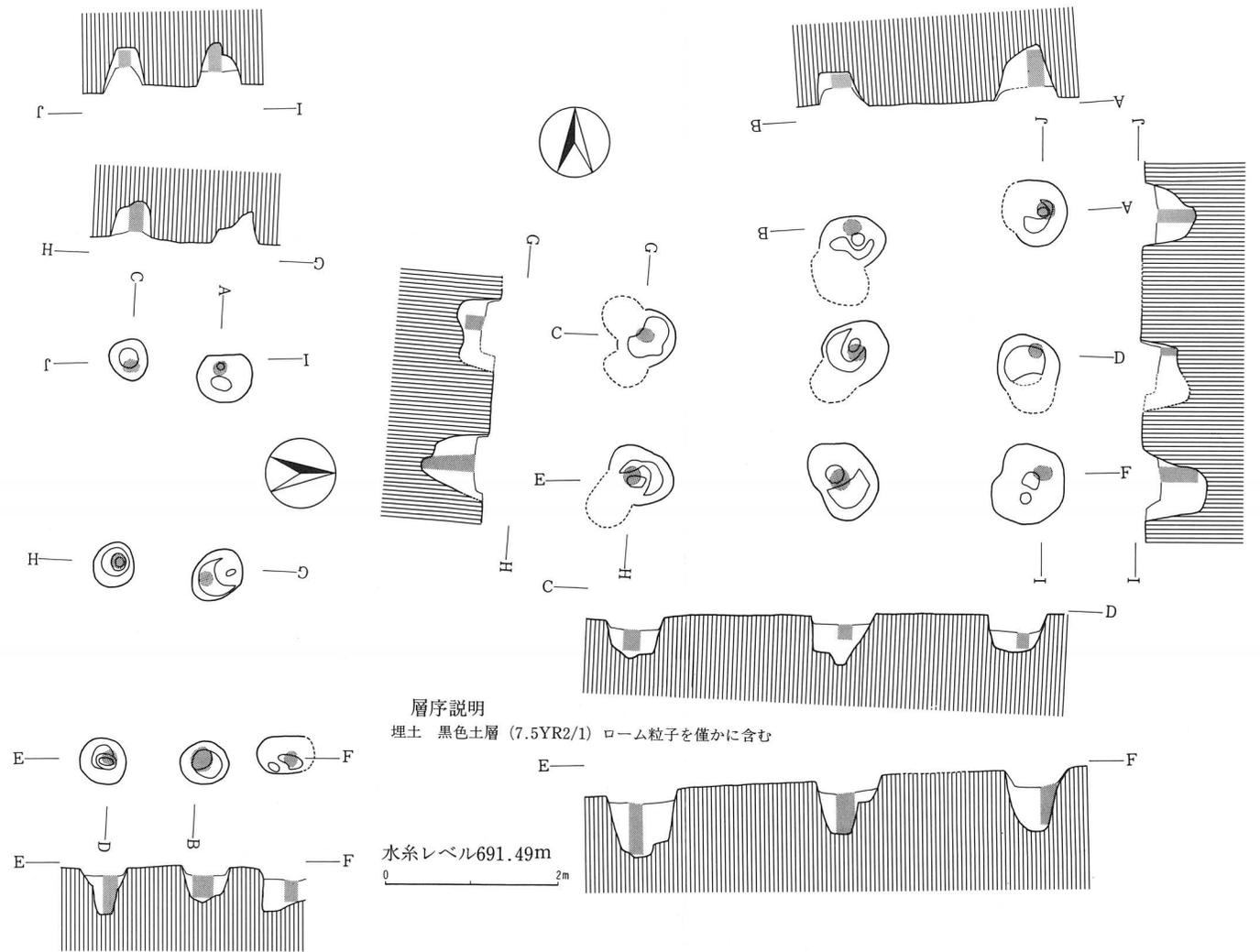
第26図 第2号掘立柱建物址実測図



第27図 第3・4号掘立柱建物址実測図



第6号掘立柱建物址



第7号掘立柱建物址

第28図 第5・6・7・8号掘立柱建物址実測図

6) 第6号掘立柱建物址

遺構 (第28図、図版5)

C-1グリッドに位置する。第7号掘立柱建物址と重複関係を有し、第7号掘立柱建物址を切って構築されている。

2間×2間の総柱式の掘立柱建物址と考えられ、東西470cm、南北220cmを測り、平面プランは長方形を呈する。柱間は、東西で208~228cm、南北で80~85cmを測る。

南北軸の方位は、N-1°-Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形を呈する。

埋土は、黒色土と明褐色土を主体としている。

遺物

本遺構からの出土遺物は皆無であり、所産期についても明確でないが他の掘立柱建物址との関係から奈良時代以降としておく。

7) 第7号掘立柱建物址

遺構 (第28図、図版5)

C-1グリッドに位置する。第6号掘立柱建物址と重複関係を有し、第6号掘立柱建物址に切られている。2間×2間の総柱式の建物址で、東西470cm、南北305cmを測り、平面プランは長方形を呈する。柱間は東西で188~220cm、南北で125~145cmを測る。

南北軸の方位はN-1°-Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

埋土は黒色土を主体とし、ロームを少量混入している。

遺物

本遺構からの出土遺物は皆無であり、所産期については明確でないが他の掘立柱建物址との関係から奈良時代以降としておく。

8) 第8号掘立柱建物址

遺構 (第28図)

C-1グリッドに位置する。第5号掘立柱建物址と重複関係を有し、第5号掘立柱建物址により切られている。ピットは総計7基検出された。全体を窺うことはできないが、おそらく、2間×2間あるいは2間×3間の建物であったと思われる。

遺物

本遺構からの出土遺物は皆無である。所産期については、重複関係から第5号掘立柱建物址よりも古いものと言える。

9) 第9号掘立柱建物址

遺構 (第29図、図版5)

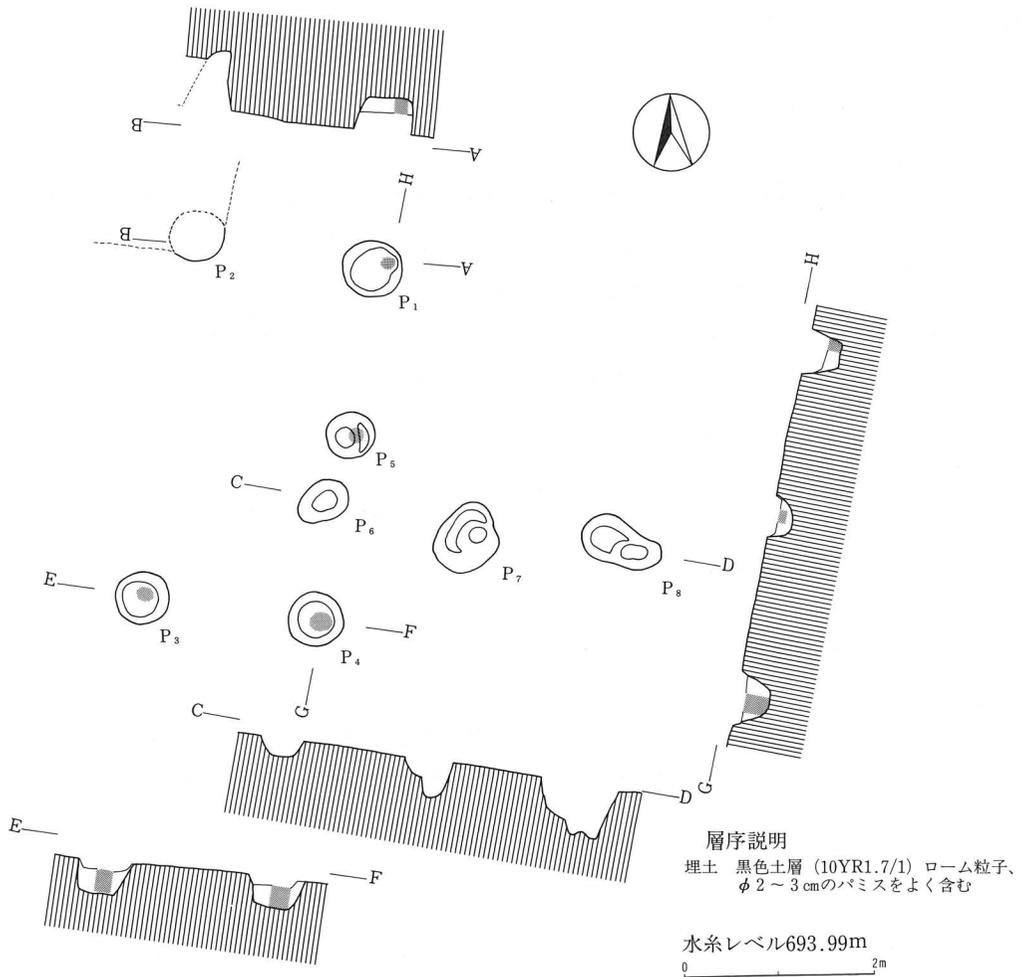
E-1グリッドに位置する。第4号住居址を切って構築されている。ピットは総計8基検出されたが、P₆~P₈については、本遺構に伴うものか明確でない。

ピット掘形のプランは、円形・楕円形を呈する。

埋土は、黒色土、ローム粒子を含む褐色土であった。

遺物

本遺構からの出土遺物は皆無である。所産期については、重複関係から奈良時代以降と考えられる。



第29図 第9号掘立柱建物址実測図

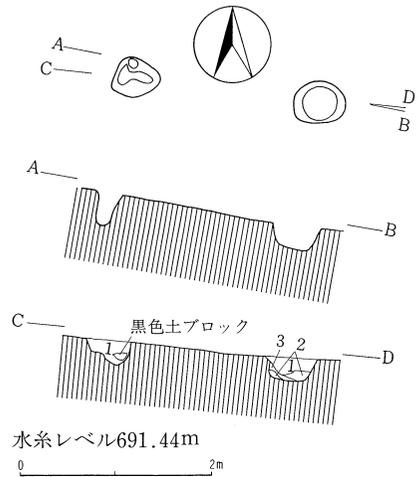
10) 第10号掘立柱建物址

遺構 (第30図、図版6)

C-3グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。2基のピットが検出された。ピット間は2mを測る。ピットの掘形は、不整形・不整円形である。柱痕は、確認できなかった。

遺物

本遺構からの出土遺物は皆無であり、所産期についても明らかにし得なかった。



層序説明
 第1層 黒色土 (10YR2/1) と地山 (10YR4/6) を主体とする埋土
 第2層 黒色土層 (10YR2/1)
 第3層 地山に黒色土 (10YR2/1) が若干混じる

第30図 第10号掘立柱建物址実測図

(3) 柵 址

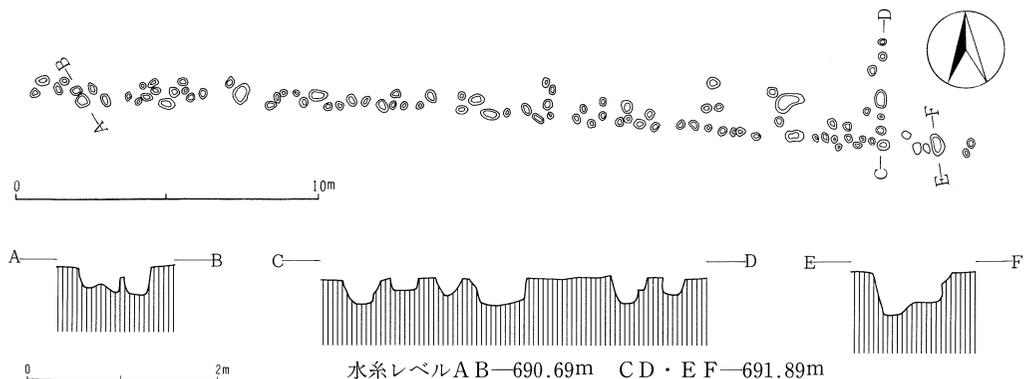
1) 第1号柵址

遺構 (第31図、図版6)

B~D-2グリッドに位置する。掘立柱建物址を「」形に囲むように存在する小ピット群である。径5~60cm前後、深さ13~46cmを測る。覆土は、黒褐色土が大半で、底部付近では地山に近似する明褐色土層が認められた。掘立柱建物址群の北側が谷となっていることから、南東側の囲いとしての施設と考えられる。また東側ではピットが疎らなことから出入口部が、あるいは存在したのかもしれない。

遺物

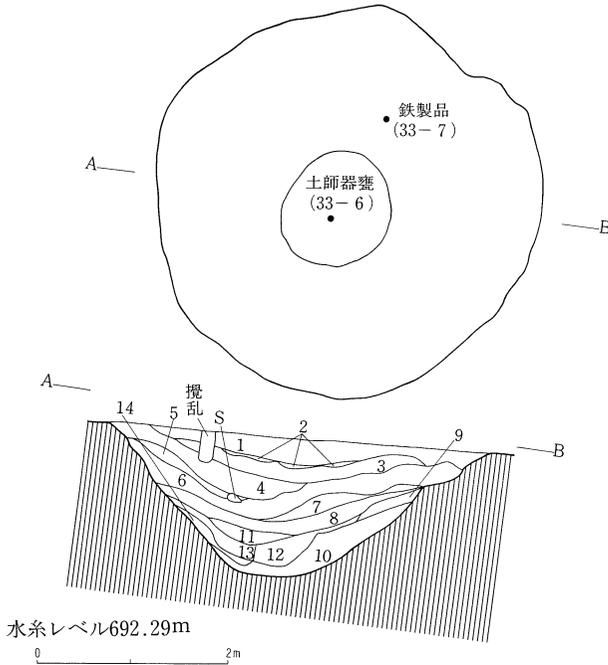
縄文土器片、土師器片、須恵器片が出土しているが図示し得るものはない。所産期については、掘立柱建物址群の遺物と時間的な隔たりが認められないから、同時期に存在したものと考えたい。



第31図 第1号柵址実測図

(4) 井戸址

1) 第1号井戸址



層序説明

第1層	暗褐色土層 (10YR3/3)	バミスφ0.5~1cmをよく含む	粘性なし
第2層	黒色土層 (10YR1.7/1)	やや粘性があり、粒子細かい	
第3層	黒褐色土層 (10YR2/2)	バミスφ0.5cmをよく含む、スコリアもよく含む	粘性あまりなし
第4層	黒褐色土層 (10YR2/3)	バミスφ0.5cmをよく含む、スコリアもよく含む	粘性あまりなし
第5層	暗褐色土層 (10YR3/3)	バミスφ0.5cmをよく含む、スコリアもよく含む	粘性あまりなし
第6層	黒褐色土層 (10YR3/1)	バミスφ1cmをよく含む	スコリアもよく含む
第7層	暗褐色土層 (10YR3/3)	バミスφ1cmをよく含む	スコリアもよく含む
第8層	暗褐色土層 (10YR3/4)	バミスφ5mmをよく含む、ローム粒子も含む	
第9層	褐色土層 (10YR4/4)	バミスφ5mmをよく含む、ローム粒子もよく含む	
第10層	褐色土層 (10YR4/4)	バミスφ5mmをよく含む、ローム粒子を多く含む	
第11層	黒褐色土層 (10YR3/2)	バミスを含む	
第12層	褐色土層 (7.5YR4/4)	バミスを含む	ローム粒子を多く含む
第13層	褐色土層 (7.5YR4/3)	バミスを含む	
第14層	褐色土層 (7.5YR4/6)	バミスを殆ど含まない	ローム粒子を多く含む

第32図 第1号井戸址実測図

遺構(第32図、図版6)

D-1グリッドに位置し、第1号土坑によって切られている。

東西405cm、南北416cmを測り、平面プランは不整形円形を呈する。

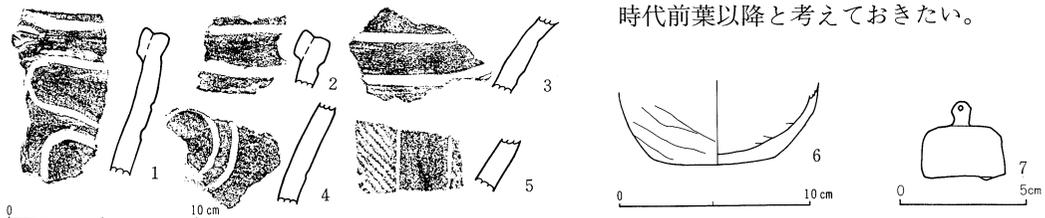
確認面からの深さはおよそ150cmを測る。湧水は見られなかったが、一応、井戸址とした。

遺物(第33図、図版53)

縄文土器片、土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、骨片などが出土している。このうち、図示し得たものには縄文土器片、土師器長胴の甕の底部、鉄製品がある。鉄製品は、錘と考えられる。

分銅として使われたも

のであろうか。本遺構の所産期は、平安時代前葉以降と考えておきたい。

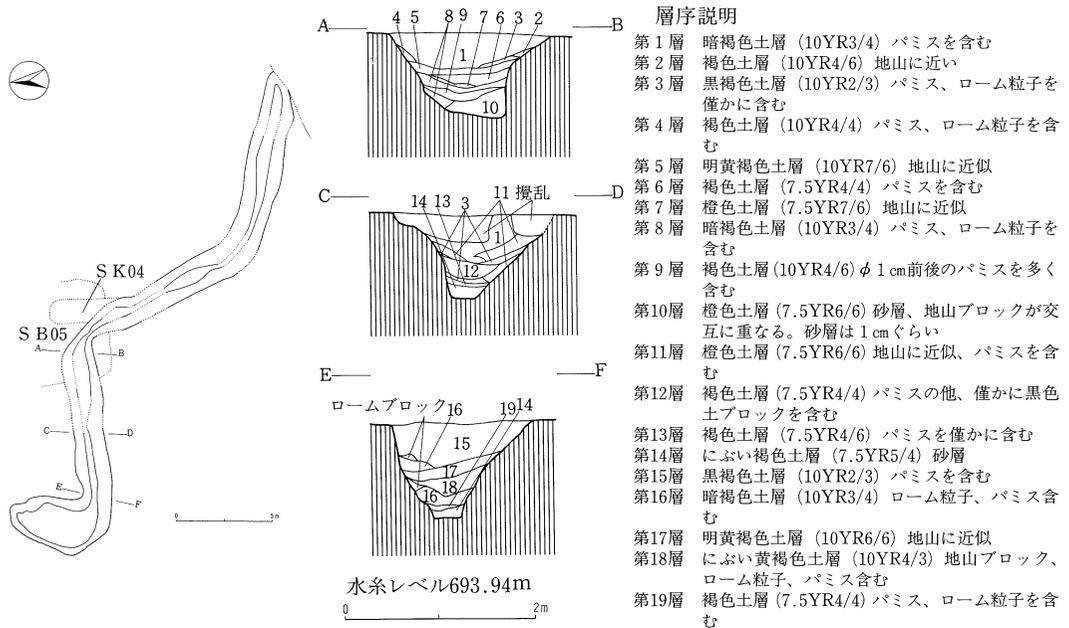


第33図 第1号井戸址出土遺物

(5) 溝 址

1) 第1号溝址

遺構 (第34図、図版7)



第34図 第1号溝址実測図

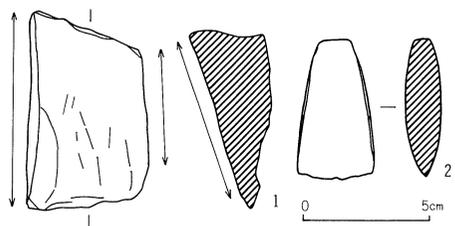
E・F-1・2グリッドに位置し、南東から北へ延びる溝で、調査区域内において調査された部分は、約31mの範囲である。第5号住居址、第4号土坑と重複関係を有し、各々の遺構を切っ
て構築されている。溝底部付近では、砂の堆積が認められた。重複関係からすると、中世(16世紀
前半)以降の所産である。

遺物 (第35図、図版53)

土師器片、須恵器片、内耳土器片、石器が出土している。このうち図示したものは、石器2点である。

1は、凝灰岩製の砥石で重さ140gを計る。

2は、緑泥片岩製の磨製石斧である。



第35図 第1号溝址出土遺物

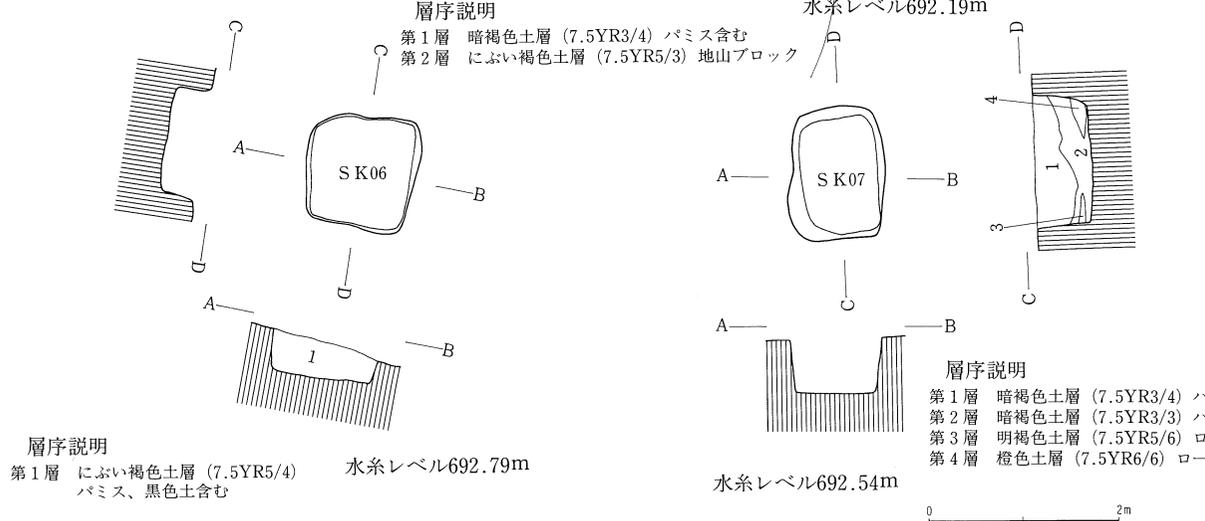
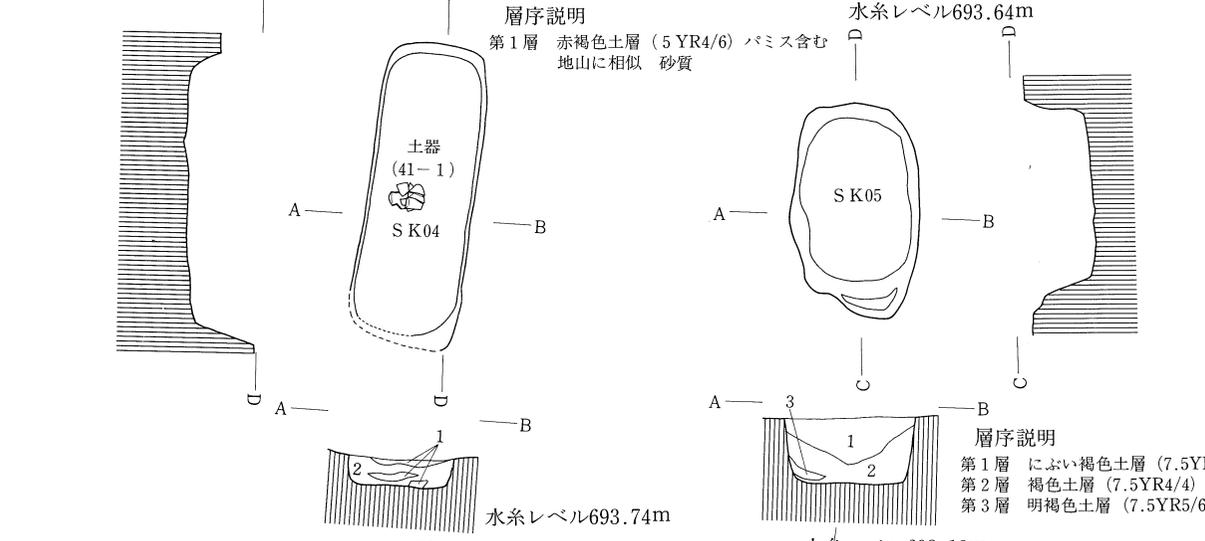
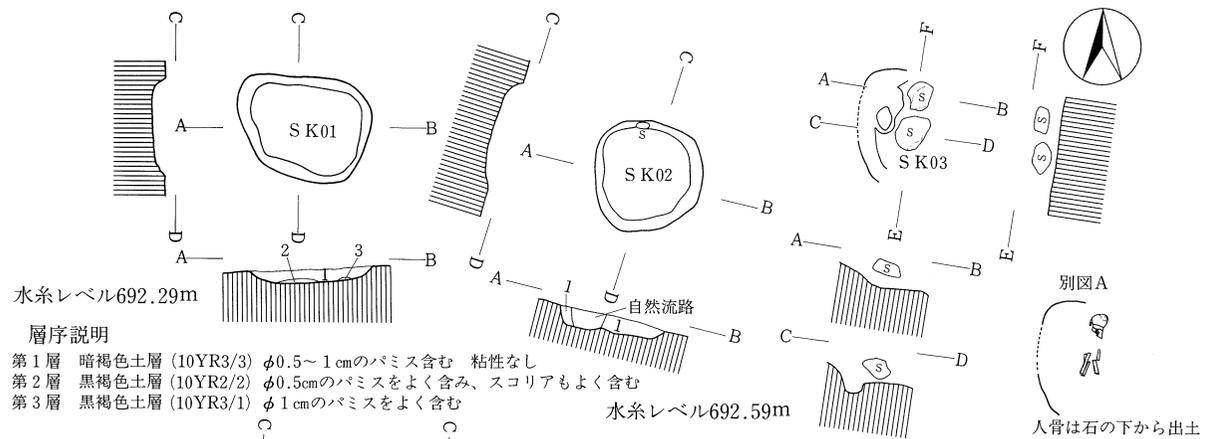
(6) 土 坑

遺構（第36～39図、図版7～10）

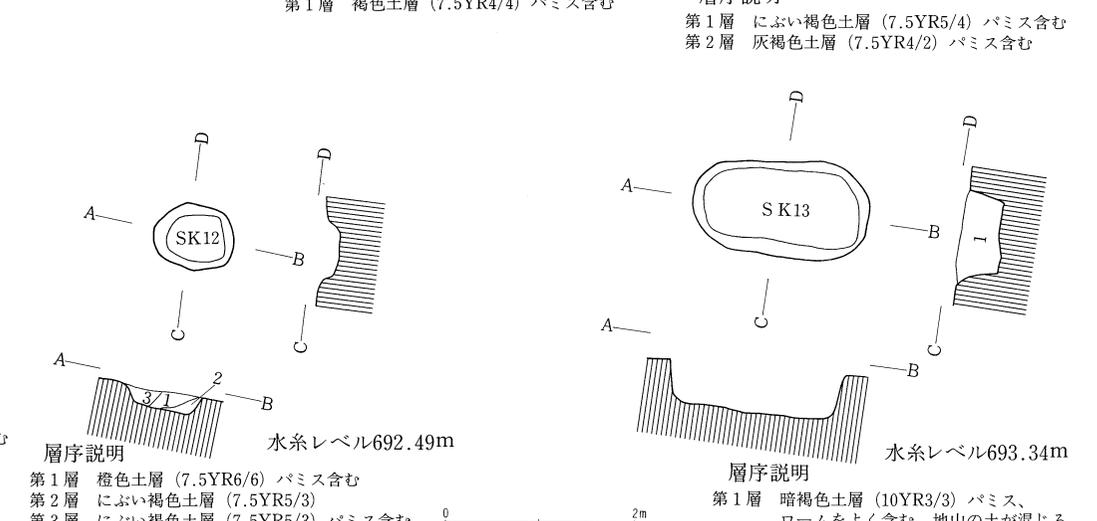
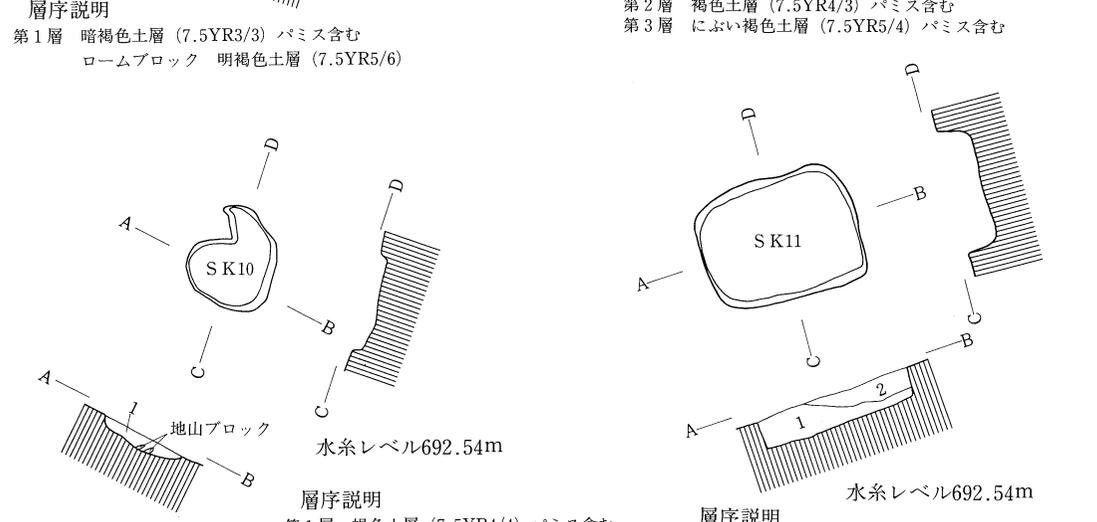
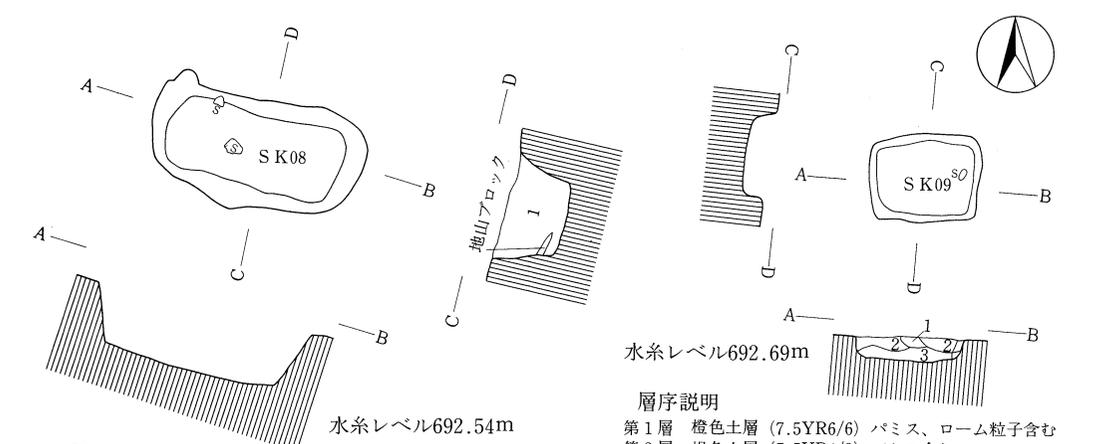
本遺跡からは、総計25基の土坑が検出された。位置的には、調査区中央から東部に分布し、中

第2表 土坑一覧表

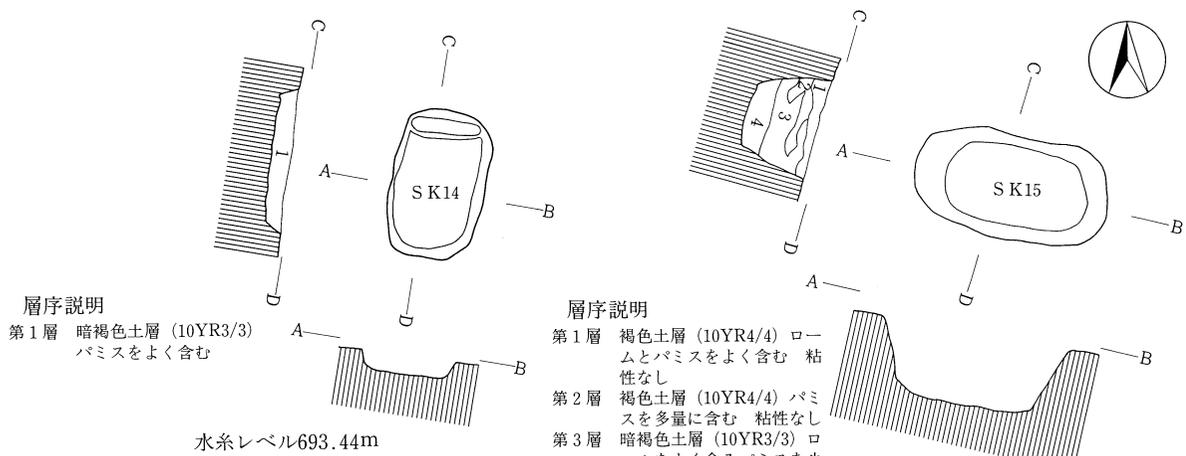
土坑No.	平面形	規 模 (cm)			長軸方位	出 土 遺 物	備 考
		東西	南北	深 さ			
1	不整楕円形	135	109	9～14	N-68°-W	土師器破片1、須恵器破片1	第1号井戸址と重複
2	不整円形	114	119	12～18	N-17°-E	なし	
3	(不整楕円形)	(95)	(127)	(14～29)	(N-9°-E)	人骨、銭貨3、土師器破片1、灰釉陶器片1	
4	隅丸長方形	113	324	25～30	N-8°-E	内耳土器	第5号住居址と重複
5	不整長楕円形	138	226	63～72	N-1°-W	土師器破片9、須恵器破片4	
6	不整方形	117	117	25～42	N-8°-E	土師器破片2、須恵器破片1	
7	不整隅丸長方形	98	141	55～61	N-1°-E	土師器破片11、須恵器破片12、黒色土器破片1	
8	不整隅丸長方形	230	115	55～65	N-79°-W	土師器破片11、須恵器破片5	
9	不整隅丸方形	114	95	22～26	N-90°-E	なし	
10	不整楕円形	94	108	8～16	N-2°-W	なし	
11	不整長方形	170	133	30～35	N-74°-E	土師器破片8、黒色土器破片1	
12	不整楕円形	86	67	15～20	N-77°-W	なし	
13	不整長楕円形	186	100	40～46	N-80.5°-W	土師器破片4、須恵器破片4、黒色土器破片2	
14	不整長楕円形	101	157	17～22	N-10°-E	なし	
15	不整長楕円形	209	110	72～77	N-75°-W	土師器破片2	
16	不整形	186	129	32～41	N-65°-W	土師器破片9、須恵器破片7	
17	不整円形	133	138	9～15	N-61°-E	土師器破片1、須恵器破片1	
18	不整方形	150	171	32～40	N-2°-W	土師器破片2、須恵器破片1、黒色土器破片2、瀬戸美濃陶器鍔手茶碗破片1	
19	不整楕円形	113	139	17～21	N-9°-W	土師器破片1、須恵器破片1	
20	不整方形	103	138	66～74	N-11°-W	土師器破片3、須恵器破片2	
21	不整楕円形	138	116	15～18	N-74°-E	土師器破片9、須恵器破片1	
22	円形	101	98	10～14	N-25°-W	なし	
23	隅丸長方形	162	78	60～72	N-7°-W	土師器破片13、銭貨1、須恵器破片2、灰釉陶器片1、黒色土器破片1	第24号土坑と重複
24	隅丸長方形	248	144	69～78	N-7°-W	土師器破片1	第23号土坑と重複
25	隅丸方形	117	117	(75～80)	N-3°-W	須恵器破片1	



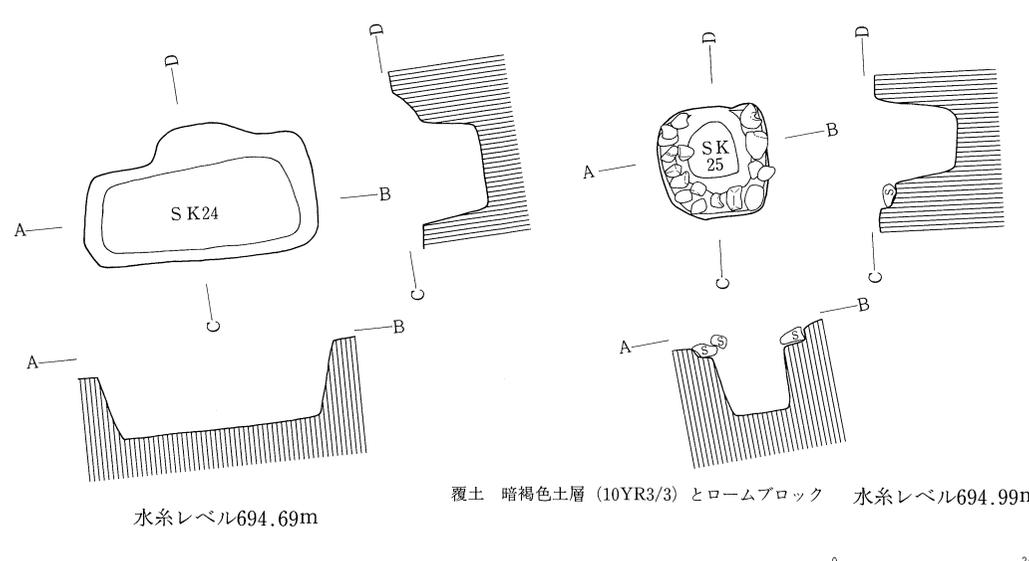
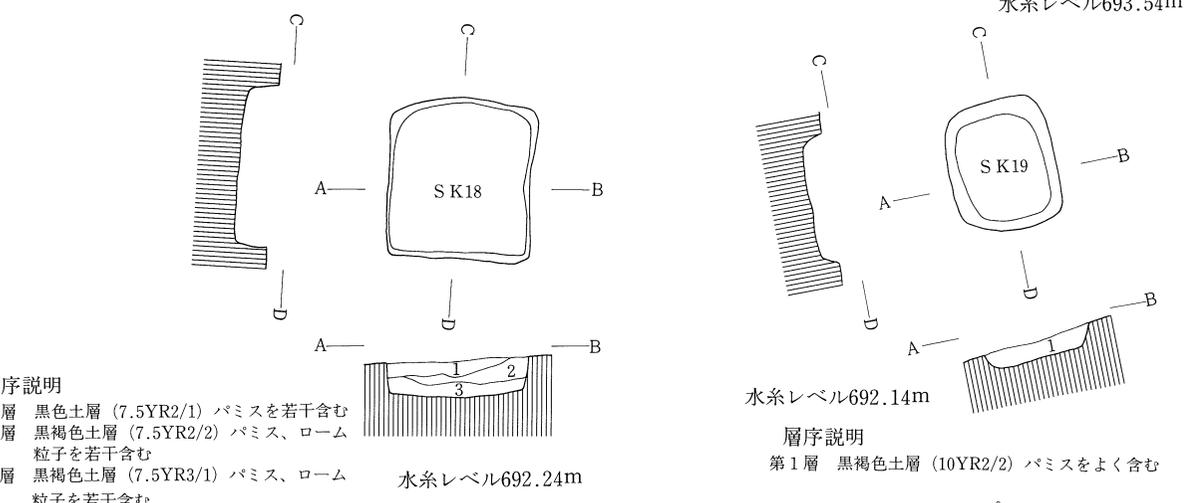
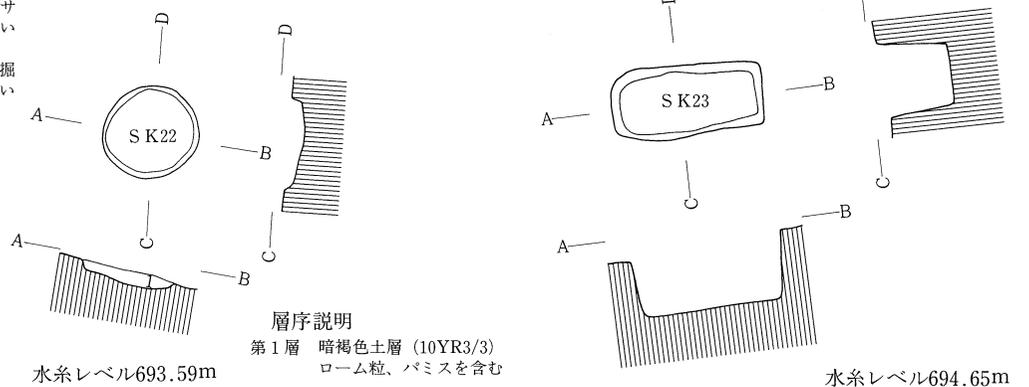
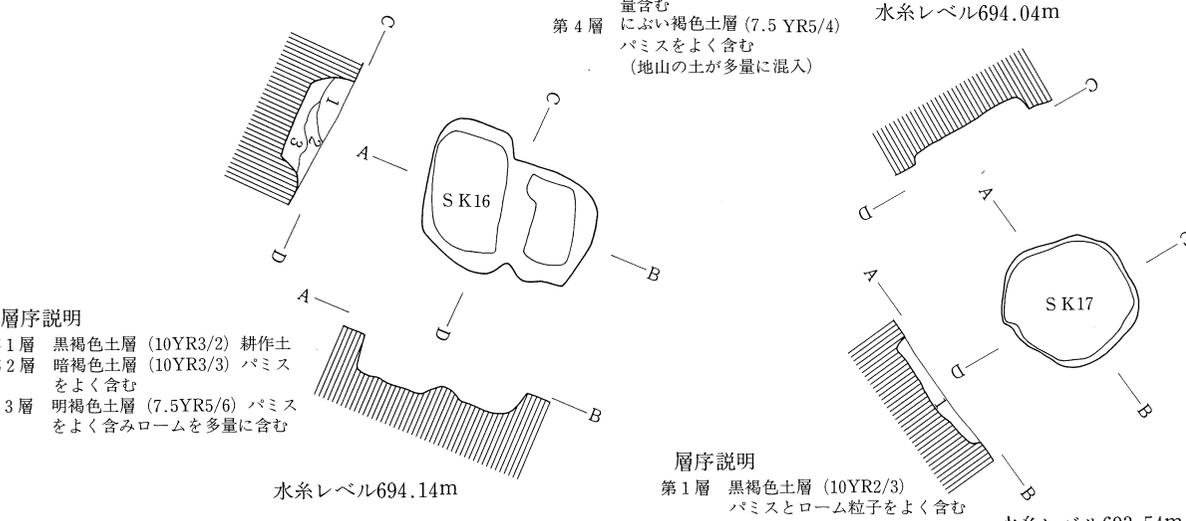
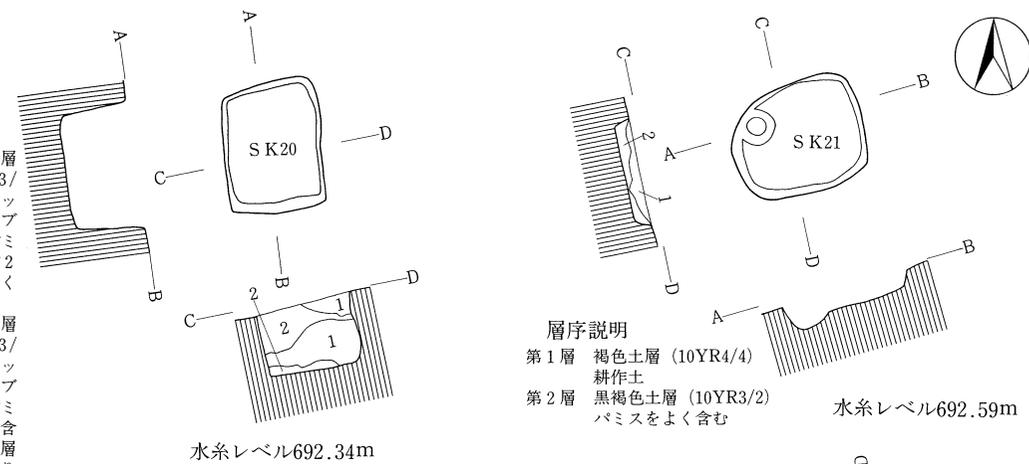
第36図 第1号~第7号土坑実測図



第37図 第8号~第13号土坑実測図



層序説明
第1層 黒褐色土層 (7.5YR3/2) 地山ブロック、黒色土ブロック、パミスを含むが2層より少なくわずか
第2層 暗褐色土層 (7.5YR3/4) 地山ブロック、黒色土ブロック、パミスを多量に含む (1~2層いずれも縮りがなく、バサバサしている)
※黒色土中に掘り込まれている



第38図 第14号~第19号土坑実測図

第39図 第20号~第25号土坑実測図

央部にやや偏在している。各土坑の詳細については、第3表に示した。土坑のうち、重複関係のあるものは、第1・43・4・23・24号土坑である。第1号土坑が第1号井戸を切り、第3・4号土坑は第4・5号住居址の覆土中に掘り込まれていた。また、第4号土坑は第1号溝址に切られている。第24号土坑は第23号土坑を切って構築されている。さらに第5～11・13・15・18～20・23・24号土坑は覆土に締まりがなく、プラン・規模等から近世以降の室ではないかと思われる。

遺物 (第40～43図、図版53)

土坑出土遺物のうち、図示し得たものには銭貨、内耳土器がある。

第3号土坑からは、人骨とともに六道銭として用いられた銭貨3点が出土している。政和通宝、永楽通宝、元祐通宝の3種である。

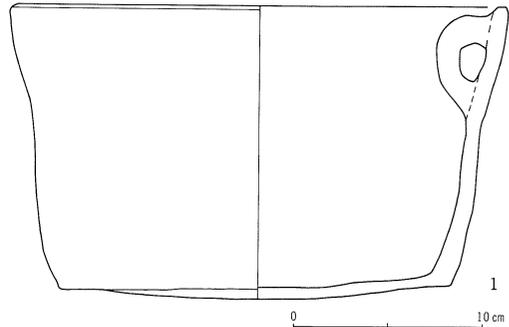
第4号土坑からは内耳土器が出土している。16世紀前半の所産と考えられる。

第23号土坑からも銭貨が出土している。祥符通宝である。

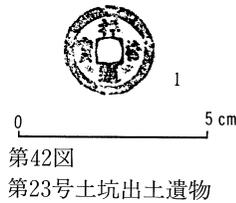
第24号土坑からは、石匙の破片が出土している。赤色チャート製で重さ10gを計る。



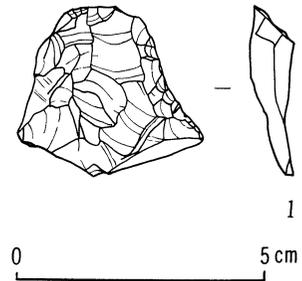
第40図 第3号土坑出土遺物



第41図 第4号土坑出土遺物



第42図 第23号土坑出土遺物



第43図 第24号土坑出土遺物

(7) 遺構外出土遺物

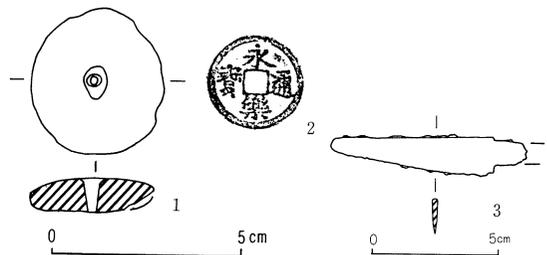
遺物 (第44図、図版53)

遺構外からは、土師器片、須恵器片、黒曜石片などが出土している。このうち、図示したものには、土製紡錘車、銭貨、刀子がある。

土製紡錘車は、重さ16gを計る。

銭貨は、永楽通宝である。

刀子は、基部を欠いている。



第44図 遺構外出土遺物

2 関口B遺跡

(1) 竪穴住居址

1) 第1号住居址

遺構 (第45・46図、図版11)

C・D-2グリッドに位置する。第2号住居址、第1号溝址と重複関係を有し、第2号住居址を切り、第1号溝址に切られている。

東西796cm、南北748cmを測り、平面プランは隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N-9.5°-Wを示す。確認面からの壁高は、71~84cmを測る。

カマドは、左袖を残すのみで、大半は第1号溝址により壊されている。褐色土を袖芯として、にぶい黄褐色を呈する粘土により構築されていたと考えられる。

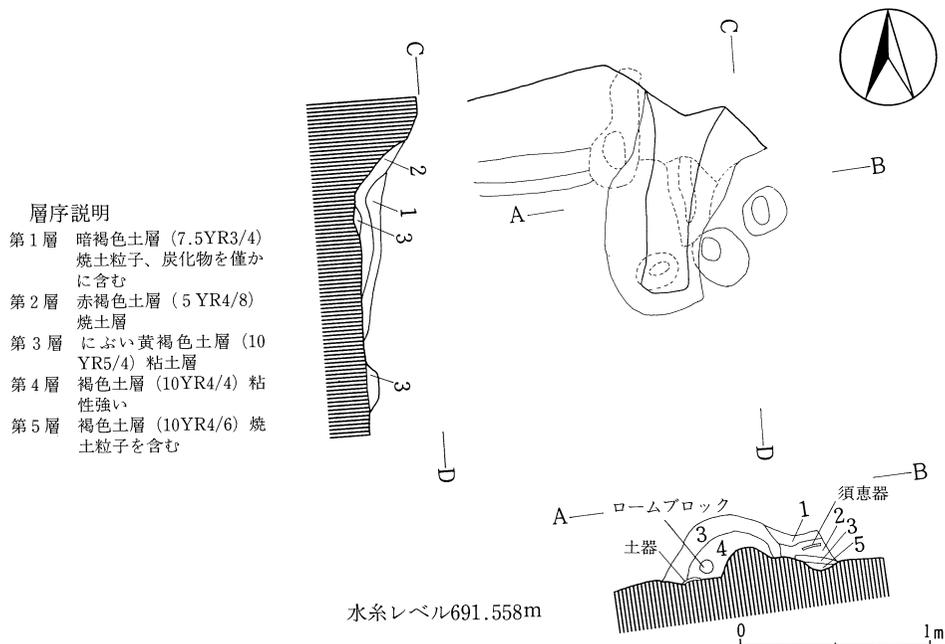
床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では、軟弱であった。

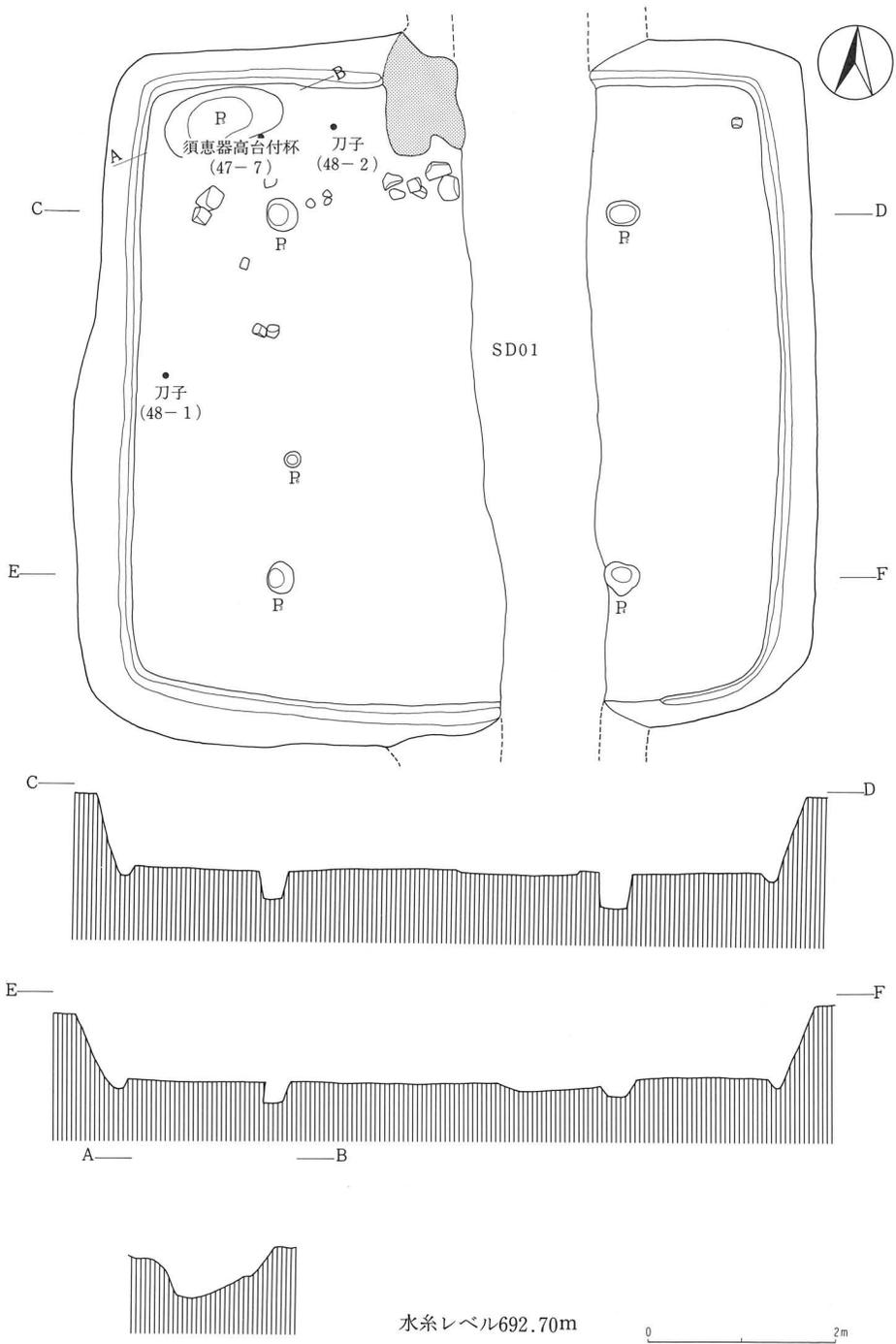
ピットは、総計6基検出された。このうちP₁~P₄が支柱穴である。P₅は貯蔵穴であろう。

周溝は、カマド部分を除き、ほぼ全周していたと思われる。

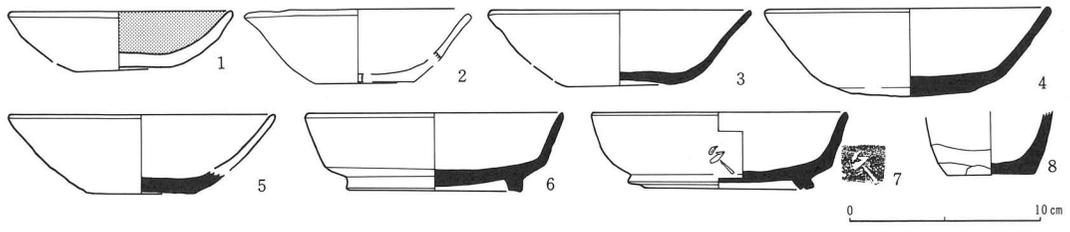
遺物 (第47・48図、図版54)

土師器片、須恵器片、鉄製品、自然遺物が出土している。このうち、図示し得たものには、土師器杯1点、黒色土器杯1点、須恵器杯3点、高台付杯1点、短頸壺1点、鉄製品2点がある。

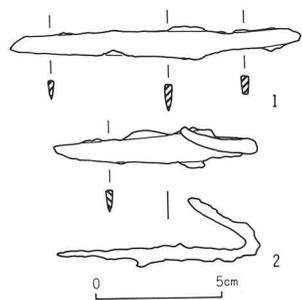




第46図 第1号住居址実測図



第47図 第1号住居址出土遺物 (A)



第48図
第1号住居址出土遺物 (B)

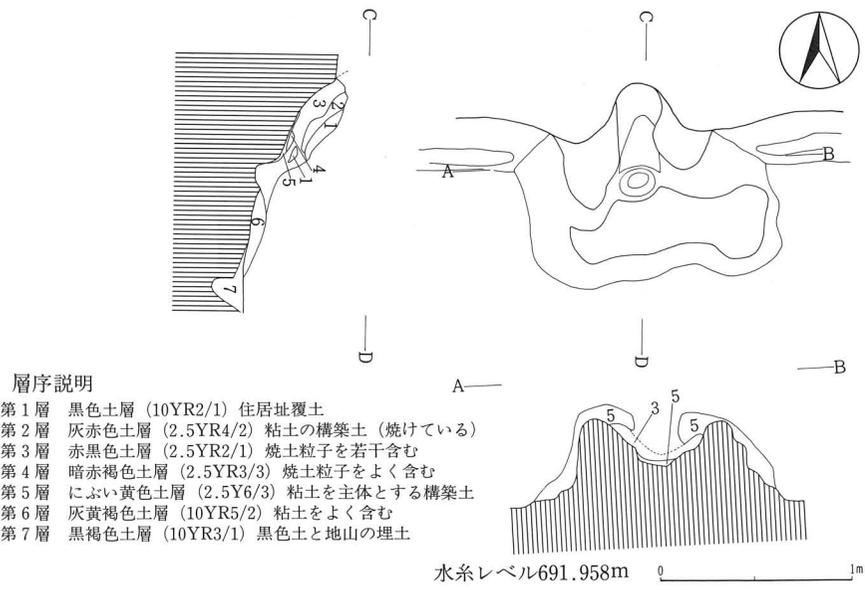
土師器杯は新しい様相を呈しており、溝からの混入であろう。
 須恵器高台杯（第47図7）は刻書土器で、「久」が焼成前に刻書されている。
 鉄製品2点（第48図）は、いずれも刀子である。
 自然遺物には、骨片のほか、カマドから出土した炭化材があり、ヤマグワ、スギと同定されている。

本住居址の所産期は、奈良時代後葉に比定される。

2) 第2号住居址

遺構（第49・50図、図版11）

B-2・3グリッドに位置する。第1号住居址、第2号溝址と重複関係を有し、第1号住居址、第2号溝址によって切られている。



層序説明

- 第1層 黒色土層 (10YR2/1) 住居址覆土
- 第2層 灰赤色土層 (2.5YR4/2) 粘土の構築土 (焼けている)
- 第3層 赤黒色土層 (2.5YR2/1) 焼土粒子を若干含む
- 第4層 暗赤褐色土層 (2.5YR3/3) 焼土粒子をよく含む
- 第5層 にぶい黄色土層 (2.5Y6/3) 粘土を主体とする構築土
- 第6層 灰黄褐色土層 (10YR5/2) 粘土をよく含む
- 第7層 黒褐色土層 (10YR3/1) 黒色土と地山の埋土

東西555cm、南北544cmを測り、平面プランは隅丸方形を呈する。
 カマドを中心とする主軸方位は、N-15°-Wを示す。
 確認面からの壁高は、32~49cmを測り、壁はおよそ70°の角度で立ち上がる。

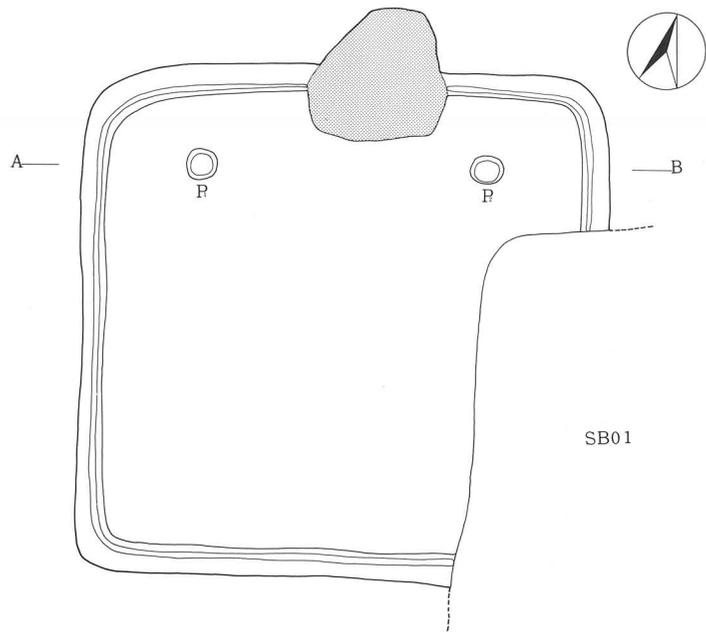
第49図 第2号住居址カマド実測図

カマドは、袖芯として地山を掘り残し、にぶい黄色を呈する粘土を用いて構築されていたと考えられる。

床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。

ピットは総計2基検出され、いずれも支柱穴であると考えられる。

周溝は、カマド部分を除き、全周する。

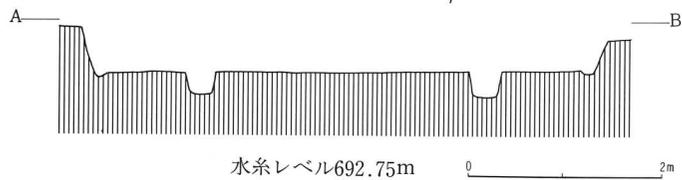


遺物 (第51図、図版54)

土師器片、須恵器片、銅製品のほか、自然遺物として骨片がカマドから出土している。

このうち、図示したものは、須恵器杯1点である。

底部は、ヘラキリ後手持ちヘラケズリがなされる。銅製品は遺存状態が悪い。非常に薄い細片である。本住居址の所産期は、奈良時代後半に比定されよう。



第50図 第2号住居址実測図



第51図 第2号住居址出土遺物

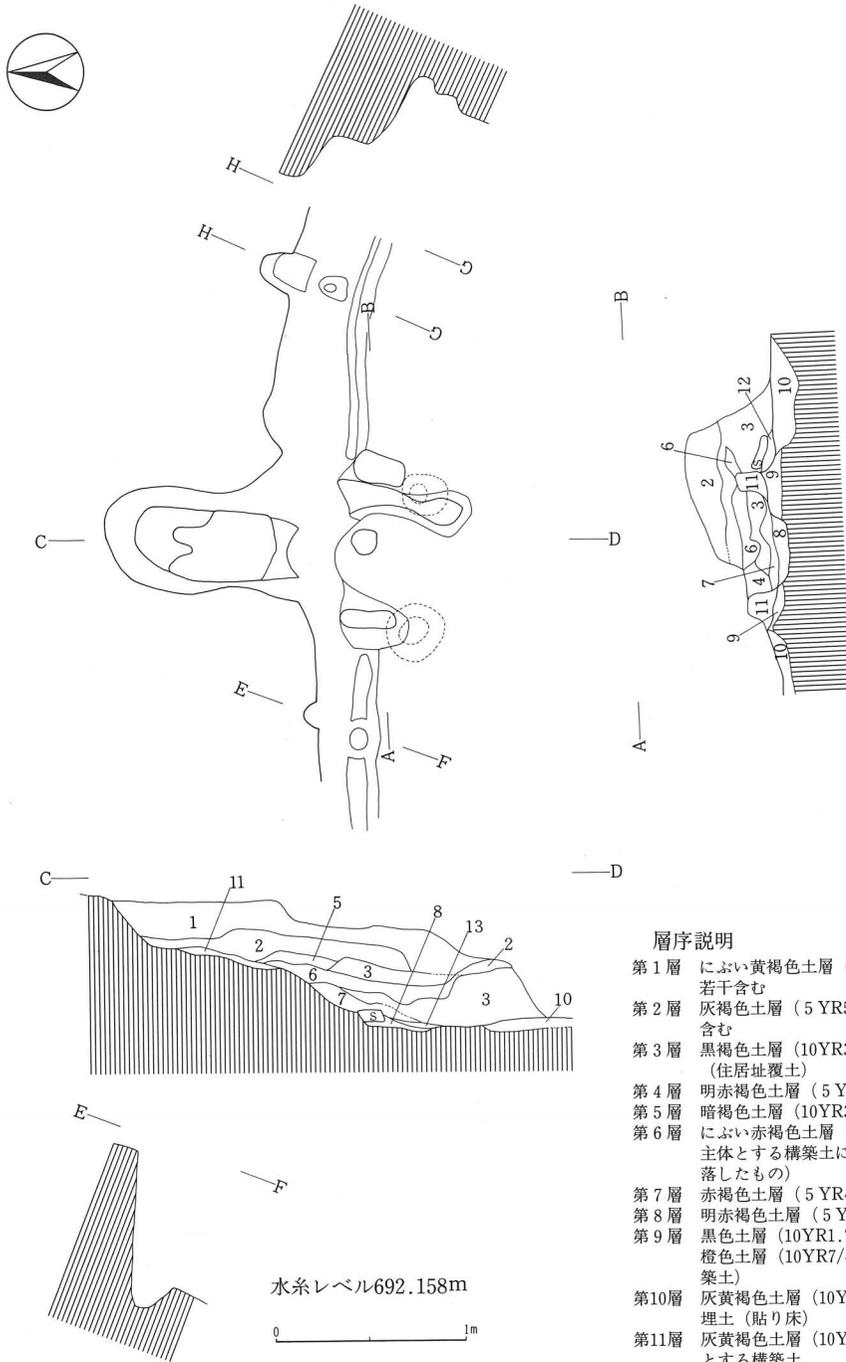
3) 第3号住居址

遺構 (第52・53図、図版11)

C-3グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西632cm、南北658cmを測り、平面プランは隅丸方形プランを呈する。確認面からの壁高は、56~76cmを測る。カマドを中心とする主軸方位は、N-2°-Eを示す。カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。軽石、黒色土・地山の混土(第9層)、白色粘土(第11層)を用いて構築されていたと考えられる。床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。

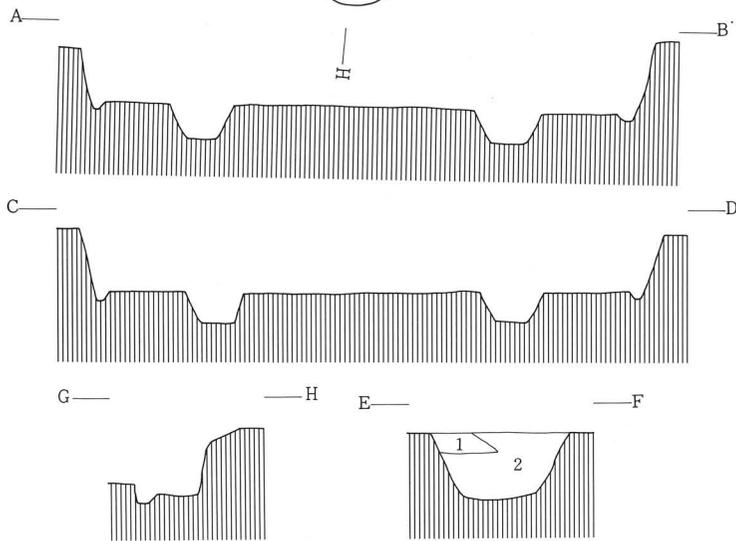
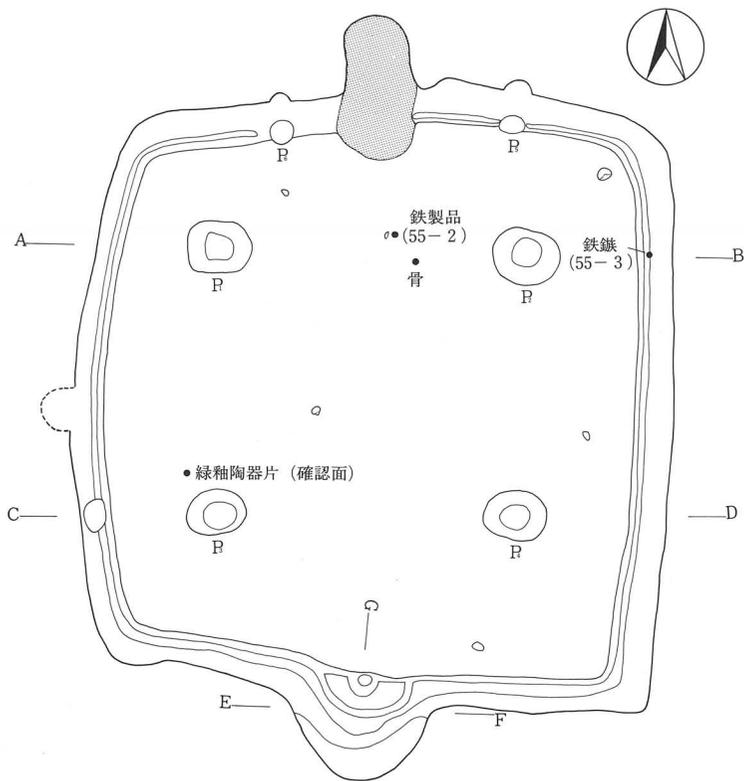
ピットは、総計6基検出された。P₁~P₄が支柱穴である。また南壁ほぼ中央部では、張り出し部が認められた。周溝は、カマド部分を除き全周していたと思われる。



層序説明

- 第1層 におい黄褐色土層 (10YR4/3) 白色粘土を若干含む
- 第2層 灰褐色土層 (5 YR5/2) 白色粘土を多量に含む
- 第3層 黒褐色土層 (10YR3/1) 焼土等は含まない (住居址覆土)
- 第4層 明赤褐色土層 (5 YR5/8) 焼土をよく含む
- 第5層 暗褐色土層 (10YR3/3) 焼土等は含まない
- 第6層 におい赤褐色土層 (5 YR5/3) 白色粘土を主体とする構築土に焼土が若干混じる (崩落したもの)
- 第7層 赤褐色土層 (5 YR4/8) 焼土を多量に含む
- 第8層 明赤褐色土層 (5 YR5/8) 焼土層
- 第9層 黒色土層 (10YR1.7/1) と地山のにおい黄橙色土層 (10YR7/4) が混じった埋土 (構築土)
- 第10層 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 黒色土と地山の埋土 (貼り床)
- 第11層 灰黄褐色土層 (10YR5/2) 白色粘土を主体とする構築土
- 第12層 暗褐色土層 (10YR3/3) 焼土等は含まない
- 第13層 暗赤褐色土層 (5 YR3/2) 炭化物をよく含む、焼土を若干含む

第52図 第3号住居址カマド実測図



層序説明

- 第1層 黒褐色土層 (10YR2/2) 黒色土、パミス、ローム粒子含む
- 第2層 黒褐色土層 (10YR2/3) パミス、ローム粒子含む

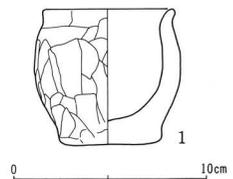
水系レベル692.90m

0 2m

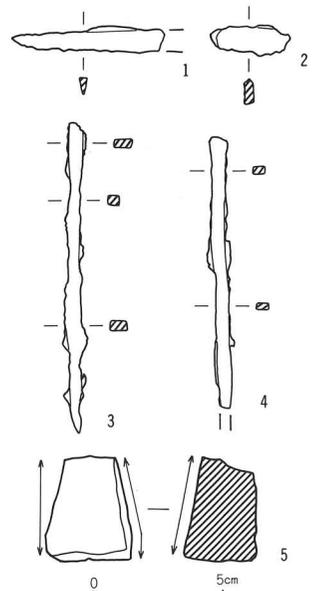
第53図 第3号住居址実測図

遺物 (第54・55図、図版54)

土師器片、黒色土器片、須恵器片、緑釉陶器片、鉄製品、石製品、自然遺物として、骨片、炭化材が出土している。図示したものは、土師器小型甕 (第54図1) と刀子 (1・2)、鉄鏝 (3・4)、砥石 (5) がある。



第54図 第3号住居址出土遺物 (A)



第55図 第3号住居址出土遺物 (B)

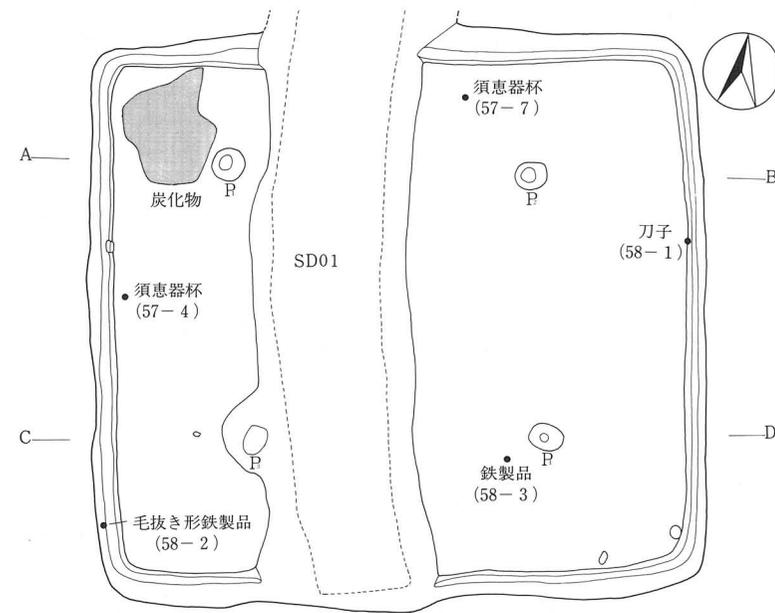
砥石は、砂岩製で重さ56gを計る。炭化材はカマドから出土し、コナラ節の一種と同定された。
本住居址の所産期は、奈良時代前葉に比定される。

4) 第4号住居址

遺構 (第56図、図版12)

C-3グリッドに位置する。第1号溝址と重複関係を有し、第1号溝址により切られている。
東西647cm、南北604cmを計り、平面プランは隅丸方形プランを呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N-9°-Wを示す。カマドは、北壁ほぼ中央部に設けられていたものと思われるが、第1号溝址により壊されている。



確認面からの深さは、41~49cmを測る。

床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。

ピットは、総計4基検出された。いずれも支柱穴である。

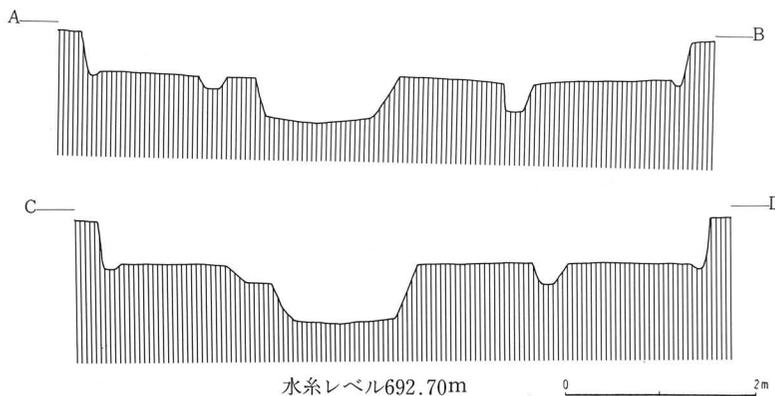
周溝は、おそらく全周していたものと思われる。

遺物 (第57~59図、図版54)

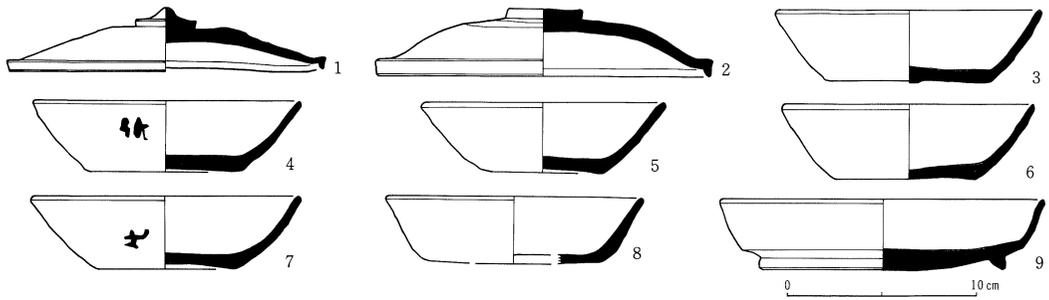
土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、石器、黒曜石片、自然遺物が出土している。

図示したのものには、須恵器蓋2点、杯6点、高台付杯1点、鉄製品3点、石鏃1点がある。

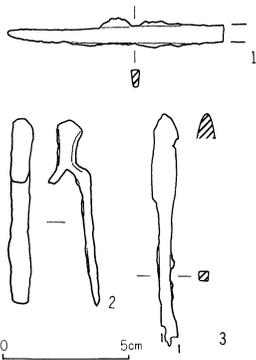
須恵器杯には、底



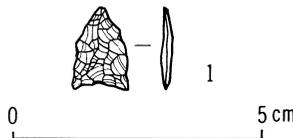
第56図 第4号住居址住居址実測図



第57図 第4号住居址出土遺物 (A)



第58図 第4号住居址出土遺物 (B)



第59図 第4号住居址出土遺物 (C)

部へラキリのもの(8)と糸切りのもの(7)とがある。

墨書土器が2点(4・7)あるが、文字は不明である。

鉄製品には刀子(1)、毛抜き形鉄製品(2)のほか、鉄鏃か工具と考えられるもの(3)がある。

石鏃は、黒曜石製で重さ2.2gを計る。

自然遺物には炭化材があり、床面から出土している。コナラ節の一種とされた。

本遺構の所産期は、奈良時代後葉～平安時代初めに比定されよう。

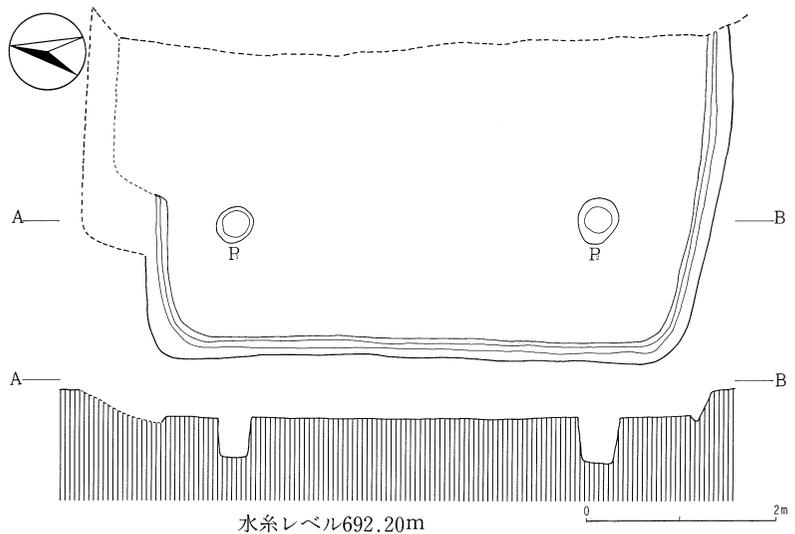
5) 第5号住居址

遺構(第60図、図版12)

B-3グリッドに位置する。

他遺構との重複関係はないが、東側は攪乱により壊されている。

南北580cm、東西は残存部で334cmを測り、平面プランは、おそらく隅丸方形



第60図 第5号住居址実測図

を呈するものと思われる。南北軸の方位は、 $N-7^{\circ}-W$ を示す。カマドは、北壁に設けられていたと考えられるが、攪乱を受けているため不明である。確認面からの壁高は、26~28cmを測る。

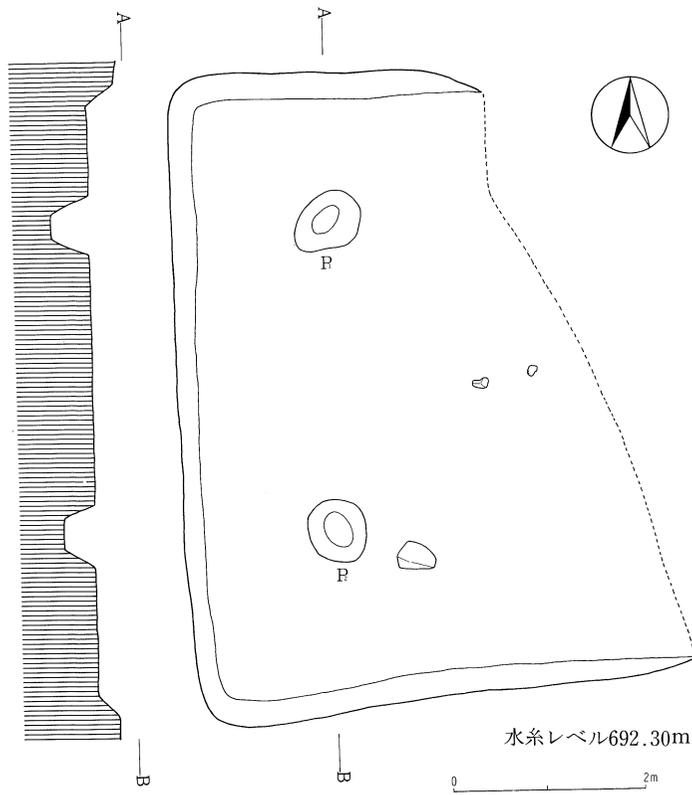
床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。

ピットは2基検出された。いずれも柱穴である。周溝は、残存している北・西・南壁下で認められていることから、おそらく全周していたと思われる。

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片、緑釉陶器片が出土しているが、図示し得るものはない。

本住居址の所産期は、出土土器片から、古墳時代後期と考えられる。



第61図 第6号住居址実測図

6) 第6号住居址

遺構 (第61図、図版12)

A-3グリッドに位置する。他遺構との重複関係はないが、東側は攪乱により壊されている。

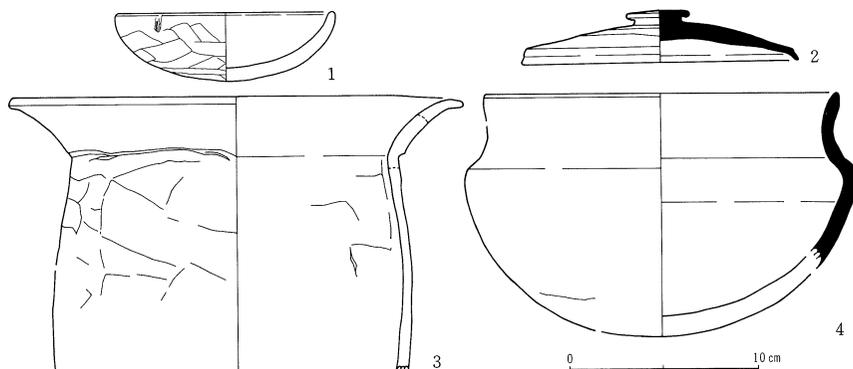
南北677cm、東西は残存部で519cmを測り、平面プランはおそらく隅丸方形を呈するものと思われる。

南北軸の方位は、 $N-3^{\circ}-W$ を示す。カマドは、北壁に設けられていたと考えられるが、攪乱を受けているため不明である。確認面からの壁高は、22~30cmを測る。床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。柱穴は2基検出された。周溝は、残存している北・西・南壁下で

認められており、おそらく全周していたと思われる。

遺物 (第62図、図版54・55)

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。このうち、図示したものは土師器杯、甕、須恵器杯、鉢の4点である。本遺構の所産期は、奈良時代前半に比定される。



第62図 第6号住居址出土遺物

7) 第7号住居址

遺構 (第63・64図、図版13)

A-3グリッドに位置する。

第4号掘立柱建物址と重複関係を有し、第4号掘立柱建物址により切られている。

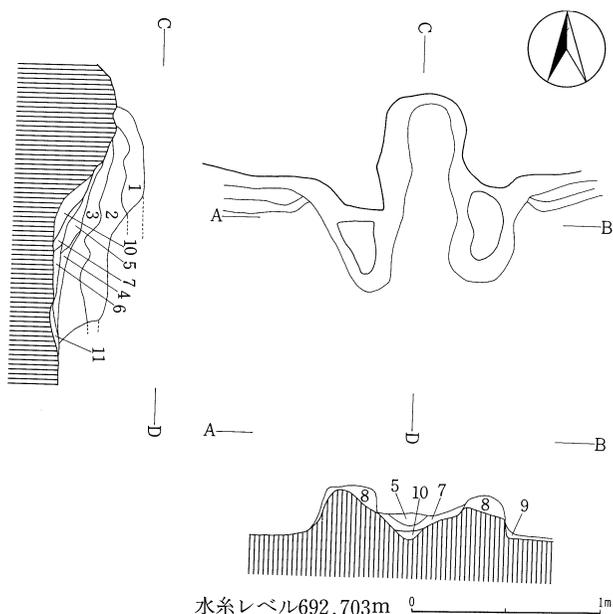
東西689cm、南北691cmを測り、平面プランは隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、 $N-8^{\circ}-W$ を示す。

カマドは北壁ほぼ中央に位置する。袖部は、地山を掘り残して袖芯とし、にぶい黄褐色を呈する粘土(第8層)を用いて構築されていたと考えられる。

確認面からの壁高は、44~55cmを測る。

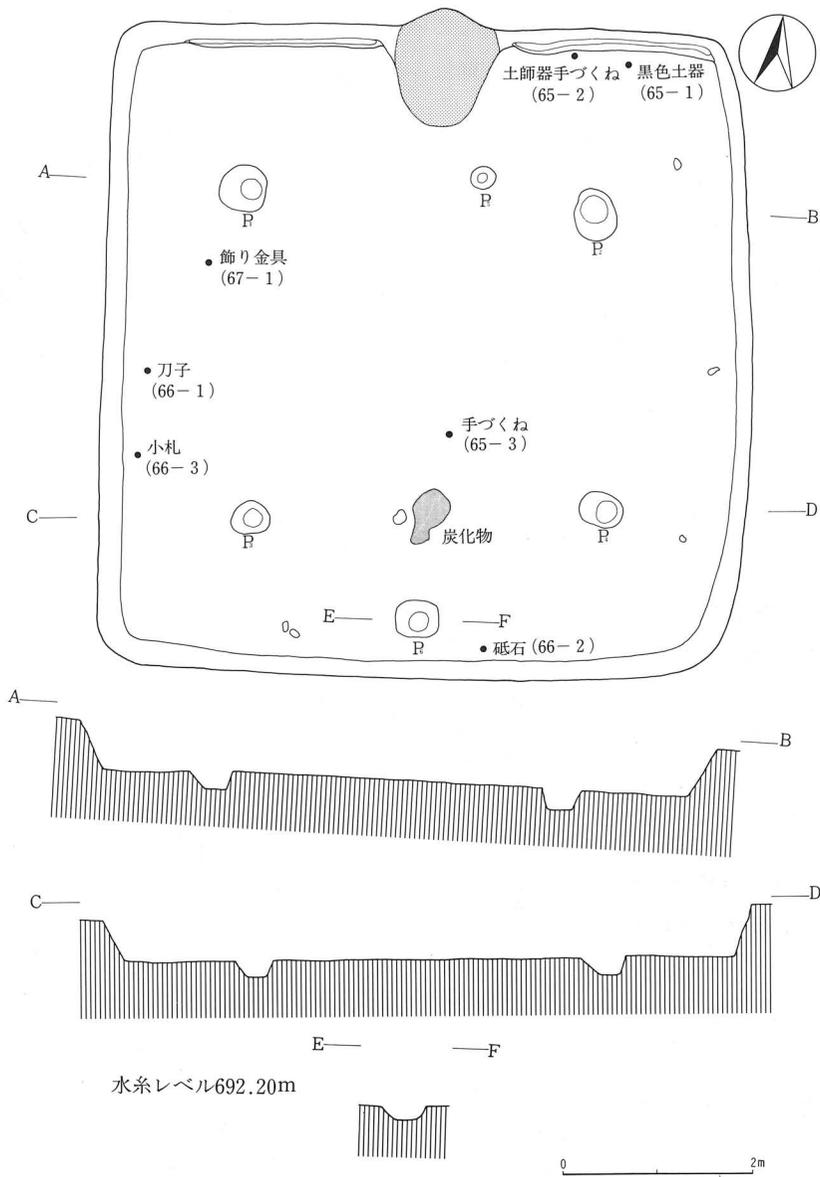
床面は、中央部が堅緻で壁際では軟弱であった。



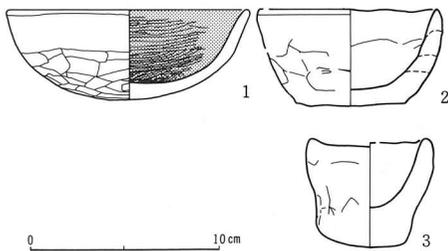
層序説明

- 第1層 黒褐色土層 (10YR3/2) 粘土がブロック状に混じる
- 第2層 褐色土層 (10YR4/4) 粘土を主体とする構築土に焼土、炭化物が若干混じる
- 第3層 にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) 焼土、粘土を若干含む
- 第4層 褐灰色土層 (10YR4/1) 灰層 (粘性有り)
- 第5層 赤褐色土層 (5 YR4/6) 灰と焼土が多量に混じる層
- 第6層 明赤褐色土層 (5 YR5/8) 焼土層
- 第7層 灰褐色土層 (7.5YR4/2) 灰と焼土 (炭化物) を若干含む
- 第8層 にぶい黄褐色土層 (10YR5/4) 粘土を主体とする構築土
- 第9層 褐色土層 (10YR4/4) ロームに黒色土が若干混じる埋土
- 第10層 にぶい黄褐色土層 (10YR6/3) ロームを主体とする埋土 (構築土)
- 第11層 黒色土層 (10YR1.7/1) 黒色土

第63図 第7号住居址カマド実測図



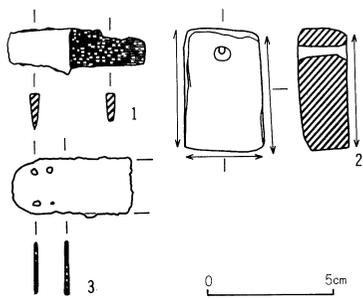
第64図 第7号住居址実測図



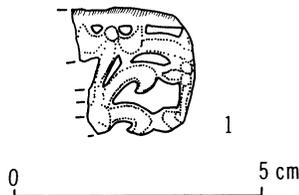
第65図 第7号住居址出土遺物 (A)

ピットは総計6基検出された。このうち、 P_1 ・ P_2 ・ P_3 ・ P_4 の4基が主柱穴と考えられる。また、 P_6 は出入口部の施設に関わるものであろう。

遺物 (第65~67図、図版55)



第66図 第7号住居址出土遺物(B)



第67図 第7号住居址出土遺物(C)

である。

土師器片、黒色土器片、須恵器片、金銅製品、鉄製品、石製品、自然遺物が出土している。

このうち、図示したものは、黒色土器杯1点、手づくね土器2点、金銅製品1点、鉄製品2点、石製品1点

黒色土器杯(第65図1)は、口辺部ヨコナデ、底部ヘラケズリされるものである。手づくね土器(第65図2)は、大ぶりなものである。

金銅製品(第67図1)は、住居址西側の床面から出土した。詳細については後述する。

鉄製品(第66図1・2)は2点あり、1は刀子の基部で木質部が認められる。2は小札と考えられるものである。

砥石(第63図3)は、凝灰岩製で、重さ61gを計る。穿孔は両面からなされている。

自然遺物には炭化材2点がある。広葉樹(散孔材)とクヌギ節の一種と同定された。クヌギ節の一種は、カマド内からの出土である。

本住居址の所産期は、出土土器から古墳時代後期に比定される。

8) 第8号住居址

遺構(第68・69図、図版

13)

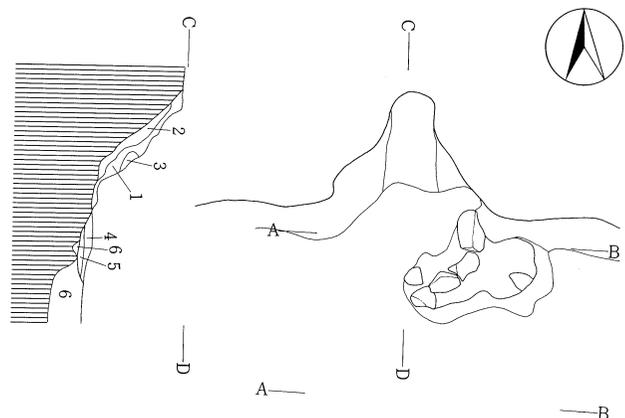
A-3グリッドに位置する。

第1号土坑と重複関係を有し、第1号土坑により、南壁ほぼ中央部を切られている。

東西343cm、南北321cmを測り、平面プランは隅丸方形を呈する。

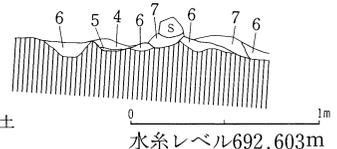
カマドを中心とする主軸方位は、N-6°-Wを示す。

確認面からの壁高は、

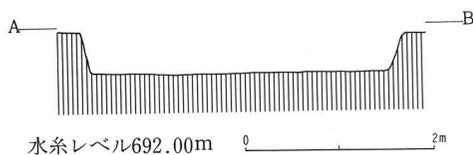
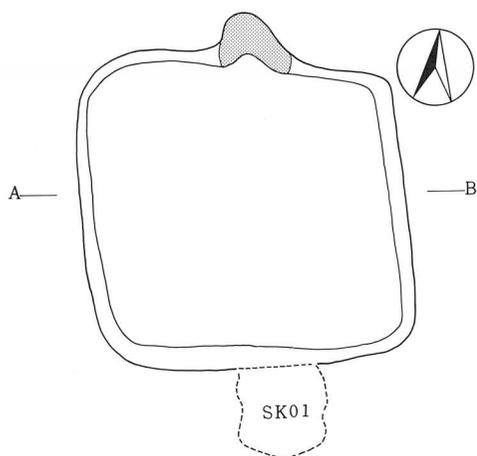


層序説明

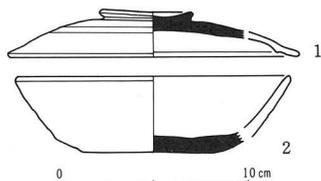
- 第1層 暗赤褐色土層 (2.5YR3/3) 焼土を多く含む
- 第2層 暗赤灰色土層 (2.5YR3/1) 焼土を若干含む
- 第3層 灰褐色土層 (5YR4/2) 粘土ブロック
- 第4層 灰褐色土層 (5YR5/2) 灰を含む
- 第5層 明赤褐色土層 (5YR5/8) 焼土層
- 第6層 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 黒色土と地山の埋土
- 第7層 灰黄褐色土層 (10YR5/2) 粘土の構築土



第68図 第8号住居址カマド実測図



第69図 第8号住居址実測図



第70図 第8号住居址出土遺物

40～45cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが、遺存状態は悪い。

軽石、灰黄褐色の粘土(第7層)により構築されていたものと思われる。

床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。

なお、ピット、周溝といった施設は検出されなかった。

遺物(第70図、図版55)

本住居址からは、土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。

このうち、図示し得たものには、須恵器蓋、杯各1点がある。須恵器蓋(第70図1)は、環状つまみを有するものである。

内面には、かえりが認められる。

須恵器杯(第70図2)は、底部へラキリ後手持ちへラケズリがなされる。

本住居址の所産期は、出土土器から奈良時代前半に比定される。

9) 第9号住居址

遺構(第71・72図、図版13・14)

C-1グリッドに位置する。他遺構との重複関係はないが、拡張が行なわれた住居址で、新・旧の2時期が確認された。

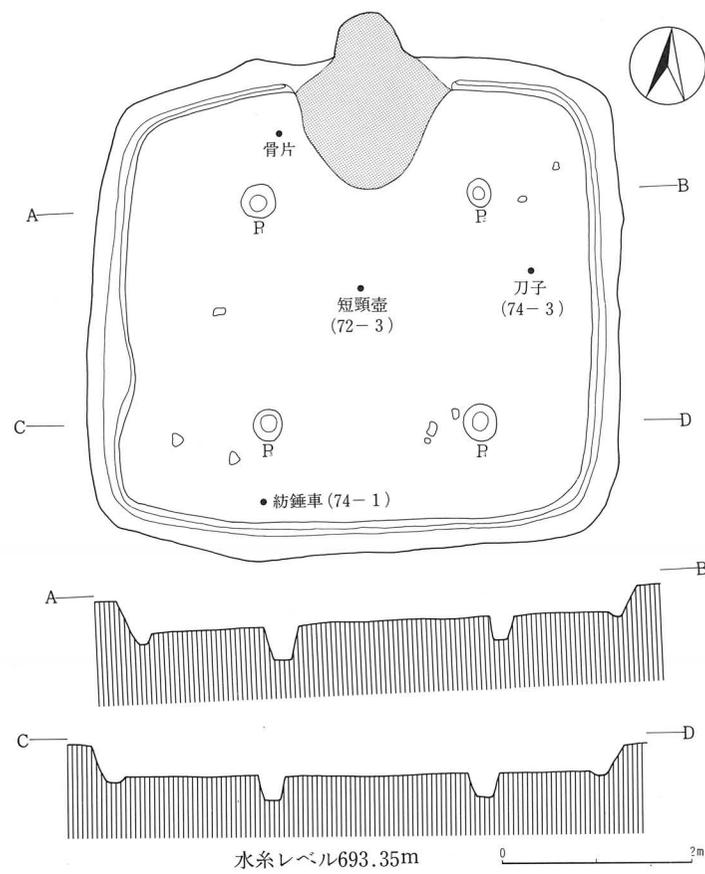
(新段階)

東西560cm、南北524cmを測り、平面プランは隅丸方形を呈する。

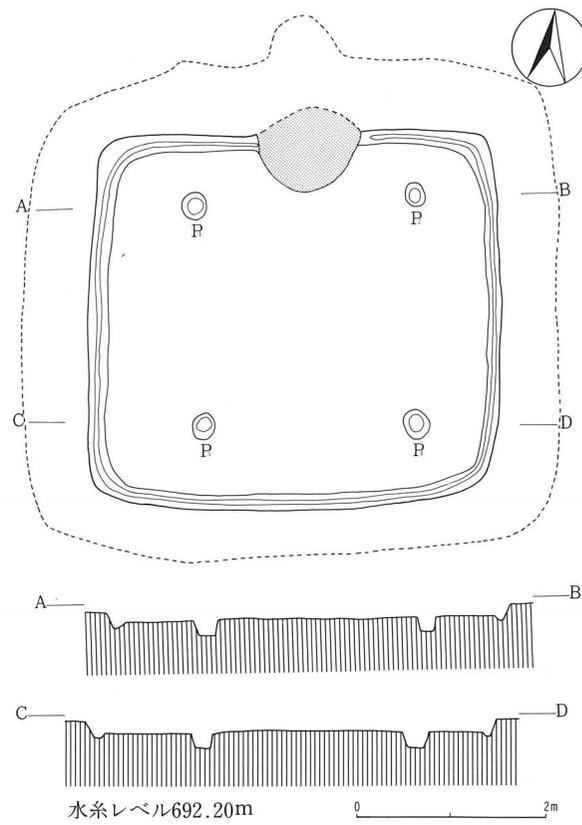
カマドを中心とする主軸方位は、N-6°-Wを示す。確認面からの壁高は、27～35cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は比較的良好であった。

構築に際しては、煙道突出部の壁を舟先状に掘り込み、その後、河原石・安山岩を袖部の補強材として芯に用い、さらに粘土を含むにぶい黄褐色土(第7層)を用材として本体を構築していたものと考えられる。本段階の火床は、土層断面図E-Fに示したように、第8層が該当するもの

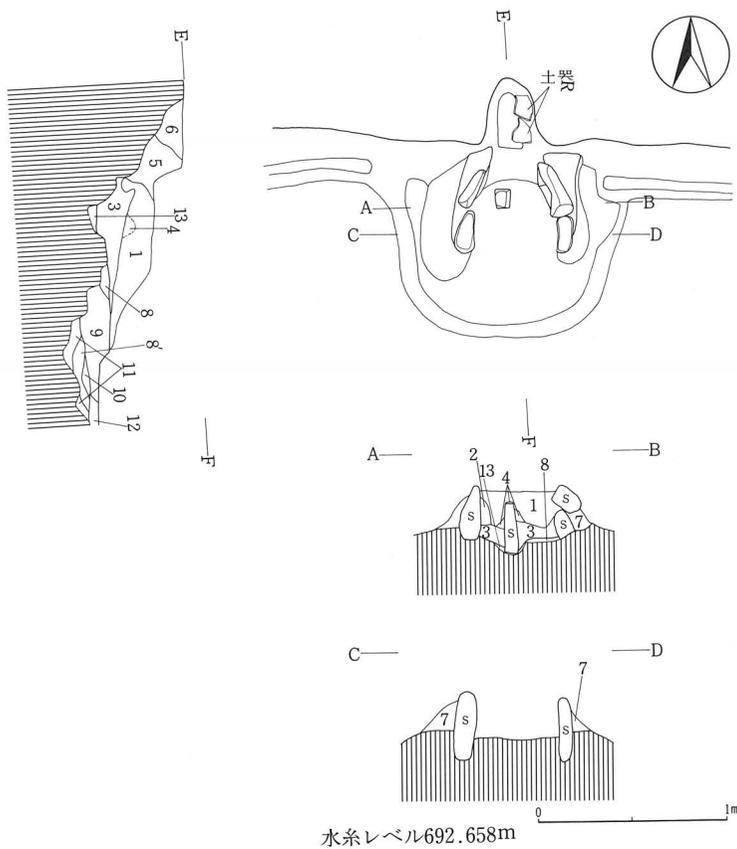


(新)



(旧)

第71図 第9号住居址実測図



第72図 第9号住居址カマド実測図

層序説明

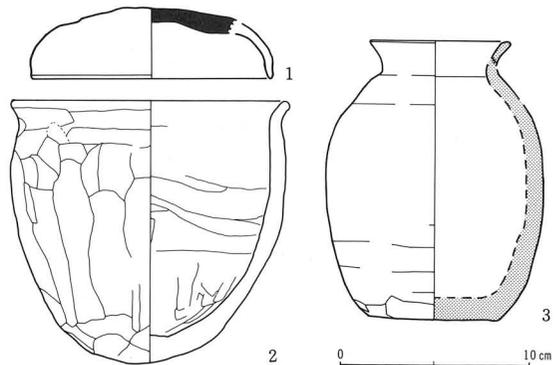
- 第1層 黒褐色土層 (10YR3/2) 住居址覆土に焼土が若干混じる
- 第2層 にふい赤褐色土層 (5 YR4/3) ローム粒子をよく含む
- 第3層 暗赤褐色土層 (2.5YR3/3) 焼土・炭化物をよく含み、粘土を若干含む
- 第4層 黄褐色土層 (2.5Y5/3) 白色粘土を多量に含む—ブロック的
- 第5層 にふい赤褐色土層 (5 YR4/3) 焼土粒子を若干含む
- 第6層 にふい黄褐色土層 (10YR5/4) 焼土等は含まない。地山がブロック状に混じる
- 第7層 にふい黄褐色土層 (10YR4/3) 粘土を含む構築土
- 第8層 明赤褐色土層 (5 YR5/8) 焼土層
- 第8'層 明赤褐色土層 (5 YR5/8) 焼土層 (古い火床)
- 第9層 黒褐色土層 (5 YR2/2) 黒色土、ロームを主体とする埋土に焼土が混じる (構築土)
- 第10層 灰オリブ色土層 (5 Y6/2) 灰層 (粘性有り) —古い火床
- 第11層 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 黒色土と地山の埋土 (構築土)
- 第12層 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 黒色土と地山の埋土 (貼り床)
- 第13層 にふい黄褐色土層 (10YR4/3) 地山主体の埋土

と考えられる。

ピットは、総計4基検出された。いずれも主柱穴である。旧段階の柱穴の位置を変えないで拡張が行なわれている。

床面は、中央部が堅緻であったが、柱木と壁間は軟弱であった。

周溝は、カマド部分を除き、全周している。

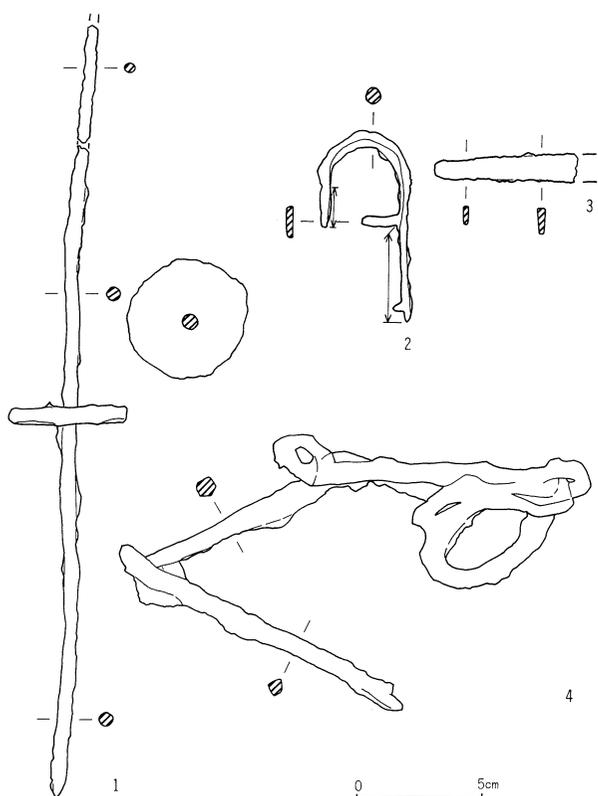


第73図 第9号住居址出土遺物 (A)

(旧段階)

東西440cm、南北400cmを測り、平面プランは隅丸方形を呈する。

残存部の壁高は12cm前後である。したがって、確認面からの深さはおよそ42cmである。



第74図 第9号住居址出土遺物 (B)

カマドは、カマド実測図の土層断面E-Fに示したように、古い火床面(第8'層)が認められており、おそらくこの段階のカマドの火床であろう。したがって、新段階のカマドは、東西間の位置を変えず、火床を約15cm程北へ移動させたと考えられる。

柱穴は、先述したように、4基で位置も新段階と同じである。

また、周溝もカマド部分を除き、全周している。

遺物 (第73・74図、図版55)

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品のほか、自然遺物として、炭化材、骨片が出土している。

このうち、図示したものは、須恵器蓋、土師器小型甕、須恵器短頸壺各1点、鉄製品4点である。

土師器小型甕(第73図2)は、丸底

で、器壁は約1cmと厚い。

須恵器蓋(第73図1)は、ヘラキリ未調整のもので、口径12.6cmを測る。

第73図3の須恵器は、短頸壺としたがあまり例を見ないものである。灰白色(5YR8/2)を呈する。底部付近は、手持ちヘラケズリされる。

鉄製品(第74図)のうち、2・4は、旧段階の住居址で出土している。

1は、紡錘車で、軸長は残存部で30.9cmを測る。

2は、鍔金具で、逆U字状を呈する。先端部内面に木質部が認められる。

3は、刀子で、約5.7cm残存している。

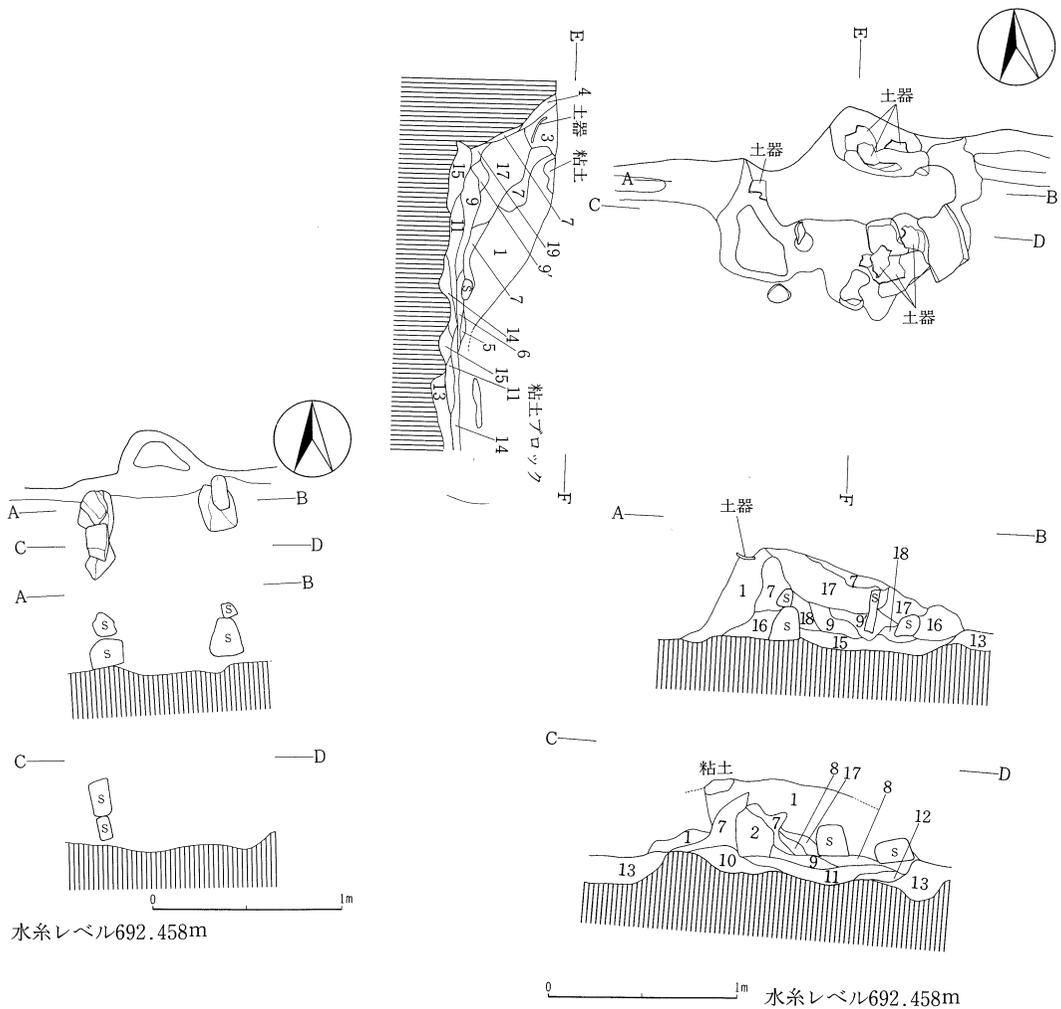
4は、轡で、引手、銜、鏡板が残っている。

炭化材はカマドから出土したもので、コナラ節の一種、広葉樹(散孔材)と同定された。

本住居址の所産期は、古墳時代後期に比定される。

10) 第10号住居址

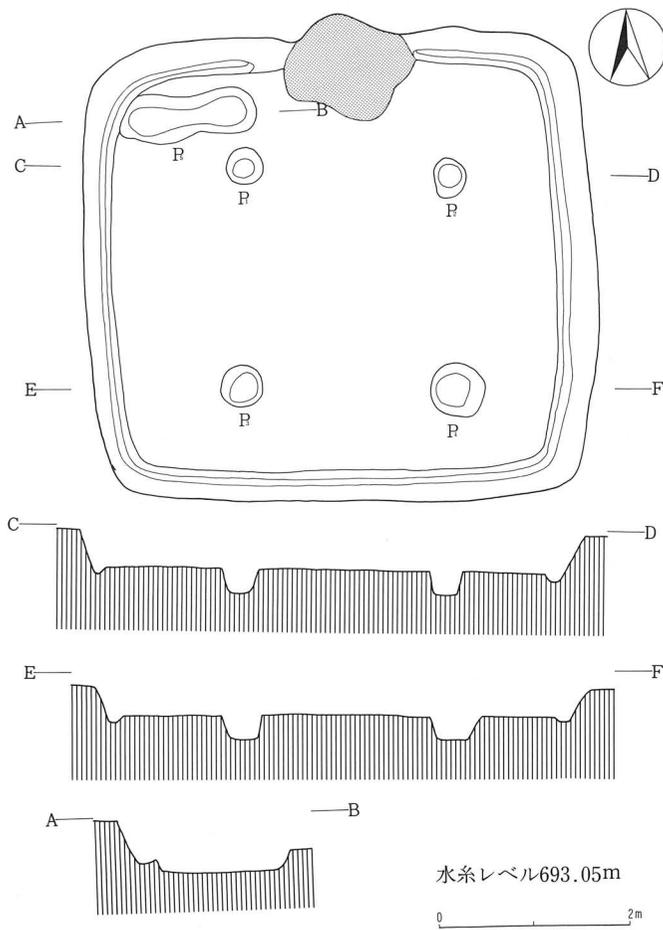
遺構 (第75・76図、図版14)



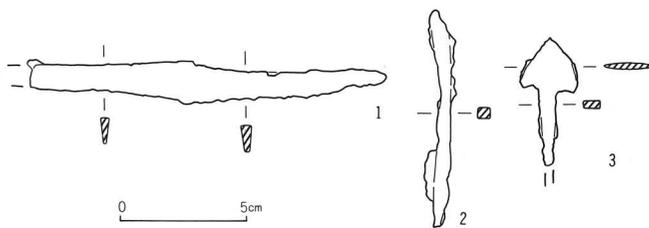
層序説明

- 第1層 黒褐色土層 (10YR3/1) 住居址覆土に焼土と粘土が若干混じる
- 第2層 黒色土層 (10YR2/1) 焼土等は全く含まない
- 第3層 極暗赤褐色土層 (5 YR2/3) と黒色土 (5 YR1.7/1) に焼土が多量に混じる
- 第4層 赤褐色土層 (2.5YR4/6) 構築土の粘土が焼けた層
- 第5層 赤褐色土層 (5 YR4/6) 焼土・粘土をよく含む
- 第6層 黒褐色土層 (5 YR2/1) 炭化物をよく含む。粘性有り
- 第7層 におい黄褐色土層 (10YR5/3) 白色粘土を主体とする構築土
- 第8層 暗赤褐色土層 (2.5YR3/4) 焼土を多量に含み、炭化材を少量含む
- 第9層 灰黄褐色土層 (10YR5/2) 焼土・炭化材は含まない。粘性有り
- 第9'層 第9層が焼けたもの
- 第10層 におい黄褐色土層 (10YR5/4) 炭化材を少量含む。粘性無し
- 第11層 明赤褐色土層 (2.5YR5/8) 焼土層
- 第12層 におい赤褐色土層 (5 YR4/3) 焼土を若干含む
- 第13層 地山のにおい黄褐色土層 (10YR6/4) と黒色土を主体とする埋土 (貼り床)
- 第14層 極暗赤褐色土層 (2.5YR2/3) 焼土をよく含む
- 第15層 黒褐色土層 (5 YR2/1) 焼土・炭化材を若干含む
- 第16層 におい黄褐色土層 (10YR5/4) 炭化材を少量含む (構築土)
- 第17層 極暗赤褐色土層 (2.5YR2/4) 焼土・炭化材をよく含む
- 第18層 極暗赤褐色土層 (2.5YR2/4) 構築土
- 第19層 暗褐色土層 (10YR3/4) ロームを含む

第75図 第10号住居址カマド実測図



第76図 第10号住居址実測図



第77図 第10号住居址出土遺物 (A)

したもの、土師器杯、盤、甕、鉄製品3点がある。

2は、口径24cmを測る。3・4は、長胴の甕である。

鉄製品 (第77図) には、刀子 (1)、鉄鏝 (3) のほか、工具と考えられるもの (2) がある。

炭化材はカマドから3点出土しており、3点ともクヌギ節の一種と同定された。

本住居址の所産期は、奈良時代前半に比定される。

D-2・3グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。東西543cm、南北500cmを測り、平面プランは隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、 $N-2^{\circ}-E$ を示す。

確認面からの壁高は、28~41cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。

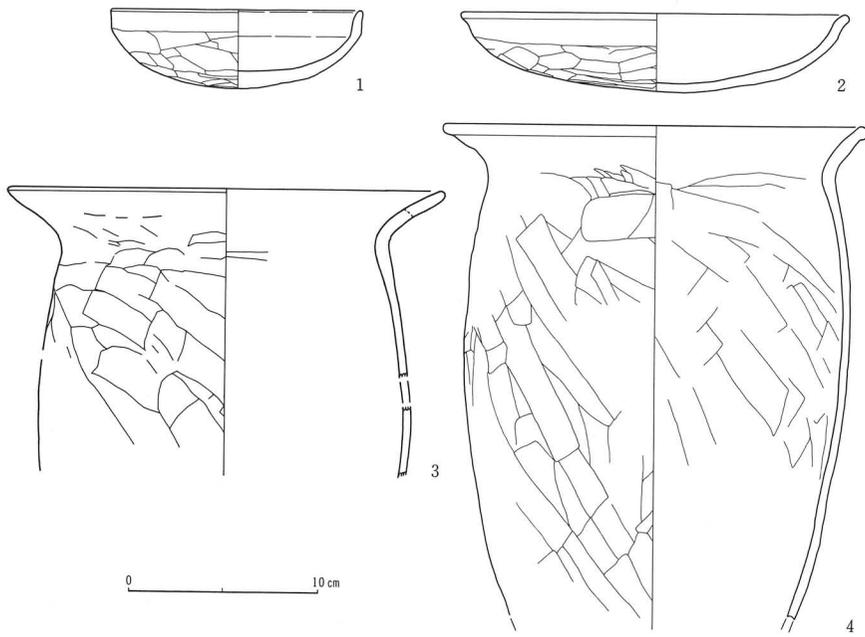
加工した軽石を袖芯としてにぶい黄褐色土 (第7・16層) を用いて構築されていたものと思われる。

床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。

ピットは、総計5基検出された。このうち、 $P_1 \sim P_4$ が主柱穴、 P_5 は貯蔵穴と考えられる。周溝は、カマド部分を除き、全周している。

遺物 (第77・78図、図版55・56)

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品のほか、自然遺物として炭化材、骨片が出土している。このうち、図示



第78図 第10号住居址出土遺物 (B)

11) 第11号住居址

遺構 (第79~81図、図版14・15)

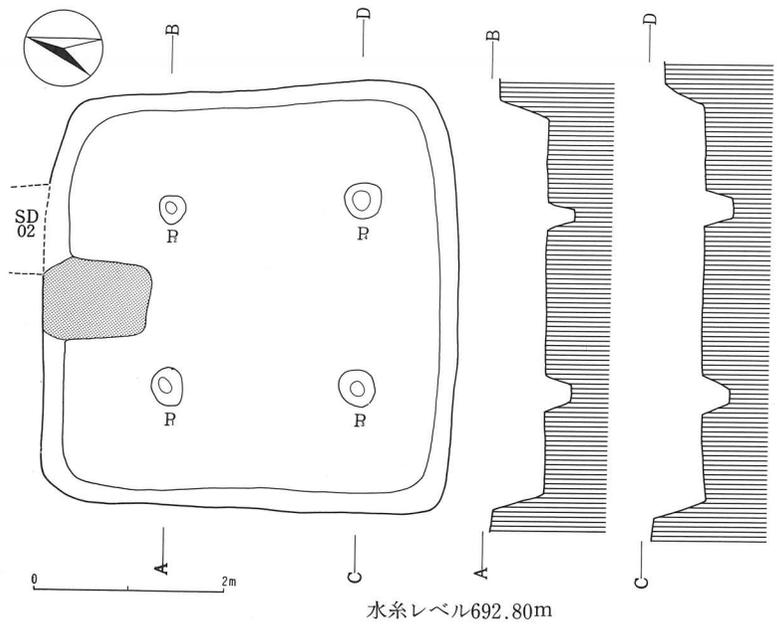
B-2グリッドに位置する。

第2号溝址と重複関係を有し、第2号溝址により切られている。

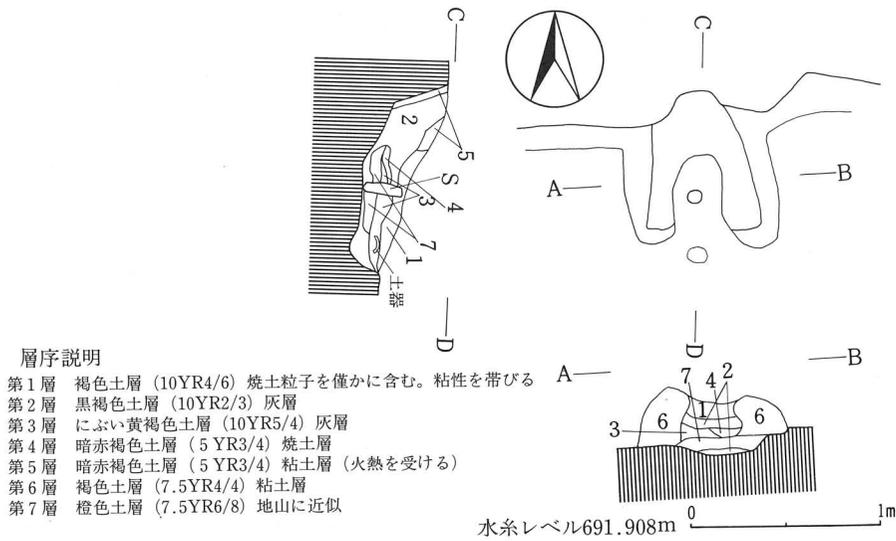
第9号住居址と同じく拡張が行なわれた住居址で、新旧の2時期が確認された。

(新段階)

東西446cm、南北429cmを測り、平面プランは隅丸方形を呈する。



第79図 第11号住居址実測図 (新)



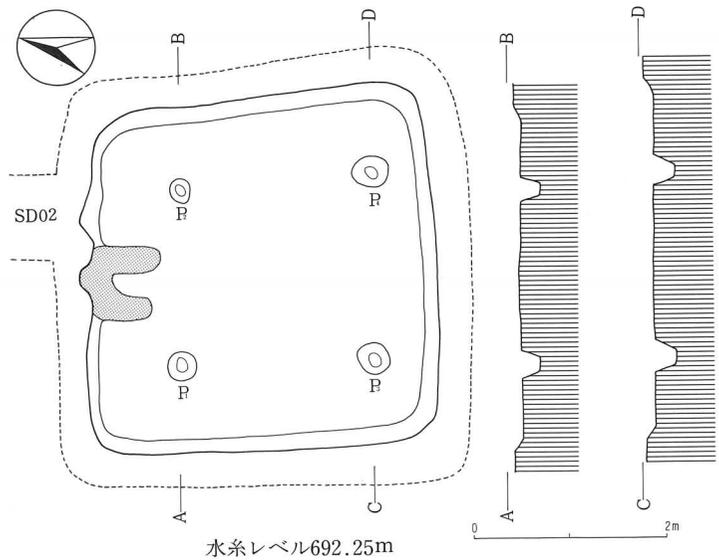
第80図 第11号住居址カマド実測図

カマドを中心とする主軸方位は、 $N-16^{\circ}-W$ を示す。

確認面からの壁高は、41~55cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は比較的良好であった。

褐色の粘土(第6層)を用いて、構築されていたものと思われる。また、火床部には、加工した軽石が支脚石として用いられていた。



第81図 第11号住居址実測図 (旧)

床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。

ピットは、総計4基検出された。4基とも支柱穴と考えられる。

周溝は、カマド部分を除き、全周している。

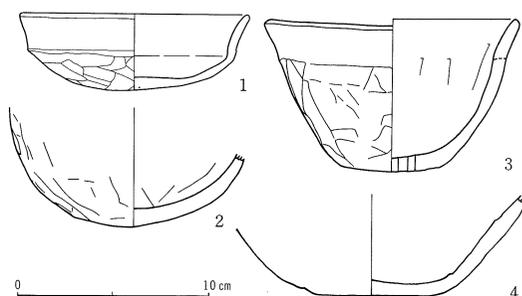
(旧段階)

東西379cm、南北354cmを測り、平面プランは隅丸方形を呈する。

残存部の壁高は、8 cm前後である。確認面からの深さはおよそ60cmである。

カマドは、カマド実測図の土層断面A-B、C-Dに示したように地山に近似する第7層下に灰層が認められることから、旧段階の火床ではないかと考えられる。

柱穴は、先述したように、4基で、位置も新段階と同じである。また、周溝もカマド部分を除き、全周している。



第82図 第11号住居址出土遺物

遺物（第82図、図版56）

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。このうち、図示したものに、土師器杯1点、甑1点、甕2点である。

杯は、外稜口辺を有するものである。甑は、鉢形を呈するもので、底部に9孔を有する。

甕2点は、いずれも底部である。2は、長胴の甕の底部であろう。

本住居址の所産期は、古墳時代後期に比定される。

12) 第12号住居址

遺構（第83・84図、図版15）

B・C-1グリッドに位置する。

第11・14号住居址、第43号掘立柱建物址、第1号溝址と重複関係を有し、第11・14号住居址を切り、第43号掘立柱建物址、第1号溝址により切られている。

東西693cm、南北671cmを測り、平面プランは隅丸方形を呈する。カマドを中心とする主軸方位は、N-9°-Wを示す。

確認面からの壁高は、36~62cmを測る。

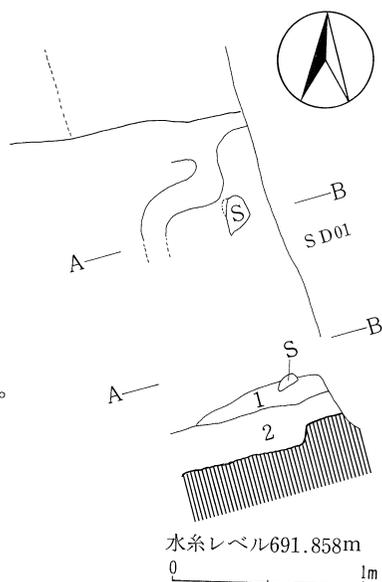
カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。第1号溝址に切られていることもあり、遺存状態は悪い。次の2層に区分される。第1層は、粘土層でにぶい黄橙色（10YR6/3）を呈する。

第2層は、黒褐色土（10YR3/1）とにぶい褐色土（7.5YR7/4）がブロック状に混じる埋土である。

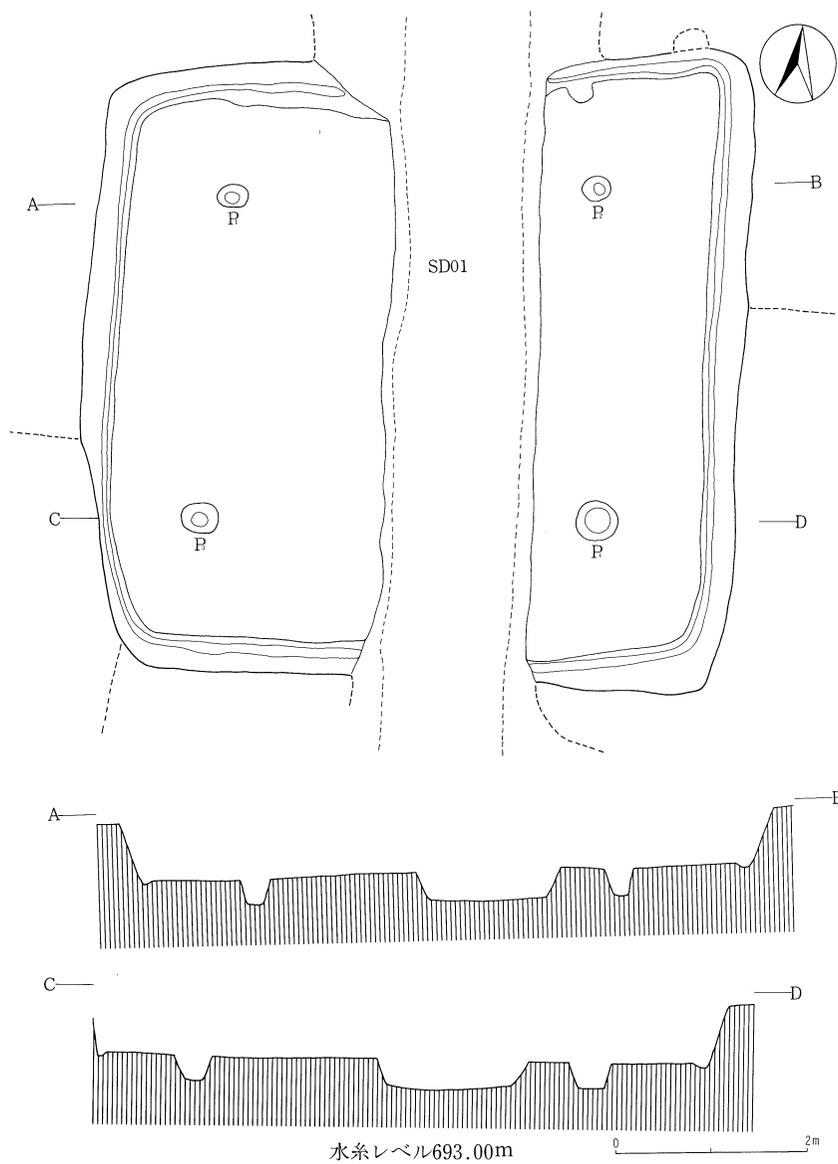
床面は、中央部が堅緻であったが壁際では軟弱であった。

ピットは総計4基検出された。4基とも主柱穴である。

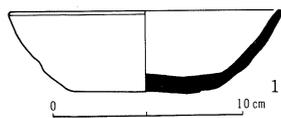
周溝は、カマド部分を除き全周している。



第83図 第12号住居址カマド実測図



第84図 第12号住居址実測図



第85図 第12号住居址出土遺物

遺物（第85図、図版56）
 土師器片、黒色土器片、須恵器片、緑釉陶器片が出土している。このうち図示し得たものは、須恵器杯1点である。
 須恵器杯は、灰黄色を呈し、底部へラキリ後、手持ちへラケズリがなされるものである。

本住居址の所産期は、奈良時代に比定される。

13) 第13号住居址

遺構 (第86図、図版15)

C-2グリッドに位置する。

第14号住居址と重複関係を有し、第14号住居址により切られている。

東西296cm、南北258cmを測り、平面プランは隅丸長方形を呈する。確認面からの壁高は、19~27cmを測る。

カマドは明確でなく、南北軸の方位は、N-1°-Wを示す。

床面は、中央部が堅緻であったが壁際には軟弱であった。ピットは総計4基検出され、いずれも支柱穴である。周溝は検出されなかった。

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土しているが図示し得るものはない。

本住居址の所産期は、出土土器片から奈良時代と考えられる。

14) 第14号住居址

遺構 (第87図、図版16)

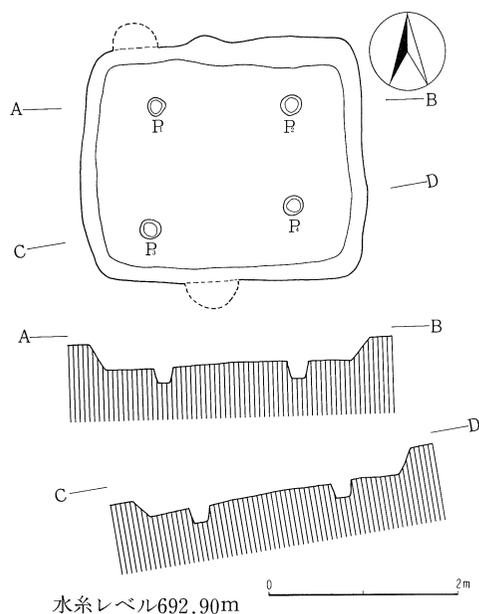
C-2グリッドに位置する。第12・13号住居址、第15号掘立柱建物址と重複関係を有し、第12・13号住居址、第15号掘立柱建物址に切られている。

東西487cm、南北は残存部で495cmを測り、平面プランはおそらく、隅丸方形プランを呈すると考えられる。

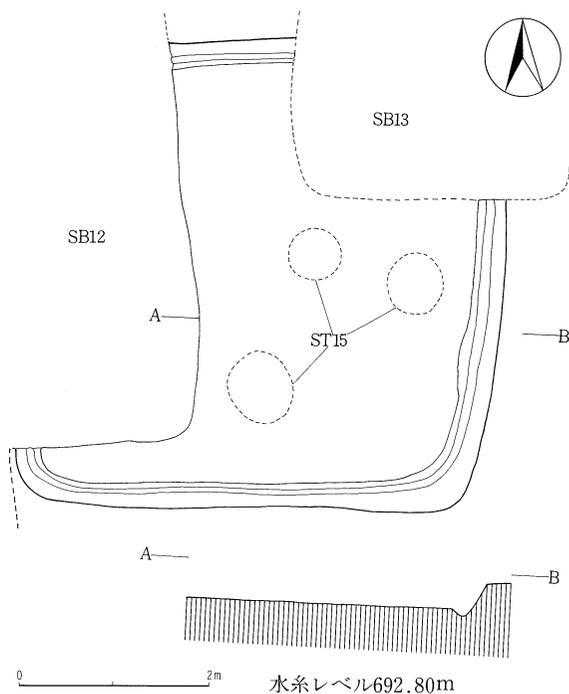
南北軸の方位は、N-1.5°-Eを示す。

確認面からの壁高は、30~42cmを測る。

カマドは、おそらく北壁に設けられ



第86図 第13号住居址住居址実測図



第87図 第14号住居址住居址実測図

ていたものと思われる。

ピットは、検出されなかった。周溝は、残存部からすると全周していたものと思われる。

遺物

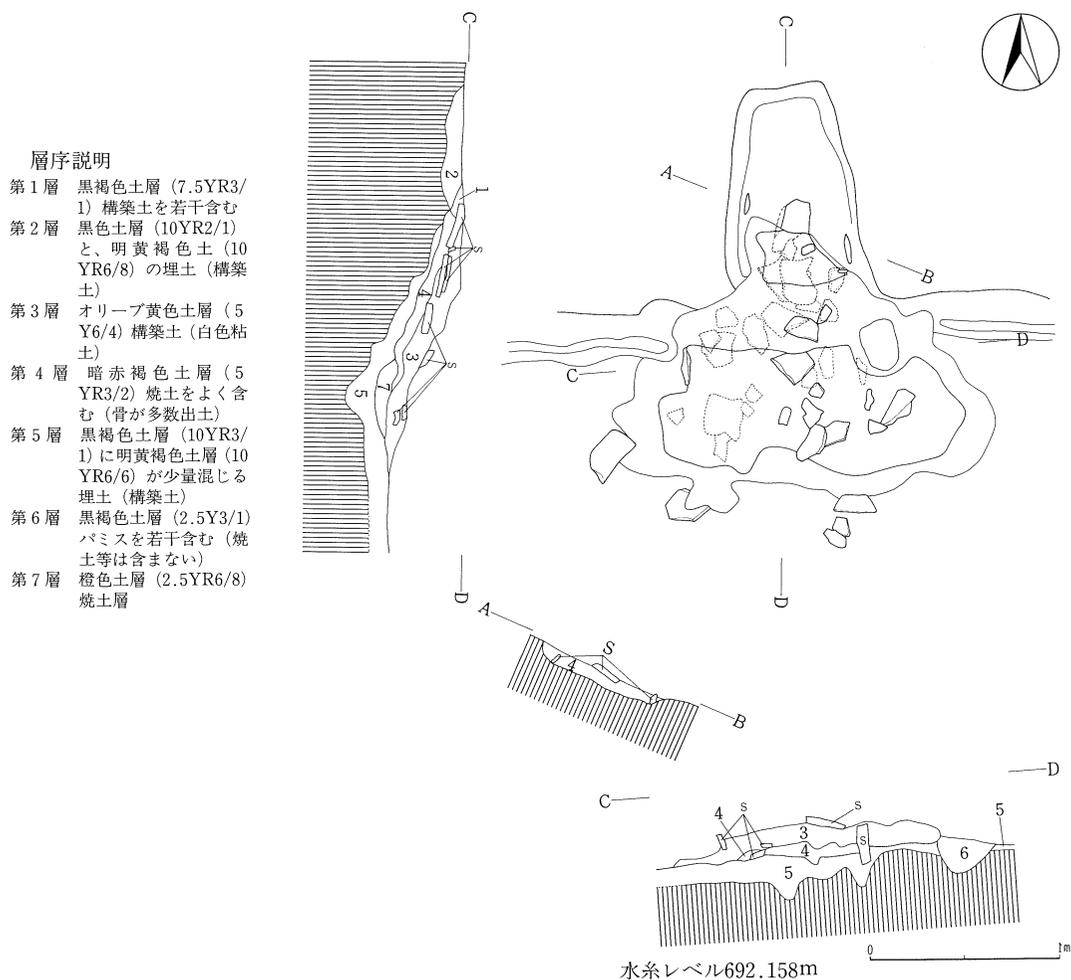
土師器片が出土しているが、図示し得るものは皆無である。

本住居址の所産期は、出土土器片、重複関係から古墳時代後期に比定される。

15) 第15号住居址

遺構 (第88・89図、図版16)

C-2・3グリッドに位置する。第13・27号掘立柱建物址と重複関係を有し、第13・27号掘立柱建物址により切られている。カマドを中心とする主軸方位は、N-6°-Eを示す。



第88図 第15号住居址カマド実測図

確認面からの壁高は、
38～39cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。

遺存状態は、悪い。

加工した軽石、オリーブ黄色を呈する粘土（第3層）により構築されていたものと考えられる。

床面は、中央部が堅緻であったが壁際では軟弱であった。

ピットは、総計4基検出された。4基とも支柱穴である。

周溝は、全周せず、東・西・北壁下で認められ、南壁下では認められなかった。

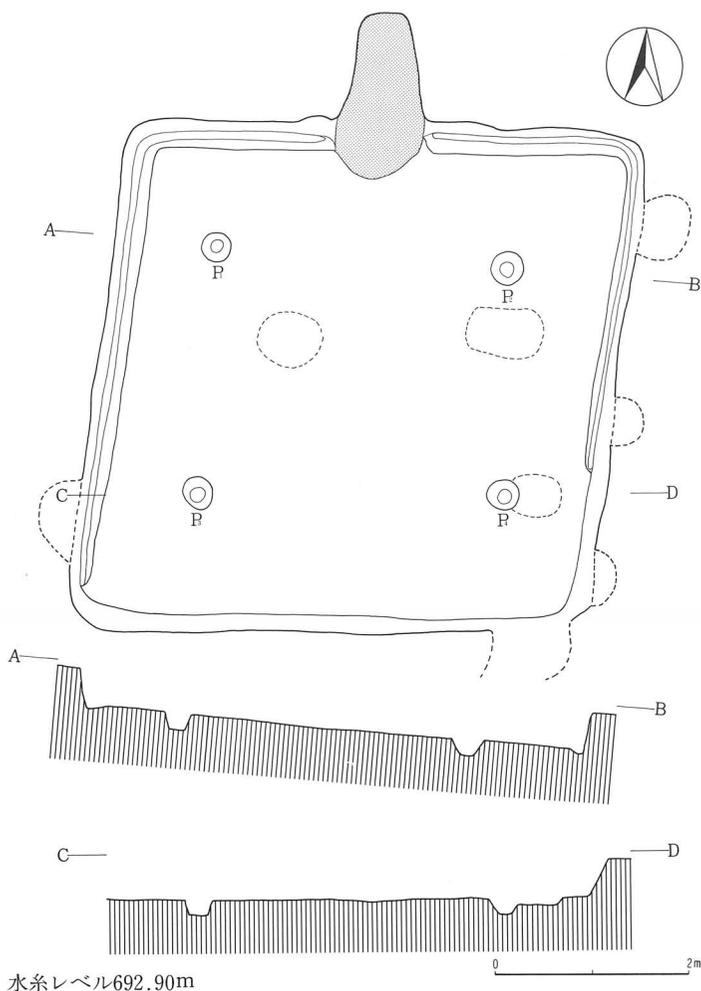
遺物（第90図、図版56）

土師器片、黒色土器片、須恵器片のほか、自然遺物として骨片が出土している。

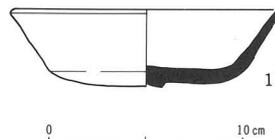
このうち、図示したものは、須恵器杯1点である。

須恵器杯は、灰白色を呈し、底部へラキリ後外周を手持ちへラケズリされる。

本住居址の所産期は、奈良時代に比定される。



第89図 第15号住居址住居址実測図



第90図 第15号住居址出土遺物

16) 第16号住居址

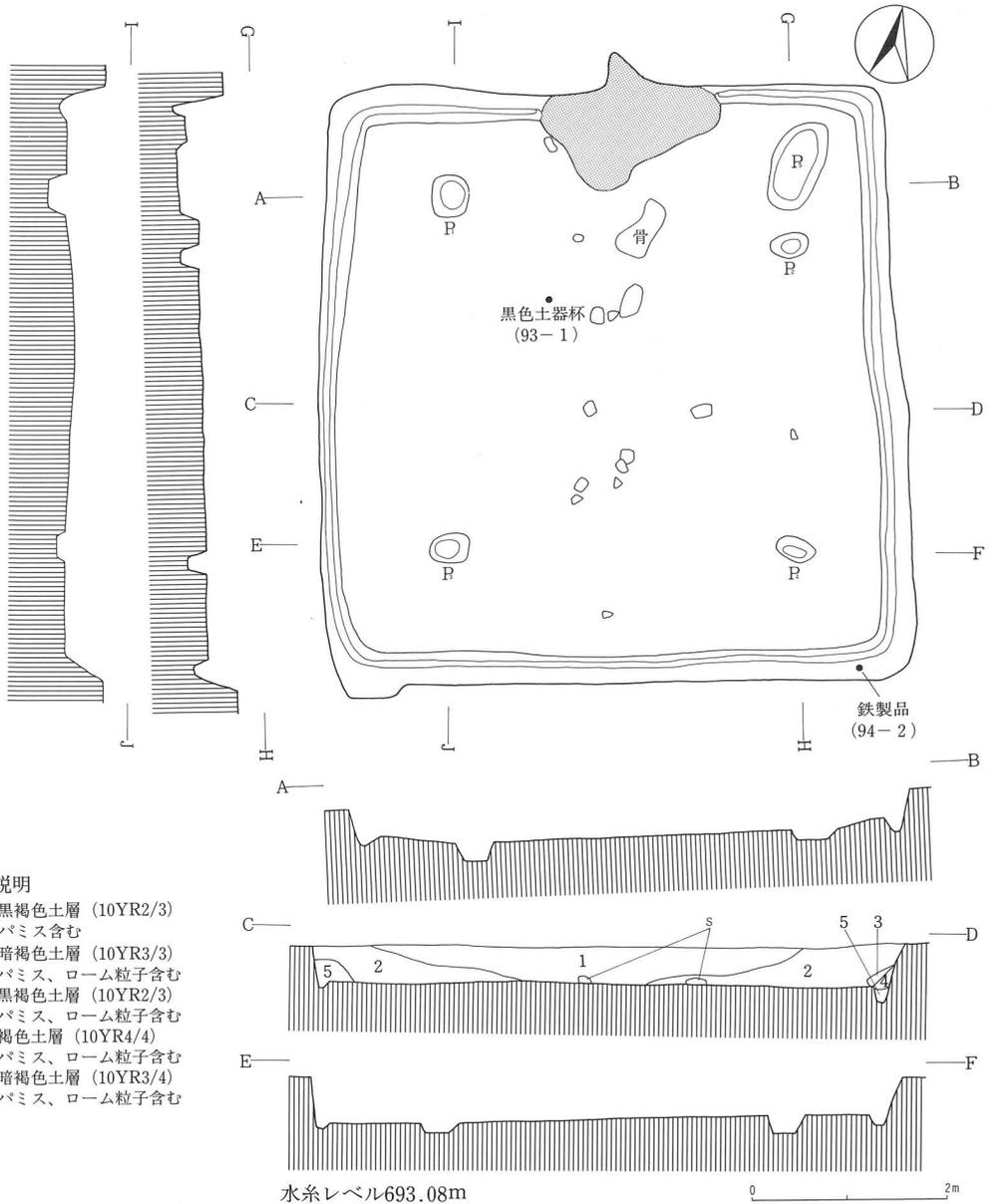
遺構（第91・92図、図版16）

C・D-1・2グリッドに位置する。南西コーナーに、掘立柱建物址の柱穴が存在した可能性がある。

東西620cm、南北636cmを測り、平面プランは隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N-13°-Wを示す。確認面からの壁高は、29~50cmを測る。

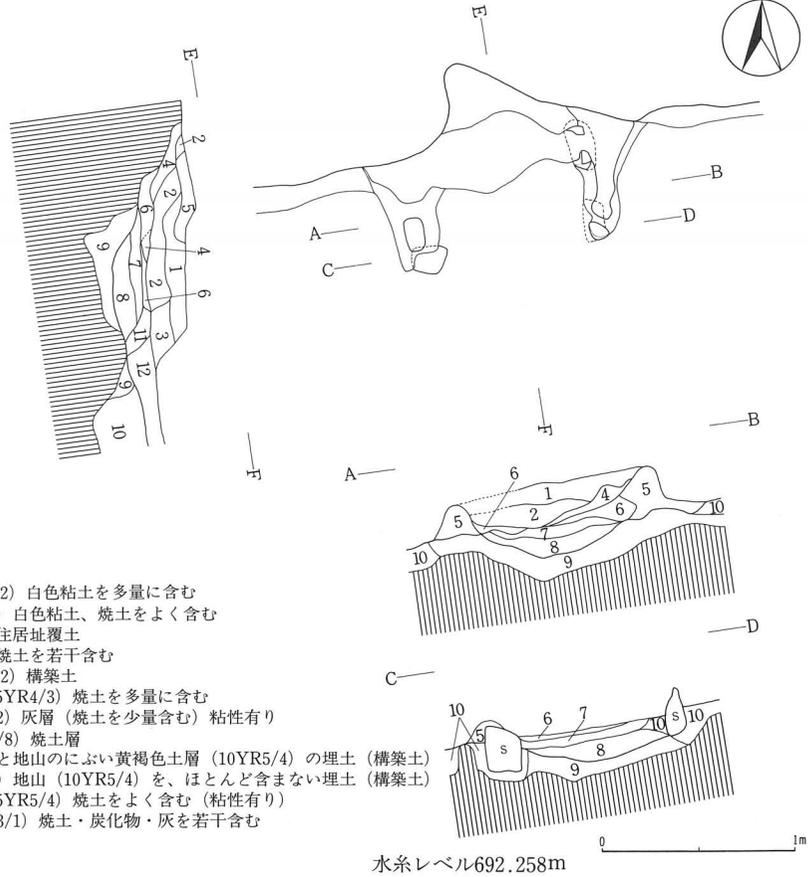
カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は比較的良好であった。煙道部を舟先状に掘り込み、袖部は加工した軽石を芯の補強材に用い、暗灰黄色土 (2.5Y4/2) により構築されているものと思われる。床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。ピットは、総計4基検出された。4基とも支柱穴である。周溝は、カマド部分を除き全周している。



第91図 第16号住居址実測図

遺物 (第93・94、図版56)

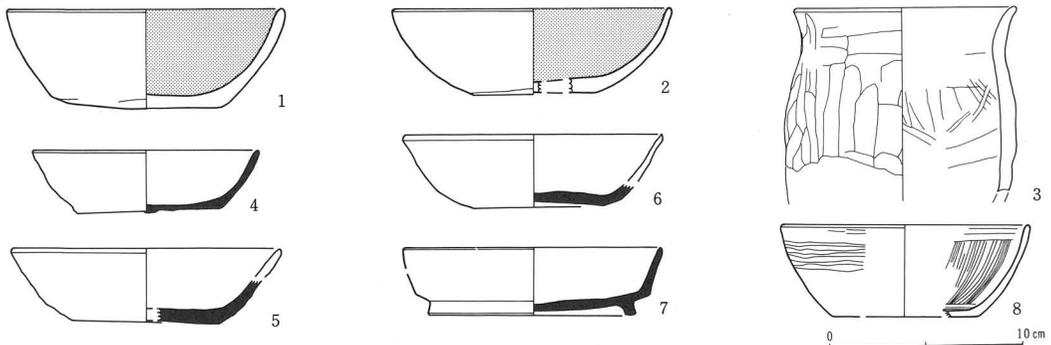
土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、石製品、鉄滓の外、自然遺物として炭化材、骨片が出土している。図示したものは、黒色土器杯2点、須恵器杯3点、須恵器高台付杯、土師器甕、杯、各1点、



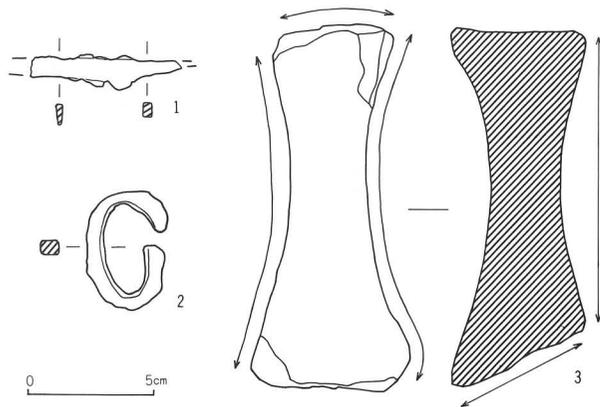
層序説明

- 第1層 暗灰黄色土層 (2.5Y4/2) 白色粘土を多量に含む
- 第2層 灰褐色土層 (5 YR4/2) 白色粘土、焼土をよく含む
- 第3層 黒色土層 (10YR2/1) 住居址覆土
- 第4層 黒色土層 (10YR2/1) 焼土を若干含む
- 第5層 暗灰黄色土層 (2.5Y4/2) 構築土
- 第6層 におい赤褐色土層 (2.5YR4/3) 焼土を多量に含む
- 第7層 灰褐色土層 (7.5YR6/2) 灰層 (焼土を少量含む) 粘性有り
- 第8層 明赤褐色土層 (5 YR5/8) 焼土層
- 第9層 黒色土層 (10YR2/1) と地山のにおい黄褐色土層 (10YR5/4) の埋土 (構築土)
- 第10層 黒褐色土層 (10YR3/2) 地山 (10YR5/4) を、ほとんど含まない埋土 (構築土)
- 第11層 におい赤褐色土層 (2.5YR5/4) 焼土をよく含む (粘性有り)
- 第12層 暗赤灰色土層 (2.5YR3/1) 焼土・炭化物・灰を若干含む

第92図 第16号住居址カマド実測図



第93図 第16号住居址出土遺物 (A)



第94図 第16号住居址出土遺物 (B)

砥石は、砂岩製で、重さ437gを計る。

炭化材は、カマドから出土したもので、広葉樹（散孔材）と同定された。

本住居址の所産期は、奈良時代後葉と考えられる。

鉄製品2点、砥石1点である。

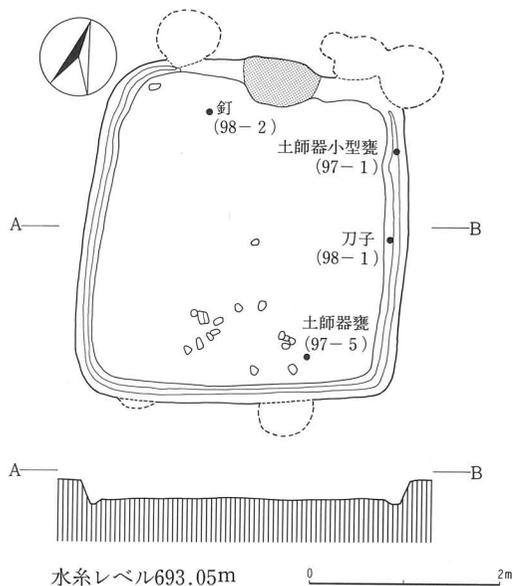
第93図8は、甲斐型の土師器坏で市内では初見である。体部外面へラミガキ、内面には細い放射状の暗文を施す。約1/3からの推定値であるが、口径12.8cm、器高4.9cm、底径7.55cmを測る。胎土、調整から、搬入品と考えられる。

鉄製品のうち、1は刀子、2は環状のものであるが、用途については不明である。

17) 第17号住居址

遺構 (第95・96図、図版17)

C・D-2グリッドに位置する。第21号掘立柱建物址と重複関係を有し、第21号掘立柱建物址に切られている。



第95図 第17号住居址実測図

東西346cm、南北365cmを測り、平面プランは隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N-19°-Wを示す。

確認面からの壁高は、20cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。

遺存状態は悪い。暗褐色の粘土を用いて構築されていたと思われる。

床面は壁際を除き、全体的に堅緻であった。

柱穴は、検出されなかった。

周溝は、カマド部分を除き、全周する。

遺物 (第97・98図、図版56・57)

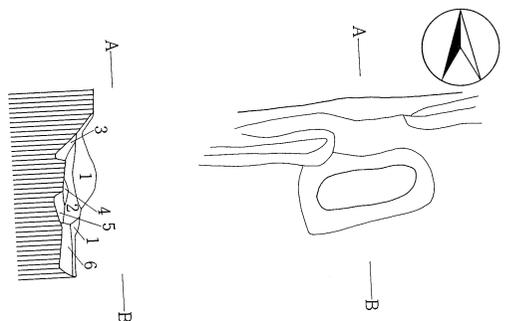
土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製

品、鉄滓のほか、自然遺物として炭化材がある。

このうち、図示したものは、土師器小型甕3点、甑1点、長胴の甕2点、鉄製品2点である。

甑は、鉢形を呈するもので底部に6孔（焼成前）を有する。

長胴の甕には、器壁が厚く、外面縦方向にヘラ



層序説明

- 第1層 暗褐色土層 (10YR3/4) 粘土層
- 第2層 黒褐色土層 (7.5YR2/2) パミス、焼土粒子含む
- 第3層 褐色土層 (7.5YR4/4) パミス、焼土粒子含む
- 第4層 黄褐色土層 (10YR5/6) 灰層
- 第5層 明褐色土層 (7.5YR5/8) 焼土
- 第6層 暗褐色土層 (10YR3/4) パミスの他、わずかに焼土粒子含む

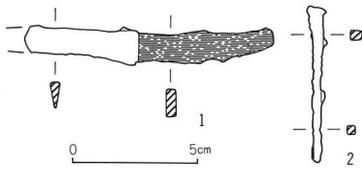
水系レベル692.358m

0 1m

第96図 第17号住居址カマド実測図



第97図 第17号住居址出土遺物 (A)



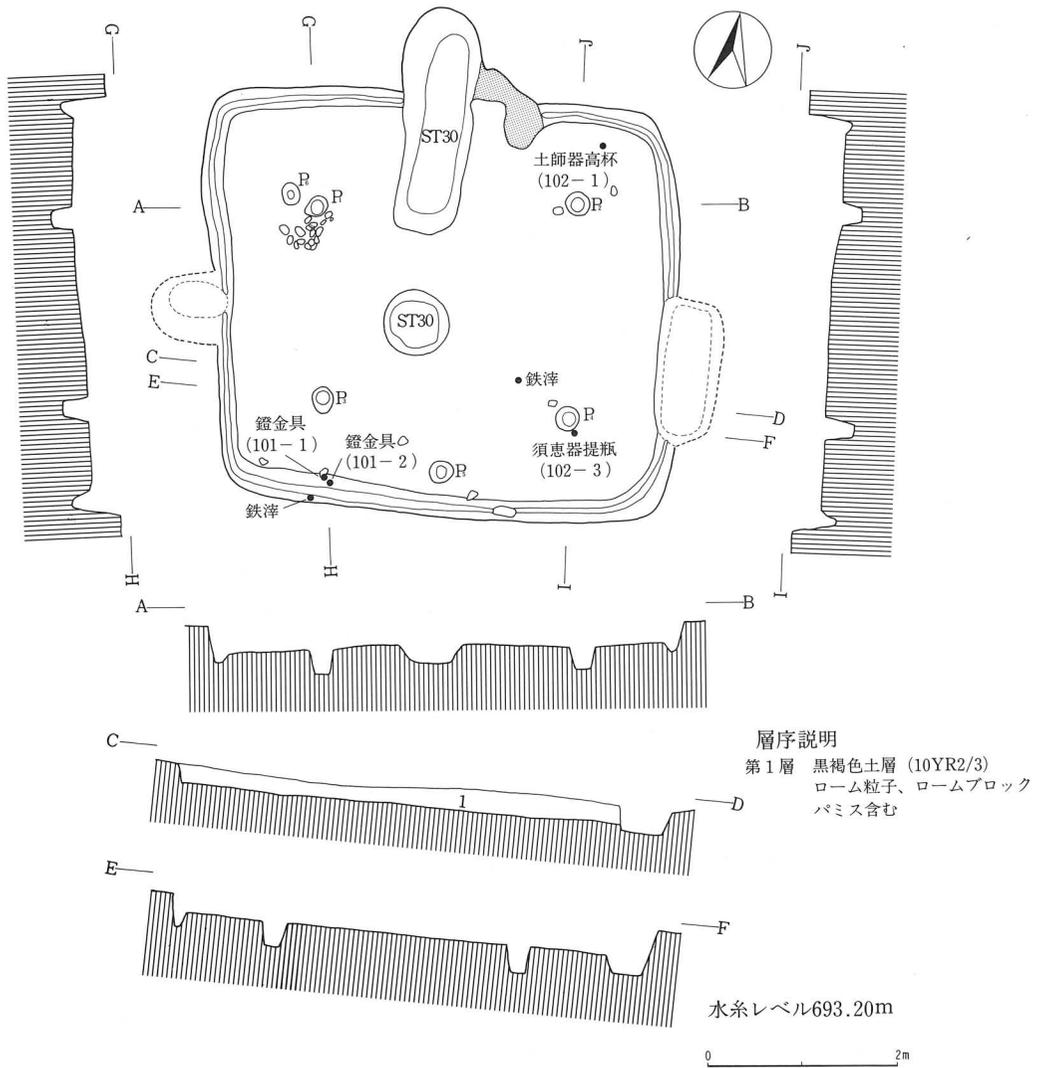
第98図 第17号住居址出土遺物 (B)

ケズリされる従来からのもの(5)と、いわゆる武蔵型の甕(6)の2種が認められる。鉄製品は、木質部の残る刀子の基部(1)と釘(2)である。

炭化材は、住居址南部から出土しており、広葉樹(散孔材)と同定された。

本住居址の所産期は、古墳時代後期に比定される。

18) 第18号住居址



第99図 第18号住居址実測図

遺構（第99・100図、
図版17）

D-2グリッドに
位置する。

第30号掘立柱建物
址と重複関係を有し、
第30号掘立柱建物址
により切られている。

東西443cm、南北
444cmを測り、平面プ
ランは隅丸方形を呈
する。

カマドを中心とす
る主軸方位は、N-
9°-Wを示す。

確認面からの壁高
は20~40cmを測る。

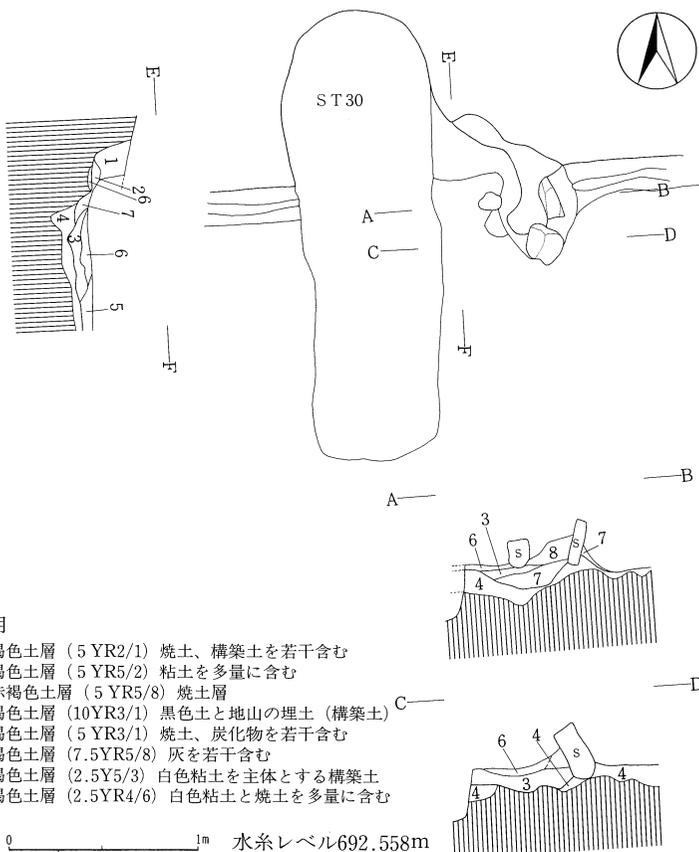
カマドは、北壁ほ
ぼ中央部に位置する。

加工した軽石を袖
芯とし、黄褐色の粘
土（第7層）を用いて構築されていたと考えられる。

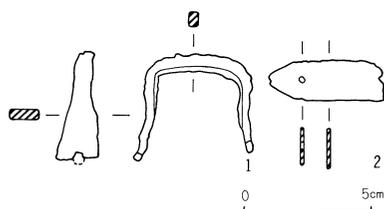
床面は、柱穴を結ぶ線の範囲内では堅緻であった。

ピットは総計6基検出され、P₁~P₄が柱穴と考えられ
る。また、P₆は出入口部の施設に関連するものであろう。

周溝は、カマド部分を除き、全周する。



第100図 第18号住居址カマド実測図



第101図 第18号住居址出土遺物 (A)

遺物（第101・102図、図版57）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、鉄滓の外、自然遺物として炭化材が出土している。
このうち、図示したものに、土師器高杯、甕、須恵器提瓶各1点、鉄製品2点がある。

高杯は、椀状の杯部を有するもので、脚部以下を欠く。甕は、長胴のもので、ハケメとヘラケ
ズリがなされる。口径と胴部最大径がほぼ同じ値を示す。提瓶は、市内では初見である。底部を
僅かに欠損する。

鉄製品は2点あり、1は、逆U字形を呈する鍔金具である。2は、鍔金具の先端部であろう。

炭化材は、カマドから出土したもので、クヌギ節の一種と同定された。

本住居址の所産期は、古墳時代後期と考えられる。



第102図 第18号住居址出土遺物 (B)

19) 第19号住居址

遺構 (第103・104図、図版17)

D-2グリッドに位置する。

第14号掘立柱建物址と重複関係を有し、第14号掘立柱建物址により切られている。

東西448cm、南北418cmを測り、平面プランは隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N-1°-Wを示す。

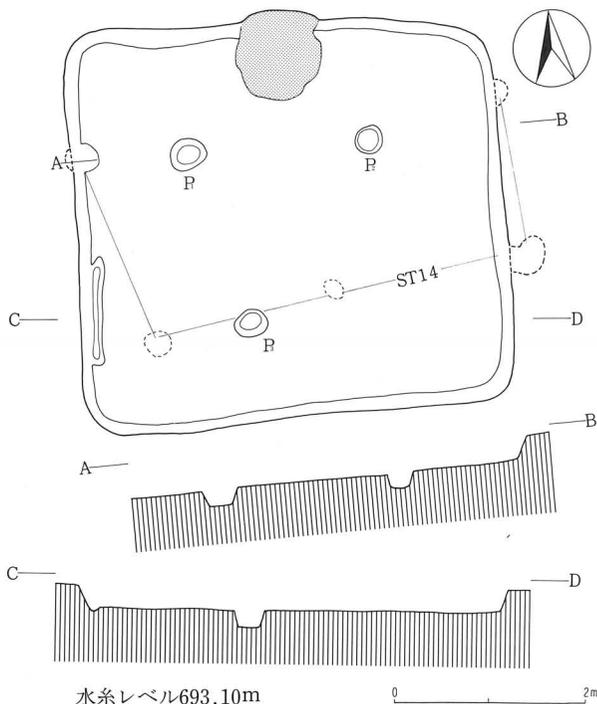
確認面からの壁高は、23~24cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。灰黄褐色、にぶい黄褐色の粘土により構築されていたものと思われる。

床面は、中央部が堅緻であったが壁際では軟弱であった。

ピットは総計3基検出された。いずれも柱穴と考えられる。

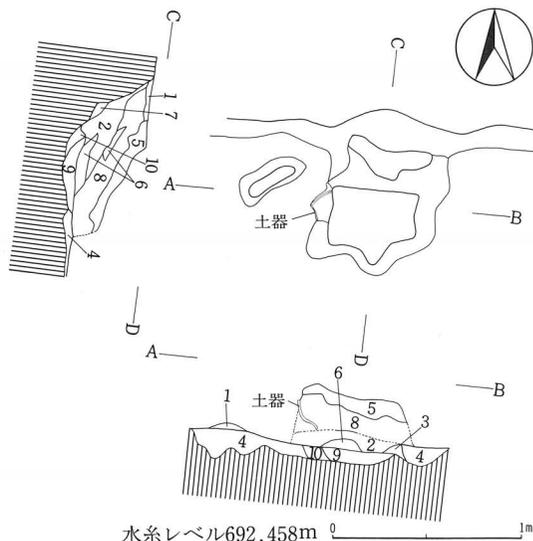
周溝は、西壁下で一部認められた。



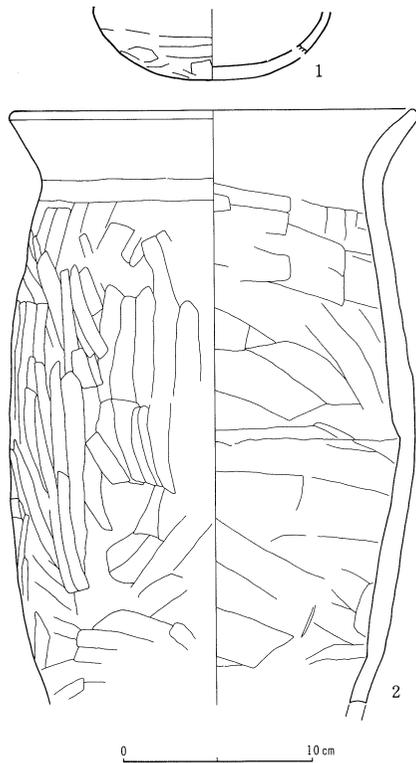
第103図 第19号住居址実測図

層序説明

- 第1層 極暗赤褐色土層 (5 YR2/3) 焼土、構築土を含む
- 第2層 黒褐色土層 (10YR3/2) 焼土、炭化物を若干含む
- 第3層 にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) ロームを多く含む
- 第4層 黒褐色土層 (10YR2/2) に明黄褐色土層 (10YR6/6) が混じる埋土 (貼り床)
- 第5層 灰黄褐色土層 (10YR5/2) 白色粘土 (構築土) を多量に含む
- 第6層 にぶい黄褐色土層 (10YR6/3) 構築土 (白色粘土)
- 第7層 明黄褐色土層 (10YR6/6) ロームが多量に混じる層
- 第8層 にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) 住居址覆土
- 第9層 明赤褐色土層 (2.5YR5/8) 焼土層
- 第10層 黒色土層 (7.5YR1.7/1) と橙色土層 (7.5YR6/8) を主体とする埋土



第104図 第19号住居址カマド実測図



第105図 第19号住居址出土遺物

遺物（第105図、図版57・58）

本住居址からは、土師器片、黒色土器片、須恵器片、骨片が出土している。

このうち、図示したものには、土師器杯、甕がある。

土師器杯(1)は、口縁部を欠くが素縁のものと考えられる。丸底で、体部～底部外面はヘラケズリされ、内面および口辺部外面はヨコナデがなされる。

甕(2)は、長胴を呈するもので、底部を欠く。

口径と胴部最大径はほぼ同じ数値を示している。

また、器壁は約1cm前後と厚い。

口辺部は「く」の字状に外反するが、外反度は弱い。器高は残存値であるが、31.8cmを測る。

肩部～胴部外面はヘラケズリがなされ、内面はヘラナデされる。

胎土に金雲母を含む点、特徴的である。

本住居址の所産期は、古墳時代後期に比定されよう。

20) 第20号住居址

遺構（第106・107図、図版18）

D-2・3グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西606cm、南北587cmを測り、平面プランは隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N-1°-Wを示す。確認面からの壁高は、42～44cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。加工した軽石、安山岩・集塊岩・河原石を用いて袖部芯として、黄灰色(2.5Y4/1)を呈する粘土を用いて構築されていたと考えられる。

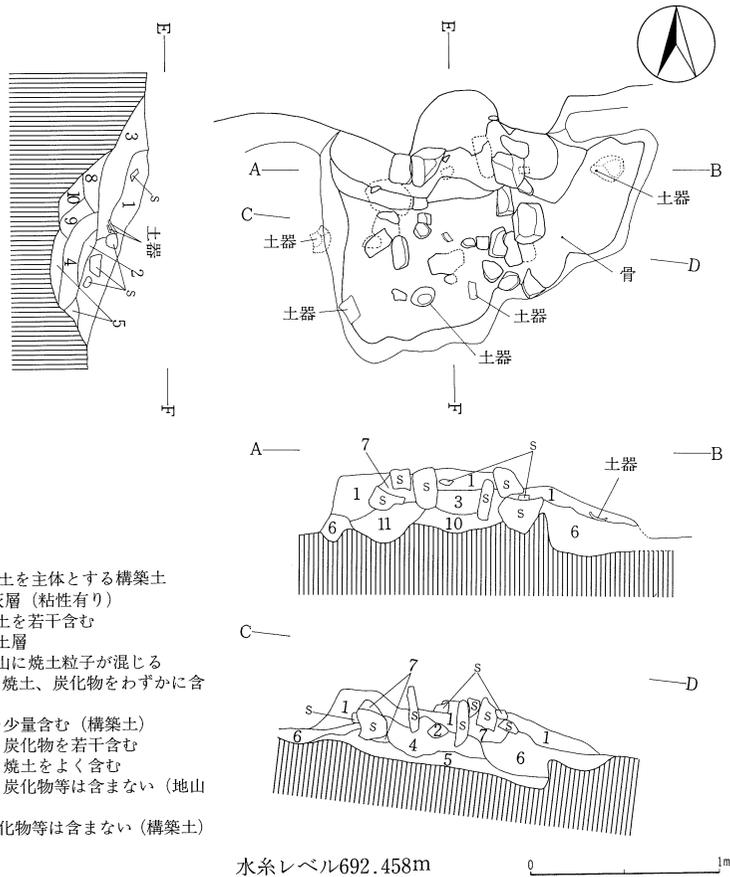
床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。

ピットは、総計6基検出された。このうち、P₁～P₄が主柱穴と考えられる。また、P₅は貯蔵穴と考えられる。

周溝は、検出されなかった。

遺物（第108・109図、図版58）

本住居址からは、土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、鉄滓のほか自然遺物として炭化



層序説明

- 第1層 黄灰色土層 (2.5Y4/1) 白色粘土を主体とする構築土
- 第2層 灰オリーブ色土層 (5Y6/2) 灰層 (粘性有り)
- 第3層 暗赤褐色土層 (2.5YR3/2) 焼土を若干含む
- 第4層 明赤褐色土層 (2.5YR5/8) 焼土層
- 第5層 明赤灰色土層 (2.5YR7/2) 地山に焼土粒子が混じる
- 第6層 にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) 焼土、炭化物をわずかに含む (構築土)
- 第7層 赤褐色土層 (5YR4/6) 焼土を少量含む (構築土)
- 第8層 黒褐色土層 (5YR3/1) 焼土、炭化物を若干含む
- 第9層 にぶい赤褐色土層 (5YR4/4) 焼土をよく含む
- 第10層 黒褐色土層 (10YR3/2) 焼土、炭化物等は含まない (地山が混じる)
- 第11層 褐色土層 (10YR4/4) 焼土、炭化物等は含まない (構築土)

第106図 第20号住居址カマド実測図

材、骨片が出土している。

このうち、図示したものに、黒色土器杯2点、須恵器杯4点、高台付杯1点、長頸壺1点、鉄製品3点がある。

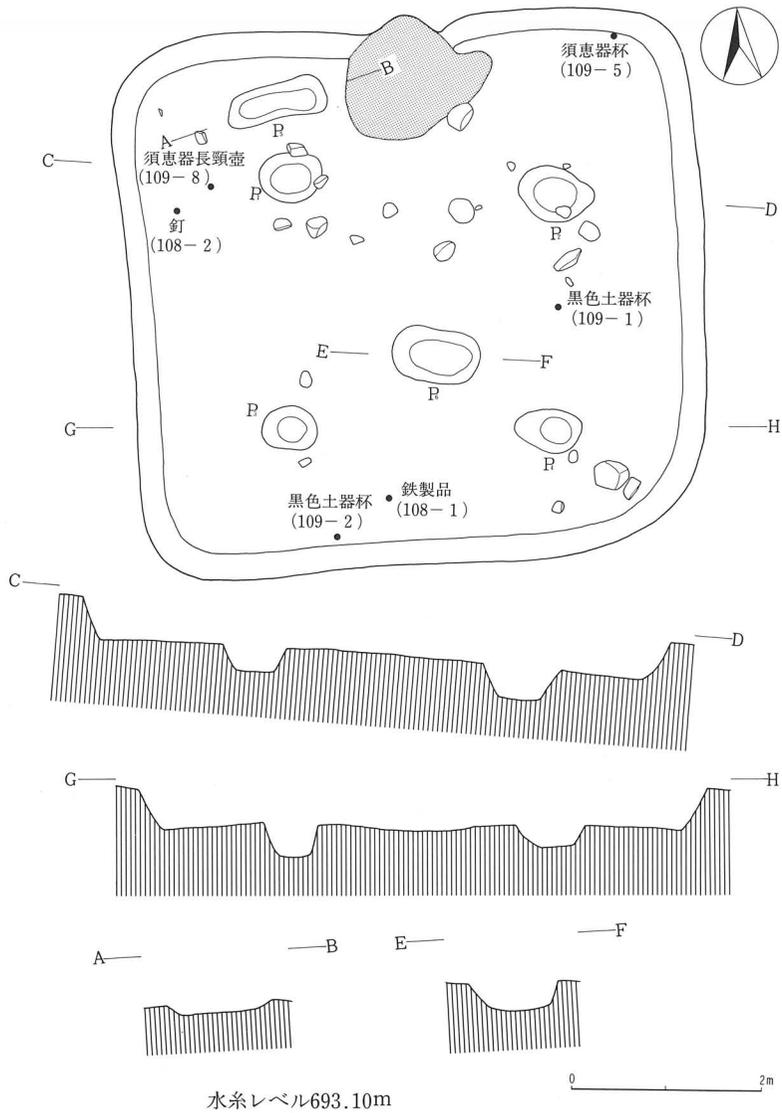
黒色土器杯(第109図1・2)は2点ある。底部は2点とも糸切りがなされるものである。口径は、1が14.6cm、2はおよそ11.4cmである。

須恵器杯(第109図3～6)は、4点出土している。4点とも底部は糸切りがなされる。いずれも在地窯産と考えられる。

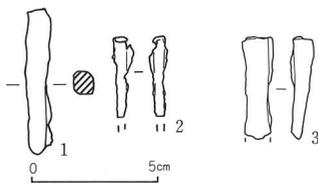
須恵器高台付杯(第109図7)は、底部糸切り後、高台が付されている。

須恵器長頸壺(第109図8)は、口辺部～頸部を欠く。胴中央部よりやや上に最大径を有する。肩部外面に自然釉が認められる。

鉄製品(第108図)は、3点出土している。このうち、1は用途不明である。



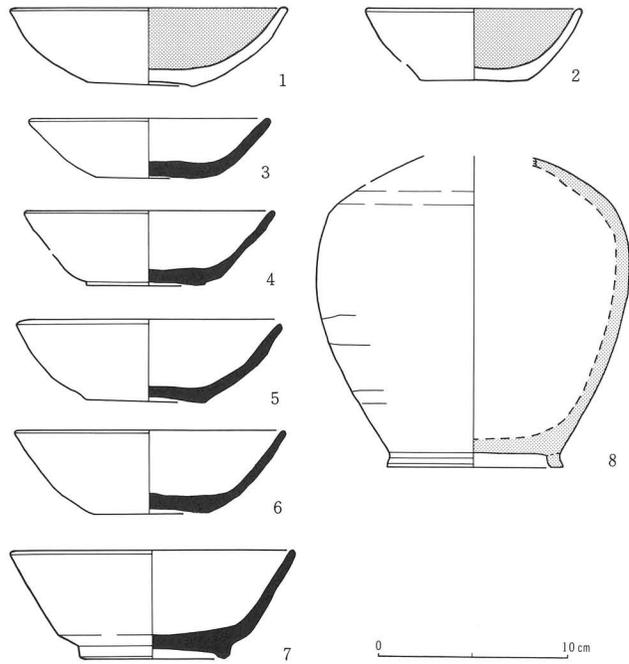
第107図 第20号住居址実測図



第108図 第20号住居址出土遺物 (A)

2は、釘である。3は、鏝と考えられる。
炭化材は2点出土している。コナラ節の一種とクヌギ節の一種に同定された。

本住居址の所産期は、平安時代前葉に比定される。



第109図 第20号住居址出土遺物 (B)

21) 第21号住居址

遺構 (第110・111図、図版

18)

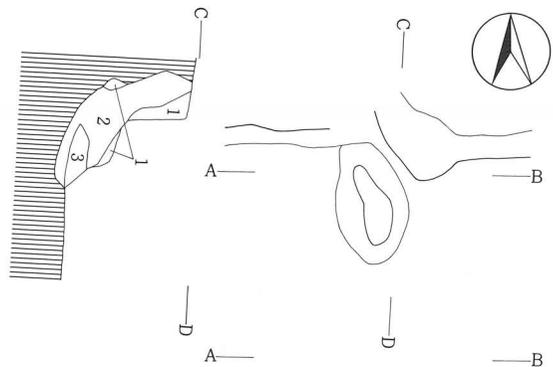
D-3グリッドに位置する。

第10・20号住居址と重複関係を有し、第10・20号住居址により切られている。

東西536cm、南北481cmを測り、平面プランは隅丸方形を呈する。

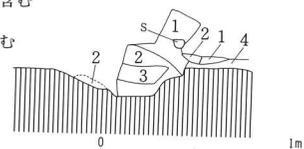
カマドを中心とする主軸方位は、N-6°-Eを示す。

確認面からの壁高は、18~56cmを測る。



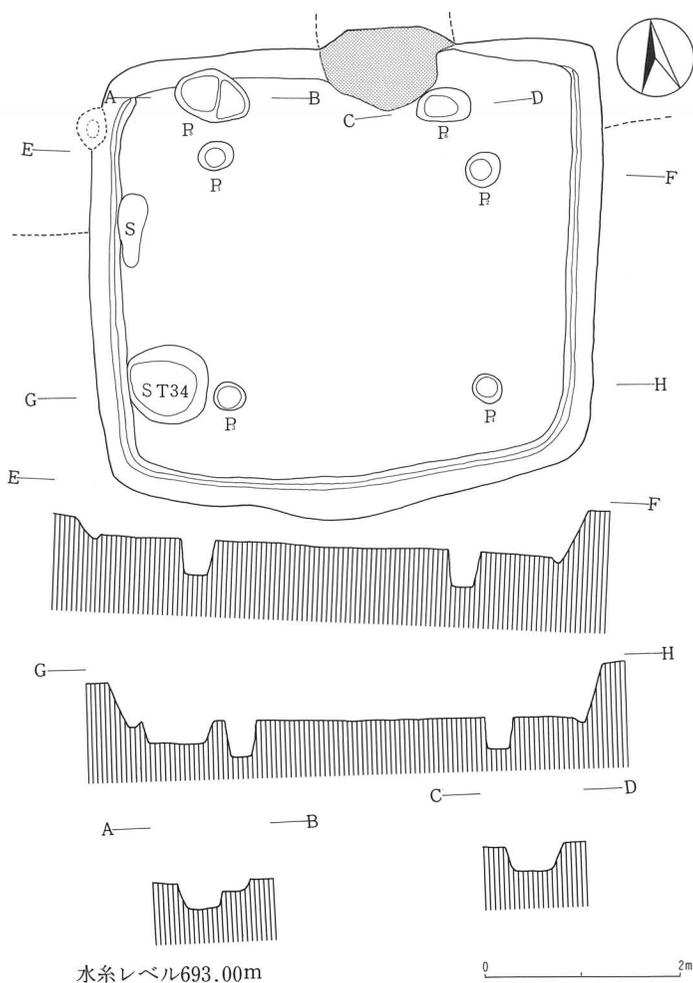
層序説明

- 第1層 におい黄褐色土層 (10YR5/3) 粘土層
- 第2層 黒褐色土層 (10YR2/3) 焼土、炭化物を含む
- 第3層 褐色土層 (10YR4/4) 灰層、骨片を含む
- 第4層 褐色土層 (10YR4/6) 焼土粒子を多く含む

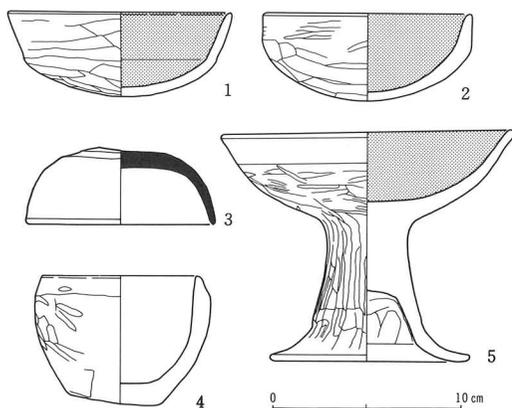


水系レベル692.358m

第110図 第21号住居址カマド実測図



第111図 第21号住居址実測図



第112図 第21号住居址出土遺物

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。第10号住居址に切られていることからカマド右袖と火床部が認められたただけである。加工した軽石、にぶい黄褐色(10Y R5/3)を呈する粘土で構築されていたと考えられる。

床面は、中央部が堅緻であったが壁際では軟弱であった。ピットは、総計6基検出された。このうち、P₁～P₄が支柱穴と考えられる。

周溝は、東・西・南壁下で認められた。

遺物 (第112図、図版58)

土師器片、黒色土器片、須恵器片のほか、自然遺物として、骨片がカマドなどから出土している。

このうち、図示したものに、黒色土器杯2点、高杯1点、土師器盤1点、須恵器蓋1点がある。

黒色土器杯には、外稜口辺を有するもの(1)と素縁のもの(2)がある。

須恵器蓋(3)は、口径9.7cmと小型のものである。

本住居址の所産期は、古墳時代後期に比定される。

22) 第22号住居址

遺構 (第113・114図、図版18)

D-2グリッドに位置する。

他遺構との重複関係はない。

東西419cm、南北405cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

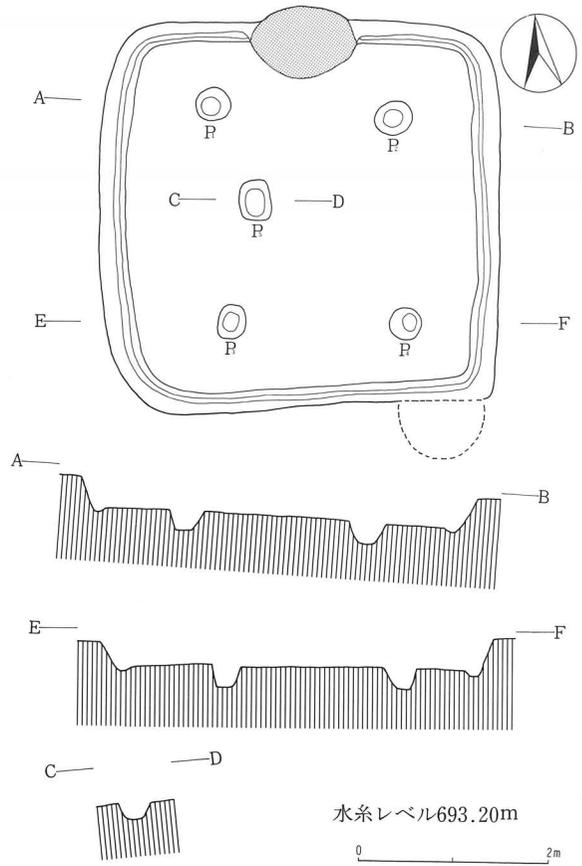
カマドを中心とする主軸方位は、N-6°-Eを示す。

確認面からの壁高は、26~34cmを測る。

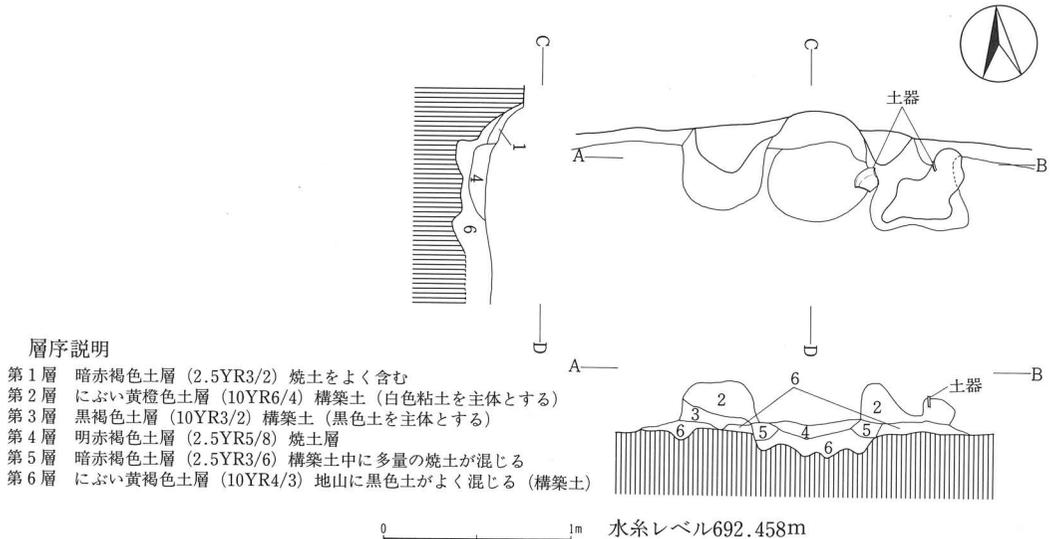
カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は悪い。おそらく、にぶい黄橙色 (10YR6/4) を呈する粘土を主体に構築されていたと考えられる。

床面は、中央部は堅緻であったが壁際では軟弱であった。

ピットは総計5基検出され、このうち、P₁~P₄の4基が主柱穴と考えられる。周溝は、カマド部分を除き、全周している。



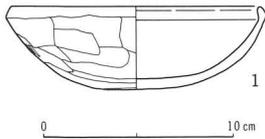
第113図 第22号住居址実測図



層序説明

- 第1層 暗赤褐色土層 (2.5YR3/2) 焼土をよく含む
- 第2層 にぶい黄橙色土層 (10YR6/4) 構築土 (白色粘土を主体とする)
- 第3層 黒褐色土層 (10YR3/2) 構築土 (黒色土を主体とする)
- 第4層 明赤褐色土層 (2.5YR5/8) 焼土層
- 第5層 暗赤褐色土層 (2.5YR3/6) 構築土中に多量の焼土が混じる
- 第6層 にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) 地山に黒色土がよく混じる (構築土)

第114図 第22号住居址カマド実測図



第115図 第22号住居址出土遺物

遺物 (第115図、図版58)

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。このうち、図示したものは、土師器杯1点である。体部～底部外面がへラケズリ、内面・口辺部外面はヨコナデがなされる。

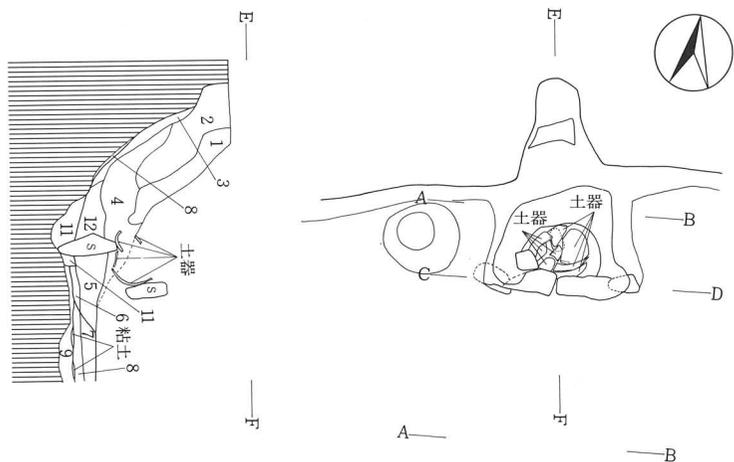
本住居址の所産期は、奈良時代に比定される。

23) 第23号住居址

遺構 (第116・117図、図版19)

D・E-2グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西489cm、南北390cmを測り、平面プランは隅丸長方形を呈する。



層序説明

- 第1層 ぶい黄橙色土層 (10YR6/4) 粘土を主体とする構築土
 - 第2層 褐色土層 (7.5YR4/3) 焼土、炭化物を若干含む
 - 第3層 灰褐色土層 (5 YR5/2) 基本的に第1層と同じで上部は焼けている
 - 第4層 暗赤褐色土層 (2.5YR3/2) 住居址覆土に焼土、炭化物が混じる
 - 第5層 灰オリーブ色土層 (5 Y6/2) 灰層 (骨が多量に出土) 粘性有
 - 第6層 明赤褐色土層 (5 YR5/8) 焼土層
 - 第7層 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 黒色土と地山の埋土に焼土が若干混じる
 - 第8層 ぶい黄橙色土層 (10YR6/4) 地山に若干黒色土が混じる
 - 第9層 黒色土層 (10YR1.7/1) に、ぶい黄橙色土層 (10YR6/4) が若干混じる埋土
 - 第10層 ぶい黄褐色土層 (10YR4/3) 地山と黒色土の埋土 (炭化材が若干混じる)
 - 第11層 赤褐色土層 (5 YR4/6) 焼土粒子を含む
 - 第12層 ぶい赤褐色土層 (5 YR4/3) 焼土、炭化物を含む (骨も多量に出土)
- カマド使用時における堆積



水系レベル693.058m

第116図 第23号住居址カマド実測図

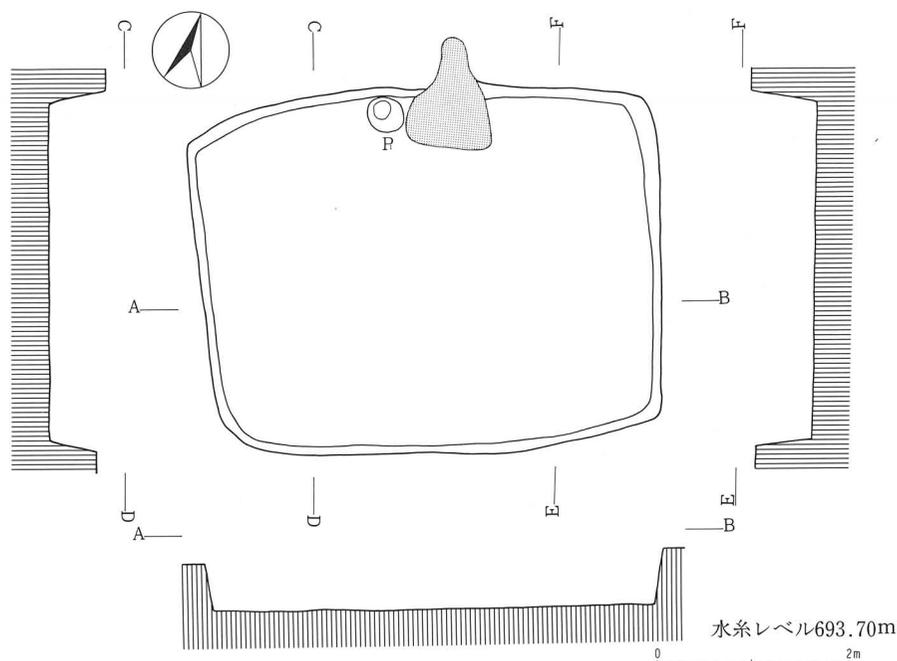
カマドを中心とする主軸方位は、 $N-15^{\circ}-W$ を示す。確認面からの壁高は、50~70cmを測る。カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は比較的良好であった。煙道突出部を舟先状に掘り込み、焚口部および天井石に安山岩を用い、本体はにぶい褐色(10Y R6/4)を呈し、粘土を主体とする構築土により築かれていた。

床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。

ピットはカマド西側に1基検出されたのみである。位置的には貯蔵穴と考えられるが明確でない。周溝は、検出されなかった。

遺物 (第118・119図、図版58)

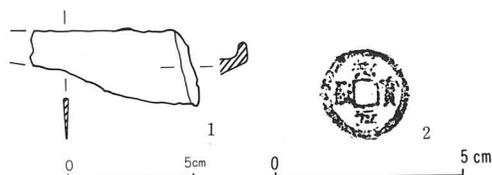
土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、銭貨のほか、自然遺物として炭化材、骨片が出土している。



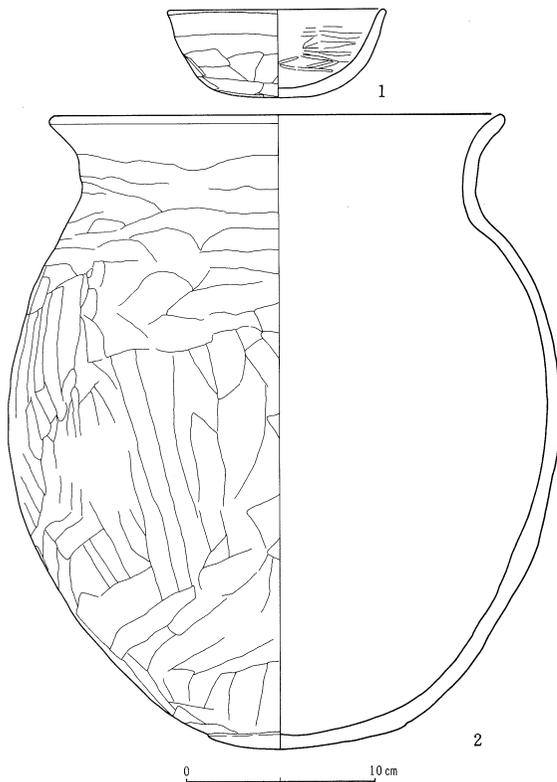
第117図 第23号住居址実測図

このうち、図示したものは、土師器杯、甕、鉄製品、銭貨各1点である。

土師器杯(第119図1)は、丸底で、口辺部が僅かに外反するものである。体部~底部外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキがなされる。



第118図 第23号住居址出土遺物(A)



第119図 第23号住居址出土遺物 (B)

土師器甕 (第119図2) は、球胴を呈するもので、丸底である。

頸部～底部外面はヘラケズリされ、内面はヘラナデされる。器高は33.8 cmを測る。

鉄製品 (第118図1) は、鎌の刃部～基部にあたる。およそ6.7cmが残存している。

銭貨 (第118図2) は「洪武通宝」である。混入品であろう。

炭化材は、7点出土している。

7点ともカマド内からの出土である。サクラ属の一種2点、コナラ節の一種3点、クヌギ節の一種とイネ科タケ亜科の一種各1点と同定された。

本遺構の所産期は、古墳時代後期に比定される。

24) 第24号住居址

遺構 (第120・121図、図版19)

D-2・3、E-2グリッドに位置する。掘立柱建物址の柱穴により切られている。

東西501cm、南北495cmを測り、平面プランは隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N-30°-Wを示す。確認面からの壁高は、9～40cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。袖部を、柱穴に切られていることもあり、遺存状態は悪い。煙道部はおよそ120cmと長い煙道である。カマド本体は、おそらくにぶい黄橙色 (10Y R6/4) 土を用いて構築されていたものと考えられる。

床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。

ピットは、総計7基検出された。このうち、P₁・P₂・P₃・P₄の4基が支柱穴と考えられる。

また、P₅は出入口部の施設に関連するものであろう。

周溝は、北・東・西壁下で認められたが全周しない。

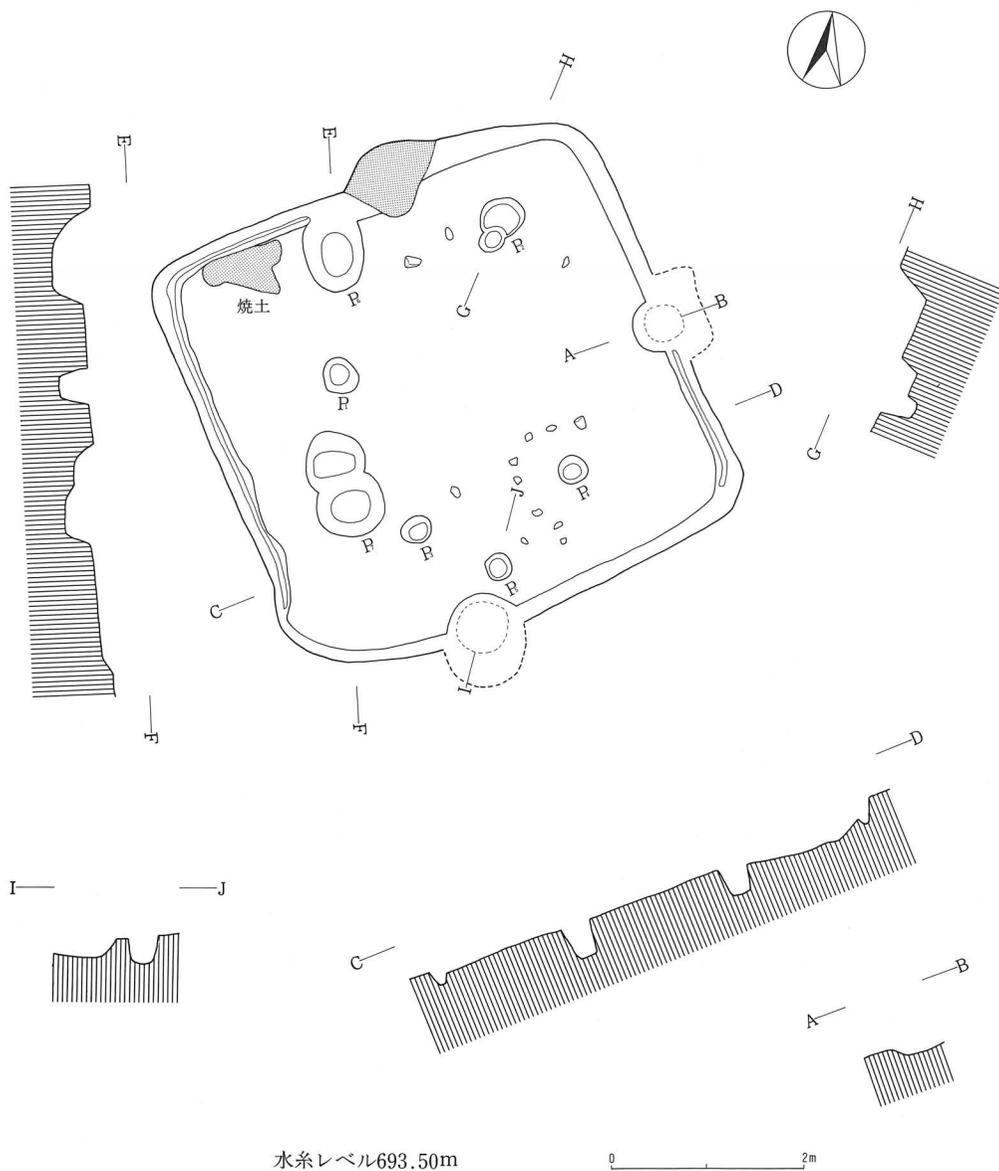
また、北壁西寄りで焼土が認められた。

遺物

本住居址からは、土師器片のほか、自然遺物として炭化材、骨片が出土しているが、図示し得るものは皆無である。

炭化材は、カマドから出土したもので、2点ある。2点ともクヌギ節の一種と同定された。

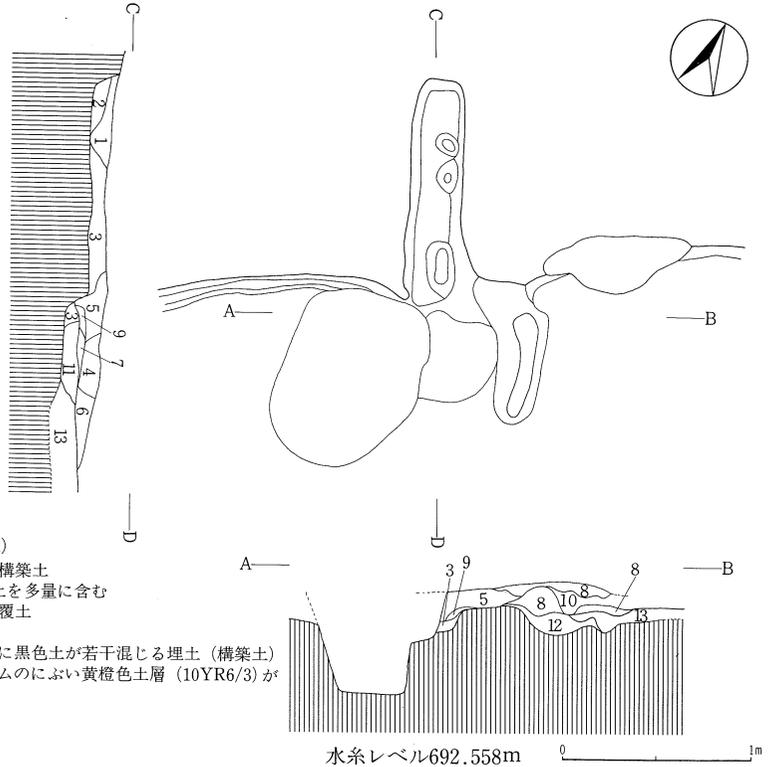
本住居址の所産期は、出土土器片から古墳時代後期に比定される。



第120図 第24号住居址実測図

層序説明

- 第1層 黒褐色土層 (5YR3/1)
焼土を若干含む
- 第2層 におい黄褐色土層 (10YR4/3) 地山に黒色土が若干混じる
- 第3層 褐色土層 (7.5YR4/6) 地山に焼土が混じる
- 第4層 灰赤色土層 (2.5YR5/2) 多量の構築土に焼土と黒色土が少量混じる
- 第5層 暗赤灰色土層 (2.5YR3/1) 焼土を若干含む
- 第6層 暗赤褐色土層 (2.5YR3/2) 焼土、炭化物を少量含む
- 第7層 におい黄色土層 (2.5Y6/3) 灰層 (粘性有り、骨出土)
- 第8層 におい黄橙色土層 (10YR6/4) 構築土
- 第9層 暗赤褐色土層 (2.5YR3/3) 焼土を多量に含む
- 第10層 黒褐色土層 (10YR3/1) 住居址覆土
- 第11層 橙色土層 (2.5YR6/8) 焼土層
- 第12層 灰黄褐色土層 (10YR5/2) 地山に黒色土が若干混じる埋土 (構築土)
- 第13層 黒色土層 (10YR1.7/1) にロームのにおい黄橙色土層 (10YR6/3) が混じる埋土 (貼り床)



第121図 第24号住居址カマド実測図

25) 第25号住居址

遺構 (第122・123図、図版19)

D-2グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西580cm、南北521cmを測り、平面プランは、東西に長い隅丸長方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N-18°-Wを示す。確認面からの壁高は、28~50cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。袖基部は、地山を掘り残して袖芯としているほか、加工した軽石も芯に用い、さらに、粘土を主体とするにおい黄褐色 (10YR6/3) 土により構築されていたと考えられる。

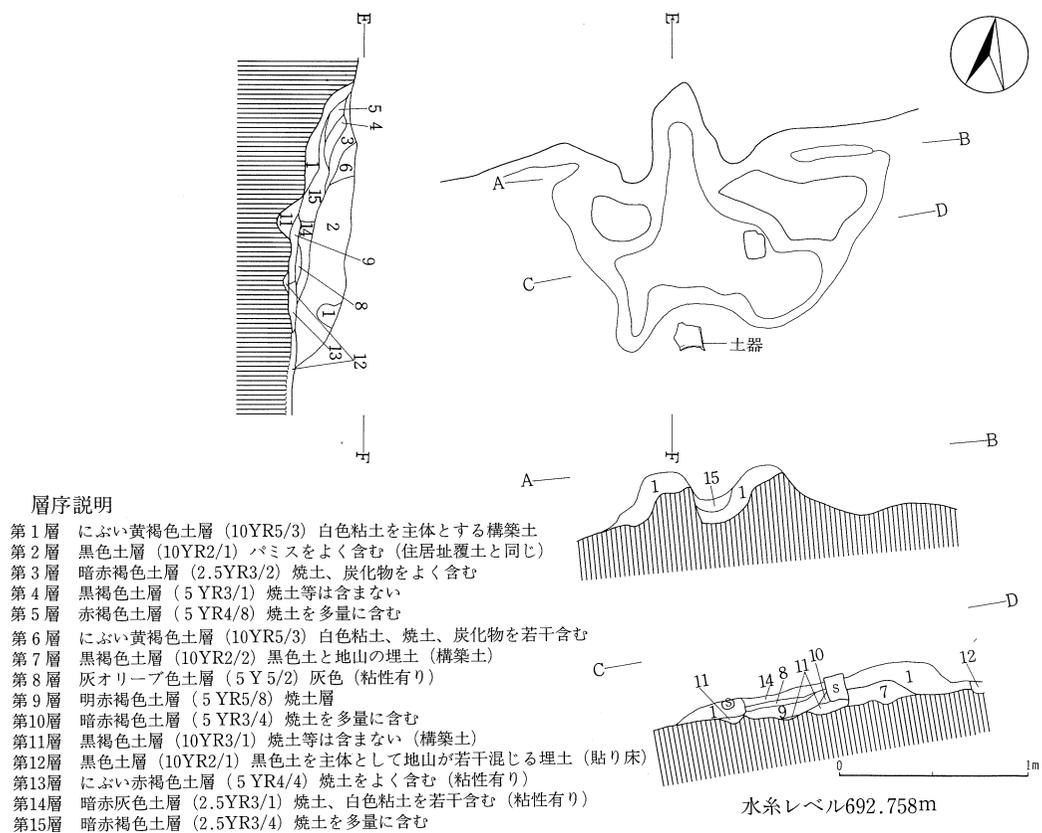
床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。

ピットは総計4基検出された。いずれも支柱穴と考えられる。

なお、周溝は検出されなかった。

遺物 (第124図、図版59)

土師器片、黒色土器片、須恵器片、石製品のほか、自然遺物として炭化材、骨片が出土している。図示したものに、土師器杯、台付甕、甕、黒色土器杯、椀、紡錘車各1点がある。



第122図 第25号住居址カマド実測図

土師器杯 (第124図1・3) には、外稜口辺を有するもの (1) と素縁で体部～底部外面をヘラケズリし、内面、口辺部外面をヨコナデするもの (3) の2種がある。

黒色土器は、2点出土している。2は、素縁のもので、体部～底部外面はヘラケズリされる。

4は、一応、椀としたが、口径に比して器高が高く、盃とも言える器形である。外面はヘラケズリされる。丸底である。

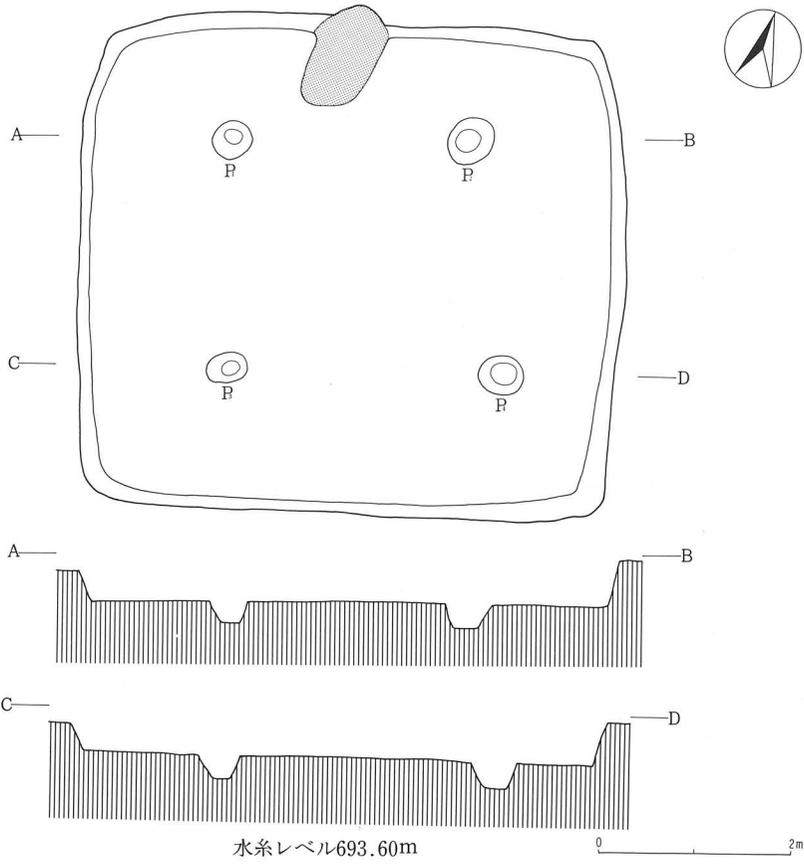
5は小型の甕で僅かに口辺部が外反し、低い脚台を有する。肩部～底部外面は、縦方向のヘラケズリがなされる。

甕 (6) は、球胴を呈するもので内外面ヘラミガキされる。壺とも言える器形である。

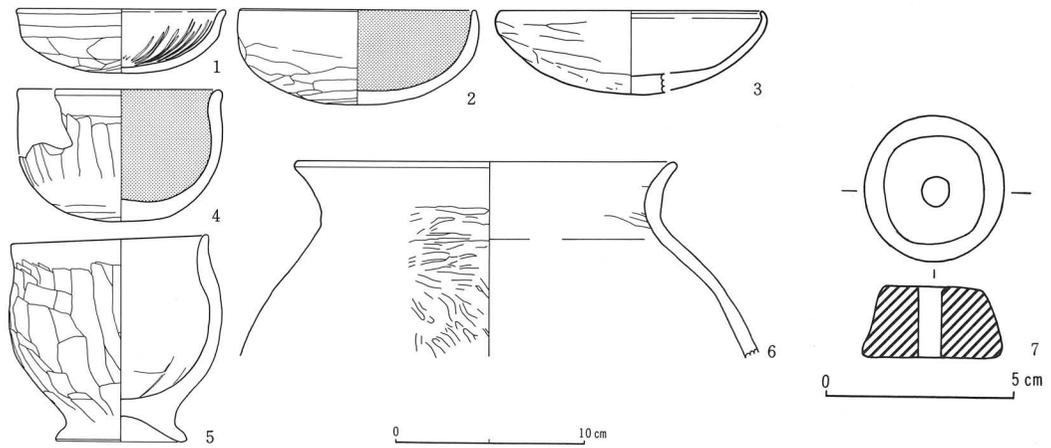
紡錘車 (7) は、滑石製で重さ48gを計る。

炭化材は3点出土している。2点がカマドから、1点は住居址北部からの出土である。カマド出土のものは、コナラ属の一種、カバノキ属類似種、北部出土のものはイネ科タケ亜科の一種と同定された。

本住居址の所産期は、古墳時代後期に比定される。



第123図 第25号住居址実測図



第124図 第25号住居址出土遺物

26) 第26号住居址

遺構 (第125・126図、図版20)

D・E-2グリッドに位置する。第27号住居址と重複関係を有し、第27号住居址を切って構築されている。また、住居址ほぼ中央部は、土坑により切られている。

東西494cm、南北497cmを測り、平面プランは隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N-9°-Wを示す。確認面からの壁高は、14~31cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部と東壁ほぼ中央部の2箇所で見られた。

残存状況からすると、東カマド→廃絶→北カマドの構築・使用という順序が考えられる。

北カマド (第126図) は、にぶい黄色 (2.5Y6/3) を呈する粘土を用いて構築されている。

煙道部は、東カマドよりも長くなっている。

東カマドは、煙道部を残すだけである。天井部と煙道の間には安山岩が用いられていた。

本体は、にぶい黄橙色 (10YR 7/3) を呈し、粘土を主体とする構築土を主体に築かれていたものと思われる。

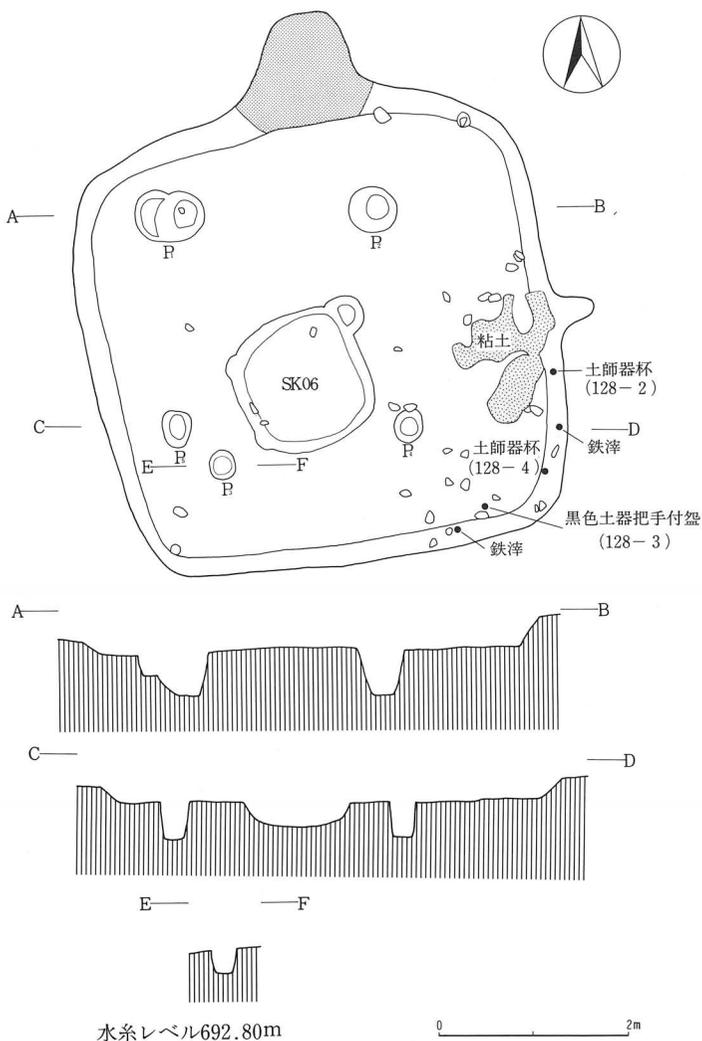
床面は、中央部が堅緻で壁際では軟弱であった。

ピットは、総計5基検出された。このうち、P₁・P₂・P₃・P₄の4基が支柱穴と考えられる。なお、周溝は検出されなかった。

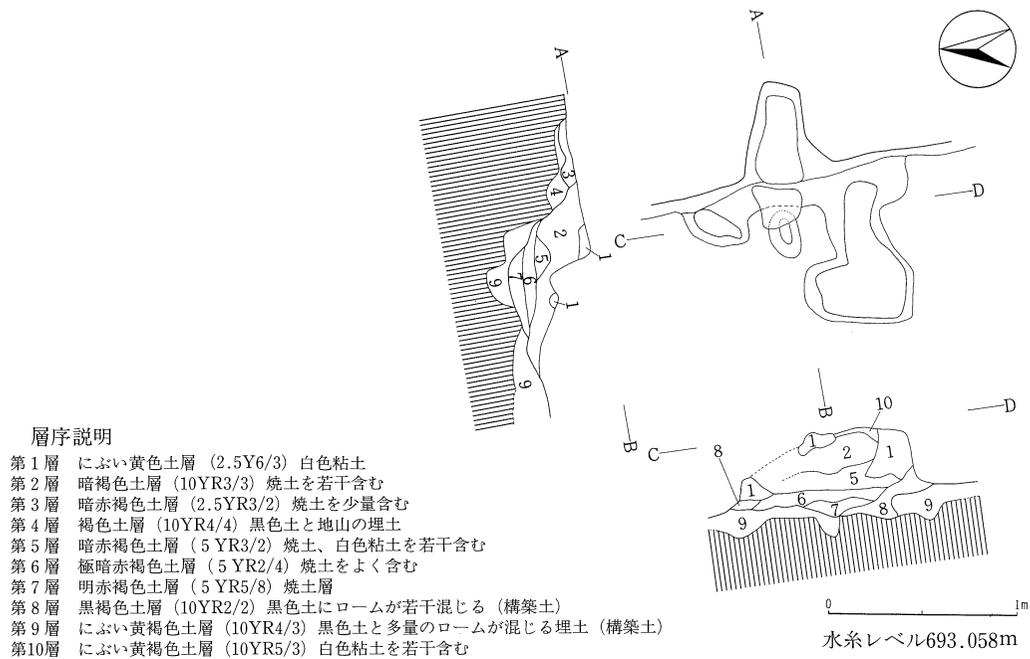
遺物 (第128図、図版59)

本住居址からは、土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄滓のほか、自然遺物として炭化材、炭化種子が出土している。

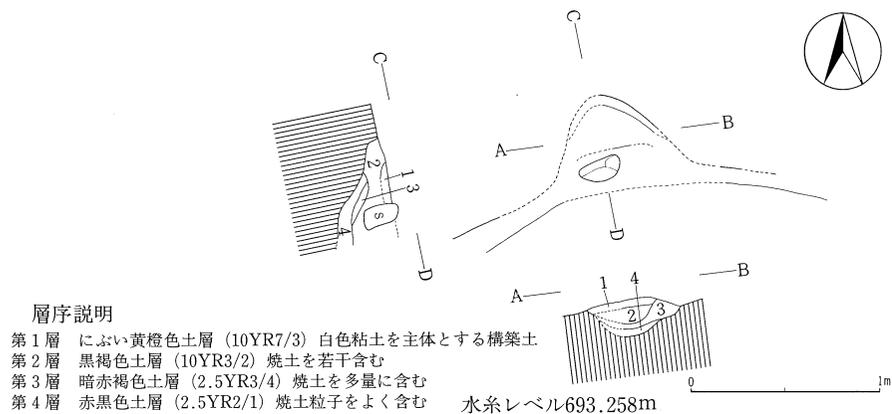
このうち、図示したものは、土師器杯2点、高杯1点、黒色土器把手付盃1点である。



第125図 第26号住居址実測図



第126図 第26号住居址カマド実測図 (東)



第127図 第26号住居址カマド実測図 (北)

土師器杯(1・2)には、素縁のもの(1)と外稜口辺を有するもの(2)とがある。

1は、底部～底部外面がへラケズリ、内面と口辺部外面がヨコナデされる。2は、内外面ともへラミガキがなされる。

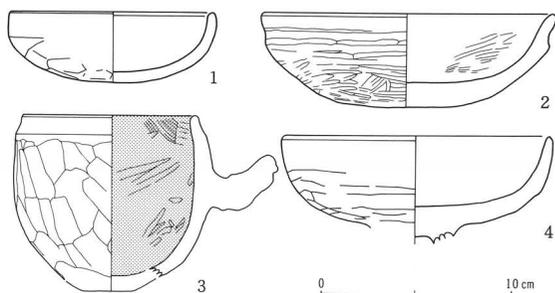
高杯は、椀状の杯部を有するもので、脚部を欠く。

把手付盃(3)は、市内では初見である。外面は縦方向のへラケズリ、内面は粗いへラミガキがなされる。

炭化材は、6点出土している。北カマド5点、東カマドが1点である。

北カマド出土のものは、コナラ節の一種と広葉樹(散孔材)が各2点、種子が1点である。種子については、種別は不明である。東カマドのものはコナラ節の一種と同定された。

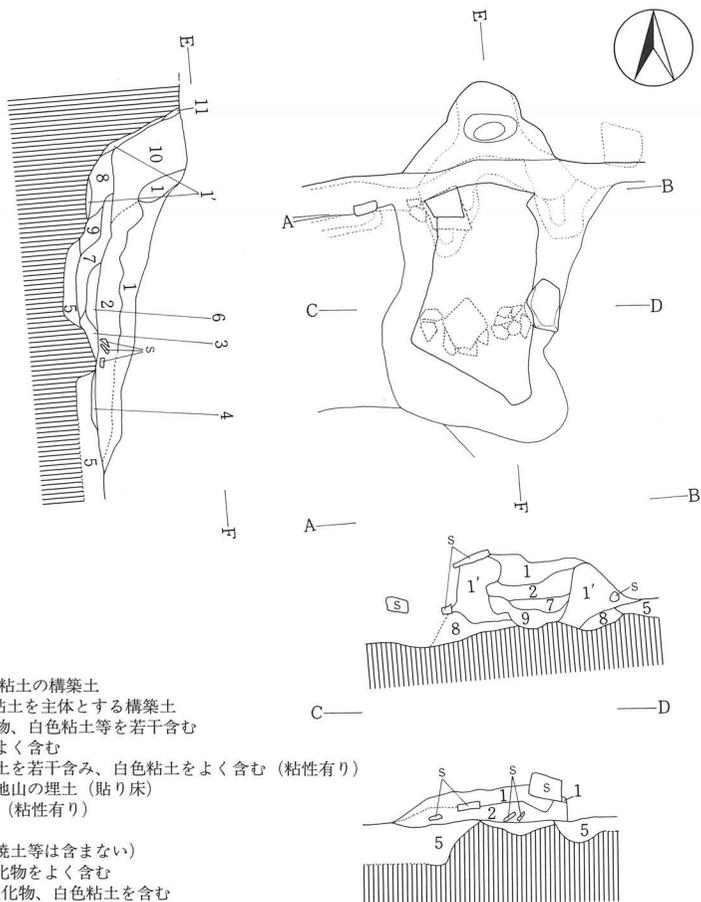
本住居址の所産期は、古墳時代後期に比定される。



第128図 第26号住居址出土遺物

27) 第27号住居址

遺構(第129・130図、図版20)

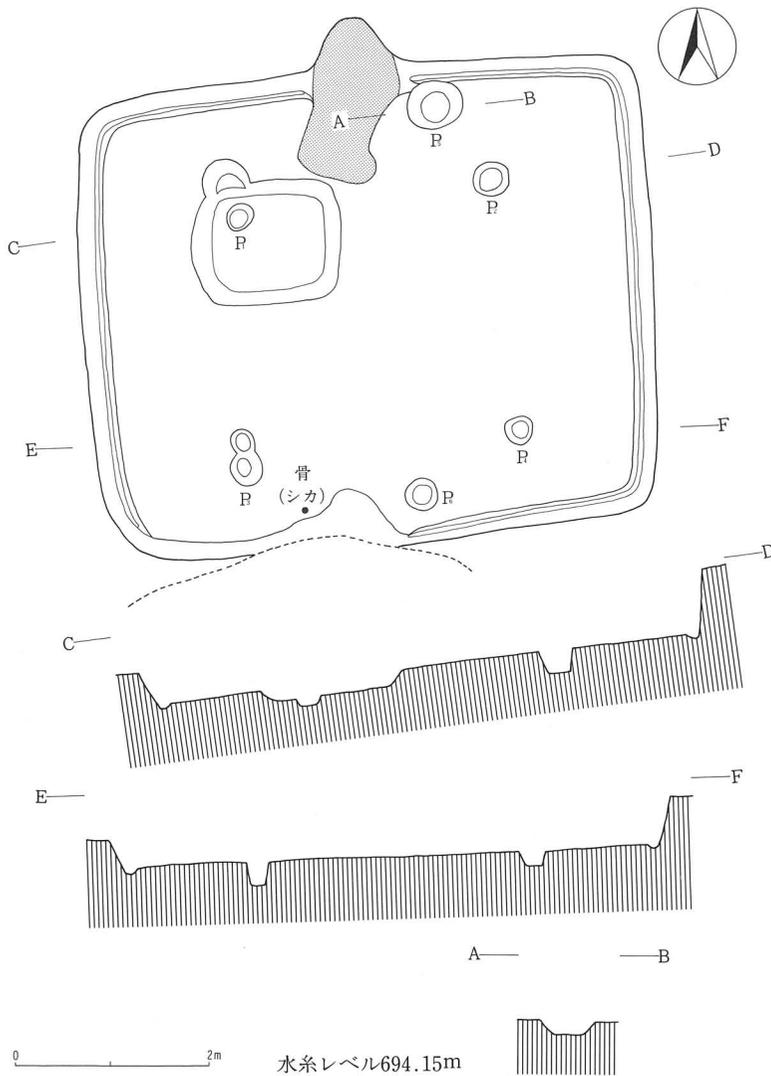


層序説明

- 第1層 オリーブ黄色土層(5Y6/3) 白色粘土の構築土
- 第1'層 にぶい黄色土層(2.5Y6/3) 白色粘土を主体とする構築土
- 第2層 黒色土層(10YR2/1) 焼土、炭化物、白色粘土等を若干含む
- 第3層 黒褐色土層(10YR3/1) 炭化物をよく含む
- 第4層 にぶい黄褐色土層(10YR5/3) 焼土を若干含み、白色粘土をよく含む(粘性有り)
- 第5層 黒褐色土層(10YR3/1) 黒色土と地山の埋土(貼り床)
- 第6層 灰オリーブ色土層(5Y6/2) 灰層(粘性有り)
- 第7層 赤褐色土層(5YR4/8) 焼土層
- 第8層 黒褐色土層(10YR3/2) 構築土(焼土等は含まない)
- 第9層 黒褐色土層(5YR2/1) 焼土、炭化物をよく含む
- 第10層 赤黒色土層(2.5YR2/1) 焼土、炭化物、白色粘土を含む
- 第11層 褐色土層(10YR4/4) 地山の崩落

水系レベル693.358m

第129図 第27号住居址カマド実測図



第130図 第27号住居址実測図

オリブ黄色（5 Y6/3）、にぶい黄色（2.5 Y6/3）を呈する粘土を構築材として築かれていた。

床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。

ピットは、総計6基検出された。このうち、P₁～P₄が主柱穴と考えられる。

周溝は、カマド部分、南壁の一部を除いて廻っている。

遺物（第131・132図、図版59・60）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、石製品、骨片が出土している。

このうち、図示し得たものは、土師器杯、鉢各1点、黒色土器高杯4点、須恵器蓋、平瓶各1

D・E-2グリッドに位置する。

第26号住居址と重複関係を有し、第26号住居址に切られている。

また、第26号住居址と同じように、住居址の北西部を土坑によって切られている。

東西602cm、南北510cmを測り、平面プランは隅丸長方形を呈する。

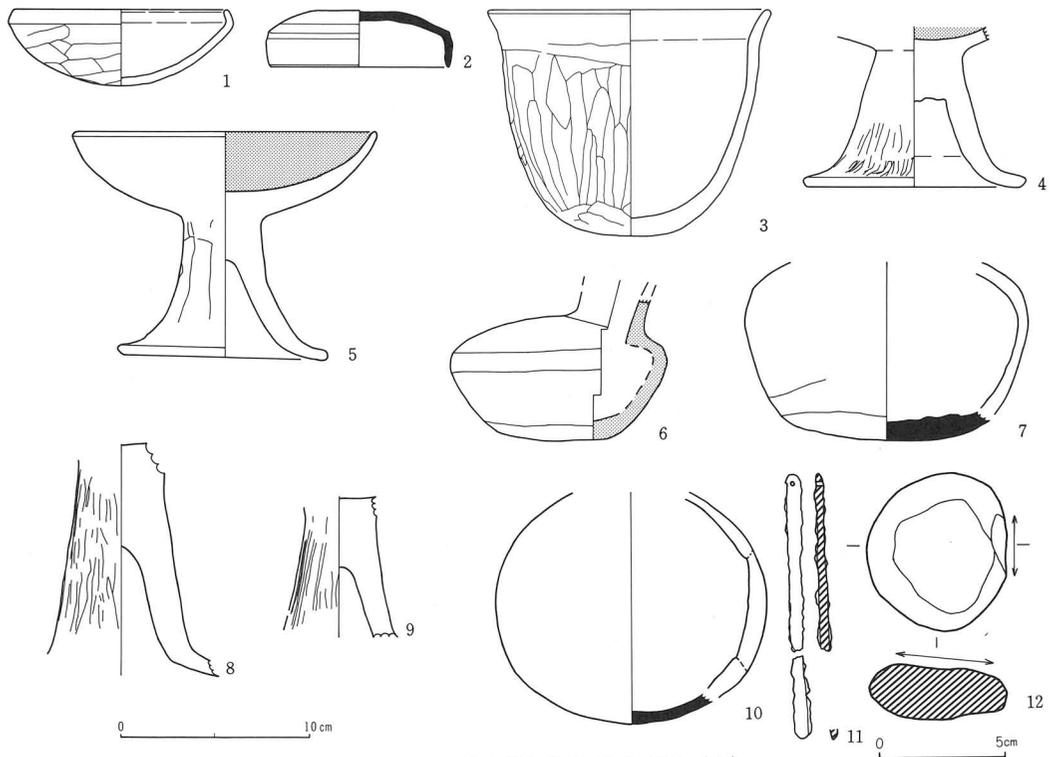
カマドを中心とする主軸方位は、N-5°-Wを示す。

確認面からの壁高は、31～68cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。

遺存状態は比較的良好であった。

カマド本体は、安山岩、加工した軽石、



第131図 第27号住居址出土遺物 (A)

点、長頸壺 2 点である。土師器杯(1)は体部～底部外面へラケズリ、内面・口辺部外面はヨコナデがなされる。

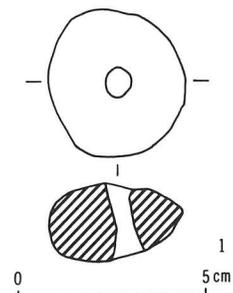
黒色土器高杯は 4 点出土しているが、全器形を窺えるのは 5 の 1 点である。椀状の杯部を有する。

平瓶(6)は、丸底で、肩部には明確な稜をもたない。

須恵器長頸壺(7、10)は 2 点出土している。このうち、10はフラスコ形を呈するものである。

鉄製品は、1 点出土している。1 孔を有する。鉄鐸の舌に似るが明確でない。石製品は 2 点あり、いずれも軽石製である。12は、磨石として用いられたものである。重さ 42 g を計る。第132図 1 は紡錘車で、重さ 13 g を計る。

本遺構の所産期は、古墳時代後期に比定される。

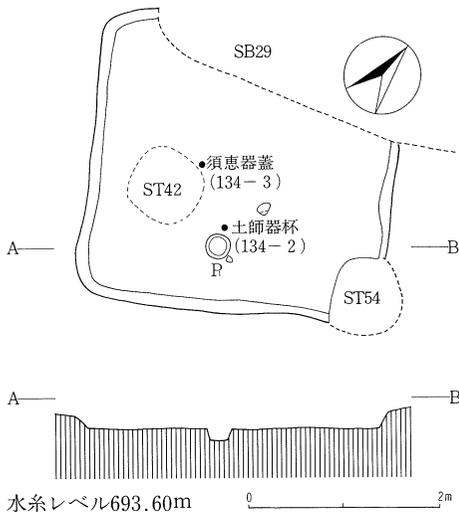


第132図 第27号住居址出土遺物(B)

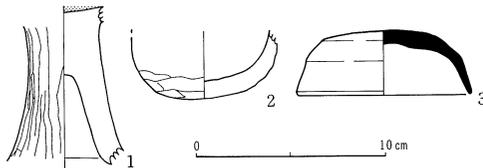
28) 第28号住居址

遺構 (第133図、図版20)

D-2 グリッドに位置する。第29号住居址、第42・54号掘立柱建物址と重複関係を有し、第29号住居址、第42・54号掘立柱建物址により切られている。



第133図 第28号住居址実測図



第134図 第28号住居址出土遺物

東西321cm、南北315cmを測り、平面プランは隅丸方形を呈する。

南北軸の方位は、N-36°-Wを示す。

確認面からの壁高は、14~18cmを測る。

カマドは、確認できなかった。

床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。

ピットは1基検出されたのみである。一応、柱穴と考えておきたい。

周溝は、検出されなかった。

遺物（第134図、図版60）

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。

このうち、図示したものは、土師器杯、黒色土師器高杯、須恵器蓋各1点である。

土師器杯、須恵器蓋も小型品である。

本住居址の所産期は、古墳時代後期に比定される。

29) 第29号住居址

遺構（第135・136図、図版21）

D-2グリッドに位置する。第28・30号住居址と重複関係を有し、第28・30号住居址を切って構築されている。

東西520cm、南北411cmを測り、平面プランは東西に長い隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N-28°-Wを示す。

確認面からの壁高は、36~37cmを測り、壁は比較的緩やかに立ち上がる。

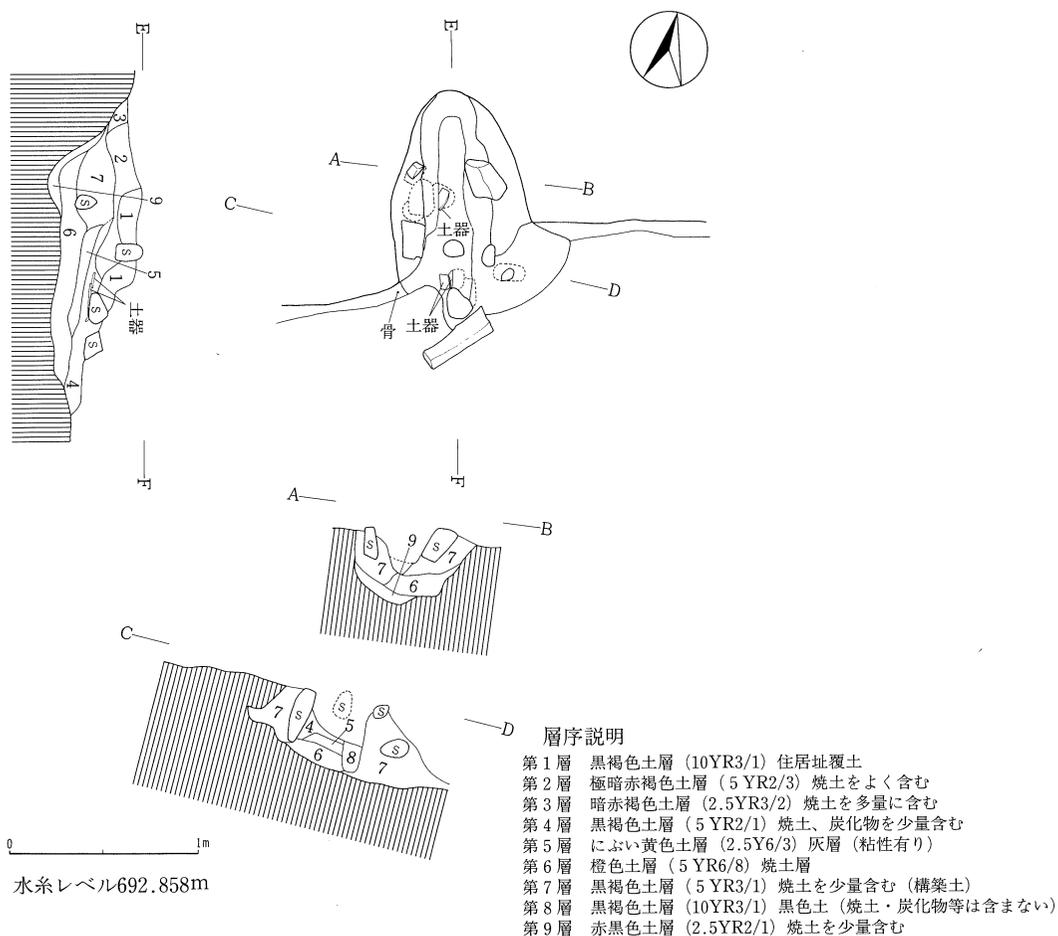
カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。加工した軽石、安山岩、河原石を芯として、黒褐色(5YR3/1)土を用いて構築されていたものと思われる。

床面は、中央部は堅緻であったが壁際では軟弱であった。

ピットは総計5基検出された。このうち、P₁・P₂の2基が支柱穴と考えられる。

また、南壁下のP₄・P₅の2基は、出入口部の施設に関連するものであろう。

なお、周溝は検出されなかった。



第135図 第29号住居址カマド実測図

遺物 (第137・138図、図版60)

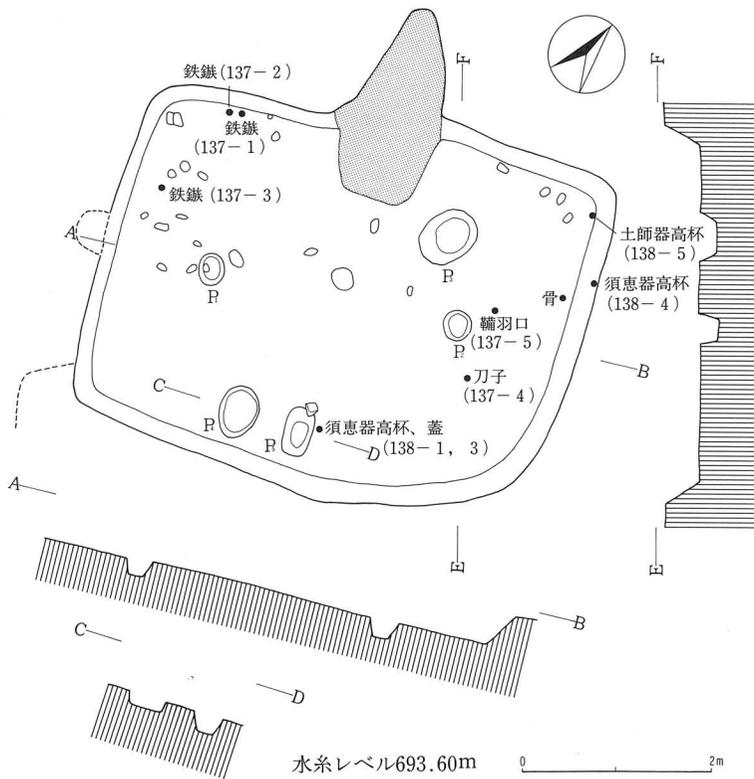
本住居址からは、土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、土製品のほか、自然遺物として骨片、炭化材が出土している。

このうち、図示したものに、黒色土器高杯1点、須恵器蓋2点、須恵器高杯2点、轆羽口1点、鉄製品4点がある。

須恵器蓋 (第138図1・2) には、偏平な宝珠形つまみを有し、内面にかえりが認められるもの (1) と偏平でかえりの認められないもの (2) とがある。

須恵器高杯 (第138図3・4) には、外面に稜を有する杯部 (3) と柱状の脚部をもつもの (4) とがある。

黒色土器高杯 (第138図5) は、「ハ」の字状に開く脚部を有する。杯部は不明であるが、椀状になるものと思われる。

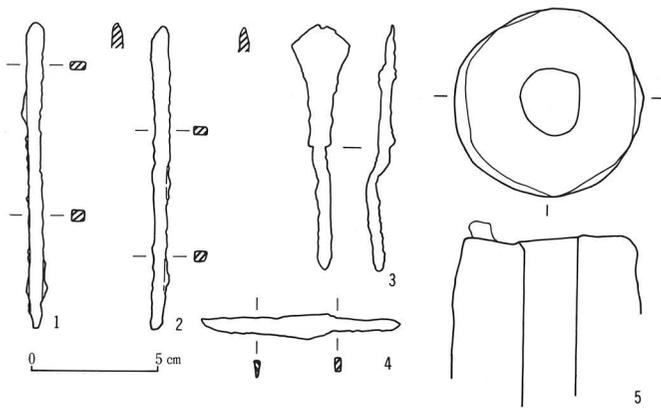


第136図 第29号住居址実測図

鉄製品は、総計4点出土している。このうち、第137図1～3は鉄鏃、4は刀子である。

鉄鏃のうち、1・2は圭頭鏃箭式、3は方頭斧箭式のものと考えられる。

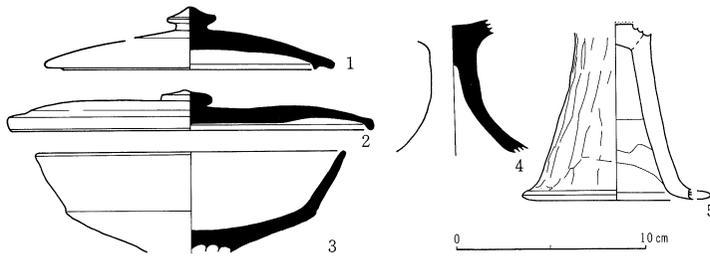
土製品（第137図5）は、轡羽口である。炉側先端部が遺存している。先端部は、黒いガラス状を呈している。器壁の厚さは、約2.7cmである。



第137図 第29号住居址出土遺物（A）

炭化材は、総計5点出土している。いずれも、カマドからの出土である。クヌギ節の一種、サクラ属の一種が各々2点、コナラ節の一種が1点である。

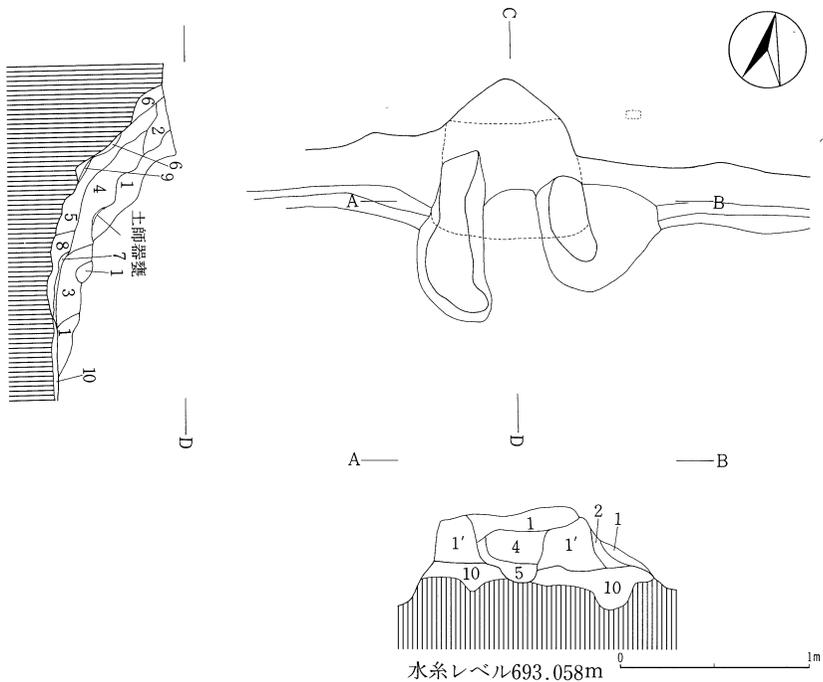
本住居址の所産期については、かえりのある須恵器蓋とかえりのない須恵器蓋が伴出していることから、奈良時代前葉と考えられよう。



第138図 第29号住居址出土遺物 (B)

30) 第30号住居址

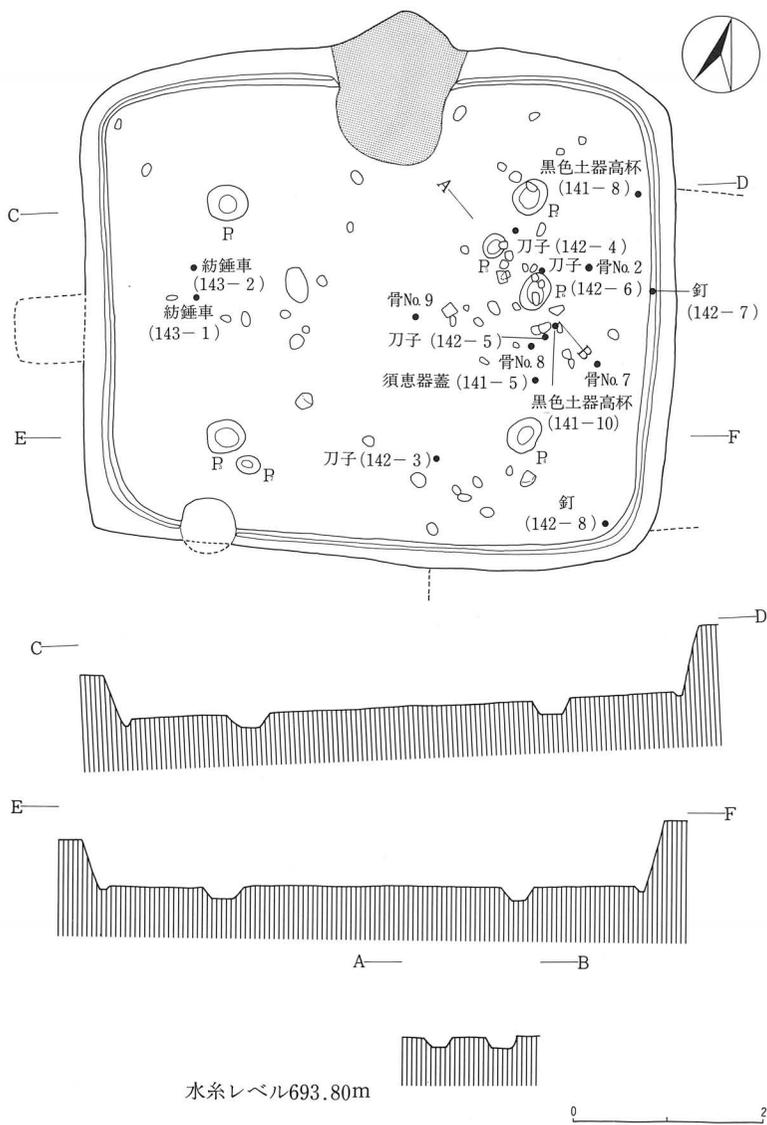
遺構 (第139・140図、図版21)



層序説明

- 第1層 におい黄色土層 (2.5Y6/3) 白色粘土を含む構築土 (粘土はあまり多くない)
- 第1'層 第1層よりも粘土が多く粘土主体の構築土
- 第2層 におい黄褐色土層 (10YR4/3) 焼土等は全く含まない
- 第3層 におい赤褐色土層 (5 YR4/3) 焼土をよく含む
- 第4層 におい極暗赤褐色土層 (2.5YR2/2) 焼土をよく含む
- 第5層 におい赤褐色土層 (2.5YR4/3) 焼土粒子をよく含む (骨が少量出土) →カマド使用時の堆積
- 第6層 におい黄褐色土層 (10YR5/4) 地山に若干の黒色土が混じる
- 第7層 浅黄色土層 (2.5Y7/3) 灰を含む
- 第8層 明赤褐色土層 (5 YR5/8) 焼土層
- 第9層 黒色土層 (10YR1.7/1) 焼土等は含まない
- 第10層 黒褐色土層 (10YR3/2) と地山のにおい黄橙色土層 (10YR7/2) の埋土 (構築土)

第139図 第30号住居址カマド実測図



第140図 第30号住居址実測図

床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。

ピットは、総計7基検出された。このうち、P₁～P₄が支柱穴と考えられる。

周溝は、カマド部分を除き全周している。

遺物 (第141・142図、図版60・61)

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、石製品、黒曜石片のほか、自然遺物として骨片、炭化材が出土している。このうち、図示したものに、土師器杯、甕、高杯、黒色土器杯、高杯、

D-1・2グリッドに位置する。

第29号住居址、第32号掘立柱建物址と重複関係を有し、第29号住居址、第32号掘立柱建物址に切られている。

東西624cm、南北553cmを測り、平面プランは東西に長い隅丸長方形を呈する。

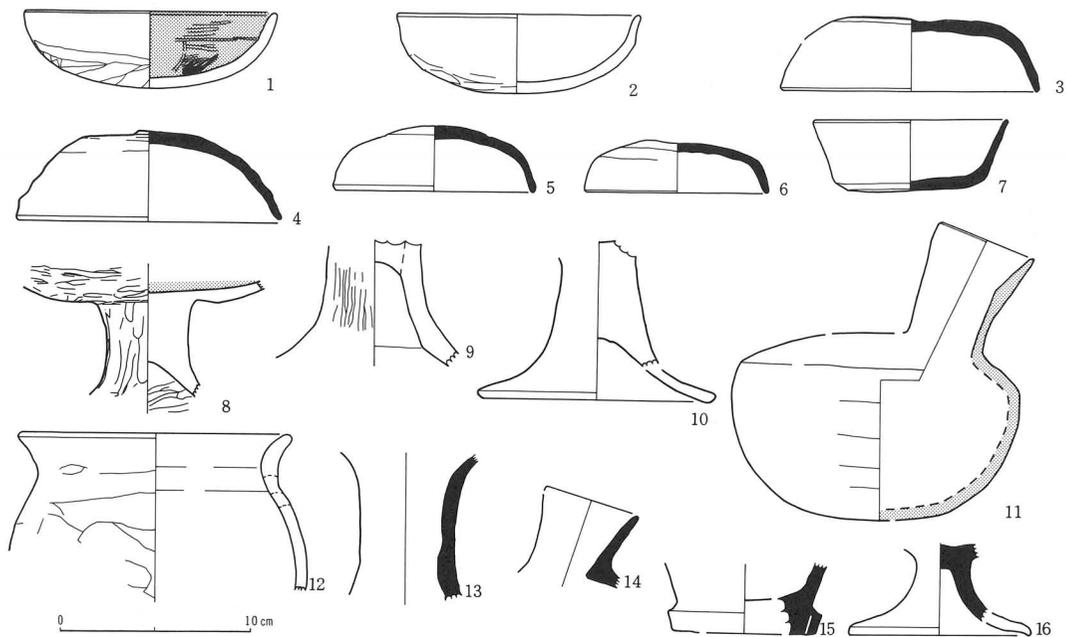
カマドを中心とする主軸方位は、N-18°-Wを示す。

確認面からの壁高は、48～70cmを測る。

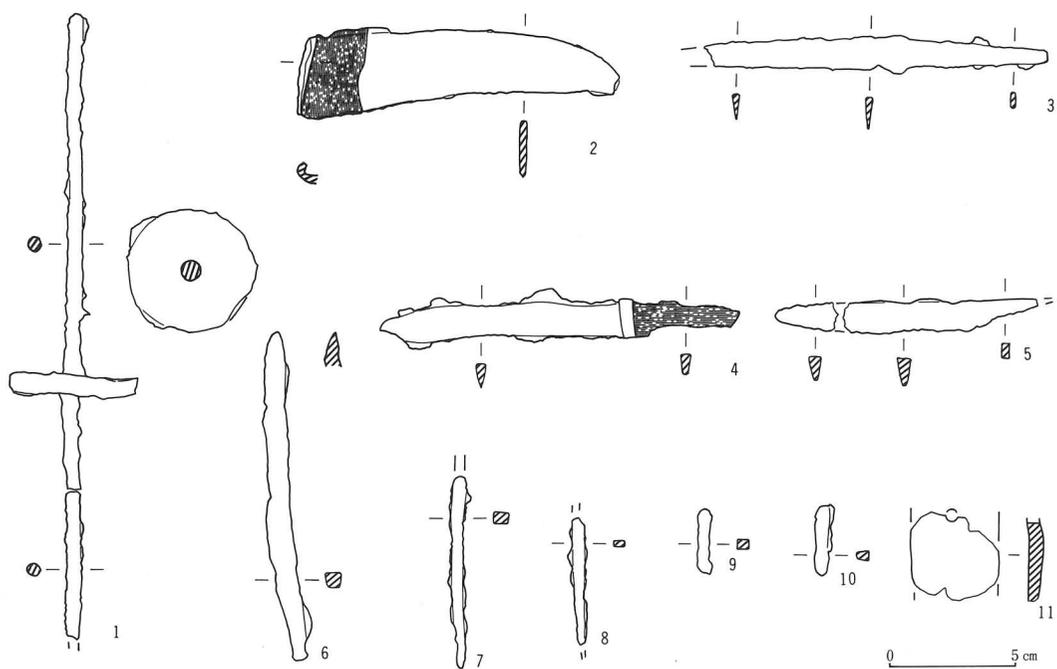
カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。

遺存状態は比較的良好であった。

黒褐色 (10Y R3/2) 土と地山を基部とし、粘土を含むにぶい黄色 (2.5Y 6/3) 土を用いて構築されていた。



第141図 第30号住居址出土遺物 (A)



第142図 第30号住居址出土遺物 (B)

須恵器蓋杯、長頸壺、平瓶、高杯、すり鉢、鉄製品、石製品がある。

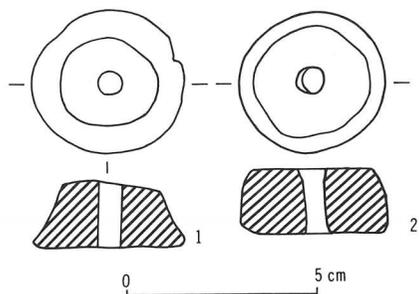
須恵器蓋(3~6)の口径は、9.45~13.7cmと幅がある。すり鉢(15)は市内では初見である。

鉄製品には、紡錘車(1)、鎌(2)、刀子(3~5)、工具と考えられるもの(6)などがある。

11は、砂質凝灰岩製の砥石で、穿孔される。重さ8gを計る。石製紡錘車(第143図)2点は滑石製で、重さは、1が35g、2が40gである。

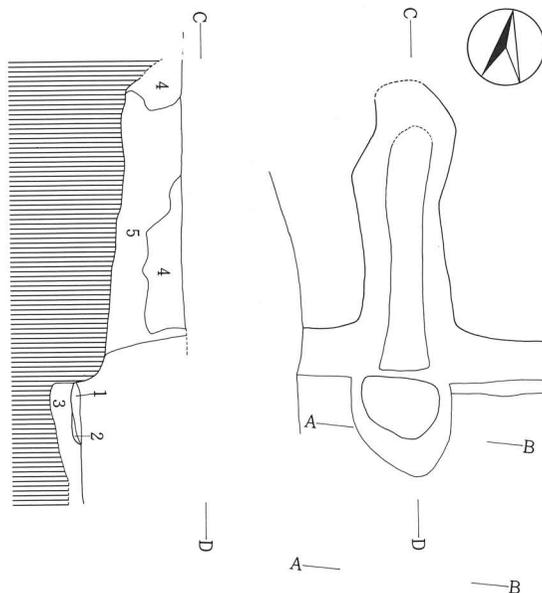
炭化材は4点あり、カマドおよび南部出土のものがコナラ節の一種、北部出土のものは、コナラ節の一種とモモの種子と同定された。

本住居址の所産期は、古墳時代後期に比定される。



第143図 第30号住居址出土遺物(C)

31) 第31号住居址



層序説明

- 第1層 褐灰色土層(5YR4/1) 灰層(粘性有り)
- 第2層 明赤褐色土層(5YR5/6) 焼土層
- 第3層 にぶい黄褐色土層(10YR5/4) ロームに黒色土が若干混じる埋土
- 第4層 明黄褐色土層(10YR6/6) ほとんど地山のロームに黒色土がわずかに混じる
- 第5層 黒色土層(10YR2/1) 黒色土に焼土、炭化物が地山に近い下部にわずかに混じる

0 1m

水系レベル693.158m

第144図 第31号住居址カマド実測図

遺構 (第144・145図、図版21)

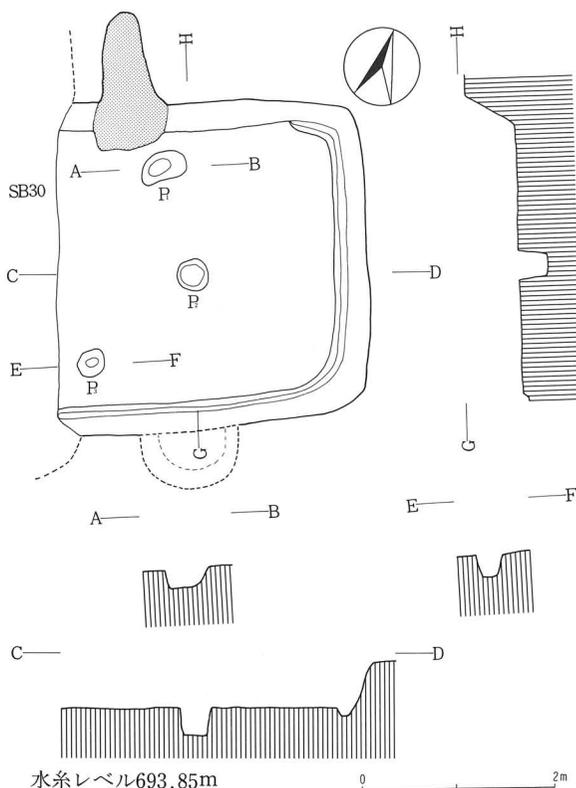
D-1・2グリッドに位置する。

第30号住居址、第54号掘立柱建物址と重複関係を有し、各々の遺構に切られている。

東西は残存部で326cm、南北344cmを測り、平面プランは東西に長い隅丸長方形を呈するものと思われる。カマドを中心とする主軸方位は、 $N-18^{\circ}-W$ を示す。カマドは北壁に位置する。

遺存状態は悪い。床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。ピットは、3基検出されたが、主柱穴と断定できるものはない。P₃は出入口部の施設に関わるものであろう。

周溝は、北東コーナーから南壁下まで検出された。



第145図 第31号住居址実測図

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片の

ほか、自然遺物として炭化材、骨片が出土しているが図示し得るものは、皆無である。

炭化材は、カマドから1点出土しており、コナラ節の一種と同定された。

本住居址の所産期は、古墳時代後期に比定される。

32) 第32号住居址

遺構 (第146・147図、図版22)

D-1グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西525cm、南北500cmを測り、平面プランは南壁中央部がやや張り出す隅丸長方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、 $N-3^{\circ}-W$ を示す。

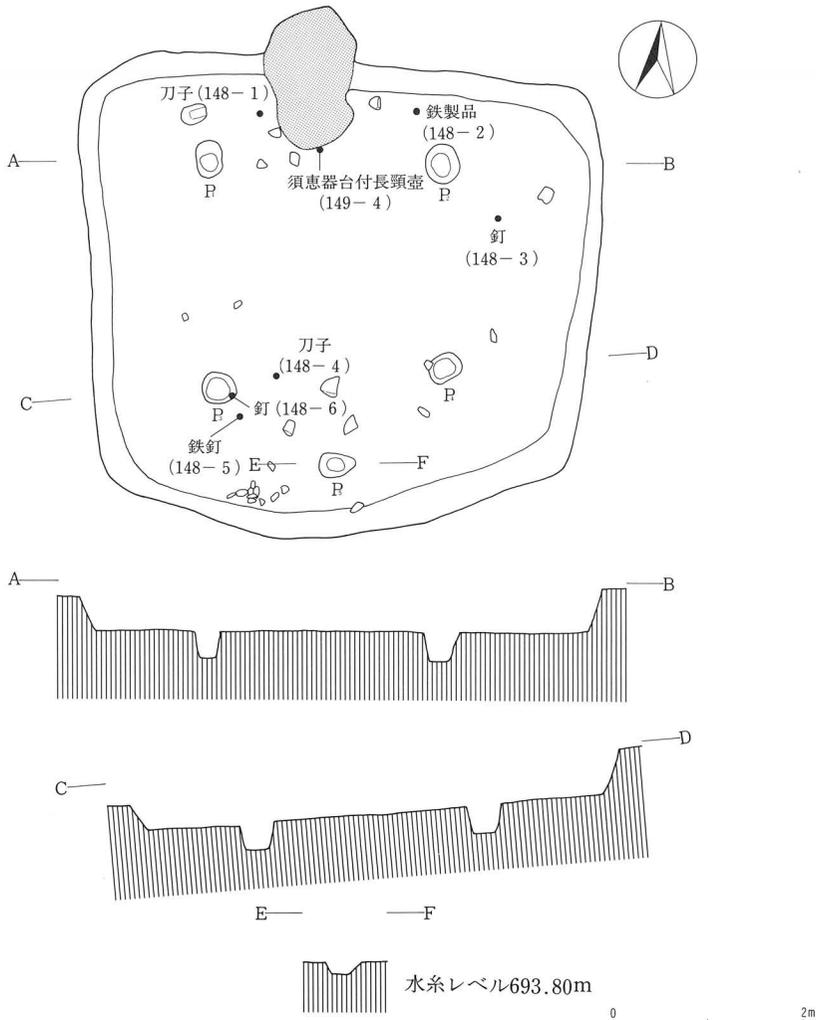
確認面からの壁高は、27~47cmを測り、壁は、およそ75°の角度で立ち上がる。

カマドは、北壁はほぼ中央部に位置する。遺存状態は比較的良好であった。

加工した軽石を袖芯の補強材とし、黒褐色 (7.5Y R2/2) 土により構築されていた。

床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。

ピットは総計5基検出された。P₁~P₄が主柱穴で、P₅は出入口部の施設に関わるものであろう



第146図 第32号住居址実測図

う。

周溝は、検出されなかった。

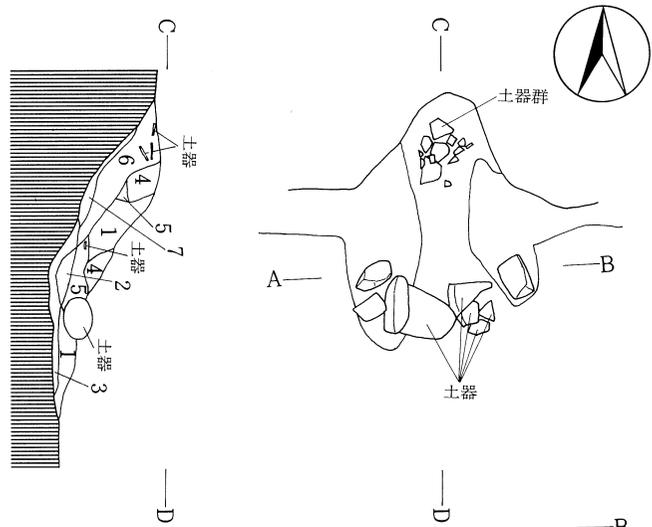
遺物 (第148・149図、図版61・62)

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品が出土している。

このうち、図示したものに、土師器甕2点、須恵器蓋1点、壺2点、鉄製品6点がある。

土師器甕 (第149図1・2) には、球胴を呈するもの (1) と長胴のもの (2) がある。器高は、1が31.6cm、2が32.05cmである。

須恵器蓋 (3) は、宝珠形つまみを持つもので、かえりは口端部より下方へ突出している。口径



層序説明

- 第1層 黒褐色土層 (7.5YR2/2) 炭化物、焼土粒子を含む
- 第2層 橙色土層 (7.5YR6/6) 灰層
- 第3層 赤褐色土層 (5 YR4/8) 焼土層
- 第4層 褐色土層 (7.5YR4/4) 焼土粒子を含む 粘性強い
- 第5層 黒褐色土層 (10YR2/3) 炭化物、焼土粒子を含む
- 第6層 褐色土層 (7.5YR4/6) 焼土粒子を多く含む
- 第7層 暗褐色土層 (10YR3/4) 粘土層

水糸レベル693.108m 0 1m

第147図 第32号住居址カマド実測図

は、8.5cmを測り、小形品である。

壺とした2点のうち、第149図4は台付長頸壺の台部である。

5は、丸底で肩が張る器形である。

口辺部～頸部を欠く。

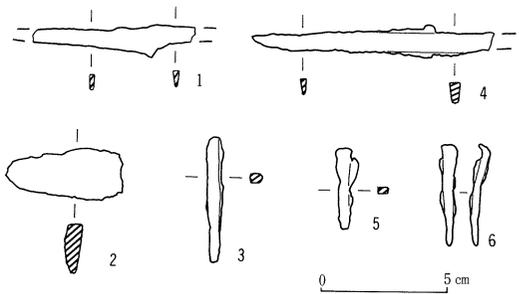
器高は、残存部で19.2cmを測る。

鉄製品(第148図)は6点出土している。

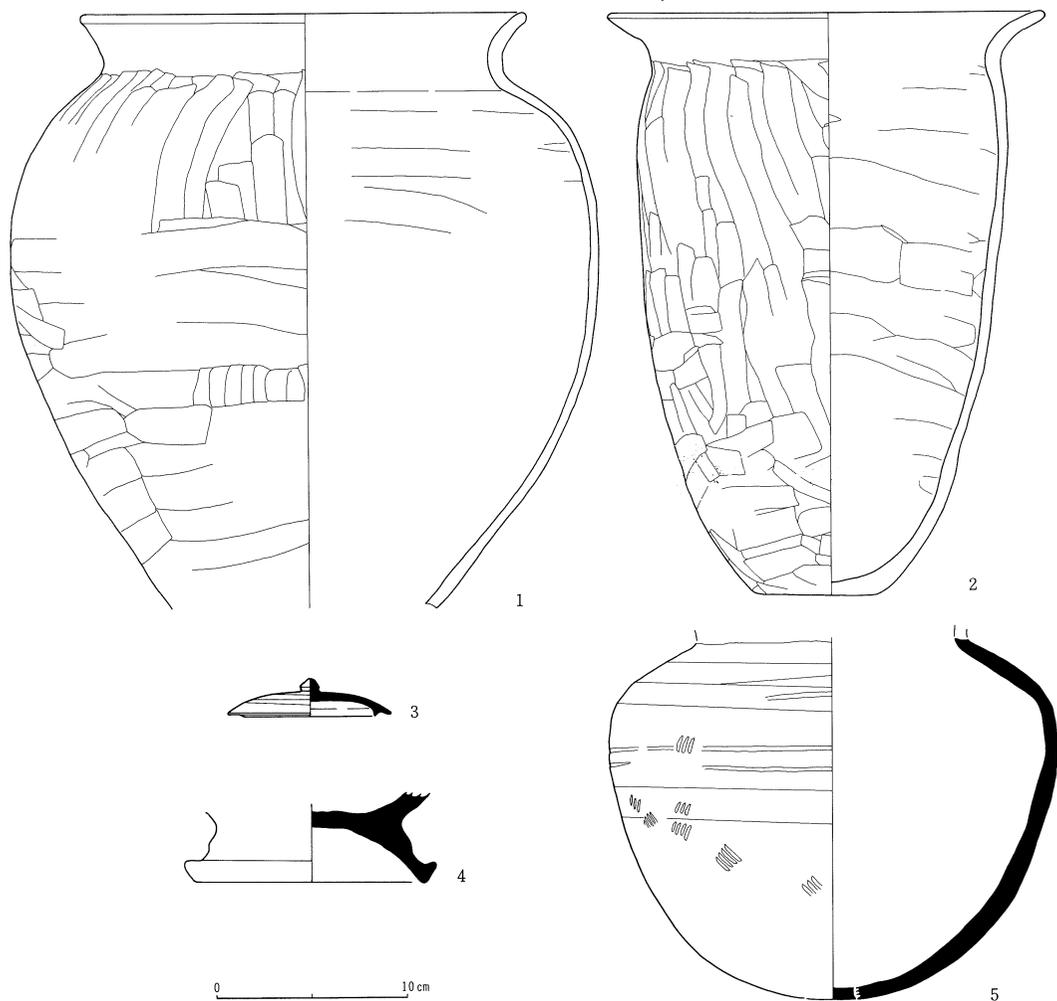
このうち、1・4が刀子、3・5・6が釘である。

2は、破片で全体を窺えないが、鎌の刃部であろうか。

本住居址の所産期は、古墳時代後期に比定される。



第148図 第32号住居址出土遺物 (A)



第149図 第32号住居址出土遺物 (B)

33) 第33号住居址

遺構 (第150・151図、図版22)

D-1 グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

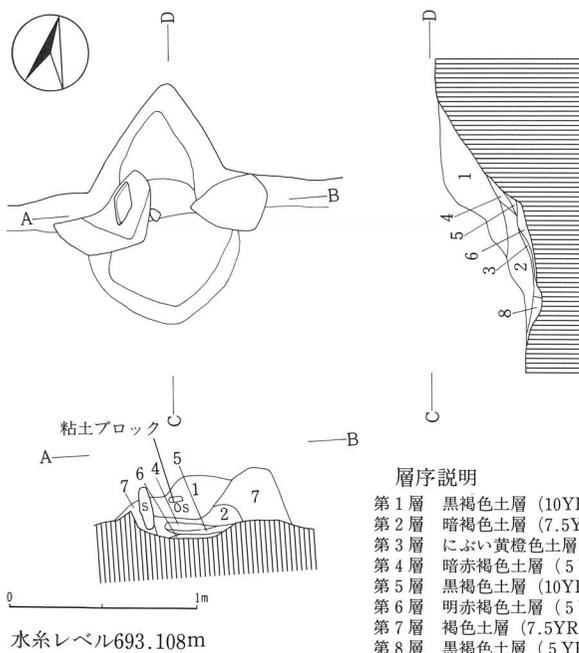
東西404cm、南北396cmを測り、平面プランは隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N-24°-Wを示す。確認面からの壁高は、39~44cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。加工した軽石を袖芯として、褐色 (7.5Y R4/4) を呈する粘土により構築されていたものと考えられる。

床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。

ピットは総計2基検出された。いずれも支柱穴と考えられる。



層序説明

- 第1層 黒褐色土層 (10YR2/3) パミス、ローム粒子の他少量の焼土粒子、炭化物含む
- 第2層 暗褐色土層 (7.5YR3/4) パミス、ローム粒子、焼土粒子含む
- 第3層 にぶい黄橙色土層 (10YR6/4) 灰層
- 第4層 暗赤褐色土層 (5 YR3/6) 焼土層
- 第5層 黒褐色土層 (10YR2/3)
- 第6層 明赤褐色土層 (5 YR5/8) 焼土層
- 第7層 褐色土層 (7.5YR4/4) 粘土層
- 第8層 黒褐色土層 (5 YR2/1) 炭化物を多く含む

第150図 第33号住居址カマド実測図

なお、周溝は検出されなかった。

遺物 (第152・153図、図版62)

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、骨片が出土している。

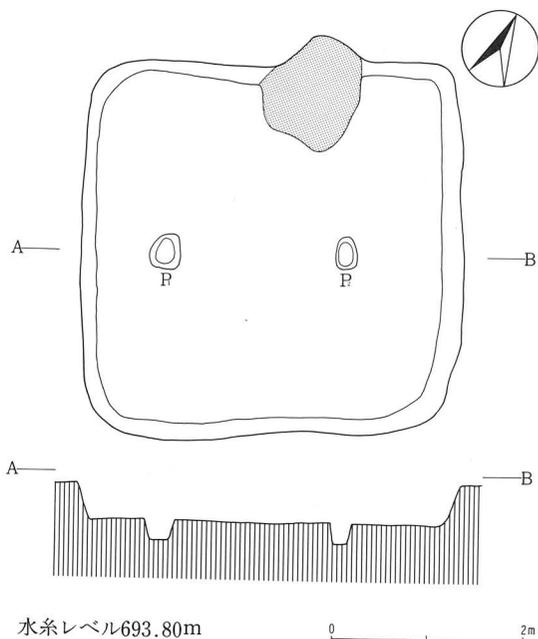
このうち、図示したものに、黒色土器、高杯2点、鉄製品1点がある。

黒色土器高杯 (第152図1・2) は2点ある。いずれも、杯部および脚裾部を欠くため、全体の器形を窺えない。

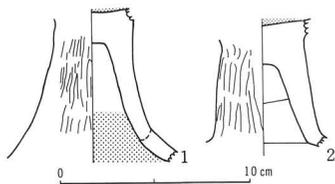
脚部は、2点とも「ハ」の字状に開くものである。外面の調整は、縦方向のヘラケズリを行なった後、ヘラミガキされている。

鉄製品 (第153図1) は、1点ある。

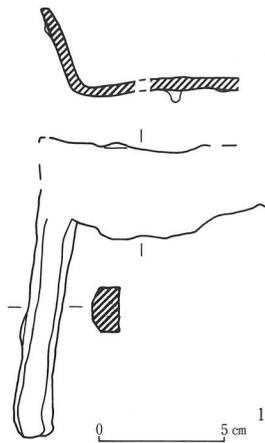
深さおよそ3cmの浅い鉢形のものに、長さ約9cmの脚が付く形状のものである。



第151図 第33号住居址実測図



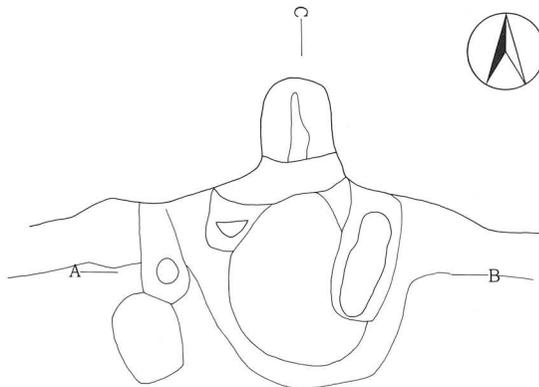
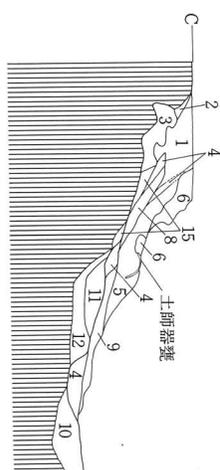
第152図
第33号住居址出土遺物 (A)



第153図
第33号住居址出土遺物 (B)

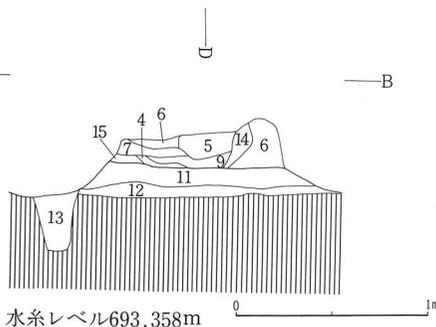
市内では初見である。
残存部からすると、鼎形を呈する鉄鍋ではないかと思われる。鑄鉄と考えられる。脚部を除き、錆化が著しい。
類例に期待したい。
本住居址の所産期は、古墳時代後期に比定される。

34) 第34号住居址



層序説明

- 第1層 暗赤褐色土層 (2.5YR3/2) 焼土をよく含む
- 第2層 黒色土層 (10YR2/1) 焼土等は含まない
- 第3層 にふい黄褐色土層 (10YR5/4) 地山と粘土の構築土
- 第4層 明褐色土層 (7.5YR5/8) 焼土層
- 第5層 赤褐色土層 (2.5YR4/6) 第7層の焼土を多量に含み粘土を若干含む
- 第6層 にふい黄色土層 (2.5Y6/4) 白色粘土を主体とする構築土
- 第7層 明赤褐色土層 (2.5YR5/8) 焼土層
- 第8層 黒褐色土層 (5 YR2/1) 焼土を若干含む
- 第9層 灰オリーブ色土層 (5 Y6/2) 灰層 (粘性有り)
- 第10層 褐色土層 (10YR4/4) 黒色土と地山の埋土 (貼り床)
- 第11層 明褐灰色土層 (5 YR7/2) 地山を主体とする埋土
- 第12層 明黄褐色土層 (10YR6/6) 地山を主体とする埋土
- 第13層 黒褐色土層 (10YR3/1) バミスを若干含む
- 第14層 暗赤褐色土層 (2.5YR3/4) 焼土、黒色土、粘土がブロック的に混じる
- 第15層 暗赤灰色土層 (2.5YR3/1) 粘土を含む (構築土)



第154図 第34号住居址カマド実測図

遺構 (第154・155図、図版22)

D-1 グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西605cm、南北526cmを測り、平面プランは隅丸長方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N-6°-Wを示す。確認面からの壁高は、34~48cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央に位置する。にぶい黄色 (2.5Y6/4) を呈し、粘土を主体とする構築土を主体として構築されていたものと思われる。

床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。

ピットは、総計6基検出された。このうちP₁~P₄が主柱穴と考えられる。周溝は、東・西・南壁下で認められた。

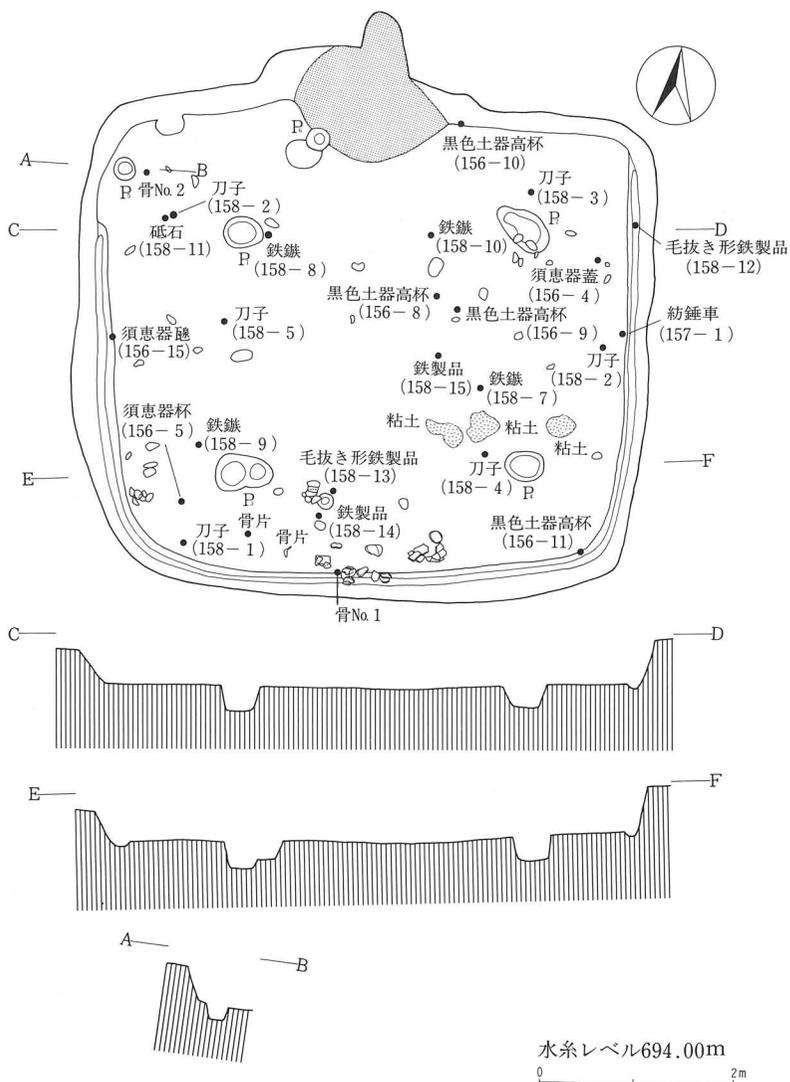
遺物 (第156~158図、
図版62・63)

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、骨片が出土している。

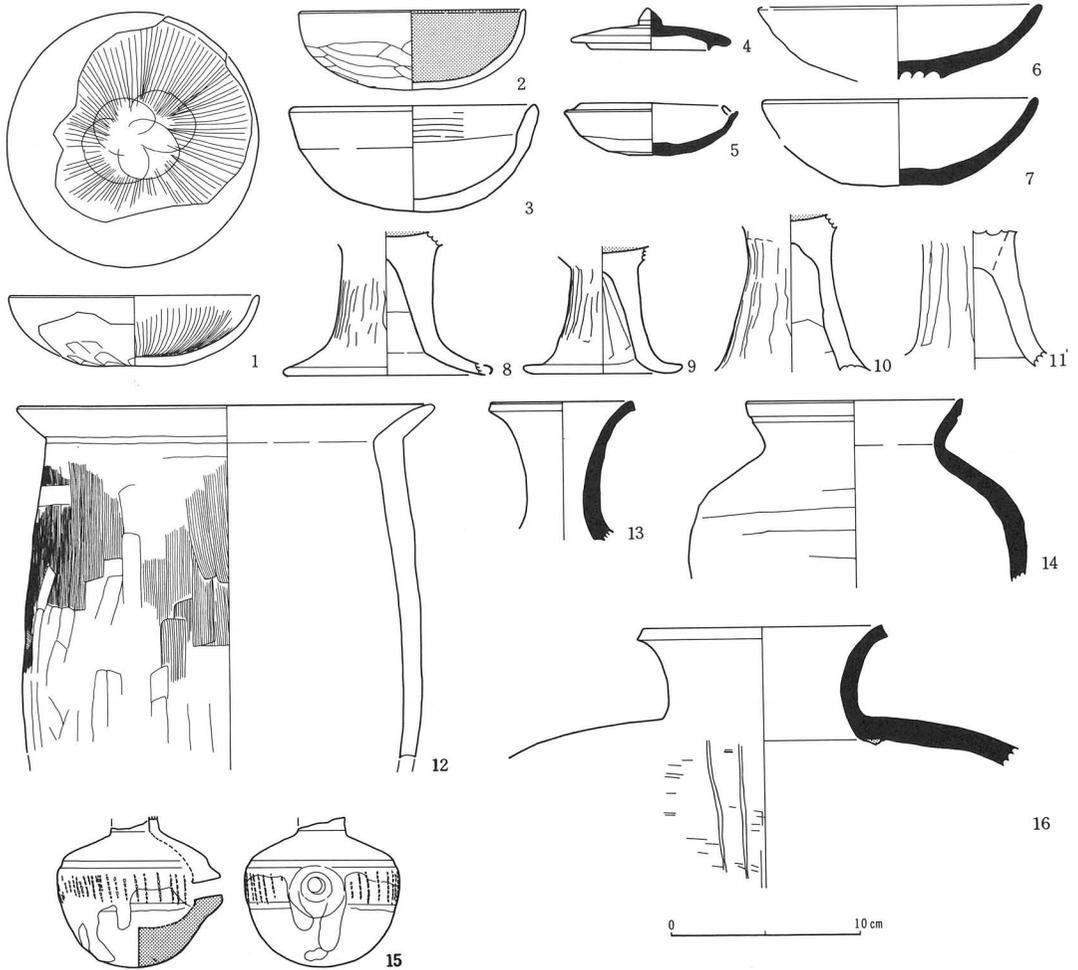
図示したものは、土師器杯2点、甕1点、黒色土器杯1点、高杯4点、須恵器蓋杯3点、高杯1点、甕1点、長頸壺1点、壺1点、横瓶1点、鉄製品15点、石製品2点がある。

土師器杯のうち、11は、内面に放射状とラセン文が施される。胎土・施文からすると在地での模倣品とは異なる。確実に搬入品であるが、畿内産とは断定できない。

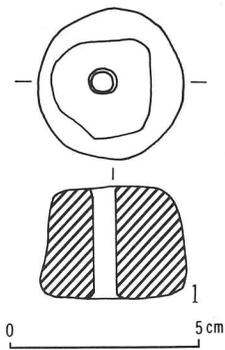
須恵器蓋杯には、6世紀来の杯(5)と、宝珠形つまみをもち、か



第155図 第34号住居址実測図



第156図 第34号住居址出土遺物 (A)



第157図 第34号住居址出土遺物 (B)

えりが口端部より突出する蓋も認められる。

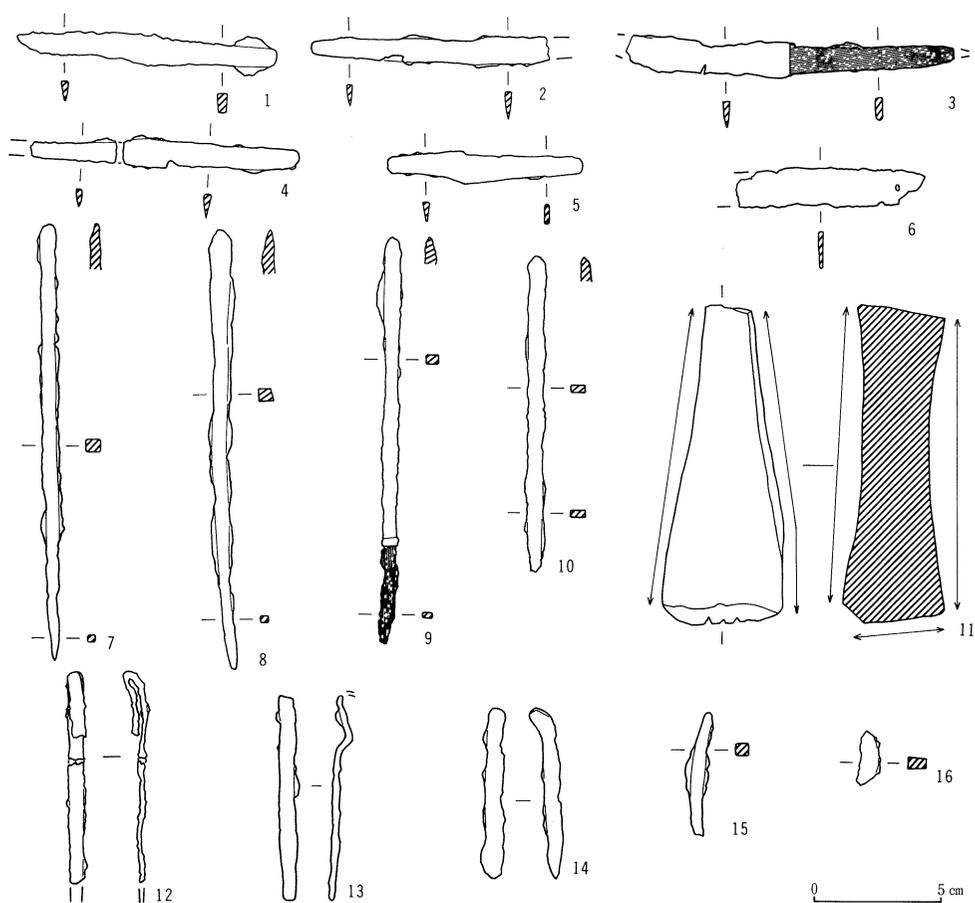
甕(15)は、口辺部～頸部を欠く。胴部外面に自然釉が認められる。猿投窯産と考えられる。

鉄製品(第158図)は15点あり、1～5が刀子、7～10が鉄鏃、12・13が毛抜き形鉄製品、14～16が釘と考えられる。6は1孔を有する。刀子であろうか。

砥石(11)は砂岩製で、重さ272gを計る。

第157図1は、滑石製紡錘車で重さ48gを計る。

本住居址の所産期は、古墳時代後期に比定される。



第158図 第34号住居址出土遺物 (C)

35) 第35号住居址

遺構 (第159図、図版23)

D-2 グリッドに位置する。

他遺構との重複関係はない。

東西277cm、南北242cmを測り、平面プランは東西に長い隅丸長方形を呈する。

南北軸の方位は、N-16°-Wを示す。

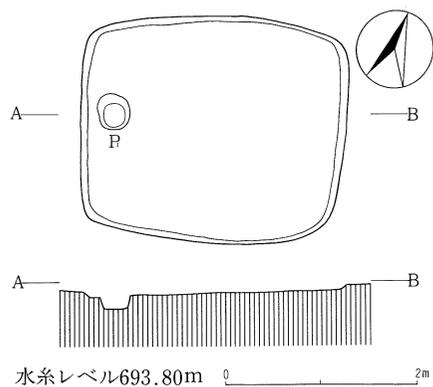
確認面からの壁高は、6 cmと浅い。

カマドは、検出されなかった。

床面は、全体的に軟弱であった。

ピットは1基検出されたのみである。

なお、周溝は検出されなかった。



第159図 第35号住居址実測図

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土しているが量は少なく、図示し得るものは皆無である。本住居址の所産期については明らかにし得なかった。

36) 第36号住居址

遺構 (第160・161図、図版23)

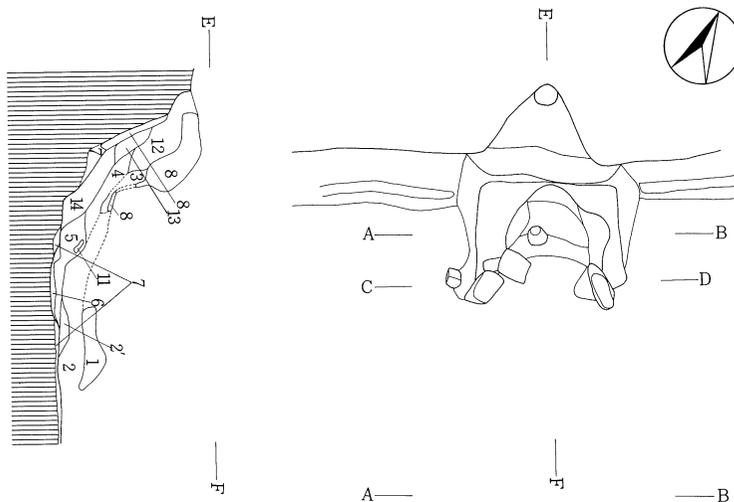
D・E-1、E-2グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西515cm、南北443cmを測り、平面プランは隅丸長方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N-29°-Wを示す。

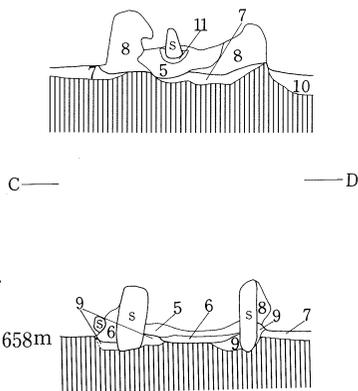
確認面からの壁高は、56~72cmを測り、壁は、およそ80°の角度で立ち上る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は比較的良好であった。加工した軽石を焚口



層序説明

- 第1層 黄褐色土層 (10YR5/6) 粘土を主体とする構築土に黒色土が混じる
- 第2層 暗褐色土層 (10YR3/3) 住居址覆土と同じもの
- 第2'層 第2層に炭化物が多量に混じる
- 第3層 暗赤褐色土層 (2.5YR3/6) 第1層の粘土が焼けたもの
- 第4層 黒褐色土層 (5 YR2/1) 焼土を若干含む
- 第5層 灰色土層 (5 Y6/1) 粘性有る灰層
- 第6層 明赤褐色土層 (5 YR5/8) 焼土層
- 第7層 黒褐色土層 (10YR3/2) 黒色土とロームがブロック状に混じる埋土
- 第8層 黄褐色土層 (10YR5/4) 粘土の構築土
- 第9層 黄褐色土層 (10YR4/3) ローム主体の埋土 (構築土)
- 第10層 暗灰黄色土層 (2.5Y5/2) 粘土を多量に含む埋土 (構築土)
- 第11層 橙色土層 (7.5YR7/6) 粘土が焼けたもの (ブロック状)
- 第12層 褐色土層 (7.5YR4/4) 粘土・焼土・炭化物を含む
- 第13層 暗赤褐色土層 (5 YR3/2) 焼土を若干含む
- 第14層 極暗赤褐色土層 (2.5YR2/4) 炭化物を若干、焼土をブロック状に含む (カマド使用時における堆積)



水系レベル693.658m

0 1m

第160図 第36号住居址カマド実測図

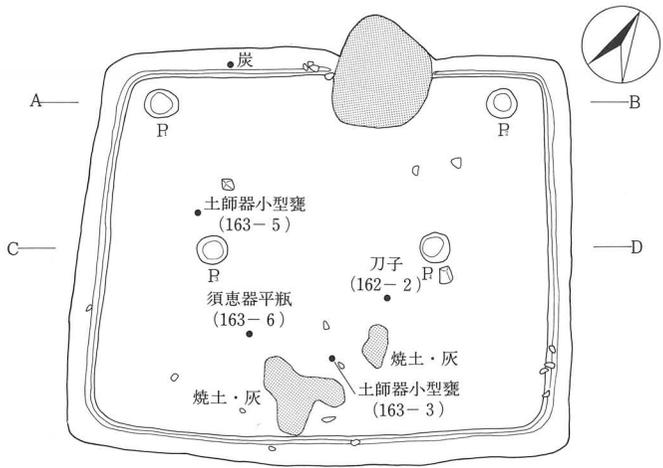
部天井石の支えとして袖部に設置し、本体にはふい黄褐色(10Y R5/4)を呈する粘土により構築されていた。

床面は、中央部は堅緻であったが、壁際では軟弱であった。

ピットは総計4基検出された。

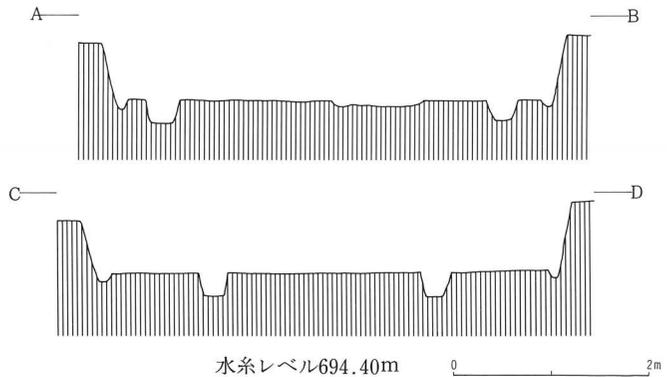
4基とも柱穴と考えられる。

周溝は、カマド部分を除き全周している。



遺物 (第162・163図、図版63)

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、石製品のほか、自然遺物として、炭化材、骨片が出土している。図示したものに、土師器杯3点、高杯2点、甕2点、須恵器平瓶1点、鉄製品3点、砥石1点がある。土師器杯(第163図1~3)には、素縁と考えられるもの(1・3)と外



第161図 第36号住居址実測図

稜口辺を有するもの(2)とがある。高杯(4)は、椀状の杯部をもつものである。甕(5・7)には、長胴のもの(7)と球胴に近いもの(5)とがある。

須恵器平瓶(6)は、肩部にシャープな稜が認められる。

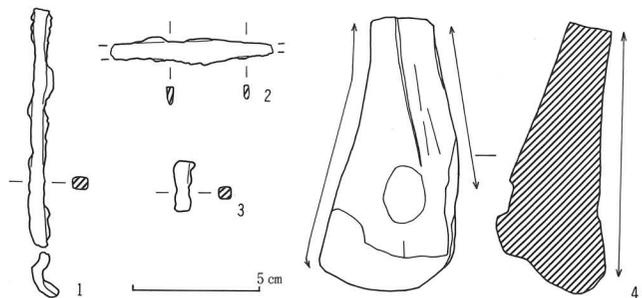
鉄製品(第162図1~3)のうち、2の刀子以外、用途不明である。

砥石は、砂岩製で重さ282gを計る。

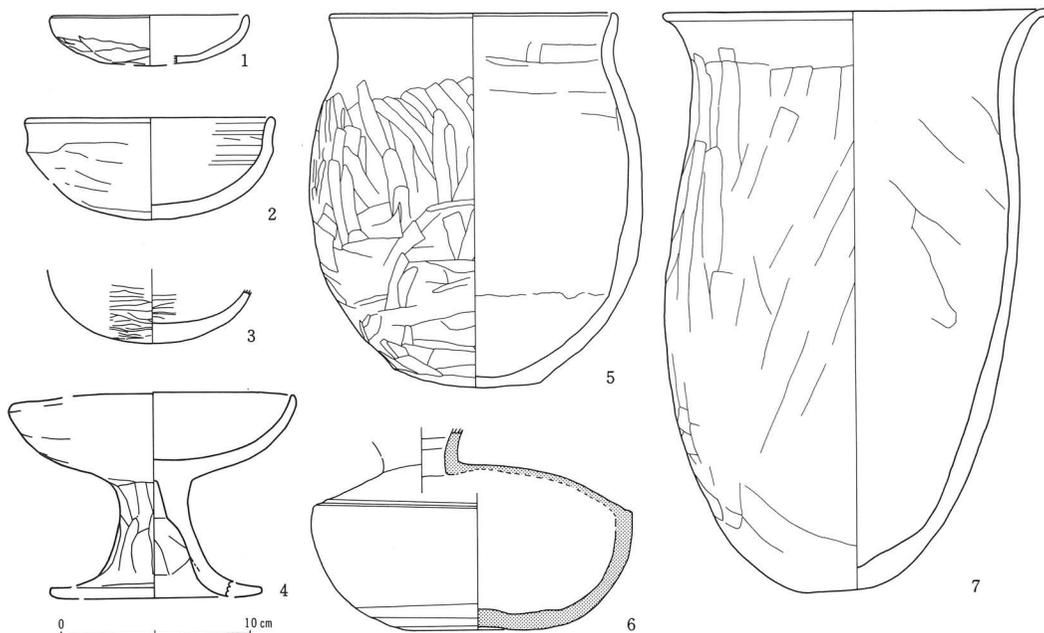
炭化材は、5点出土している。

カマドからコナラ節の一種、クヌギ節の一種の2点が、他からヒノキ属の一種、モミ属の一種、イネ科タケ垂科の一種の3点が出土している。

本住居址の所産期は、古墳時代後期に比定される。



第162図 第36号住居址出土遺物 (A)

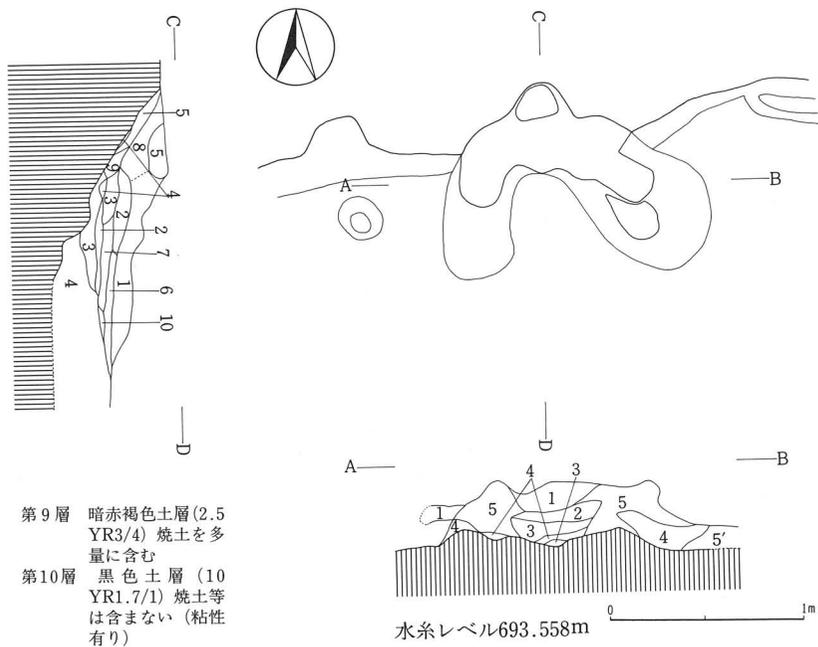


第163図 第36号住居址出土遺物 (B)

37) 第37号住居址

層序説明

- 第1層 におい黄褐色土層 (10YR4/3) 粘土をよく含む
- 第2層 灰黄色土層 (2.5 Y7/2) 灰層 (粘性有り)
- 第3層 明赤褐色土層 (5 YR5/8) 焼土層
- 第4層 黒褐色土層 (10 YR3/1) 黒色土と地山の埋土 (構築土)
- 第5層 におい黄褐色土層 (10YR5/4) 粘土を主体とする構築土
- 第5'層 黒褐色土層 (10 YR2/3) 粘土を主体とする構築土
- 第6層 赤黒色土層 (2.5 YR2/1) 焼土を若干含む炭化材をよく含む
- 第7層 におい橙色土層 (5 YR6/3) 第2層の灰と第3層の焼土が混じった層
- 第8層 極暗赤褐色土層 (2.5YR2/2) 焼土を含む



第164図 第37号住居址カマド実測図

遺構 (第164・165図、図版23)

D・E-1グリッドに位置する。第38号住居址と重複関係を有し、第38号住居址を切って構築されている。

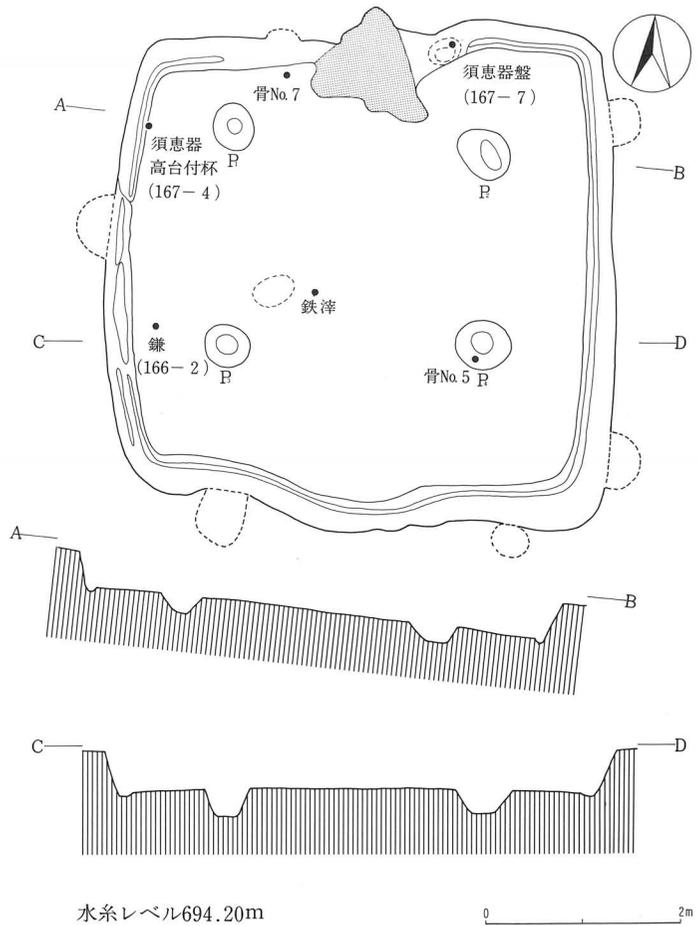
東西537cm、南北532cmを測り、平面プランは隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、 $N-2^{\circ}-W$ を示す。

確認面からの壁高は、36~46cmを測る。

カマドは、北部ほぼ中央部に位置する。にぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する粘土を主体に構築されていたものと考えられる。

床面は、中央部が堅緻であったが壁際では軟弱であった。ピットは、4基検出され、いずれも主柱穴と考えられる。周溝は検出されなかった。



第165図 第37号住居址実測図

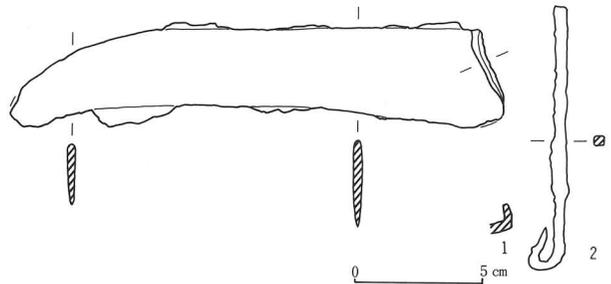
遺物 (第166・167図、図版63・64)

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、炭化材、骨片が出土している。

このうち、図示したものに、土師器甕、黒色土器鉢、須恵器蓋、杯、高台付杯、壺、盤、鉄製品がある。

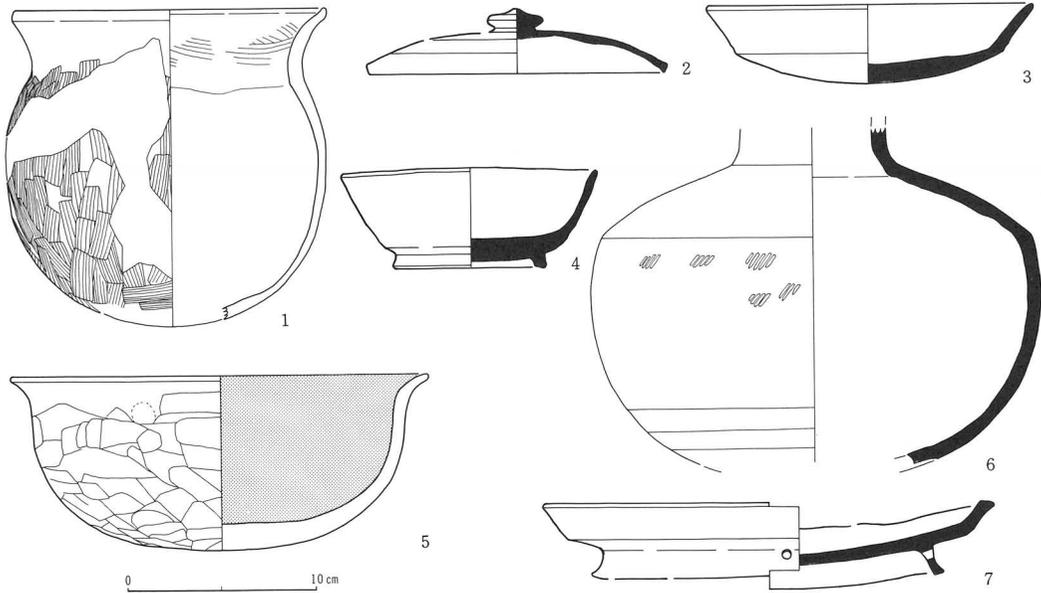
土師器甕は、口縁部をつまみ上げた形状で、丸底のものである。在地の土器とは様相を異にしている。

鉢は、碗を大きくした形態である。



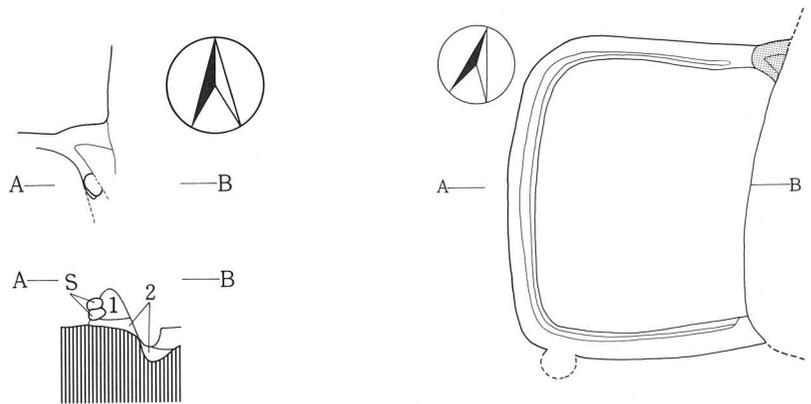
第166図 第37号住居址出土遺物 (A)

盤は、台部に3孔を有している。鉄製品（第166図）には、鎌（1）と用途不明なものがある。
炭化材は、カマドから2点出土している。クヌギ節の一種と同定された。
本住居址の所産期は、奈良時代に比定される。



第167図 第37号住居址出土遺物（B）

38) 第38号住居址



層序説明

第1層 にふい黄褐色土層（10YR4/3）粘土を主体とする構築土
第2層 にふい黄褐色土層（10YR5/4）ロームと黒色土の埋土
水系レベル693.358m 0 1m

0 2m
水系レベル694.10m

第168図 第38号住居址カマド実測図

第169図 第38号住居址実測図

遺構 (第168・169図、図版24)

D・E-1 グリッドに位置する。第37号住居址と重複関係を有し、第37号住居址に切られる。東西は残存部で258cm、南北340cmを測り、平面プランは東西に長い隅丸長方形を呈する。カマドを中心とする主軸方位は、N-13°-Wを示す。確認面からの壁高は、29cmを測る。カマドは、北壁ほぼ中央部に位置すると思われるが、大半は第37号住居址により壊されている。床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。また、ピットは検出されなかった。周溝は、残存部からするとカマド部分を除き、全周していたと考えられる。

遺物

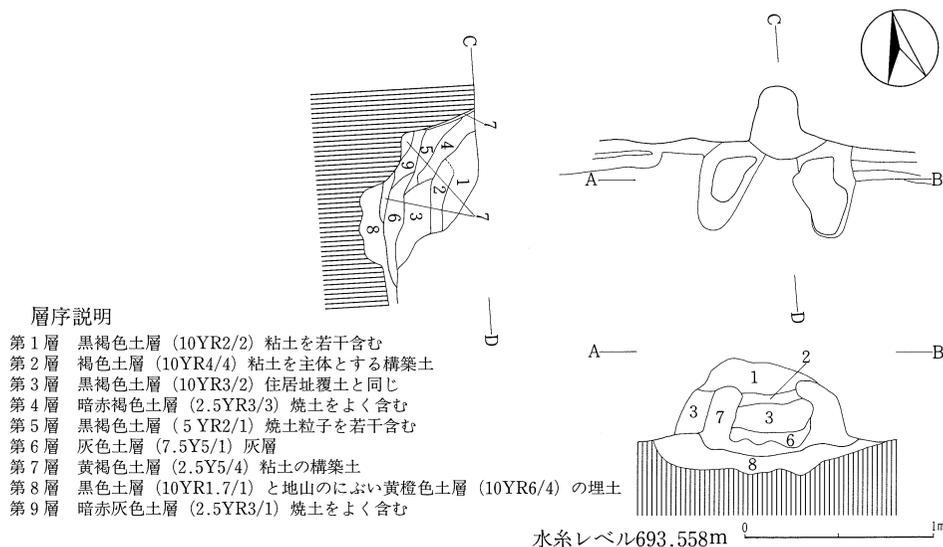
土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土しているが、図示し得るものは皆無である。

本住居址の所産期は、出土土器片、重複関係から古墳時代後期に比定される。

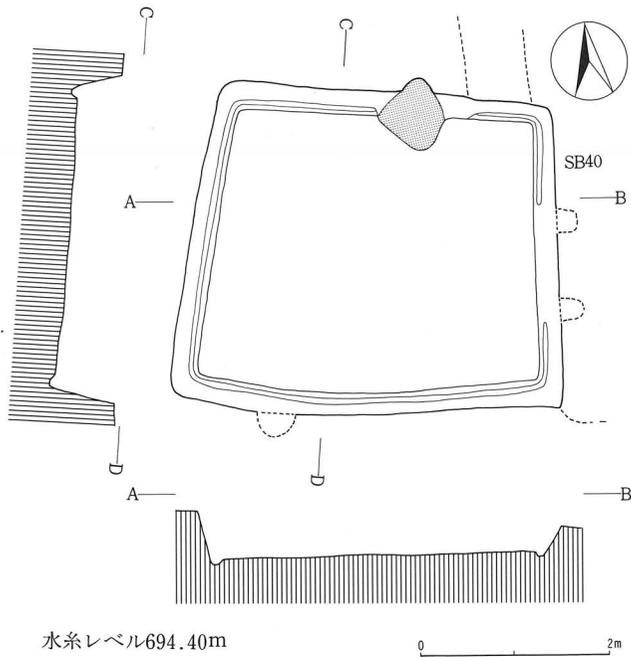
39) 第39号住居址

遺構 (第170・171図、図版24)

E-1 グリッドに位置する。第40号住居址と重複関係を有し、第40号住居址に切られている。東西は残存部で392cm、南北345cmを測り、平面プランは東西に長い隅丸長方形を呈する。カマドを中心とする主軸方位は、N-10°-Eを示す。確認面からの壁高は、27~64cmを測る。カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は、比較的良好であった。カマド本体は、黄褐色 (2.5Y5/4) を呈する粘土により構築されていた。床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。また、ピットは検出されなかった。



第170図 第39号住居址カマド実測図



第171図 第39号住居址実測図

周溝は、カマド部分を除き全周していたと思われるが、東側は第40号住居址と重複していることもあり、東壁部では明確でなかった。

遺物

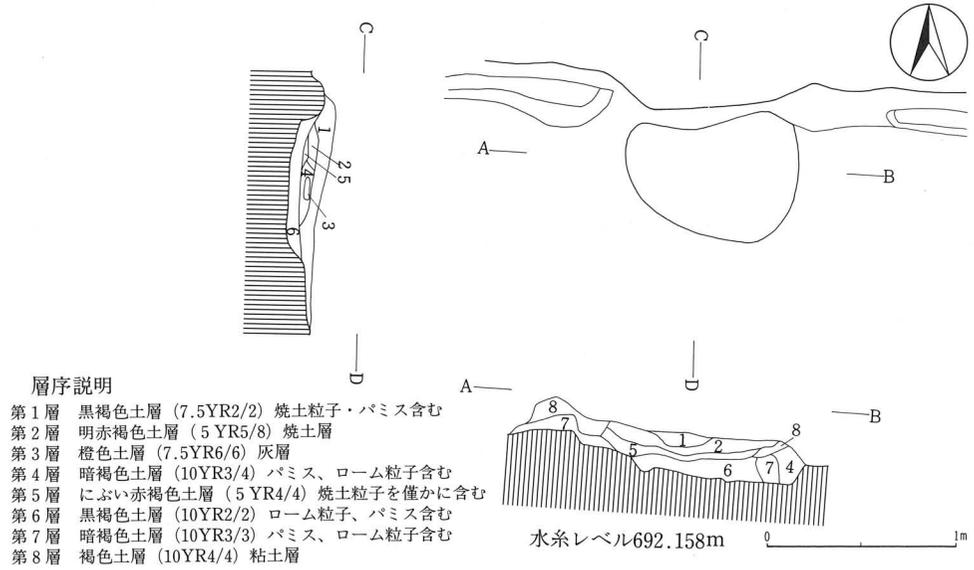
土師器片、黒色土器片、須恵器片のほか、自然遺物として炭化材、骨片が出土しているが、図示し得るものは皆無である。

炭化材は3点出土しており、カマド出土の2点はコナラ節の一種とクヌギ節の一種、もう一点はモミ属の一種と同定された。

本住居址の所産期は、古墳時代後期に比定される。

40) 第40号住居址

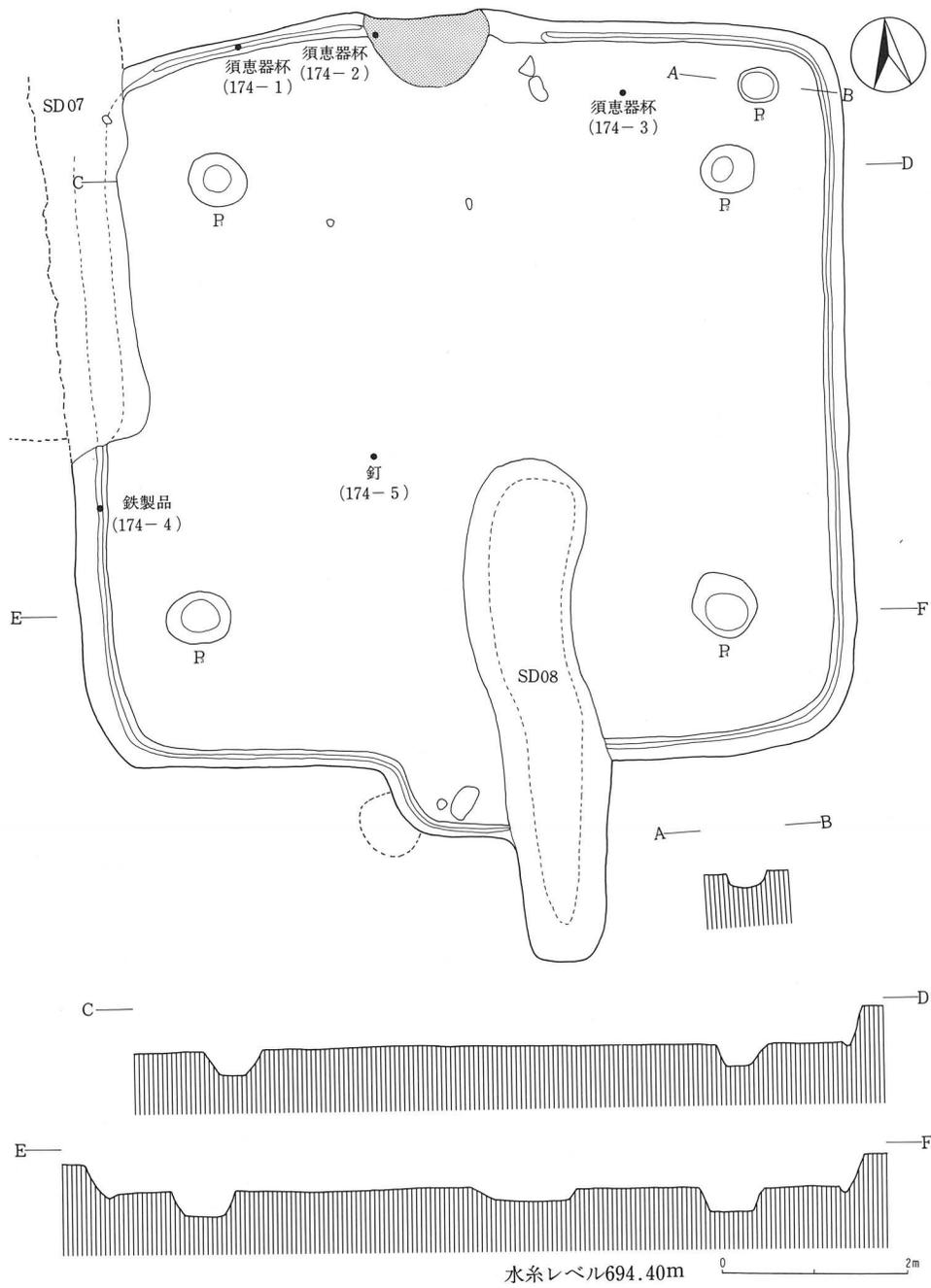
遺構 (第172・173図、図版24)



層序説明

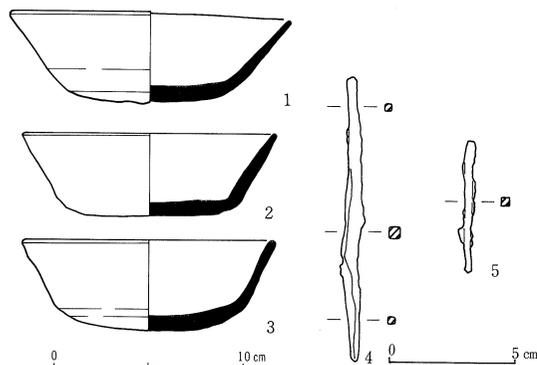
- 第1層 黒褐色土層 (7.5YR2/2) 焼土粒子・パミス含む
- 第2層 明赤褐色土層 (5 YR5/8) 焼土層
- 第3層 橙色土層 (7.5YR6/6) 灰層
- 第4層 暗褐色土層 (10YR3/4) パミス、ローム粒子含む
- 第5層 にふい赤褐色土層 (5 YR4/4) 焼土粒子を僅かに含む
- 第6層 黒褐色土層 (10YR2/2) ローム粒子、パミス含む
- 第7層 暗褐色土層 (10YR3/3) パミス、ローム粒子含む
- 第8層 褐色土層 (10YR4/4) 粘土層

第172図 第40号住居址カマド実測図



第173図 第40号住居址実測図

E-1 グリッドに位置する。第35号掘立柱建物址、第7・8号溝址により切られている。東西848cm、南北812cmを測り、平面プランは隅丸方形を呈する。カマドを中心とする主軸方位は、N-3°-Eを示す。確認面からの壁高は、33~39cmを測る。カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は悪い。床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。ピットは総計5基検出された。このうち、P₂~P₅の4基が支柱穴である。周溝は、カマド部分を除き、全周する。また、南壁中央部では張り出し部が認められた。



第174図 第40号住居址出土遺物

遺物 (第174図、図版64)

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品のほか、自然遺物として炭化材が出土している。このうち、図示したものは、須恵器杯3点、鉄製品2点である。

須恵器杯は、いずれも底部へラキリがなされる。鉄製品は、1は工具、2が釘と考えられる。炭化材は1点出土しており、広葉樹(散孔材)と同定された。

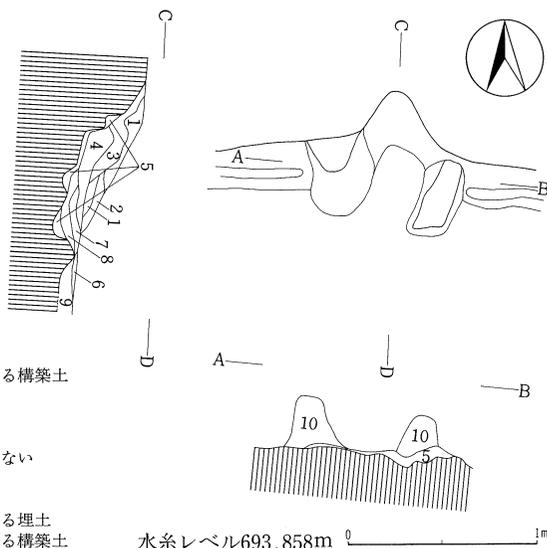
本住居址の所産期は、奈良時代に比定される。

4) 第41号住居址

遺構 (第175・176図、図版25)

層序説明

- 第1層 黒褐色土層 (10YR3/2) 焼土を若干含む
- 第2層 におい黄褐色土層 (10YR4/3) 粘土を主体とする構築土
- 第3層 暗赤褐色土層 (2.5YR3/2) 焼土を多量に含む
- 第4層 赤褐色土層 (2.5YR2/1) 焼土、炭化物を含む
- 第5層 黒褐色土層 (10YR3/1) 黒色土とロームの埋土
- 第6層 黒褐色土層 (10YR3/1) 焼土等はほとんど含まない
- 第7層 灰黄褐色土層 (10YR6/2) 灰層 (粘性有り)
- 第8層 明赤褐色土層 (5 YR5/6) 焼土層
- 第9層 におい黄橙色土層 (10YR6/3) 地山を主体とする埋土
- 第10層 におい黄褐色土層 (10YR5/4) 粘土を主体とする構築土



第175図 第41号住居址カマド実測図

本住居址は、E-1グリッドに位置する。

他遺構との重複関係はない。

東西540cm、南北474cmを測り、平面プランは東西に長い隅丸長方形を呈する。

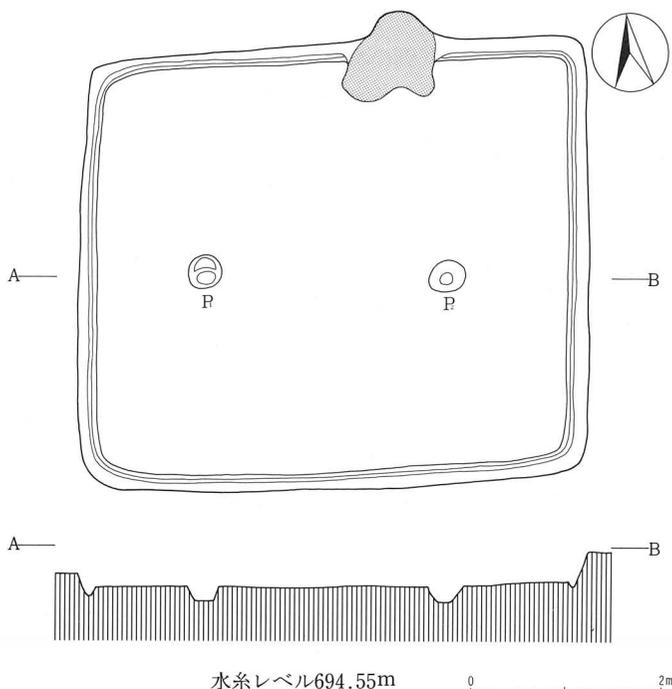
カマドを中心とする主軸方位は、N-1.5°-Eを示す。

確認面からの壁高は、15~32cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。にぶい黄褐色(10YR5/4)を呈し、粘土を主体とする構築土により築かれていた。

床面は、中央部が堅緻であったが壁際では軟弱であった。

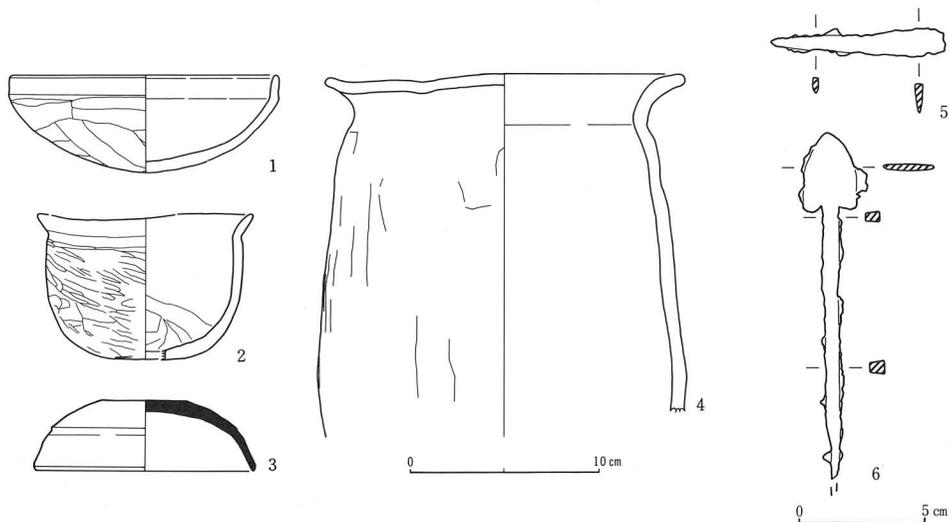
ピットは2基検出され、主柱穴と考えられる。周溝は、カマド部分を除き全周している。



第176図 第41号住居址実測図

遺物 (第177図、図版64)

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品の外、自然遺物として炭化材、骨片が出土している。



第177図 第41号住居址出土遺物

このうち、図示したものは、土師器杯、小型甕、甕、須恵器蓋各1点と鉄製品2点である。
 土師器甕（4）は、長胴のもので最大径を胴部に有する。須恵器蓋は口径11.4cmと小型である。
 鉄製品には、刀子（5）と鉄鏃がある。
 炭化材はカマドから出土しており、クヌギ節の一種と同定された。
 本住居址の所産期は、古墳時代後半に比定される。

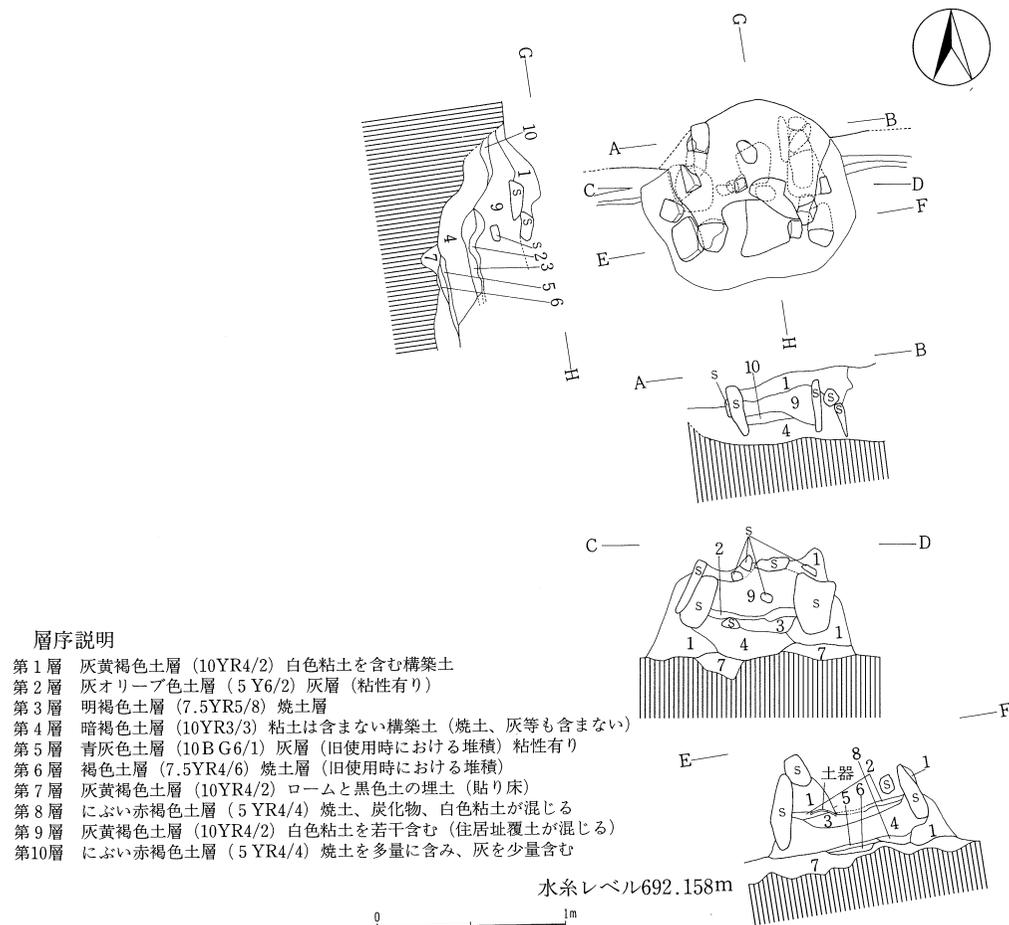
42) 第42号住居址

遺構（第178・179図、図版25）

D-3グリッドに位置する。第43・51号住居址、第34号掘立柱建物址、第3号溝址と重複関係を有し、第43・51号住居址を切り、第34号掘立柱建物址、第3号溝址に切られている。

東西365cm、南北426cmを測り、平面プランは、南北に長い隅丸長方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N-13°-Wを示す。



層序説明

- 第1層 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 白色粘土を含む構築土
- 第2層 灰オリーブ色土層 (5 Y6/2) 灰層 (粘性有り)
- 第3層 明褐色土層 (7.5YR5/8) 焼土層
- 第4層 暗褐色土層 (10YR3/3) 粘土は含まない構築土 (焼土、灰等も含まない)
- 第5層 青灰色土層 (10B G6/1) 灰層 (旧使用時における堆積) 粘性有り
- 第6層 褐色土層 (7.5YR4/6) 焼土層 (旧使用時における堆積)
- 第7層 灰黄褐色土層 (10YR4/2) ロームと黒色土の埋土 (貼り床)
- 第8層 にぶい赤褐色土層 (5 YR4/4) 焼土、炭化物、白色粘土が混じる
- 第9層 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 白色粘土を若干含む (住居址覆土が混じる)
- 第10層 にぶい赤褐色土層 (5 YR4/4) 焼土を多量に含み、灰を少量含む

第178図 第42号住居址カマド実測図

確認面からの壁高は、28cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。

加工した軽石、集塊岩、安山岩、河原石と灰黄褐色（10Y R4/2）を呈し、粘土を含む構築土により築かれていた。

床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。

ピットは総計2基検出された。位置は対称的ではないが、柱穴と考えられる。

周溝は、北西コーナーから西壁下、北東コーナーから東壁下で検出されたが、南壁下では確認できなかった。

遺物（第180・181図、図版64）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、緑釉陶器片、鉄製品、鉄滓、骨片が出土している。

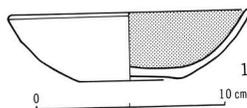
このうち、図示したものは、黒色土器杯1点と鉄製品2点である。

黒色土器杯（第180図1）は、底部糸切りがなされる。

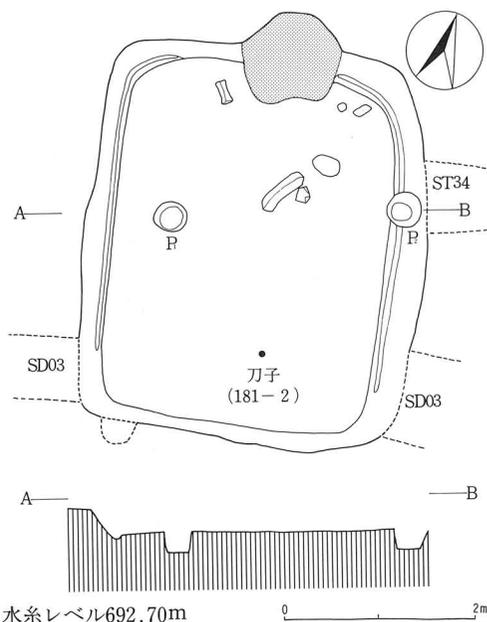
鉄製品（第181図1・2）は、2点とも刀子である。

2の茎部には木質部の残存が認められる。

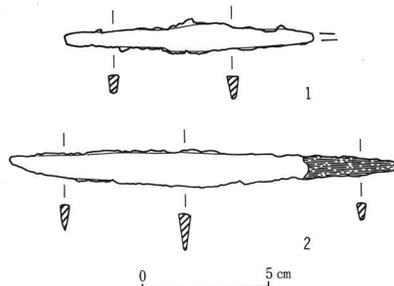
本住居址の所産期は、平安時代に比定される。



第180図 第42号住居址出土遺物(A)



第179図 第42号住居址実測図



第181図 第42号住居址出土遺物(B)

43) 第43号住居址

遺構（第182・183図、図版25）

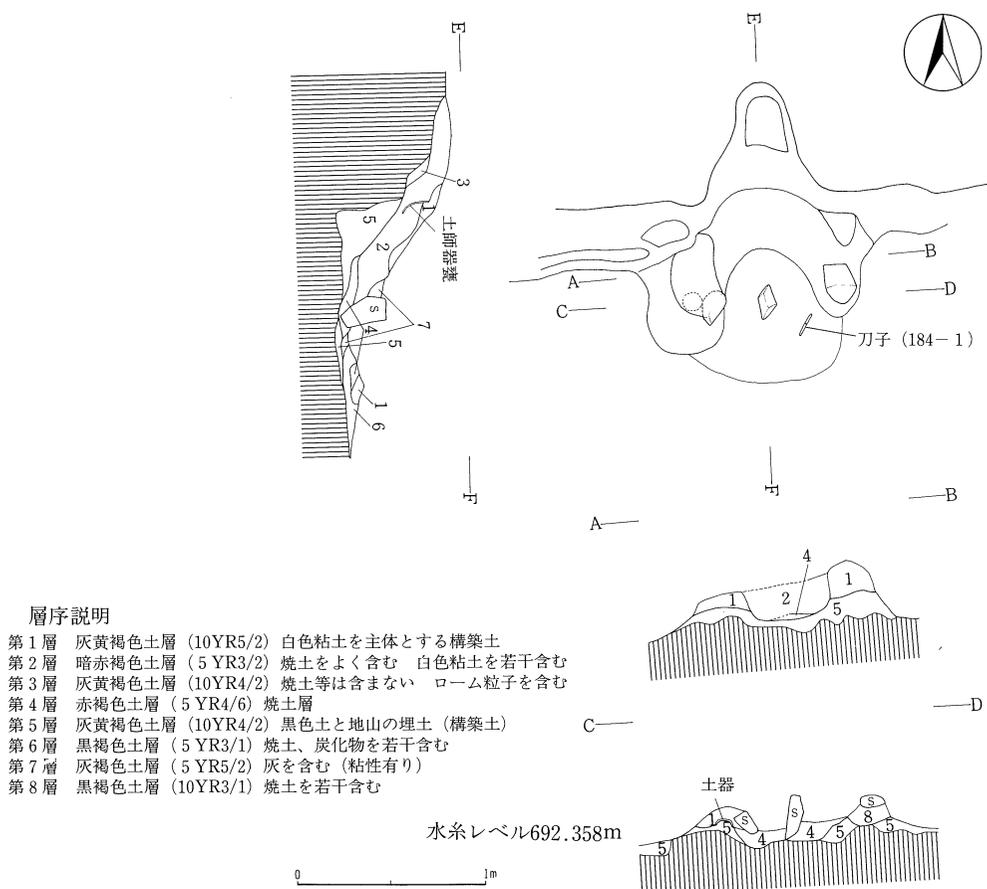
D-3グリッドに位置する。第42・51号住居址、第34号掘立柱建物址と重複関係を有し、第51号住居址を切り、第42号住居址、第34号掘立柱建物址に切られている。

東西487cm、南北484cmを測り、平面プランは不整な隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N-13°-Wを示す。

確認面からの壁高は、34~43cmを測り、壁は、およそ60°の角度で立ち上がる。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は比較的良好であった。焚口部にかかる袖先端部には、安山岩、河原石を用いている。焚口部天井石は認められなかったが、それに対応する



層序説明

- 第1層 灰黄褐色土層 (10YR5/2) 白色粘土を主体とする構築土
- 第2層 暗赤褐色土層 (5 YR3/2) 焼土をよく含む 白色粘土を若干含む
- 第3層 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 焼土等は含まない ローム粒子を含む
- 第4層 赤褐色土層 (5 YR4/6) 焼土層
- 第5層 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 黒色土と地山の埋土 (構築土)
- 第6層 黒褐色土層 (5 YR3/1) 焼土、炭化物を若干含む
- 第7層 灰褐色土層 (5 YR5/2) 灰を含む (粘性有り)
- 第8層 黒褐色土層 (10YR3/1) 焼土を若干含む

第182図 第43号住居址カマド実測図

ものであろう。カマド本体は、灰黄褐色 (10Y R4/2) 土を基盤とし、灰黄褐色 (10Y R5/2) を呈し、粘土を主体とする構築土により築かれていた。また、須恵器杯 (第185図4) は、袖部の補強として用いられたものであろう。なお、火床部では、安山岩製の支脚石が認められた。

床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。

ピットは、総計6基検出された。このうち、P₁~P₄が主柱穴と考えられる。

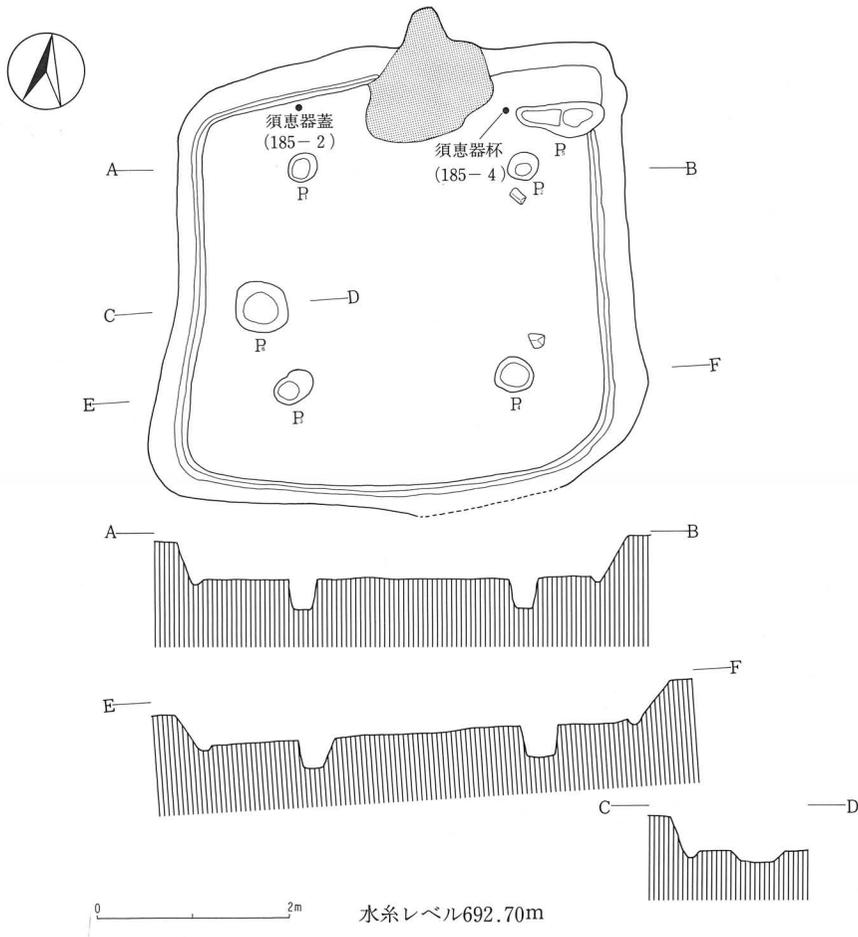
周溝は、北壁コーナー付近を除き、ほぼ全周している。

遺物 (第184・185図、図版64・65)

本住居址からは、土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品のほか、自然遺物として炭化材、骨片が出土している。

このうち、図示したものに、土師器甕、須恵器蓋、杯、鉄製品がある。

土師器甕 (第185図5~9) は、5点出土している。球胴に近いもの (5) と長胴のもの (6~9)



第183図 第43号住居址実測図

とに区分される。

球胴の甕(5)は、外面へラミガキがなされる。

長胴の甕は、最大径を口縁部に有し、外面縦方向のへラケズリがなされ器壁が厚いもの(8)と、口辺部が「く」の字状に外反し器壁の薄いわゆる武蔵型の甕(6・7・9)がある。

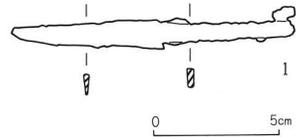
須恵器蓋(1・2)は、扁平な宝珠形つまみを有し、内面にかえりが認められる。

須恵器杯(4)は、カマド袖部から出土した。底部に「=」のへら記号が認められる。

鉄製品(第184図1)は、カマド火床部から出土した。刀子である。

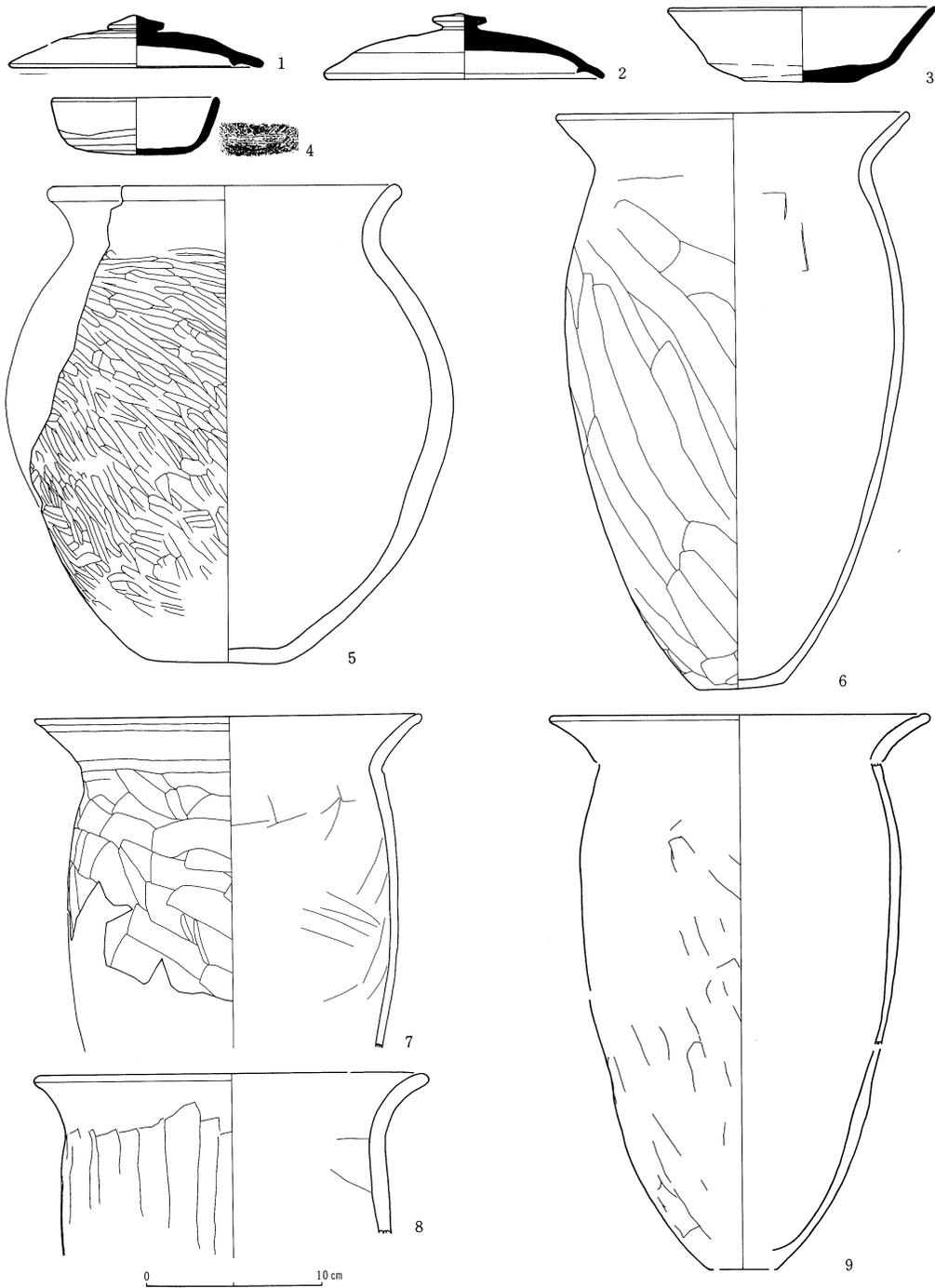
炭化材は2点あり、カマド出土のものがカエデ属の一種、もう一点はヒノキ属の一種と同定された。

本住居址の所産期は、奈良時代初めに比定される。



第184図

第43号住居址出土遺物(A)



第185図 第43号住居址出土遺物 (B)

44) 第44号住居址

遺構 (第186・187図、図版26)

C-3グリッドに位置する。第19・20・48号掘立柱建物址と重複関係を有し、第19・20・48号掘立柱建物址に切られている。

東西468cm、南北407cmを測り、平面プランは東西にやや長い隅丸長方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N-22°-Wを示す。

確認面からの壁高は、40cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は悪い。おそらく、灰赤色(2.5 YR4/2)を呈する粘土を主体として構築されていたものと思われる。

床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。

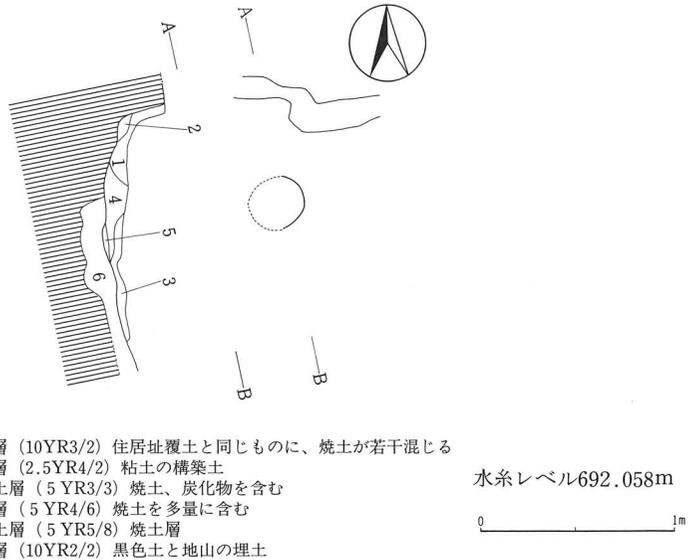
なお、柱穴、周溝は検出されなかった。

遺物 (第188図)

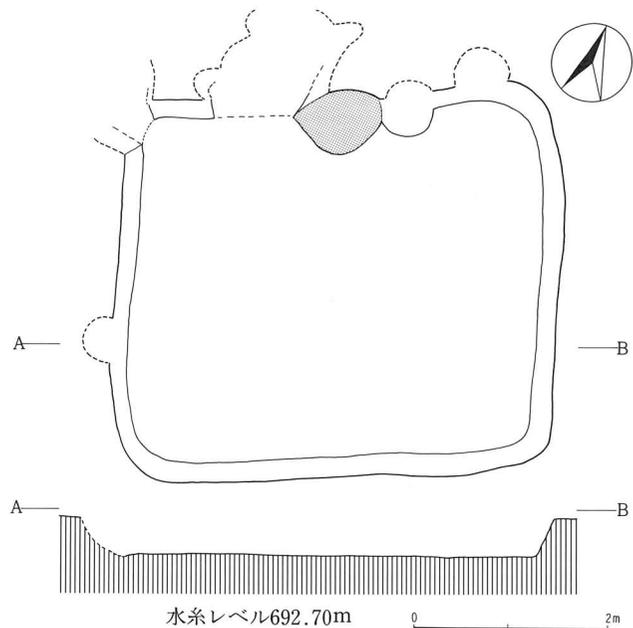
土師器片、黒色土器片、須恵器片、青磁、骨片が出土している。

このうち、図示したものに、墨書土器片、青磁がある。

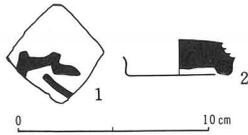
墨書土器(1)は、黒色土器杯の破片で、文字は不明である。



第186図 第44号住居址カマド実測図



第187図 第44号住居址実測図



第188図
第44号住居址出土遺物

2は、龍泉窯系青磁碗の底部である。口辺部～体部を欠く。見込み部を円板状に打ち欠いており、何らかの意図で再利用された可能性が強い。高台は、削り出し高台である。13～14世紀の所産である。

本住居址の所産期は、平安時代に比定される。

45) 第45号住居址

遺構 (第189・190図、図版26)

A-2グリッドに位置する。第46号住居址と重複関係を有し、第46号住居址を切って構築されている。また東部は攪乱を受けている。

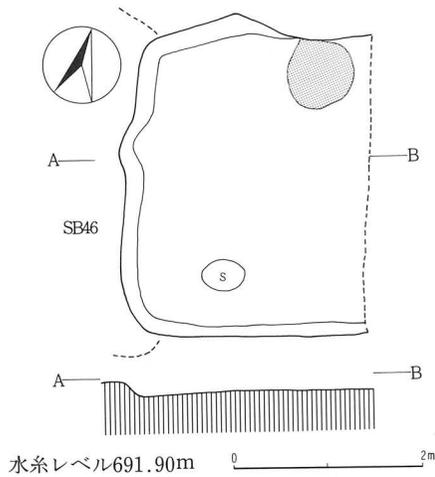
東西は残存部で256cm、南北340cmを測り、平面プランは、東西に長い隅丸長方形を呈すると思われる。

カマドを中心とする主軸方位は、N-16°-Wを示す。

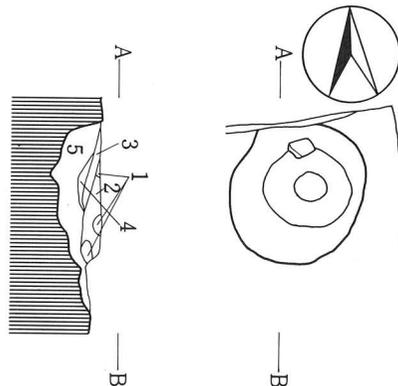
確認面からの壁高は、15cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置していたと思われる。遺存状態は悪い。おそらく、加工した軽石、明褐色(7.5YR3/4)土により構築されていたと思われる。

床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。ピット、周溝は検出されなかった。



第189図 第45号住居址実測図



層序説明

- 第1層 明褐色土層 (7.5YR3/4) 粘性強い
- 第2層 明褐色土層 (10YR3/4) バミス、炭を含む
- 第3層 褐色土層 (10YR4/6) 粘性はほとんどない 僅かにバミスを含む
- 第4層 明褐色土層 (7.5YR5/8) 焼土層
- 第5層 褐色土層 (7.5YR4/3) ローム粒子、黒色土、バミスを含む床構築土

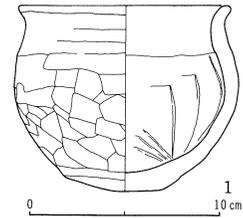
水系レベル692.553m

0 1m

第190図 第45号住居址カマド実測図

遺物 (第191図、図版66)

土師器片、黒色土器片、須恵器片のほか自然遺物として炭化材が出土している。このうち、図示したものは、土師器小型甕1点である。肩部～底部外面はヘラケズリされ、底部は丸底気味となる。炭化材は、カマドから一点出土しており、サクラ属類似種と同定された。



第191図
第45号住居址出土遺物

本住居址の所産期は、古墳時代後期に比定される。

46) 第46号住居址

遺構 (第192・193図、図版26)

A-2グリッドに位置する。第45号住居址と重複関係を有し、第45号住居址により切られる。

また、住居址東部は、第45号住居址と同じく、攪乱を受けている。

東西は残存部で419cm、南北440cmを測り、平面プランは隅丸方形を呈するものと思われる。

カマドを中心とする軸方位は、N-1°-Eを示す。確認面からの壁高は、15~19cmを測る。

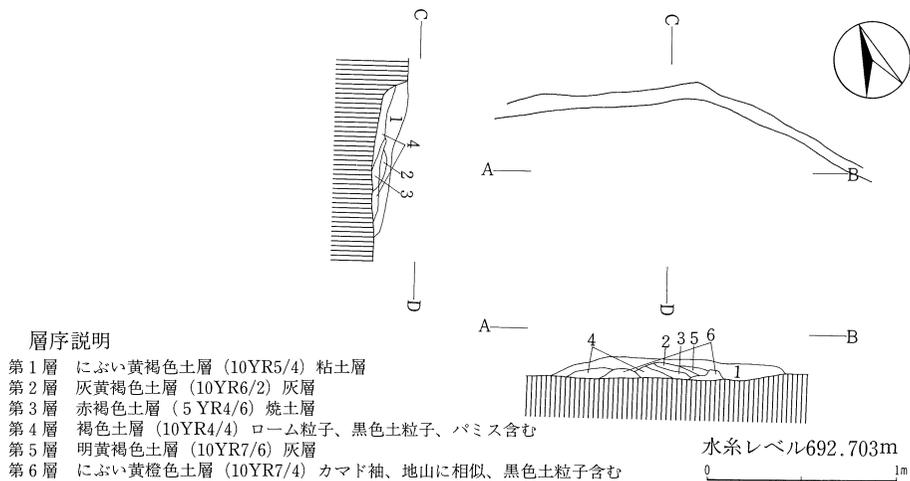
カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するものと思われる。遺存状態は悪い。にぶい黄褐色(10Y R 5/4)を呈する粘土を主体として構築されていたものと考えられる。

床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。

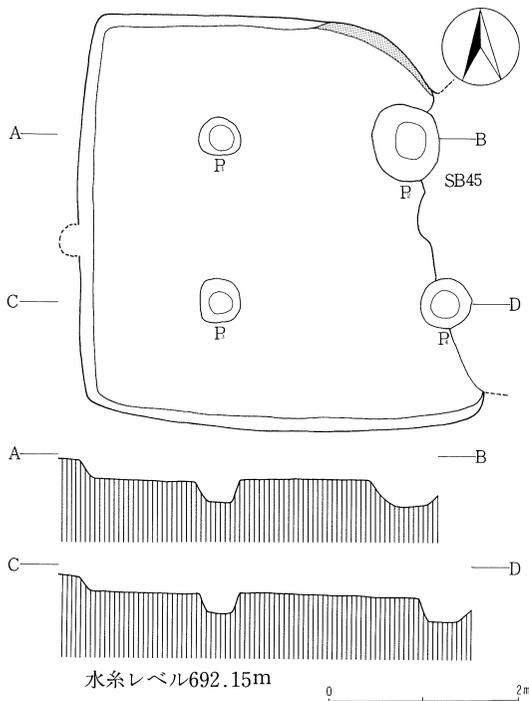
ピットは、総計4基検出された。4基とも支柱穴である。周溝は、検出されなかった。

遺物 (第194図、図版66)

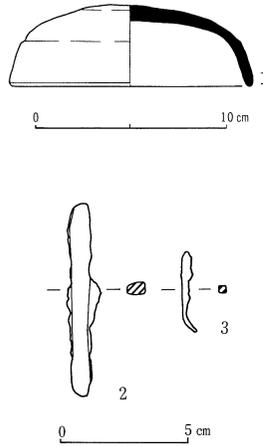
土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品が出土している。このうち、図示したものは、須恵



第192図 第46号住居址カマド実測図



第193図 第46号住居址実測図



第194図
第46号住居址出土遺物

器蓋1点、鉄製品2点である。

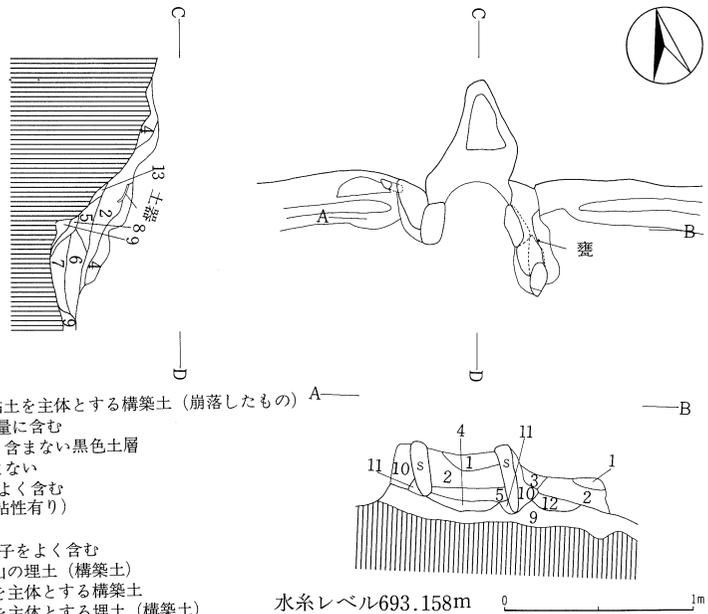
須恵器蓋(1)は、口径12.4cmを測る。

鉄製品のうち、2は工具と考えられるが明確ではない。

3は、釘である。

本住居址の所産期は、古墳時代後期に比定される。

47) 第47号住居址



層序説明

- 第1層 におい黄褐色土層 (10YR5/4) 白色粘土を主体とする構築土 (崩落したもの)
- 第2層 暗赤褐色土層 (2.5YR3/3) 焼土を多量に含む
- 第3層 黒色土層 (10YR1.7/1) 焼土等は全く含まない黒色土層
- 第4層 黒褐色土層 (10YR3/2) 焼土等は含まない
- 第5層 極暗赤褐色土層 (2.5YR2/2) 焼土をよく含む
- 第6層 灰オリーブ色土層 (5 Y6/2) 灰層 (粘性有り)
- 第7層 明赤褐色土層 (5 YR5/8) 焼土層
- 第8層 におい褐色土層 (7.5YR5/4) 焼土粒子をよく含む
- 第9層 黒褐色土層 (10YR3/1) 黒色土と地山の埋土 (構築土)
- 第10層 におい黄褐色土層 (10YR5/3) 粘土を主体とする構築土
- 第11層 におい黄橙色土層 (10YR6/3) 地山を主体とする埋土 (構築土)
- 第12層 黒褐色土層 (10YR3/1) 第9層に粘土が少量混じる (構築土)
- 第13層 赤黒色土層 (2.5YR2/1) 炭化材、焼土粒子を含む

第195図 第47号住居址カマド実測図

遺構 (第195・196図)

E-2グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。東西517cm、南北483cmを測り、平面プランは隅丸方形を呈するものと思われる。

カマドを中心とする主軸方位は、N-15°-Eを示す。

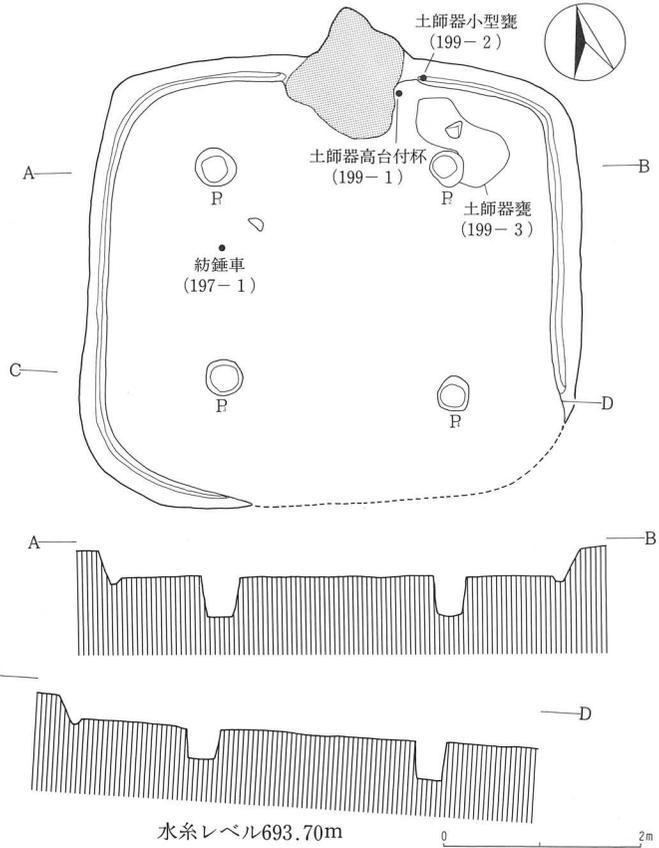
確認面からの壁高は、24~30cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。安山岩、川原石を袖芯とし、にぶい黄褐色(10YR5/3)を呈し、粘土を主体とする構築土により築かれていた。

床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。

ピットは、総計4基検出された。いずれも主柱穴と考えられる。

周溝は、南壁、東壁の一部が不明であるが、おそらくカマド部分を除き、全周していたものと思われる。



第196図 第47号住居址実測図

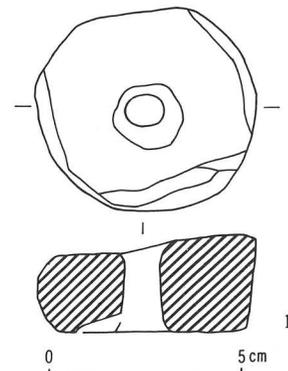
遺物 (第197~199図、図版66)

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、石製品、骨片が出土している。このうち、図示したものに、土師器高台付杯、小型甕各1点がある。

1は、ロクロ整形の高台付杯で、混入品と考えられる。

2は、小型甕で、肩部~底部外面はヘラケズリされる。底部は、丸底である。3は、長胴の甕で、肩部~底部外面は縦方向のヘラケズリがなされる。最大径を口縁部に有する。

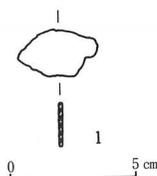
鉄製品 (第198図1) は、破片で全体を窺えない。鎌の一部であろうか。



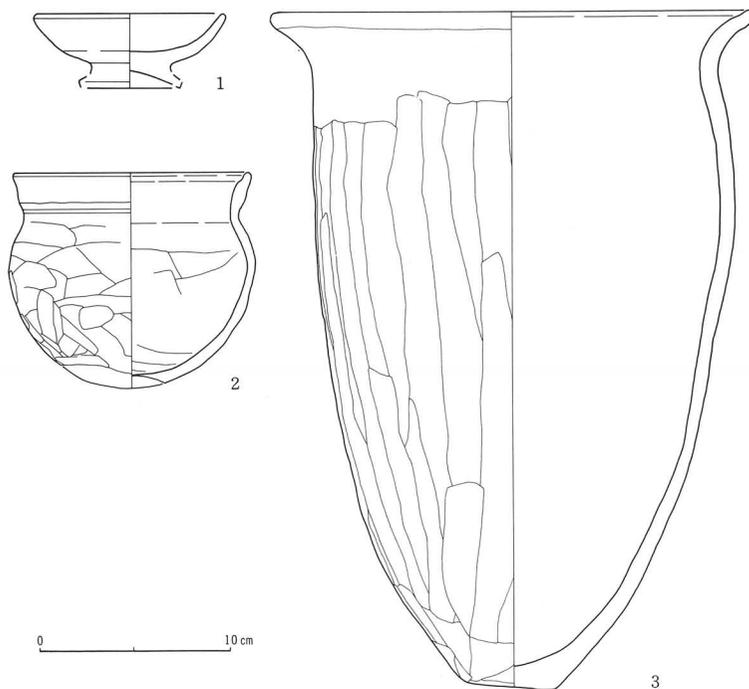
第197図 第47号住居址出土遺物 (A)

石製品（第197図）は、軽石製の紡錘車で、重さ40gを計る。

本住居址の所産期は、古墳時代後期に比定される。



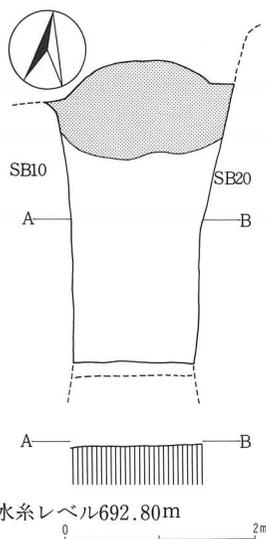
第198図
第47号住居址出土遺物（B）



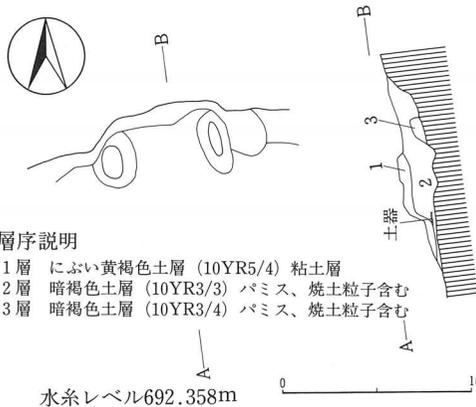
第199図 第47号住居址出土遺物（C）

48) 第49号住居址

遺構（第200・201図、図版27）



第200図 第49号住居址実測図



層序説明

- 第1層 におい黄褐色土層 (10YR5/4) 粘土層
- 第2層 暗褐色土層 (10YR3/3) ノミス、焼土粒子含む
- 第3層 暗褐色土層 (10YR3/4) ノミス、焼土粒子含む

第201図 第49号住居址カマド実測図

D-2・3グリッドに位置する。

第10・20号住居址と重複関係を有し、第10・20号住居址に切られている。

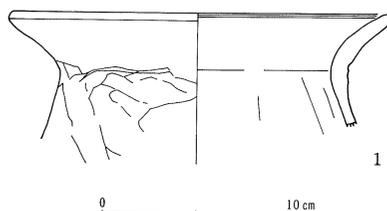
東西は残存部で、182cm、南北311cmを測る。

平面プランは、不明である。

カマドを中心とする主軸方位は、N-9°-Wを示す。

確認面からの壁高はおよそ15cmを測る。カマドは、おそらく、芯とした石材を埋設したと考えられるピットが検出された程度である。にぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する粘土を主体に構築されていたものと考えられる。床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。

ピット、周溝は検出されなかった。



第202図 第49号住居址出土遺物

遺物 (第202図、図版66)

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。図示したものは、土師器甕1点で、口辺部が「く」の字状に外反する長胴の甕である。本住居址の所産期は、奈良時代に比定される。

49) 第50号住居址

遺構 (第203図、図版27)

C・D-1グリッドに位置する。第41号掘立柱建物址、第6号溝址と重複関係を有し、第41号掘立柱建物址、第6号溝址により切られている。

東西248cm、南北は残存部で412cmを測る。平面プランは、残存部から推して、隅丸方形を呈するものと思われる。

南北軸の方位は、N-10°-Wを示す。確認面からの壁高は、43~57cmを測る。

カマドは、残存部においては認められず、北壁に設置されていた可能性が高い。

床面は、中央部が堅緻であったが、

壁際では軟弱であった。

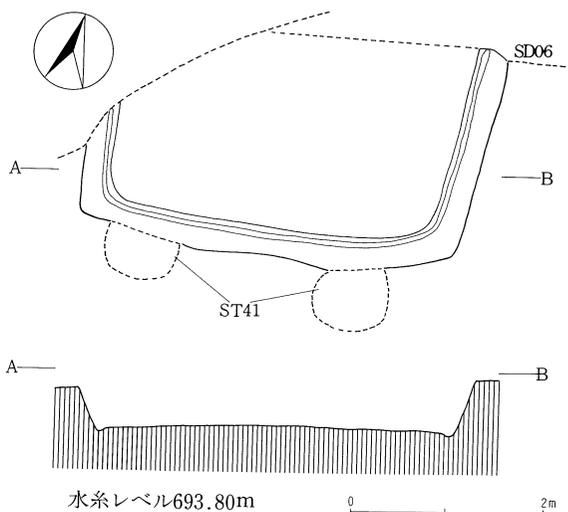
周溝は、残存部の壁下では確認されている。

ピットは、検出されなかった。

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。このうち、図示しなかったが、口辺部が「く」の字状に外反する武蔵型の甕の破片があり、この種の甕の中でも比較的古い様相である。

したがって、本住居址の所産期は、出土土器片、重複関係から、奈良時代前半に比定されよう。



第203図 第50号住居址実測図

50) 第51号住居址

遺構 (第204図、図版27)

D-3 グリッドに位置する。第42・43号住居址、第34号掘立柱建物址と重複関係を有し、第42・43号住居址、第34号掘立柱建物址に切られている。

東西、南北とも残存部でそれぞれ263cm、250cmを測る。

平面プランは、おそらく、隅丸方形を呈するものと思われる。

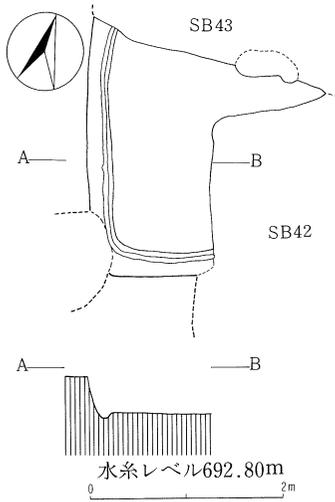
南北軸の方位は、N-18°-Wを示す。

確認面からの壁高は、39cmを測る。

カマドは、残存部では認められなかった。

床面は、中央部が堅緻であったが、壁際では軟弱であった。

ピットは、検出されなかった。周溝は、残存部では認められたことから全周していたものと思われる。



第204図 第51号住居址実測図

遺物 (第205図、図版66)

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、土製品、石製品が出土している。

このうち、図示したものは、鉄製品、土製品、石製品各1点である。

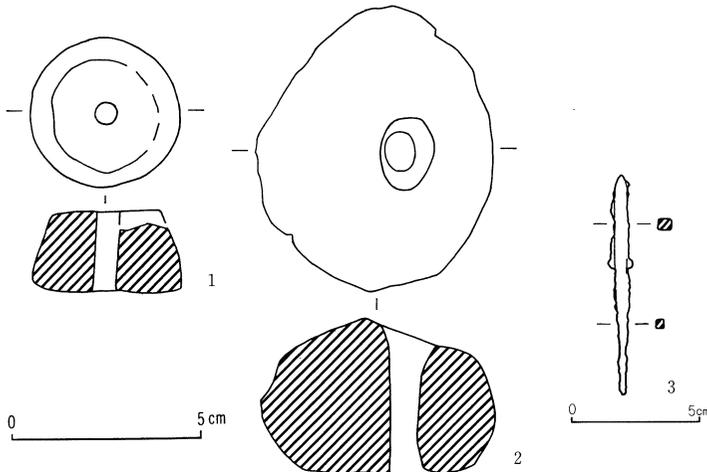
鉄製品(3)は、鉄鏃と考えられる。長さは、約8.8cmを測る。

土製品、石製品(1・2)は、2点とも紡錘車である。

1は、土製紡錘車で、重さ38gを計る。

2は、軽石製の紡錘車で、重さ73gを計る。

本住居址の所産期は、古墳時代後期に比定される。



第205図 第51号住居址出土遺物

51) 第52号住居址

遺構 (第206図、図版28)

B-1 グリッドに位置する。

第33号掘立柱建物址、第1号溝址と重複関係を有し、第33号掘立柱建物址、第1号溝址に切られている。また、北部は攪乱により壊されている。

東西、南北とも残存部で、それぞれ、388cm、350cmを測る。

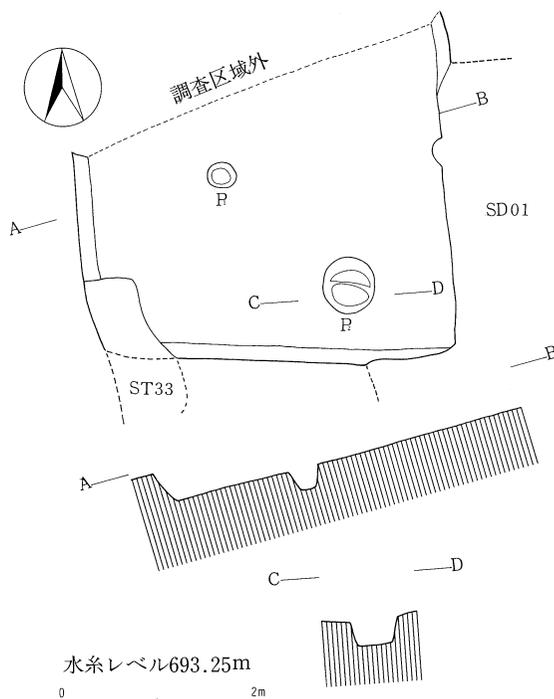
南北軸の方位は、 $N-3^{\circ}-E$ を示す。確認面からの壁高は、35cmを測る。

カマドは、調査し得た範囲では確認されなかった。

床面は、中央部では堅緻であったが、壁際では軟弱であった。

ピットは総計2基あるが、 P_2 は掘立柱建物址のもので、 P_1 が柱穴と考えられる。

周溝は、検出されなかった。



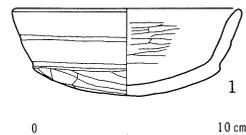
第206図 第52号住居址実測図

遺物 (第207図、図版66)

本住居址からは、土師器片、黒色土器片、須恵器片のほか、自然遺物として、炭化材が出土している。

このうち、図示したものは、土師器杯1点である。

土師器杯 (第207図1) は、外稜口辺を有するものである。底部外面はヘラケズリ、内面は横方向のヘラミガキがなされる。



第207図
第52号住居址出土遺物

炭化材は、総計で15点出土している。15点のうち、2点が P_1 出土である。いずれも、建築材と考えられることから、焼失住居である可能性が高い。

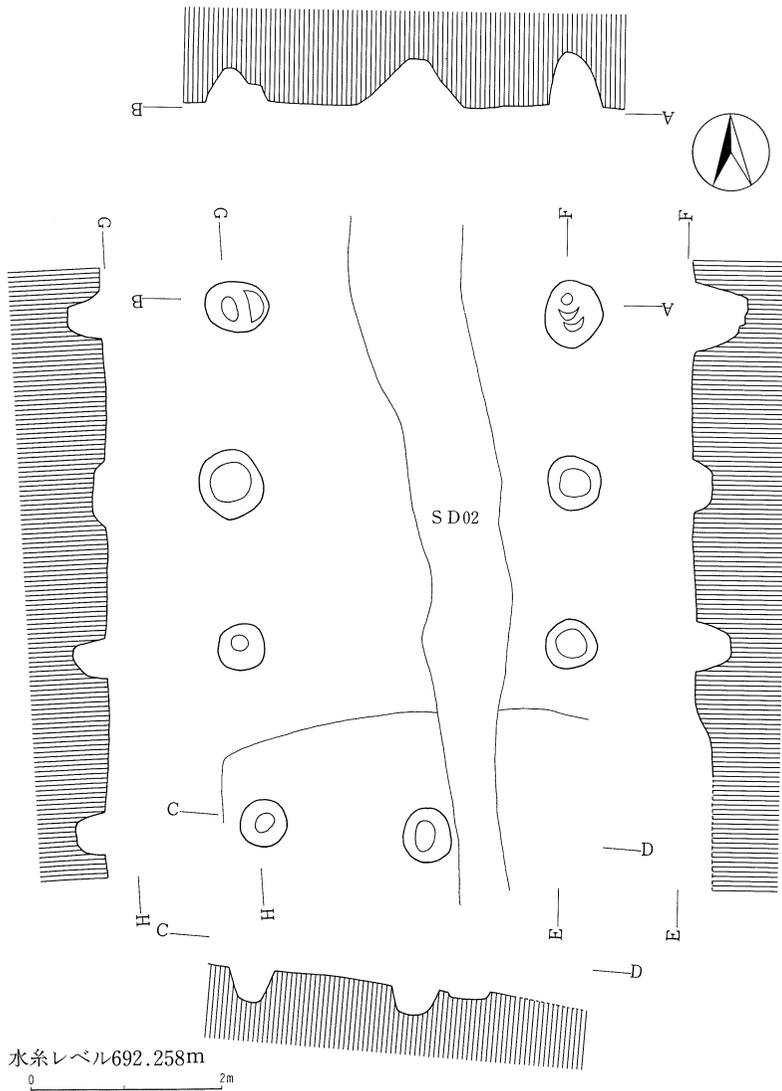
15点中、ピット出土の2点を含めた11点がコナラ節の一種と同定され、圧倒的に多い。

残りは、クヌギ節の一種、イネ科タケ亜科の一種と同定されたものが各2点である。

本住居址の所産期は、古墳時代後期に比定される。

(2) 掘立柱建物址

1) 第1号掘立柱建物址



第208図 第1号掘立柱建物址実測図

2) 第2号掘立柱建物址

遺構 (第209図、図版28)

遺構 (第208

図、図版28)

B-2グリッド
に位置する。

第11号住居址と
重複関係を有し、
第11号住居址を切
っている。東西420
cm、南北612cmを測
り、平面プランは
長方形を呈する。

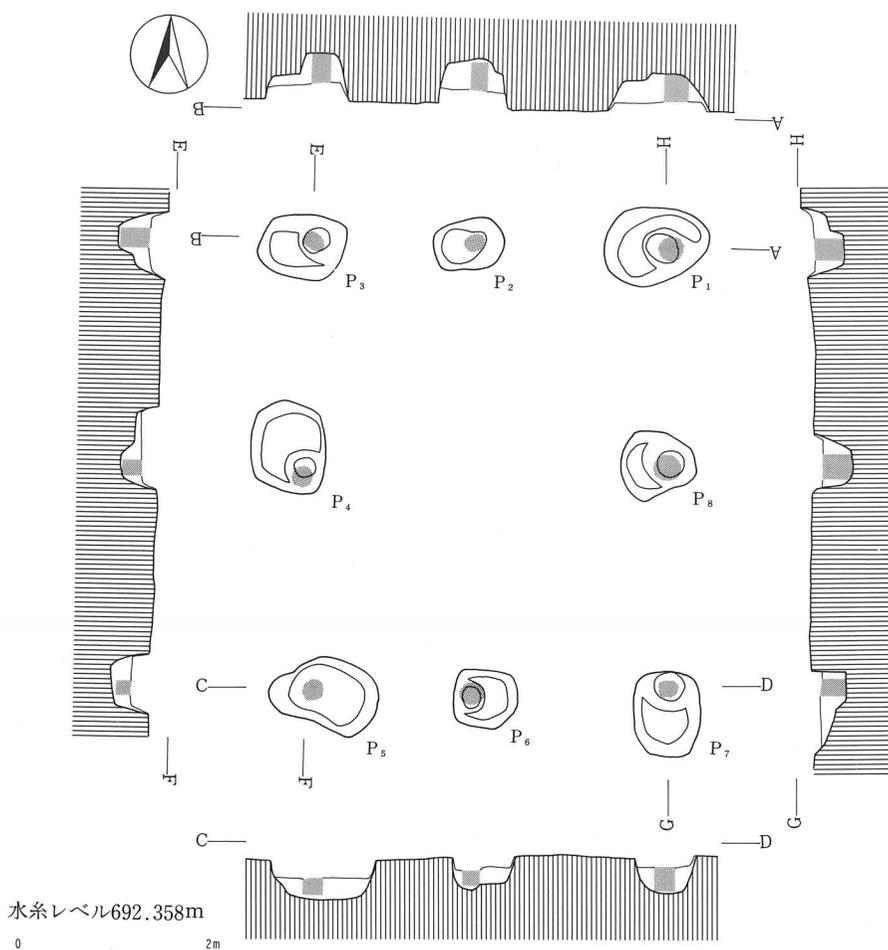
1間×3間の側
柱式の掘立柱建物
址と考えられる。

南北軸の方位は、
N-2.5°-Wを示す。

ピット掘形の平
面プランは、円形、
楕円形を呈する。

遺物

本遺構からの出
土遺物は皆無であ
り、所産期は重複
関係から古墳時代
後期以降と考えら
れる。



第209図 第2号掘立柱建物址実測図

C-2グリッドに位置する。第27号掘立柱建物址と重複関係を有するが前後関係については不明である。

東西475cm、南北536cmを測り、平面プランは長方形を呈する。

2間×2間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西が145~185cm、南北が205~230cmを測る。南北軸の方位は、N-4°-Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形を呈する。

遺物

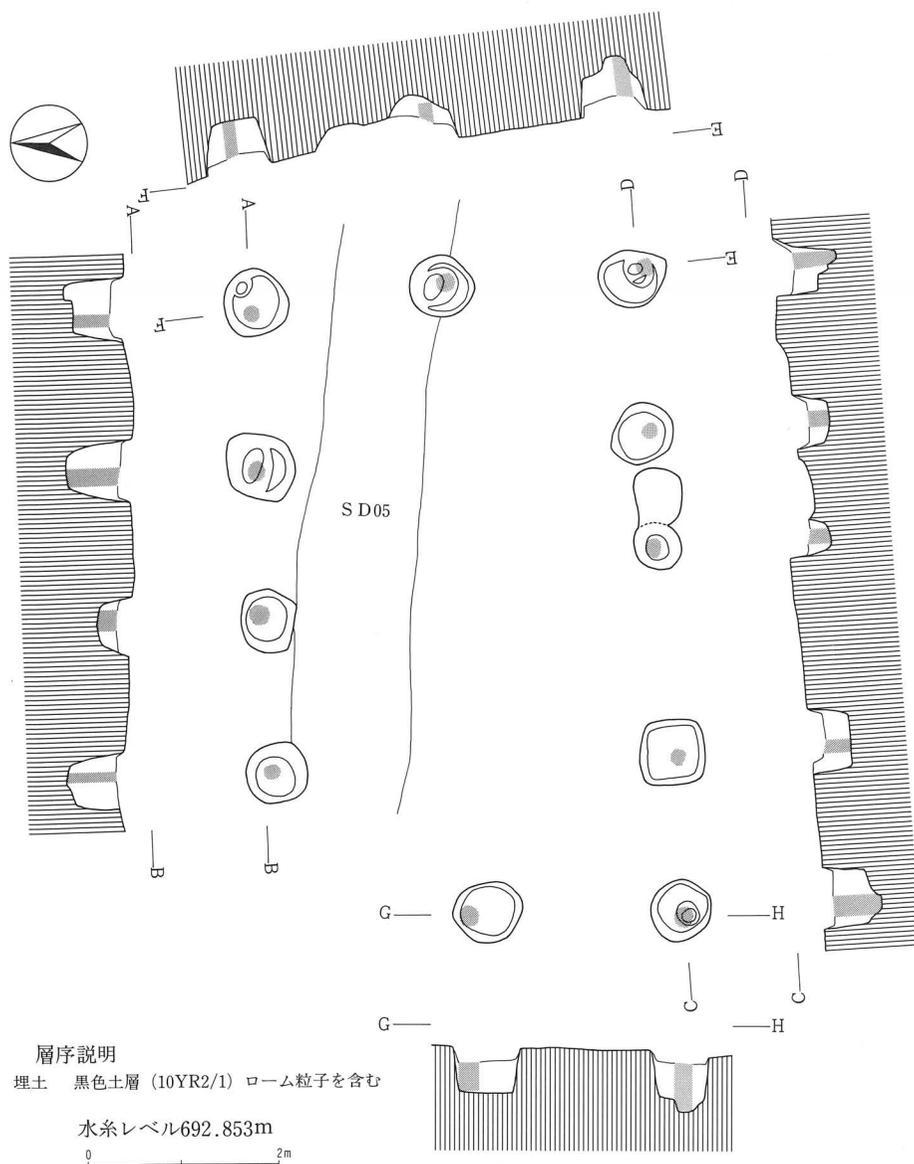
土師器片、須恵器片が出土している。このうち、P₂から糸切り底を有する須恵器杯の破片が出土していることから、奈良時代後葉以降の所産と考えられる。

3) 第4号掘立柱建物址

遺構 (第210図、図版29)

A-3グリッドに位置する。第5号溝址と重複関係を有し、第5号溝址に切られている。

東西734cm、南北470cmを測り、平面プランは長方形を呈する。4間×2間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は東西107cm~155cm、南北182cm~206cmを測る。南北軸の方位はN-25°-Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形を呈する。



第210図 第4号掘立柱建物址実測図

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土しており、土器片から奈良時代以降の所産と考えられる。

4) 第5号掘立柱建物址

遺構 (第211図、図版29)

A-3グリッドに位置する。

他遺構との重複関係はない。

東西301cm、南北285cmを測り、平面プランは正方形を呈する。

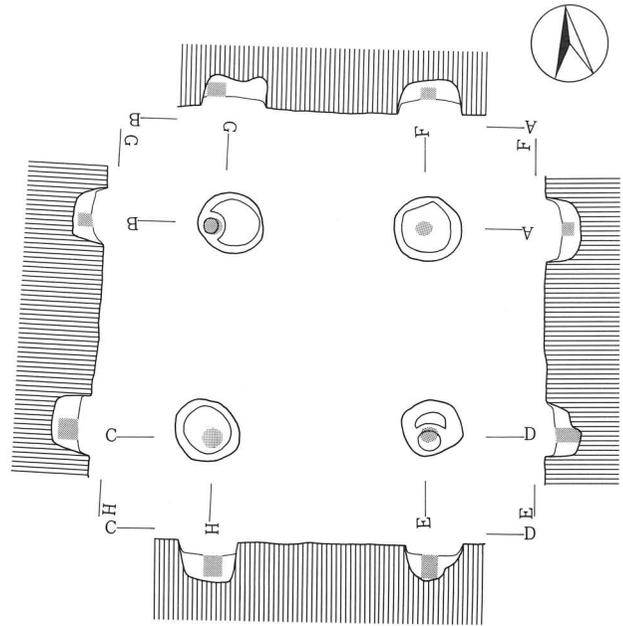
1間×1間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は202~207cmを測る。

南北軸の方位はN-9°-Eを示す。ピット掘形の平面プランは円形を呈する。

埋土は黒色土を主体としている。

遺物

出土遺物は皆無であり、所産期についても明確でないが、掘形から一応奈良時代以降としておきたい。



0 2m
水糸レベル692.903m

層序説明

埋土 黒色土層 (10YR2/1)、ローム粒子を含む

第211図 第5号掘立柱建物址実測図

5) 第6号掘立柱建物址

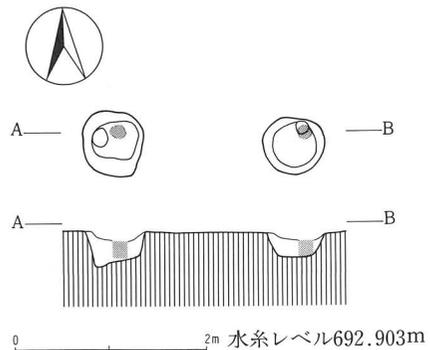
遺構 (第212図、図版29)

A-3グリッドに位置する。第7号掘立柱建物址を切って構築されている。2基のピットが確認されたのみで、あるいは南側のピットが第5号溝址により壊されたのかもしれない。柱間は194cmを測る。

ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形である。

遺物

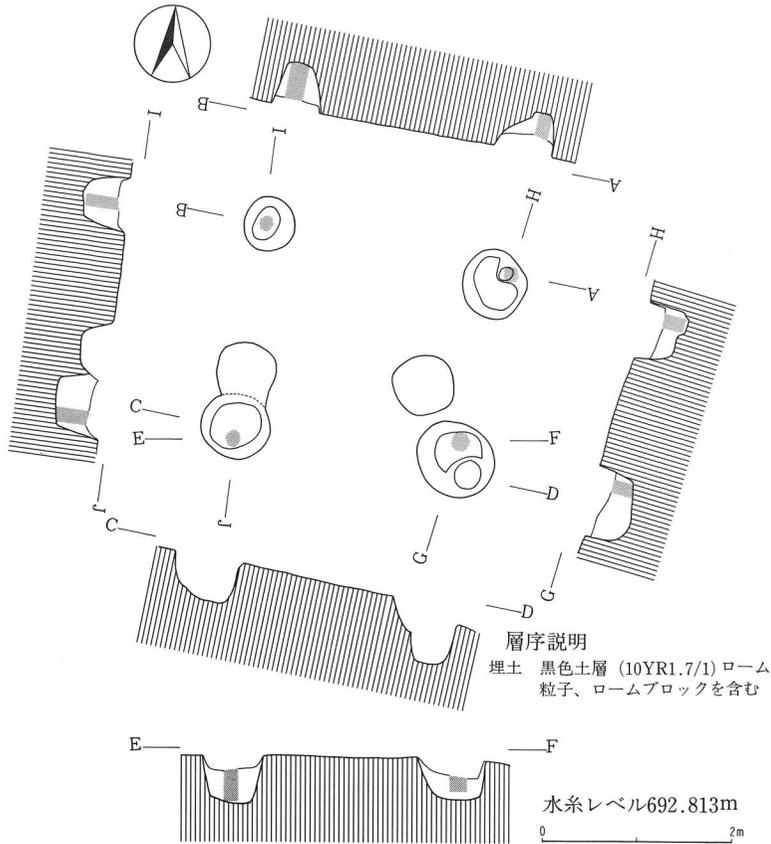
出土遺物は皆無である。所産期については重複関係から奈良時代以降と考えられる。



0 2m 水糸レベル692.903m

第212図 第6号掘立柱建物址実測図

6) 第7号掘立柱建物址



第213図 第7号掘立柱建物址実測図

遺構 (第213図、図版30)

A-3グリッドに位置する。第6号掘立柱建物址と重複関係を有し、第6号掘立柱建物址に切られている。

東西309cm、南北281cmを測り、平面プランは正方形を呈する。

南北軸の方位は、 $N-5.5^{\circ}-E$ を示す。

柱間は東西が221~246cm、南北167~215cmを測る。

埋土は黒色土を主体とする。

ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形を呈する。

遺物

土師器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片から奈良時代以降と考えられる。

7) 第8号掘立柱建物址

遺構 (第214図、図版30)

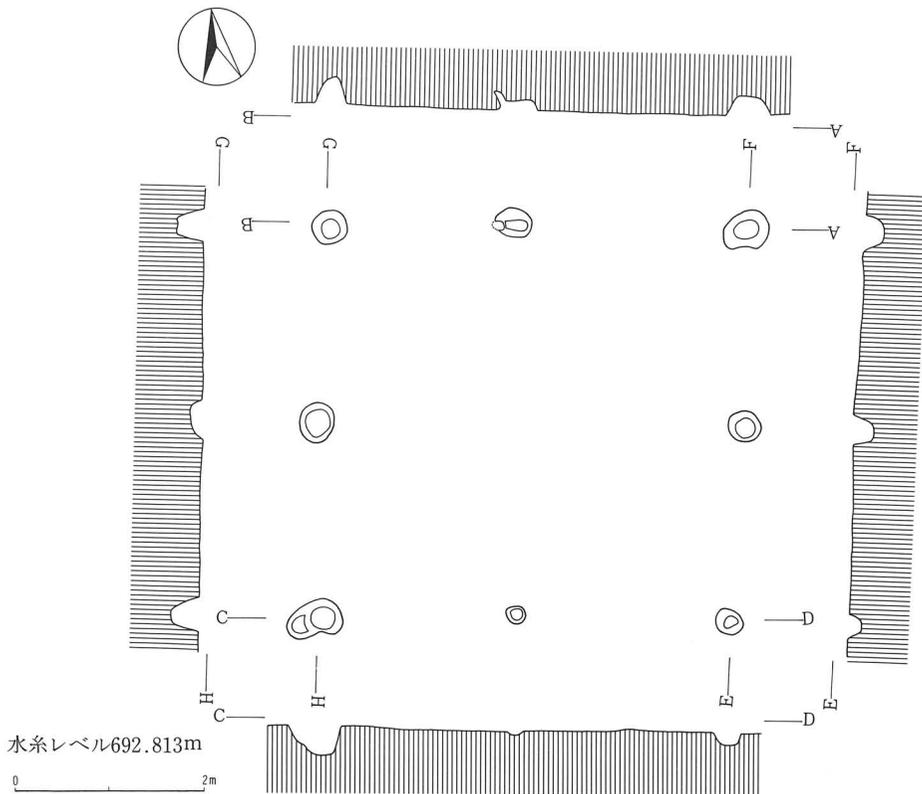
A-2グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西479cm、南北453cmを測り、平面プランは正方形を呈する。2間×2間の側柱式の掘立柱建物で、南北軸の方位は $N-9^{\circ}-E$ を示す。

ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形である。

遺物

本遺構からの出土遺物は皆無で、所産期についても明確でない。



第214図 第8号掘立柱建物址実測図

8) 第9号掘立柱建物址

遺構 (第215図、図版30)

A-3グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。南北軸の方位は、 $N-17^{\circ}-E$ を示す。東西482cm、南北は残存部で267cmを測る。平面プランについては不明である。

全体を知り得ないが、残存部から推して、2間×2間の側柱式の掘立柱建物になるものと思われる。柱間は、東西で157~193cm、南北で132~210cmを測る。

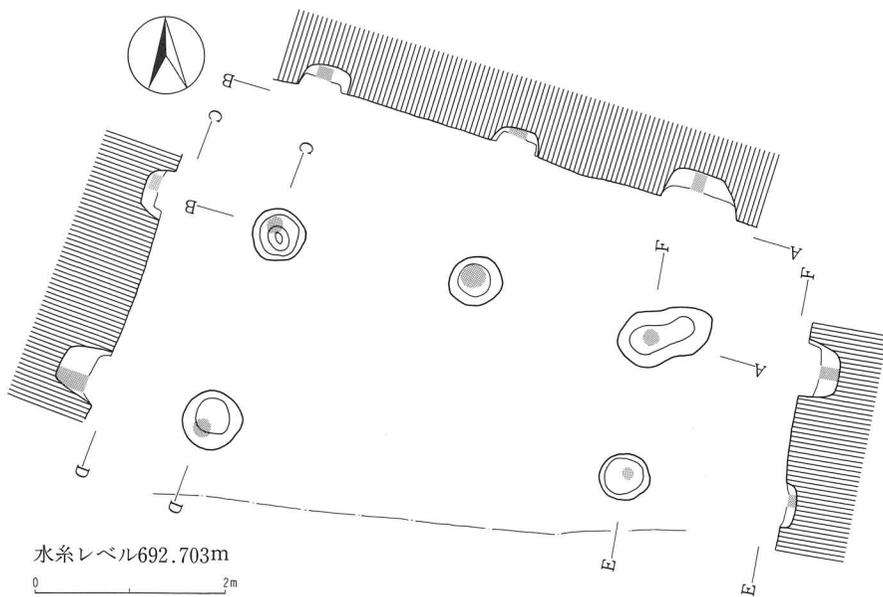
ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形である。

遺物

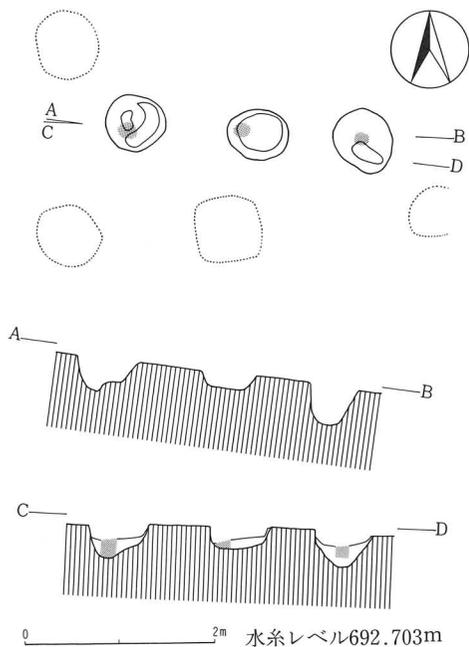
本遺構からの出土遺物は皆無であり、所産期についても明確でない。

9) 第10号掘立柱建物址

遺構 (第216図、図版31)



第215図 第9号掘立柱建物址実測図



第216図 第10号掘立柱建物址実測図

A-3グリッドに位置する。第4号掘立柱建物址と重複しているが、前後関係については不明である。

3基の柱穴が確認されたにとどまる。東西303cm、柱間は103~111cmを測る。ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形を呈する。

遺物

土師器片、黒色土器片が出土しているが図示し得るものはない。所産期については、出土土器片から奈良時代以降と考えられる。

10) 第11号掘立柱建物址

遺構 (第217図、図版31)

A-3グリッドに位置する。第5号溝址と重複関係を有し、第5号溝址により切られている。総計3基の柱穴が確認されたにとどまる。残存部で、東西245cm、南北268cmを測る。

南北軸の方位は、N-45°-Wを示す。

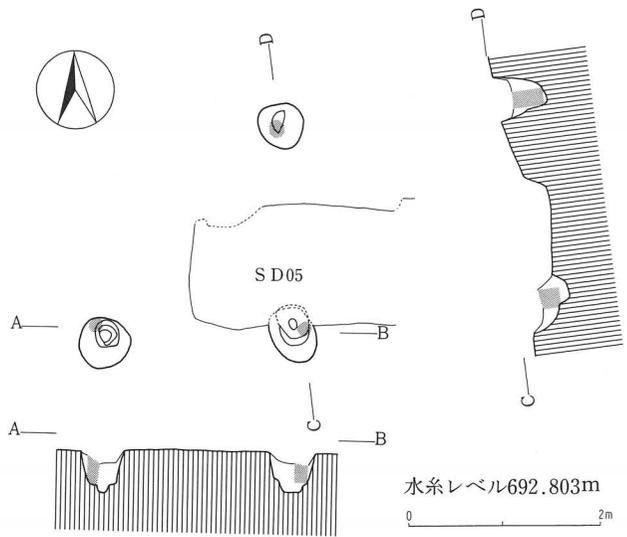
柱間は、東西203cm、南北194cmを測る。

ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形を呈する。

遺物

土師器杯の破片が2点出土している。

本遺構の所産期は、出土土器から奈良時代以降と考えられる。



第217図 第11号掘立柱建物址実測図

11) 第12号掘立柱建物址

遺構 (第218図、図版31)

A・B-3グリッドに位置する。

他遺構との重複関係はない。

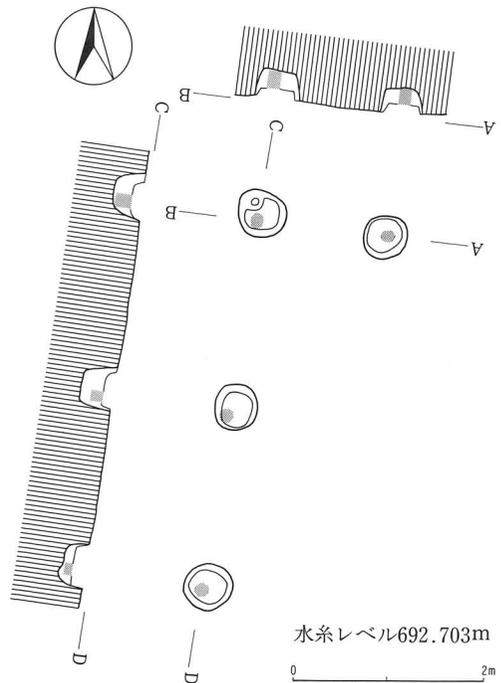
残存部で、東西181cm、南北448cmを測る。

南北軸の方位は、N-7.5°-Eを示す。

柱間は、東西が311cm、南北が173~193cmを測る。

ピット掘形の平面プランは、円形である。

遺物 出土遺物は皆無であり、所産期については明確でない。



第218図 第12号掘立柱建物址実測図

12) 第13号掘立柱建物址

遺構 (第219図、図版32)

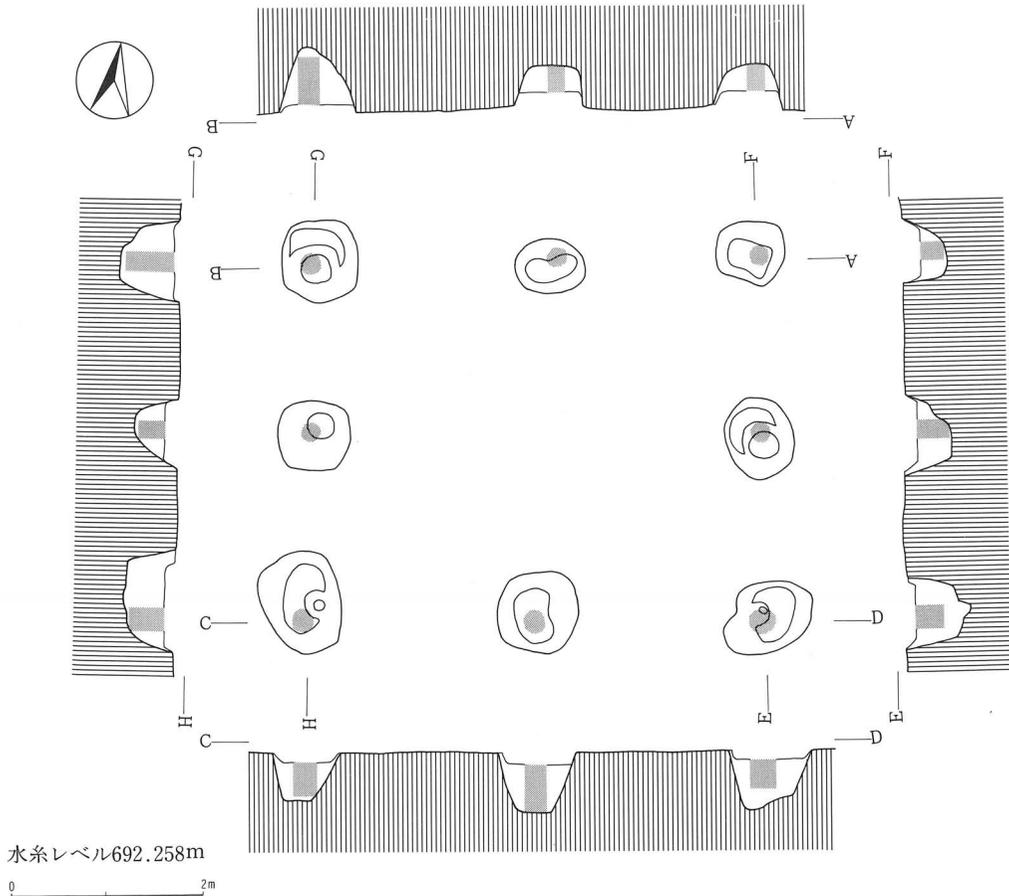
C-2・3グリッドに位置する。第15号住居址と重複関係を有し、第15号住居址を切って構築されている。

東西581cm、南北460cmを測り、平面プランは長方形を呈する。2間×2間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西189~238cm、南北157~176cmを測る。

南北軸の方位は、N-10°-Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形を呈する。

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。このうち、糸切り底を有する須恵器杯の破片が出土していること、重複関係から奈良時代後葉以降の所産と考えられる。



第219図 第13号掘立柱建物址実測図

13) 第14号掘立柱建物址

遺構 (第220図)

D-2グリッドに位置する。第19号住居址と重複関係を有し、第19号住居址を切って構築されている。

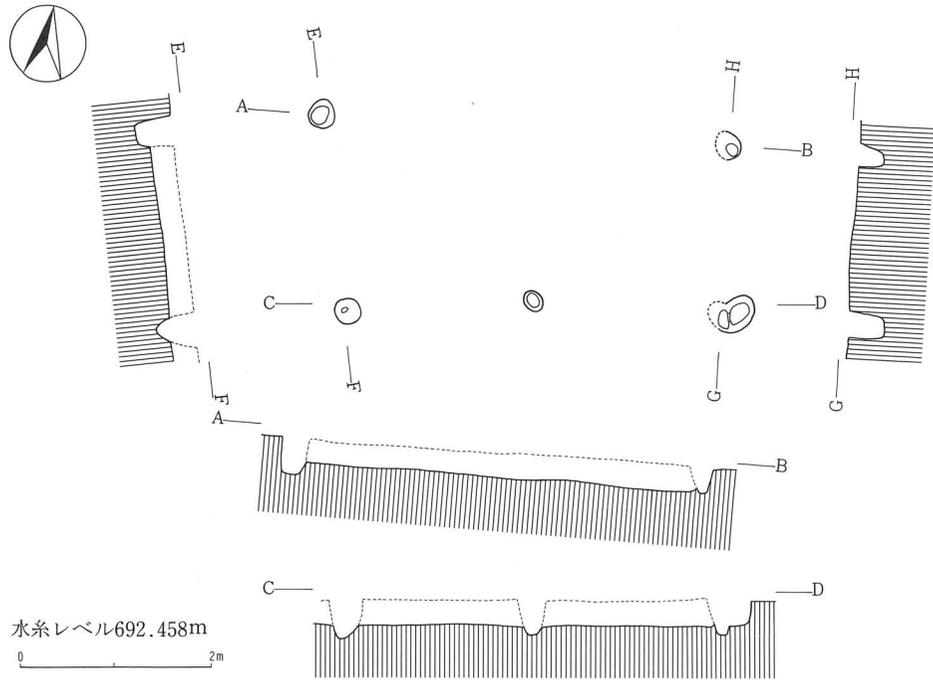
東西438cm、南北240cmを測り、平面プランは長方形を呈する。1間×2間の側柱式の掘立柱建物であったと考えられる。

南北軸の方位は、N-9.5°-Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形、双円形を呈する。

遺物

出土遺物は皆無である。所産期については重複関係から古墳時代後期以降と考えられる。



第220図 第14号掘立柱建物址実測図

14) 第15号掘立柱建物址

遺構 (第221図、図版32)

C-2グリッドに位置する。第14号住居址と重複関係を有し、第14号住居址を切って構築されている。

東西623cm、南北434cmを測り、平面プランは長方形を呈する。

2間×3間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は東西が120~234cm、南北152~190cmを測る。

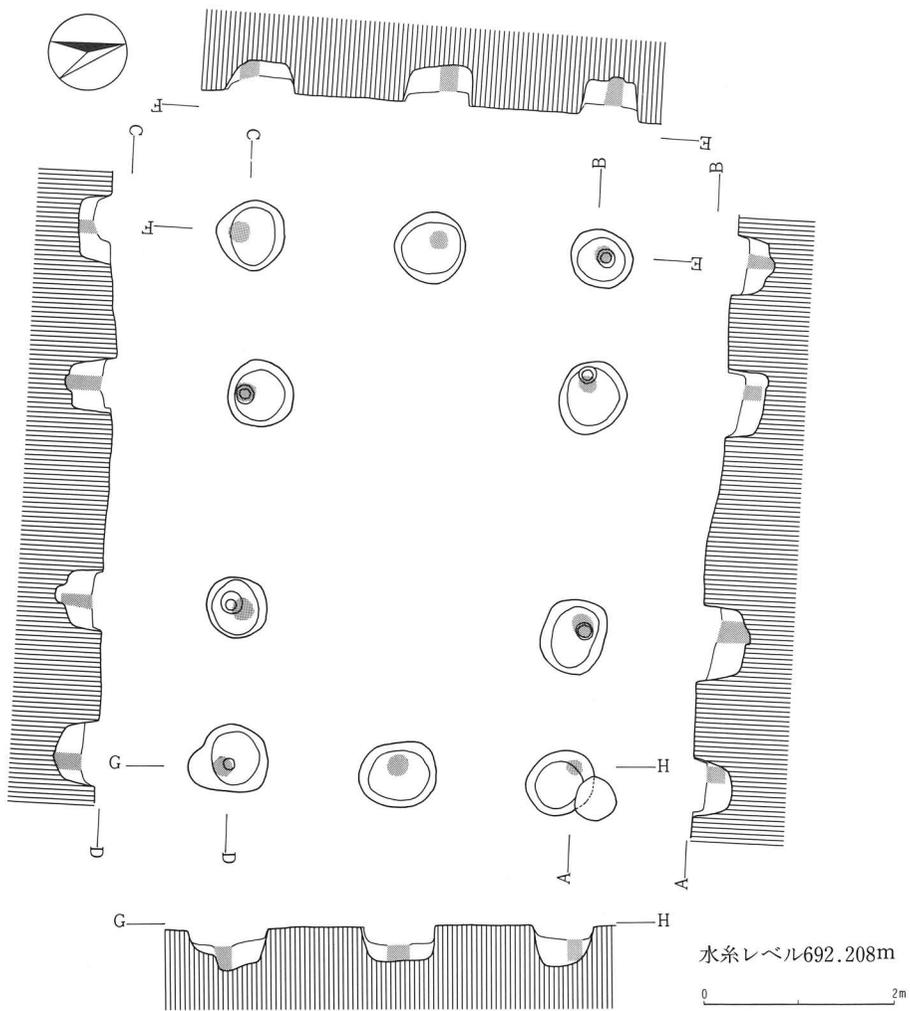
南北軸の方位は、N-16°-Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形である。

遺物

土師器片、黒色土器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器および重複関係から平安時代以降と考えられる。

15) 第16号掘立柱建物址

遺構 (第222図、図版32)



第221図 第15号掘立柱建物址実測図

C-1・2グリッドに位置する。第17号掘立柱建物址と重複関係を有し、第17号掘立柱建物址を切って構築されている。

東西452cm、南北509cmを測り、平面プランは長方形を呈する。

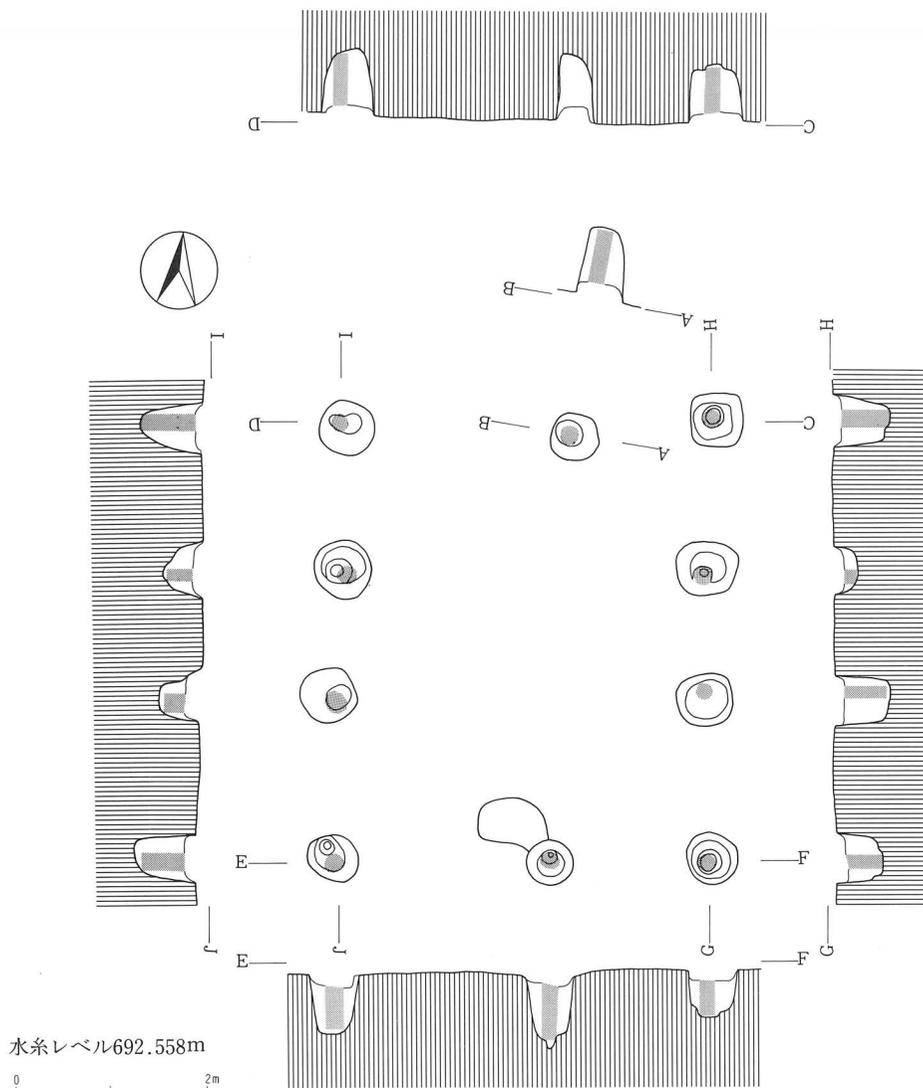
3間×2間の掘立柱建物址で、柱間は、東西が130~224cm、南北105~153cmを測る。

南北軸の方位は、N-1.5°-Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形を呈する。

遺物 (第273図)

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。このうち、図示し得たものに、糸切り底を

有する黒色土器杯（1）と墨書土器の破片（2）がある。墨書は黒色土器杯の外面になされているが文字は不明である。本遺構の所産期は、平安時代以降と考えられる。



第222図 第16号掘立柱建物址実測図

16) 第17号掘立柱建物址

遺構（第223図、図版33）

C-1・2グリッドに位置する。第16号掘立柱建物址と重複関係を有し、第16号掘立柱建物址により切られている。

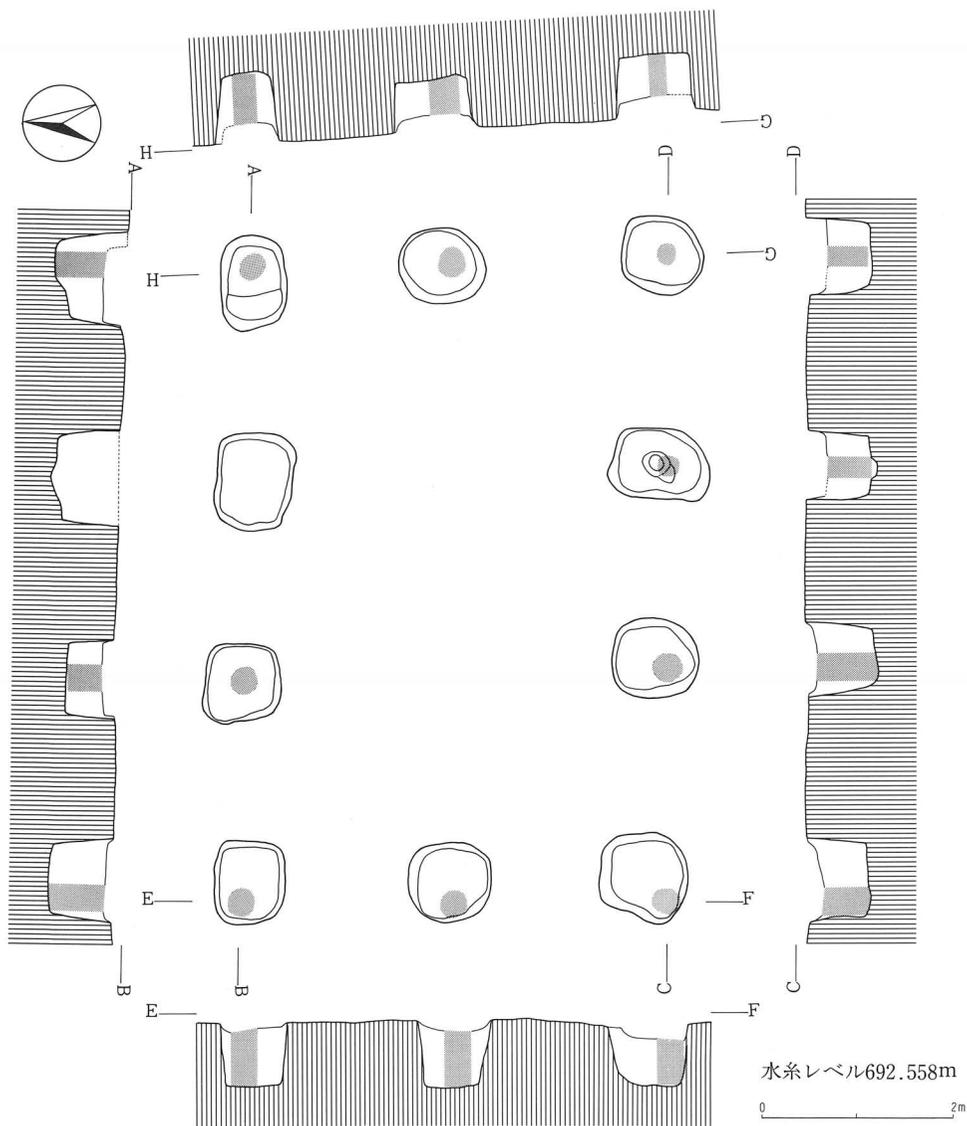
東西750cm、南北508cmを測り、平面プランは長方形を呈する。

2間×3間の側柱式の掘立柱建物址で、柱間は、東西173~219cm、南北194~210cmを測る。

南北軸の方位は、N-4°-Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形、隅丸方形などである。

遺物

縄文土器片、土師器片、須恵器片が出土しているが、図示し得るものはない。本遺構の所産期は、出土土器、重複関係から奈良時代~平安時代前半と考えられる。



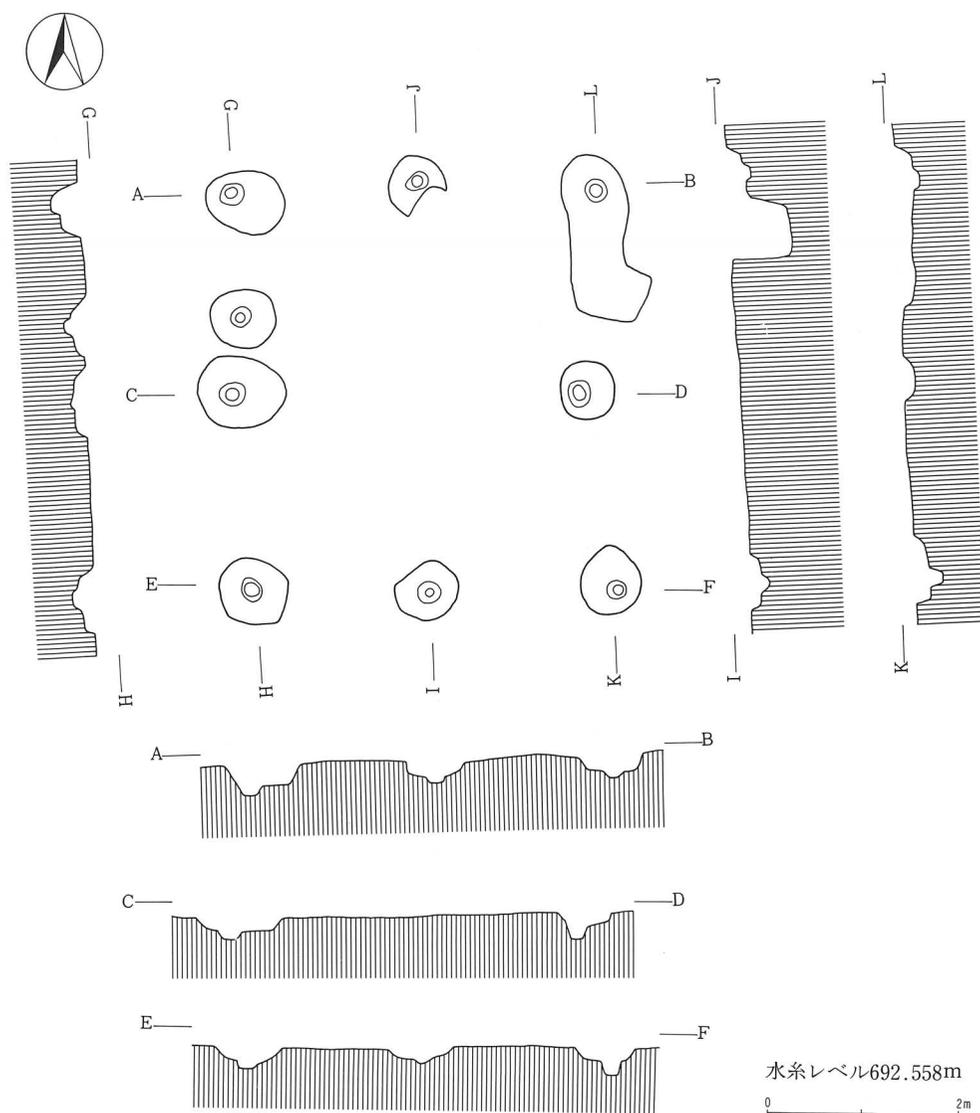
第223図 第17号掘立柱建物址実測図

17) 第18号掘立柱建物址

遺構 (第224図、図版33)

C-2グリッドに位置する。第17号掘立柱建物址と重複関係を有し、第17号掘立柱建物址を切って構築されている。

東西446cm、南北493cmを測り、平面プランは長方形を呈する。3間×2間の側柱式の掘立柱建物である。南北軸の方位は、N-5°-Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形である。



第224図 第18号掘立柱建物址実測図

遺物

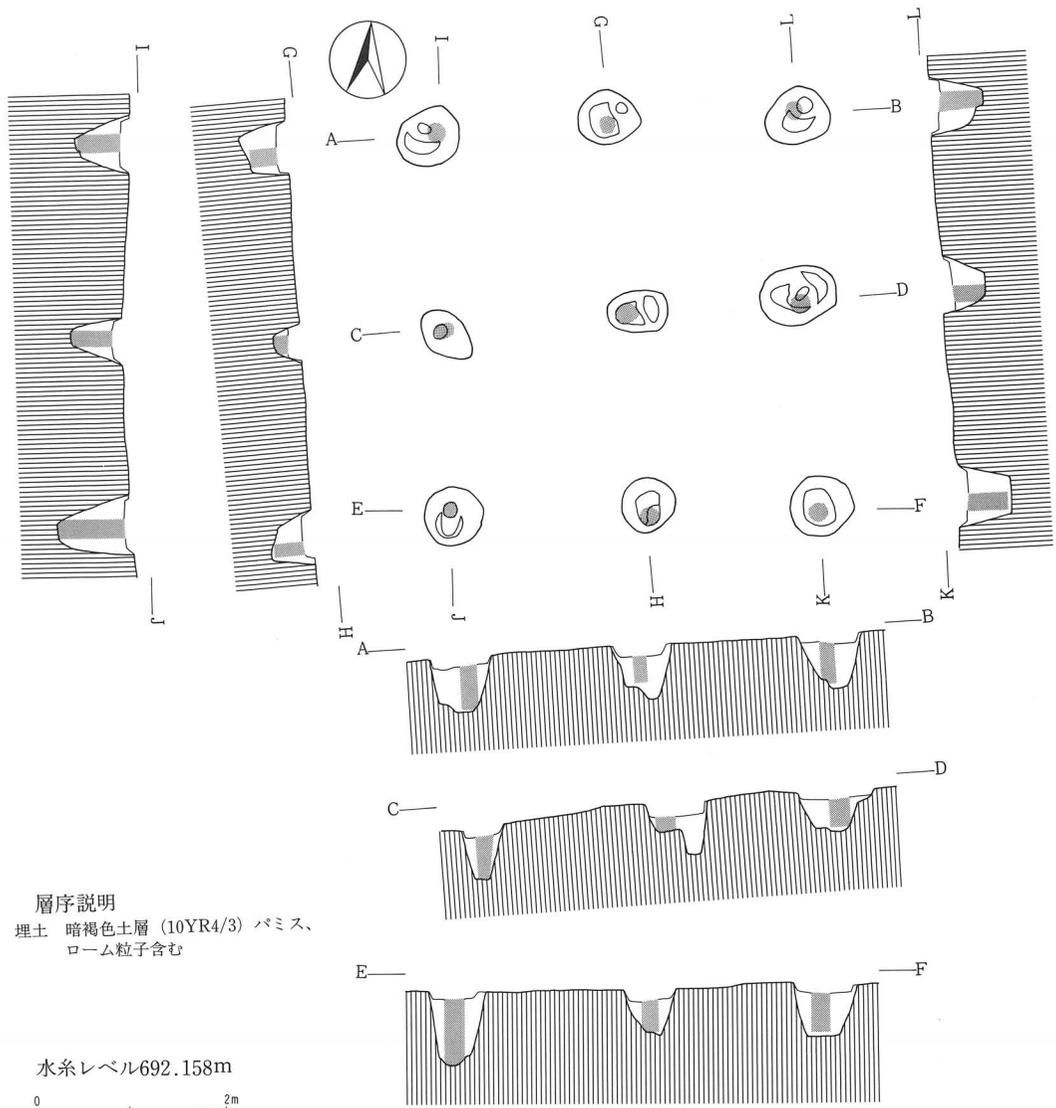
出土遺物は皆無で、本遺構の所産期は重複関係から平安時代前葉以降と考えられる。

18) 第19号掘立柱建物址

遺構 (第225図、図版33)

C-3グリッドに位置する。第44号住居址、第20号掘立柱建物址と重複関係を有し、第44号住居址、第20号掘立柱建物址を切って構築されている。

東西456cm、南北478cmを測り、平面プランは正方形を呈する。

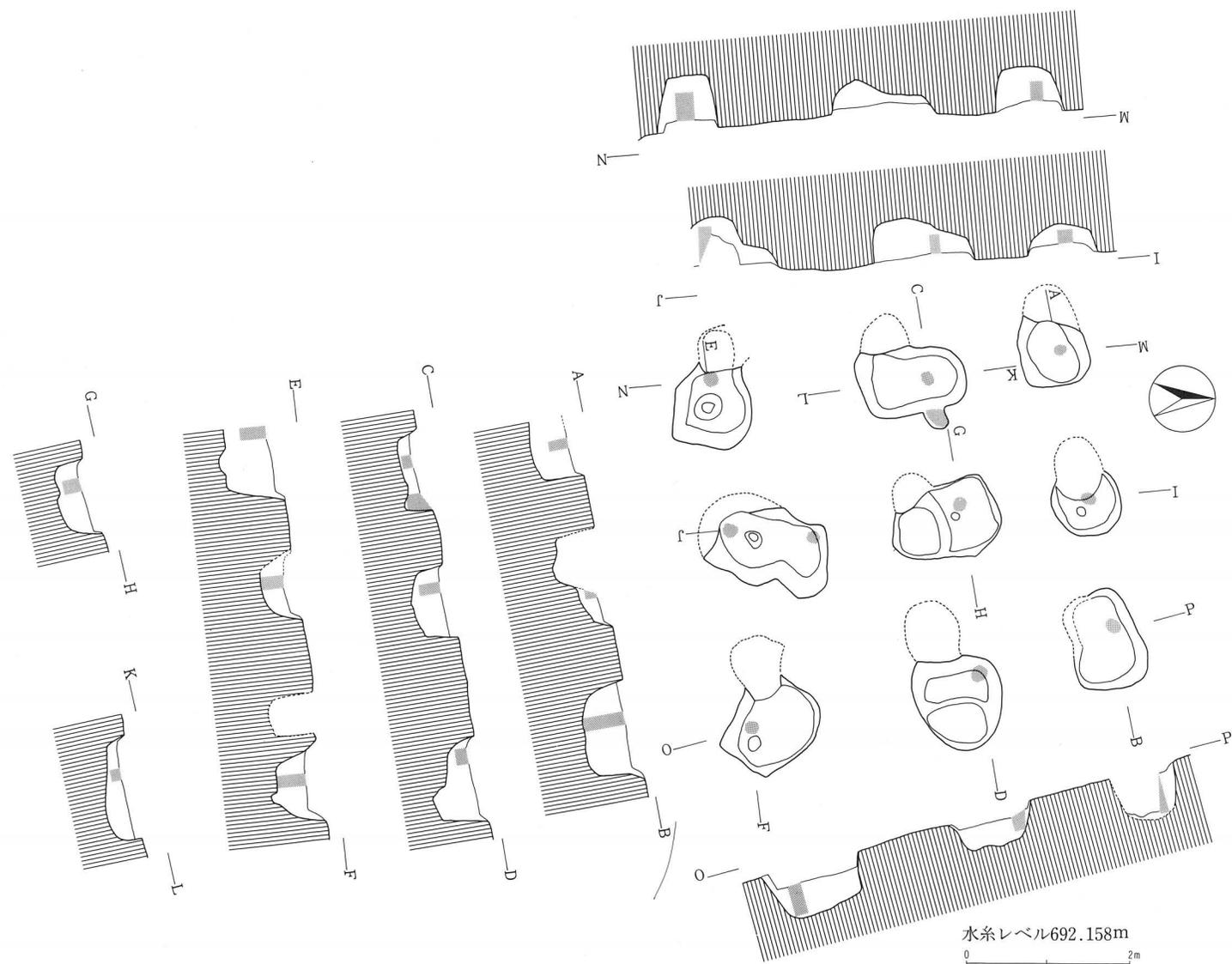


層序説明
埋土 暗褐色土層 (10YR4/3) バミス、
ローム粒子含む

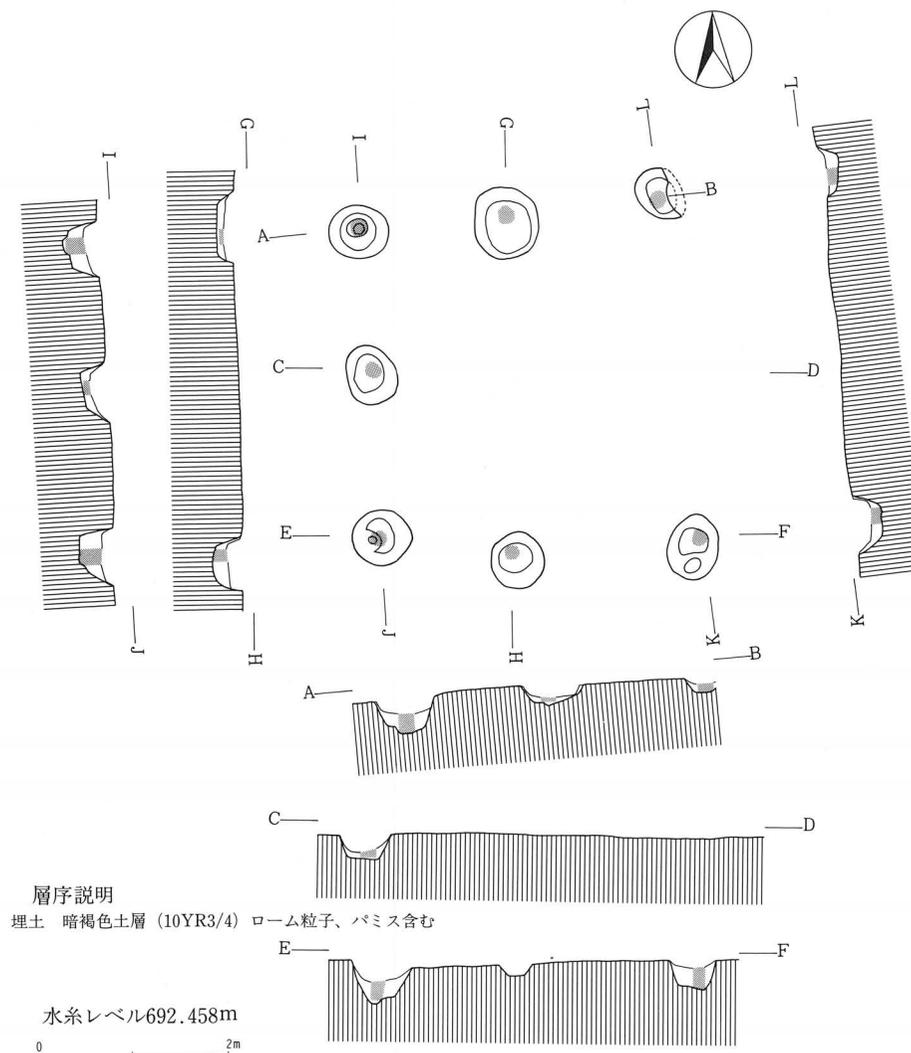
水系レベル692.158m

0 2m

第225図 第19号掘立柱建物址実測図



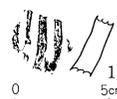
第226図 第20号掘立柱建物址実測図



第227図 第21号掘立柱建物址実測図

2間×2間の総柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西155～194cm、南北175～202cmを測る。南北軸の方位は、N-9°-Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形である。



第228図 第19号
掘立柱建物址出
土遺物

遺物 (第228図)

縄文土器片、土師器片、須恵器片、灰釉陶器片が出土している。図示し得たものは、縄文土器片1点で、後期のものであろう。本遺構の所産期は出土土器から平安時代以降と考えられる。

19) 第20号掘立柱建物址

遺構 (第226図、図版34)

C-3グリッドに位置する。第44号住居址、第19号掘立柱建物址と重複関係を有し、第19号掘立柱建物址に切られ、第44号住居址を切っている。

東西507cm、南北542cmを測り、平面プランは正方形を呈する。

2間×2間の総柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西143～192cm、南北140～270cmを測る。

南北軸の方位は、N-10°-Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形、不整形などである。

遺物 (第273図、図版66)

土師器片、須恵器片、内耳土器片が出土しているが内耳土器片は混入品と考えられる。図示したものに糸切り底を有する土師器杯がある。本遺構の所産期は、平安時代以降と考えられる。

20) 第21号掘立柱建物址

遺構 (第227図、図版34)

C・D-2グリッドに位置する。第17号住居址と重複関係を有し、第17号住居址を切って構築されている。東西386cm、南北437cmを測り、平面形は長方形を呈する。

2間×2間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西117～185cm、南北135～344cmを測る。

南北軸の方位は、N-4°-Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形である。

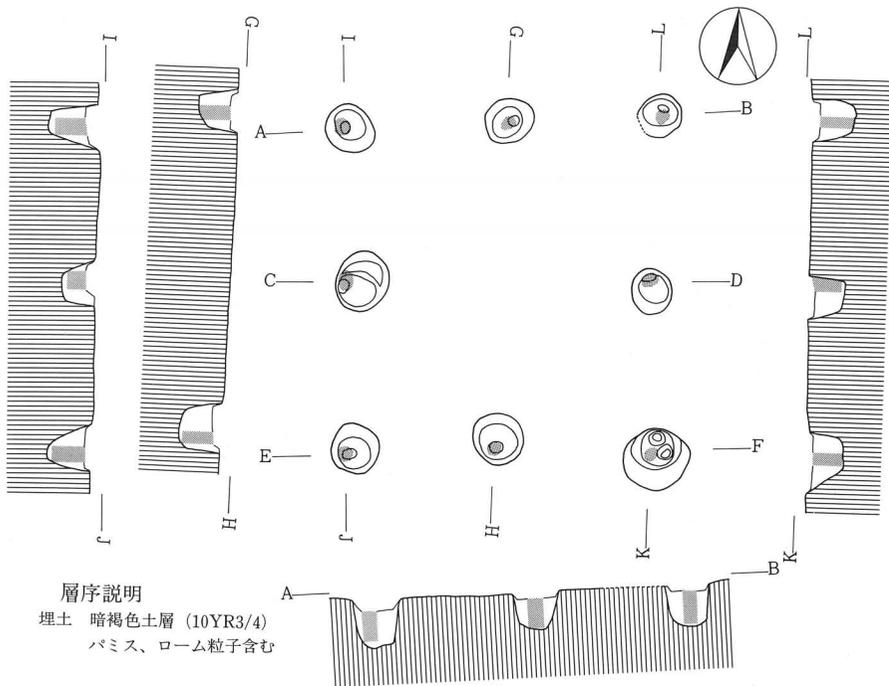
遺物

土師器片が出土しているが図示し得るものは皆無である。本遺構の所産期は、出土土器片、重複関係から平安時代以降と考えられる。

21) 第22号掘立柱建物址

遺構 (第229図、図版34)

C-1・2グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。



層序説明
埋土 暗褐色土層 (10YR3/4)
パミス、ローム粒子含む

水糸レベル692.558m
0 2m

第229図 第22号掘立柱建物址実測図

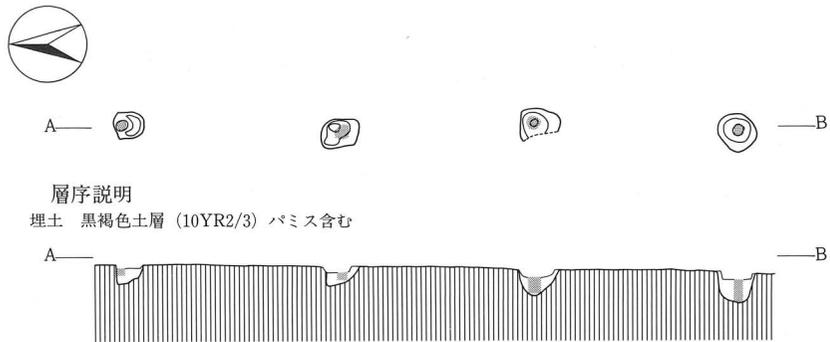
東西380cm、南北420cmを測り、平面プランは長方形を呈する。
2間×2間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西144~307cm、南北が145~331cmを測る。
南北軸の方位は、N-2°-Eを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無である。

本遺構の所産期は、一応、平安時代以降と考えておきたい。



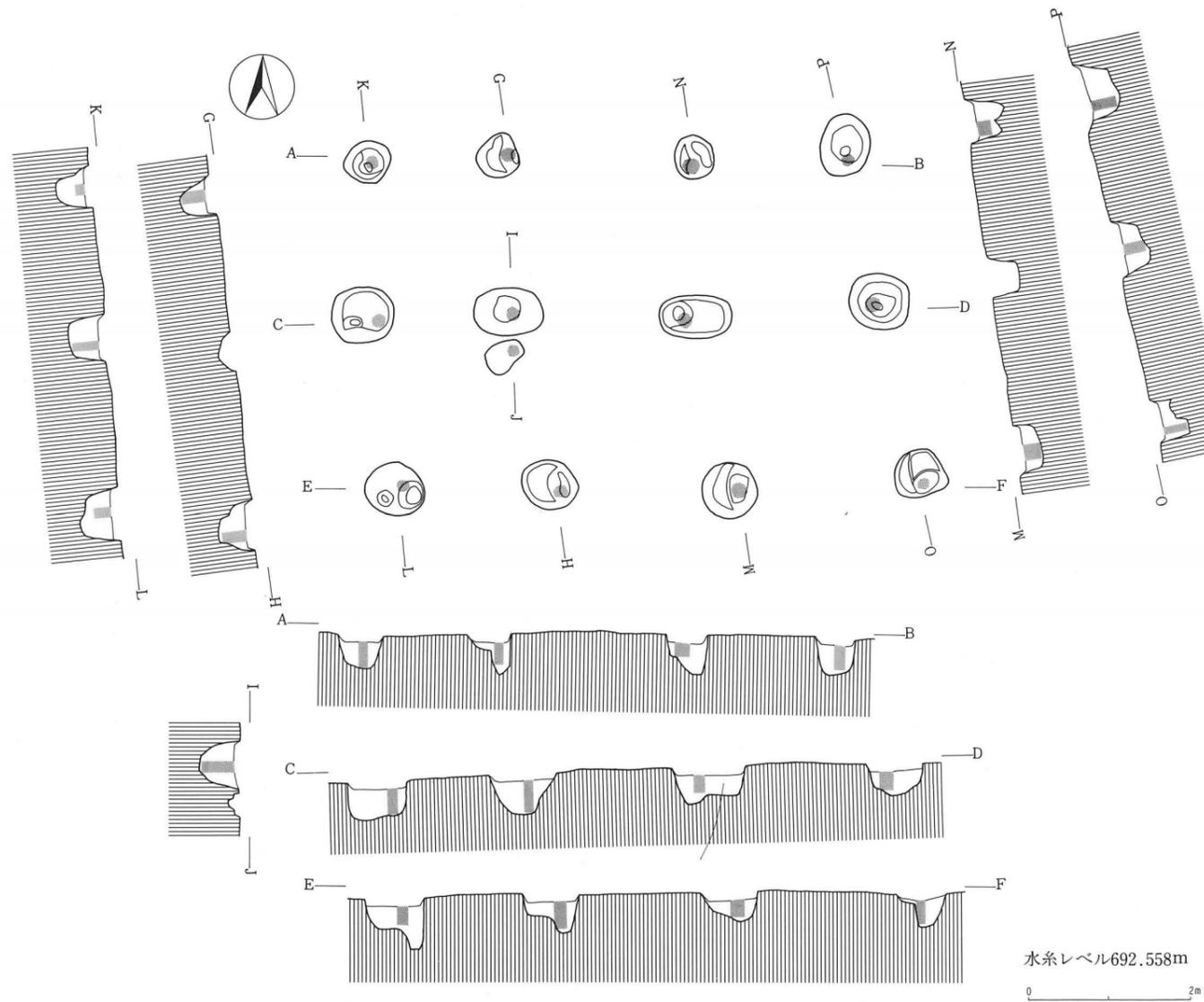
層序説明
埋土 黒褐色土層 (10YR2/3) パミス含む

水糸レベル692.608m
0 2m

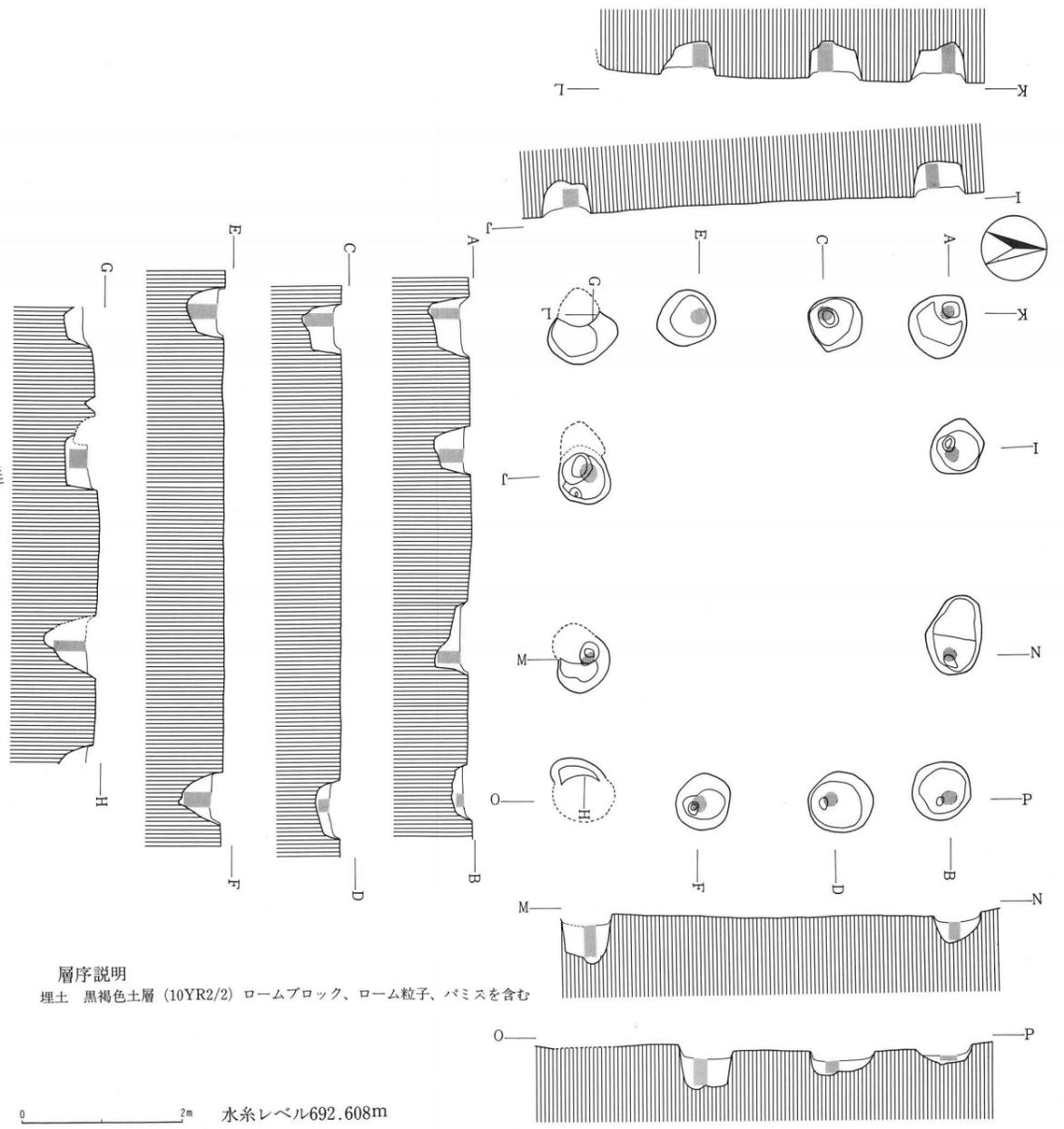
第230図 第23号掘立柱建物址実測図

22) 第23号掘立柱建物址遺構 (第230図、図版35)

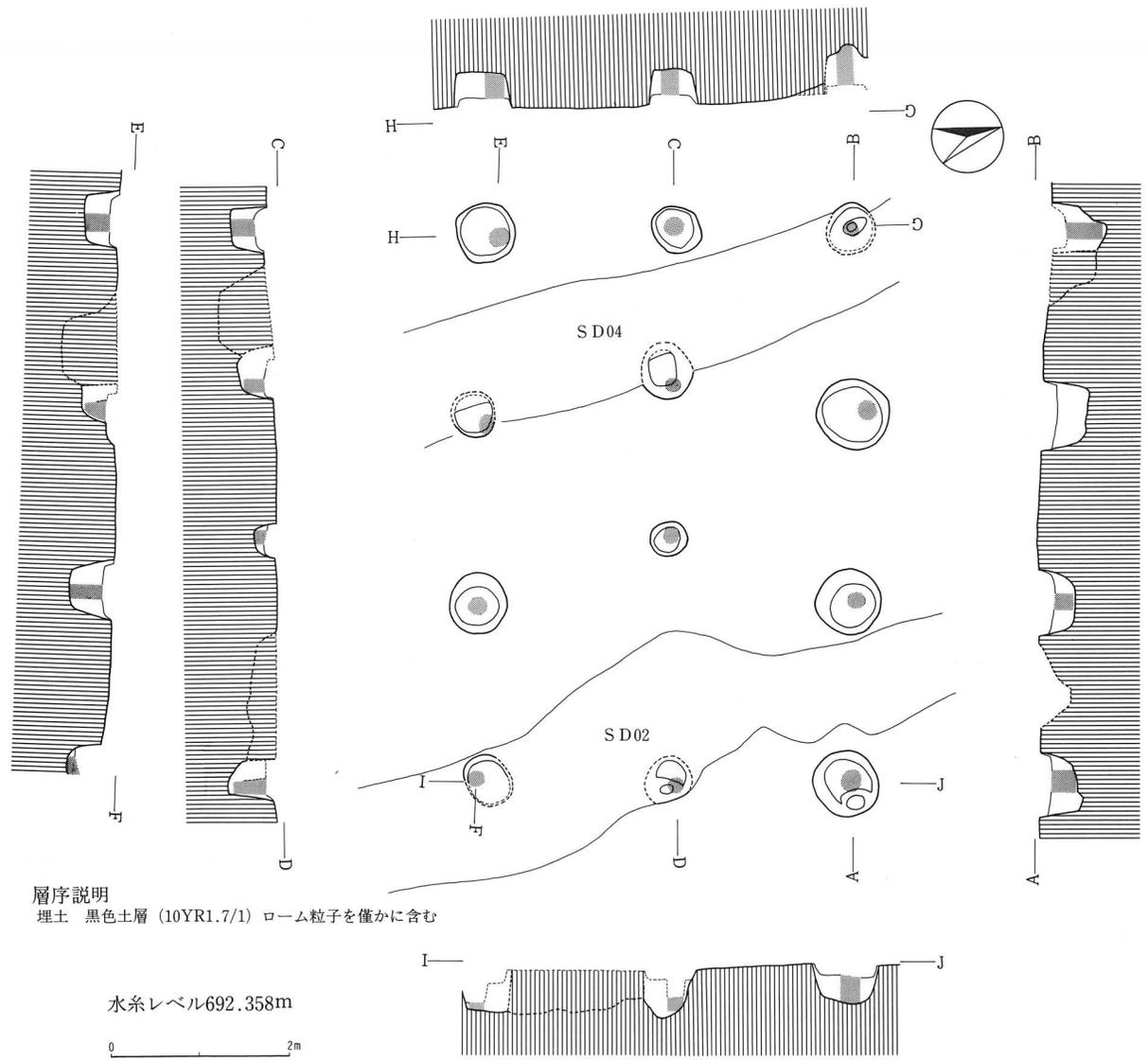
C-1・2グリ



第231図 第24号掘立柱建物址実測図



第232図 第25号掘立柱建物址実測図



第233図 第26号掘立柱建物址実測図

ッドに位置する。

第16号掘立柱建物址と重複関係を有し、第16号掘立柱建物址により切られている。

4基のピットが検出されたのみで、全体の形状は不明である。あるいは柵列のようなものかもしれない。柱間は、189~220cmを測り、南北軸の方位は、 $N-2^{\circ}-E$ を示す。

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、一応、平安時代以降と考えておきたい。

23) 第24号掘立柱建物址

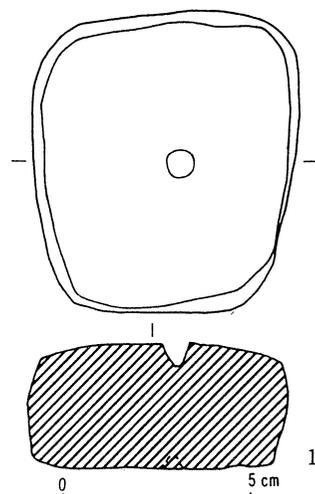
遺構 (第231図、図版35)

C-2グリッドに位置する。第25号掘立柱建物址と重複関係を有し、第25号掘立柱建物址を切って構築されている。

東西828cm、南北492cmを測り、平面プランは長方形を呈する。

2間×3間の総柱式の掘立柱建物で柱間は、東西が153~217cm、南北167~219cmを測る。

南北軸の方位は、 $N-1^{\circ}-W$ を示す。ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形である。



第234図 第24号掘立柱建物址出土遺物

遺物 (第234図)

土師器片、須恵器片、黒色土器片のほか、軽石製の紡錘車が

出土している。紡錘車は未製品で、両面から穿孔され始めているが、貫通していない。重さ134gを計る。本遺構の所産期は平安時代以降と考えられる。

24) 第25号掘立柱建物址

遺構 (第232図、図版35)

C-1・2グリッドに位置する。第24号掘立柱建物址と重複関係を有し、第24号掘立柱建物址により切られている。東西672cm、南北530cmを測り、平面プランは長方形を呈する。

3間×3間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西160~231cm、南北129~147cmを測る。

南北軸の方位は、 $N-2^{\circ}-W$ を示す。ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形を呈する。

遺物

出土遺物は皆無であり、所産期については、一応、平安時代以降と考えておきたい。

25) 第26号掘立柱建物址

遺構 (第233図、図版36)

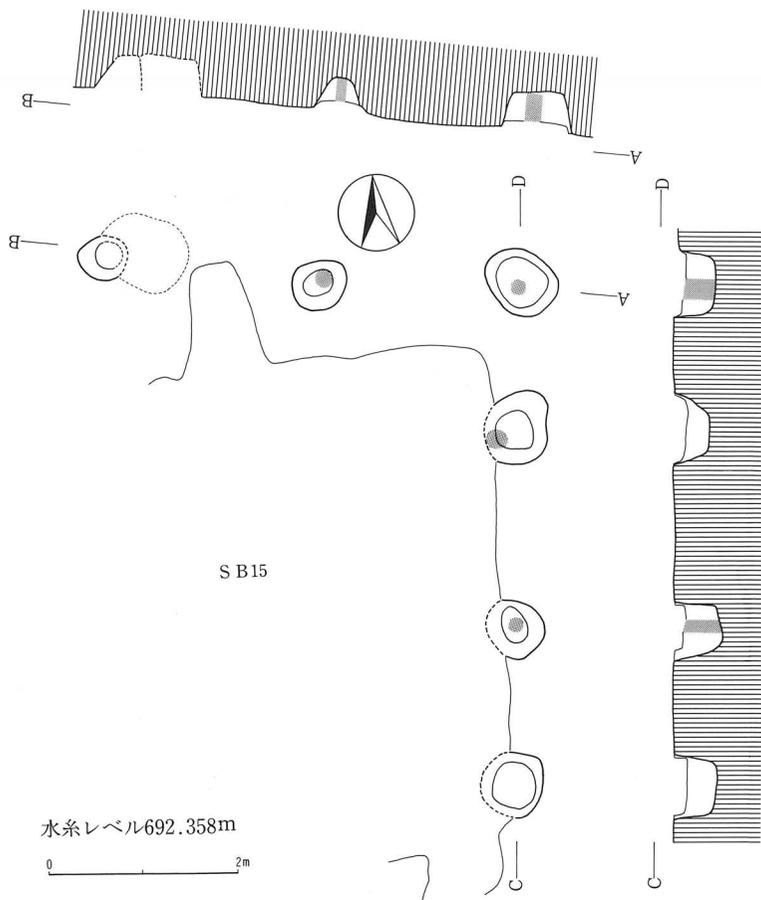
B-2グリッドに位置する。第2・4号溝址と重複関係を有し、2基の溝址により切られている。東西696cm、南北480cmを測り、平面プランは長方形を呈する。

2間×3間の総柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西151~263cm、南北174~206cmを測る。南北軸の方位は、N-15°-Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形である。

遺物

土師器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、重複関係から奈良~平安時代と考えられる。

26) 第27号掘立柱建物址



第235図 第27号掘立柱建物址実測図

遺構 (第235図、図版36)

C-2・3グリッドに位置する。第15号住居址と重複関係を有し、第15号住居址を切って構築されている。

東西511cm、南北603cmを測り、平面プランは長方形を呈すると思われる。

3間×2間の側柱式の掘立柱建物と考えられ、柱間は、東西185cm、南北145~181cmを測る。

南北軸の方位は、N-8°-Eを示す。

遺物

出土遺物は皆無で、所産期は重複関係から、奈良時代以降と考えられる。

27) 第28号掘立柱建物址

遺構 (第236図、図版36)

D-1・2グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。東西329cm、南北493cmを測り、平面プランは長方形を呈する。2間×1間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西241cm、南北が189~193cmを測る。

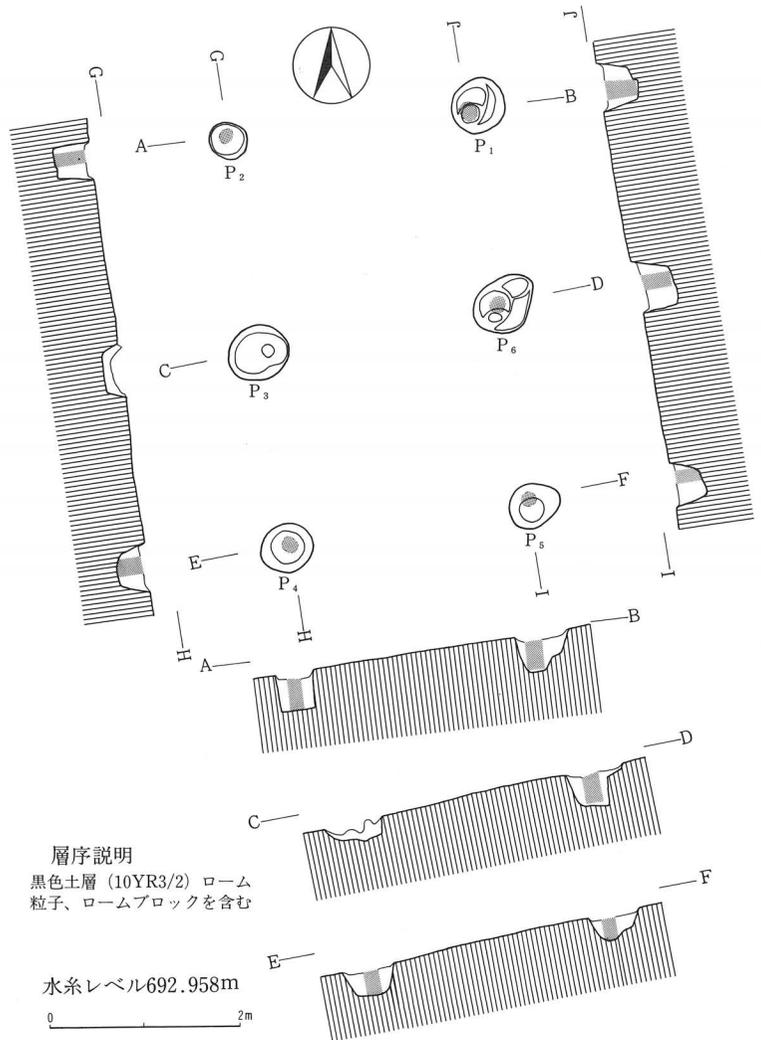
南北軸の方位は、N-8°-Wを示す。

ピット掘形の平面プランは円形、楕円形で、覆土上部に加工した軽石が認められたピットも存在した。

遺物

土師器片、須恵器片、灰釉陶器片が出土、またP₅から炭化材が出土しておりサクラ属の一種と同定された。

本遺構の所産期は、平安時代以降と考えられる。



第236図 第28号掘立柱建物址実測図

28) 第29号掘立柱建物址

遺構 (第237図、図版37)

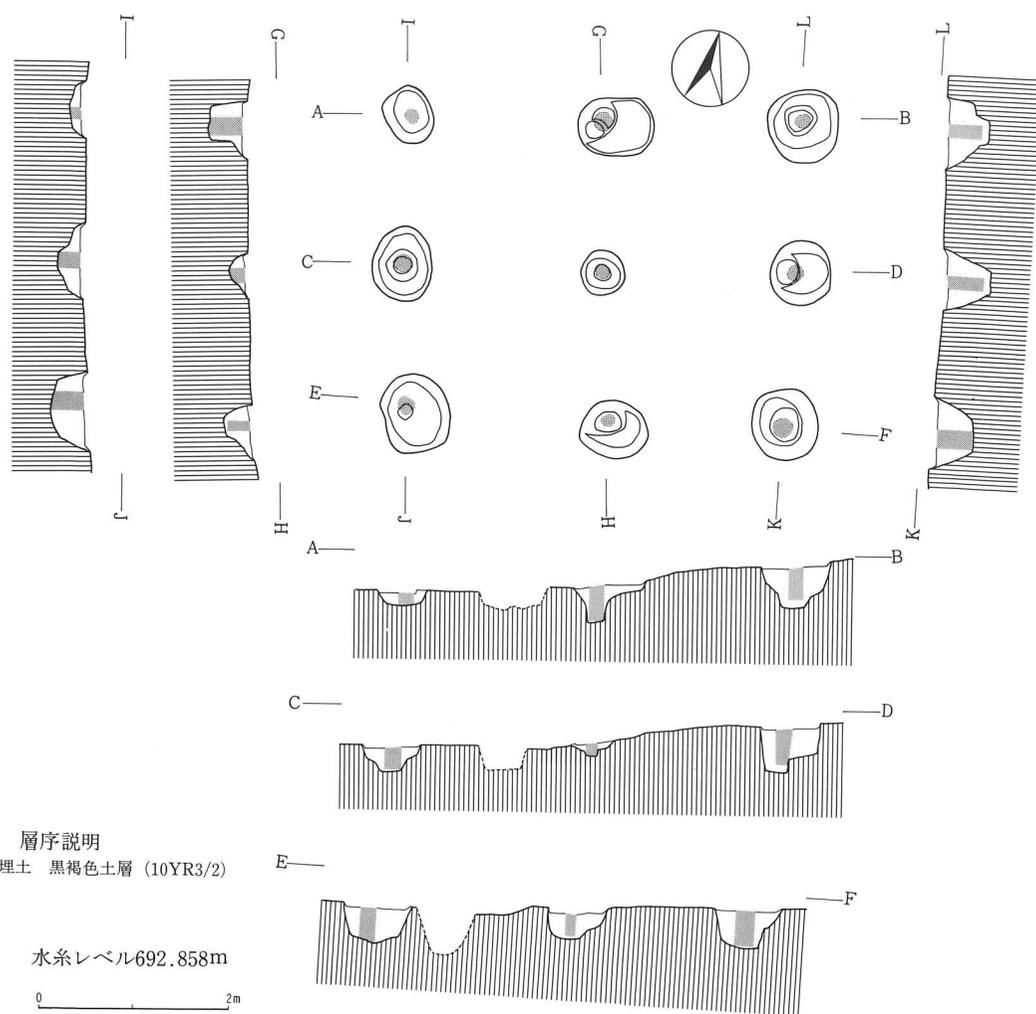
C・D-1グリッドに位置する。第25号掘立柱建物址と重複関係を有し、第25号掘立柱建物址より古いと考えられる。東西480cm、南北396cmを測り、平面プランは正方形を呈する。

2間×2間の総柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西164~195cm、南北131~146cmを測る。

南北軸の方位は、N-12°-Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形である。

遺物

土師器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器から平安時代前葉以降と考えられる。



第237図 第29号掘立柱建物址実測図

29) 第30号掘立柱建物址

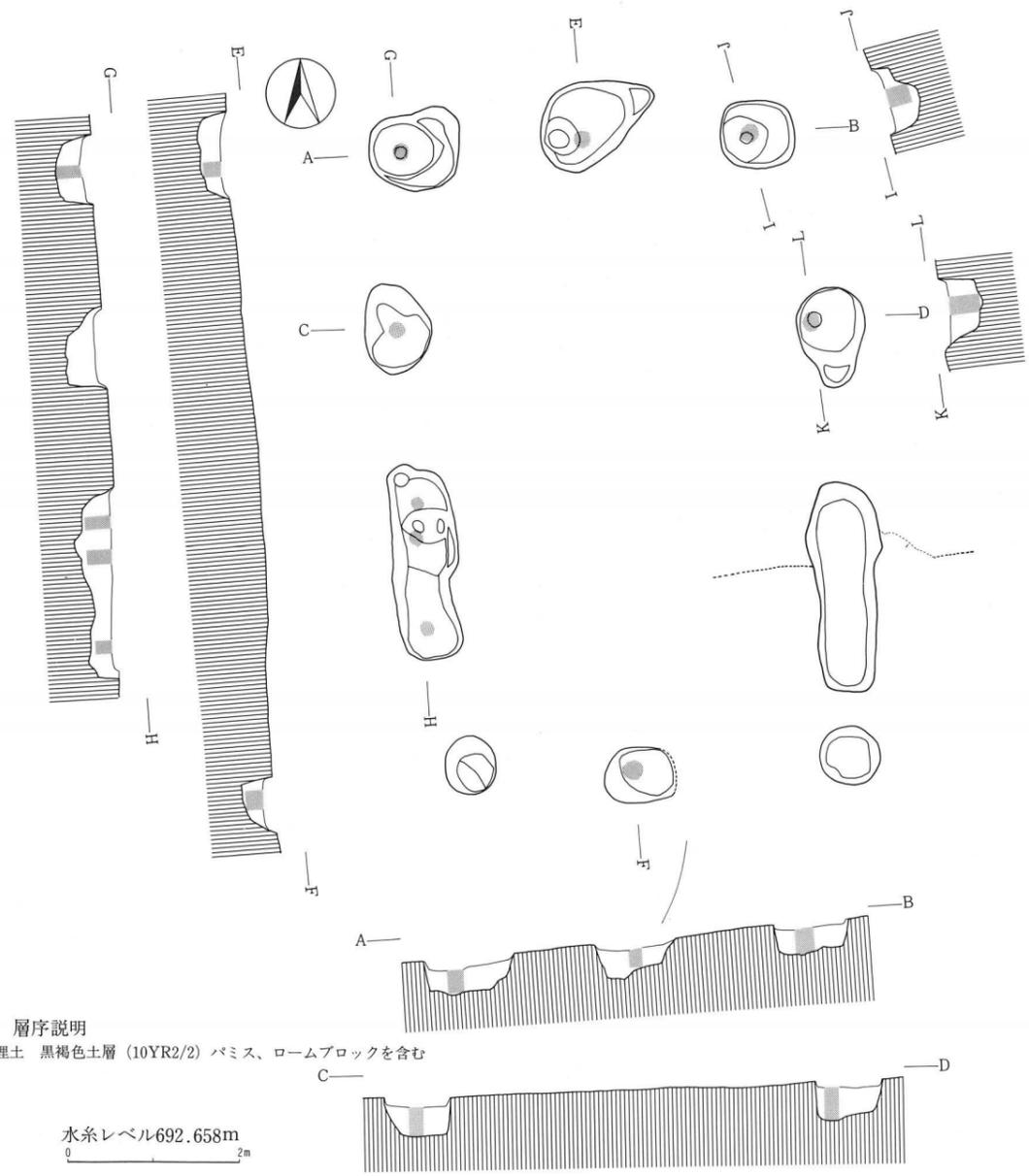
遺構 (第238図、図版37)

C・D-2グリッドに位置する。第18号住居址と重複関係を有し、第18号住居址を切って構築されている。東西583cm、南北843cmを測り、平面プランは長方形を呈する。2間×3間の側柱式の掘立柱建物と考えられ、柱間は東西174~194cm、南北190~209cmを測る。

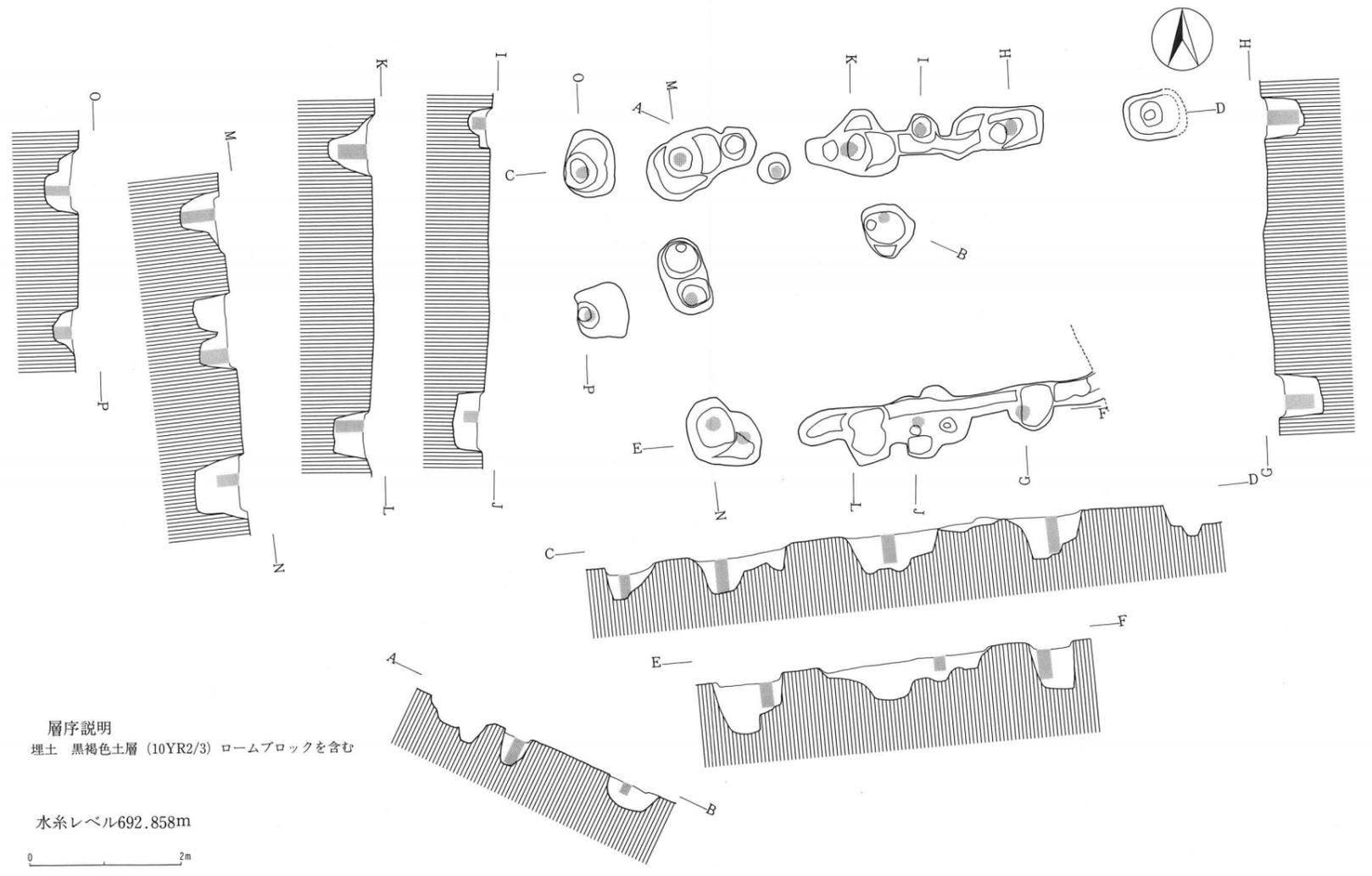
南北軸の方位は、N-3°-Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形のほか、布掘りを一部用いている。

遺物

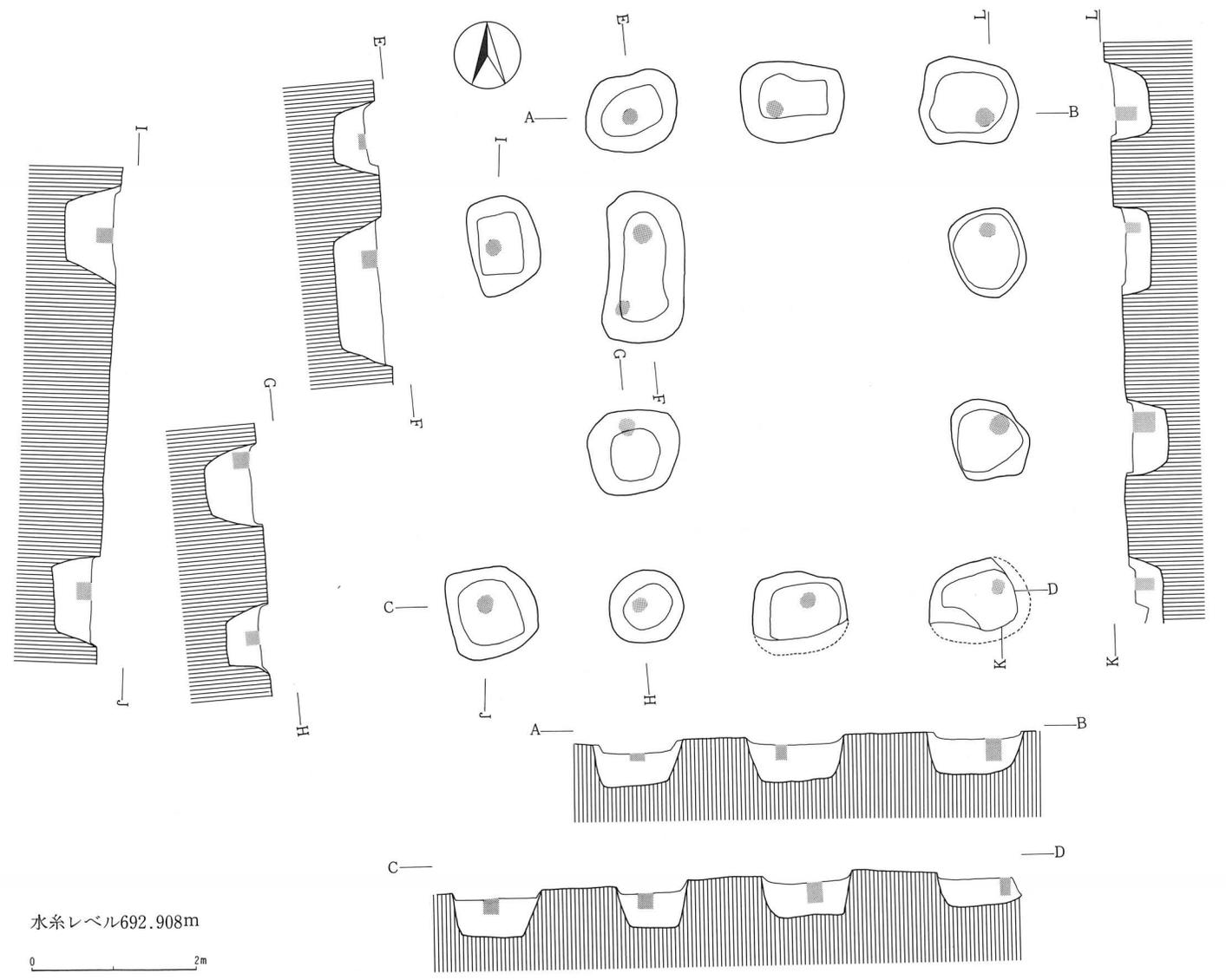
土師器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器、重複関係から奈良時代以降



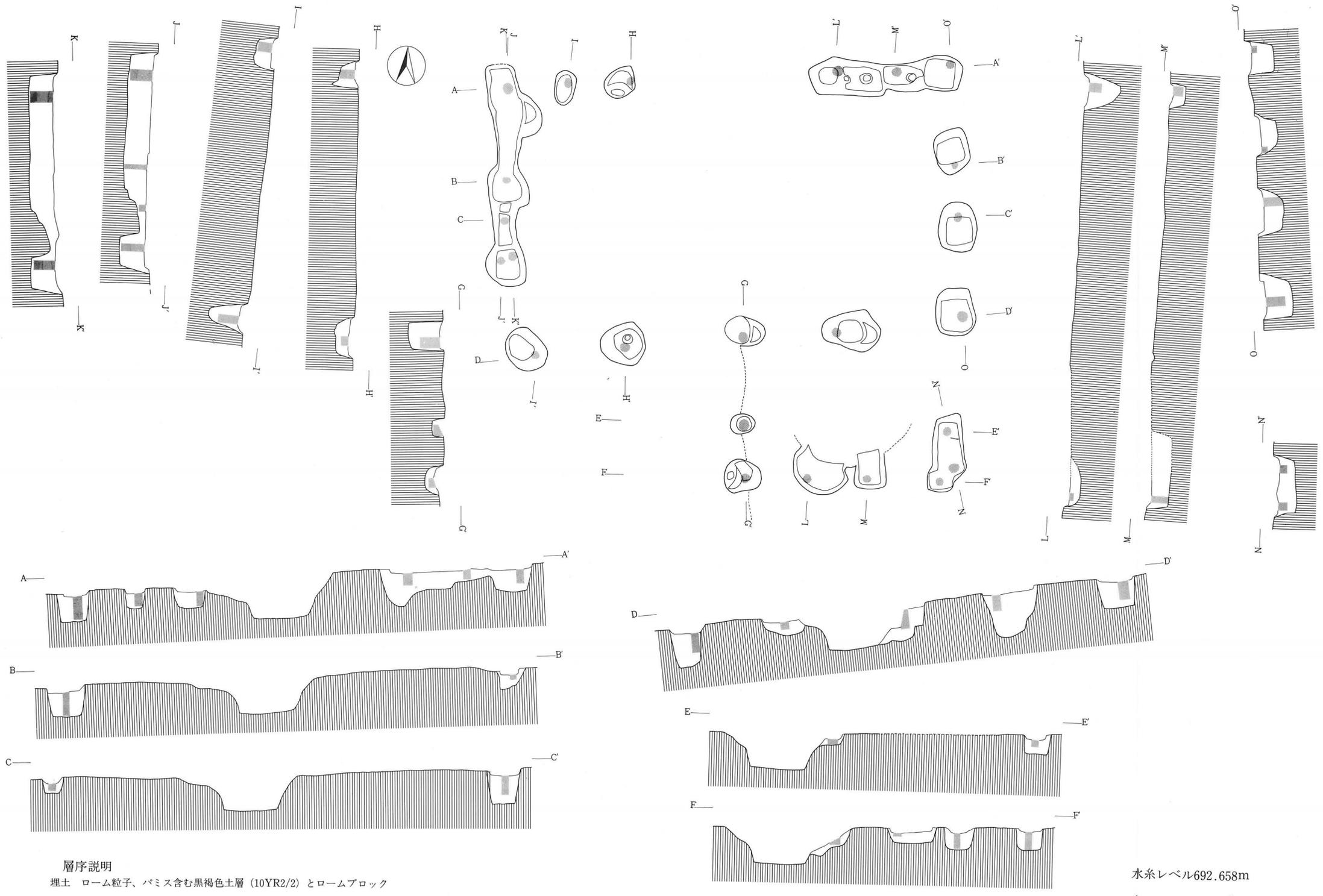
第238図 第30号掘立柱建物址実測図



第239図 第31号掘立柱建物址実測図



第240図 第32号掘立柱建物址実測図



層序説明

埋土 ローム粒子、パミス含む黒褐色土層 (10YR2/2) とロームブロック

第241図 第33号掘立柱建物址実測図

水系レベル692.658m

0 2m

と考えられる。

30) 第31号掘立柱建物址

遺構 (第239図、図版37)

D-2グリッドに位置する。第29号住居址、第31号掘立柱建物址と重複関係を有し、各々の遺構を切って構築されている。東西832cm、南北451cmを測り、平面プランは長方形を呈する。

2間×6間の掘立柱建物で、柱間は、東西112~120cm、南北148~173cmを測る。

南北軸の方位は、N-5°-Wを示す。ピット掘形には、溝持ちのものも認められる。

遺物 (第273図)

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。第273図4は、木ノ葉底を有する土師器甕の底部である。本遺構の所産期は、糸切り底を有する土師器杯の破片が出土していることから、平安時代以降と考えられる。

31) 第32号掘立柱建物址

遺構 (第240図、図版38)

D-2グリッドに位置する。第31号掘立柱建物址と重複関係を有し、第31号掘立柱建物址に切られている。東西698cm、南北705cmを測り、正方形プランを呈する。

2間×3間の側柱式の掘立柱建物で、西に廂を持つ。柱間は、東西157~237cm、南北117~217cmを測る。南北軸の方位は、N-1°-Wを示す。

遺物 (第273図)

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。第273図5は、明確ではないが土師器甑の把手であろうか。

本遺構の所産期は、糸切り底を有する土師器杯の破片が認められていることから、平安時代以降と考えられる。

32) 第33号掘立柱建物址

遺構 (第241図、図版38)

B・C-1・2グリッドに位置する。第52号住居址、第1号井戸址、第1号溝址と重複関係を有し、第52号住居址、第1号井戸址を切り、第1号溝址に切られている。

東西1012cm、南北931cmを測り、平面プランは長方形を呈する。4間×4間の掘立柱建物で、南に廂を持つ。柱間は、東西116~248cm、南北95~225cmを測る。

南北軸の方位は、N-2°-Wを示す。ピット掘形には、溝持ちのものが認められる。

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、重複関係から、奈良時代後半～平安時代初頭と考えられる。

33) 第34号掘立柱建物址

遺構 (第242図、図版38)

C・D-3グリッドに位置する。第42・43・51号住居址と重複関係を有し、各々の住居址を切って構築されている。東西892cm、南北640cmを測り、平面プランは長方形を呈する。

柱間は、東西184cm、南北439cmを測る。南北軸の方位は、N-9°-Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、隅丸方形プランが主体である。

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、重複関係から平安時代以降と考えられる。

34) 第35号掘立柱建物址

遺構 (第243図、図版39)

E-1グリッドに位置する。第40号住居址と重複関係を有し、第40号住居址を切って構築されている。東西488cm、南北412cmを測り、平面プランは長方形を呈する。

2間×1間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西385～404cm、南北113～182cmを測る。

南北軸の方位は、N-7°-Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形である。

遺物

土師器片、須恵器片、河床礫が出土している。本遺構の所産期は、出土土器、重複関係から奈良時代前半以降と考えられる。

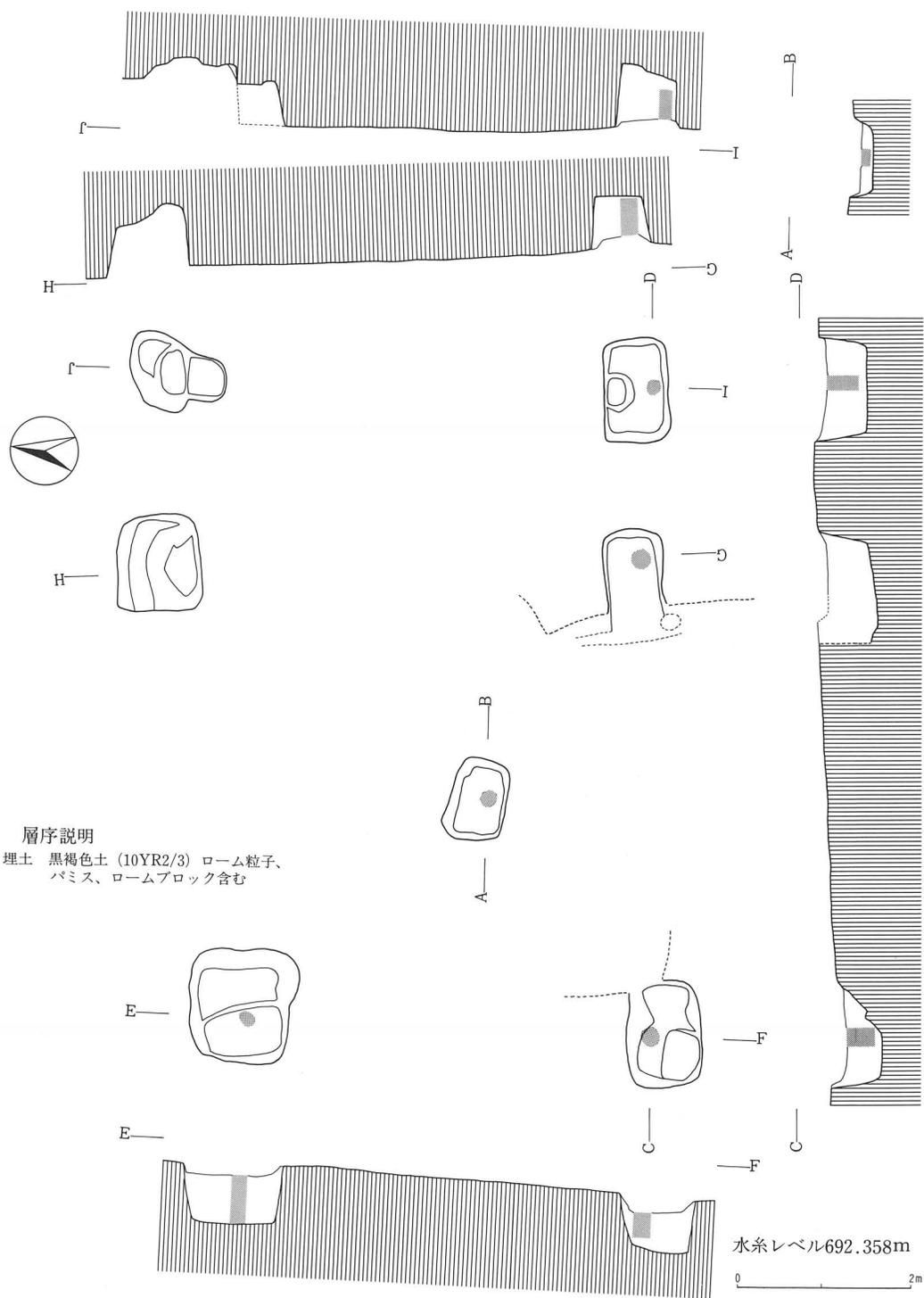
35) 第36号掘立柱建物址

遺構 (第244図、図版39)

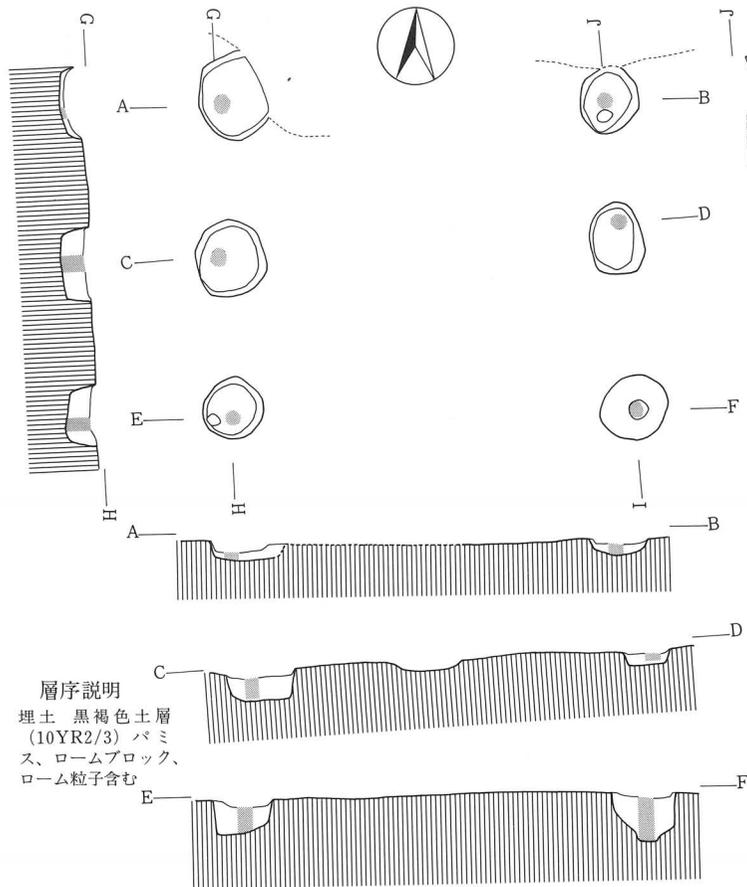
E-1グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。2基のピットが検出されたにとどまり、全体の形状は不明である。柱間は、178cmを測る。ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形である。埋土は、ローム粒子、ロームブロック、パミスを含む黒褐色土(10YR2/3)である。

遺物

本遺構からの出土遺物は皆無であり、所産期についても明確でない。

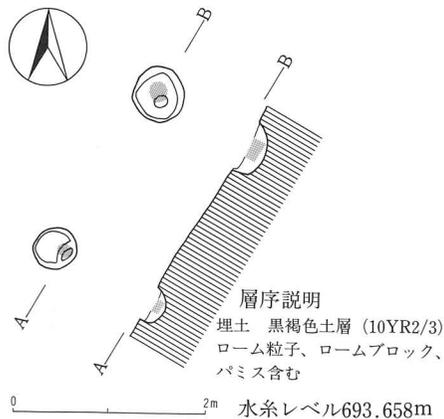


第242図 第34号掘立柱建物址実測図



水系レベル692.658m
0 2m

第243図 第35号掘立柱建物址実測図



0 2m 水系レベル693.658m

第244図 第36号掘立柱建物址実測図

36) 第37号掘立柱建物址遺構 (第246図、図版39)

E-1グリッドに位置する。

第8号溝址と重複関係を有し、第8号溝址により切られている。

東西559cm、南北390cmを測り、平面プランは長方形を呈する。1間あるいは2間×3間の側柱式の掘立柱建物と考えられ、柱間は、東西113~210cm、南北160~330cmを測る。南北軸の方位は、N-11°-Eを示す。

す。ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形である。

遺物

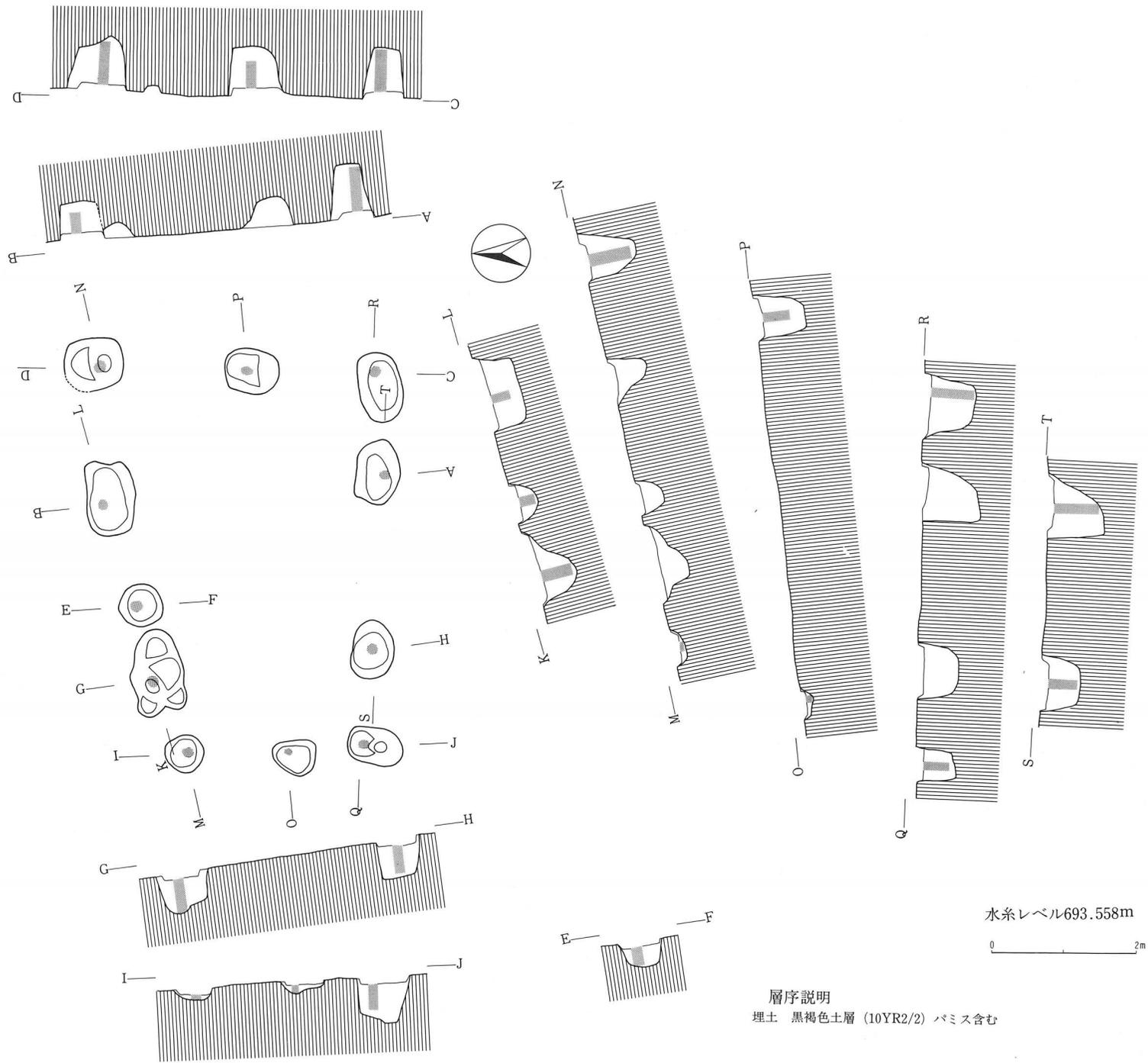
出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、重複関係から少なくとも第8号溝址の構築以前と考えられる。

37) 第38号掘立柱建物址

遺構 (第245図、図版40)

D・E-1グリッドに位置する。東西570cm、南北473cmを測り、平面プランは梯形を呈する。

2間×3間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西91~230cm、南北125~187cmを測る。南北軸の方位は、



水系レベル693.558m



層序説明
埋土 黒褐色土層 (10YR2/2) パミス含む

第245図 第38号掘立柱建物址実測図

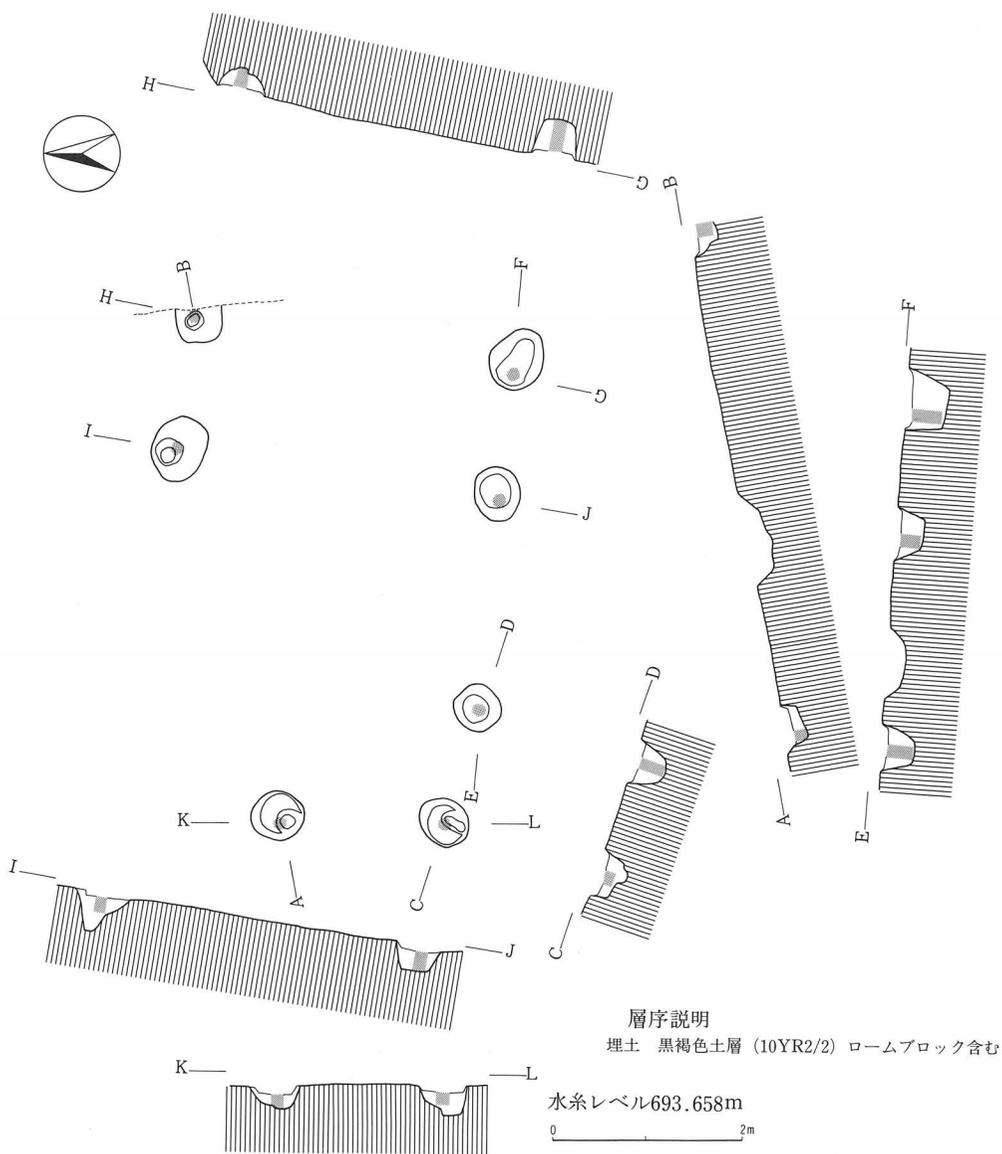
N-2°-Eを示す。

遺物

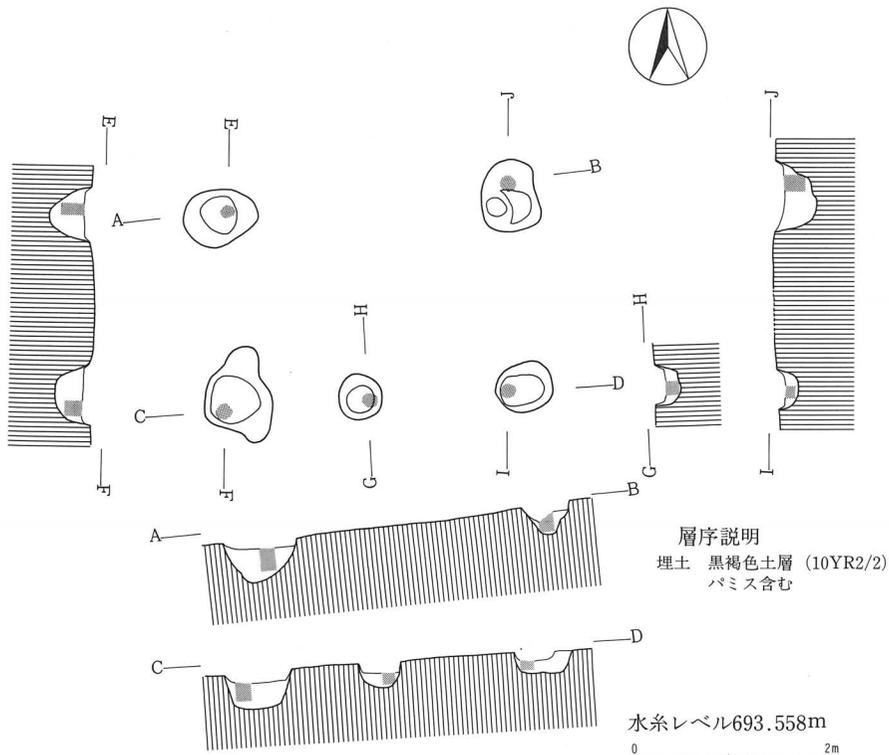
土師器片、須恵器片が出土している。所産期は、出土土器から奈良時代以降と考えられる。

38) 第39号掘立柱建物址

遺構 (第247図、図版40)

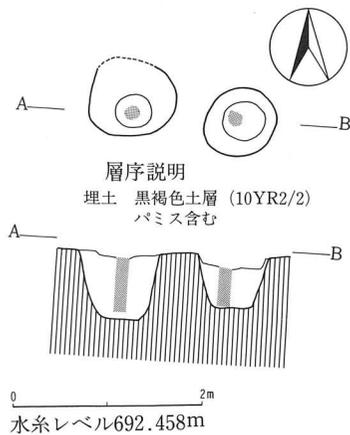


第246図 第37号掘立柱建物址実測図



第247図 第39号掘立柱建物址実測図

D・E-1グリッドに位置する。第38号掘立柱建物址と重複するが、前後関係については不明である。東西375cm、南北270cmを測り、平面プランは長方形を呈する。1間×2間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西132~262cm、南北197~205cmを測る。南北軸の方位は、N-1°-Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形、不整形である。



第248図 第40号掘立柱建物址実測図

遺物

土師器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は出土土器から奈良時代以降と考えられる。

39) 第40号掘立柱建物址

遺構 (第248図、図版40)

D・E-1グリッドに位置する。第6号溝址と重複関係を有し、第6号溝址に切られている。2基のピットが検出されたのみで、全体を窺えない。柱間は95cmを測る。

ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、重複関係から、平安時代前葉以前と考えられる。

40) 第41号掘立柱建物址

遺構 (第249

図、図版40)

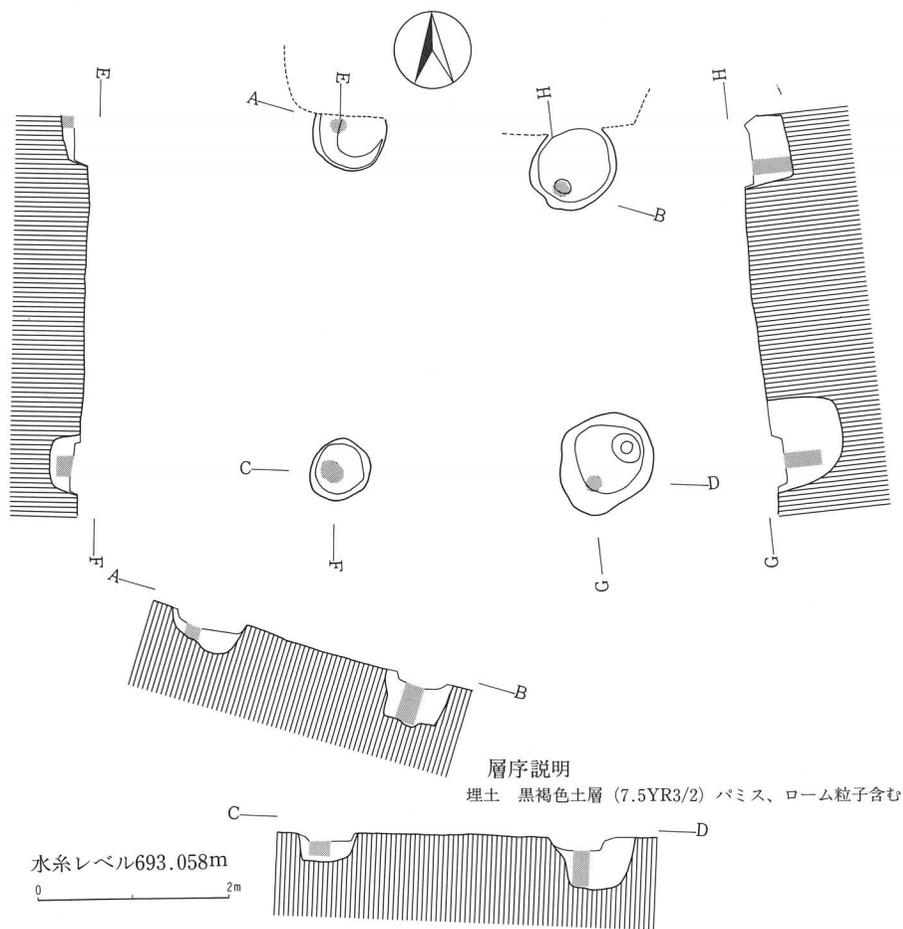
C・D-1
グリッドに位置する。

第50号住居
址と重複関係を有し、第50号住居址を切
って構築されている。

東西360cm、
南北410cmを
測り、平面プ
ランは長方形
を呈する。

1間×1間
の側柱式の掘
立柱建物と考
えられ、柱間
は、東西224
~254cm、南北

297~348cmを測る。南北軸の方位は、N-7°-Wを示す。



第249図 第41号掘立柱建物址実測図



遺物 (第250図)

縄文土器片、黒色土器片が出土している。縄文土器は、中期後半のものである。本遺構の所産期は、出土土器、重複関係から奈良時代以降と考えられる。

第250図
第41号掘立柱建
物址出土遺物

41) 第42号掘立柱建物址

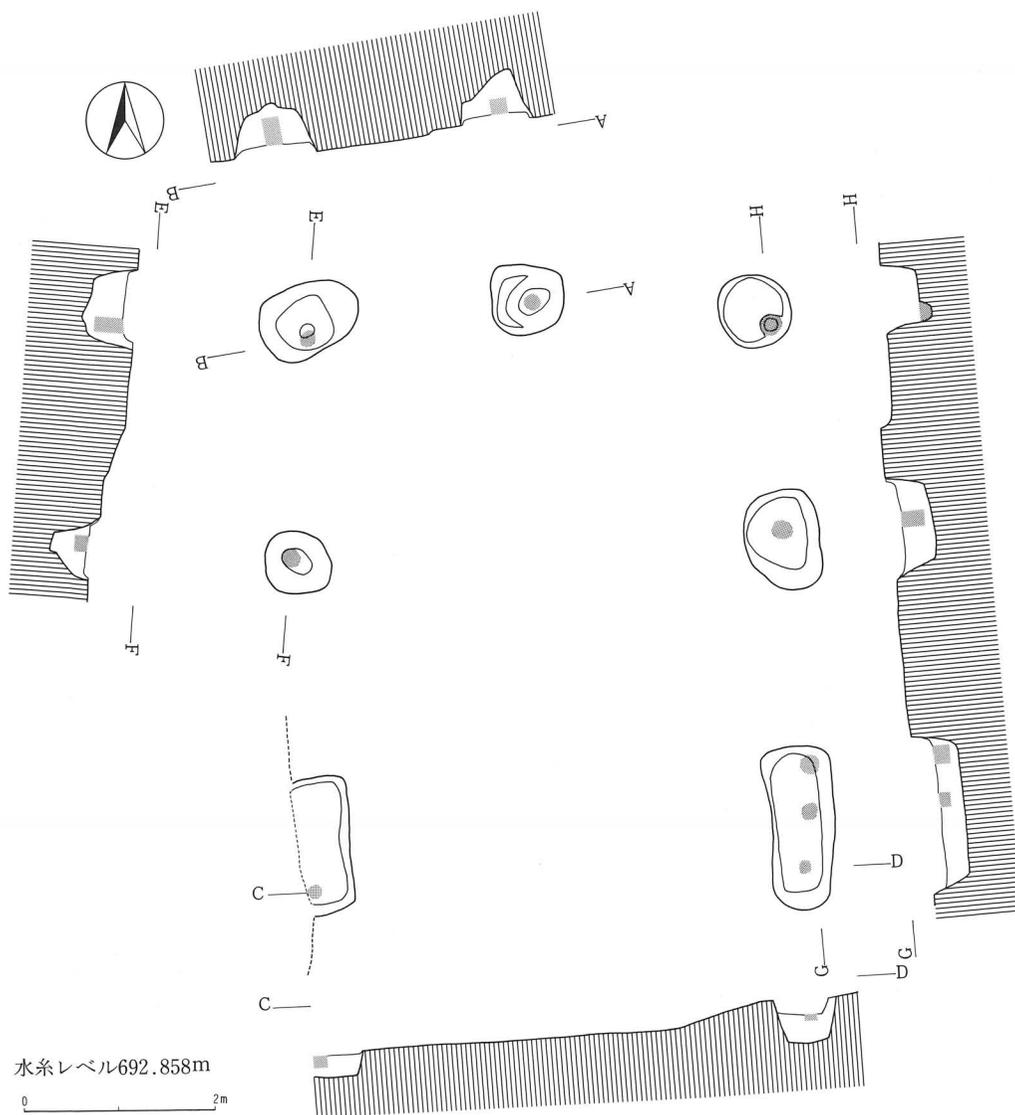
遺構 (第251図、図版41)

D-2グリッドに位置する。第18・28号住居址と重複関係を有し、第18・28号住居址を切って構築されている。東西585cm、南北676cmを測り、平面プランは長方形を呈する。2間×2間の側柱式の掘立柱建物と考えられる。南北軸の方位は、N-2°-Wを示す。

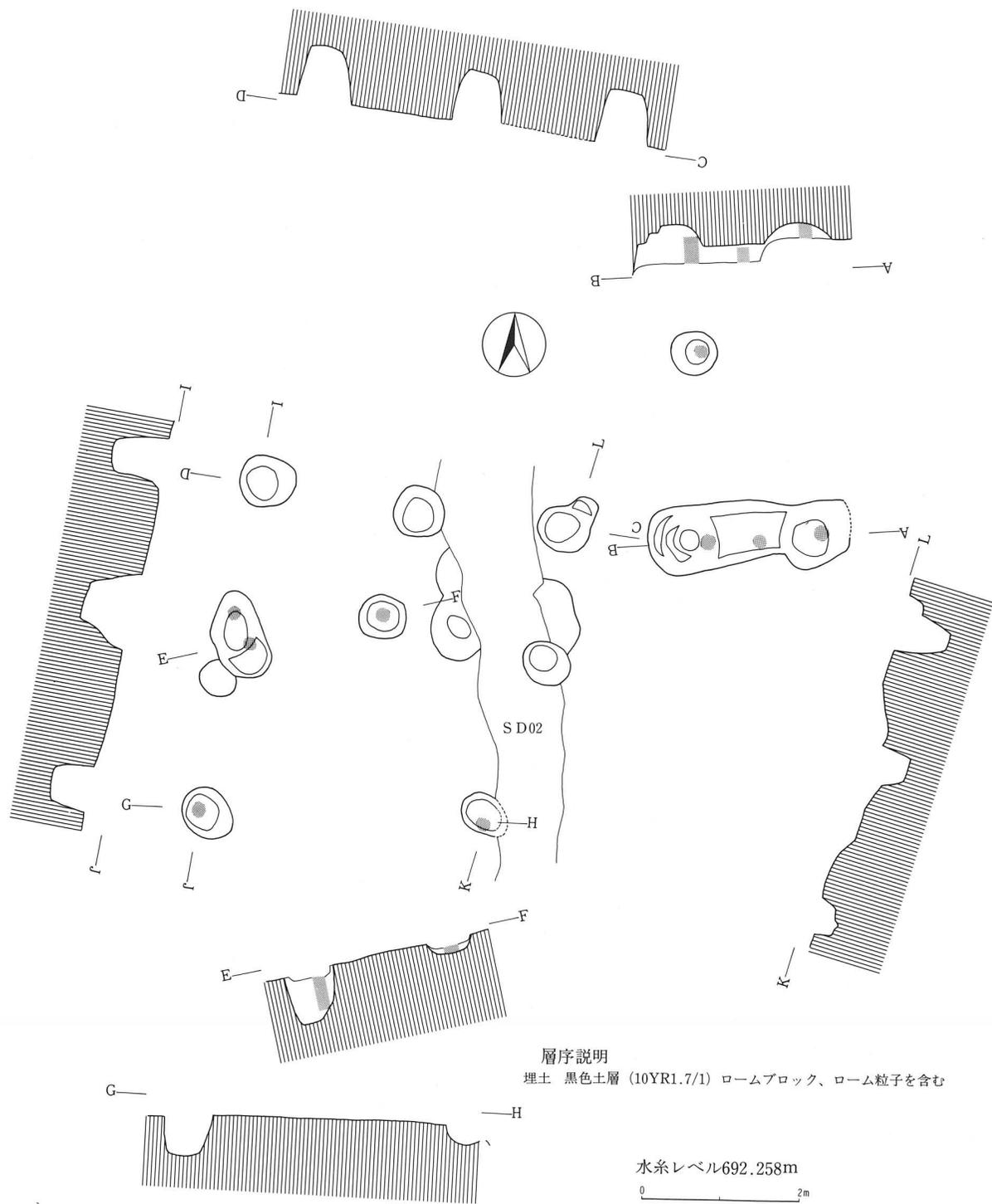
ピット掘形には、布掘りのものも認められた。

遺物

土師器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器、重複関係から古墳時代後期以降と考えられる。



第251図 第42号掘立柱建物址実測図



第252図 第43号掘立柱建物址実測図

42) 第43号掘立柱建物址

遺構 (第252図、図版41)

B-2グリッドに位置する。第12号住居址、第1・2号溝址と重複関係を有する。

総計10基のピットが検出されたが、北東の2基は本址に伴うものか不明である。

2間×2間の総柱式の掘立柱建物と考えると、東西462cm、南北496cmで平面プランは正方形となる。南北軸の方位は、N-10°-Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形で、北東部の1基には溝持ちのものが認められた。

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、重複関係から奈良～平安時代と考えられる。

43) 第44号掘立柱建物址

遺構 (第253図、図版42)

B-1・2グリッドに位置し、第1号溝址と重複関係を有し、第1号溝址により切られている。

東西381cm、南北402cmを測り、平面形は正方形を呈する。1間×2間の側柱式の掘立柱建物と考えられるが、確認できたのは5基のピットである。柱間は、東西156～160cm、南北339cmを測る。南北軸の方位は、N-16°-Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、重複関係から平安時代前葉以前と考えられる。

44) 第45号掘立柱建物址

遺構 (第254図、図版42)

C-3グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。3基のピットが検出されたのみで、全体については不明である。確認し得た範囲では、東西206cm、南北294cmを測り、平面プランは長方形を呈する。柱間は、東西128cm、南北207cmを測る。

南北軸の方位は、N-9°-Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形である。

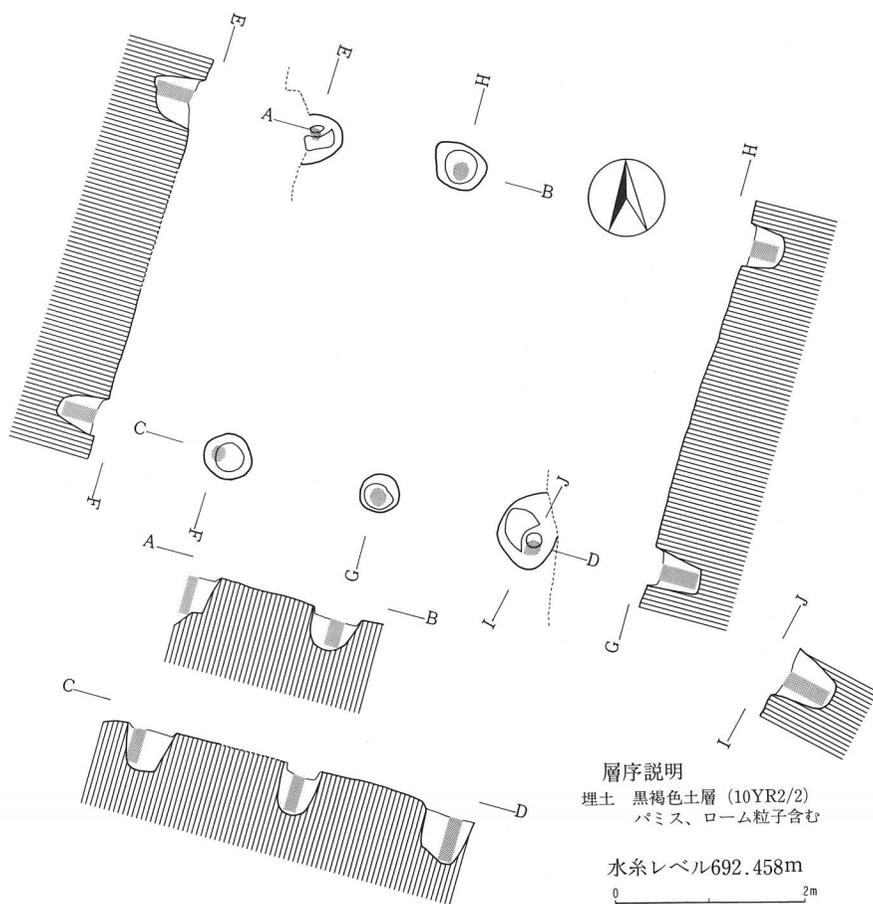
遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。

45) 第46号掘立柱建物址

遺構 (第255図、図版42)

D-2グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。3基のピットが検出されたのみで、



第253図 第44号掘立柱建物址実測図

全体については不明である。確認し得た範囲では、東西376cm、南北378cmを測り、平面プランは、正方形を呈する。柱間は、東西284cm、南北316cmを測る。

南北軸の方位は、 $N-3^{\circ}-E$ を示す。ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。

46) 第47号掘立柱建物址

遺構 (第256図、図版43)

B-1・2グリッドに位置する。第2号溝址と重複関係を有し、第2号溝址により切られている。1棟分の掘立柱建物址として考えたが、2棟分の可能性があり、北側の4基と南側の5基に分けられるかもしれない。2棟と考えると、2棟とも1間×1間の側柱式の掘立柱建物となる。

北側は、東西343cm、南北267cmを測り、平面プランは、菱形に近くなる。

柱間は、東西212~252cm、南北が150~174cmである。

南側は、東西344cm、南北430cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。

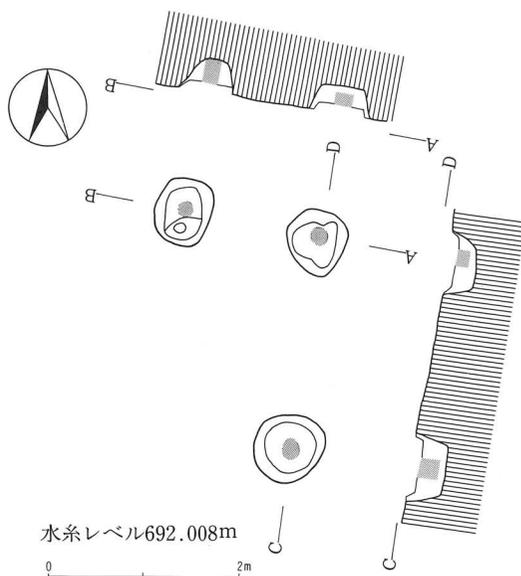
柱間は、東西237cm、南北305cmである。

南北軸の方位は、北側がN-32°-E、南側がN-27°-Eを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、重複関係から平安時代前葉以前と考えられる。



第254図 第45号掘立柱建物址実測図

47) 第48号掘立柱建物址 遺構 (第257図、図版43)

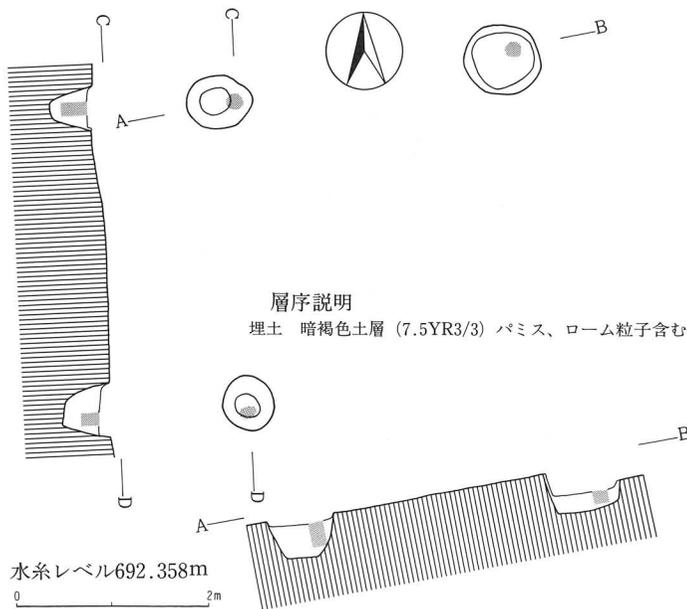
C-3グリッドに位置する。

第44号住居址、第19・20号掘立柱建物址と重複関係を有し、第44号住居址を切っている。第19・20号掘立柱建物址との前後関係については不明である。

2基のピットが確認されたにすぎず、全体を窺えない。

柱間は、275cmを測る。

ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

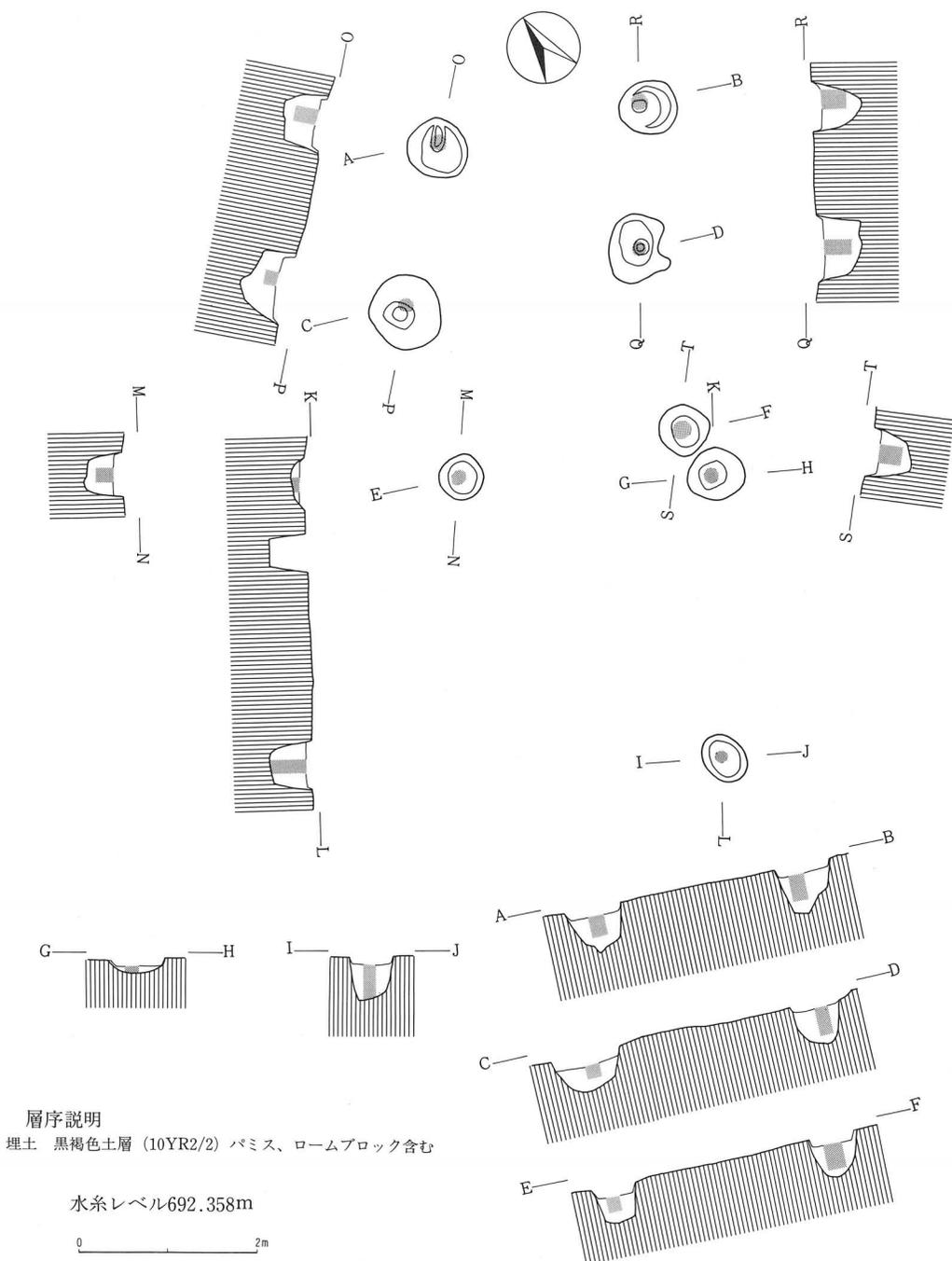


第255図 第46号掘立柱建物址実測図

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、第44号住居址を切っていることから、平安時代以降と考えられる。

48) 第49号掘立柱建物址
遺構 (第258図)



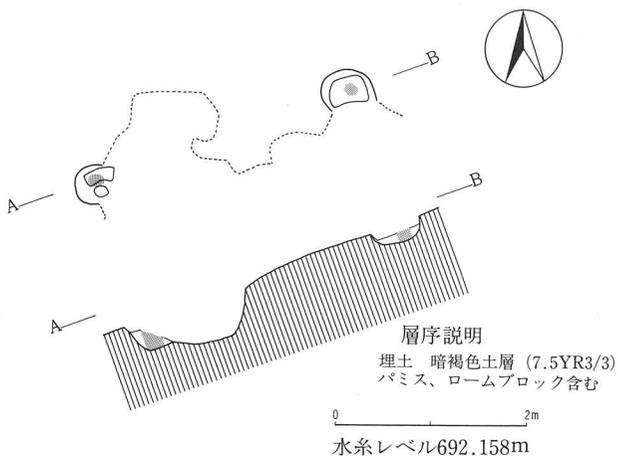
第256図 第47号掘立柱建物址実測図

D・E-1グリッドに位置する。

第38号掘立柱建物址と重複関係を有し、第38号掘立柱建物址に切られる。

4基のピットが検出されたにとどまり、全体を窺えない。

東西619cmを測る。ピット掘形の平面プランは、楕円形、不整形である。



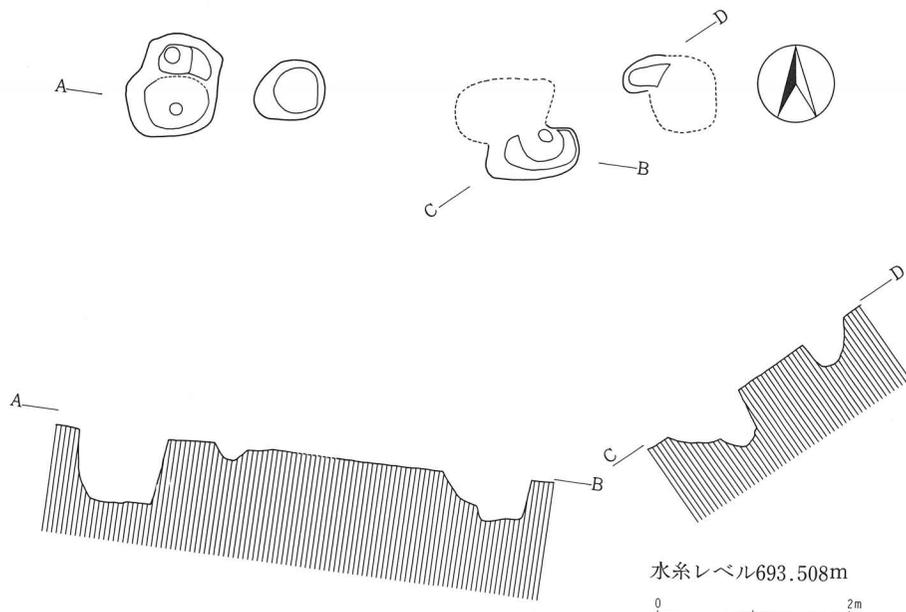
第257図 第48号掘立柱建物址実測図

49) 第50号掘立柱建物址

遺構 (第259図、図版43)

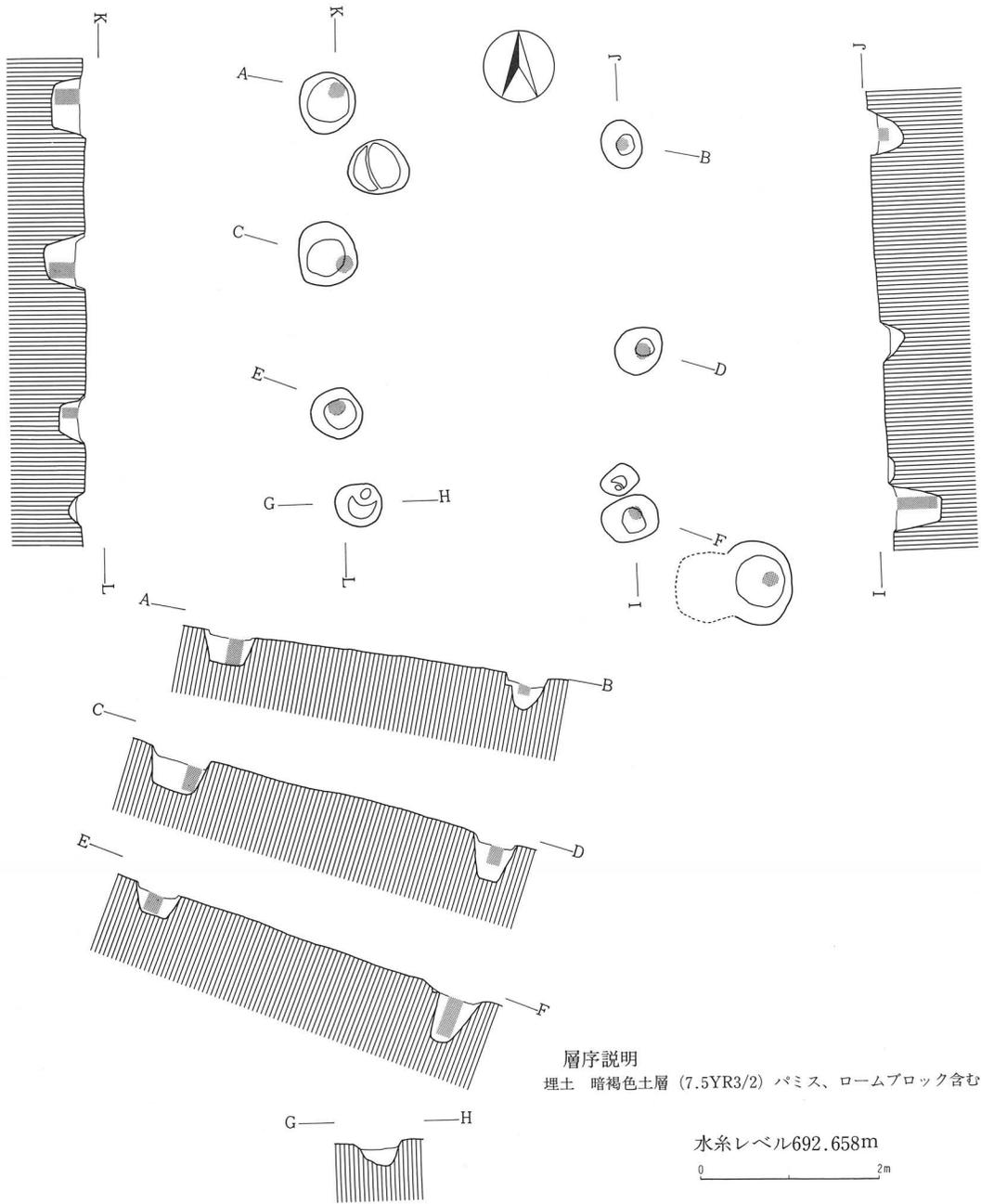
C・D-2グリッドに位置する。第31号掘立柱建物址と重複するが、前後関係については不明である。東西343cm、南北520cmを測り、平面プランは長方形を呈する。

南東部の柱穴については、本址に伴うものか明確でない。3間×1間の側柱式の掘立柱建物と考えられ、柱間は、東西315~343cm、南北146~222cmを測る。南北軸の方位は、磁北を示す。



第258図 第49号掘立柱建物址実測図

遺物



第259図 第50号掘立柱建物址実測図

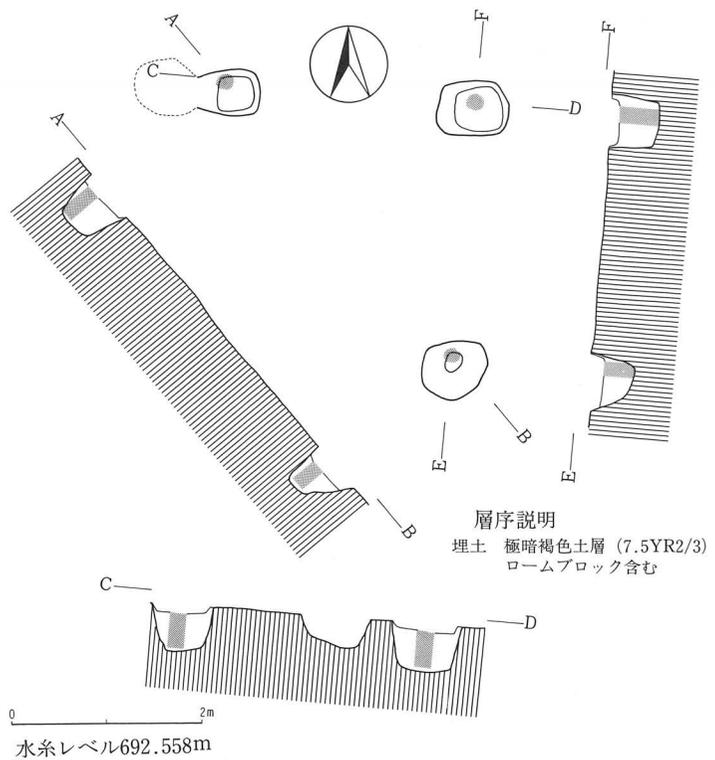
出土遺物は皆無である。
 本遺構の所産期は、重複
 関係からも明確でないが、
 一応、奈良・平安時代以降
 と考えておきたい。

50) 第51号掘立柱建物址
 遺構 (第260図、図版44)
 C-2グリッドに位置す
 る。第24号掘立柱建物址と
 重複関係を有し、第24号掘
 立柱建物址により切られて
 いる。東西328cm、南北は340
 cmを測り、平面プランは方
 形を呈する。

1間×1間の側柱式の掘
 立柱建物と考えられるが、
 確認されたピットは3基で

ある。柱間は、東西245cm、南北254cmを測る。南北軸の方位は、N-6°-Eを示す。

ピット掘形の平面プランは、楕円形、隅丸方形である。



第260図 第51号掘立柱建物址実測図

遺物

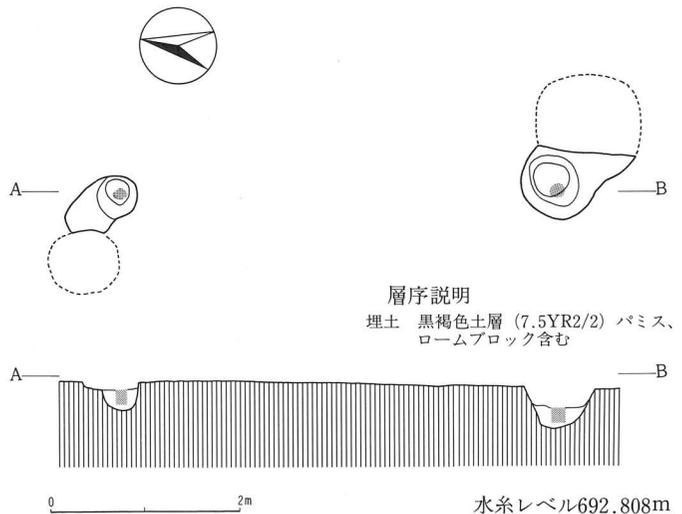
出土遺物は皆無である。本遺構
 の所産期は、重複関係から平安時
 代以降と考えられる。

51) 第53号掘立柱建物址
 遺構 (第261図、図版44)

D-1・2グリッドに位置する。
 第32号掘立柱建物址と重複関係
 を有し、同遺構に切られている。

2基のピットが確認されただけ
 で、全体は不明である。

柱間は、445cmを測る。



第261図 第53号掘立柱建物址実測図

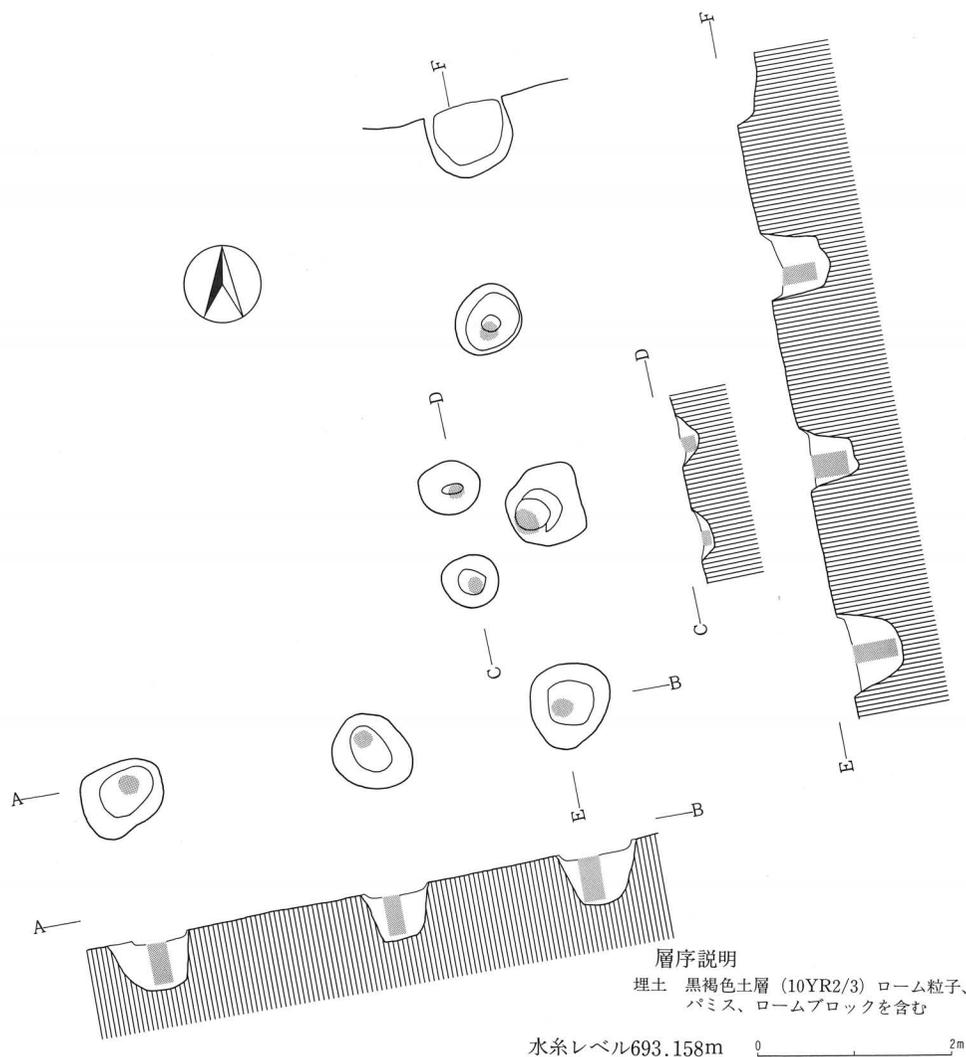
遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、重複関係から平安時代以降と考えられる。

52) 第54号掘立柱建物址

遺構 (第262図、図版44)

D-2グリッドに位置する。第31号住居址と重複関係を有し、第31号住居址を切っている。東西570cm、南北694cmを測る。8基のピットが検出されたが、全体については不明である。柱間は、東西192~229cm、南北178~183cmを測る。南北軸の方位は、 $N-10^{\circ}-W$ を示す。ピット掘形の平面プランは、楕円形が主体である。



第262図 第54号掘立柱建物址実測図

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、重複関係から古墳時代後期以降と考えられる。

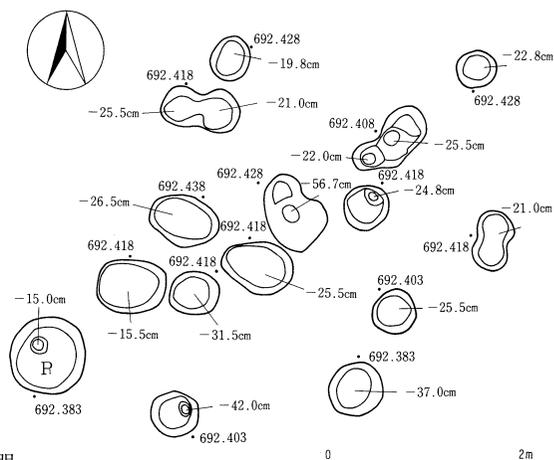
53) 第55号掘立柱建物址

遺構 (第263図、図版45)

第55～63号掘立柱建物址は、明確なまとまりがなく、ピット群とされるべきものがほとんどであるが、ここでは、一応、掘立柱建物址に含めた。なお、図中の深さは確認面からのものを示した。

第55号掘立柱建物址は、C-2グリッドに位置する。

ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形、双円形である。

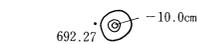


層序説明
P₁埋土 黒色土層 (10YR2/1) ハミス含む

第263図 第55号掘立柱建物址実測図

遺物

軟質須恵器の杯の破片が出土している。

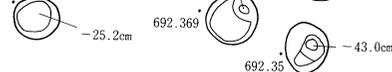
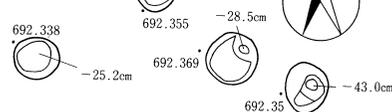
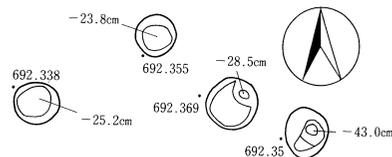
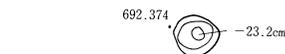
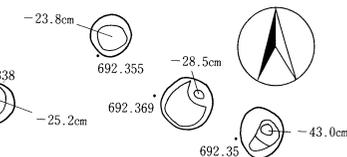
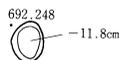
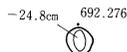
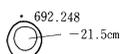


54) 第56号掘立柱建物址

遺構 (第264

図、図版45)
C-2グリッドに位置する。

ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形である。

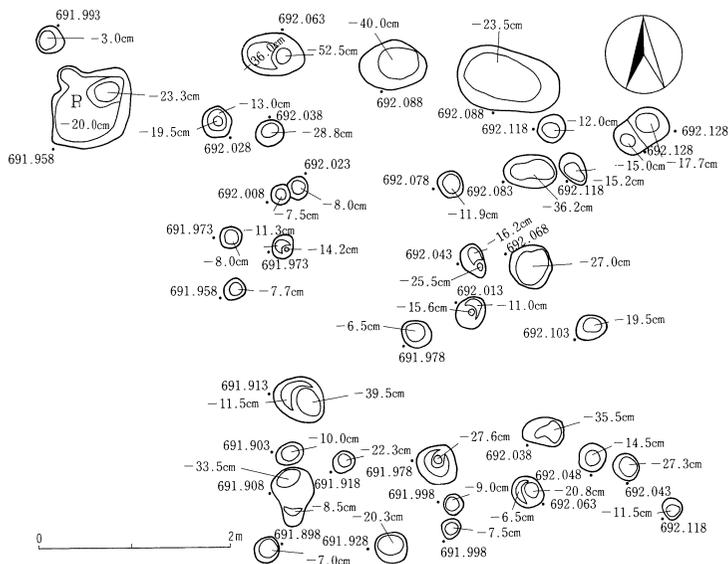


遺物

出土遺物は皆無である。



第264図 第56号掘立柱建物址実測図



第265図 第57号掘立柱建物址実測図

55) 第57号掘立柱建物址遺構 (第265図、図版45)

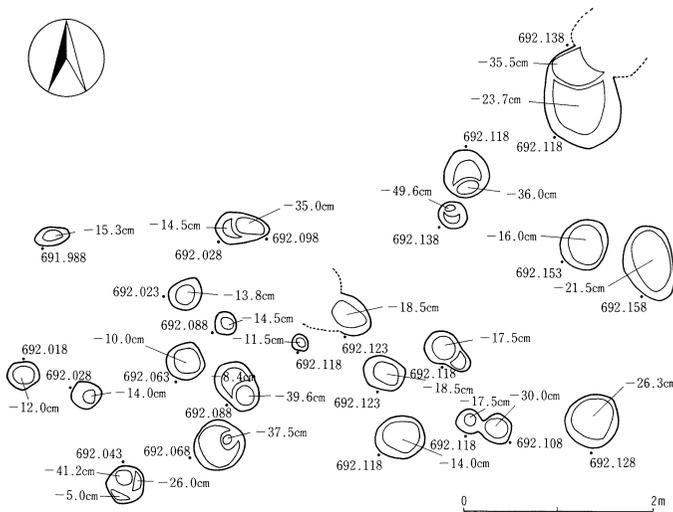
C-2・3グリッドに位置する。ピットの規模、深さは多様である。

また、ピット掘形の平面プランも多様で、円形、楕円形、双円形などがある。

P₁の埋土は、パミスを含む黒褐色土 (7.5Y R2/2) である。

遺物

出土遺物は皆無である。



第266図 第58号掘立柱建物址実測図

56) 第58号掘立柱建物址遺構 (第266図、図版46)

C-2グリッドに位置する。

第15号掘立柱建物址と重複関係を有するピットがある。

第57号掘立柱建物址と同じくピットの規模、深さは多様である。

また、ピット掘形のプランは、円形、楕円形などである。

遺物

出土遺物は皆無である。

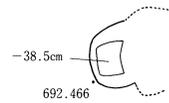
57) 第59号掘立柱建物址

遺構 (第267図、図版46)

C-1・2グリッドに位置する。第16・17・18・22号掘立柱建物址と重複関係を有するピットがある。ピットの規模、深さは多様である。また、ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形などである。

遺物

黒色土器の破片が出土している。



58) 第60号掘立柱建物址

遺構 (第269図、図版46)

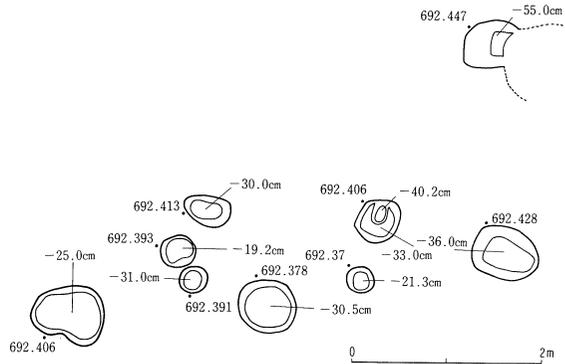
C-2グリッドに位置する。

第13号住居址と重複関係を有するピットがある。

第55~59号掘立柱建物址と同じく、ピットの規模、深さは多様である。

ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形、双円形などがある。

埋土は、黒褐色土 (10Y R2/2、2/3) を主体とする。



第267図 第59号掘立柱建物址実測図

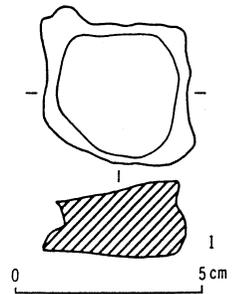
遺物 (第268・273図)

土師器片、黒色土器片、須恵器片、石製品が出土している。

このうち、図示したものには墨書土器、石製品がある。

墨書土器 (第273図6) は、土師器杯の破片である。文字は、不明である。

石製品 (第268図1) は、軽石製で、スタンプ状を呈する。研磨の痕跡は認められない。重さ18gを計る。



第268図 第60号掘立柱建物址出土遺物

59) 第61号掘立柱建物址

遺構 (第270図、図版46)

C-2グリッドに位置する。3基のピットが検出されている。

ピットの規模は、径33~64cmを測り、深さは、12~23.5cmである。

ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形である。

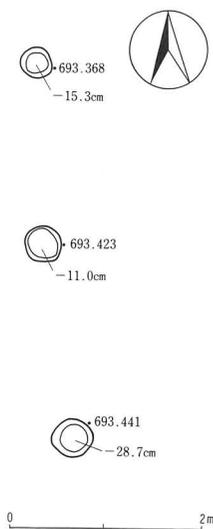
遺物

出土遺物は皆無である。

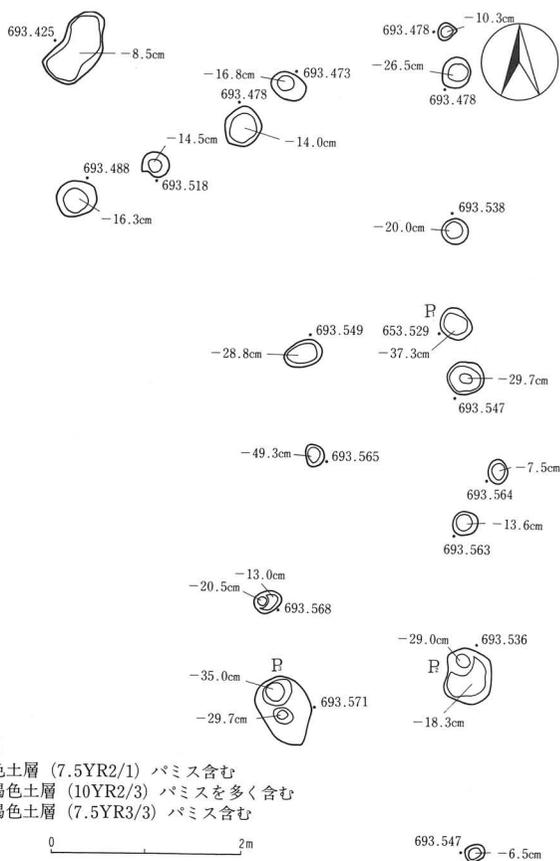
60) 第62号掘立柱建物址

遺構 (第271図、図版47)

D-1グリッドに位置する。3基のピットが検出され、ほぼ一直線上に並ぶ。



第271図 第62号掘立柱建物址
実測図



層序説明

- P₁埋土 黒色土層 (7.5YR2/1) パミス含む
- P₂埋土 黒褐色土層 (10YR2/3) パミスを多く含む
- P₃埋土 暗褐色土層 (7.5YR3/3) パミス含む

第272図 第63号掘立柱建物址実測図

61) 第63号掘立柱建物址

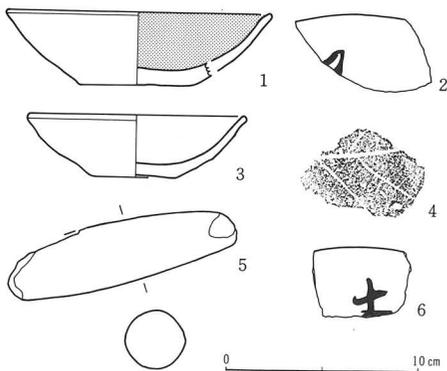
遺構 (第272図、図版47)

E-1グリッドに位置する。

ピットの規模、深さは多様である。

ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形、双円形などである。

埋土は、パミスを含む黒色土(7.5Y R2/1)、黒褐色土(10Y R2/3)、暗褐色土(7.5Y R3/3) などである。



第273図 掘立柱建物址出土遺物

遺物

出土遺物は皆無である。

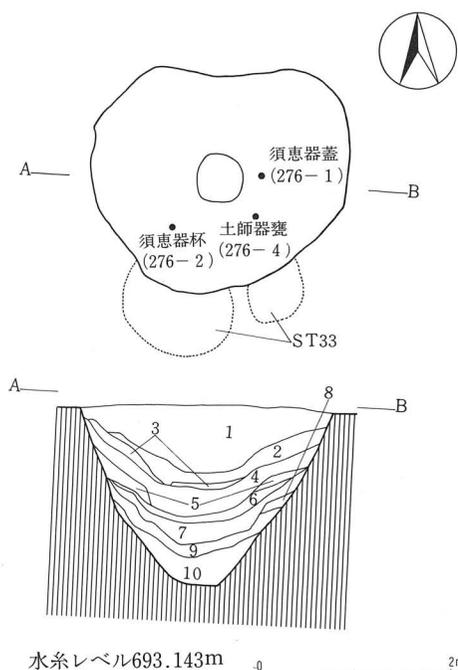
(3) 井戸址

1) 第1号井戸址

遺構 (第274図、図版47)

本遺構は、C-1・2グリッドに位置する。第33号掘立柱建物址と重複関係を有し、第33号掘立柱建物址により切られている。

東西270cm、南北225cmを測り、平面プランは不整形円形を呈する。確認面からの深さは約235cmを測る。



層序説明

- 第1層 黒褐色土層 (10YR2/2) バミスの他、僅かに炭化物を含む
- 第2層 黒褐色土層 (7.5YR2/2) バミス、ロームブロックの他、僅かに炭化物を含む
- 第3層 暗褐色土層 (10YR3/3) バミス、ローム粒子を含む
- 第4層 黒褐色土層 (10YR2/3) バミス含む
- 第5層 黄褐色土層 (10YR4/3) バミス、ローム粒子を含む
- 第6層 暗褐色土層 (10YR3/4) バミス、ローム粒子を含む
- 第7層 黒褐色土層 (7.5YR3/2) バミス、ローム粒子を含む
- 第8層 黒褐色土層 (10YR3/2) バミス、ローム粒子を含む
- 第9層 黄褐色土層 (10YR5/6) φ2cm前後のバミスを含み、縮まっている
- 第10層 黒褐色土層 (10YR2/2) バミスを殆ど含まない

第274図 第1号井戸址実測図

註

- (1) 小諸市教育委員会 1985 『宮の反』

遺構覆土は10層に区分される。うち第1層の黒褐色土層 (10YR2/2) が大半をしめる。

遺物 (第276図、図版66)

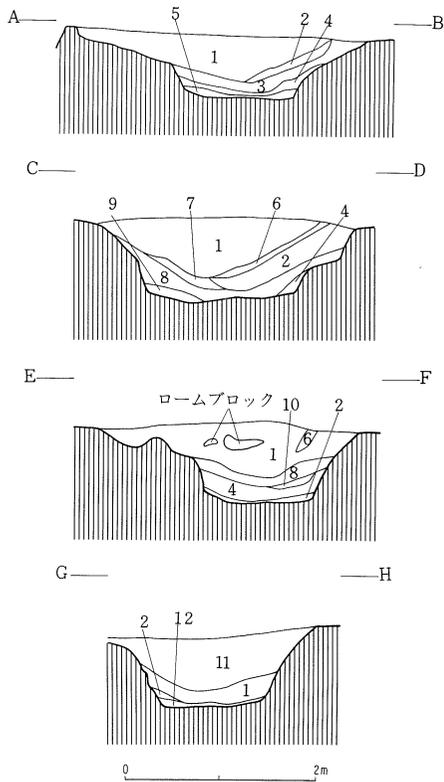
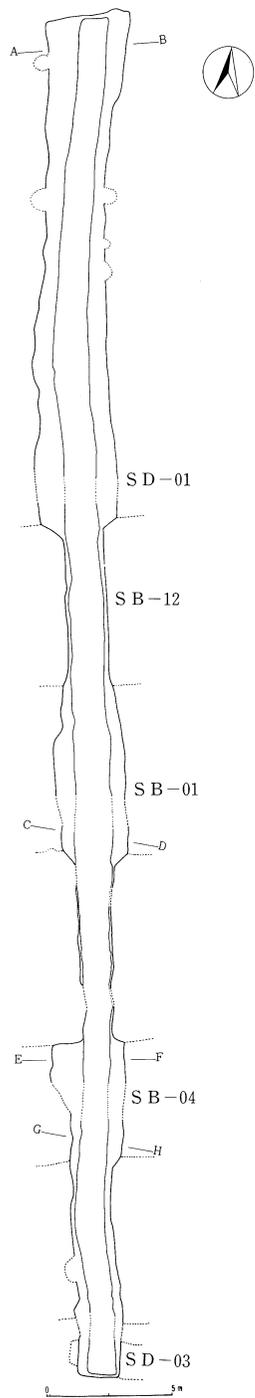
本遺構からは、土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄滓、骨片が出土している。

このうち図示し得たものに、須恵器3点、土師器1点がある。須恵器には、蓋(1)、杯(2)、高台付杯(3)がある。

土師器甕は、長胴の甕の口辺部～肩部である。

本遺構の所産期は、出土土器・重複関係から奈良時代以降と考えられる。

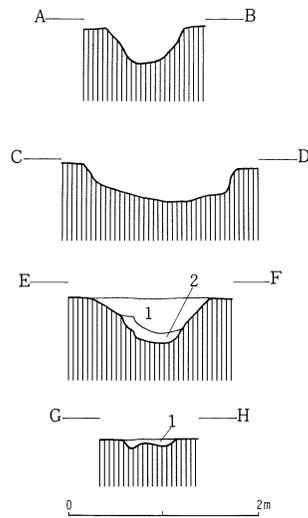
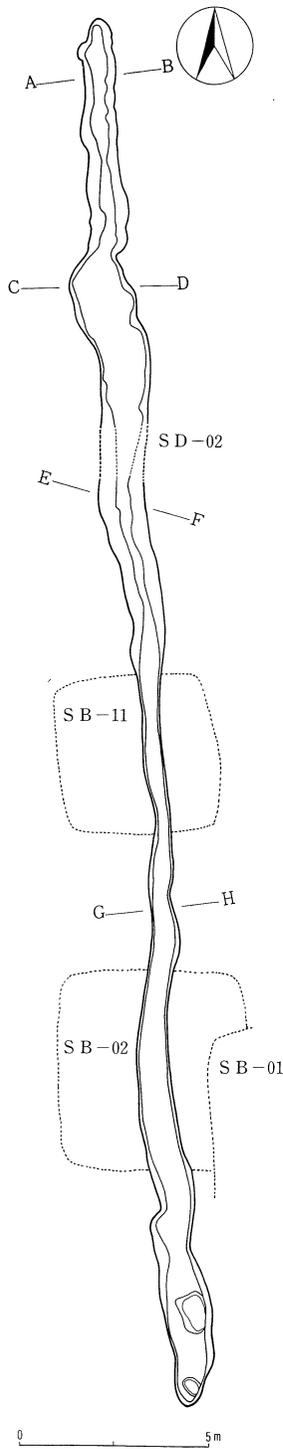
同様な遺構は、関口A遺跡においても検出されたほか、市内では、宮の反A遺跡で第6号土坑⁽¹⁾としたものが類似している。また、時期的にも近接しており、関口A遺跡第1号井戸址が本址よりもやや時間幅を有するが、大きな時間差は認められず、宮の反例も、覆土からヘラキリ底を有する須恵器杯が出土していることから、近接した時期と考えられている。



層序説明

- 第1層 褐色土層 (10YR4/6) ローム粒子、 ϕ 1cm前後のバミス含む
- 第2層 黒褐色土層 (10YR2/3) ローム粒子、バミス含む
- 第3層 黒褐色土層 (10YR2/2) ローム粒子、バミス含む
- 第4層 黄褐色土層 (10YR5/6) 地山に相似
- 第5層 暗褐色土層 (10YR3/3) ローム粒子、バミス含む
- 第6層 におい黄褐色土層 (10YR5/4) 粘土層
- 第7層 褐色土層 (10YR4/4) ローム粒子、バミス含む
- 第8層 暗褐色土層 (10YR3/4) ローム粒子、バミス含む
- 第9層 暗褐色土層 (10YR2/3) ローム粒子、バミス含む
- 第10層 褐色土層 (10YR3/4) バミスを僅かに含む
- 第11層 黒褐色土層 (10YR2/3) ローム粒子、バミスの他、カーボンを含む
- 第12層 褐色土層 (7.5YR4/4) ローム粒子、バミスを含む

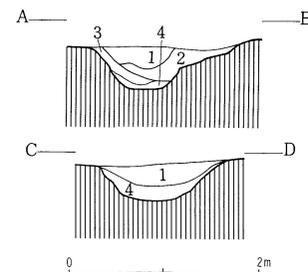
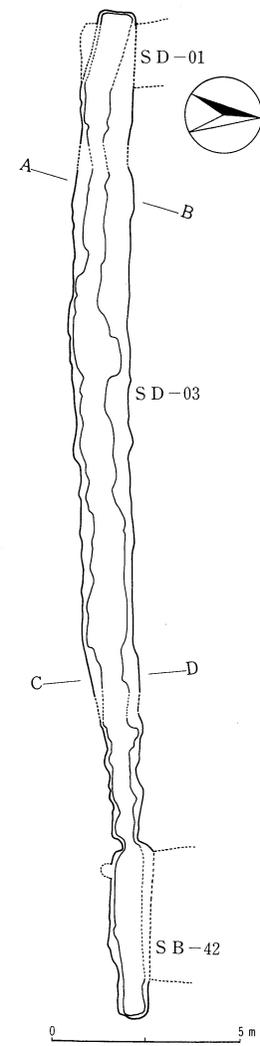
水系レベル693.10m



層序説明

- 第1層 暗褐色土層 (10YR3/3) ローム粒子、バミス ϕ 1cmを含む 粘性がある
- 第2層 黒褐色土層 (10YR2/3) ローム粒子、バミス ϕ 0.5cmを含む

水系レベル693.05m

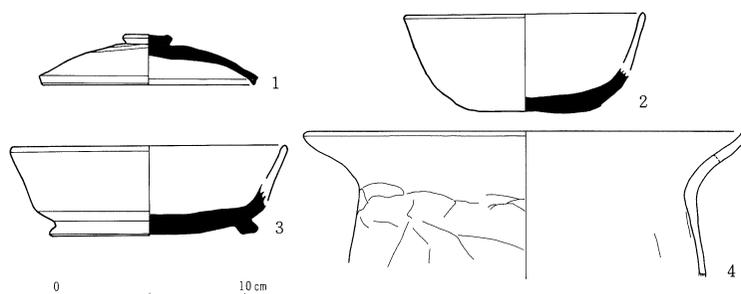


層序説明

- 第1層 におい黄褐色土層 (10YR4/3) 炭化物、ローム粒子、バミスを含む。粘性がかなりある
- 第2層 暗褐色土層 (7.5YR3/3) 焼土粒子を多く含む
- 第3層 黒褐色土層 (10YR2/3) ローム粒子、バミスを含む
- 第4層 暗褐色土層 (10YR3/4) ロームブロック、ローム粒子、バミスを含む

水系レベル692.70m

第275図 第1～3号溝址実測図



第276図 第1号井戸址出土遺物

(4) 溝 址

1) 第1号溝址

遺構 (第275図、図版48)

本遺構は、B-1・2、C-2・3グリッドに位置する。

第1号・4号・12号・52号住居址を切って構築されている。

北から南にほぼ直線的に延びる遺構で、調査区域内において調査された部分は、約54.6mの範囲である。

遺構覆土は12層に区分され、うち第1層の褐色土層 (10Y R4/6) が大半をしめる。また中間層 (第6層) に粘土層 (にぶい黄褐色土層、10Y R5/4) が認められた個所があった。なお、底面には砂の堆積はなく、水の流れた痕跡は認められなかった。

溝の掘形は、逆梯形状で、一部テラス状となる個所も認められた。

溝巾は230~310cm、深さ55~90cmを測る。

遺物 (第277~279図、図版67・68)

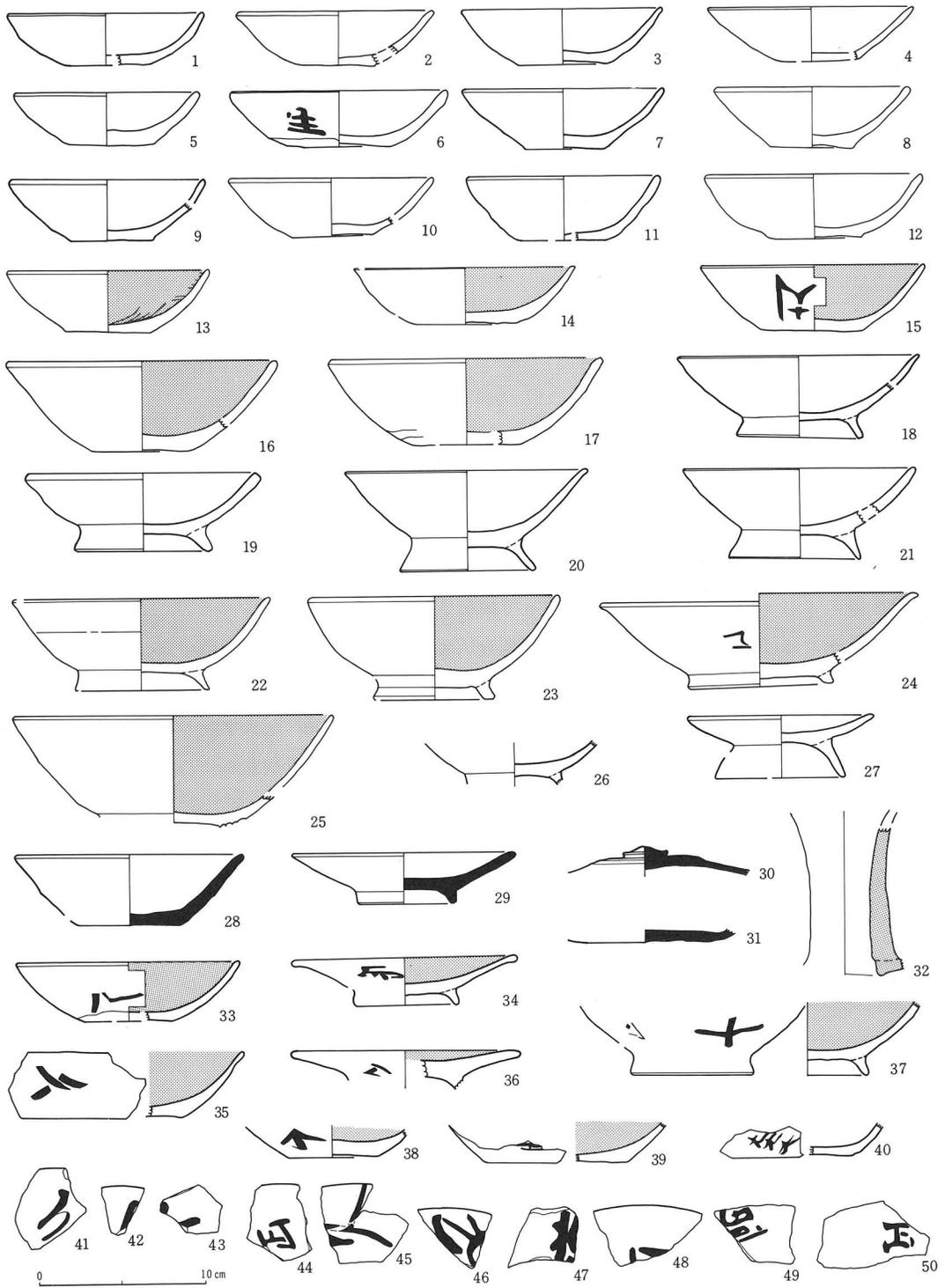
本遺構からは、土師器片、須恵器片、緑釉陶器片、灰釉陶器片、鉄製品、鉄滓、炭化材、骨片などが出土している。そのほとんどが第1層の出土である。

したがって、本址がある程度埋もれた段階で、こうした遺物が廃棄されたものと考えられる。

図示した土器には、土師器杯、高台付杯、高台付皿、黒色土器杯、高台付杯、高台付皿、須恵器蓋、杯、高台付皿、長頸壺がある。

墨書土器のうち、19点が黒色土器で、その大半をしめる。

墨書文字で判読できたものには、「久」(第277図35・45)、「而」(第277図34)、「正」(第277図44・50)、「平」(第278図2)の外、「水」もしくは「木」(第277図38)、「富」と考えられるもの(第277図49)、「大」(第277図40)などがある。

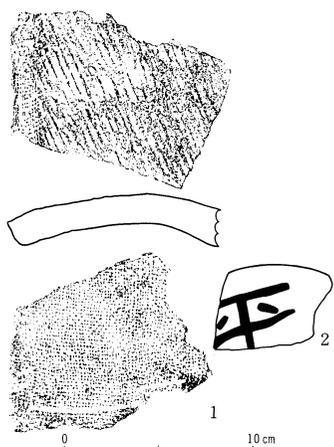


第277図 第1号溝址出土遺物 (A)

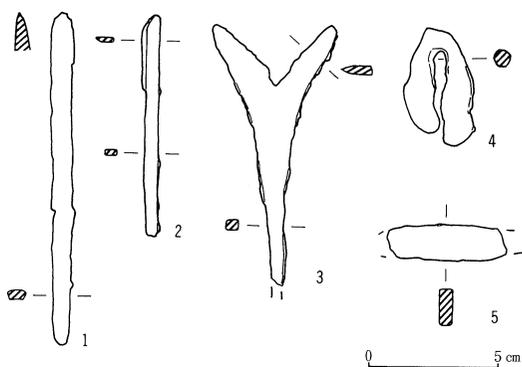
土製品として、須恵質の布目瓦が1点出土している（第278図1）。

鉄製品には鉄鍬（1～3）などがある。

自然遺物として骨片のほか炭化材があり、クスノキ属類似種、コナラ節の一種、トネリコ属の一種、ケヤキ、ヒノキ属の一種、スギ、クヌギ節の一種がある。後述するが、建築材が廃棄されたものと考えている。



第278図 第1号溝址出土遺物（B）



第279図 第1号溝址出土遺物（C）

本遺構の所産期は、重複関係から、奈良末～平安時代初めの頃開削され、9世紀末から10世紀前半頃までには、ほとんど埋まったものと考えられる。

2) 第2号溝址

遺構（第275図、図版48）

本遺構は、B-2グリッドに位置する。第2・11号住居址、第1・26・43号掘立柱建物址と重複関係を有し、これらの遺構を切って構築されている。北から南に延びる遺構で、B-3グリッド内で終結している。調査区域内において調査された部分は約37mの範囲である。

遺構覆土は、2層に区分される。

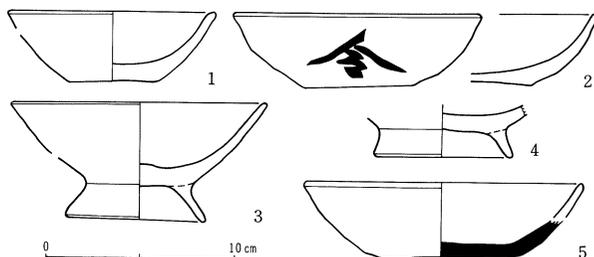
第1層の暗褐色土層（10YR3/3）

が大半をしめる。

溝巾は65～116cm、深さは5～48cmを測る。

遺物（第280図、図版68）

本遺構からは、土師器片、須恵器片が出土している。このうち、図示



第280図 第2号溝址出土遺物

したものには、土師器杯、高台付杯、須恵器杯がある。2は墨書土器で「令」と判読した。

須恵器杯は底部糸切りがなされる。

本遺構の所産期は、重複関係・出土土器から平安時代以降と考えられる。

3) 第3号溝址

遺構 (第275図、図版49)

本遺構は、C・D-3グリッドに位置する。第42号住居址、第1号溝址と重複関係を有し、第42号住居址、第1号溝址を切っている。

西から東に向かってほぼ直線的に延びる遺構で、第42号住居址東側で終結している。

遺構覆土は、4層に区分され、第1層のにぶい黄褐色土層 (10YR4/3) が大半をしめる。

溝巾70~155cm、深さは38~45cmを測る。

遺物 (第281~283図、図版68~70)

本遺構からは、土師器片、須恵器片、緑釉陶器片、灰釉陶器片、鉄製品、石製品が出土している。このうち図示し得たものには、土師器杯27点、高台付杯11点、高台付皿1点、片口1点、黒色土器杯4点、高台付杯3点、須恵器杯3点、鉄製品2点、砥石がある。

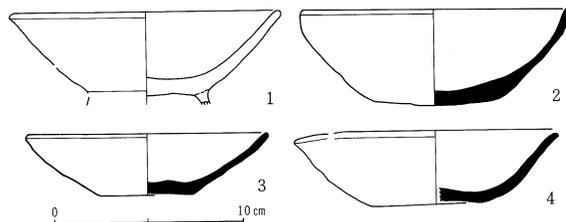
片口 (第283図17) は、他の杯とほぼ法量を同じくするものである。

墨書土器 (第283図30・45) は2点あり、うち1点は「令」と判読した。

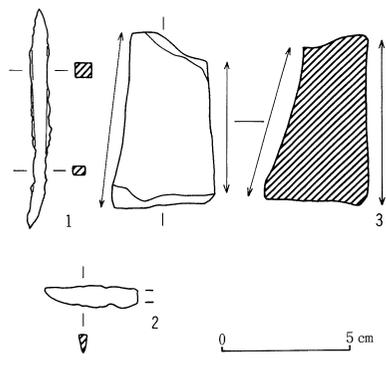
須恵器杯 (第281図2~4) は、底部ヘラキリがなされるもの (2) と、糸切り底のもの (3・4) がある。

鉄製品は2点あり、1は工具と考えられ、2は刀子の刃部である。

砥石は、砂岩製で重さ138gを計る。



第281図 第3号溝址出土遺物 (A)

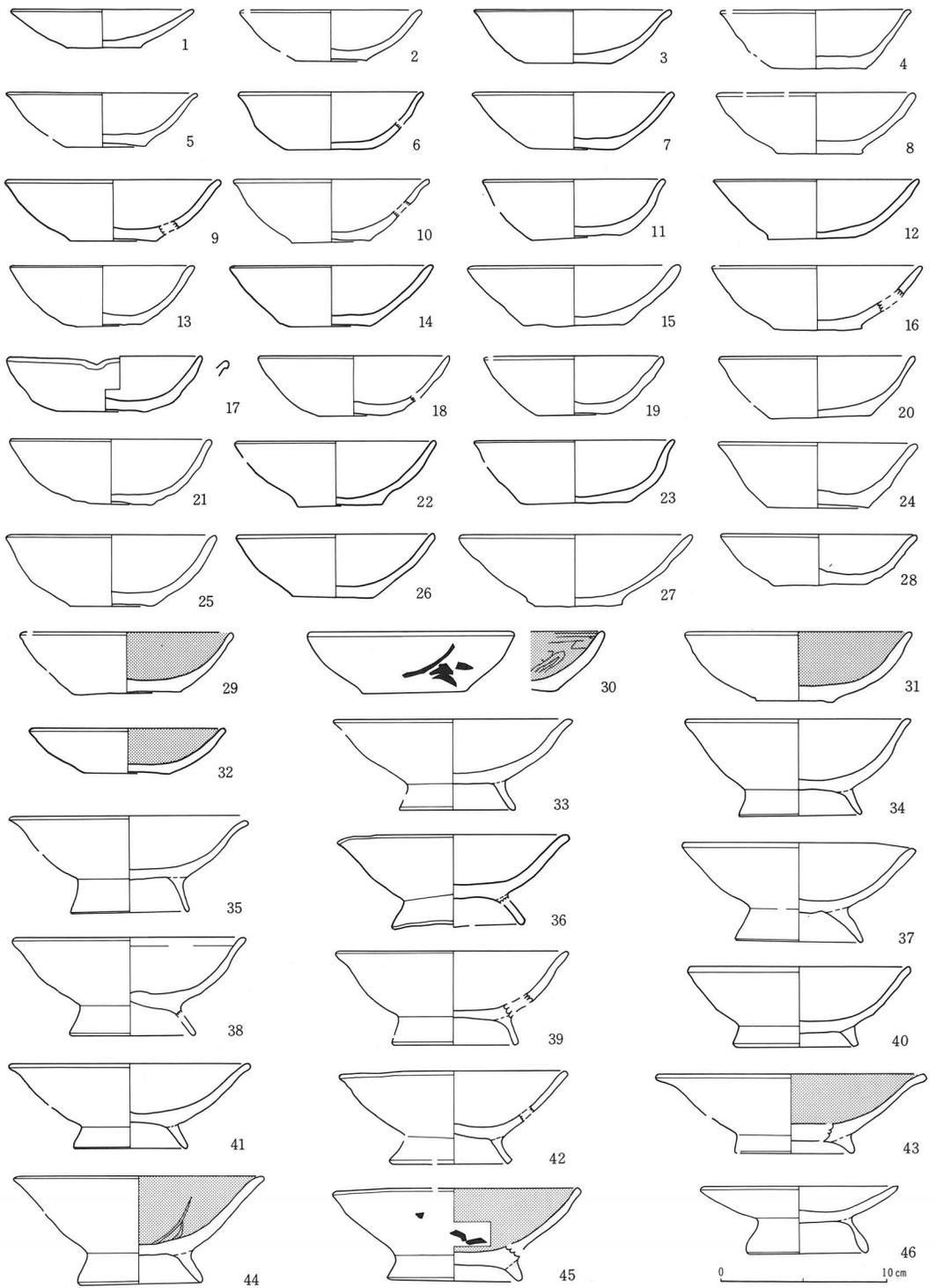


第282図 第3号溝址出土遺物 (B)

4) 第4号溝址

遺構 (第285図、図版49)

本遺構は、B-1・2グリッドに位置する。第26号掘立柱建物址と重複関係を有し、第26号掘



第283图 第3号沟址出土遗物(C)

立柱建物址を切っている。

調査区北部から南部にほぼ直線的に延びる遺構で、調査区域内において調査された部分は約17.5mの範囲である。

遺構覆土は、9層に区分される。第1層の黒褐色土層（10Y R2/3）が大半をしめる。

溝巾104～136cm、深さ45～67cmを測る。

遺物

本遺構からは、土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土しているが、8点と量は少なく、図示し得るものはない。

本遺構の所産期は、重複関係・出土土器から平安時代以降と考えられる。

5) 第5号溝址

遺構（第285図、図版50）

本遺構は、A-3グリッドに位置する。第4・11号掘立柱建物址と重複関係を有し、第4・11号掘立柱建物址を切っている。

調査区西部から東部にほぼ直線的に延びる遺構で、東側は攪乱により壊されている。調査区域内において調査された部分は約12.5mの範囲である。

遺構覆土は2層に区分され、第1層の黒褐色土層（10Y R2/3）が大半をしめる。

溝巾80～122cm、深さは15～30cmを測る。

遺物

本遺構からは、土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土しているが図示し得るものはない。

本遺構の所産期は、重複関係・出土土器から、平安時代以降と考えられる。

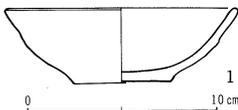
6) 第6号溝址

遺構（第285図、図版50）

本遺構は、D・E-1グリッドに位置する。第50号住居址、第40・49号掘立柱建物址と重複関係を有し、各々の遺構を切って構築されている。西から東に延びる遺構で、調査された部分は約29.3mの範囲である。

遺構覆土は、ローム粒子・パミスを含む黒褐色土層（10Y R2/3）である。

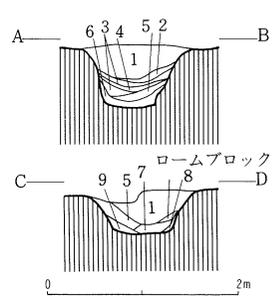
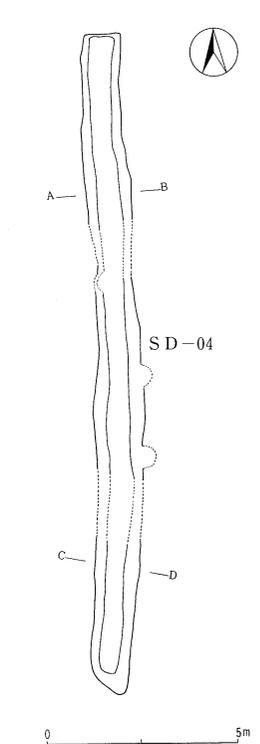
溝巾85～180cm、深さは32～45cmを測る。



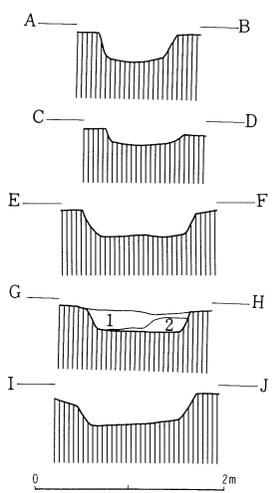
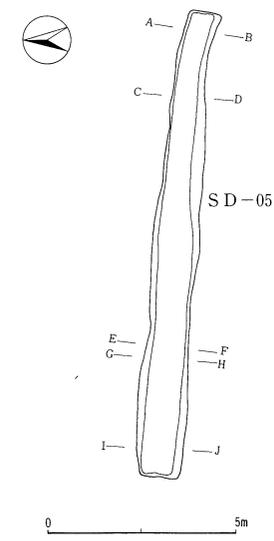
第284図 第6号溝址出土遺物

遺物（第284図、図版70）

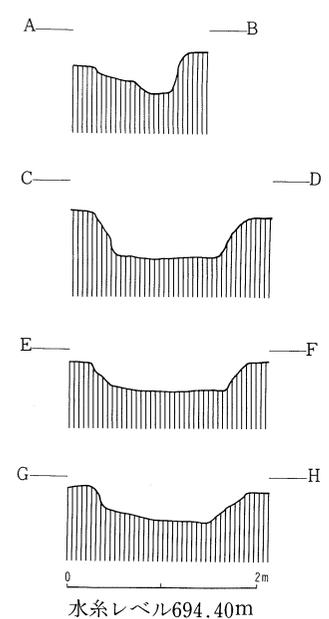
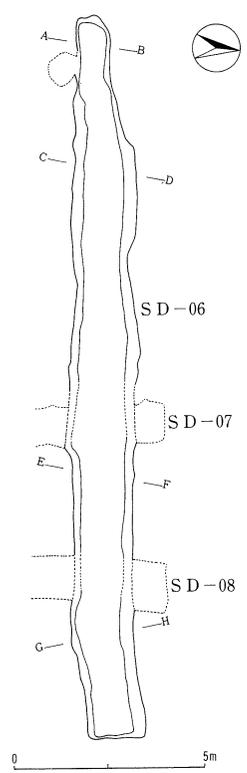
本遺構からは、土師器片、黒色土器片、須恵器片、灰釉陶器片が



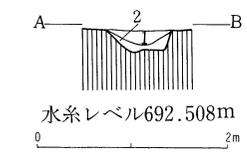
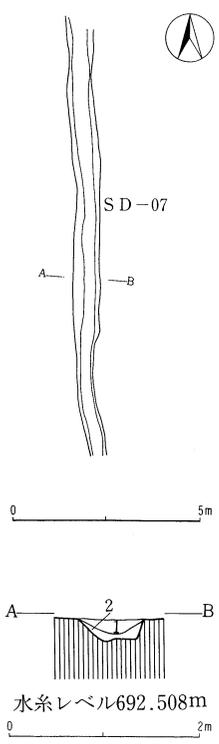
層序説明
 第1層 黒褐色土層 (10YR2/3) ローム粒子、バミスを含む
 第2層 黒褐色土層 (10YR3/2) ローム粒子、バミスを含む
 第3層 暗褐色土層 (10YR3/4) 砂層
 第4層 黒褐色土層 (10YR2/2) バミス、ローム粒子を僅かに含む
 第5層 暗褐色土層 (10YR3/3) ローム粒子、黒色土の他、φ1cm前後のバミスを比較的多く含む
 第6層 明褐色土層 (7.5YR5/6) 地山に近似
 第7層 暗褐色土層 (10YR3/4) バミスを比較的多く含む他、ローム粒子、黒色土を含む
 第8層 黄褐色土層 (10YR5/4) 地山の流れ込み
 第9層 褐色土層 (10YR4/4) ローム粒子、バミス、黒色土を含む
 水系レベル692.953m



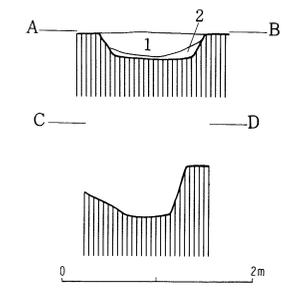
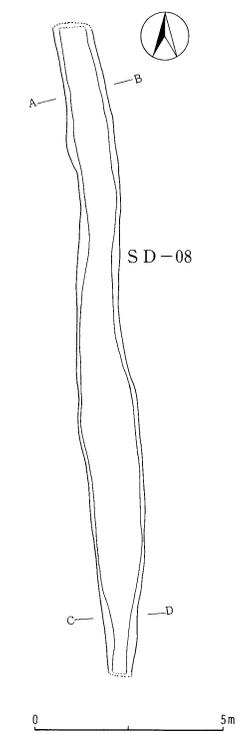
層序説明
 第1層 黒褐色土層 (10YR2/2) バミス、ローム粒子を含む
 第2層 明黄褐色土層 (10YR6/6) 地山に相似
 水系レベル692.703m



水系レベル694.40m



層序説明
 第1層 黒褐色土層 (10YR2/3) ローム粒子、バミスを含む
 第2層 暗褐色土層 (10YR3/4) ローム粒子、バミスを含む



層序説明
 第1層 黒褐色土層 (10YR2/2) バミス含む 比較的粘性がある
 第2層 暗褐色土層 (10YR3/3) ローム粒子、バミス、砂層を含む
 水系レベル692.458m

第285図 第4～8号溝址実測図

出土している。このうち図示し得たものは土師器杯1点である。

本遺構の所産期は、重複関係・出土土器から平安時代以降と考えられる。

7) 第7号溝址

遺構 (第285図、図版51)

本遺構は、E-1グリッドに位置する。第39・40号住居址、第6号溝址と重複関係を有する。第39・40号住居址を切っているが、第6号溝址との関係は明確でない。

北から南に向かって延びる遺構でE-1グリッドで終結している。

遺構覆土は第1層のローム粒子・パミスを含む黒褐色土層 (10Y R2/3) と、第2層の暗褐色土層 (10Y R3/4) の2層に区分される。

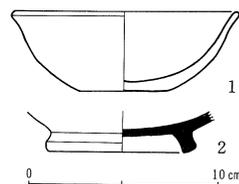
溝巾43~75cm、深さは20cm前後を測る。

遺物 (第286図、図版70)

本遺構からは、土師器片、黒色土器片、灰釉陶器片が出土している。このうち、図示し得たものに土師器杯1点、灰釉陶器高台付皿がある。

灰釉陶器は高台付杯で、東濃窯系で大原2号窯期のものである。

本遺構の所産期は、重複関係・出土土器から平安時代以降と考えられる。



第286図
第7号溝址出土遺物

8) 第8号溝址

遺構 (第285図、図版51)

本遺構は、E-1グリッドに位置する。第40号住居址、第6号溝址と重複関係を有し、第40号住居址を切って構築されているが、第6号溝址との関係は明確でない。

第7号溝址とほぼ併行するように北から南に延びる遺構で、E-1グリッドで終結している。

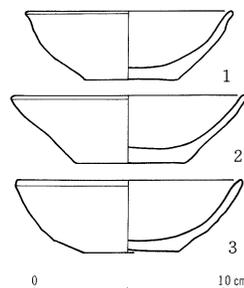
遺構覆土は、パミスを含み、比較的粘性がある第1層黒褐色土層 (10Y R2/2) と、第2層の暗褐色土層 (10Y R3/3) の2層に区分される。

溝巾55~160cm、深さは26~50cmを測る。

遺物 (第287図、図版70)

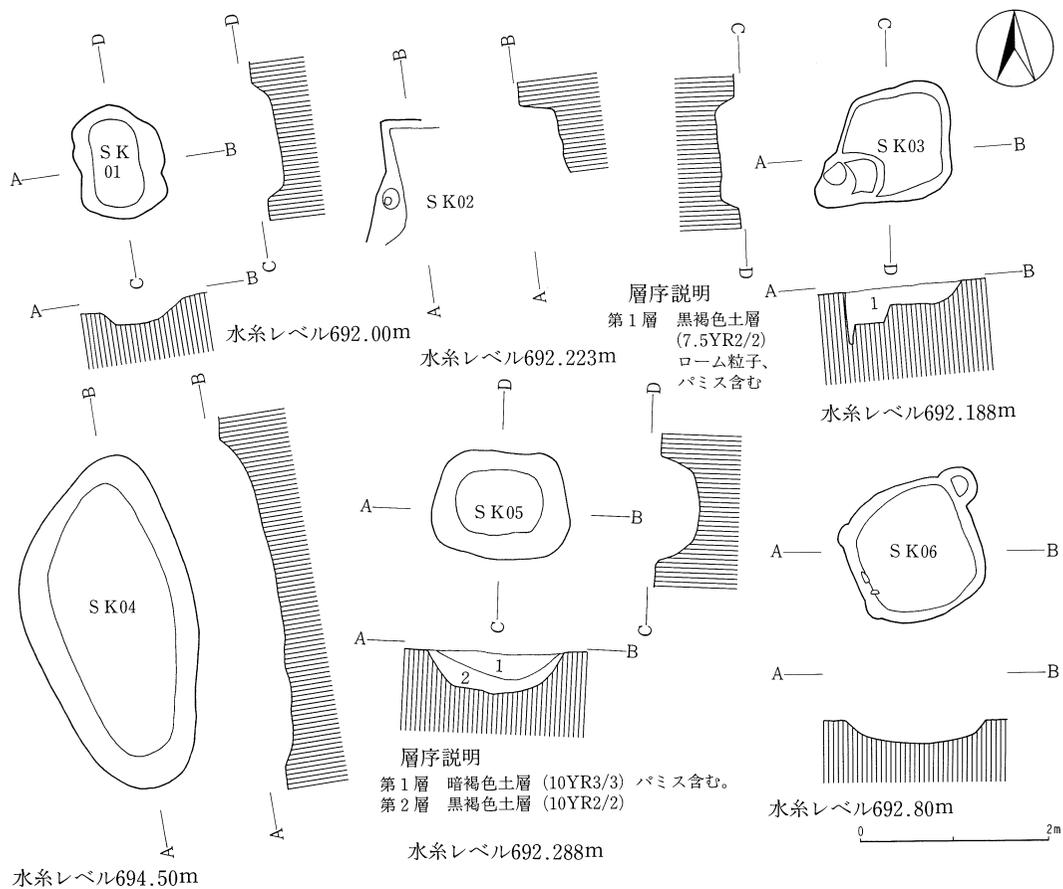
本遺構からは、土師器片、黒色土器片、須恵器片、緑釉陶器片が出土している。このうち、図示し得たものは土師器杯3点である。

本遺構の所産期は、重複関係・出土土器から平安時代以降と考えられる。



第287図 第8号溝址出土遺物

(5) 土 坑



第288図 第1～6号土坑実測図

第3表 土坑一覽表

土坑No.	平面形	規 模 (cm)			長軸方位	出土遺物	備 考
		東西	南北	深さ			
1	不整楕円形	91	123	15~20	N-9°-W	土師器破片7 須恵器破片1	第8号住居址と重複
2	不 明	(68)	(156)	(35~43)	N-8°-W	黒色土器杯 須恵器蓋、鎌	第30号住居址と重複
3	不 整 台 形	121	129	14~55	N-7°-W	なし	
4	不整楕円形	185	355	16~29	N-11°-W	刀子1	
5	不整楕円形	145	115	33~44	N-9°-E	須恵器破片 土師器杯	
6	隅丸方形	140	145	15~25	N-22°-W	なし	第26号住居址と重複

遺構 (第288図、図版52)

本遺跡からは、総計6基の土坑が検出された。規模・平面プランは多様であり、また、位置的にも偏在性は認められない。各土坑の詳細については、第3表に示した。

土坑のうち、重複関係のあるものは、第1・2号土坑の2基である。第1号土坑が第8号住居址を、第2号土坑が第30号住居址を切って構築されている。

所産期については、重複関係・出土遺物から、第1号土坑が奈良時代以降、第2号土坑が古墳時代後期後半、第5号土坑が平安時代以降と考えられる。

遺物 (第289・290・291図、図版70)

各土坑から出土した遺物は第3表に示した。このうち、図示したものには、土師器杯1点、黒色土器杯1点、須恵器蓋1点、土製品、鉄製品各1点である。

第2・5号土坑からの出土である。このほか、自然遺物として第2号土坑から獣骨片、第3号土坑からコナラ節の一種とされる炭化材が出土している。

須恵器蓋 (第289図2) は、口径9.8cmと小型品である。

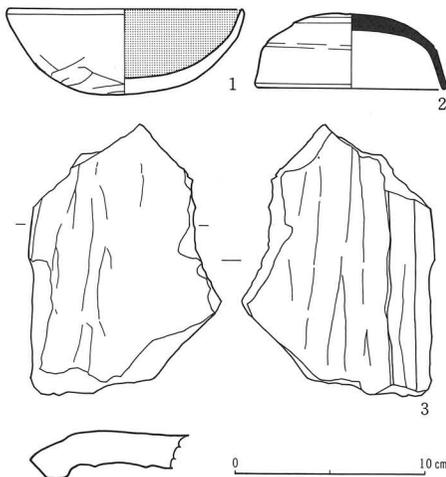
第289図3は、土師質のものであるが、焼成は良好である。内外面ともヘラケズリがなされる。瓦の可能性もあるが、用途については不明である。類例に期待したい。

鉄製品 (第290図1) は、鎌で先端部を僅かに欠く。残存部の長さは、およそ16.7cmである。

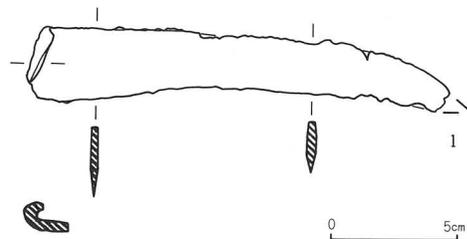
第2号土坑出土土器は、古墳時代後期後半に比定される。

また土製品については、性格が不明である。

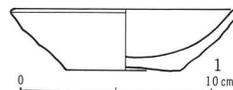
第5号土坑出土土器 (第291図1) は、糸切り底を有する土師器杯である。



第289図 第2号土坑出土遺物 (A)



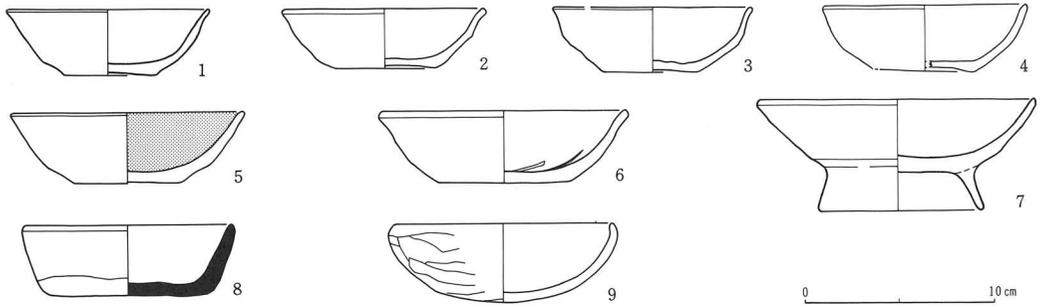
第290図 第2号土坑出土遺物 (B)



第291図 第5号土坑出土遺物

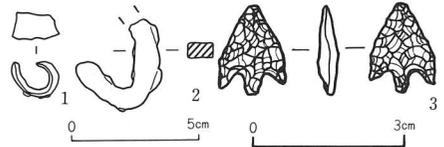
(6) 遺構外出土遺物

遺物 (第292図、図版70)



第292図 遺構外出土遺物 (A)

遺構外出土遺物には、土器片、鉄製品、石製品がある。なお、1・5・6・8・9のように復原作業の段階で所属不明となったものを含んでいる。



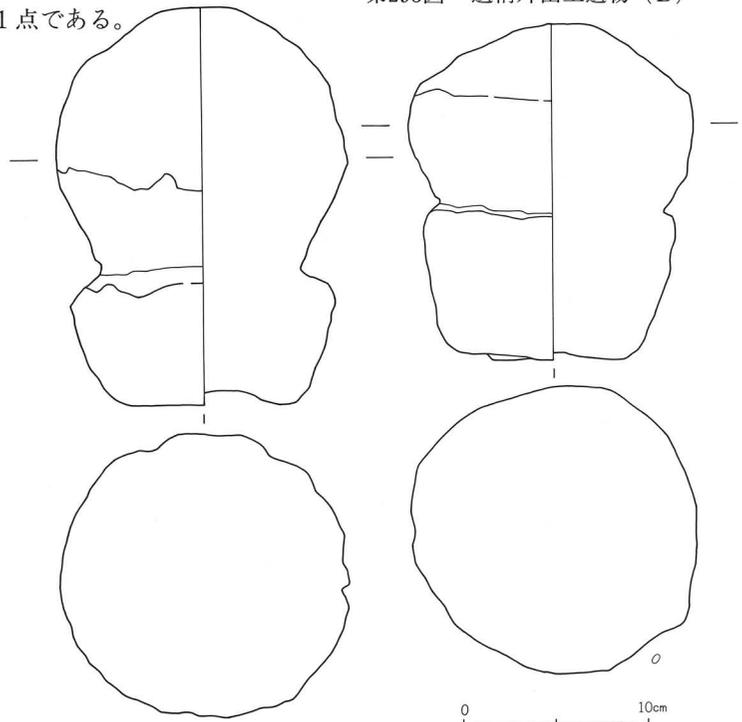
第293図 遺構外出土遺物 (B)

このうち、図示し得たものは、土器9点、鉄製品2点、石製品2点、黒曜石製、石鏃1点である。

土器9点の内訳は、土師器杯6点、土師器高台付杯1点、黒色土器杯1点、須恵器杯1点である。このうち、8・9が奈良時代、他は平安時代の所産である。

鉄製品には環状のもの、J字状のものがある。用途は不明である。

石製品は五輪塔の風輪である。塩川宗吾氏により採集された。2点とも安山岩製である。室町時代頃のものであろうか。



第294図 遺構外出土遺物 (C)

3 下柏原遺跡

(1) 竪穴住居址

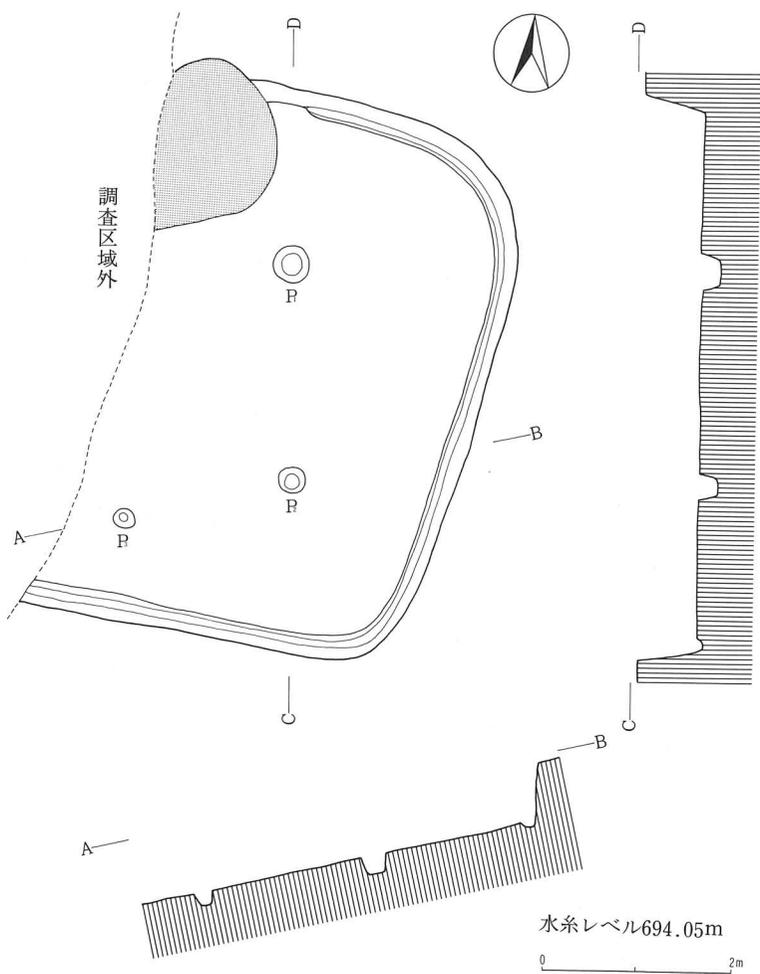
1) 第1号住居址

遺構 (第295・296図、図版52)

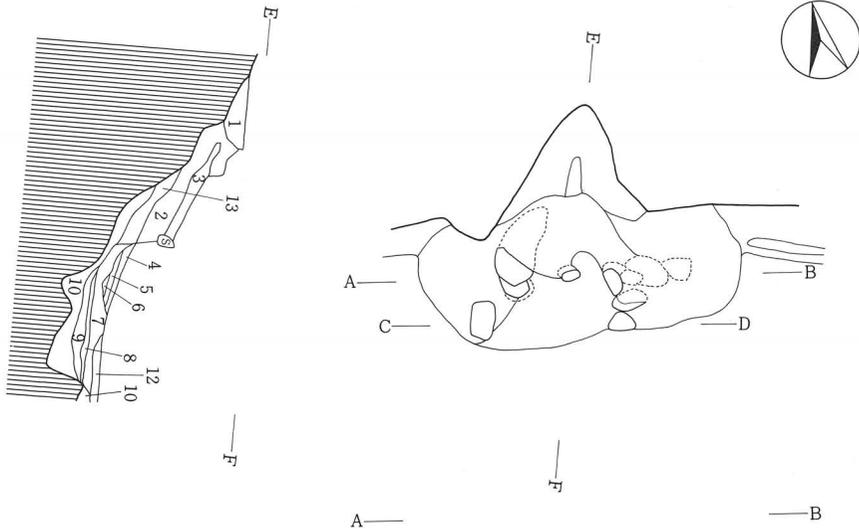
下柏原遺跡で検出された唯一の遺構である。

西側は開墾の際削平されてしまったと思われる。

南北590cm、東西は残存部で370cmを測る。主軸方位は、 $N-7^{\circ}-E$ を示す。平面プランは残存



第295図 第1号住居址実測図



層序説明

- 第1層 黒褐色土層 (10YR3/2) 黒色土とロームがブロック状に混じる
- 第2層 黒褐色土層 (10YR3/1) 住居址覆土と同じもの
- 第3層 灰黄褐色土層 (10YR6/2) 粘土を多量に含む (天井部の構築土)
- 第4層 灰褐色土層 (7.5YR5/2) 粘土を含む (構築土の崩落?)
- 第5層 橙色土層 (5 YR6/8) 焼土層
- 第6層 褐灰色土層 (10YR6/1) 灰層 (粘性若干有り)
- 第7層 明赤褐色土層 (5 YR5/8) 焼土層
- 第8層 褐灰色土層 (10YR6/1) 灰層 (粘性若干有り)
- 第9層 明赤褐色土層 (5 YR5/6) 焼土層
- 第10層 黒褐色土層 (10YR3/1) 黒色土と地山の埋土 (構築土)
- 第11層 褐色土層 (7.5YR4/3) 粘土はほとんど含まない (構築土)
- 第12層 黒褐色土層 (10YR2/2) 炭化物を若干含む
- 第13層 にぶい赤褐色土層 (5 YR4/3) 焼土粒子をよく含む
- 第14層 暗灰黄色土層 (2.5Y5/2) 粘土を主体とする構築土

水系レベル684.02m



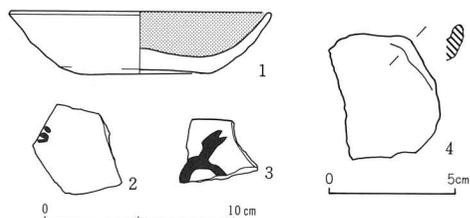
第296図 第1号住居址カマド実測図

部からすると隅丸方形を呈するものと思われる。

確認面からの壁高は50~55cmを計測する。

カマドは北壁中央部に設置されており、軽石、粘土を用いて構築されていた。

ピットは、総計3基検出された。このうちP₁・P₂が主柱穴と考えられる。またP₃は出入口部の施設に関わるものであろう。



第297図 第1号住居址出土遺物

遺物 (第297図、図版53)

本住居址からは、土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、鉄滓が出土している。

このうち図示し得たものには、黒色土器杯3点、鉄製品がある。

杯(第297図1)は底部糸切り後、手持ちへラケズリがなされる。

墨書土器は2点ある(第297図2・3)。いずれも黒色土器杯の破片であるが、文字は不明である。

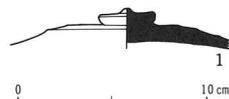
鉄製品(第297図4)は、鎌の基部である。

本住居址の所産期は平安時代に比定されよう。

(2) 遺構外出土遺物

遺物 (第298図、図版53)

遺構外出土遺物には、土師器片、黒色土器片、須恵器片がある。このうち図示し得たものは、須恵器蓋1点である。焼成が悪く、にぶい黄橙色を呈している。在地窯産であろう。平安時代の所産である。



第298図 遺構外出土遺物

V 総 括

関口A・B・下柏原遺跡において検出された各々の遺構・遺物については前述した。

検出された遺構には、竪穴住居址、掘立柱建物址、柵址、溝址、土坑などがある。

一方、出土遺物には、土師器・黒色土器・須恵器・鉛釉陶器・灰釉陶器、石製品、鉄製品、銅製品、銭貨などがある。

これらの遺構・遺物が主体をなすのは、古墳時代後期から平安時代といえる。

以下、三遺跡の遺構・遺物について一瞥することにした。

(I) 土器群の様相

関口A・B・下柏原遺跡からは、竪穴住居址、溝址を中心に土器が出土している。土器群には、中世の内耳土器、青磁、近世の陶器なども散見されるが、ここでは、主体をなす古墳時代後期から平安時代の土器の分類、編年の位置付けを行ない、その様相について述べることにしたい。

土師器

甕A類 短い口辺部を有し、「く」の字状に外反するが、外反度は弱い。調整、最大径の位置により細分した。

I類 (第299図8・9・20・47・80・89・110) 外面肩部以下、縦方向のへラケズリがなされる。最大径を胴部に有するもの(a)と口縁部に有するもの(b)に細分した。

II類 (10・81) ハケメ調査に加えへラケズリが行なわれるものでI類と同じく最大径の位置により、a・bに二分した。

B類 (21・90・111・118) 口辺部が「く」の字状に外反し、最大径を口縁部に有する。外面調整は、口辺部から肩部上部をヨコナデした後、肩部から下部をへラケズリしている。へラケズリは肩部付近では横方向に近く、胴部～底部では縦方向に近くなっている。A類に比して器壁は0.5cm前後と薄い。いわゆる武蔵型の甕である。

C類 (22・23・82・91) 球胴を呈するもので、口辺部は「く」の字状に外反する。壺とも言える器形であるが、ここでは甕に含めた。調整は、へラミガキされるもの(I)とへラケズリされるもの(II)の二種がある。

小形甕 器形・法量等により細分すべきであるが、調整がほとんど共通するものについては最大径の位置により大別した。

A類 (11・24～26・49) 短い口辺部が外反し、最大径を口縁部に有する。平底(I)と丸底(II)のものがある。

B類 (27・48・83・84・113・114・139) 最大径を胴部に有するもの。A類と同じく、平底(I)と丸底(II)がある。

C類(112) 口縁部端部をつまみ上げた形状で丸底のもの。ハケメ調整される。

D類(28) 口辺部が直立気味に立ち上がり、低い脚台を付けるもの。

杯

A類(4・5・17・42・74・75・77) 外稜口辺を有する。

B類(6・18・43・44・76・108・117) 素縁のもので、口辺部は内弯もしくは直立気味に立ち上がる。丸底。外面調整は、口辺部をヨコナデした後、体部～底部をヘラケズリしている。内面は、ヨコナデ調整である。

C類(19) 素縁のもので口辺部は外傾する。丸底。

D類(78) いわゆる畿内系暗文を有するものである。底部内面にラセン文、口縁部内面に斜放射文一段を施している。図示しなかったが在地の模倣品と考えられる破片が、第26号住居址から出土している。

E類(138) いわゆる甲斐型の杯で、口辺部～体部へラミガキ、内面には細い放射状の暗文が施される。

F類(160・161) ロクロ調整されるもの。内面に暗文を有するものもある。

G類(163・164) ロクロ調整され、高台を有するもの。

皿(162) ロクロ調整され、高台を有するもの。

高杯(7・46・79)

全体の器形を窺えるものは一例である。杯部は素縁で内弯気味に立ち上がる。脚部は柱状で裾部は外方に拡がる。

甑(12・29) 鉢形を呈するもので、底部に6ないし9孔が穿孔される。

土師器には、この外、手づくね土器(51)などがある。

黒色土器 本調査で出土したものは、内面を黒色処理した、いわゆる内黒土器のみである。高台付杯、皿、椀、鉢、高杯などがある。

杯

A類(15・38・70・71・136・137・146~148・152~156) 素縁で非ロクロ調整のもの。

丸底(I)と平底(II)のものがある。

B類(36・37・39) 外稜口辺を有し、非ロクロ調整のもの。

C類(157) ロクロ調整されるもの。暗文を施したのものもある。

D類(158・159) ロクロ調整され、高台を有するもの。

皿(157) ロクロ調整され、高台を有する。

高杯(40・41・72)

土師器高杯よりも量的には多いが、全体の器形を窺えるものは少ない。杯部に稜を有するもの(A類)と、認められないもの(B類)がある。

この外、椀、把手付盃、鉢などがある。

須恵器

杯

A類 (58) 丸底で、器受部を有するもの。

B類 (59・60・87・88・96～101・119・122～130・140～143・149) 平底で、底部ヘラキリのもの (I) と糸切りされるもの (II) に大別した。

C類 (103・131～134・144) 高台を有するもの。口径により、15cm以下のもの (I) と15cm以上のもの (II) に二分した。

蓋

A類 (1・2・13・30～33・54～57) 天井部が丸く、杯A類とセットとなるもの。口径により10cm前後のもの (I) と12cmを越えるもの (II) とに分けた。

B類 (52・53・85・86・92～94・115・120・121) 宝珠形つまみを有する。かえりを有するもの (I) とないもの (II) がある。かえりを有するものには、口径10cm以下のもの (a) と14cmをこえるもの (b) とがある。

C類 (95) 環状のつまみを有する。高台の付く杯とセットになると考えられるもの。

皿 (150) ロクロ調整され、高台を有するもの。

須恵器には、この他、盤、高坏、平瓶、壺、提瓶、甗、横瓶、長頸壺、鉢などがある。また鉛釉陶器、灰釉陶器も出土しているが、割愛した。

以上の土器群を、須恵器の変遷を軸にして、土器群の変遷を第299図⁽¹⁾に示した。以下、土器の変遷について述べることにしたい。

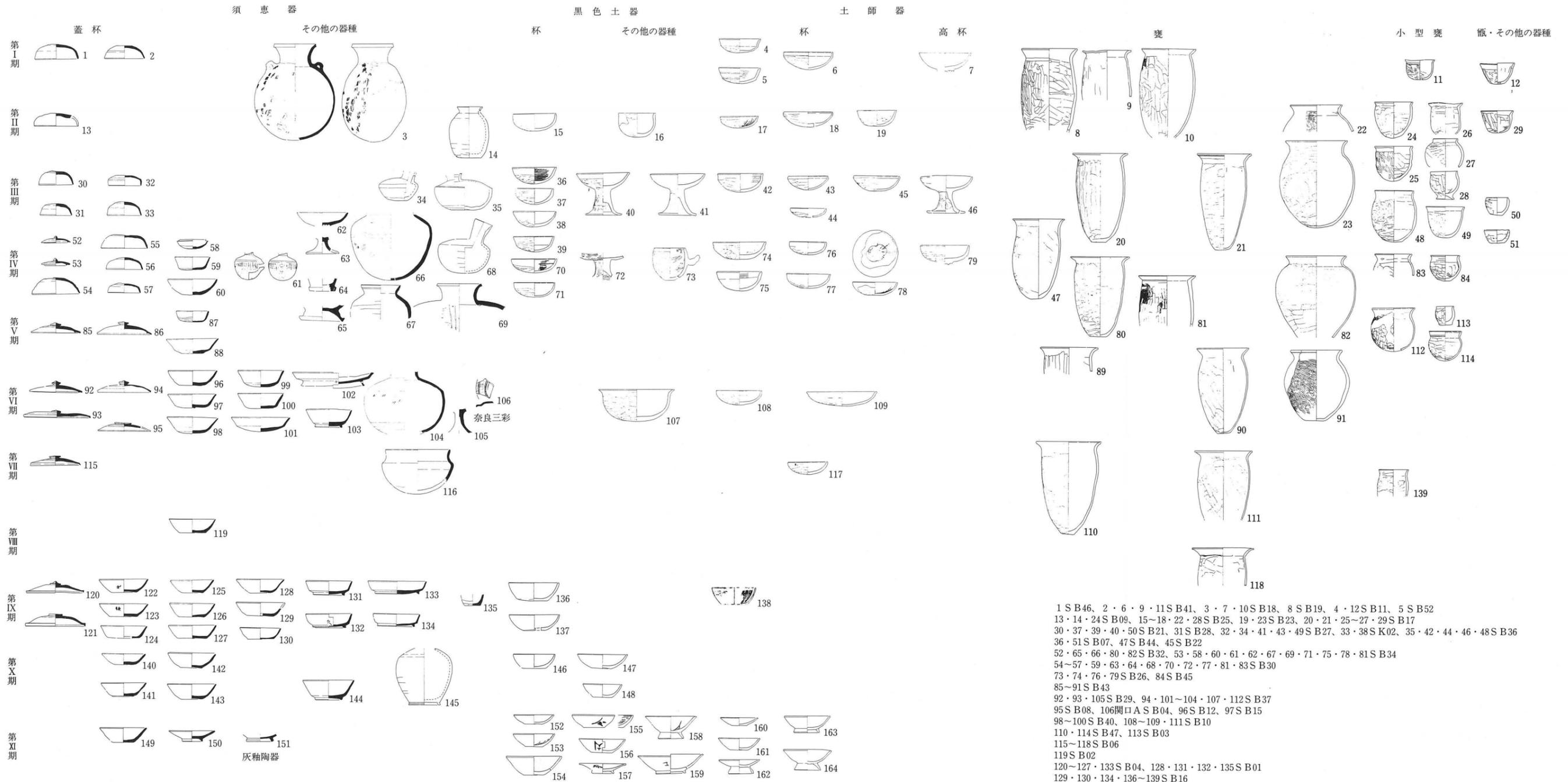
第I期 古墳時代後期で、田辺昭三氏の遍年でTK10、TK43型式、中村 浩氏のII型式2～4段階の須恵器が伴出する。本来細分すべきであるが、資料数が少ないため、一括した。

土師器杯には、A類、B類、甕には、A I・a、II・a類、小形甕には、A II類がある。

第II期 TK209型式、II型式5段階の須恵器が伴出する。土師器長胴の甕では、A I・b類のほか武蔵型の甕 (B類) が出現する。球胴の甕には、I・IIの両者が認められる。北武蔵型の杯 (18) も確実に認められるようになる。

第III期 TK209型式、II型式5段階の須恵器が伴出する。須恵器蓋・杯は10cm以下と小型化する。土師器杯には、A・B・C類が、長胴の甕はA I b・B類である。黒色土器高杯には、A類、B類が認められる。

第IV期 伴出する須恵器は、TK217型式の一部、II型式の7段階のものである。宝珠形つまみを有する須恵器蓋B I類とセットとなる杯B I類が出現する一方、第30号住居址では第II期の蓋が残存しており、あるいはこの時期の特徴といえるかもしれない。土師器杯には、D類とした畿内系暗文を有する杯が第34号住居址から出土している。図示しなかったが、第26号住居址からは、在地での模倣品と考えられる破片も出土している。土師器甕には、A I類の外、A II類が残存する。須恵器では、甗、平瓶、横瓶なども認められる。甗(61)は、猿投窯産である。須恵器の量は



1 SB46, 2・6・9・11SB41, 3・7・10SB18, 8 SB19, 4・12SB11, 5 SB52
 13・14・24SB09, 15-18・22・28SB25, 19・23SB23, 20・21・25-27・29SB17
 30・37・39・40・50SB21, 31SB28, 32・34・41・43・49SB27, 33・38SK02, 35・42・44・46・48SB36
 36・51SB07, 47SB44, 45SB22
 52・65・66・80・82SB32, 53・58・60・61・62・67・69・71・75・78・81SB34
 54-57・59・63・64・68・70・72・77・81・83SB30
 73・74・76・79SB26, 84SB45
 85-91SB43
 92・93・105SB29, 94・101-104・107・112SB37
 95SB08, 106開口ASB04, 96SB12, 97SB15
 98-100SB40, 108-109・111SB10
 110・114SB47, 113SB03
 115-118SB06
 119SB02
 120-127・133SB04, 128・131・132・135SB01
 129・130・134・136-139SB16
 140-145・147・148SB20
 146開口ASB02
 149・150・153・154・156・157SD01, 152・155・158-164SD03
 151SD07

第299図 土器の変遷

増加するようであり、少なくとも、この時期の前後には在地窯でも生産が開始されたと考えられ、それと関連するものであろうか。

第V期 TK217型式、III型式2～3段階にあたる。第IV期と第VI期から分類したもので、一時期としたが、資料類は少ない。須恵器蓋のかえりの消失前の段階である。

第VI期 TK217型式の一部、MT21型式の大半、III型式3～IV型式1段階と考えられる。須恵器蓋にはかえりが認められないものが現われる。土師器甕には、A I b、B類、小型甕にはC類がある。形態、調整から搬入品の可能性が強い。関口A遺跡第4号住居址出土の奈良三彩(106)も該期に位置付けられよう。第VI期から一応奈良時代と考えておきたい。

第VII期 IV型式2段階にあたると思われる。須恵器蓋は、B II類だけとなる。また土師器甕A類は、この時期までは残存しないようで、杯類に移行したと考えられる。

第VIII期 TK7型式、IV型式3段階にあたると思われる。須恵器杯の形態は平安時代のものに近くなる。

第IX期 TK7型式とTK112型式の中間、IV型式4段階にあたる。土師器杯とE類とした甲斐型の杯が認められる。搬入品である。土師器長胴の甕は、⁽²⁾ 鑄師屋遺跡群の編年からすると「コ」の字状の口辺部に变化する段階といえる。

第X期 TK112型式、VI型式1段階にあたるものと思われる。溝址出土土器がほとんどで食器が大半を占め、煮炊具、貯蔵具の資料は少ない。軟質須恵器、近江産の緑釉陶器、灰釉陶器も認められる。第7号溝址の灰釉陶器は、大原2号窯期にあたる。この外、関口B遺跡第20号掘立柱建物址出土土器、下柏原遺跡第1号住居址出土土器も該期に含まれるものと考えられる。

以上、土器の変遷を見てきたが、その年代について⁽³⁾ 触れると、第I期が6世紀中葉～末、第II～V期が7世紀、第VI～IX期が8世紀代、第X期が9世紀前半、XI期が9世紀末～10世紀前半と考えられる。

制約で、関口B遺跡第1次出土資料、他遺跡との併行関係など細かい分析ができなかった。今後の課題としたい。

申し上げる。

註

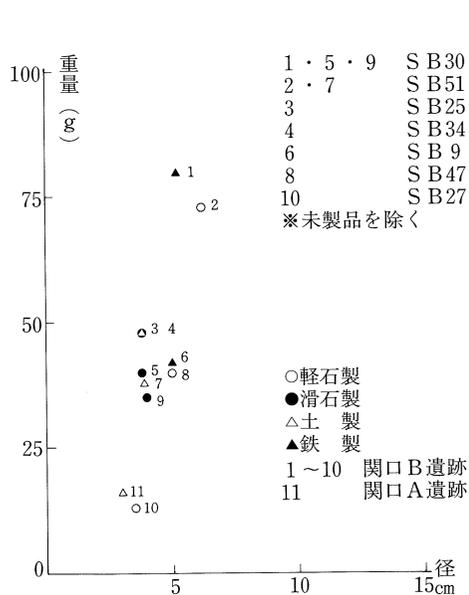
- (1) 田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群I』 平安学園考古学クラブ、同 『須恵器の大成』 角川書店、中村 浩 1980 『陶邑』I・II・III 大阪文化財センター、同 1981 『和泉陶邑窯の研究』 柏書房、同 1985 『古代窯業史の研究』 柏書房
- (2) 堤 隆 1989 「V総括」『鑄師屋遺跡群 根岸遺跡』 御代田町教育委員会
- (3) 年代観は、註1の文献のほか、次の文献によった。前川 要 1984 「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の様相」 『瀬戸内歴史民俗資料館研究紀要III』

(2) 石製品・土製品・鉄製品

石製品には磨石・砥石・紡錘車などがある。

砥石は関口A遺跡で1点、関口B遺跡で8点計9点出土している。

このうち、砂岩製が6点を占め、他は凝灰岩製が2点砂質凝灰岩製が1点である。関口B遺跡第7・30号住居址からは穿孔された携帯用のものが出土している。



第300図 紡錘車の大きさ

紡錘車には、滑石製、軽石製のもののほか、土製、鉄製のものがあるが、ここでは一括して扱う。各々の大きさについては第300図に示した。なお、径については平面が楕円形のものには長径を、断面台形のものには底径を計測した。また、鉄製紡錘車については軸も含めた全体の重さである。

第24号掘立柱建物址柱穴出土の未製品1点を除き11点出土しており、滑石製・軽石製・土製が各々3点、鉄製が2点出土している。中でも関口B遺跡第30号住居址では鉄製も含め3点が出土している。時期的には、遺構外出土遺物の土製1点を除き古墳時代後期から奈良時代と考えられる。重さからすると、大きく三つにグルーピングすることができる。また、軽石製が出現するのは古墳時代の終わり頃からのようである。一方、鉄製紡錘車

が古墳時代後期の第9・30号住居址から1点出土している。鉄製紡錘車が普及するのは平安時代からとされているが、それよりも遡る例として注意しておく。

このほか、磨石として使われたと考えられる軽石が2点出土している。

金属製品のうち鉄製品は、関口B遺跡を中心に多種が出土している。種別では鉄鏃、刀子、馬具、鎌、毛抜き形鉄製品、紡錘車などがある。このうち、確定できた数は鉄鏃16点、刀子28点、馬具3点、鎌5点、毛抜き形鉄製品3点、紡錘車2点などである。関口B遺跡第34号住居址からは刀子、鉄鏃など15点が出土しており注目される。

鉄鏃には、圭頭鑿式、三角形式、五角形式、雁又式などが認められるが、量的には圭頭鑿式が多い。住居址別では、第34号住居址の4点、次いで第29号住居址の3点が続く。

馬具は、第9・18号住居址から出土している。

第9号住居址から轡、鎧金具が、第18号住居址から鎧金具が出土している。いずれも古墳時代後期である。

馬具は古墳の副葬品では多いものであるが、集落出土のものは数少ない例といえる。関口B遺跡では馬の骨が出土していることも合わせ、すでにこのころから馬と関わる生活が身近にあったと

考えられよう。

また、稀少な例として、第33号住居址出土の鉄鍋がある。脚部は1点しか残存しておらず、また深さ3.5cm前後と浅い。類例を待ちたい。

以上、鉄製品について見てきたが、鉄滓は柏原遺跡第1号住居址で4点、関口B遺跡第16・17・18・20・26・34号住居址、井戸址、第1号溝址で出土している。

このほか、金属製品については関口B遺跡第2号住居址から青銅製品が出土しているが薄く、小片のため器種は不明である。

銭貨は、関口A遺跡で5点、関口B遺跡で1点出土している。永樂通宝2点、政和通宝、元祐通宝、祥符通宝、洪武通宝各1点である。

なお、金銅製飾り金具については後述する。

(3) 金銅製透彫飾り金具について

関口B遺跡第7号住居址から出土した。透彫と連続列点文で唐草文を表わしている。完形品ではないため、全体の大きさは知り得ないがタテ2.5cm、ヨコ2.6cmが残存している。厚さは厚いところで約0.5mmである。また一部縁辺部に削痕が認められ、鍍金の前に削られている。なお鍍金は裏面には施されない。列点が細かいことなど製作が丁寧なことからすれば、畿内地方で製作された可能性が高い。

用途については不明であるが杏葉あるいは鏡板の可能性も考えられる。

いずれにせよ、竪穴住居址からのこうした遺物の出土については寡聞にして知らない。大方のご教示をお願いしたい。

なお本稿を草するのに際し、東京国立博物館早乙女雅博、望月幹夫両先生には御多忙の中有益なご教示を賜った。厚く御礼申し上げます。

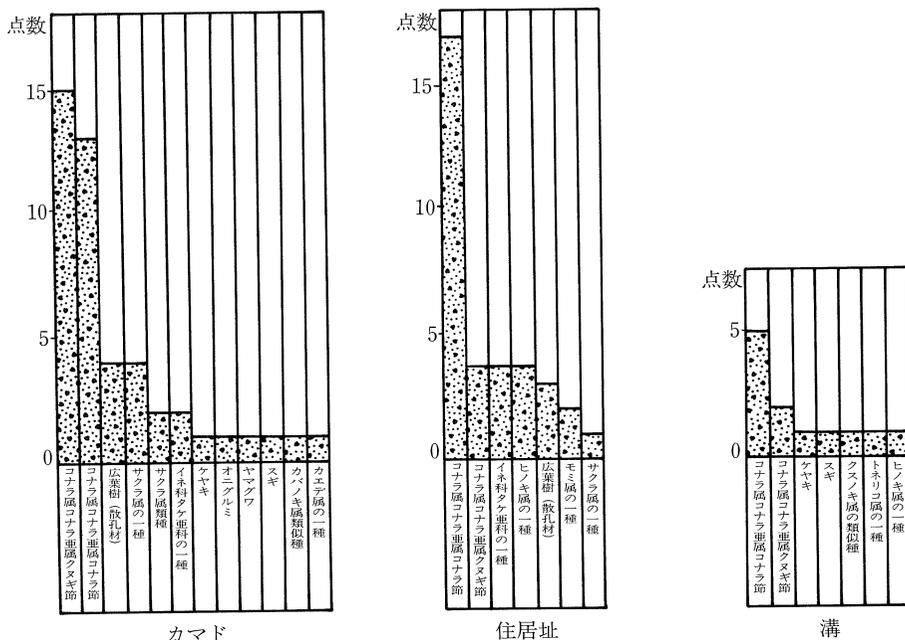
(4) 自然遺物について

関口A・B遺跡出土の炭化材の樹種については付編1に後述した。さて、これらの材については、カマドから出土したものとそれ以外の場所とに大別することができる。

カマド以外の場所においては建築材のほか、木器等に細別される可能性があるが、ここでは一応建築材として考えることにしたい。

まず、カマド出土の炭化材については薪として用いられたとして良いだろう。付編の表1から出土材の樹種別に表化したものを第301図に示した。遺存状況により差異も考えられるが、一応その傾向を知ることができる。

中でもコナラ属のコナラ節、クヌギ節が目につく。コナラ節の材は炭材として優れていることから、薪材としても意識的に用いられたのかもしれない。後述するように建築材と考えられる中でも頻度が多い。



第301図 遺構毎の樹種分布

オオグルミは、市内では奈良時代後半と考えられる鋳物師屋遺跡第16号住居址から出土している。鋳物師屋遺跡例は、床面から出土しており、建築材か木製品かは不明である。

イネ科タケ亜科のものは、焚き付けとして使われたものであろう。

一方、建築材としては、コナラ属のコナラ節が目につく。古墳時代前期前半の小諸市和田原遺跡第6号住居址は、同定を依頼した54点中樹皮1点を除き53点と高い比率を占める。さらに、同時期と考えられる第1・4・5号住居址をこれに加えると82点中74点となる。この点については、鑑定者である高橋利彦氏の指摘にもあるように、残された材が当時使われていた材すべてではない。言い換えるなら、樹種の差異により残存率は異なるという指摘がある。この点は当然考慮される必要があるが、コナラ節が顕著である点は注目されて良い。

炭化材の出土例の比率を見ると、建築材、燃料用(カマドより出土)を通じてコナラ節、クヌギ節が非常に多く、建築材で全体の60%であり、カマド出土でも60%強である。

その他の広葉樹全体で建築材では11%あり、カマド出土が36%である。針葉樹は建築材が17%弱をしめ、カマドからは2%である。

以上のことから住居周辺は南西の緩い斜面に位置し、日照もよく標高からも落葉広葉樹の生育に適した環境で、特にコナラやクヌギは周辺に多く採集に便利であったと推考される。

ゆえにこうした植生の場所では、イノシシ、ニホンシカ、キジなども生息に適していたのではないだろうか。

建築用材のヒノキ属、モミ属の比率が17%弱をしめている。タケ亜科は屋根材に使用されたものではあるまいか。またカマドから出土したカバノキ属類似種は、食用とした木の実の一種であるハシバミノキではなかろうか。従って木の実は出土していないが当然利用されたであろう。ちなみにハシバミは市内宮ノ北遺跡第1号住居址(古墳時代後期)、和田原遺跡第3号住居址(古墳時代前期)から炭化したものが出土している。

和田原遺跡例は、今のところ樹種同定を行なった市内の住居址では最も古いものである。したがって、少なくともコナラの活用がこの時期まで溯るのではないかと考えられる。推論の域を出ないが、ムラ周辺の山林が薪・建築材などとして大いに活用されたのであろう。

一方、関口B遺跡では多くの住居址から鳥獣骨が出土している。特に、カマド火床部からは小片ではあるが骨片が出土した例が多くあり、市内のこれまでの調査では異例とも言えることであった。

さて、宮崎先生によれば、住居址出土の骨片には、キジ、ウマ、イノシシ、ニホンシカなどがあるという。

牛山佳幸氏によれば、奈良時代ころから肉食の風習が次第にすたれたが、調の品目や信濃貢上の中男作物には、いぜんとして雉の腊とよばれる干し肉がみえ、また伊那評から鹿肉が大贄として、更級郡からは雉肉が地子として貢進されたことを示す木簡が、それぞれ藤原宮跡と長岡宮跡から出土しているという。また信濃の中男作物には猪膏、脯も見える。関口B遺跡出土のニホンシカ、イノシシ、キジもこうした中男作物同様のものがある点注意される。

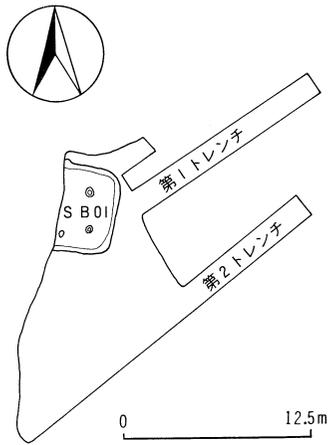
また、牛山氏は鑄師屋遺跡群から鉄鏃とともに獣骨も出土していることから、肉食や狩猟の禁令が地方にまで徹底していたかどうかは疑わしく、鑄師屋遺跡群のように官衙的な性格をもった集落でも、付近の山野で捕獲された鹿や猪の肉が、ときには人々の食膳ににぎわしていただろうとされている。関口B遺跡においても鉄鏃の出土は多く、51棟の住居址から15点が出土している。獣骨の出土は鉄鏃が武器であるとともに狩猟用具であることを示すものであろう。

ウマに関しては、馬具が関口B遺跡第9・18号住居址から出土している。第9号住居址からは(拡張が行なわれているが)、轡と鎧金具、第18号住居址から鎧金具がそれぞれ出土している。いずれの住居址も古墳時代後期と考えられる。関口B遺跡では最も古い段階のものである。したがって、関口B遺跡では、少なくともこの段階から馬との関わりが開始されたと言える。

(5) 遺構の変遷

(1)で述べた土器の変遷を基に時期を確定できた遺構を中心に、その移り変わりについて触れることにしよう。

第I期 第I期以前では、縄文時代後期の土器片、石鏃、黒曜石の剥片が見られる程度であり、



第302図 下柏原遺跡遺構全体図

集落が形成され始めるのは、古墳時代後期に入ったこの時期からと言える。関口B遺跡第11・18・19・41・46・52号住居址がある。細分される余地を多分に残しているが一括した。C-2グリッドを囲むように環状となる。

第11号住居址のように拡張が行なわれたものもある。

住居址が認められるのは、関口B遺跡だけで、関口A遺跡は第V期まで、下柏原遺跡は全体は不明であるが、第X期まで空白となる。

第II期 第9・17・23・25号住居址がある。住居址の分布は、さほど変わらない。

第9号住居址は、第I期の第11号住居址と同じく拡張が行なわれている。また、馬具が出土しており、馬と関わる生活が窺える。

第III期 第7・21・22・27・28・36・44号住居址のほか、第2号土坑がある。住居址が増加し始めるとともに、西へ分布が広がる。第7号住居址からは、金銅製飾り金具が出土しており、畿内との関連を窺わせる最初の遺物である。

第IV期 第26・30・32・34・45号住居址がある。特に、第34号住居址は畿内系の杯をはじめ、須恵器の器種、鉄製品も多く出土しており注目される。住居址の規模、プラン等は他の住居址と変わらないが、遺物からすると様相を異にしており特異と言える。出土土器からすると、畿内、尾張地方との交流の一端を窺うことができよう。

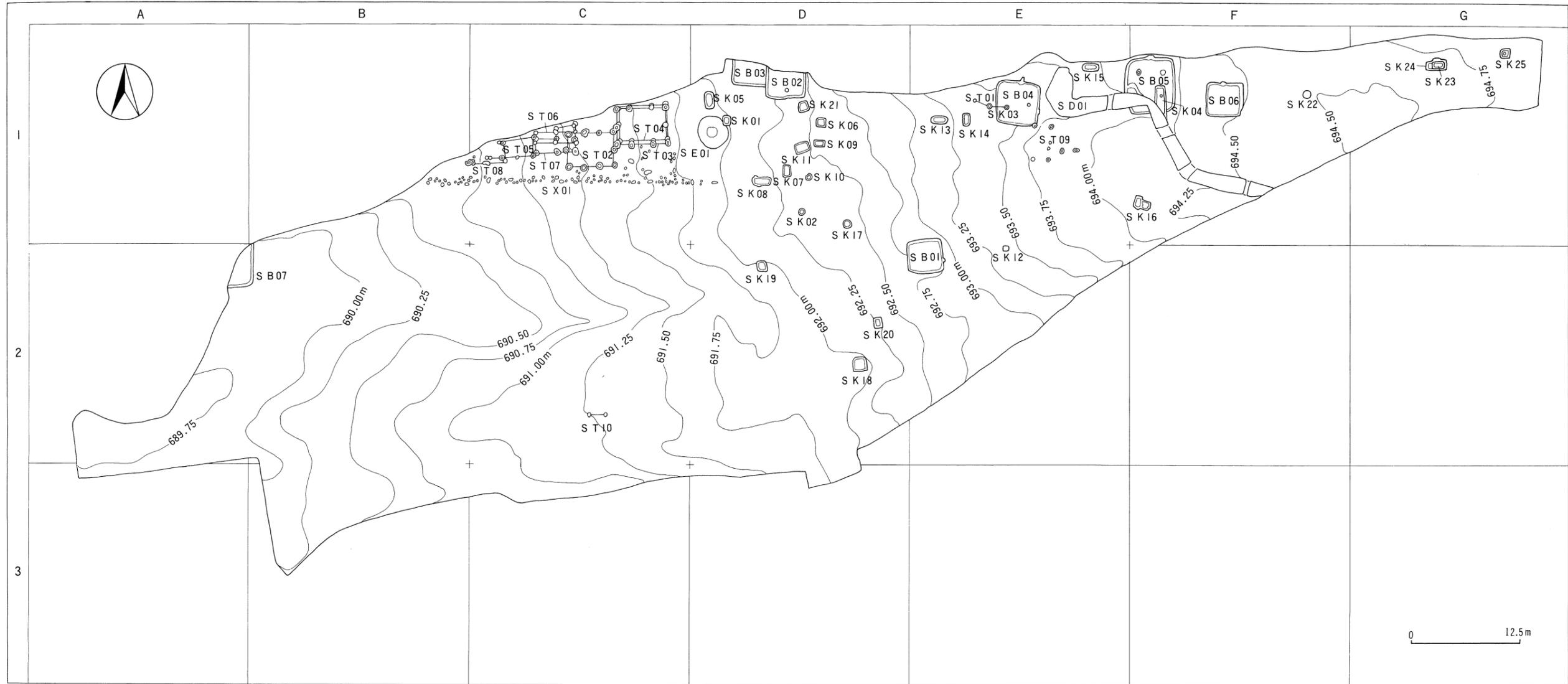
第V期 先述したように、第IV期と第VI期から分離したため、第43号住居址を掲げ得るのみである。この時期で、一度集落が断絶したもとは考えられず、今後の検討としたい。

第VI期 関口A遺跡第4・5号住居址、関口B遺跡第3・8・10・12・15・29・37・40・47号住居址がある。関口A遺跡でも住居址が認められるようになったほか、関口B遺跡では、第40号住居址のように大型の住居址も出現する。関口A遺跡第4号住居址で奈良三彩が、関口B遺跡で畿内系の小型甕がそれぞれ出土しており、第II・V期と同じく畿内地方との関連を窺うことができよう。集落継続期間のうち、第III・IV・XI期と並び一つのピットをなす。

また、掘立柱建物址も本期には確実に出現していると考えられるが、特定できるものは少ない。時間中を有するが、第37～40・49号掘立柱建物址を掲げておく。

第VII期 関口B遺跡で第6号住居址を掲げ得るのみで第VIII期と並び、様相は明確でない。

また、関口A・B遺跡で井戸址としたもののうち、関口B遺跡例は、この頃には掘られていた可能性が強い。形状から、井戸址と考えたが、湧水は認められず、溜井としては、浸透性の強い土層を掘り込んでいるため、土坑とすべきであったかもしれない。先述したように、覆土中から土器片が多く出土しているほか、鉄製品も認められる。市内でも宮ノ反遺跡で1基、竹花遺跡で



第303図 関口A遺跡遺構全体図



第304図 関口B遺跡遺構全体図

2基検出されている。時代的には、いずれも奈良時代～平安時代初めと考えられる。土器等の廃棄場所としてこうした遺構を掘ったとは考えられないため、何らかの意図があるものと思われるが、ここではその指摘にとどめ、今後の検討課題としておく。

掘立柱建物址では、関口B遺跡第4・5・7・10・11・35号掘立柱建物址がある。

第Ⅷ期 第Ⅶ期と並び様相は明確でない。関口B遺跡では、第2号住居址を掲げ得るのみである。関口A遺跡では、柵に囲まれた掘立柱建物址群(第2～8号掘立柱建物址)⁽¹⁾が出現し、第Ⅹ期まで続く。2間×3間の側柱式建物(第2～4号掘立柱建物址)と2間×2間の総柱式建物(第6・7号掘立柱建物址)の外、2間×2間かと考えられる側柱式建物(第5・8号掘立柱建物址)が加わる。いずれもプランは長方形である。このうち、総柱長方形の建物は、平地住居と考えられていることから、住居とそれに不随する施設と⁽²⁾考えておく。第Ⅷ期の段階では、第4号掘立柱建物址1棟が存在したと思われる。

第Ⅸ期 関口B遺跡では、第1・4・16号住居址が、関口A遺跡では第6号住居址がある。

第16号住居址では、搬入品と考えられる甲斐型土器が出土しており、甲斐との交流の一端を窺える。甲斐型土器は、今のところ、佐久平の東限にあたる。関口B遺跡の第1次調査で、底部を円板状に打ち欠いたものが、第6号住居址から出土しており、市内では二例目である。土器の併行関係を辿る上でも貴重な例と言える。また、竪穴住居址には、第1号住居址のように大型の住居も認められる。

一方、掘立柱建物址には、関口B遺跡で、第27・30・33号掘立柱建物址などが、関口A遺跡で第3・7・8号掘立柱建物址がある。関口A遺跡の井戸址と考えた遺構も、この頃には掘られていたと考えられる。

第Ⅹ期 関口B遺跡では、第20号住居址のほか、第42号住居址、関口A遺跡第2号住居址、下柏原第1号住居址がこの時期に含まれるものと思われる。竪穴住居址には、大型のものは見られなくなり、数も減少する。その分、掘立柱建物に移行した感を受ける。掘立柱建物址は、関口B遺跡で、時間幅を有するが第2・6・13・16・17・21・23・25・26・29号掘立柱建物址などが、関口A遺跡で、第2・5・6号掘立柱建物址がある。また、関口B遺跡第42号掘立柱建物址は、この時期か次期に含まれる可能性がある。

関口B遺跡では、第1号溝址をはじめ、第2～4・6～8号溝址が開削されたと考えられる。

集落を区画するものであろうか。

第Ⅺ期 関口B遺跡では、第15・19・20・24・28・31・32・55号掘立柱建物址などがある。

第1号溝址、第3号溝址を中心に食器類などが溝上部に廃棄される。第1号溝址などは短期間に埋もれたようで、この時期には、本来の機能を失っていたものと思われる。また、緑釉陶器などもこの時期に伴うものであろう。

集落が確実に認められるのは、第ⅩI期までで、それ以降は、明確な資料が少ない。

中世の遺構には、関口A遺跡第3・4号土坑がある。このうち、第3号土坑は、土坑墓で、六

道銭として、政和通宝、永樂通宝、元祐通宝が出土している。したがって、16世紀末以降のものと考えられる。第4号土坑は、内耳土器が16世紀前半に比定されることから室町時代の所産である。墓坑の可能性も考えられる。

このほか、中世の遺物には、関口B遺跡で龍泉窯系青磁椀、内耳土器片、銭貨、五輪塔がある。

こうした遺物からすると、関口A・B遺跡は墓域の場であったほか、関口B遺跡は生活の場であった可能性もある。あるいは、時期不明の掘立柱建物址の中に該期の遺構が含まれているのかもしれない。

近世以降の遺物には、肥前瑠璃釉の輪ハゲ皿、瀬戸美濃陶器鎧手茶椀の破片があり、各々18世紀、18世紀後半とされた。市川隆之氏のご教示によれば、肥前の陶器は日本海経由のルートでもたらされたものである。いずれも、関口A遺跡出土で、このうち、瀬戸美濃陶器は第5号土坑出土である。先述したように、関口A遺跡の第5～11・13・15・18～20・23・24号土坑は、覆土が締まっていないこと、プラン・規模などから、近世以降の所産で、野菜を貯蔵した室ではないかと想定したい。

以上、関口A・B・下柏原遺跡の遺構・遺物について一瞥してきた。御多忙中にも関わらず、玉稿、御教示を頂いた先生方の意に反し、拙ない総括となってしまう、お詫び申し上げます。

最後に、調査・報告書作成に携わられた方々、御代田町教育委員会、土地改良区をはじめとする関係各位、原稿・ご教示を頂いた先生方に厚く御礼申し上げ、総括としたい。

註

- (1) 溝で区画されたものは、小諸市鋳物師屋遺跡で検出されている。溝に囲まれた範囲は、東西30m、南北37mを測る。小諸市教育委員会 1988 『鋳物師屋』
- (2) 堤 隆 「V 総括」 『根岸遺跡』 御代田町教育委員会

引用参考文献

- 小平和夫 1990 「第3章 遺構・遺物の考察 第5節 古代の土器」 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書——松本市内その1——総論編』 日本道路公団名古屋建設局 長野県教育委員会 (財)長野県埋蔵文化財センター
- 笹沢 浩 1988 『II 時代と編年 4 古代の土器』 『長野県史考古資料編 全1巻(4) 遺構・遺物』 長野県史刊行会
- 津野 仁 1990 「古代・中世の鉄鏃」 『物質文化』54 物質文化研究会
- 西 弘海 1986 『土器様式の成立とその背景』 真陽社
- 原 明芳・市川隆之他 1989 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書——塩尻市内その2——吉田川西遺跡』 日本道路公団名古屋建設局 長野県教育委員会 (財)長野県埋蔵文化財センター

第4表 出土土器一覧表

関口A遺跡

第2号住居址

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
10-1	黒色土器杯	(12.2) (4.1) 6.4	口辺部は内弯気味に立ち上がる 平底	ロクロナデ 底部手持ちへラケズリ	黒色処理	約1/2存 明赤褐色 (5Y R5/8)

第3号住居址

12-1	黒色土器高杯	— (5.95) —		脚部へラケズリ	杯部へラミガキ黒色 処理 脚部へラケズリ	橙色(7.5Y R6/6)
------	--------	------------------	--	---------	----------------------------	---------------

第5号住居址

18-1	土師器甕	— (7.35) 6.2	長胴を呈すると思われる	へラケズリ	へラナデ	灰黄褐色 (10Y R6/2)
18-2	須恵器杯	15.2 (4.8) .	口辺部は外反する	ロクロナデ	ロクロナデ	約2/3存 灰白色 (N7)
18-3	須恵器杯	— (1.8) 8.7	平底	ロクロナデ 底部へラキリ後手持ちへラケズリ	ロクロナデ	灰色(10Y5/1)

第6号住居址

22-1	須恵器杯	— (2.1) 7.8	平底	ロクロナデ 底部糸切り後外周手持ちへラケズリ	ロクロナデ	灰色(7.5Y6/1)
------	------	-------------------	----	---------------------------	-------	-------------

第1号井戸址

33-6	土師器甕	— 4.4 5.0	底部は丸底気味となる	へラケズリ	へラナデ	にぶい赤褐色 (5Y R4/3)
------	------	-----------------	------------	-------	------	---------------------

第4号土坑

41-1	内耳土器	25.8 15.65 20.5	内面に半環状の耳を付す 平底	口辺部~胴上部ヨコナデ 胴下部クテナデ 底部付近ヨコナデ	ヨコナデ	復原後ほぼ完形 にぶい褐色(7.5Y R5/3) 外面にスガが附着
------	------	-----------------------	-------------------	---------------------------------	------	--------------------------------------

関口B遺跡

第1号住居址

47-1	黒色土器杯	11.8 (3.1) 5.2	口辺部は外反する	ロクロナデ 糸切り	黒色処理	約1/2存 橙色 (7.5Y R6/6)
47-2	土師器杯	11.9 (3.9) (5.2)	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約1/2存 橙色 (5Y R7/6)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
47-3	須恵器杯	13.9 4.0 5.9	口辺部は外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約1/2存 緑灰色 (10G Y5/1)
47-4	須恵器杯	15.0 4.7 .	口辺部は外反する	ロクロナデ ヘラキリ	ロクロナデ	約5/6存 灰色 (5Y6/1)
47-5	須恵器杯	14.2 (4.2) 5.9	口辺部は外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約1/2存 灰色 (7.5Y6/1)
47-6	須恵器 高台付杯	13.3 4.2 9.2	口辺部は外傾する	ロクロナデ 底部ヘラキリ後高台 を貼付する	ロクロナデ	約2/3存 灰色 (10Y6/1)
47-7	須恵器 高台付杯	13.4 4.1 9.8	口辺部は外反気味に 立ち上がる	ロクロナデ 底部手 持ちヘラケズリ後高台 を貼付する	ロクロナデ	ほぼ完形 灰白色 (10Y R8/2) 外面に「久」の刻書
47-8	須恵器短頸壺	— 3.4 4.6	平底	胴部ロクロナデ 胴下半部回転ヘラケ ズリ 底部糸切り	ロクロナデ	灰色(N6/)

第2号住居址

51-1	須恵器杯	13.7 4.0 7.7	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部ヘラキリ後手持 ちヘラケズリ	ロクロナデ	ほぼ完形 褐灰色 (7.5Y R6/1)
------	------	--------------------	----------------	------------------------------	-------	-------------------------

第3号住居址

54-1	土師器小型甕	6.4 7.3 5.1	口辺部は短く外反す る 平底	ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 胴部～底部ヘラナデ	復原完形 淡黄色 (2.5Y8/4)
------	--------	-------------------	----------------------	-------	----------------------	-----------------------

第4号住居址

57-1	須恵器蓋	. 3.4 16.7	扁平な宝珠形のつま みを有する	天井部回転ヘラケズ リ ロクロナデ	ロクロナデ	完形 緑灰色 (10G Y5/1)
57-2	須恵器蓋	3.9 3.6 17.7	円板状のつまみを有 する	天井部回転ヘラケズ リ ロクロナデ	ロクロナデ	完形 オリーブ灰色 (2.5G Y6/1)
57-3	須恵器杯	14.2 3.9 8.9	口辺部は外反する	ロクロナデ ヘラナデ	ロクロナデ	ほぼ完形 灰白色 (N7/)
57-4	須恵器杯	14.1 3.8 8.0	口辺部は外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	ほぼ完形 明オリ ーブ灰色(N7/1) 墨 書文字不明
57-5	須恵器杯	12.8 3.7 5.8	口辺部は外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	完形 灰色 (7.5Y5/1)
57-6	須恵器杯	13.4 4.0 7.5	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約2/3存 灰色 (10Y6/1)
57-7	須恵器杯	14.2 3.9 7.3	口辺部は外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	口辺部約1/3欠く 灰黄色(2.5Y7/2) 外面に「吉」の墨書
57-8	須恵器杯	13.6 3.6 (9.0)	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ ヘラキリ	ロクロナデ	約1/3存 灰色 (N5/)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
57-9	須恵器 高台付杯	17.2 3.8 13.0	口辺部は外反する 底部は高台部より僅かに突出する	ロクロナデ 底部ヘラキリ後回転ヘラケズリ 高台を貼付する	ロクロナデ	約1/2存 灰色 (10Y 6/1)

第6号住居址

62-1	土師器杯	11.7 3.6 .	口辺部は直立気味となる	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	ヨコナデ	復原後はほぼ完形 に ぶい橙色(5Y R7/4)
62-2	須恵器蓋	3.4 2.8 14.7	扁平なつまみを有する	天井部回転ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	約4/5存 灰色 (N5/)
62-3	土師器甕	24.1 14.6 —	口辺部は「く」の字状に外反する	口辺部ヨコナデ 肩部～胴部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 肩部～胴部ヘラナデ	にぶい黄橙色 (10Y R7/3)
62-4	須恵器鉢	18.8 (13.0) .	口辺部は直立気味に立ち上がる 丸底	口辺部～肩部ロクロナデ 胴部～底部タタキ 底部 タタキ後ヘラケズリ	ロクロナデ	約1/2存 灰色(N4/) 外面口辺部～胴部、 内面に自然釉が付着

第7号住居址

65-1	黒色土器杯	12.9 4.8 .	口辺部は外反する	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	ほぼ完形 橙色 (7.5Y R6/8)
65-2	土師器 手づくね	(9.5) (5.2) 5.7	口辺部は内扁気味に立ち上がる 平底	ヘラナデ	ヘラナデ	約3/4存 橙色 (5Y R6/8)

第8号住居址

70-1	須恵器蓋	5.0 (2.5) 15.4	環状のつまみを有する 内面にかえりを有する	ロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	約1/2存 灰色 (N6/)
70-2	須恵器杯	14.6 (4.1) 7.0	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 底部ヘラキリ後手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	約1/2存 緑灰色 (10G Y5/1)

第9号住居址

73-1	須恵器蓋	. (3.7) 12.6	口辺部は外反気味に立ち上がる	ヘラキリ ロクロナデ	ロクロナデ	約1/2存 灰色 (10Y 6/1)
73-2	土師器小型甕	14.7 13.9 .	口辺部は外反する 丸底	口辺部～底部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 胴部～底部ヘラナデ	約4/5存 浅黄橙色 (10Y R8/4)
73-3	短頸壺	7.5 (14.8) 6.9	口辺部は短く外反する	口辺部～胴下半部ロクロナデ 胴下半部回転ヘラケズリ 底部 回転ヘラケズリ後手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	約7/8存 灰白色 (5Y 8/2)

第10号住居址

78-1	土師器杯	13.3 4.2 .	外稜口辺を有し口辺部は直立気味に立ち上がる	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	ヨコナデ	約3/4存 赤褐色 (2.5Y R4/8)
78-2	土師器盤	24.0 4.2 .	口辺部は外反する	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	ヨコナデ	約1/2存 橙色 (2.5Y R6/6)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
78-3	土師器甕	23.0 (15.3) —	口辺部は「く」の字状に外反する	口辺部ヨコナデ 肩部～胴部ヘラケズリ	口辺部～肩部ヨコナデ 肩部～胴部ヘラナデ	橙色(2.5Y R7/6)
78-4	土師器甕	22.3 26.9 —	口辺部は「く」の字状に外反する	口辺部ヨコナデ 肩部～胴部ヘラケズリ	口辺部～肩部ヨコナデ 肩部～胴部ヘラナデ	にぶい黄橙色 (10Y R7/3)

第11号住居址

82-1	土師器杯	12.0 4.05 .	外稜口辺を有し、口辺部は外反する	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	ヨコナデ ヘラケズリ	約2/3存 橙色 (5Y R6/6)
82-2	土師器甕	— 6.4 .	丸底	ヘラケズリ	ヘラナデ	明赤褐色(5Y R5/6)
82-3	土師器甗	13.0 8.15 5.4	口辺部は外反する 底部は丸底気味となる	口辺部ヨコナデ 胴部～底部ヨコナデ 後ヘラケズリ	ヘラナデ後ヨコナデ	完形 にぶい橙色 (7.5Y R6/4) 底部に9孔を有する
82-4	土師器甕	— (5.4) 6.7	平底	ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい赤褐色 (5Y R5/3)

第12号住居址

85-1	須恵器杯	14.2 4.3 6.7	口辺部は外反する	ロクロナデ ヘラキリ後手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	約2/3存 灰黄色 (2.5Y 7/2)
------	------	--------------------	----------	------------------------	-------	-------------------------

第15号住居址

90-1	須恵器杯	13.8 4.1 .	口辺部は外反する	ヘラキリ後外周手持ちヘラケズリ	ヘラナデ	ほぼ完形 灰白色 (10Y 7/2)
------	------	------------------	----------	-----------------	------	-----------------------

第16号住居址

93-1	黒色土器杯	14.8 5.3 8.9	口辺部は内湾気味に立ち上がる	ロクロナデ 手持ちヘラケズリ	黒色処理	約3/4存 灰白色 (5Y 8/2)
93-2	黒色土器杯	14.8 4.6 (6.5)	口辺部は内湾気味に立ち上がる 平底	ロクロナデ 糸切り後手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	約4/5存 橙色 (7.5Y R7/6)
93-3	土師器小型甕	11.6 10.3 —	口辺部は「く」の字状に外反するが外反度は弱い	口辺部～胴部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 胴部ヘラナデ後部分的にヘラミガキ	にぶい橙色 (5Y R7/4)
93-4	須恵器杯	12.1 3.3 7.7	口辺部は外傾気味となる	ロクロナデ ヘラキリ	ロクロナデ	約4/5存 灰白色 (N7/)
93-5	須恵器杯	14.4 (4.0) (7.9)	口辺部は外反する	ロクロナデ ヘラキリ	ロクロナデ	約3/5存 灰色 (7.5Y 6/1)
93-6	須恵器杯	13.6 3.9 6.8	口辺部は僅かに外反する 平底	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約1/3存 灰色 (7.5Y 4/1)
93-7	須恵器高台付杯	13.7 (3.6) 10.9	口辺部は外傾気味となる	ロクロナデ 底部回転ヘラケズリ 後高台を貼付する	ロクロナデ	約2/3存 灰色 (5Y 6/1)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
93-8	土師器杯	(12.8) 4.9 (7.55)	口辺部は内湾気味に立ち上がる 平底	口辺部～体部ヘラミガキ 体部下半～底部ヘラケズリ	暗文	約1/3存 橙色(7.5Y R7/6)

第17号住居址

97-1	土師器小型甕	14.8 13.6 ・	口辺部は「く」の字状に外反するか外反度は弱い 丸底	口辺部ヨコナデ 肩部～底部ヘラケズリ 後ヘラミガキ	口辺部ヨコナデ 肩部～底部ヘラナデ	完形 にぶい橙色(7.5Y R7/4)
97-2	土師器小型甕	13.4 (12.0) —	口辺部は「く」の字状に外反する 最大径を口縁部に有する	口辺部ヨコナデ 肩部～底部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 肩部～底部ヘラナデ	底部を欠く 橙色(2.5Y R6/6)
97-3	土師器甕	9.5 (11.1) —	口辺部は直立気味に立ち上がる 最大径を胴中央部に有する	口辺部ヨコナデ 肩部～胴部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 肩部～胴部ヘラナデ	口辺部～胴部の1/3及び底部を欠く にぶい橙色(5Y R7/4)
97-4	土師器甕	12.7 8.6 ・	口辺部は「く」の字状に外反する	口辺部ヨコナデ 胴部～底部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 胴部～底部ヘラケズリ	復原完形 橙色(5Y R6/6) 底部に6孔を有する
97-5	土師器甕	21.5 34.3 5.5	口辺部は「く」の字状に外反する 最大径を口縁部に有する	口辺部ヨコナデ 肩部～底部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 肩部～底部ヘラナデ	復原完形 橙色(7.5Y 7/6)
97-6	土師器甕	21.1 37.3 5.7	口辺部は「く」の字状に外反する 最大径を口縁部に有する	口辺部ヨコナデ 肩部～底部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 肩部～底部ヘラナデ	復原完形 橙色(5Y R6/8)

第18号住居址

102-1	土師器高杯	15.3 (5.5) —	口辺部は外傾気味に立ち上がる	ヘラミガキ	ヘラミガキ	約2/3存(脚部を欠く) にぶい黄橙色(10Y R7/3)
102-2	土師器甕	21.2 (34.1) —	口辺部は「く」の字状に外反する 最大径を胴中央部に有する	口辺部ヨコナデ 肩部ハケメ 胴部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 頸部～底部ハケメ後ヘラナデ	底部を欠く 橙色(7.5Y R7/6)
102-3	須恵器提瓶	12.0 27.9 ・	口辺部は外反し、肩部に輪状の把手を付す	口辺部～頸部ロクロナデ 胴部タタキ、回転ヘラケズリ	ロクロナデ	底部を僅かに欠く 灰白色(7.5Y 7/1)

第19号住居址

105-1	土師器杯	12.2 (4.4) ・	口辺部は内湾する 丸底	口辺部ヨコナデ 体部～底部ヘラケズリ	ヨコナデ	約1/2存 灰白色(10Y R8/2)
105-2	土師器甕	21.7 (31.8) —	口辺部は「く」の字状に外反するが外反度は弱い 最大径を胴中央部に有する	口辺部～頸部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ	口辺部～頸部ヨコナデ 胴部ヘラナデ	底部を欠く 橙色(7.5Y R7/6) 胎土に金雲母を含む

第20号住居址

109-1	黒色土器杯	14.6 4.2 5.6	口辺部は外反気味となる	ロクロナデ 糸切り	黒色処理	復原完形 橙色(5Y R6/8)
109-2	黒色土器杯	(11.4) (3.9) 5.8	口辺部は内湾気味に立ち上がる 平底	ロクロナデ 糸切り	ヘラミガキ 黒色処理	約1/2存 橙色(5Y R6/6)
109-3	須恵器杯	12.8 3.2 6.5	口辺部は外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	完形 オリーブ灰色(2.5G Y5/1)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
109-4	須恵器杯	13.2 (4.0) 6.3	口辺部は外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約1/2存 オリーブ 灰色(2.5G Y6/1)
109-5	須恵器杯	14.0 4.5 6.4	口辺部は外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約3/5存 灰白色 (7.5 Y7/1)
109-6	須恵器杯	14.3 4.5 6.1	口辺部は外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約5/6存 緑灰色 (10G Y6/1)
109-7	須恵器 高台付杯	15.1 5.8 8.0	口辺部は外反気味に 立ち上がる	ロクロナデ 糸切り後高台を貼付 する	ロクロナデ	復原完形 灰黄色 (2.5 Y7/2)
109-8	須恵器長頸壺	— 16.6 9.3	最大径を胴中央部よ りやや上に有する	肩部～胴中央部ロクロナ デ 胴下半部回転ヘラケ ズリ 底部糸切り後高台 を貼付する	ロクロナデ	口辺部を欠く オリーブ 灰色(2.5G Y6/1) 肩部 外面に自然釉が付着

第21号住居址

112-1	黒色土器杯	11.8 4.5 ・	外稜口辺を有し、口 辺部は外傾気味に立 ち上がる	口辺部～底部ヘラケ ズリ	黒色処理	約5/6存 浅黄色 (2.5 Y7/3)
112-2	黒色土器杯	11.1 4.6 ・	口辺部は直立気味に 立ち上がる	口辺部ヘラミガキ 底部ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	約2/3存 明赤褐色 (2.5 Y R5/6)
112-3	須恵器蓋	3.5 4.1 9.7	口辺部は外傾気味と なる	天井部回転ヘラケズ リ 体部ロクロナデ	ロクロナデ	約3/4存 灰色 (5 Y7/1)
112-4	土師器盥	8.1 6.9 4.8	口辺部は直立気味に 立ち上がる	口辺部ヨコナデ 胴部～底部ヘラミガ キ	口辺部ヨコナデ 胴部～底部ヘラナデ	約1/2存 橙色 (7.5 Y R6/8)
112-5	黒色土器高杯	15.2 12.3 10.2	口辺部は外傾気味に 立ち上がり脚裾部は 「ハ」の字状に開く	口辺部ヨコナデ 杯部～脚部ヘラミガ キ 脚裾部ヨコナデ	杯部ヘラミガキ黒色 処理 脚部ヘラケズ リ 脚裾部ヨコナデ	杯口辺部を僅かに欠く 脚裾部の大半を欠く に ぶい黄橙色(10Y R7/4)

第22号住居址

115-1	土師器杯	13.1 4.4 ・	素縁で口辺部は内弯 する 丸底	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	ヨコナデ	約1/2存 橙色 (2.5 Y R6/6)
-------	------	------------------	-----------------------	--------------------	------	--------------------------

第23号住居址

119-1	土師器杯	11.3 4.75 ・	素縁で口辺部は僅か に外反する 丸底	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	復原後ほぼ完形 に ぶい黄色(2.5 Y6/3)
119-2	土師器甕	23.5 33.8 ・	口辺部は「く」の字状に外 反するが外反度は弱い 最大径を胴中央部に有す る 丸底	口辺部ヨコナデ 頸部～底部ヘラケズ リ	口辺部ヨコナデ 頸部～底部ヘラナデ	約2/3存 浅黄色 (2.5 Y7/3)

第25号住居址

124-1	土師器杯	10.8 3.4 ・	外稜口辺を有し、口 辺部は外反する 丸底	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	暗文	約3/4存 にぶい黄 橙色(10Y R7/3)
124-2	黒色土器杯	12.4 5.0 ・	素縁で口縁部は直立 気味となる 丸底	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	黒色処理	約3/4存 にぶい褐 色(7.5 Y R5/4)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
124-3	土師器杯	13.9 4.5 .	口縁部は内弯する丸底	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	ヨコナデ	約1/2存 橙色 (5Y R6/6)
124-4	黒色土器 小型甕	(10.5) 7.0 .	口辺部は僅かに外反する丸底	口辺部ヨコナデ 胸部～底部ヘラケズリ	黒色処理	約1/2存 淡黄色 (2.5Y 8/3)
124-5	土師器台付甕	10.2 11.0 6.6	口辺部は直立気味に立ち上がる低い脚台を付す	口辺部ヨコナデ 胸部～底部ヘラケズリ 脚部ヨコナデ	口辺部ヨコナデ 胸部～底部ヘラナデ 脚部ヨコナデ	復原完形 にふい橙色 (5Y R7/4)
124-6	土師器甕	19.9 (10.4) —	口辺部は「く」の字状に外反する 球胴を呈すると思われる	口辺部ヨコナデ 頸部～胸部ヘラケズリ後ヘラミガキ	口辺部～胸部ヘラミガキ	橙色(7.5Y R7/6)

第26号住居址

128-1	土師器杯	10.55 3.8 .	素縁で口辺部は内弯する丸底	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	ヨコナデ	約2/3存 灰白色 (10Y R8/2)
128-2	土師器杯	15.2 4.95 .	外稜口辺を有し口辺部は外反する丸底	口辺部ヨコナデ 底部ヘラミガキ	ヘラミガキ	復原完形 にふい黄 橙色(10Y R7/3)
128-3	黒色土器 把手付盃	8.9 9.4 2.5	口辺部は内傾気味となる平底	口辺部ヨコナデ 肩部～底部ヘラケズリ	口辺部ハケメ 肩部～底部ヘラミガキ	復原完形 にふい黄 橙色(10Y R7/3)
128-4	土師器高杯	13.8 (5.75) —	口辺部は直立気味に立ち上がる	口辺部ヨコナデ 杯部ヘラケズリ	ヘラミガキ	口辺部の一部及び脚部を欠く 浅黄橙色 (7.5Y R8/6)

第27号住居址

131-1	土師器杯	11.2 4.05 .	素縁で口辺部は内弯する丸底	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	ヨコナデ	ほぼ完形 明赤褐色 (5Y R5/6)
131-2	須恵器蓋	3.9 3.0 9.4	口辺部は直立気味となる	天井部回転ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	約1/2存 灰色 (5Y 4/1)
131-3	土師器小型甕	14.7 12.05 .	口辺部は「く」の字状に外反する丸底	口辺部ヨコナデ 肩部～底部ヘラケズリ	ヨコナデ	復原完形 橙色 (5Y R7/6)
131-4	黒色土器高杯	— 8.5 11.3	脚部は「ハ」の字状に開く	杯部～脚部ヘラミガキ	杯部黒色処理 脚部ヘラケズリ 脚裾部ヘラミガキ	口辺部を欠く 灰褐色 (7.5Y R6/2)
131-5	黒色土器高杯	15.85 12.15 10.6	口辺部は内弯気味に立ち上がる 脚部は「ハ」の字状に開く	杯部ヘラナデ 脚部ヘラケズリ	杯部黒色処理 脚部ヘラケズリ	口辺部約1/3 脚裾部約1/6を欠く にふい黄 橙色(10Y R6/4)
131-6	須恵器平瓶	(3.8) 8.8 .	丸底	頸部～胸部ロクロナデ 底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	口辺部を欠く 灰白色 (N7/)
131-7	須恵器壺	— 9.5 .	丸底	肩部～胸部ロクロナデ 底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	灰色(N7/)
131-8	黒色土器高杯	— (12.4) —		脚部ヘラケズリ後ヘラミガキ 脚裾部ヨコナデ	杯部ヘラミガキ黒色 処理 脚部ヘラケズリ	にふい橙色 (7.5Y R7/4)
131-9	黒色土器高杯	— (7.5) —		脚部ヘラケズリ後ヘラミガキ	杯部ヘラミガキ黒色 処理 脚部ヘラケズリ	にふい黄橙色 (10Y R7/4)

第28号住居址

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
134-1	黒色土器高杯	— (8.9) —		脚部ヘラケズリ後ヘラミガキ	杯部ヘラミガキ黒色処理 脚部ヘラケズリ 脚裾部ヨコナデ	にぶい橙色(7.5Y R7/4)
134-2	土師器杯	(3.7) ・	口辺部は内弯気味となる丸底	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	ヨコナデ	灰色(7.5Y 6/1)
134-3	須恵器蓋	・ 3.4 9.1	口辺部は外傾する	天井部ヘラキリ後手持ちヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	約3/4存 青灰色(5B G5/1)

第29号住居址

138-1	須恵器蓋	・ 3.35 15.0	宝珠形つまみを有し内面にかえりを有する	天井部回転ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	約1/2存 灰色(N5/)
138-2	須恵器蓋	・ 2.15 19.0	弯平な宝珠形つまみを有する	天井部回転ヘラケズリ ロクロナデ	天井部仕上げナデ ロクロナデ	体部の約1/3存 暗オリーブ灰色(5G Y4/1)
138-3	須恵器高杯	16.0 5.4 —	外面に稜を有し、口辺部は外反する	口辺部ロクロナデ 杯底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	杯部4/5存 脚部を欠く オリーブ灰色(2.5G Y6/1)
138-4	須恵器高杯	(7.2) — —		ロクロナデ	ロクロナデ	灰色(N6/)
138-5	土師器高杯	— 9.5 (8.8)	脚部は「ハ」の字状に開く	脚部ヘラケズリ後ヘラミガキ 脚裾部ヨコナデ	杯部黒色処理 脚部ヘラケズリ 脚裾部ヨコナデ	杯部を欠く にぶい黄橙色(10Y R7/4)

第30号住居址

141-1	黒色土器杯	13.2 4.1 ・	素縁で口辺部は外傾気味となる丸底	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	復原完形 明赤褐色(5Y R5/8)
141-2	土師器杯	12.6 4.25 ・	外面ににぶい稜を有し、口辺部は外反する丸底	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	ヨコナデ	約1/2弱存 にぶい橙色(5Y R7/3)
141-3	須恵器蓋	5.9 4.45 13.4	口辺部は外傾気味となる	天井部ヘラキリ後回転ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	約1/2存 灰色(N6/)
141-4	須恵器蓋	5.8 4.9 13.7	口辺部は外反する	天井部ヘラキリ後回転ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	約1/3存 黄灰色(2.5Y 4/1)
141-5	須恵器蓋	・ 3.5 10.4	口辺部は外傾気味となる	天井部ヘラキリ後手持ちヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	約2/3存 灰色(10Y 5/1)
141-6	須恵器蓋	3.4 2.8 9.45	口辺部は外傾する	天井部ヘラキリ ロクロナデ	ロクロナデ	ほぼ完形 灰色(N6/)
141-7	須恵器杯	10.15 3.85 6.25	口辺部は外反気味となる	ロクロナデ 底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	約1/2存 黒色(N2/)
141-8	黒色土器高杯	— (7.5) —		脚部ヘラケズリ後ヘラミガキ	杯部ヘラミガキ黒色処理 脚部ヘラミガキ	杯部の約1/2及び脚裾部を欠く 浅黄橙色(10Y R8/4)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
141-9	土師器高杯	— (6.7) —		脚部ヘラケズリ後ヘラミガキ	脚部ヘラケズリ 脚裾部ヨコナデ	にぶい橙色 (5Y R7/4)
141-10	黒色土器高杯	— (8.55) (11.8)		脚部ヘラミガキ	杯部ヘラミガキ 黒色 処理 脚部ヘラケズリ 脚裾部ヨコナデ	にぶい黄橙色 (10Y R7/3)
141-11	須恵器平瓶	5.2 15.95 ・	丸底	口辺部~肩部ロクロ ナデ 胴部~底部回 転ヘラケズリ	ロクロナデ	約1/2存 灰色 (N6/)
141-12	土師器小型甕	13.9 (8.8) —	口辺部は「く」の字状 に外反する	口辺部ヨコナデ 肩部~胴部ヘラケズ リ	口辺部ヨコナデ 胴部ヘラナデ	約1/2存 浅黄色 (2.5Y7/3)
141-13	須恵器長頸壺	— (7.75) —		ロクロナデ	ロクロナデ	灰白色(10Y R 7/1)
141-14	須恵器平瓶	— (5.35) —		ロクロナデ	ロクロナデ	灰白色(N7/)
141-15	須恵器すり鉢	— (3.85) (7.5)	底部は厚い円板状となる 底部には残存部で貫通しない 小孔が10孔認められる	ロクロナデ	ロクロナデ	黄灰色(2.5Y5/1)
141-16	須恵器高杯	— (5.15) (9.4)		脚裾端部は内弯気味 となる	ロクロナデ	灰白色(7.5Y7/1)

第32号住居址

149-1	土師器甕	22.9 31.6 —	口辺部は「く」の字状 に外反する	口辺部ヨコナデ 肩部~底部ヘラケズ リ	口辺部ヨコナデ 肩部~底部ヘラナデ	底部を欠く にぶい 黄橙色(10Y R6/4)
149-2	土師器甕	22.5 32.05 5.3	口辺部は「く」の字状 に外反する	口辺部ヨコナデ 肩部~底部ヘラケズ リ	口辺部ヨコナデ 肩部~底部ヘラナデ	復原完形 明赤褐色 (2.5Y R5/6)
149-3	須恵器蓋	・ 2.0 8.5	宝珠形なつまみを有 する	天井部回転ヘラケズ リ ロクロナデ	ロクロナデ	約2/3存 灰色 (5Y5/1)
149-4	須恵器台 付長頸壺	— (4.8) 11.95	台部は外方へ拡がる	ロクロナデ	ロクロナデ	灰白色(7.5Y8/1)
149-5	須恵器短頸壺	— 19.2 ・	最大径を肩部に有す る 丸底	胴部タタキ後ロクロ ナデ	ロクロナデ	底部及び口辺部を欠 く 灰白色(5Y7/1)

第33号住居址

152-1	黒色土器高杯	— (8.2) —		脚部ヘラケズリ後ヘ ラミガキ	杯部ヘラミガキ 黒色 処理 脚部ヘラケズリ 脚裾部ヨコナデ	にぶい黄橙色 (10Y R7/4) 脚内部 は赤色塗彩される
152-2	土師器高杯	— (6.85) —		脚部ヘラケズリ後ヘ ラミガキ	杯部ヘラミガキ 黒 色処理 脚部ヘラケズリ	にぶい黄橙色 (10Y R6/3)

第34号住居址

156-1	土師器杯	13.0 4.75 4.0	素縁で口辺部は外傾 する	ヘラナデ	ヨコナデ 口辺部斜放射文 底部ラセン文	約1/2存 橙色 (5Y R6/6)
-------	------	---------------------	-----------------	------	---------------------------	-----------------------

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
156-2	黒色土器杯	11.75 4.25 ・	素縁で口辺部は直立 気味に立ち上がる 丸底	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	黒色処理	約1/2存 におい黄 橙色(10Y R7/3)
156-3	土師器杯	12.6 5.7 ・	素縁で口辺部は外傾 気味に立ち上がる 丸底	ヘラミガキ	ヘラミガキ	約3/4存 橙色 (7.5Y7/6)
156-4	須恵器蓋	・ 2.2 8.2	宝珠形なつまみを有する 内面にかえりを有しかえ りは口端部より下方へ突 出する	天井部回転ヘラケズ リ ロクロナデ	ロクロナデ	完形 青灰色 (5P B5/1)
156-5	須恵器杯	7.5 2.3 ・	たちあがりは内傾し 非常に低い 丸底	ロクロナデ 底部ヘラキリ後回転 ヘラケズリ	ロクロナデ	ほぼ完形 青灰色 (5P B6/1)
156-6	須恵器高杯	14.55 (5.0) —	口辺部は外傾気味に 立ち上がる	ロクロナデ	ロクロナデ 底部仕上げナデ	杯部約3/7及び脚部 を欠く 灰色(7.5Y6/1)
156-7	須恵器杯	14.0 4.6 5.3	口辺部は内湾気味に 立ち上がる	ロクロナデ 底部ヘラキリ後手持 ちヘラケズリ	ロクロナデ	約2/3存 灰白色 (5Y7/1)
156-8	黒色土器高杯	— (7.7) (10.5)	脚部は「ハ」の字状に 開く 脚裾部は外反する	脚部ヘラミガキ 脚裾部ヨコナデ	杯部黒色処理 脚部ヘラケズリ 脚裾部ヨコナデ	杯部及び脚裾部の約 1/2を欠く 浅黄橙 色(10Y R8/3)
156-9	黒色土器高杯	— 6.8 8.0	脚部は「ハ」の字状に 開く 脚裾部は外反する	脚部ヘラミガキ 脚裾部ヨコナデ	杯部黒色処理 脚部ヘラケズリ 脚裾部ヨコナデ	杯部を欠く 浅黄橙 色(10Y R8/4)
156-10	黒色土器高杯	— (8.35) —		脚部ヘラケズリ後ヘ ラミガキ	杯部ヘラミガキ 黒 色処理 脚部ヘラケズリ	におい黄橙色 (10Y R7/3)
156-11	黒色土器高杯	— (7.35) —		脚部ヘラケズリ	脚部ヘラケズリ 脚裾部ヨコナデ	橙色(7.5Y R7/6)
156-12	土師器甕	21.7 (19.4) —	口辺部は「く」の字状 に外反する	口辺部ヨコナデ 胴部ハケメ後ヘラケ ズリ	口辺部ヨコナデ 胴部ハケメ	橙色(5Y R7/6)
156-13	須恵器長頸壺	7.3 (7.4) —		ロクロナデ	ロクロナデ	灰色(N6/ 外面に自然釉が付着
156-14	須恵器壺	11.3 (9.4) —	口辺部は「く」の字状 に外反する 口辺部 に一条沈線を施す	口辺部ロクロナデ 胴部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	約1/2存 暗青灰色 (10B G4/1)
156-15	須恵器波臚	— (7.9) ・	丸底	ロクロナデ 胴中央部櫛状工具に よる指突文	ロクロナデ	口辺部を欠く 灰色 (N7/ 外面に自然釉が付着
156-16	須恵器横瓶	12.6 (13.9) —		口辺部ロクロナデ 肩部～胴部タタキ後 ロクロナデ	口辺部ロクロナデ 胴部ヘラナデ	口辺部約1/2存 青 灰色(5P B6/1)

第36号住居址

163-1	土師器杯	10.3 (2.7) ・	素縁で口辺部は直立 気味に立ち上がる 丸底	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	ヨコナデ	約1/2存 橙色 (5Y R7/6)
163-2	土師器杯	12.8 5.45 ・	外稜口辺を有し、口 辺部は僅かに外反す る 丸底	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	約1/3存 淡黄色 (2.5Y8/3) かまど内出土
163-3	土師器小型甕	— (4.0) ・	丸底	ヘラミガキ	ヘラミガキ	におい黄橙色 (10Y R6/3)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
163-4	土師器高杯	14.8 11.0 (11.0)	杯部は内弯気味に立ち上がる。脚部は「ハ」の字状に開き、脚裾部は外反する	杯部ヘラナデ 脚部ヘラケズリ 脚裾部ヨコナデ	杯部ヘラミガキ 脚部ヘラケズリ 脚裾部ヨコナデ	杯部1/2、脚裾部2/3 存 橙色(5Y R7/6)
163-5	土師器小型甕	14.8 20.0 7.6	口辺部は外反し、口辺端部は直立気味となる	口辺部～肩部ヨコナデ 胴部～底部ヘラナデ	口辺部ヨコナデ 頸部～底部ヘラナデ	約3/4存 赤橙色 (10R6/6) 胎土に金雲母を含む
163-6	須恵器平瓶	— (10.7) 6.8	肩部に稜を有する 底部はあげ底気味となる	口辺部～胴下部クロ ロナデ 底部回転ヘラケズリ	クロロナデ	口辺部を欠く 灰白色(5Y7/1)
163-7	土師器甕	19.6 31.0 3.5	口辺部は外反するが 外反度は弱い 最大 径を口縁部に有する	口辺部ヨコナデ 頸部～底部ヘラケズ リ	口辺部ヨコナデ 頸部～底部ヘラナデ	復原完形 にふい黄 橙色(10Y R7/4) かまど内出土

第37号住居址

167-1	土師器小型甕	16.4 16.9 ・	口辺部は「く」の字状に 外反し、口縁端部は直 立気味となる 丸底	口辺部ヨコナデ 頸部～胴部ハケメ	口辺部ハケメ	略1/2存 にふい黄 橙色(10Y R7/4)
167-2	須恵器蓋	・ 3.45 15.4	扁平な宝珠形つまみ を有する	天井部回転ヘラケズ リ クロロナデ	クロロナデ	約2/3存 灰色 (N4/)
167-3	須恵器杯	17.0 4.25 ・	外面に稜を有し、口 辺部は外反する 丸底	クロロナデ 底部ヘラキリ後手持 ちヘラケズリ	クロロナデ	約2/5存 灰白色 (5Y7/1)
167-4	須恵器 高台付杯	13.2 5.35 7.8	口辺部は外傾する	クロロナデ 底部ヘラキリ後高台 を貼付する	クロロナデ	約3/4存 青灰色 (10B G5/1)
167-5	黒色土器鉢	21.9 9.25 ・	口辺部は外反する 丸底	口辺部ヨコナデ 胴部～底部ヘラケズ リ	黒色処理	約1/2存 赤褐色 (2.5Y R4/8)
167-6	須恵器壺	— 17.9 —	肩の張った器形を呈 し、最大径を胴中央 部に有する	口辺部～肩部クロロ ナデ 胴部タタキ 底部回転ヘラケズリ	クロロナデ	胴部1/2及び口辺部、底 部を欠く 灰白色(N7/) 肩部に自然釉が付着
167-7	須恵器盤	23.6 4.0 17.5	口辺部は外傾する 高台部に4孔を有す る	クロロナデ 底部回転ヘラケズリ 後高台を付す	クロロナデ	略完形 灰色(N7/)

第40号住居址

174-1	須恵器杯	14.6 4.95 5.0	口辺部は僅かに外反 する	クロロナデ 底部ヘラキリ	クロロナデ	完形 暗青灰色 (5B G4/1)
174-2	須恵器杯	12.9 4.45 6.6	口辺部は外反する	クロロナデ 底部ヘラキリ後手持 ちヘラケズリ	クロロナデ	約3/4存 オリーブ 灰色(2.5G Y5/1)
174-3	須恵器杯	13.0 4.85 4.4	口辺部は外反する	クロロナデ	クロロナデ	ほぼ完形 灰白色 (10Y7/1)

第41号住居址

177-1	土師器杯	14.0 5.15 ・	外稜口辺を有し、口 辺部は直立気味とな る 丸底	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	ヨコナデ	約3/4存 橙色 (7.5Y R6/6)
177-2	土師器小型甕	11.0 7.75 3.6	口辺部は「く」の字状 に外反する	口辺部ヨコナデ 肩部～底部ヘラケズ リ後ヘラナデ	口辺部ヨコナデ 肩部～底部ヘラナデ	約1/2存 にふい橙 色(7.5Y R7/4)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
177-3	須恵器蓋	4.5 3.75 11.4	外面に稜を有し、口辺部は外傾気味となる	天井部ヘラキリ ロクロナデ	ロクロナデ	約5/6存 灰色 (5Y5/1)
177-4	土師器甕	18.6 (19.3) —	口辺部は「く」の字状に外反する	口辺部ヨコナデ 肩部～胴部ヨコナデ 後ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 肩部～胴部ヘラナデ	灰黄色(2.5Y7/2)

第42号住居址

180-1	黒色土器杯	12.6 3.6 (5.4)	口辺部は内弯気味に立ち上がる 平底	ロクロナデ 糸切り	黒色処理	約1/2存 におい黄 橙色(10Y R7/4)
-------	-------	----------------------	----------------------	--------------	------	----------------------------

第43号住居址

185-1	須恵器蓋	・ 3.0 14.1	扁平な宝珠形つまみを有する 内面にかえりを有する	天井部回転ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	約1/2存 暗灰色 (N3/)
185-2	須恵器蓋	・ 3.75 15.7	扁平な宝珠形つまみを有する 内面にかえりを有する	天井部回転ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	約1/2存 黒色 (N2/) 外面に自然釉が付着
185-3	須恵器杯	15.0 4.35 6.3	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部ヘラキリ	ロクロナデ	完形 灰色(N6/)
185-4	須恵器杯	9.2 3.3 5.4	口辺部は外傾する	ロクロナデ 底部ヘラキリ後回転 ヘラケズリ	ロクロナデ	完形 緑灰色 (7.5G Y5/1) 底部にヘラ 記号 かまど内出土
185-5	土師器甕	19.6 27.4 6.7	口辺部は「く」の字状に外反する	口辺部ヨコナデ 肩部～底部ヘラミガキ	ヘラミガキ	約1/2存 黄橙色 (7.5Y R7/8)
185-6	土師器甕	19.9 33.15 4.8	口辺部は「く」の字状に外反する	口辺部ヨコナデ 肩部～底部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 肩部～底部ヘラナデ	約3/4存 浅黄橙色 (7.5Y R8/3) かまど内出土
185-7	土師器甕	21.8 19.15 —	口辺部は「く」の字状に外反する	口辺部ヨコナデ 肩部～底部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 肩部～底部ヘラナデ	におい橙色 (7.5Y R6/4) かまど内出土
185-8	土師器甕	22.0 (10.5) —	最大径は口縁部に有するものと思われる	口辺部ヨコナデ 肩部～底部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 肩部～底部ヘラナデ	淡黄色(2.5Y8/4)
185-9	土師器甕	(21.2) 31.8 (4.0)	口辺部は「く」の字状に外反する 平底	口辺部ヨコナデ 肩部～底部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 肩部～底部ヘラナデ	におい橙色 (7.5Y R7/4) 胴部 外面にススが付着

第44号住居址

188-1	青磁碗	— (1.9) 5.2	円板状に打ち欠く	ロクロ整形 削り出し高台 高台の外底には釉なし	ロクロ整形	灰白色(10Y R7/1)
-------	-----	-------------------	----------	-------------------------	-------	---------------

第45号住居址

191-1	土師器小型甕	10.8 9.9 2.2	口辺部は外反し、最大径を胴中央部に有する	口辺部ヨコナデ 肩部～底部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 肩部～底部ヘラナデ	約2/3存 明褐色 (7.5Y R5/6)
-------	--------	--------------------	----------------------	-----------------------	----------------------	--------------------------

第46号住居址

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
194-1	須恵器蓋	4.3 12.4	口辺部は内弯気味となる	天井部ヘラキリ ロクロナデ	ロクロナデ	約3/4存 灰色 (5Y6/1)

第47号住居址

199-1	土師器 高台付杯	9.8 3.95 (5.2)	口辺部は外傾気味に立ち上がる	ロクロナデ	ロクロナデ	略完形 台裾部を欠く 浅黄橙色 (7.5Y R8/4)
199-2	土師器小型甕	12.2 11.55	口辺部は「く」の字状に外反するが外反度は弱い 丸底	口辺部ヨコナデ 肩部～底部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 肩部～底部ヘラナデ	約2/3存 橙色 (2.5Y R6/6)
199-3	土師器甕	24.8 36.15 4.6	最大径を口縁部に有する	口辺部ヨコナデ 肩部～底部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 肩部～底部ヘラナデ	復原後はほぼ完形 浅黄橙色(10Y R8/4)

第49号住居址

202-1	土師器甕	19.6 6.8 —	口辺部は「く」の字状に外反する	口辺部ヨコナデ 頸部～胴部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 頸部～胴部ヘラナデ	浅黄橙色 (7.5Y R8/3)
-------	------	------------------	-----------------	-----------------------	----------------------	---------------------

第52号住居址

207-1	土師器杯	11.8 4.5 —	外稜口辺を有し、口辺部は僅かに外反する 丸底	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	約3/4存 明赤褐色 (2.5Y R5/8)
-------	------	------------------	------------------------	--------------------	-------	---------------------------

第16号掘立柱建物址

273-1	黒色土器杯	(13.8) 3.95 6.1	口辺部は僅かに外反する	ロクロナデ 糸切り	ヘラミガキ 黒色処理	口辺部の約3/4を欠くに ふい黄橙色(10Y R7/3)
-------	-------	-----------------------	-------------	--------------	---------------	---------------------------------

第20号掘立柱建物址

273-3	土師器杯	11.3 3.3 4.2	口辺部は外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	ほぼ完形 明赤褐色 (5Y R5/6)
-------	------	--------------------	----------	--------------	-------	------------------------

第1号井戸址

276-1	須恵器蓋	2.6 2.7 11.6	扁平なつまみを有する	天井部回転ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	約4/5存 暗オリーブ灰色(2.5G Y4/1) 外面に自然釉が附着
276-2	須恵器杯	12.8 (5.3) 6.4	口辺部は外傾気味となる	ロクロナデ 底部ヘラキリ後手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	約1/2存 灰色 (N5/)
276-3	須恵器 高台付杯	14.8 (4.8) 11.1	口辺部は外傾気味となる	ロクロナデ 底部ヘラキリ後回転ヘラケズリ 高台を貼付する	ロクロナデ	約2/3存 灰色 (7.5Y6/1)
276-4	土師器甕	23.5 7.8 —	口辺部は「く」の字状に外反し、口縁端部はつまみあげた状態を呈する	口辺部ヨコナデ 肩部～胴部ヨコナデ後ヘラケズリ 胴部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 胴部ヘラナデ	橙色(5Y R7/6)

第1号溝址

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
277-1	土師器杯	11.65 3.2 4.4	口辺部は外反気味となる	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約2/3存 橙色 (5Y R6/6)
277-2	土師器杯	11.6 3.35 4.5	口辺部は外反気味となる	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約3/4存 におい橙 色(5Y R7/4)
277-3	土師器杯	11.85 3.4 5.1	口辺部は僅かに外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約1/2存 橙色 (5Y R6/6)
277-4	土師器杯	12.1 3.35 4.8	口辺部は外傾する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約3/4存 におい橙 色(7.5Y R7/4)
277-5	土師器杯	10.9 3.25 5.1	口辺部は外傾する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約3/4存 橙色(5Y R7/6)
277-6	土師器杯	12.85 3.4 6.25	口辺部は内弯気味となる	ロクロナデ 底部糸切り後外周手 持ちヘラケズリ	ロクロナデ	完形 橙色 (7.5Y R7/6) 外面に「生」の墨書
277-7	土師器杯	11.9 3.7 4.8	口辺部は内弯気味となる	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	ほぼ完形 橙色 (5Y R6/8)
277-8	土師器杯	11.5 3.75 5.0	口辺部は内弯気味となる	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約1/2存 橙色 (7.5Y R7/6)
277-9	土師器杯	11.5 3.75 5.0	口辺部は内弯気味となる	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約2/3存 におい橙 色(5Y R7/3)
277-10	土師器杯	12.2 3.6 4.9	口辺部は外傾する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	口辺部約1/4存 浅 黄橙色(10Y R8/4)
277-11	土師器杯	11.4 3.9 5.0	口辺部は内弯気味に 立ち上がる	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約2/5存 浅黄橙色 (2.5Y 7/3)
277-12	土師器杯	12.85 3.9 5.7	口辺部は外傾気味となる	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約3/4存 におい橙 色(7.5Y R6/4)
277-13	黒色土器杯	12.0 3.8 5.0	口辺部は内弯気味となる	ロクロナデ 糸切り	黒色処理 暗文	約2/3存 橙色 (5Y R6/6)
277-14	黒色土器杯	13.05 3.45 6.0	口辺部は外傾する	ロクロナデ 糸切り	黒色処理	約1/2存 におい橙 色(7.5Y R7/4)
277-15	黒色土器杯	13.35 4.1 6.0	口辺部は外傾する	ロクロナデ 糸切り	ヘラミガキ 黒色処理	約2/3存 浅黄橙色 (7.5Y R8/6) 墨書文字不明
277-16	黒色土器杯	16.1 5.45 5.75	口辺部は外傾する	ロクロナデ 糸切り	黒色処理	約1/2存 明褐灰色 (7.5Y R7/2)
277-17	黒色土器杯	16.2 5.2 6.6	口辺部は外傾する	ロクロナデ 底部糸切り後回転ヘ ラケズリ	黒色処理	約1/4存 におい黄 橙色(10Y R6/4)
277-18	土師器 高台付杯	14.2 5.1 7.2	口辺部は僅かに外反する	ロクロナデ 底部糸切り後高台を 貼付する	ロクロナデ	約1/2存 明黄褐色 (10Y R7/6)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
277-19	土師器 高台付杯	13.6 4.75 7.8	口辺部は僅かに外反する	ロクロナデ 底部糸切り後高台を貼付する	ロクロナデ	約3/4存 におい橙色(5Y R6/4)
277-20	土師器 高台付杯	14.4 6.1 7.9	口辺部は僅かに外反する	ロクロナデ 底部糸切り後高台を貼付する	ロクロナデ	ほぼ完形 橙色(5Y R7/6)
277-21	土師器 高台付杯	13.8 5.55 7.8	口辺部は外傾する	ロクロナデ 底部糸切り後高台を貼付する	ロクロナデ	約2/3存 におい橙色(7.5Y R7/3)
277-22	黒色土器 高台付杯	15.25 5.55 7.8	口辺部は僅かに外反する	ロクロナデ 底部糸切り後高台を貼付する	黒色処理	約2/3存 明黄褐色(10Y R7/6)
277-23	黒色土器 高台付杯	14.85 6.25 7.1	口辺部は内弯気味となる	ロクロナデ 底部糸切り後高台を貼付する	黒色処理	約2/3存 浅黄褐色(7.5Y R8/6)
277-24	黒色土器 高台付杯	18.75 5.6 8.5	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部糸切り後高台を貼付する	ヘラミガキ 黒色処理	口辺部の約1/4存 浅黄褐色(10Y R8/3) 墨書文字不明
277-25	黒色土器 高台付杯	19.0 (6.75) (4.6)	口辺部は外傾する	ロクロナデ 底部糸切り後高台を貼付する	黒色処理	杯部約1/3及び高台部を欠く 淡橙色(5Y R8/4)
277-26	土師器 高台付杯	— (2.6) (5.45)		ロクロナデ 底部糸切り後高台を貼付する	ロクロナデ	浅黄褐色(7.5Y R8/6)
277-27	土師器 高台付皿	10.9 3.8 7.7	口辺部は僅かに外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約2/3存 橙色(5Y R7/6)
277-28	須恵器杯	13.5 4.3 5.95	口辺部は僅かに外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約1/2存 灰白色(5Y 7/2)
277-29	須恵器 高台付皿	13.2 3.1 5.55	口辺部は僅かに外反する	ロクロナデ 底部糸切り後高台を貼付する	ロクロナデ	約1/2存 灰色(5Y 6/1)
277-30	須恵器蓋	— (1.95) —	扁平な宝珠形つまみを有する	天井部回転ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	口辺部を欠く 灰白色(N7/) 転用硯?
277-31	須恵器杯	— (7.5) 7.4		ロクロナデ 底部ヘラキリ後手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	口辺部を欠く 橙色(5Y R7/6)
277-32	灰釉陶器 長頸壺	— (10.0) —		ロクロナデ	ロクロナデ	灰白色(N7/) 頸部に自然釉が付着
277-33	土師器杯	13.15 3.6 (5.3)	口辺部は内弯気味となる	ロクロナデ 底部糸切り後手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	略1/2存 橙色(7.5Y R6/6) 墨書文字不明
277-34	黒色土器 高台付皿	(13.1) 2.9 6.0	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部糸切り後高台を貼付する	ヘラミガキ 黒色処理	口辺部約2/3を欠く 橙色(5Y R7/6) 外面に「而」の墨書
277-36	黒色土器 高台付皿	(13.1) (2.4) —	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部糸切り後高台を貼付する	ヘラミガキ 黒色処理	略1/2存 におい橙色(7.5Y R7/4) 墨書文字不明
277-37	黒色土器 高台付杯	— (4.5) 7.1		ロクロナデ 底部糸切り後高台を貼付する	暗文 黒色処理	口辺部を欠く におい橙色(7.5Y R7/4) 外面に「十」の墨書 もう1文字不明
277-38	黒色土器杯	(1.95) 5.3		ロクロナデ 底部糸切り後外周手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	口辺部を欠く におい橙色(7.5Y R7/4) 外面に「木」もしくは「水」の墨書

第2号溝址

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
280-1	土師器杯	(10.9) (3.7) 4.8	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約2/3存 橙色 (5Y R6/6)
280-2	土師器杯	12.9 3.6 5.8	口辺部は内弯気味に 立ち上がる	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	ほぼ完形 橙色 (5Y R6/6) 外面に「令」の墨書
280-3	土師器 高台付杯	(13.3) 6.2 7.3	口辺部は内弯気味に 立ち上がる	ロクロナデ 底部糸切り後高台を 貼付する	ロクロナデ	約2/3存 にふい黄 橙色(10Y R7/3)
280-4	土師器 高台付杯	— (2.8) 6.8		ロクロナデ 底部糸切り後高台を 貼付する	ロクロナデ	にふい黄橙色 (7.5Y R7/4)
280-5	須恵器杯	14.3 (4.0) 6.0	口辺部は外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約2/3存 灰色 (5Y6/1)

第3号溝址

283-1	土師器杯	10.7 2.35 4.4	口辺部は内弯気味に 立ち上がる	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約3/5存 にふい黄 橙色(10Y R7/2)
283-2	土師器杯	10.7 3.1 4.3	口辺部は僅かに外反 する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約1/2存 にふい黄 橙色(10Y R6/4)
283-3	土師器杯	11.7 3.3 5.2	口辺部は外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約4/5存 橙色 (5Y R6/8)
283-4	土師器杯	11.3 3.6 5.7	口辺部は僅かに外反 する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約1/2存 にふい黄 橙色(10Y R7/4)
283-5	土師器杯	11.1 3.25 4.85	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部糸切り後外周へ ラナデ	ロクロナデ	復原完形 橙色 (7.5Y R7/6)
283-6	土師器杯	11.0 3.55 5.2	口辺部は外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約1/2存 橙色 (5Y R6/6)
283-7	土師器杯	11.8 3.5 5.15	口辺部は僅かに外反 する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約2/3存 橙色 (7.5Y R7/6)
283-8	土師器杯	11.7 3.7 5.25	口辺部は外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約3/4存 にふい橙 色(5Y R7/4)
283-9	土師器杯	12.65 3.75 5.1	口辺部は外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約3/5存 橙色 (7.5Y R7/6)
283-10	土師器杯	11.6 3.85 4.7	口辺部は外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約2/3存 橙色 (7.5Y R7/6)
283-11	土師器杯	10.7 3.7 5.3	口辺部は外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約1/2存 橙色 (5Y R7/6)
283-12	土師器杯	12.15 3.65 5.4	口辺部は僅かに外反 する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	復原完形 にふい橙 色(7.5Y R6/4)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
283-13	土師器杯	10.8 3.7 3.9	口辺部は僅かに外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	復原完形 橙色 (5Y R6/6)
283-14	土師器杯	11.95 3.7 4.9	口辺部は外傾する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	復原後ほぼ完形 橙色 (5Y R7/6)
283-15	土師器杯	12.4 3.7 6.0	口辺部は内弯気味に立ち上がる	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	復原完形 橙色 (5Y R6/6)
283-16	土師器杯	12.4 3.9 5.3	口辺部は外傾する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約1/2存 明褐色 (7.5Y R5/6)
283-17	土師器片口	11.6 3.35 5.3	口辺部は外傾する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約2/3存 におい橙色 (7.5Y R7/4)
283-18	土師器杯	11.4 3.7 4.2	口辺部は外傾する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約1/2存 橙色 (7.5Y R6/6)
283-19	土師器杯	10.7 3.6 4.15	口辺部は僅かに外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約1/2存 におい褐色 (7.5Y R5/3)
283-20	土師器杯	11.55 3.75 6.0	口辺部は僅かに外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約1/2存 橙色 (5Y R7/6)
283-21	土師器杯	11.8 4.0 4.7	口辺部は僅かに外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約5/6存 橙色 (5Y R6/6)
283-22	土師器杯	11.9 4.0 5.1	口辺部は外傾する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約3/5存 におい橙色 (5Y R7/4)
283-23	土師器杯	11.8 3.9 6.2	口辺部は外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約3/4存 橙色 (5Y R7/6)
283-24	土師器杯	11.6 3.95 6.1	口辺部は僅かに外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約1/3存 におい橙色 (7.5Y R7/3)
283-25	土師器杯	12.4 4.3 5.0	口辺部は僅かに外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	ほぼ完形 橙色 (7.5Y R7/6)
283-26	土師器杯	11.8 3.4 4.95	口辺部は僅かに外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約1/2存 黄橙色 (7.5Y R8/8)
283-27	土師器杯	13.75 4.35 5.3	口辺部は僅かに外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約2/3存 におい橙色 (7.5Y R7/4)
283-28	土師器杯	11.6 3.1 5.6	口辺部は僅かに外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	完形 におい黄橙色 (10Y R7/4)
283-29	黒色土器杯	12.55 3.8 6.35	口辺部は僅かに外反する	ロクロナデ 糸切り	黒色処理	約2/3存 浅黄橙色 (7.5Y R8/4)
283-30	黒色土器杯	12.15 3.7 5.35	口辺部は外傾する	ロクロナデ 糸切り	黒色処理 暗文	約3/4存 明赤褐色 (2.5Y R5/6) 外面に「令」の墨書
283-31	黒色土器杯	13.3 4.2 4.6	口辺部は僅かに外反する	ロクロナデ 糸切り	黒色処理	約2/3存 橙色 (7.5Y R7/6)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
283-32	黒色土器杯	11.45 2.8 5.0	口辺部は僅かに外反する	ロクロナデ 糸切り	黒色処理	復原完形 橙色 (5Y R7/6)
283-33	土師器 高台付杯	14.0 5.5 6.8	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部糸切り後高台を 貼付する	ロクロナデ	約2/3存 浅黄橙色 (7.5Y R8/3)
283-34	土師器 高台付杯	13.25 5.95 7.3	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部糸切り後高台を 貼付する	ロクロナデ	復原完形 橙色 (5Y R6/8)
283-35	土師器 高台付杯	14.1 5.9 7.0	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部糸切り後高台を 貼付する	ロクロナデ	約1/2存 淡赤橙色 (2.5Y R7/4)
283-36	土師器 高台付杯	13.8 5.6 7.7	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部糸切り後高台を 貼付する	ロクロナデ	約3/4存 橙色 (7.5Y R7/6)
283-37	土師器 高台付杯	13.65 6.0 7.5	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部糸切り後高台を 貼付する	ロクロナデ	約2/3存 橙色 (7.5Y R7/6)
283-38	土師器 高台付杯	13.7 5.9 7.3	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部糸切り後高台を 貼付する	ロクロナデ	約1/2存 にぶい橙 色(7.5Y R7/3)
283-39	土師器 高台付杯	13.75 5.7 7.3	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部糸切り後高台を 貼付する	ロクロナデ	約2/3存 にぶい橙 色(7.5Y R7/4)
283-40	土師器 高台付杯	13.1 4.9 7.1	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部糸切り後高台を 貼付する	ロクロナデ	約4/5存 にぶい黄 橙色(10Y R7/4)
283-41	土師器 高台付杯	14.2 5.15 6.7	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部糸切り後高台を 貼付する	ロクロナデ	約1/3存 にぶい橙 色(7.5Y R6/4)
283-42	土師器 高台付杯	13.5 5.6 6.85	口辺部は僅かに外反する	ロクロナデ 底部糸切り後高台を 貼付する	ロクロナデ	約1/2存 にぶい橙 色(5Y R7/4)
283-43	黒色土器 高台付杯	15.8 4.8 7.0	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部糸切り後高台を 貼付する	黒色処理	約1/2存 にぶい橙 色(7.5Y R6/4)
283-44	黒色土器 高台付杯	14.6 6.6 7.2	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部糸切り後高台を 貼付する	黒色処理 暗文	約1/3存 浅黄橙色 (7.5Y R8/4)
283-45	黒色土器 高台付杯	14.6 5.65 7.6	口辺部は僅かに外反する	ロクロナデ 底部糸切り後高台を 貼付する	黒色処理	約1/2存 橙色 (5Y R6/6) 墨書文字不明
283-46	土師器 高台付杯	11.6 4.1 7.0	口辺部は外傾する	ロクロナデ 底部糸切り後高台を 貼付する	ロクロナデ	約5/6存 黄橙色 (7.5Y R8/8)
281-1	土師器 高台付杯	13.95 (4.95) —	口辺部は僅かに外反する	ロクロナデ 底部糸切り後高台を 貼付する	ロクロナデ	約1/2存 にぶい橙 色(5Y R6/4)
281-2	須恵器杯	13.85 5.15 6.0	口辺部は内弯気味に 立ち上がる	ロクロナデ 底部ヘラキリ後手持 ちヘラケズリ	ロクロナデ 底部仕上げナデ	約3/4存 灰白色 (5Y 7/2)
281-3	須恵器杯	12.6 3.3 4.95	口辺部は外傾する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約2/3存 緑灰色 (10G Y5/1)
281-4	須恵器杯	13.6 4.0 5.95	口辺部は外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約1/2存 灰白色(N 8/)

第 6 号溝址

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
284-1	土師器杯	12.0 4.0 5.2	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約3/5存 におい橙 色(7.5Y R6/4)

第 7 号溝址

286-1	土師器杯	11.8 4.25 4.8	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約1/6存 におい黄 橙色(10Y R7/4)
286-2	灰釉高台付杯	— 2.2 7.1		ロクロナデ 底部糸切り後高台を 貼付する	ロクロナデ	口辺部を欠く にお い黄橙色 (10Y R7/4)

第 8 号溝址

287-1	土師器杯	10.8 3.65 5.0	口辺部は僅かに外反 する 平底	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約2/3存 におい橙 色(7.5Y R6/4)
287-2	土師器杯	12.2 3.6 5.9	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約2/3存 におい橙 色(7.5Y R6/4)
287-3	土師器杯	11.9 3.85 5.2	口辺部は僅かに外反 する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約2/3存 橙色 (5Y R6/8)

第 2 号土坑

289-1	黒色土器杯	12.3 4.6 .	口辺部は素縁で内弯 気味に立ち上がる	口辺部ヨコナデ 底部 ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	約3/4存 淡黄色 (2.5Y 8/3)
289-2	須恵器蓋	. 4.0 9.8	口辺部は外傾する	天井部ヘラキリ後回 転ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	ほぼ完形 灰色 (N6/)

遺構外

292-1	土師器杯	10.6 3.55 4.95	口辺部は外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	復原完形 橙色 (7.5Y R7/6)
292-2	土師器杯	10.5 3.15 5.4	口辺部は外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	口辺部約1/4を欠く におい褐色 (7.5Y R6/3)
292-3	土師器杯	10.3 3.45 5.0	口辺部は外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約3/4存 におい黄 橙色(10Y R6/4)
292-4	土師器杯	10.6 3.6 5.45	口辺部は外反気味と なる	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	約2/3存 橙色 (7.5Y R6/6)
292-5	黒色土器杯	12.15 3.75 5.6	口辺部は僅かに外反 する	ロクロナデ 糸切り	黒色処理	約1/2存 におい橙 色(7.5Y R7/4)
292-6	土師器杯	12.4 3.9 7.0	口辺部は外反する	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ 暗文	約1/3存 におい橙 色(7.5Y R7/4)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
292-7	土師器 高台付杯	14.45 5.95 8.5	口辺部は内弯気味となる	ロクロナデ 底部糸切り後高台を貼付する	ロクロナデ	ほぼ完形 橙色 (5Y R7/6)
292-8	須恵器杯	10.9 3.8 8.25	口辺部は外傾する	ロクロナデ ヘラキリ後手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	約1/2存 黄灰色 (2.5Y 6/1)
292-9	土師器杯	11.5 4.2 ・	口辺部は素縁で内弯気味に立ち上がる丸底	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	ヨコナデ	約2/3存 にふい橙色 (5Y R6/4)

下柏原遺跡

第1号住居址

297-1	黒色土器杯	13.6 3.4 6.9	口辺部は僅かに外反する	ロクロナデ 底部糸切り後回転ヘラケズリ	黒色処理	約2/3存 橙色 (5Y R6/6)
-------	-------	--------------------	-------------	------------------------	------	-----------------------

遺構外

298-1	須恵器蓋	・ (2.3) —	扁平なつまみを有す	天井部回転ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	にふい黄橙色 (10Y R6/3)
-------	------	-----------------	-----------	---------------------	-------	----------------------

関口B遺跡

第5号土坑

291-1	土師器杯	11.7 3.3 6.2	口辺部は内弯気味に立ち上がる平底	ロクロナデ 糸切り	ロクロナデ	完形 にふい橙色 (7.5Y R7/4)
-------	------	--------------------	------------------	--------------	-------	-------------------------

第7号住居址

65-3	土師器 手づくね	6.2 5.75 4.5	口辺部は内弯する		ヨコナデ	復原後ほぼ完形 橙色(5Y R6/6)
------	-------------	--------------------	----------	--	------	------------------------

関口 A・B 遺跡出土材の樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試料

試料は関口 A・B 遺跡から検出された材ほかの 98 試料である (表 1)。

関口 A・B 遺跡は、長野県小諸市内を流れる繰矢川の南側の丘陵上 (標高 695m) に立地しており、古墳時代後期～平安時代住居址が多数検出された。試料中には種子なども含まれており、これらは同定対象から除外した。また 1 試料中に 2 種類の材が認められた試料もあり、最終的に樹種同定は 89 試料 93 点について行った。材は何れも住居址床面やかまどから出土した炭化材で、建築用材、燃料材と考えられているが、出土状況などが不明なため詳細については解らない。

2. 方法

試料を乾燥させたのち木口・柾目・板目の 3 断面を作製、走査型電子顕微鏡 (無蒸着・反射電子検出型) で観察・同定した。同時に電子顕微鏡写真図版 (図版 71～75) も作製した。

3. 結果

種類不明のものや、小片や保存状態が悪いため同定が行えなかった 7 点を除く 86 点が、以下の 14 種類 (Taxa) に同定された。1 試料中に 2 種類の材が認められたものは試料番号の後ろに a, b を付け、表中に示した。材の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質は、次のようなものである。なお、各 Taxa の科名・学名・和名およびその配列は、基本的に「日本の野生植物 木本 I・II」(1989) にしたがった。また、一般的な性質などについては、「木の事典 第 1 巻～第 17 巻」(1979～1982) も参考にした。

・モミ属の一種 (*Abies* sp.) マツ科

早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は薄く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はないが、傷害樹脂道が認められることがある。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は粗く、末端壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型 (Taxodioid) で 1～4 個。放射組織は単列、1～20 細胞高。

モミ属には、モミ (*Abies firma*)、ウラジロモミ (*A. homolepis*)、アオモリトドマツ (*A. mariesii*)、シラベ (*A. veitchii*)、アカトドマツ (*A. sachalinensis*) の 5 種があり、アカトドマツを除く 4 種はいずれも日本特産種である。モミは本州 (秋田・岩手県以南)・四国・九州の低地～山地

に、ウラジロモミは本州中部（福島県以南）・紀伊半島・四国の山地～亜高山帯に、アオモリトドマツは本州（福島県以北）の亜高山～高山帯に、シラベは本州中部（福島県以南）・奈良県・四国に、アカトドマツは北海道に分布する常緑高木である。モミを除いては山地～高山・寒冷地に生育する。モミの材はやや軽軟で、強度は小さく、割裂性は大きい。加工は容易で、保存性は低い。棺や卒塔婆など葬祭具に用いられるほか、建具・器具・家具・建築材など各種の用途が知られている。

・スギ (*Cryptomeria japonica*) スギ科

早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁高はスギ型 (Taxodioid) で2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

スギは、本州・四国・九州に自生する常緑高木で、また各地で植栽・植林される。国内では植林面積第一位の重要樹種であり、長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。樹皮は屋根葺用とされ、葉は線香・抹香の原料にもなる。

・ヒノキ属の一種 (*Chamaecyparis* sp.) ヒノキ科

早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞は晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型 (Cupressoid) で1～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

ヒノキ属には、ヒノキ (*Chamaecyparis Obtusa*) とサワラ (*C. pisifera*) の2種がある。ヒノキは本州（福島県以南）・四国・九州に分布し、また各地で植栽される常緑高木で、国内ではスギに次ぐ植林面積を持つ重要樹種である。材はやや軽軟で加工は容易、割裂性は大きい、強度・保存性は高い。建築・器具材など各種の用途が知られている。サワラは本州（岩手県以南）・九州に自生し、また植栽される高木で多くの園芸品種がある。材は軽軟で割裂性は大きく、加工も容易、強度的にはヒノキに劣るが耐水性が高いため、樽や桶にするほか各種の用途がある。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris* sp.) ブナ科

環孔材で孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じのち漸減しながら放射状に配列する。大道管は管壁は厚く、横断面では円形、小道管は管壁は中庸～厚く、横断面では角張った円形、ともに単独。単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと同組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。柔細胞はしばしば結晶を含む。年輪界は明瞭。

クヌギ節は、コナラ亜属(落葉ナラ類)の中で、果実(いわゆるドングリ)が2年目に熟するグループで、クヌギ(*Quercus acutissima*)とアベマキ(*Q. variabilis*)の2種がある。クヌギは本州(岩手・山形県以南)・四国・九州に、アベマキは本州(山形・静岡県以西)・四国・九州(北部)に分布するが、中国地方に多い。クヌギは樹高15mになる高木で、材は重硬である。古くから薪炭材として利用され、人里近くに萌芽林として造林されることも多く、薪炭材としては国産材中第一の重要材である。このほかに器具・杭材・楳木などの用途が知られる。樹皮・果実はタンニン原料となり、果実は染料・飼料ともなった。アベマキはクヌギによく似た高木で、樹皮の Cork 層が発達して厚くなる。材質はクヌギに似るが、さらに重い。用途もクヌギと同様であるが、樹皮が厚いため薪材にはむかず、炭材としてもクヌギ・コナラより劣るとされる。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種 (*Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Prinus* sp.) ブナ科

環孔材で孔圏部は1~2列、孔圏外で急激に管径を減じのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は管壁は厚く、横断面では円形~楕円形、小道管は管壁は中庸~薄く、横断面では多角形、ともに単独。単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状~網目状となる。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと同複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。柔細胞はしばしば結晶を含む。年輪界は明瞭。

コナラ節は、コナラ亜属(落葉ナラ類)の中で、果実(いわゆるドングリ)が1年目に熟するグループで、モンゴリナラ(*Quercus mongolica*)とその変種ミズナラ(*Q. mongolica* var. *grosseserrata*)、コナラ(*Q. serrata*)、ナラガシワ(*Q. aliena*)、カシワ(*Q. dentata*)といくつかの変・品種を含む。モンゴリナラは北海道・本州(丹波地方以北)に、ミズナラ・カシワは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州(岩手・秋田県以南)・四国・九州に分布する。コナラは樹高20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・楳材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギ(*Q. acutissima*)に次ぐ優良材である。枝葉を緑肥としたり、虫えいを染料とすることもある。

・ケヤキ (*Zelkova serrata*) ニレ科

環孔材で孔圏部は1~2列、孔圏外で急激に管径を減じのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。大道管は管壁は厚く、横断面では円形~楕円形、単独、小道管は管壁厚は中庸~薄く、横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1~10細胞幅、1~30細胞高であるが、時に60細胞高を越える。しばしば結晶を含む。柔組織は周囲状。年輪界はやや不明瞭。

ケヤキは本州・四国・九州の谷沿いの肥沃地などに自生し、また屋敷林や並木として植栽される落葉高木で、時に樹高50mにも達する。材はやや重硬で、強度は大きい、加工は困難ではな

く、耐朽性が高く、木理が美しい。建築・造作・器具・家具・機械・彫刻・薪炭材など各種の用途が知られ、国産広葉樹材の中で最良のものの一つに挙げられる。

・オニグルミ (*Juglans ailanthifolia*) クルミ科

散孔材で年輪界付近でやや急に管径を減少させる。管孔は単独および2～4個が複合、横断面では楕円形、管壁は薄い。道管は単穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列、放射組織との間では網目状となる。放射組織は同性～異性Ⅲ型、1～4細胞幅、1～40細胞高。柔組織は短接線状、周囲状および散在状。年輪界は明瞭。

オニグルミは、北海道から九州までの川沿いなどに生育する落葉高木である。材の硬さは中程度、加工は容易で狂いが少なく、保存性は低い。銃床として、洋の東西を通じて広く用いられ、現在では材積が少なくなっていると思われる。ほかに各種器具・家具材などの用途も知られている。種子は食用となり、栄養価に富む。

・ヤマグワ (*Morus bombycis*) クワ科

環孔材で孔圏部は1～5列、晩材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。大道管は管壁は厚く、横断面では楕円形、単独または2～3個が複合、小道管は管壁厚が中庸、横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ～Ⅲ型、1～6細胞幅、1～50細胞高で、しばしば結晶を含む。柔組織は周囲状～翼状および散在状。年輪界は明瞭。

ヤマグワは北海道・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木で、中国原産のカラグワ(マグワ) (*Morus alba*)・ロソウ (*M. alba* var. *multicaulis*) とともに多くの園芸品種があり、養蚕に利用されている。材の解剖学的特徴のみで、これらを区別することはできない。ヤマグワの材はやや重硬で強靱、加工はやや困難で、保存性は高い。装飾材や器具・家具材として用いられ、樹皮は和紙の原料や染料となり、果実は食用となる。

・カバノキ属類似種 (cf. *Betula* sp.)

散孔材で、管孔は放射方向に2～4個が複合、横断面では楕円形、管壁は薄い。道管は階段穿孔を有し、段(bar)数は20～30。放射組織は同性、1～3細胞幅、1～20細胞高であり目立たない。年輪界はやや不明瞭。試料の状態が不良なため確実な同定が行えず、カバノキ属類似種とした。

カバノキ属は、シラカンバ (*Betula platyphylla* var. *japonica*)、ダケカンバ (*B. ermanii*) など11種が自生し、主として本州中北部・北海道の山地・高山・寒冷地などに生育する落葉高木～低木である。このうちミズメ (*B. grossa*) は日本固有種で、本州(岩手県以南)・四国・九州の山地に生育する。ミズメの材は重硬・強靱で、加工は困難ではなく、各種の道具・器具材、木地・家具材

などに用いられる。梓弓に使われるアズサを本種とする見解もある。

・サクラ属の一種 (*Prunus* sp.) バラ科

環孔性を帯びた散孔材で管壁孔は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2～8個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1～3細胞幅、1～30細胞高。柔組織は周囲状および散在状。年輪界はやや不明瞭。

サクラ属には、ヤマザクラ (*Prunus jamasakura*) やウワミズザクラ (*P. grayana*) など15種が自生し、多くの変・品種がある。また、モモ (*P. persica*) やスモモ (*P. salicina*) など古い時代に伝えられ栽培されているものもある。多くは落葉性の高木～低木であるが、バクチノキ (*P. zippeliana*)、リンボク (*P. spinulosa*) の常緑樹も含まれる。このうちヤマザクラは、本州(宮城・新潟県以南)・四国・九州の山野に分布する落葉高木で、材は中程度～やや重硬・強靱で、加工は容易、保存性は高い。各種器具材をはじめ、機械・家具・楽器・建築・薪炭材など様々な用途が知られている。また樹皮は樺皮細工に用いられる。

・カエデ属の一種 (*Acer* sp) カエデ科

散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および2～3個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～5細胞幅、1～30細胞高で時に100細胞高を越える。柔組織はターミナル状、周囲状または随伴散在状、接線状。年輪界はやや不明瞭。

カエデ属には、イタヤカエデ (*Acer mono*) やイロハモミジ (*A. palmatum*) など約25種が自生し、また多くの品種があり植栽されることも多い。属としては琉球を除くほぼ全土に分布する落葉高木～低木である。一般に材はやや重硬・強靱で、加工はやや困難、保存性は中程度である。器具・家具・建築・装飾・旋作・薪炭材などに用いられる。

・クスノキ属類似種 (cf. *Cinnamomum* sp.)

散孔材で管壁は薄く、横断面では楕円形、単独まれに2～3個が放射方向に複合する。道管は単穿孔を有す。放射組織は異性Ⅲ型、1～3細胞幅、1～20細胞高。柔細胞はしばしば大型の油細胞となる。年輪界は明瞭。

試料の解剖学的特徴からは、この他のクスノキ科のカゴノキ属、シロダモ属等との区別が明瞭でないためクスノキ属類似種とした。なお「日本の野生植物 木本Ⅰ・Ⅱ」(1989)では、*Cinnamomum*をニッケイ属としている。

・トネリコ属の一種 (*Fraxinus* sp.) モクセイ科

環孔材で孔圏部は2～3列、孔圏外で急激に管径を減じのち漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独または2個が複合、複合部はさらに厚くなる。道管は単穿孔を有し、壁孔は小型で密に交互状に配列、放射組織との間では網目状～篩状となる。放射組織は同性(～異性Ⅲ型)、1～3(5)細胞幅、1～40細胞高であるが、時に20細胞高前後のものが多い。柔組織は周囲状およびターミナル状、時に階層状の配列を示す。年輪界は明瞭。

トネリコ属には、シオジ(*Fraxinus platypoda*)、トネリコ(*F. Japonica*)、アオダモ(*F. langinosa*)など約8種が自生する。このうちヤマトアオダモ(*F. longicuspis*)・マルバアオダモ(*F. sieboldiana*)・アオダモは北海道・本州・四国・九州に、ヤチダモ(*F. mandshurica* var. *japonica*)は北海道・本州(中部地方以北)に、トネリコは本州(中部地方以北)に、シオジは本州(関東地方以西)・四国・九州に分布する。いずれも落葉高木である。材の性質は種によって異なるが、一般には中庸～やや重硬で、靱性があり、加工は容易で、建築・器具・家具・旋作・薪炭材などの用途が知られる。

・イネ科タケ亜科の一種 (*Gramineae* subfam. *Bambusoideae* sp.)

維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱をもつ。

タケ亜科は、タケ・ササ類であるが解剖学的特徴では区別できない。

以上の同定結果を検出遺構などとともに一覧表で示す(表1、2)。

4. 考察

同遺跡を通じて、針葉樹が少なく広葉樹が多いことが判った。同定対象とした炭化試料は、当時の建築用材あるいは燃料材とみられており、これらの用途に広葉樹が選択的に使用された可能性もあろう。ただし、木材が炭化材として残るのは、火災等を罹って完全燃焼しなかったため、いわば偶然に残るのであり、また炭化材となりにくい樹種もあるものと思われる。したがって、このような条件を念頭において、慎重に今回の結果を評価する必要がある。

ただし、燃料材としての用途が比較的明確なカマド出土試料(表2)についてみれば、少なくともコナラ属コナラ亜属コナラ節・同亜属クヌギ節などの広葉樹が普通に使用されたことは言えそうである。

いずれにしても、今後さらに類例の蓄積を行い、今回の成果について再評価しなければならないであろう。ここでは、同じ小諸市内に所在する和田原遺跡群古屋敷遺跡における古墳時代及び平安時代住居址出土炭化材の同定結果との比較を行っておきたい。古墳時代住居址出土炭化材は、カマド内・外出土試料ともコナラ属コナラ亜属コナラ節及び同亜属クヌギ節を主体としており、今回の関口A・B両遺跡の平安時代住居址における結果に近い。一方、本遺跡と同時代の平安時

代住居址からは、ミズキ・ヤマグワ・ケヤキ・カラマツ・ヒノキ各属の一種など樹種が多様であり、コナラ属はわずかであった（パリノ・サーヴェイ株式会社、1990）。同報文では、時代差による植生差などを指摘したが、今回の結果から見る限り一概には言えないようである。少なくともカマド内に限ってみれば、古墳時代も平安時代もコナラ属が多用された可能性があり、用途による用材選択と言う観点からも改めて注意する必要があるようである。今後の検討課題として残される。

註

- (1) バクチノキと推定するも、この樹種は温暖地の海岸近くが生育地であるため、この地方にはなかったのではないかと思われる。それでウワミズザクラ、イヌザクラはこの周辺に多い。 小淵武一

表1 関口A・B遺跡出土材の樹種

試料番号	遺跡名	住居址番号	樹種名
1	関口A	S B 05 カマド	ケヤキ
2	関口A	S B 06 カマド	オニグルミ
3	関口B	S B 01 カマド	ヤマグワ
4	関口B	S B 01 カマド	スギ
6	関口B	S B 03 カマド	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
7	関口B	S B 04	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
8	関口A	S B 05	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
9	関口B	S B 07	広葉樹（散孔材）
10	関口B	S B 07 カマド	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
11	関口B	S B 09 カマド	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
12	関口B	S B 09 カマド	広葉樹（散孔材）
13	関口B	S B 10 カマド	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
14	関口B	S B 10 カマド	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
15	関口B	S B 10 カマド	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
17	関口B	S B 16 カマド	広葉樹（散孔材）
18	関口B	S B 17 南	広葉樹（散孔材）
19	関口B	S B 18 カマド	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
20	関口B	S B 20	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
21	関口B	S B 20	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
22	関口B	S B 23 カマド	サクラ属の一種
23	関口B	S B 23 カマド	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
24	関口B	S B 23 カマド	イネ科タケ亜科の一種
25	関口B	S B 23 カマド	サクラ属の一種
26	関口B	S B 23 カマド	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
27	関口B	S B 23 カマド	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種

試料番号	遺跡名	住居址番号	樹種名
28	関口B	S B 24 カマド	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
29	関口B	S B 24 カマド	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
31	関口B	S B 25	イネ科タケ亜科の一種
32	関口B	S B 25 北	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
33	関口B	S B 25 カマド	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
34	関口B	S B 25 カマド	カバノキ属類似種
35	関口B	S B 26 カマド	種子
36a	関口B	S B 26 カマド	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
36b	関口B	S B 26 カマド	広葉樹(散孔材)
37a	関口B	S B 26 カマド	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
37b	関口B	S B 26 カマド	広葉樹(散孔材)
38	関口B	S B 26 カマド	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
39	関口B	S B 23 カマド	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
40	関口B	S T 28 P 5	サクラ属の一種
41a	関口B	S B 29 カマド	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
41b	関口B	S B 29 カマド	サクラ属の一種
42a	関口B	S B 29 カマド	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
42b	関口B	S B 29 カマド	サクラ属の一種
43	関口B	S B 29 カマド	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
44	関口B	S B 30 カマド	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
47	関口B	S B 30 北	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
49	関口B	S B 30 北	種子(モモ)
50	関口B	S B 30 南	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
51	関口B	S B 36 カマド	イネ科タケ亜科の一種
52	関口B	S B 31 カマド	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
53	関口B	S B 36 No. 1	ヒノキ属の一種
54	関口B	S B 36 カマド	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
55	関口B	S B 36 No. 2	イネ科タケ亜科の一種
56	関口B	S B 36	モミ属の一種
57	関口B	S B 37 カマド	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
58	関口B	S B 37 カマド	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
59	関口B	S B 38	ヒノキ属の一種
60	関口B	S B 38 北	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
61	関口B	S B 39 カマド	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
62	関口B	S B 39 カマド	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種

試料番号	遺跡名	住居址番号	樹種名
63	関口B	S B 39	モミ属の一種
64	関口B	S B 40	広葉樹(散孔材)
65	関口B	S B 41 カマド	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
66	関口B	S B 43	ヒノキ属の一種
68	関口B	S B 43 カマド	カエデ属の一種
69	関口B	S B 45 カマド	サクラ属類似種
70	関口B	S B 52 C-1	イネ科タケ亜科の一種
71	関口B	S B 52 C-2	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
72	関口B	S B 52 C-3	イネ科タケ亜科の一種
73	関口B	S B 52 C-4	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
74	関口B	S B 52 C-5	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
75	関口B	S B 52 C-6	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
76	関口B	S B 52 C-7	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
77	関口B	S B 52 C-8	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
78	関口B	S B 52 C-9	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
79	関口B	S B 52 C-10	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
80	関口B	S B 52 C-11	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
81	関口B	S B 52 C-12	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
82	関口B	S B 52 C-13	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
83	関口B	S B 52 ピットNo.1	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
84	関口B	S B 52 ピットNo.2	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
85	関口B	S D 01 南	クスノキ属類似種
86	関口B	S D 01 南	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
87	関口B	S D 01 南	トネリコ属の一種
88	関口B	S D 01 南	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
89	関口B	S D 01 南	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
90	関口B	S D 01	ケヤキ
91	関口B	S D 01 北 No.5	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
92	関口B	S D 01 No.27	ヒノキ属の一種
93	関口B	S D 01 No.28	スギ
94	関口B	S D 01 No.29	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
95	関口B	S D 03	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
96	関口B	S B 04 南	ヒノキ属の一種
97	関口B	S K 03	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
98	関口B	S B 02 カマド	サクラ属の一種

関口 A 遺跡第 3 号土坑出土人骨について

信州大学医学部第二解剖学教室

西沢寿晃

出土人骨は 1 個体のものである。頭部と下肢が 2 個の石の下部にそれぞれ分断されて残り、他の部分の骨は腐朽しまったく存在しない。下肢骨は各々が並列状態で、膝関節で屈曲された状態である。骨は全体にかなり崩壊がすすみ、完存するものはない。緻密質の表面は脆く、剥落が生じ、長骨の両端などはことごとく細片状となっている。

以下、残存した骨の部位、形状についての概要を記載する。

頭蓋骨——後頭骨：中央辺の一部がやや大型片で、他はいくつかの小片となる。内後頭隆起・同稜とも発達は弱く、外後頭隆起も弱度であり、項線なども明瞭でない。

側頭骨：左岩様部を主に残すのみで、乳様突起は欠失する。

頭頂骨：比較的形態を保つ大型片として残る。特に右半と左後半部分の保存がよい。冠状縫合は内板で癒合するが、矢状・ラムダ縫合は完全に鋸歯状に離開している。頭頂結節は膨隆する。骨壁は薄い。

前頭骨：右頭頂骨に接する冠状縫合部分が残る。

上顎骨：口蓋突起部分がほぼ残り、正中口蓋縫合から離開している模様である。歯槽も比較的保存がよく、各歯が植立している。

下顎骨：下顎骨体の右半がやや原形を残すが、下顎枝は欠失する。左半は臼歯部の骨体上縁と歯槽を残すのみである。骨体はやや頑丈な感があり、オトガイ棘の発達は中等度である。

残存歯の歯式

?	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂		I ₁	I ₂		P ₂	M ₁	M ₂	?
?	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂		I ₂	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	?	

歯——咬耗：切歯＝上・下顎とも咬耗痕は切縁に限られるが、それぞれ象牙質が線上に現われている。犬歯＝上・下顎とも先端は鈍円状となり、唇側面は平滑となるほどに進行している。

小白歯＝上顎では咬耗は一様に咬合面の大部分に広がる平面状となり、やや舌側へ傾斜する。

下顎の咬合面は水平となり、辺縁隆線も失なわれた円型を呈する。大白歯＝上・下顎ともに各咬頭の先端は咬耗し、各溝がわずかに残る程度となる。う蝕：臼歯のほとんどで特に著しい発現をみる。各小白歯では点状に象牙質に及ぶが、第一大臼歯では舌側部の近・遠心に広く局在して象牙質に至る。

上腕骨——右、骨体中央部分（現存長約10cm）が残る。細小な形態である。

大腿骨——右、左ともに骨体（現存長約20cm）のみが残る。近・遠位端は崩壊し、細片状となる。粗線は一稜を形成する程度できわめて弱度であり、全体的にかなりきゃしゃな形態を示す。

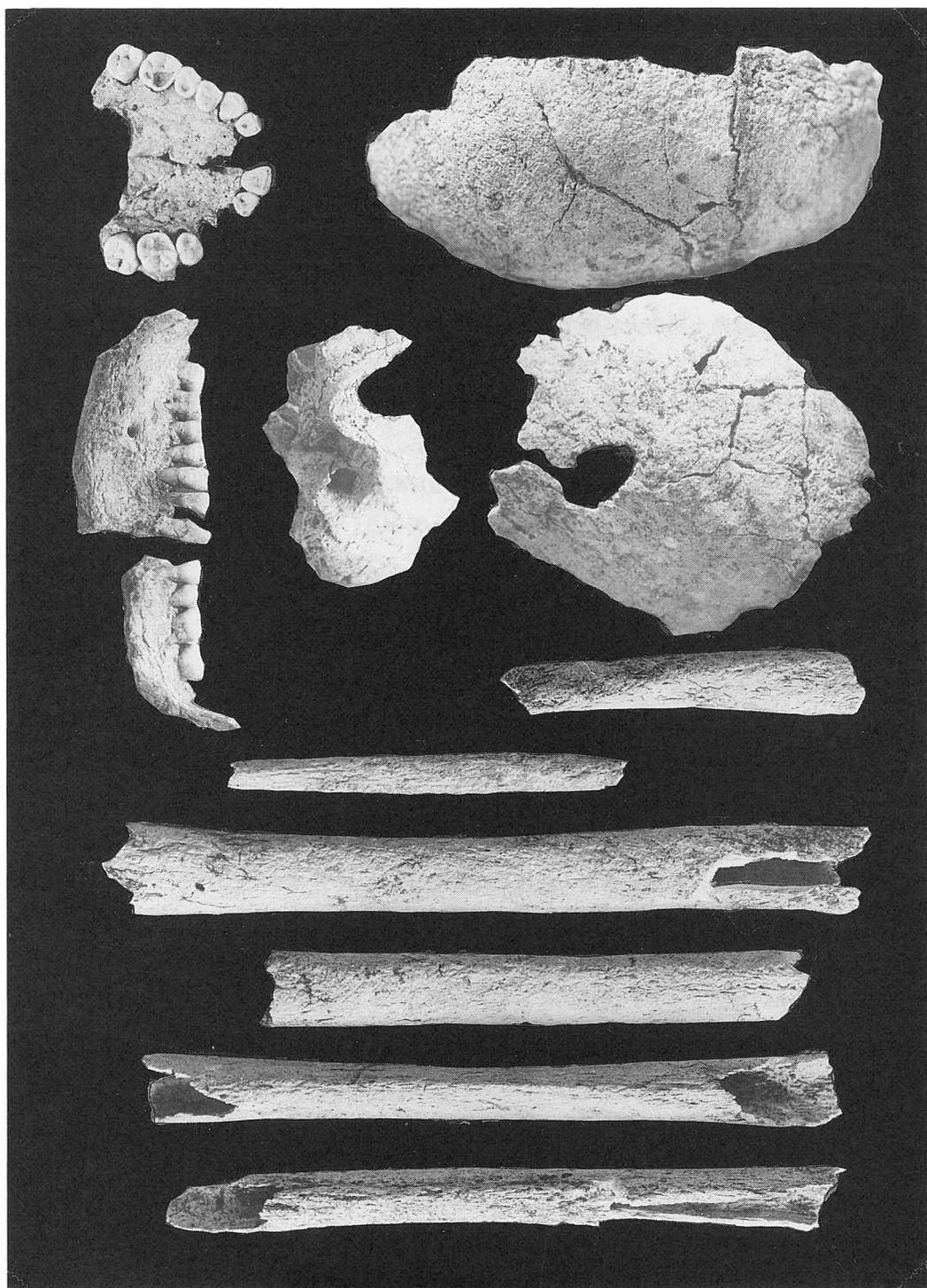
中央部付近の矢状径約18mm、同横径約22mm、同周径約67mm。

脛骨——右、左の骨体（現存長約20cm）のみである。大腿骨同様に細くきゃしゃである。

腓骨——骨体（右・左不明）部分約12cm残存。

まとめ

出土人骨は1個体のもので、頭部と屈曲された下肢が主に残存するが、形質的な特徴の多くは失われている。頭蓋の3主縫合からみた年齢は壮年のものであるが、歯の咬耗はかなり進行している傾向が窺われる。下顎骨の骨体や歯の大きさはやや頑丈な形態を示すが、大腿骨や脛骨はきわめて繊細で女性的な形質を具えている。



第3号土坑出土人骨

関口 B 遺跡の獣骨類について

前橋第二高校
宮崎重雄

I はじめに

関口 B 遺跡は長野県小諸市大字甲字東道木に所在する。この遺跡の住居址内から、ニホンシカ、ニホンイノシシ、ウマ、キジ科の鳥類の出土があり、溝址、井戸址、土坑などからも若干の獣骨類が出土している。遺物のほとんどが、7～8世紀に属するが、これに多少前後するものもある。

溝址からのものは9世紀末から10世紀前半とされる。

小諸市ではすでに類例⁽¹⁾が知られており、和田原遺跡群古屋敷遺跡の住居址から古墳時代のニホンシカ、ニホンイノシシ、ニホンカモシカが出土している。そのうちの一部は焼骨である。

II 本文

① ニホンシカ (*Cervus nippon*)

本遺跡で最も出土遺物量の多いのはニホンシカである。個体数でもおそらく最も多いであろう。

第10、15、16、20、21、23、25、27、29、30、34、37、42、43号住居址から出土している。

ほとんどの骨が住居址内のカマドから出土した焼骨である。出土部位は、指骨を含む四肢骨が多く、角がこれに次ぎ、切歯骨、肋骨などもわずかにみられる。椎骨も含まれているのであろうが、細骨片のため同定が困難である。切歯骨(第23号住居址)は小さく、幼獣または亜成獣に相当する大きさである。また、遠位骨端の離脱した大腿骨(第23号住居址)もあり、オグロジカの研究例⁽²⁾では、この部分が癒合するのは雄で4.3才、雌で2.9才である。したがって、切歯骨と大腿骨は成体にいたっていない個体のものであるが、同一個体であるか否かは不明である。一方、大型の角片も含まれていることから、成獣のシカも存在することは間違いない。

ニホンシカはカマド以外の住居址内からも出土する。これらの骨は生(半生)と焼骨の両方の場合がある。

② ニホンイノシシ (*Sus scrofa*)

ニホンイノシシと確認できる部位は4個出土している。第27号住居址で2個と第30、40号住居址でそれぞれ1個ずつである。このうち、第30号住居址のものはカマド外に埋存していた。いずれも焼骨である。部位の内訳は指骨が3個と踵骨が1個である。他の部位も多少は含まれているのであろうが、細骨片のため同定が難しい。観察される限りでは、指骨の骨端はすべて癒合している。

③ ウマ (*Equus caballus*)

ウマと断定できる骨が出土しているのは第3号住居址の2つの左下顎臼歯と第30号住居址の橈骨片、第39号住居址の左上顎臼歯、第1号溝址の下顎臼歯である。第3号住居址の2個の左下顎臼歯は同一個体である可能性があり、その内の1個は第四前臼歯と推定される。歯の咬耗度から、この個体は8~10才程度の壮令馬と考えられる。この下顎歯は欠損しているため、体高(大きさ)を推定する手がかりにならない。第39号住居址と重複する柱穴の左上顎臼歯は第一後臼歯と推定され、この歯の咬耗度から、14~15才くらいの壮令馬~老齡馬と判断される。この歯の大きさは、小型在来馬相当の大きさを想像させる。第1号溝址のウマは保存がきわめて不良であるが、年齢は壮令馬であろう。第30号住居址の橈骨も壯齡または老齡馬である。第3号住居址のカマド内から出土した臼歯はもちろんのこと、住居址内から出土した臼歯も、熱を受けているよう見受けられる。ただし、第30号住居址の橈骨片と第1号溝址の下顎臼歯は生のような様相を呈している。

④ キジ科 (*Phasianidae*)

第10号住居址(奈良時代)内カマド跡から出土した中足骨である。いわゆる「けづめ」が存在するので雄であろう。加熱による亀裂・歪みが観察される。キジまたはヤマドリのものかもしれないが、これより少し大きめで、原始的なニワトリの可能性もある。

記紀にも記されているので、奈良時代にニワトリが飼われていたことは確かであるが、全国でもまだ奈良時代の確実な出土例はなく、もしこの骨がニワトリだとすれば、きわめて貴重な資料といえる。地鶏などとの比較研究による精査が必要である。

群馬県では、高崎市御布呂遺跡で、弥生時代のニワトリに近い鳥類の下肢部が出土している。

また、長野県内では塩尻市平出遺跡の住居址から土師期の出土例があり、更埴市兩宮で古墳時代のニワトリ形埴輪が出土している。長野県に隣接する山梨県および関東地方の各県でも各地でニワトリ形埴輪が知られており、関東甲信越地方では、少なくとも古墳時代にはすでに多くのニワトリが飼育されていたようである。

III 焼骨について

骨片は焼骨に特有な細骨片化がみられ、亀裂・歪みの観察されるものもある。こういった特徴が表れるのは、これらの骨が、まだ生の状態にあって、最高800℃を超えるような熱が加えられたときである。すなわち、出土獣類は捕殺されたあと余り時間が経たない時点で、火にかけられたことを示している。ただし、これだけの高温にさらされると、付着している肉類や有機物質は消失してしまい、食料としてはまったく不向きである。

焼骨類は住居址内のカマド内からはもちろんのこと、カマド外からも出土している。このような出土状況から、焼骨類は、カマドで料理された焼き肉の残りであろうとの推測も成り立つが、焼骨類には普通食料とされない鳥類の中足骨、鹿角、ウマの臼歯、イノシシ、シカの指骨などが含まれており、一概に食料残滓と言い切れない面を持っている。

IV 住居址による出土物の特徴について

住居址によって出土獣骨類の点数におおきな隔たりがあり、最も点数の多いのは、第30号住居址（古墳時代後期）で、15点以上を数える。この中にはイノシシ、シカ、ウマの3種が含まれ、比較的、生の骨も多い。次に出土点数の多いのは第27号住居址（古墳時代後期）で、14点を数え、イノシシ、シカの2種からなる。この住居址のカマド内からシカの分岐角を基部から切断した骨角器が出土している。第23号住居址（古墳時代後期）では11点の獣骨類の出土を見るが、シカのみからなる。このなかには、先端部を切断したと思われる鹿角の第二分岐部と、カマド内から解体痕のある大腿骨とが含まれている。

出土獣骨類の数が多いの古墳時代後期の住居址に限られているというのは、注目すべき事実である。この他、ウマのみしか出土していない第3号住居址（奈良時代）、シカとキジ科鳥類の伴出している第10号住居址（奈良時代）などが特徴的な住居址である。

引用文献

- (1) 宮崎重雄 1990 「和田原遺跡群古屋敷遺跡出土の獣骨類」『和田原遺跡群古屋敷遺跡』小諸市教育委員会（報告書近刊）
- (2) Lewall.E.F and I.Mct.Cowan., 1963 Age Determination in black-tail deer by degree of ossification of the epiphyseal plate in the long bones. *Canadian journal of zoology*. vol,41. 629-636.
- (3) Levin.M.A., 1982 The use of crown height measurements and eruption-wear sequences to age horses teeth. In Wilson.B,Grigson.C and Payne.S. (eds) *Ageing and Sexing Animal bones from Archaeological Sites*, 223-250. BAR British Series 109.
- (4) 林田重幸 1978 「日本在来馬の系統に関する研究」, 日本中央競馬会
- (5) 橋口 勉 1986 日本鶏の起源「生物資源のルーツを探る」, 123-182. 筑摩書房、東京.
- (6) 今井勝俊 1980 弥生時代の鳥類下肢の遺骸. 群馬評論、2号、51-55.
- (7) 直良信夫 1972 「古代遺跡発掘の脊椎動物遺体」, 校倉書房、東京.
- (8) 芝田清吾 1969 「日本古代家畜史の研究」, 学術書出版会、東京.
- (9) Ubelaker,D.H 1989 *Human skeletal remain*. Taraxacum, Washington.

馬齒計測値

S B-3 下顎臼歯

	歯冠長	歯冠高(頰側)	下後錘谷長	下内後錘谷長	doubleknot長	咬合面の傾斜	下内錘幅
第四前臼歯	22.1+	46.0+	8.0	10.3	15.3	90°	5.8

(単位: mm)

S B-39上顎臼歯

	歯冠長	歯冠幅	原錘幅	歯冠高(頰側)
第一後臼歯	22.4	23.4+	11.8	28.8

(単位: mm)

ニホンシカ計測値

中足骨

	近位横径	近位前後径
S B-20	29.8	32.4
S B-34	26.0	
現生足尾産雄	26.6	28.3

(単位: mm)

S B-10キジ科鳥類

中足骨近位横径...12.6mm

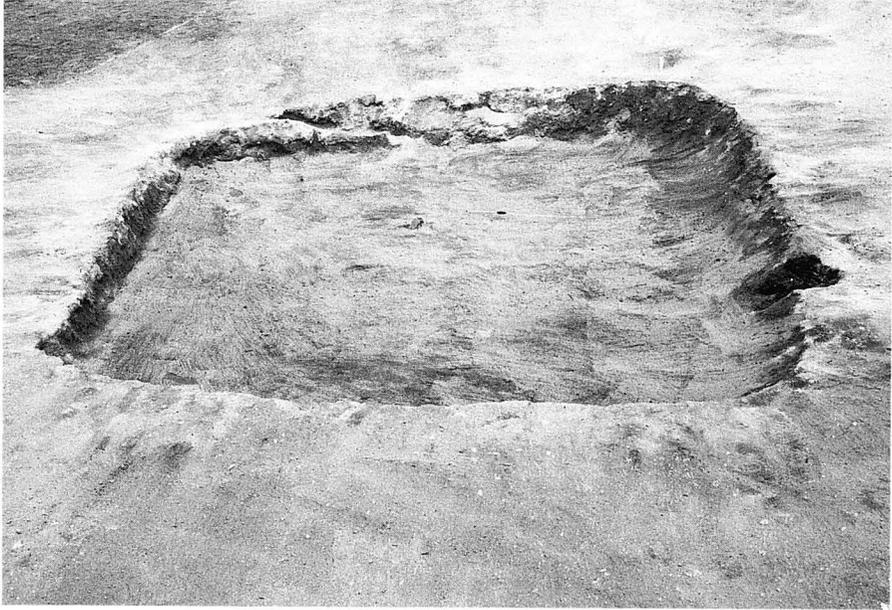
第1表 関口B遺跡出土獣骨一覧表

	住居址 番 号	発掘地点	時代・時期	種 名	部 位 名	焼骨	亀裂・ 歪み	備 考
1	S B-01	カマド	奈良末~平安初	イノシシまたはシカ	四肢骨片	○	有	原始的なニワトリの 可能性もある
2	S B-01	カマド	奈良末~平安初		肋骨片	○		
3	S B-02	カマド	奈良時代後半	ウマ	骨片	△		
4	S B-02	カマド	奈良時代後半		四肢骨片	△		
5	S B-03	カマド	奈良時代	ウマ	左下顎臼歯	△		
6	S B-03	カマド	奈良時代		左下顎臼歯	△		
7	S B-09	カマド	古墳時代後期	シカ?	骨片	△		
8	S B-09	カマド	古墳時代後期		四肢骨片	○		
9	S B-09	カマド	古墳時代後期	キジまたはヤマドリ	角片?	○		
10	S B-10	北	奈良時代		四肢骨片		○	
11	S B-10	カマド	奈良時代	シカ	中足骨	○		
12	S B-10	カマド	奈良時代		左寛骨臼		○	
13	S B-10	貯蔵穴(P5)	奈良時代	シカ	四肢骨片	○		
14	S B-10	北カマド	奈良時代		四肢骨片		○	
15	S B-15	カマド	奈良時代前半		四肢骨片		○	
16	S B-15	カマド	奈良時代前半		四肢骨片	○		

	住居址 番 号	発掘地点	時代・時期	種 名	部 位 名	焼骨 亀裂・ 歪み	備 考
17	S B-16	カマド	奈良末～平安初	イノシシまたはシカ	四肢骨片	○	
18	S B-16		奈良末～平安初	シカ	角幹部破片	△	
19	S B-19	カマド	古墳時代後期		四肢骨片	○	
20	S B-20		平安時代初	シカ?	大腿骨?	×	
21	S B-20	カマド	平安時代初		四肢骨片	○	
22	S B-20	貯蔵穴	平安時代初	シカ	右中足骨	×	
23	S B-20	カマド	平安時代初		骨片	○	有
24	S B-21	カマド	古墳時代後期		骨片	○	
25	S B-21	南	古墳時代後期	シカ	角分岐部	○	
26	S B-23	カマド	古墳時代後期	シカ	大腿骨片	○	骨端離脱 加工痕有
27	S B-23	カマド	古墳時代後期	シカ	左切歯骨	○	有 幼獣または亜成獣
28	S B-23	カマド	古墳時代後期		骨片	○	
29	S B-23	カマド	古墳時代後期		大腿骨片?	○	
30	S B-23	カマド	古墳時代後期		四肢骨片	○	有
31	S B-23	カマド	古墳時代後期		四肢骨片	○	
32	S B-23	No1	古墳時代後期	シカ	右第二分岐部	△	第二枝先端部切断痕
33	S B-23	No4	古墳時代後期		角片	×	
34	S B-23	カマド	古墳時代後期	シカ	肋骨片	○	
35	S B-23	カマド	古墳時代後期	シカ	角片・四肢骨片	○	有
36	S B-23	カマド	古墳時代後期	イノシシ?	下顎骨・四肢骨片	○	
37	S B-24	カマド	古墳時代後期		四肢骨	○	
38	S B-25	カマド	古墳時代後期		骨片	○	
39	S B-25	カマド	古墳時代後期	シカ	中節骨片	○	
40	S B-27	カマド	古墳時代後期	イノシシ	基節骨片	○	
41	S B-27		古墳時代後期	シカ	右角第二または第三分岐部	△	
42	S B-27	カマド	古墳時代後期		四肢骨片	○	
43	S B-27	No12	古墳時代後期		四肢骨・脳頭蓋片	○	
44	S B-27	カマド	古墳時代後期	イノシシ	末節骨片	○	有
45	S B-27	カマド	古墳時代後期		骨片	○	
46	S B-27	カマド	古墳時代後期	シカ?	角片?	○	
47	S B-27	カマド	古墳時代後期	シカ	分岐角先端部	○	骨角器：基部は切断 されている
48	S B-27	カマド	古墳時代後期	シカ	角片	○	有
49	S B-27	カマド	古墳時代後期		四肢骨片	○	
50	S B-27		古墳時代後期	シカ	角座骨片	×	
51	S B-27	No11	古墳時代後期	シカ?	角片	×	
52	S B-27	カマド	古墳時代後期		頭蓋・四肢骨片	○	
53	S B-27	カマド	古墳時代後期	シカ?	角片?・骨片	○	
54	S B-29	カマド	奈良時代前半		骨片	○	
55	S B-29		奈良時代前半	シカ	手根骨	○	
56	S B-29	北	奈良時代前半	シカまたはイノシシ	四肢骨片	○	
57	S B-30	南	古墳時代後期	シカまたはイノシシ	四肢骨片	○	
58	S B-30	南	古墳時代後期	イノシシ	踵骨片	○	有
59	S B-30	南	古墳時代後期	シカまたはイノシシ	距骨片	○	
60	S B-30	北	古墳時代後期	シカ	基節骨	○	
61	S B-30	北	古墳時代後期	シカ	中足骨片	×	
62	S B-30	カマド	古墳時代後期		脛骨片	○	
63	S B-30	カマド	古墳時代後期		骨片	○	
64	S B-30		古墳時代後期		四肢骨片	○	

	住居址 番 号	発掘地点	時代・時期	種 名	部 位 名	焼骨	亀裂・ 歪み	備 考
65	S B-30	No.2	古墳時代後期	シカ	中足骨	×		角座直下で横に切断 67、68より大型個体
66	S B-30	No.7	古墳時代後期	シカ	大腿骨片	×		
67	S B-30	No.8	古墳時代後期	シカ	角分岐部	△		
68	S B-30	No.9	古墳時代後期	シカ	角座から第一分岐部	×		
69	S B-30	No.20	古墳時代後期	シカ	角片	×		
70	S B-30	No.23	古墳時代後期	シカ	左寛骨片	×		
71	S B-30	ビット	古墳時代後期	ウマ	橈骨片	×		
72	S B-31	カマド	古墳時代後期		骨片	○		
73	S B-33	カマド	古墳時代後期～奈良		骨片	○		
74	S B-34	カマド	古墳時代後期		四肢骨片	○		
75	S B-34	No.1	古墳時代後期		四肢骨片	○	有	
76	S B-34	No.2	古墳時代後期		骨片	×		
77	S B-34		古墳時代後期		脛骨?片	○		
78	S B-34		古墳時代後期		四肢骨片	○	有	
79	S B-34	南	古墳時代後期	シカ	左中足骨	△		
80	S B-36	カマド	古墳時代後期		四肢骨片	○		
81	S B-37	カマド	奈良時代前半	シカ	左腸骨片	○		
82	S B-36・37		古墳時代後期・奈良時代前半	シカ	手根骨	○		
83	S B-37	カマド	奈良時代前半		寛骨片	○	有	
84	S B-37	No.5	奈良時代前半	シカ	角第一分岐部	△		
85	S B-37	No.7	奈良時代前半		四肢骨片	×		
86	S B-39	No.5	奈良時代前半	シカ	角片	×		
87	S B-39	カマド	奈良時代前半以前		寛骨?片	○	有	
88	S B-39	カマド	奈良時代前半以前		寛骨片	○		
89	S B-39	カマド	奈良時代前半以前		四肢骨片	○		
90	S B-39	重複柱穴	奈良時代前半以前	ウマ	左上顎白歯	△		
91	S B-41	カマド	古墳時代後期		骨片	○		
92	S B-42	カマド?	奈良末～平安初		角片	○		
93	S B-43	No.4	古墳時代後期末～奈良初	シカ	角片	△	奇形か、熱で変形	
94	S B-43	カマド	古墳時代後期末～奈良初	シカ	基節骨片	○		
95	S B-43	カマド	古墳時代後期末～奈良初	シカ	基節骨片	○		
96	S B-44	カマド	不明 平安時代?	イノシシ	基節骨片	○		
97	S B-47	カマド	奈良時代		四肢骨片	○		有
98	S D-01	No.25	奈良末～平安初めに開削	ウマ	下顎白歯片	×		
99	S D-01	南	奈良末～平安初めに開削		骨片	×		
100	S D-01	北	奈良末～平安初めに開削	ウマまたはウシ	肩甲骨?	×		
101	S E		奈良時代前半以降	ウマまたはウシ	脛骨片	×		
102	S E		奈良時代前半以降	ウマまたはウシ	四肢骨片	×		
103	S K-02		古墳時代後期	ウマまたはウシ	四肢骨片	×		
104	S T-20	P 9			焼骨片	×		
105	S E		奈良時代前半以降	ウマまたはウシ	四肢骨片	×		
106	S E		奈良時代前半以降		肩甲骨片	×		
107	S E		奈良時代前半以降	ウマまたはウシ	四肢骨片	×		
108				シカ?	胸椎棘突起	○		

版 圖



図版 I
関口 A 遺跡

第 1 号住居址



第 2 号住居址



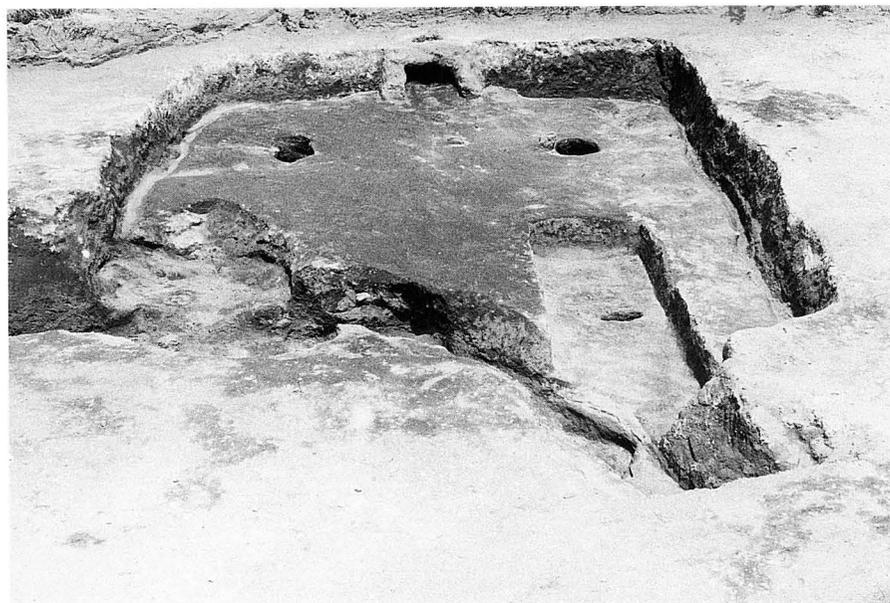
第 3 号住居址

図版 2

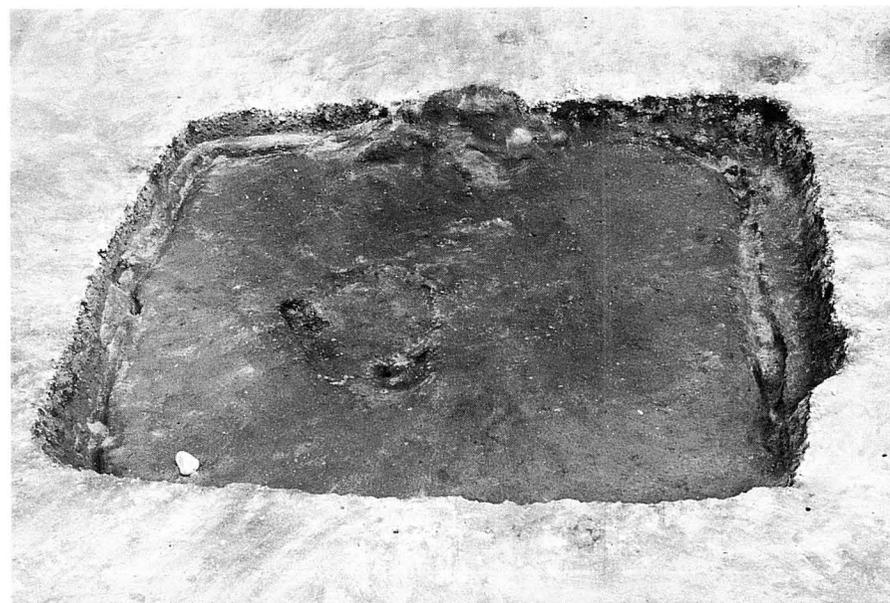
関口 A 遺跡



第 4 号住居址



第 5 号住居址



第 6 号住居址



図版 3

関口 A 遺跡

第 7 号住居址



第 1 号掘立柱
建物址 (掘形)



第 2 号掘立柱
建物址

図版 4

関口A遺跡



第3号掘立柱
建物址



第4号掘立柱
建物址(掘形)



第5号掘立柱
建物址



第6号掘立柱
建物址

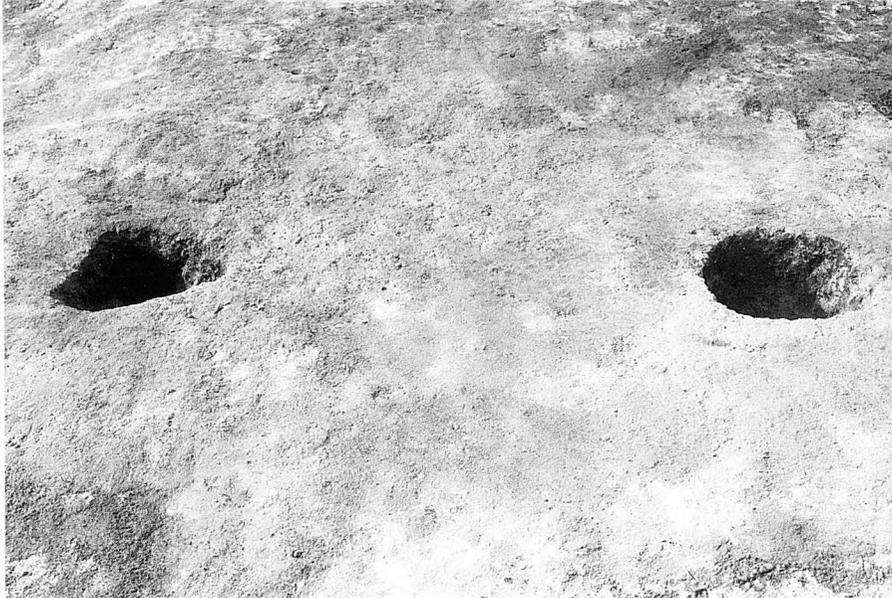


第7号掘立柱
建物址



第9号掘立柱
建物址

図版 6
関口 A 遺跡



第10号掘立柱
建物址(掘形)



掘立柱建物址と
第1号柵址(左)



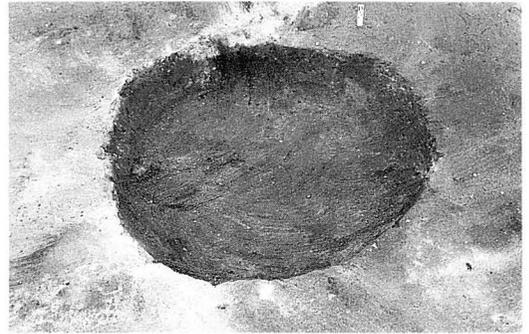
第1号井戸址



第1号溝址



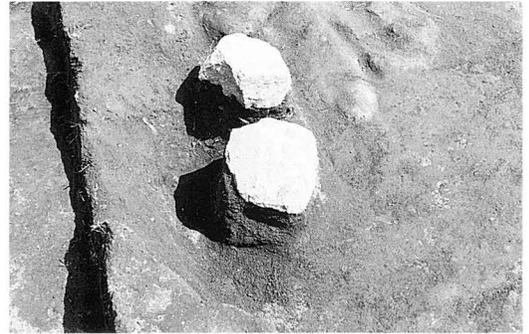
第1号土坑



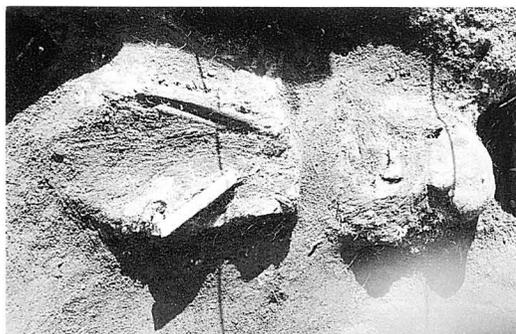
第2号土坑



第3号土坑



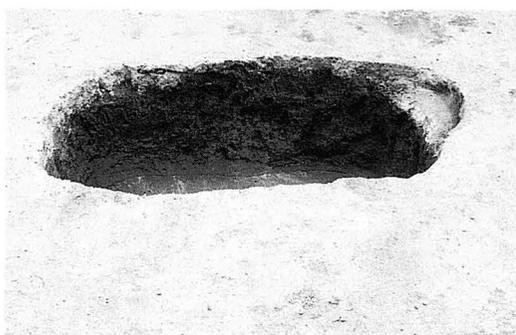
第3号土坑礫出土状態



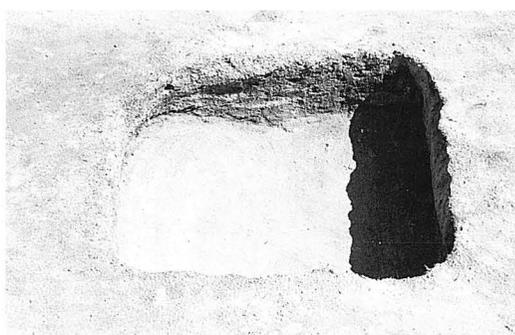
第3号土坑人骨出土状態



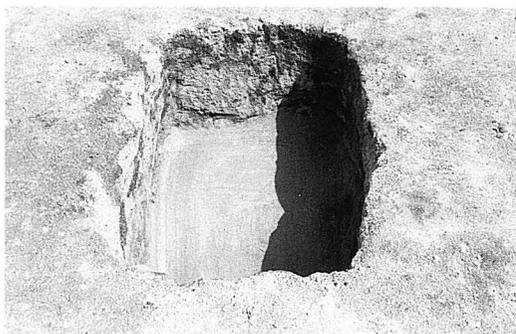
第4号土坑



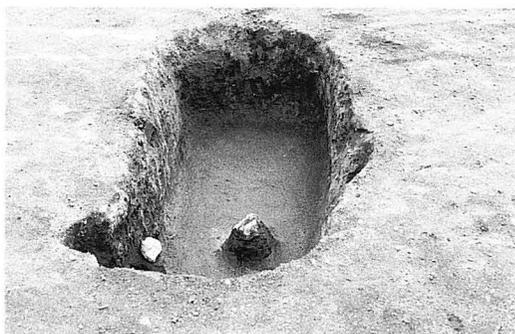
第5号土坑



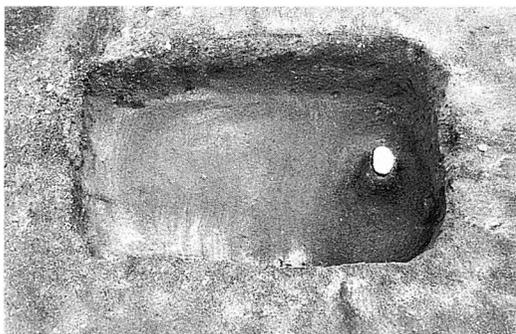
第6号土坑



第7号土坑



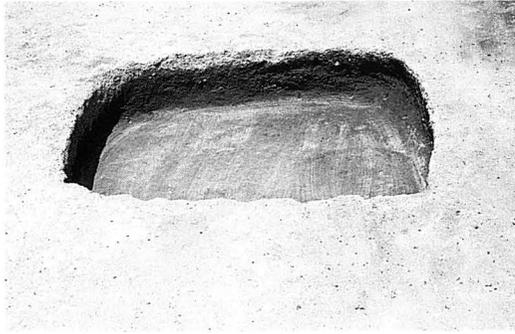
第8号土坑



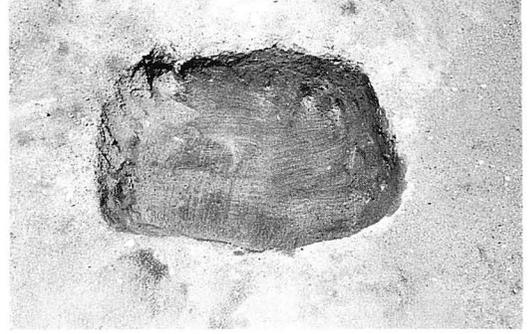
第9号土坑



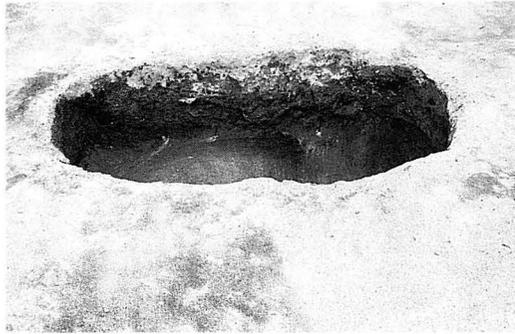
第10号土坑



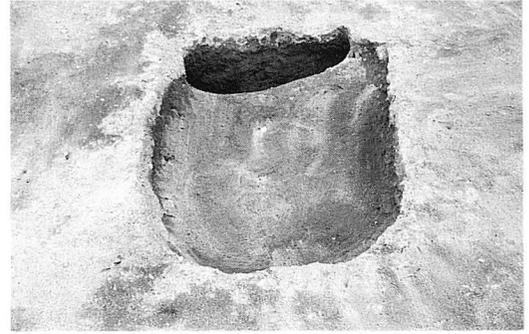
第11号土坑



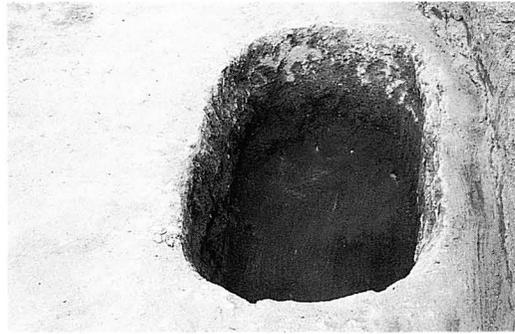
第12号土坑



第13号土坑



第14号土坑



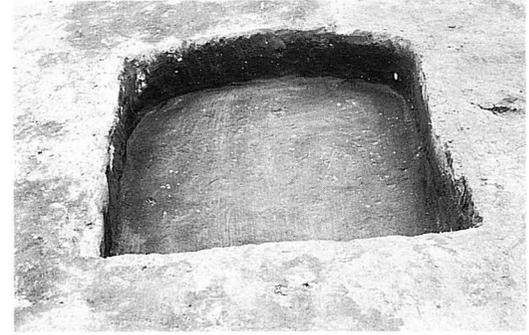
第15号土坑



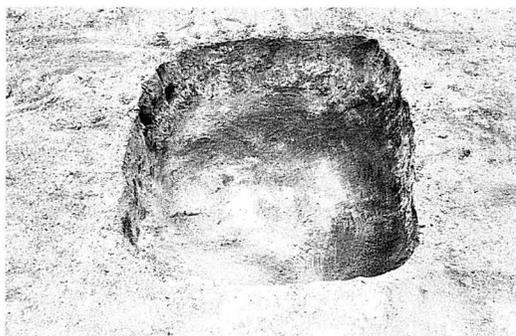
第16号土坑



第17号土坑



第18号土坑



第19号土坑



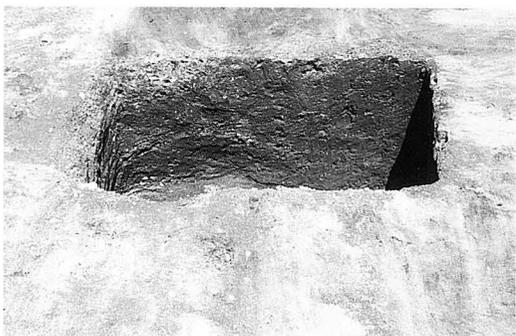
第20号土坑



第21号土坑



第22号土坑



第23号土坑



第24号土坑



第25号土坑



第25号土坑

図版II
関口B遺跡



第1号住居址



第2号住居址



第3号住居址



第4号住居址



第5号住居址



第6号住居址

図版13
関口B遺跡



第7号住居址



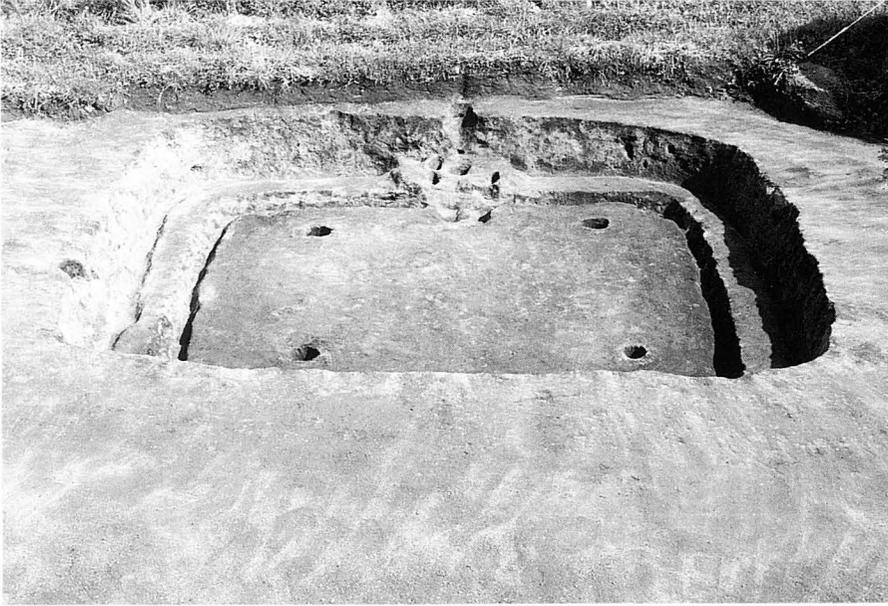
第8号住居址



第9号住居址

図版14

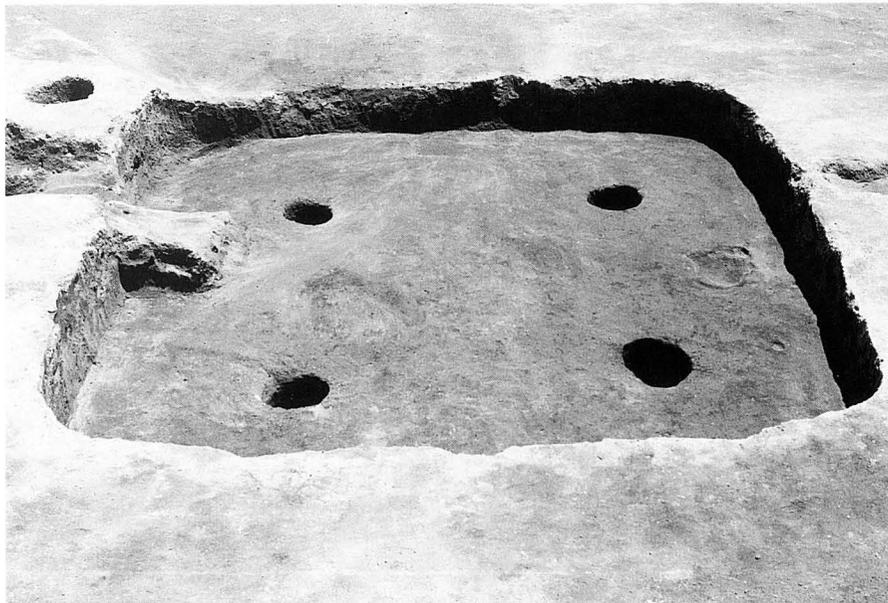
関口B遺跡



第9号住居址
(旧)



第10号住居址



第11号住居址

図版15

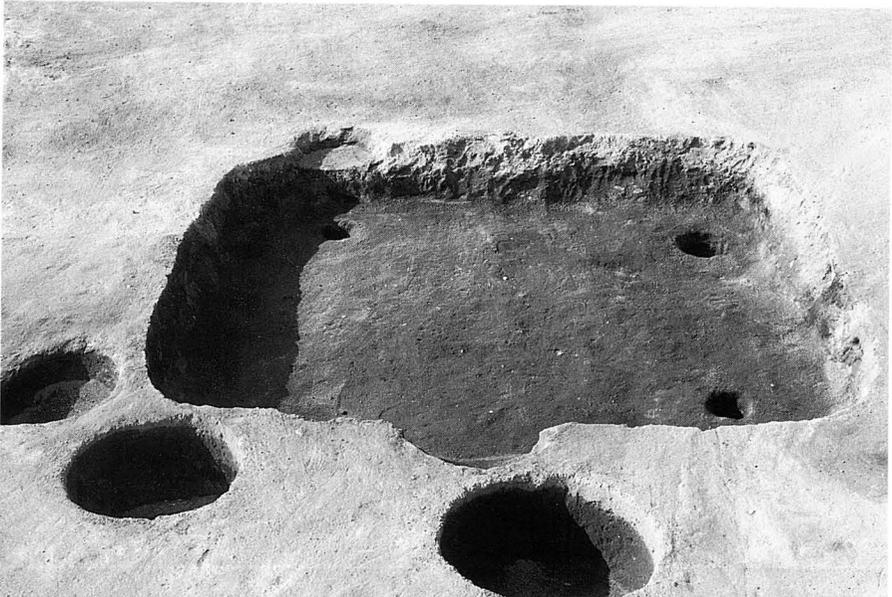
関口B遺跡



第11号住居址
(旧)



第12号住居址



第13号住居址



第14号住居址



第15号住居址



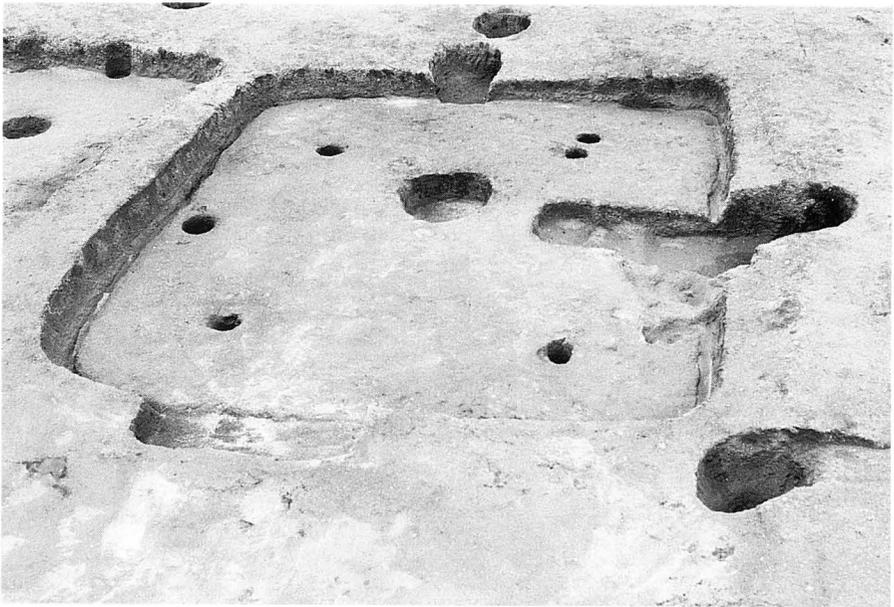
第16号住居址



図版17

関口B遺跡

第17号住居址



第18号住居址



第19号住居址



第20号住居址



第21号住居址



第22号住居址



図版19

関口B遺跡

第23号住居址



第24号住居址



第25号住居址

図版20
関口B遺跡



第26号住居址



第27号住居址



第28号住居址



図版21
関口B遺跡

第29号住居址



第30号住居址



第31号住居址



第32号住居址



第33号住居址



第34号住居址



図版23
関口 B 遺跡

第35号住居址



第36号住居址



第37号住居址



第38号住居址



第39号住居址



第40号住居址



図版25
関口B遺跡

第41号住居址



第42号住居址



第43号住居址
(奥)



第44号住居址



第45号住居址



第46号住居址
(奥)



図版27
関口B遺跡

第49号住居址



第50号住居址



第51号住居址
(中央)



第52号住居址



第1号掘立柱
建物址(掘形)



第2号掘立柱
建物址

図版29
関口B遺跡



第4号掘立柱
建物址



第5号掘立柱
建物址



第6号掘立柱
建物址

図版30
関口B遺跡



第7号掘立柱
建物址



第8号掘立柱
建物址(掘形)



第9号掘立柱
建物址



図版31

関口B遺跡

第10号掘立柱
建物址



第11号掘立柱
建物址



第12号掘立柱
建物址



第13号掘立柱
建物址



第15号掘立柱
建物址



第16号掘立柱
建物址



第17号掘立柱
建物址



第18号掘立柱
建物址



第19号掘立柱
建物址



第20号掘立柱
建物址



第21号掘立柱
建物址



第22号掘立柱
建物址



第23号掘立柱建物址



第24号掘立柱
建物址



第25号掘立柱
建物址



第26号掘立柱
建物址



第27号掘立柱
建物址



第28号掘立柱
建物址



図版37

関口B遺跡

第29号掘立柱
建物址



第30号掘立柱
建物址



第31号掘立柱
建物址

図版38
関口B遺跡



第32号掘立柱
建物址



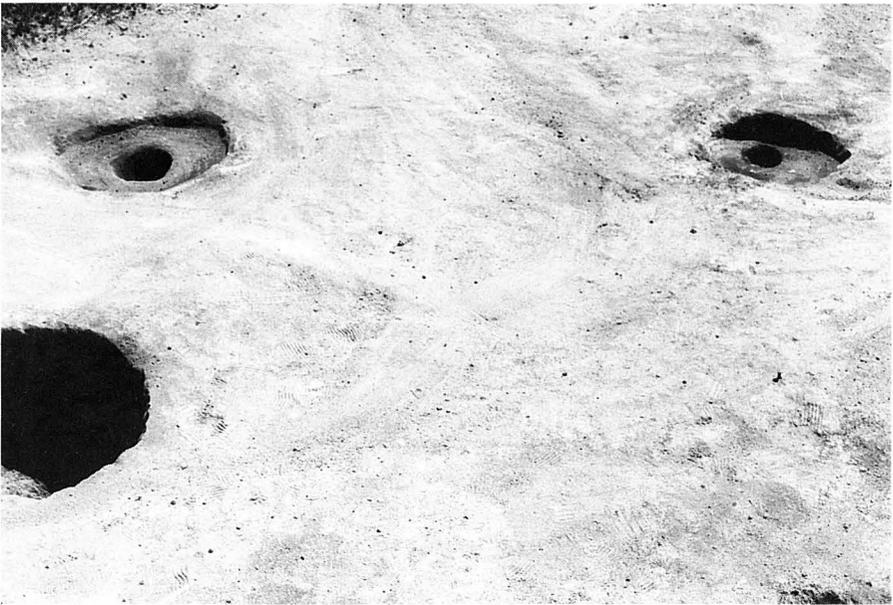
第33号掘立柱
建物址



第34号掘立柱
建物址



第35号掘立柱
建物址



第36号掘立柱
建物址



第37号掘立柱
建物址

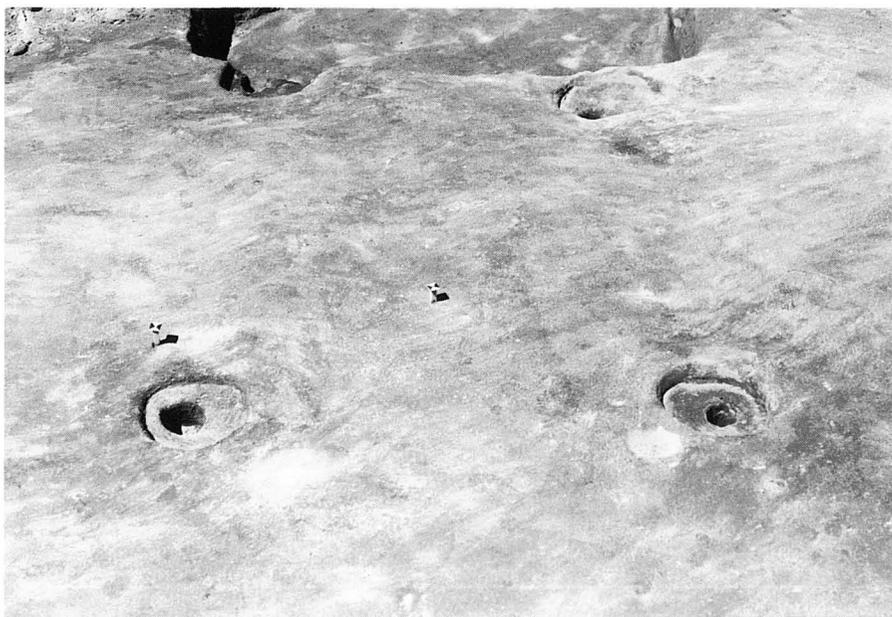
図版40
関口B遺跡



第38号・第39号
掘立柱建物址



第40号掘立柱
建物址



第41号掘立柱
建物址

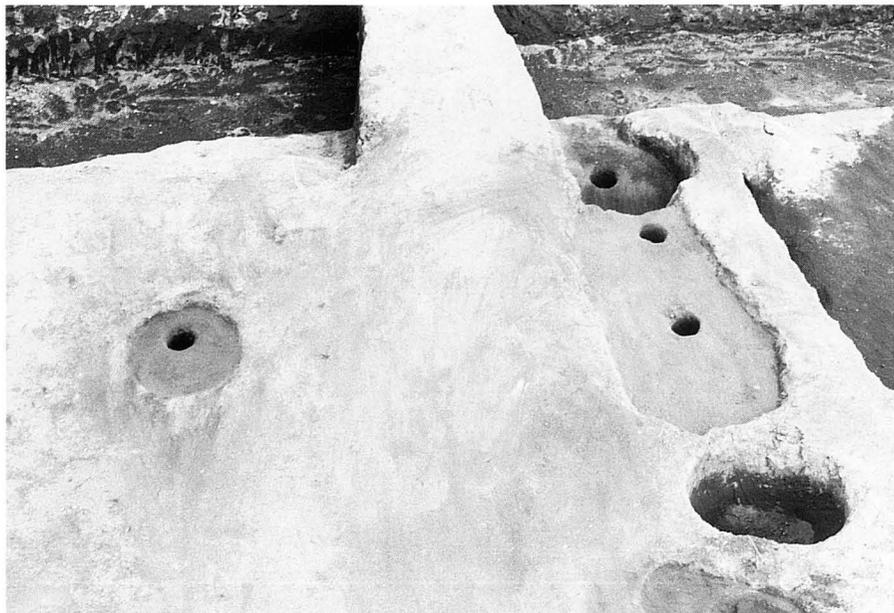


図版41
関口B遺跡

第42号掘立柱
建物址



第43号掘立柱
建物址(西・掘形)



第43号掘立柱
建物址(東)



第44号掘立柱
建物址



第45号掘立柱
建物址



第46号掘立柱
建物址

図版43

関口B遺跡



第47号掘立柱
建物址



第48号掘立柱
建物址



第50号掘立柱
建物址

図版44

関口B遺跡



第51号掘立柱
建物址(掘形)



第53号掘立柱建物址



第54号掘立柱
建物址



図版45
関口B遺跡

第55号掘立柱
建物址



第56号掘立柱
建物址(掘形)



第57号掘立柱
建物址(掘形)



第58号掘立柱
建物址(掘形)



第59号・第61号(前)
掘立柱建物址



第60号掘立柱
建物址(掘形)



図版47
関口B遺跡

第62号掘立柱
建物址(掘形)



第63号掘立柱
建物址(掘形)



第1号井戸址



第1号溝址
遺物出土状態



第1号溝址



第2号溝址



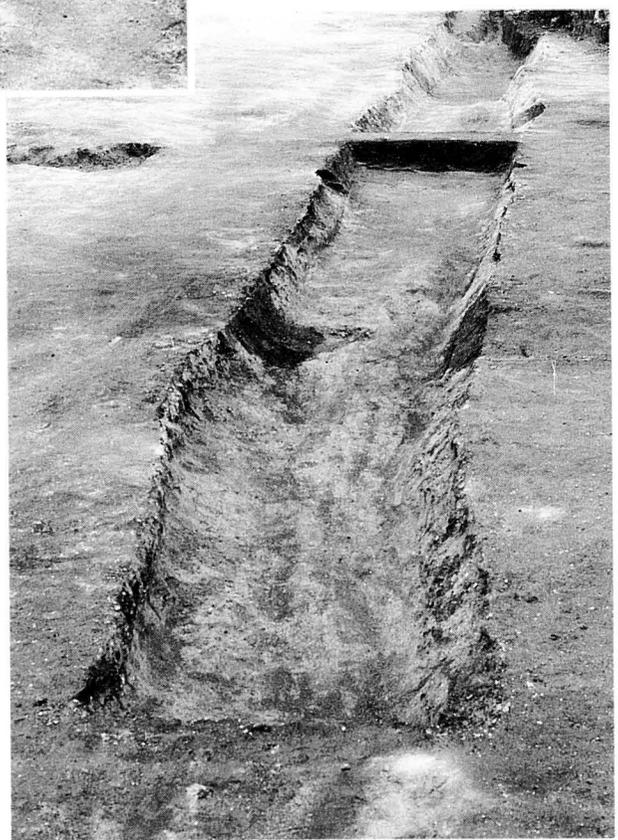
第3号溝址



第4号溝址



第5号溝址



第6号溝址



第7号溝址



第8号溝址

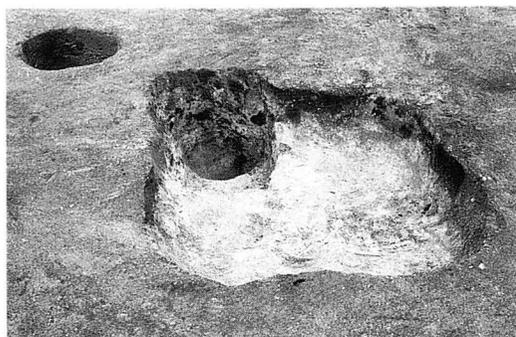
関口B遺跡



第1号土坑



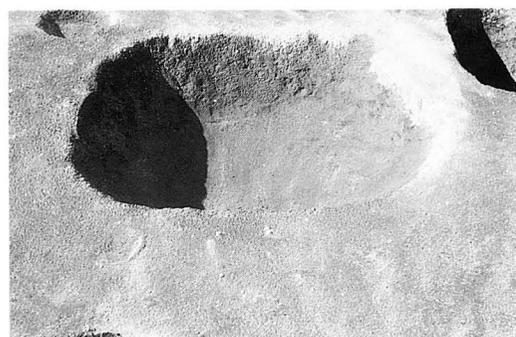
第2号土坑



第3号土坑



第4号土坑



第5号土坑

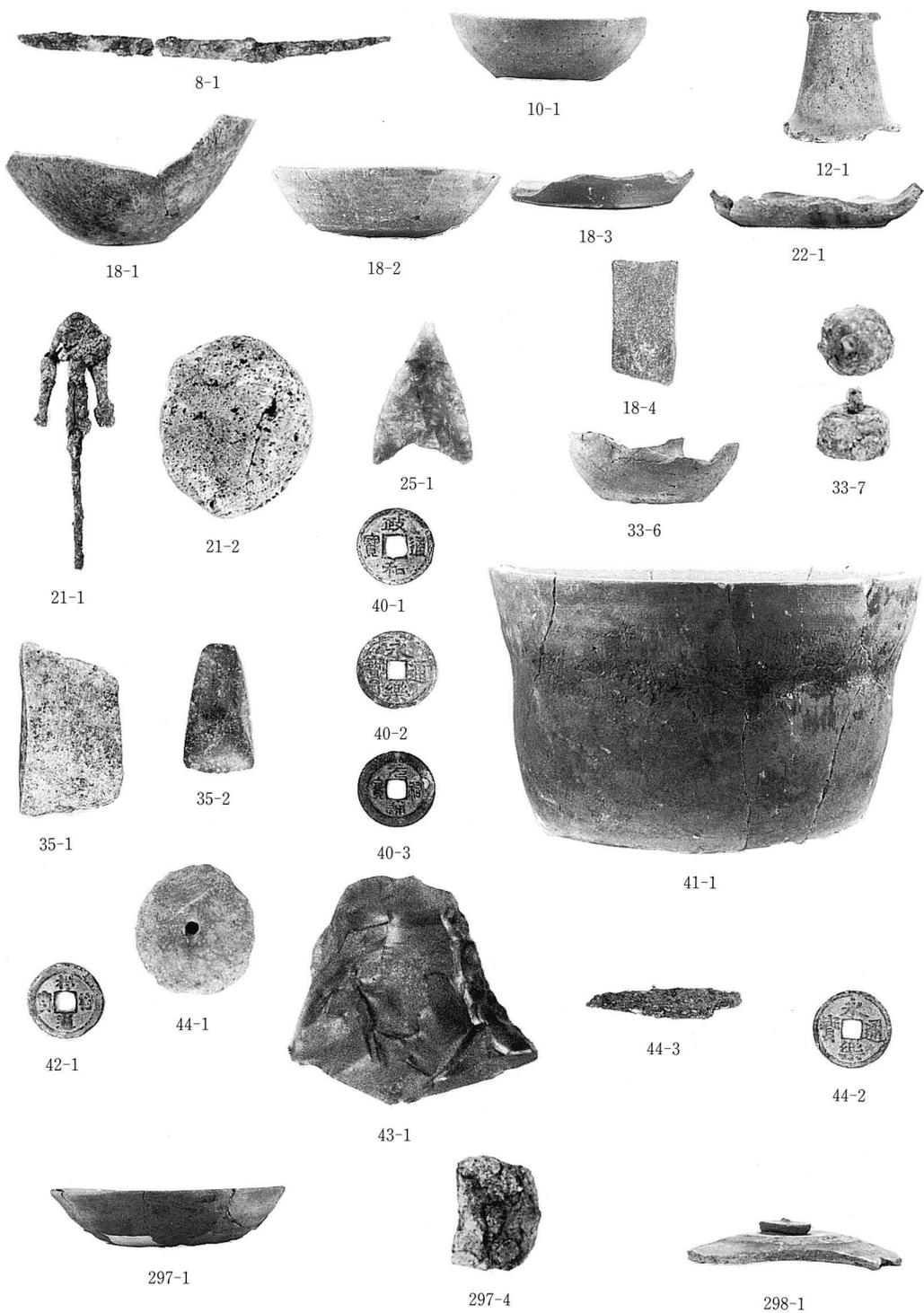


第6号土坑

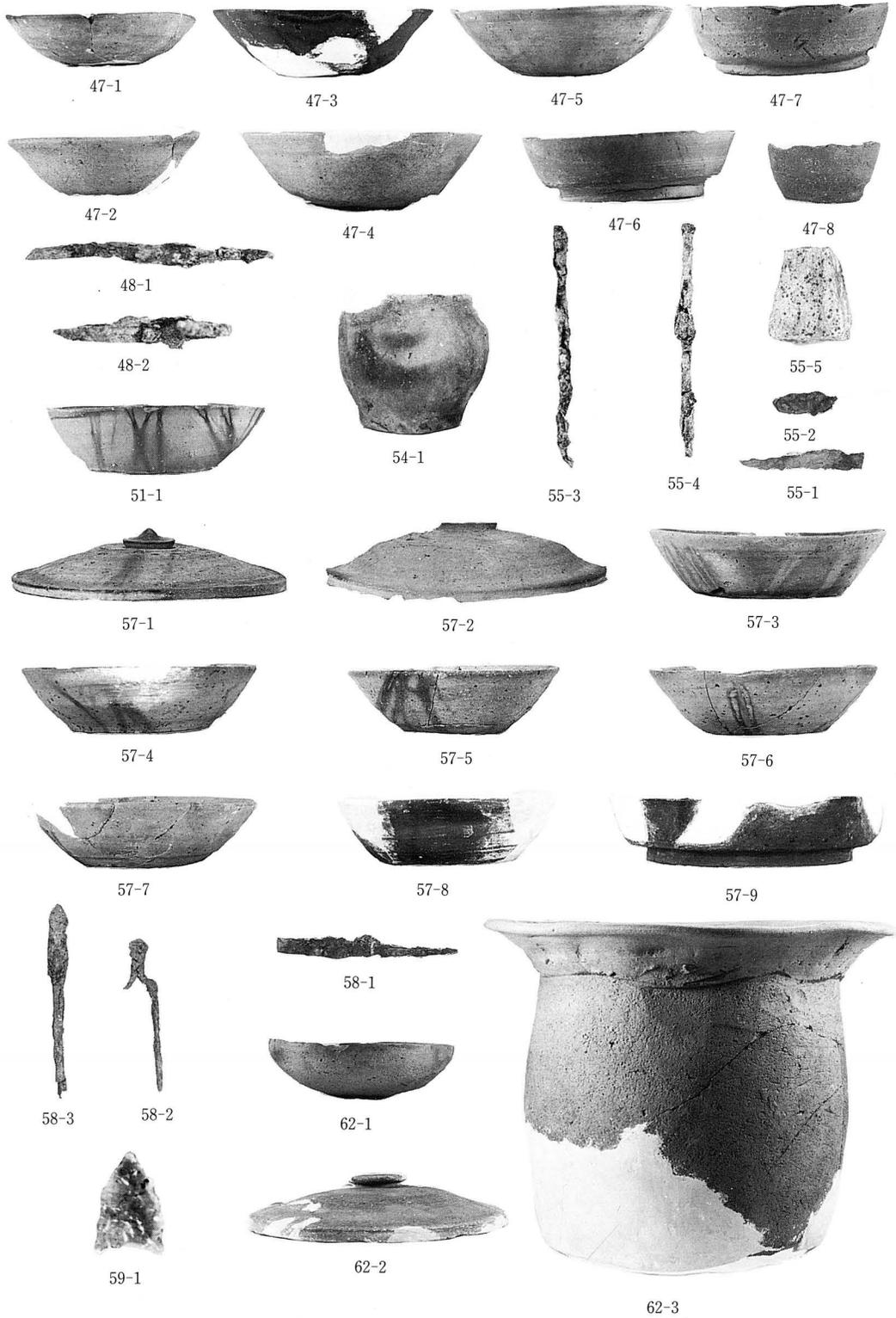
下柏原遺跡



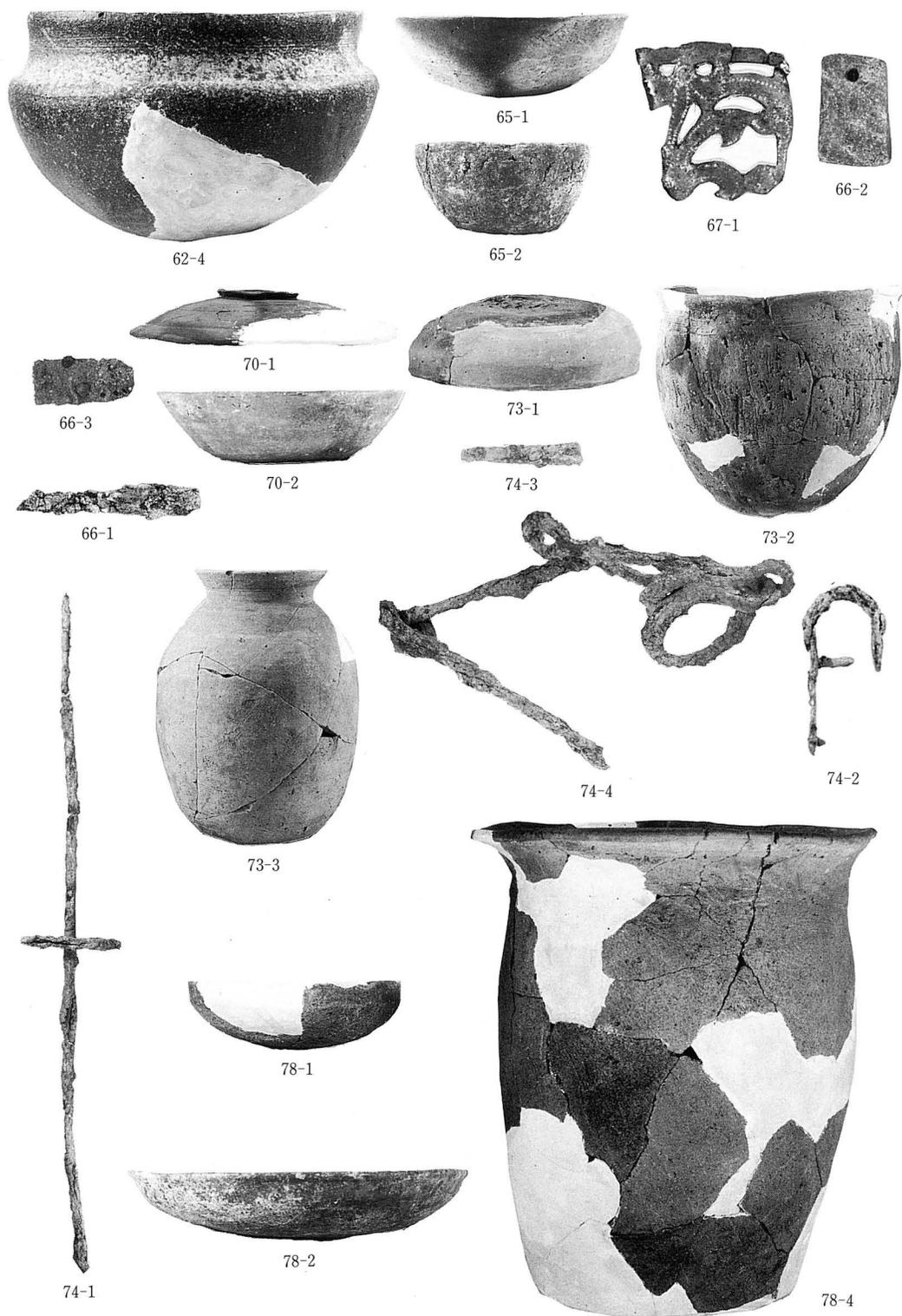
第1号住居址



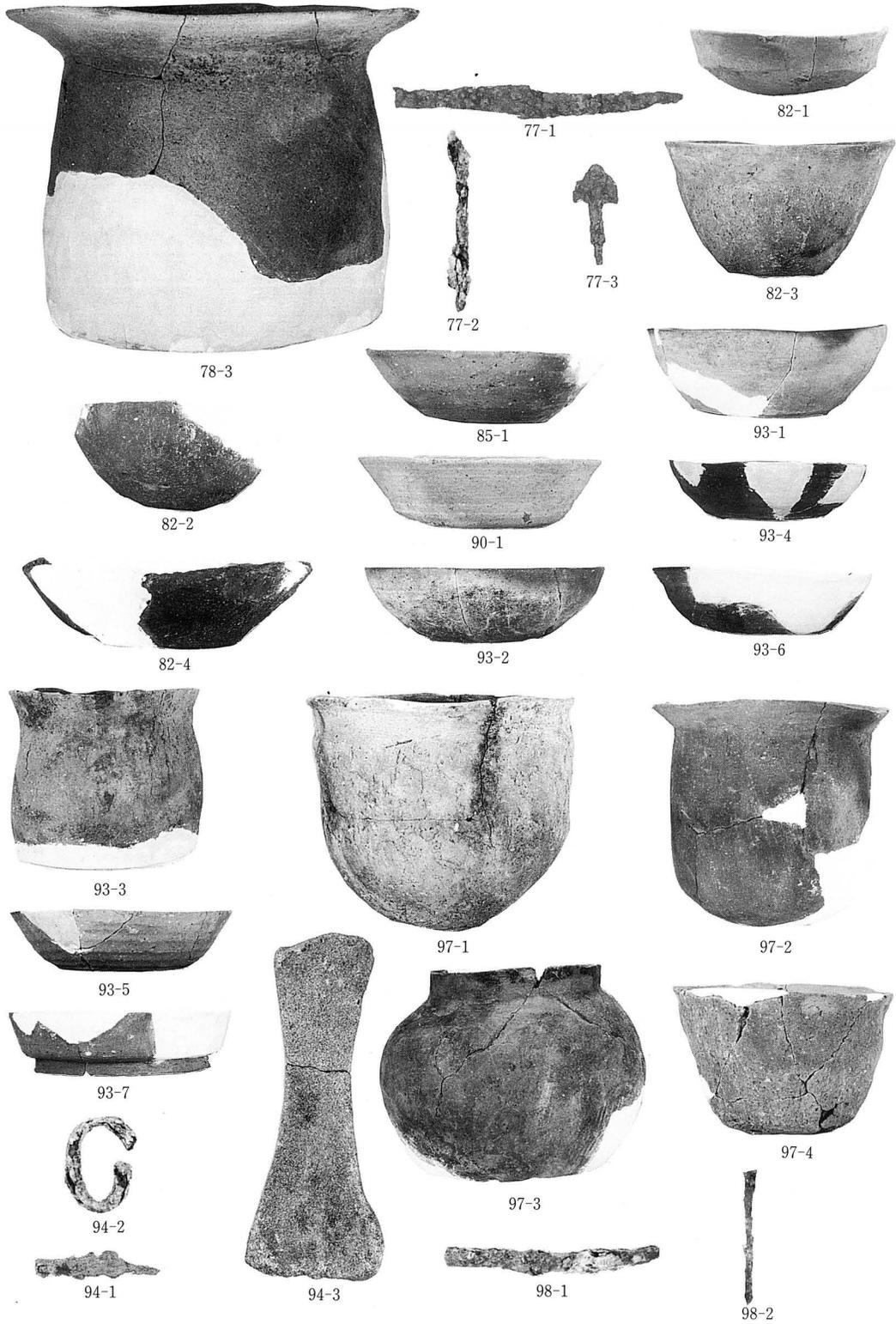
関口A・下柏原遺跡出土遺物



関口B遺跡第1・2・3・4・6号住居址出土遺物



関口B遺跡第6・7・8・9・10号住居址出土遺物



関口B遺跡第10・11・12・15・16・17号住居址出土遺物



97-5



97-6



101-1



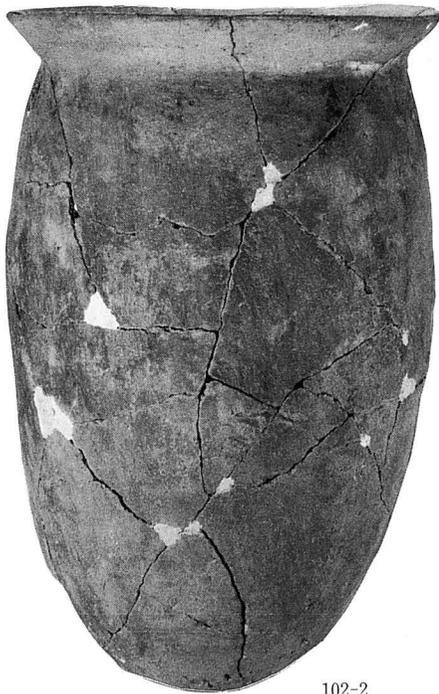
101-2



102-1



105-1

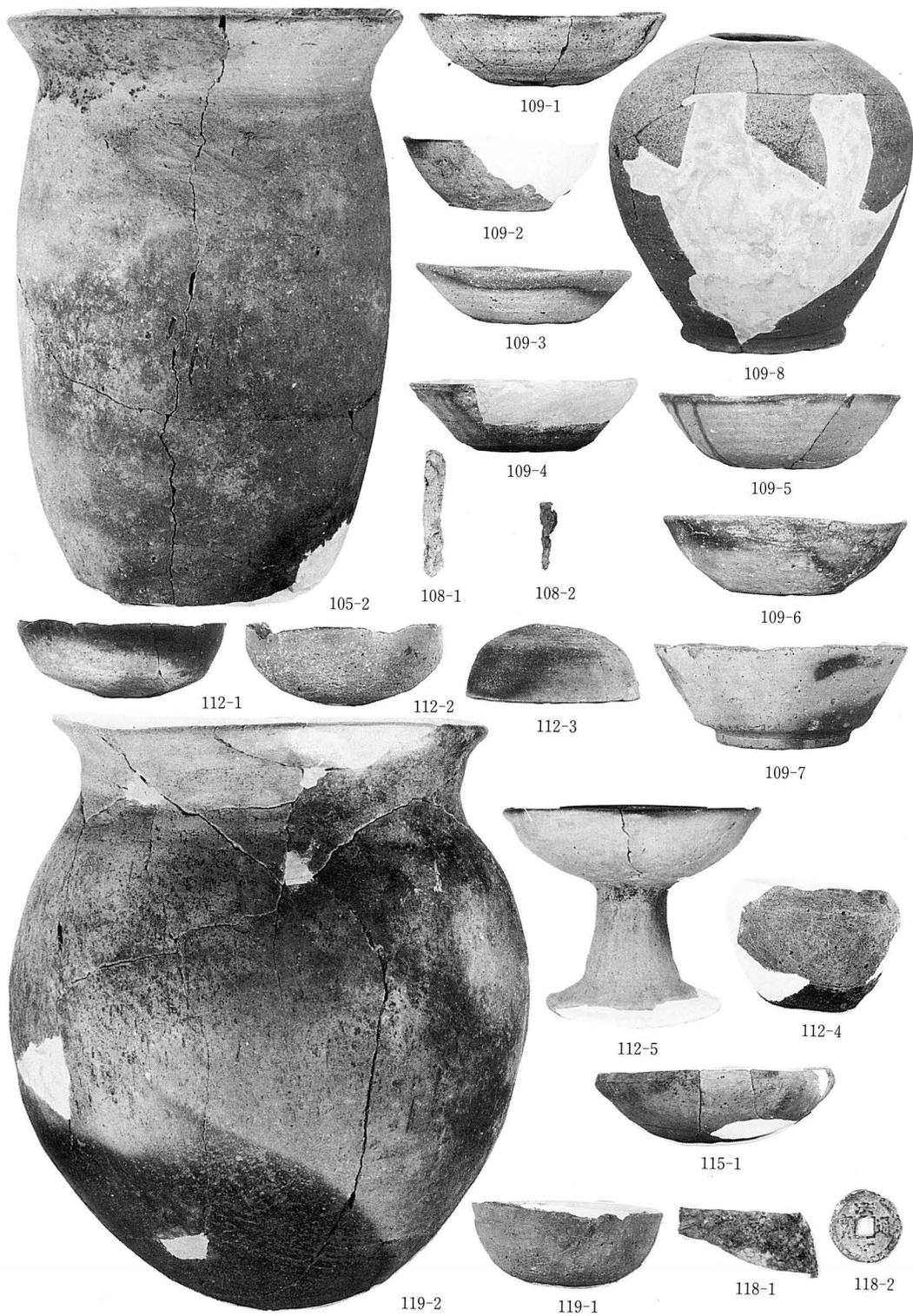


102-2

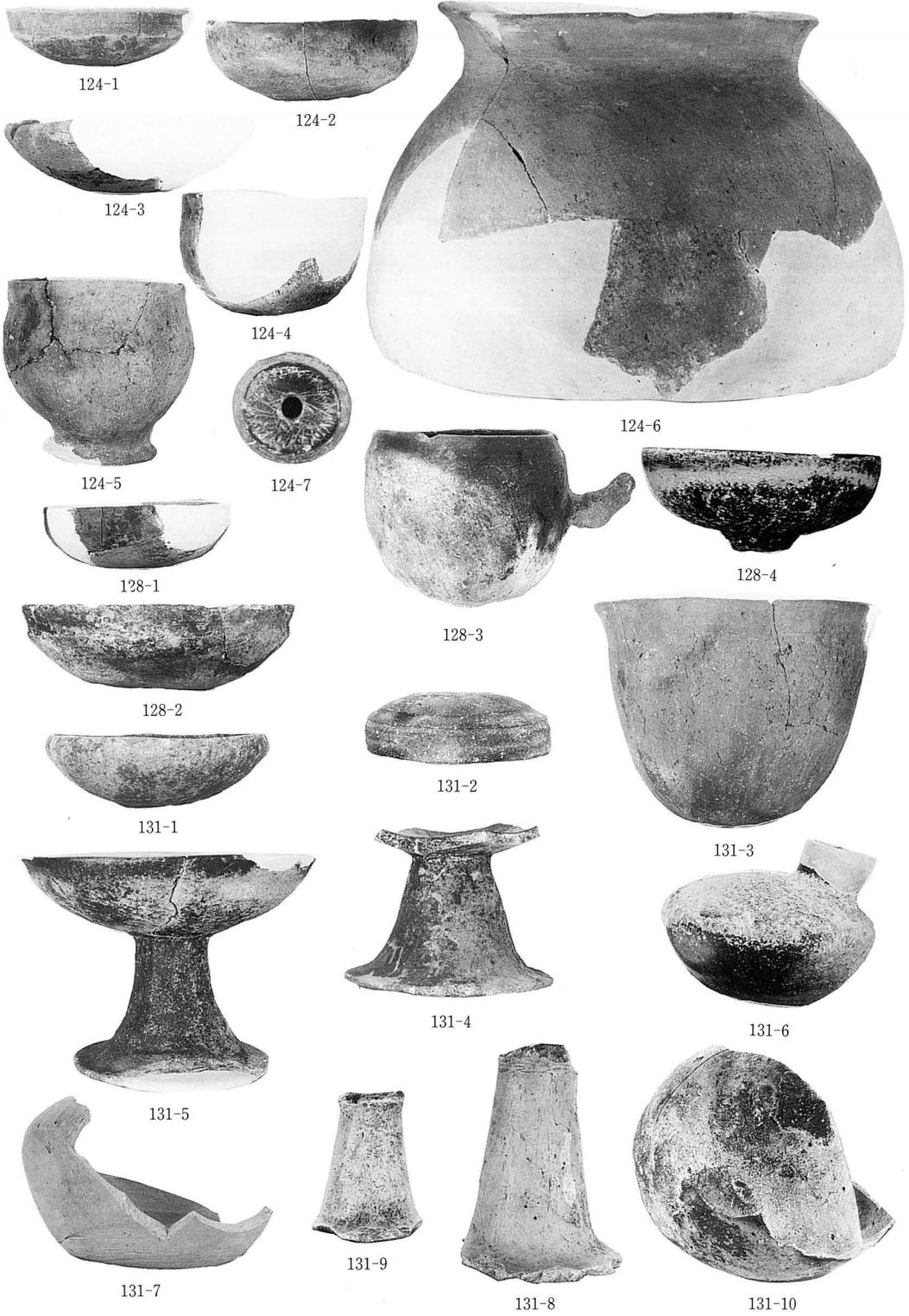


102-3

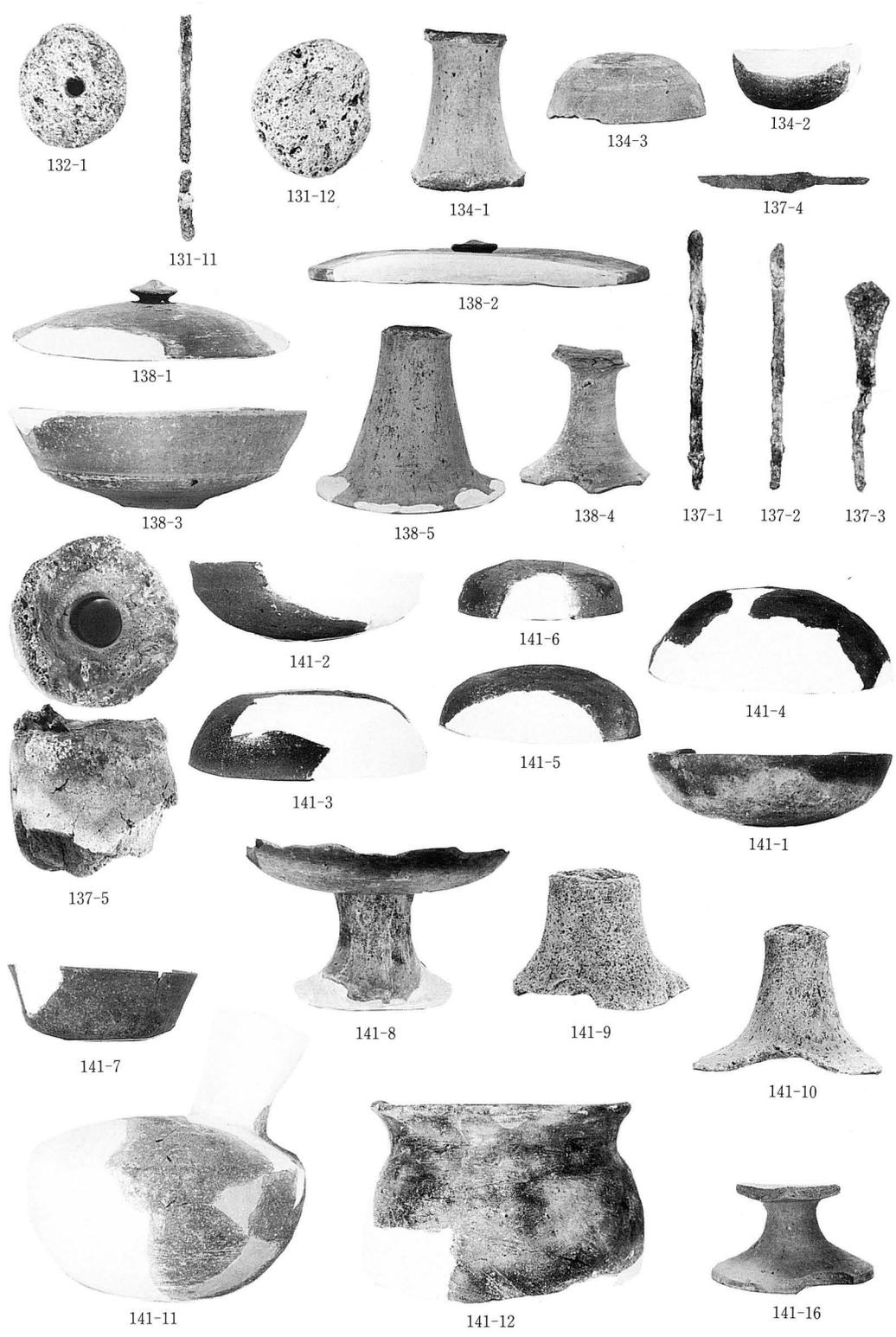
関口B遺跡第17・18・19号住居址出土遺物



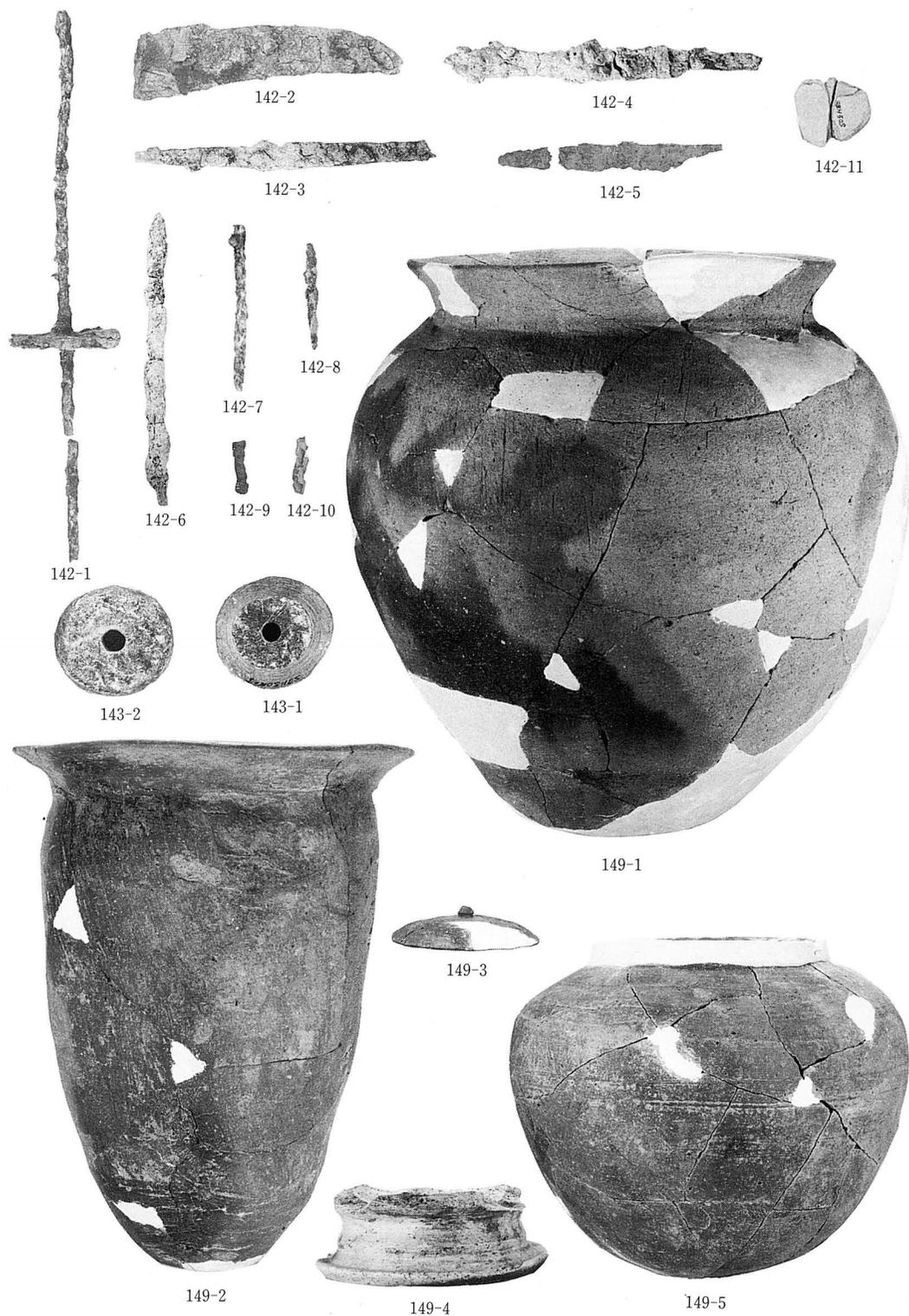
関口B遺跡第19・20・21・22・23号住居址出土遺物



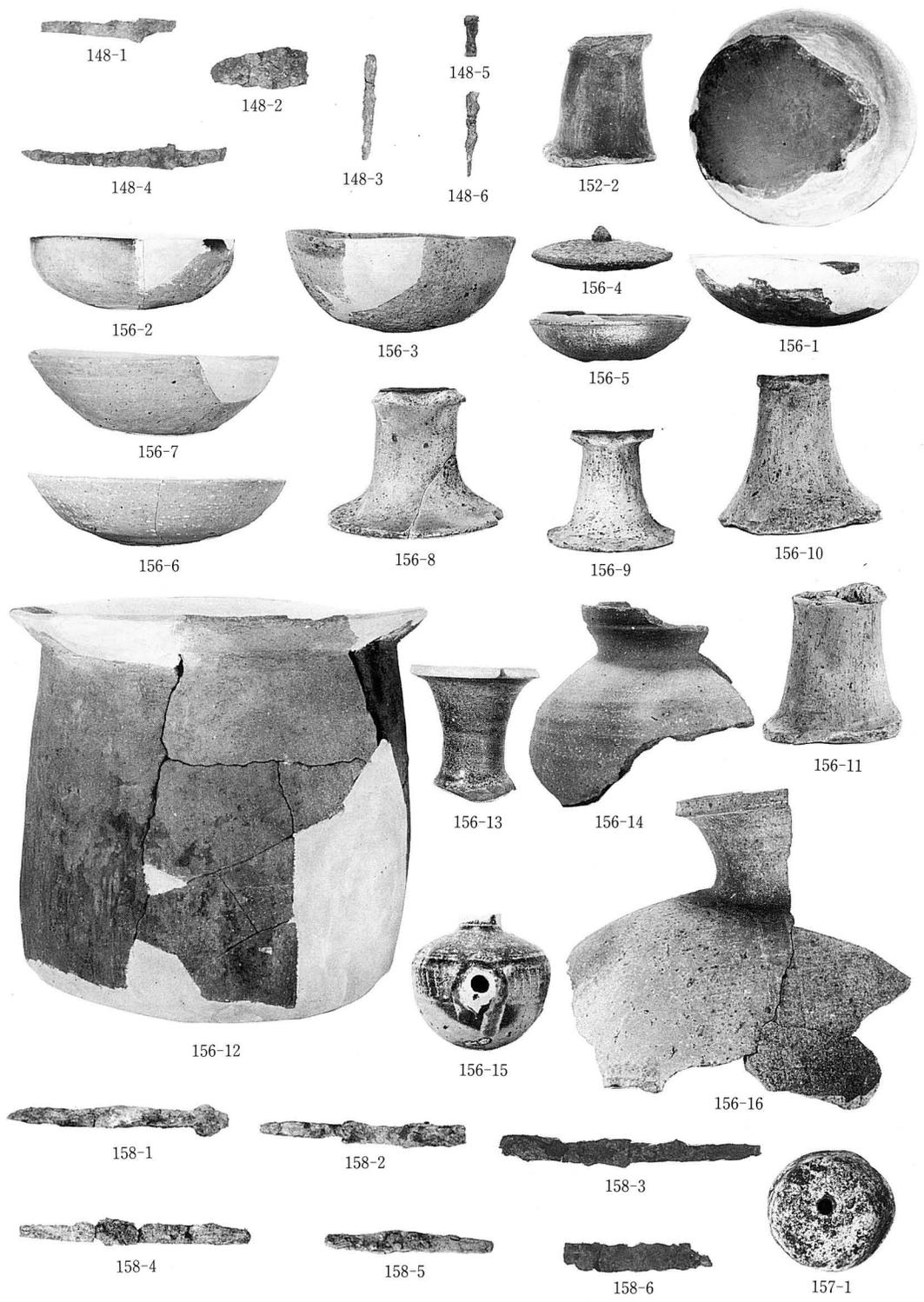
関口B遺跡第25・26・27号住居址出土遺物



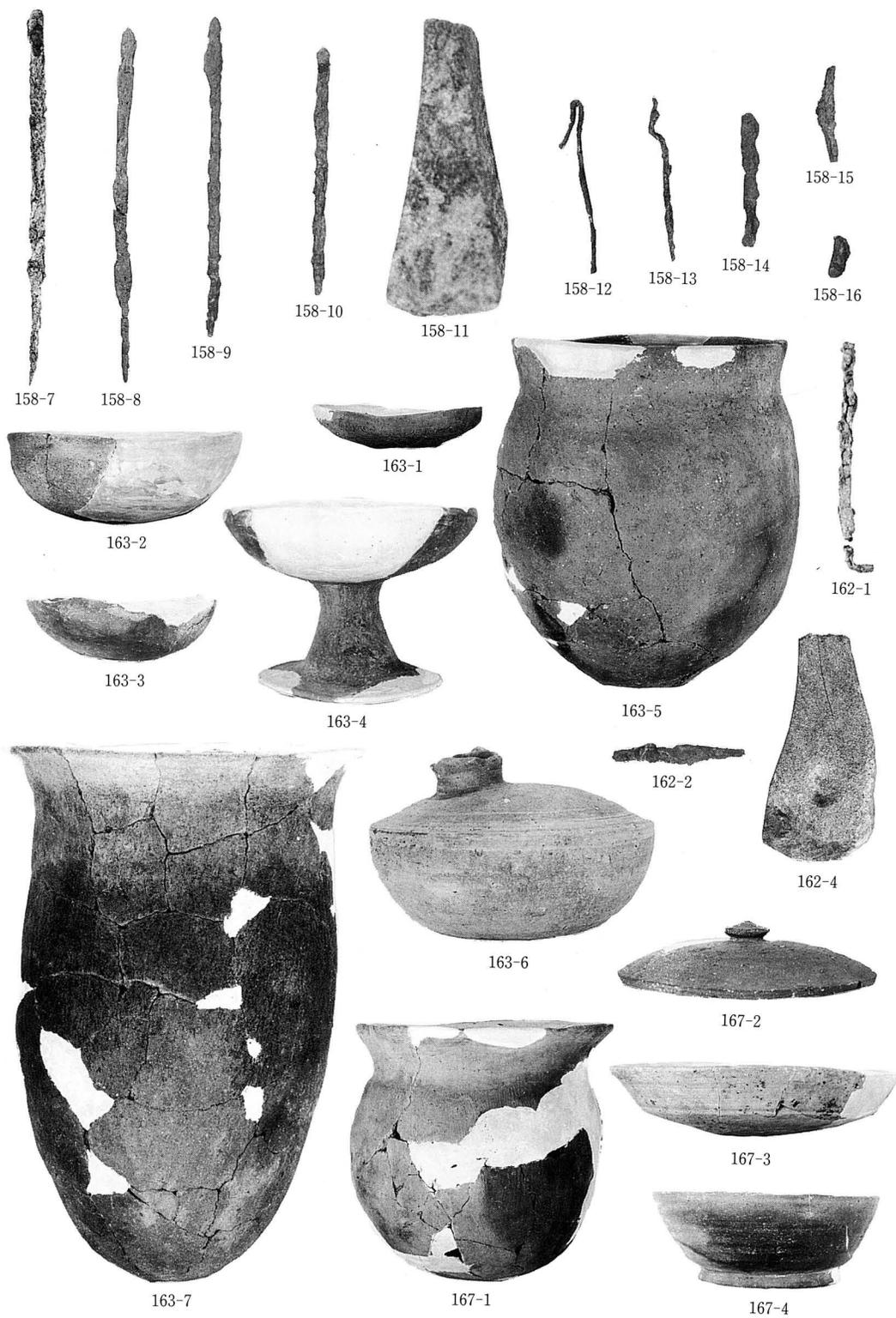
関口B遺跡第27・28・29・30号住居址出土遺物



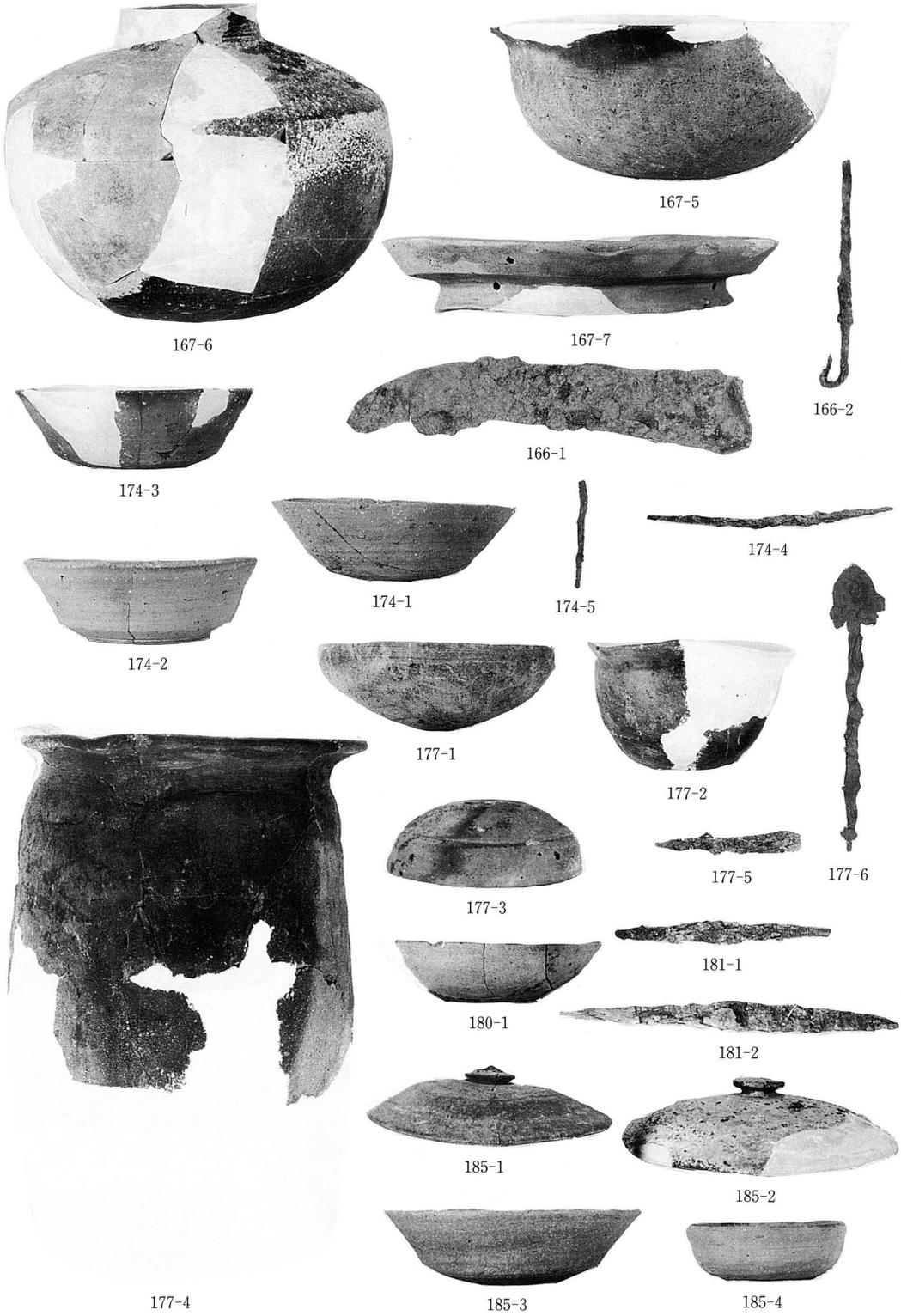
関口B遺跡第30・32号住居址出土遺物



関口B遺跡第32・33・34号住居址出土遺物



関口B遺跡第34・36・37号住居址出土遺物



関口B遺跡第37・40・41・42・43号住居址出土遺物



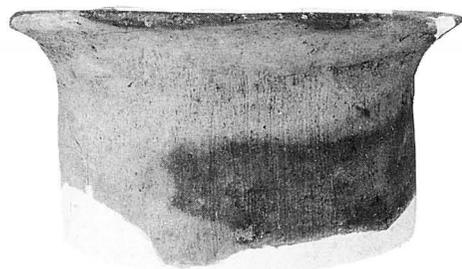
185-5



185-6



185-7



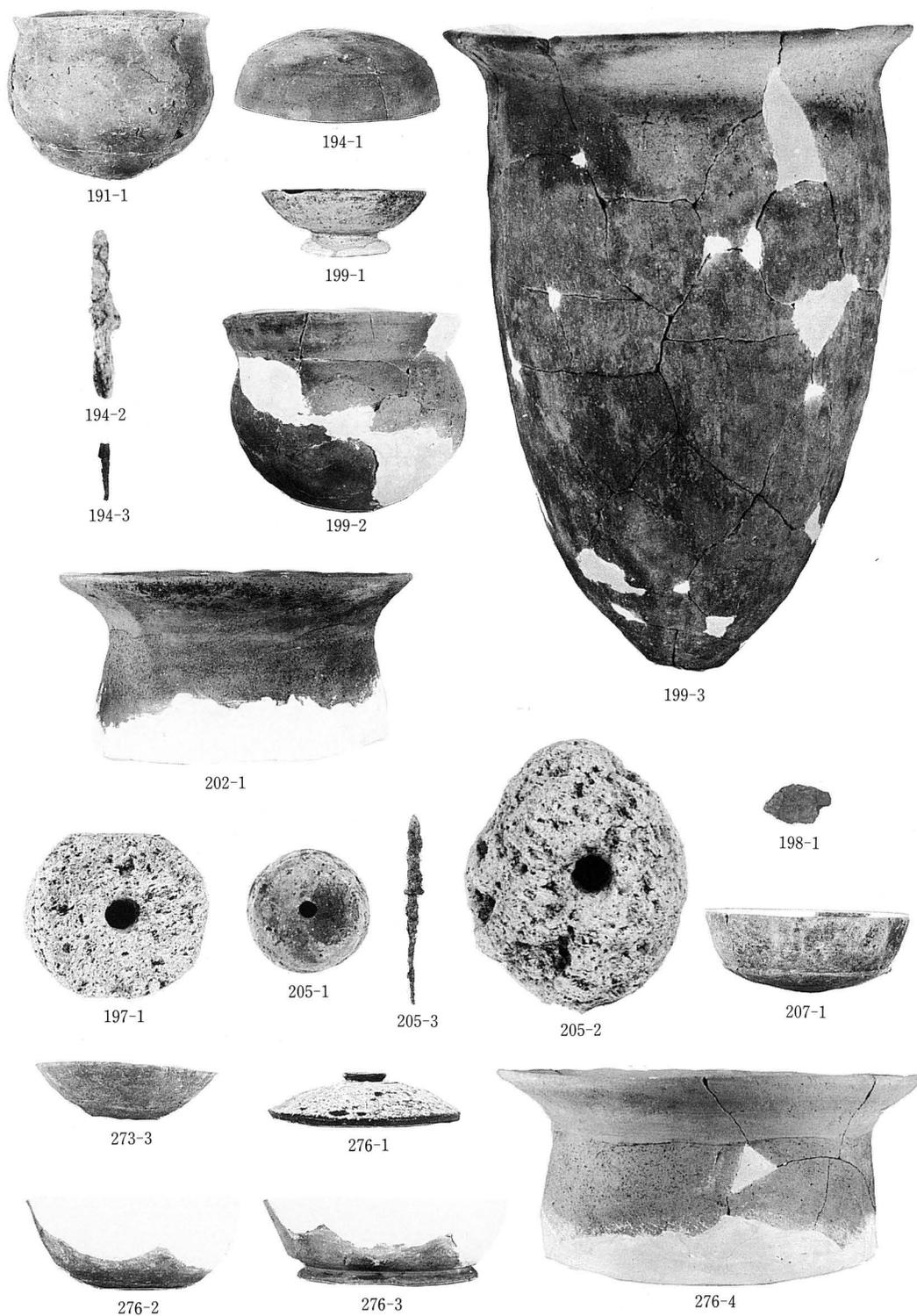
185-8



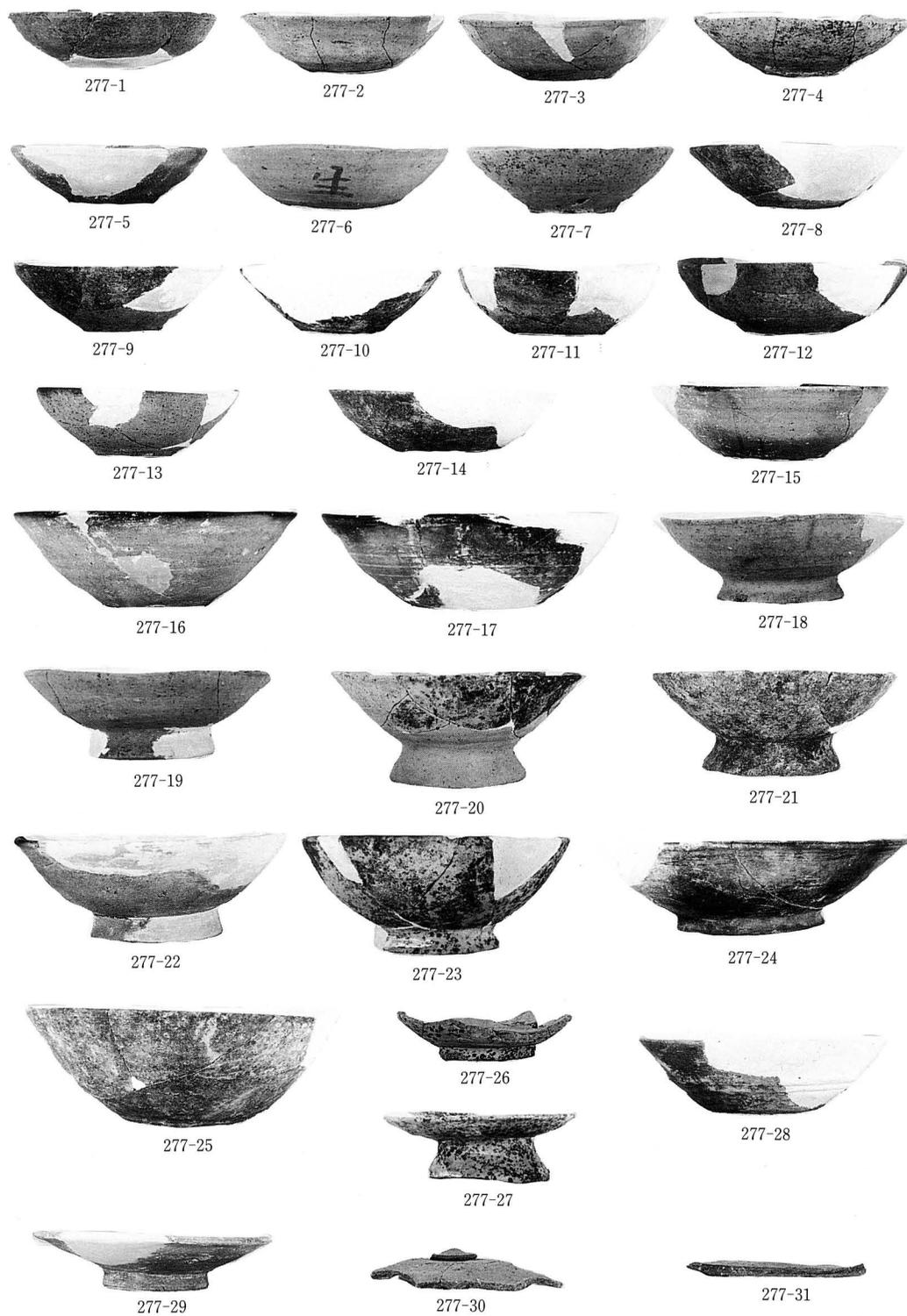
185-9



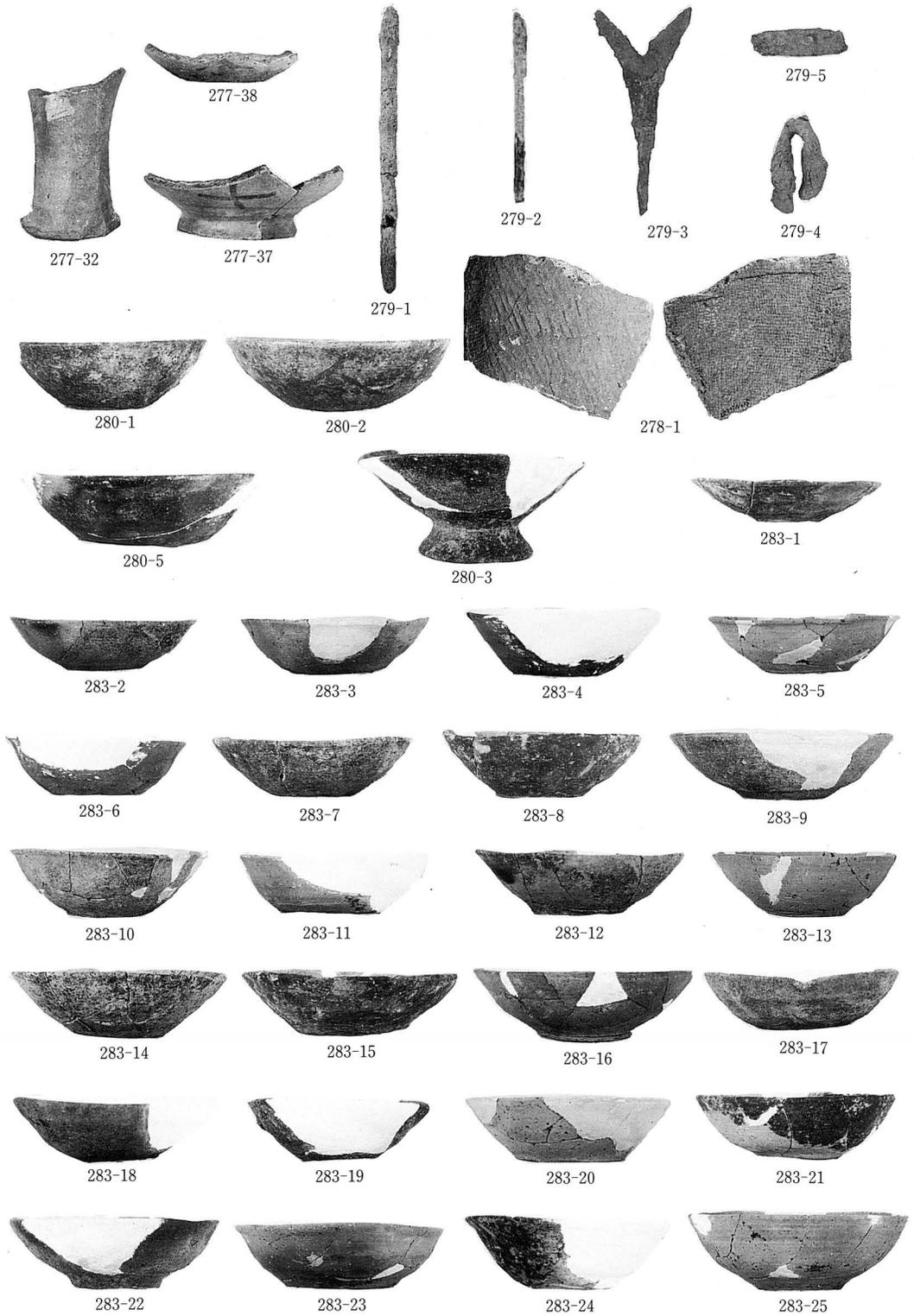
184-1



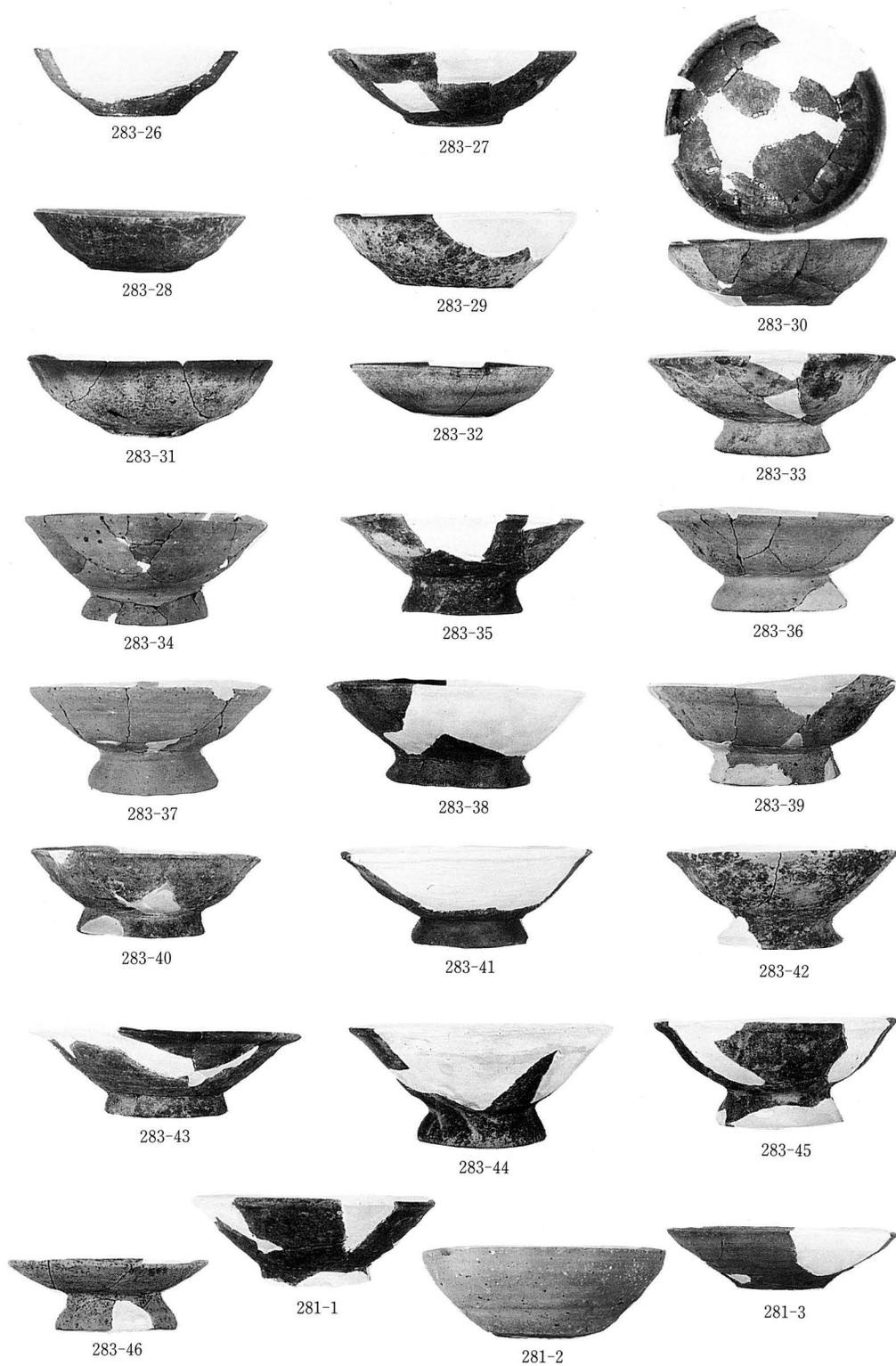
関口B遺跡第45・46・47・49・51・52号住居址、第20号掘立柱建物址、第1号井戸址出土遺物



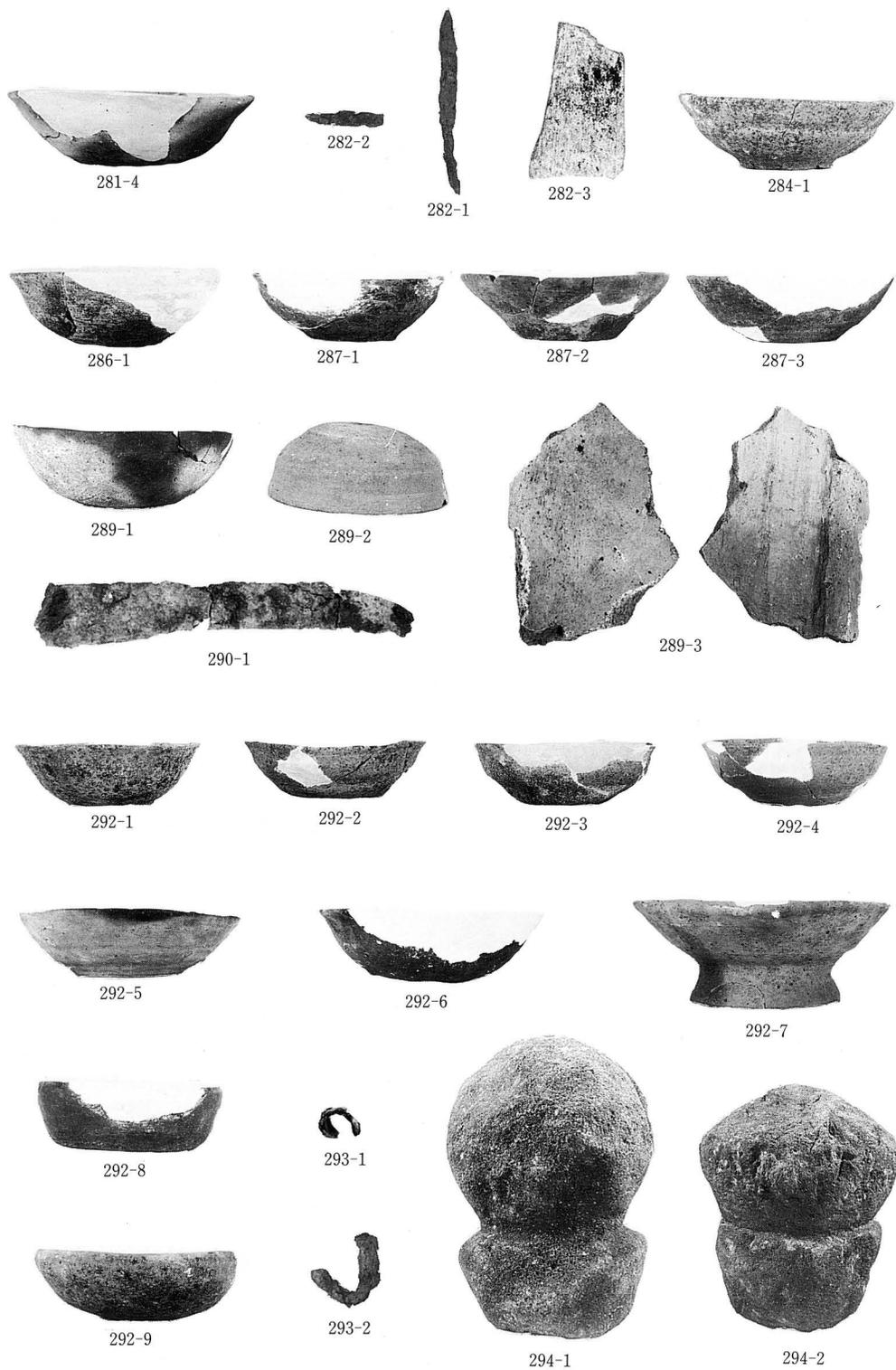
関口B遺跡第1号溝址出土遺物



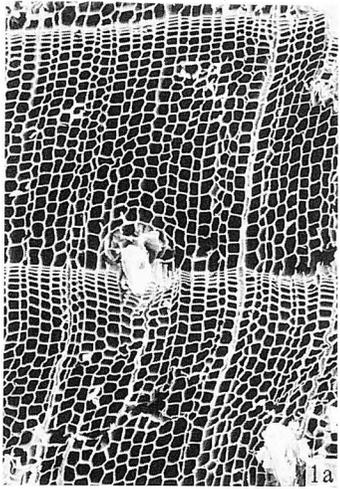
関口B遺跡第1・2・3号溝址出土遺物



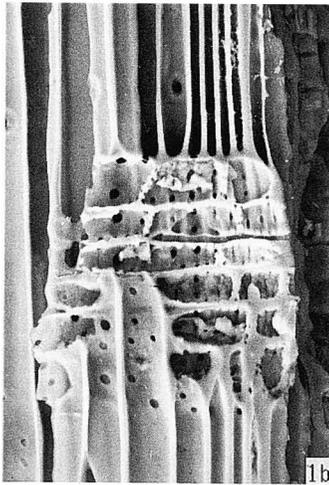
関口B遺跡第3号溝址出土遺物



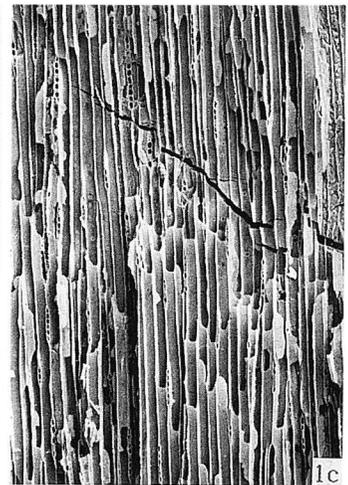
関口B遺跡第3・6・7・8号溝址、第2号土坑、遺構外出土遺物



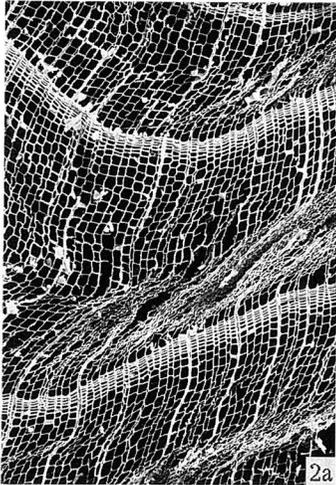
モミ属の一種 木口×105



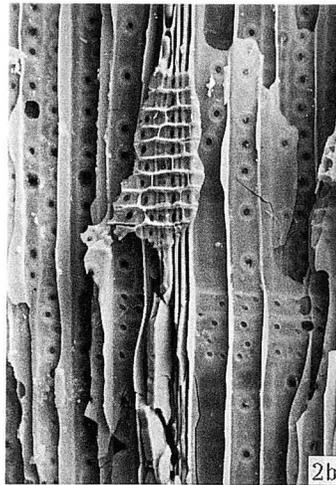
モミ属の一種 柁目×350



モミ属の一種 板目×70



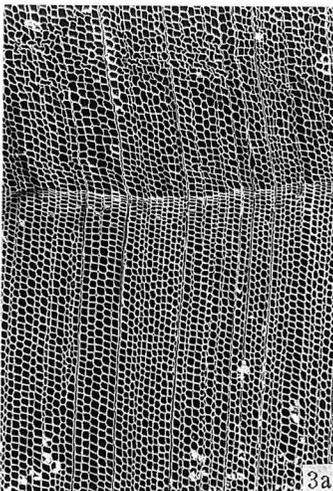
スギ 木口×56



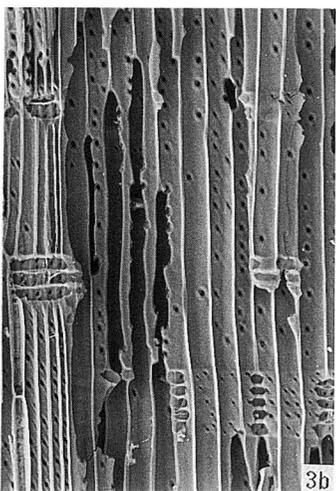
スギ 柁目×210



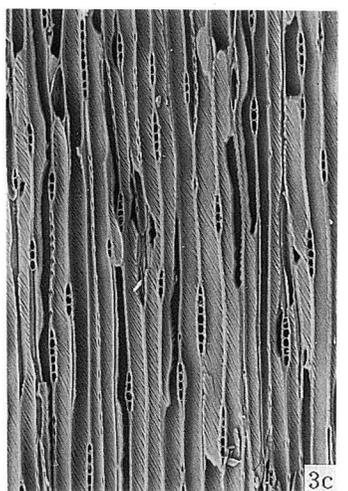
スギ 板目×70



ヒノキ属の一種 木口×49

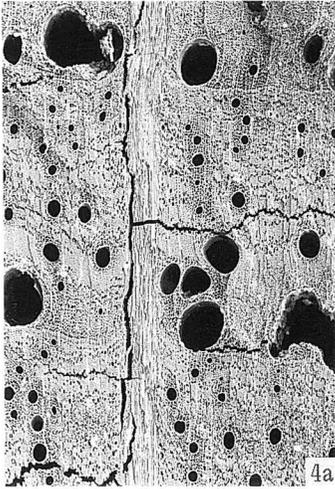


ヒノキ属の一種 柁目×140

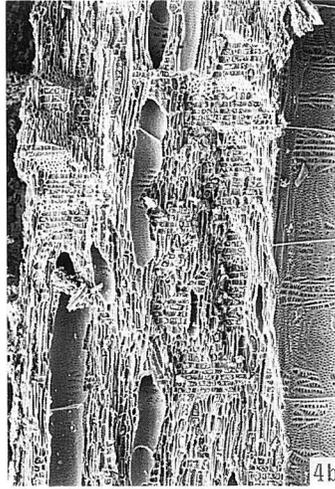


ヒノキ属の一種 板目×105

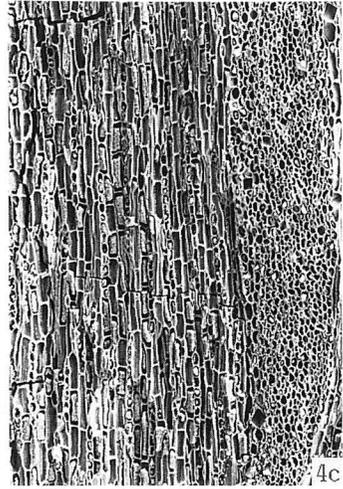
材の顕微鏡写真



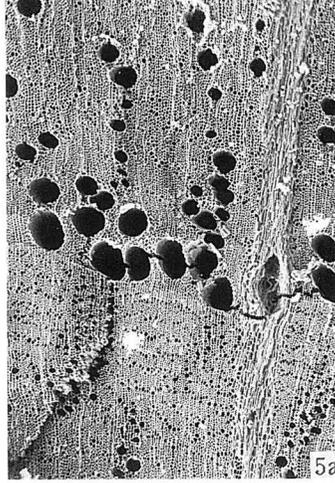
4a コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種 木口×35



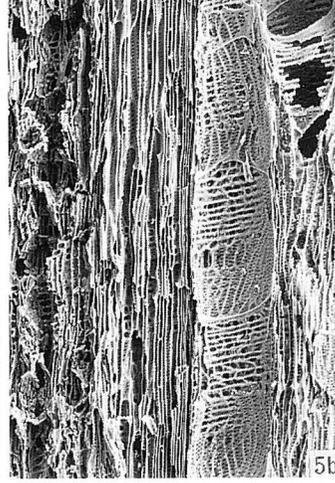
4b コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種 柁目×70



4c コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種 板目×105



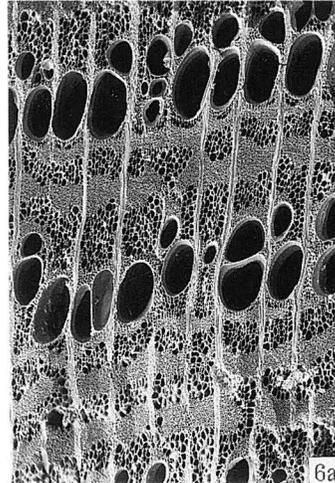
5a コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種 木口×35



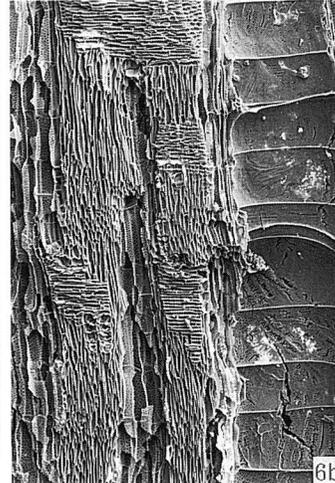
5b コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種 柁目×70



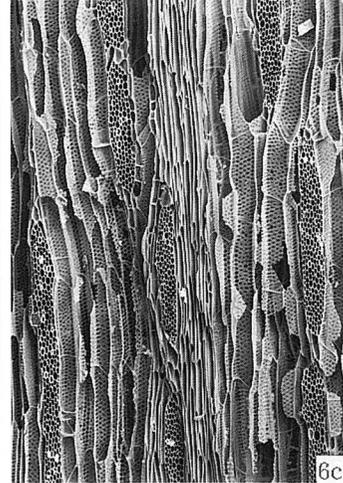
5c コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種 板目×70



6a ケヤキ 木口×21

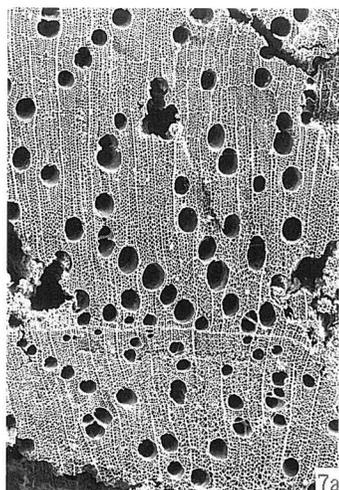


6b ケヤキ 柁目×49



6c ケヤキ 板目×70

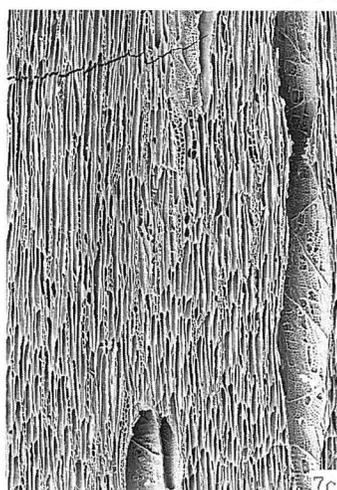
材の顕微鏡写真



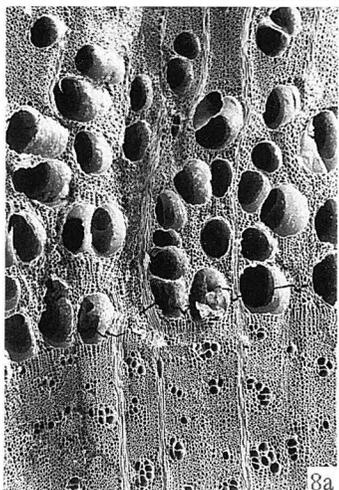
オニグルミ 木口×35 7a



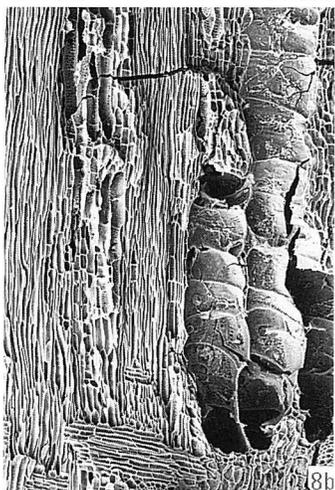
オニグルミ 柁目×70 7b



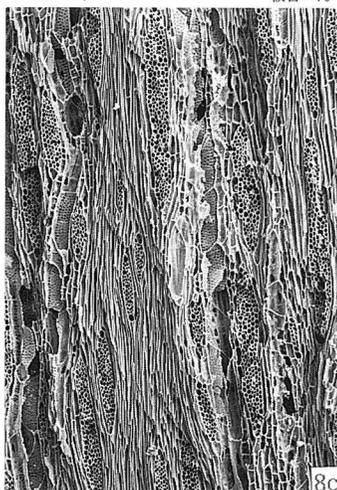
オニグルミ 板目×70 7c



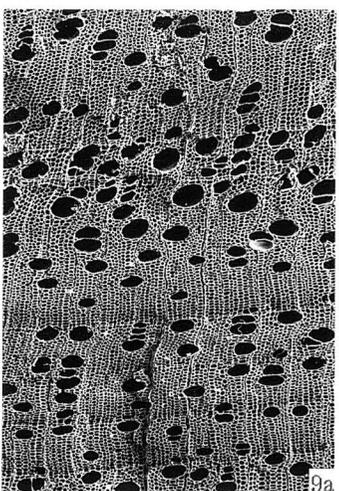
ヤマグワ 木口×35 8a



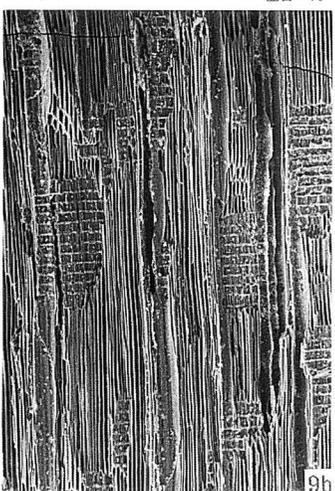
ヤマグワ 柁目×70 8b



ヤマグワ 板目×70 8c



カバノキ属類似種 木口×70 9a

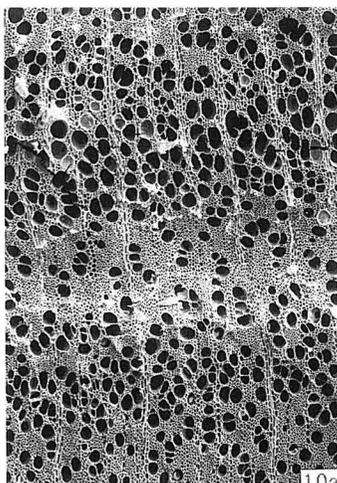


カバノキ属類似種 柁目×105 9b

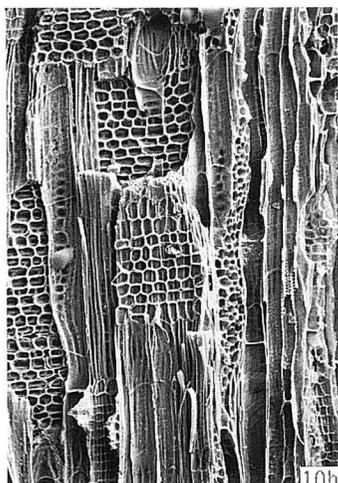


カバノキ属類似種 板目×175 9c

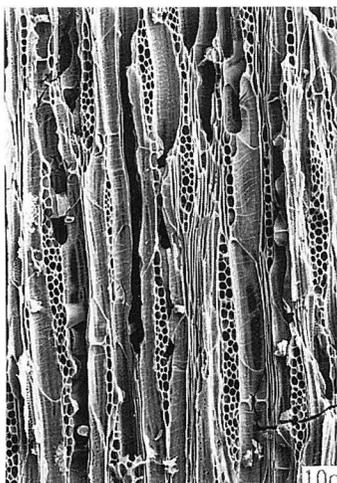
材の顕微鏡写真



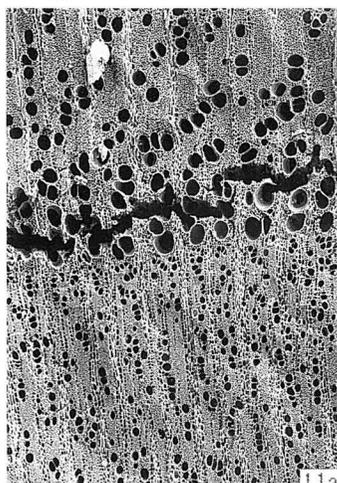
サクラ属の一種 木口×52 10a



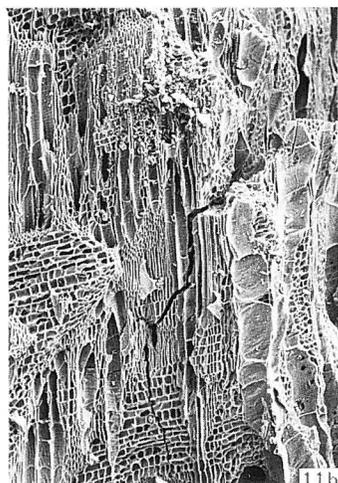
サクラ属の一種 柁目×105 10b



サクラ属の一種 板目×105 10c



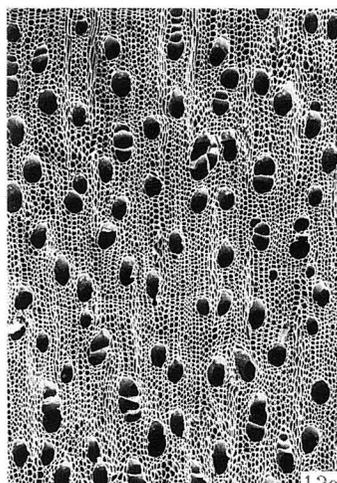
サクラ属の一種 木口×52 11a



サクラ属の一種 柁目×70 11b



サクラ属の一種 板目×70 11c



カエデ属の一種 木口×70 12a

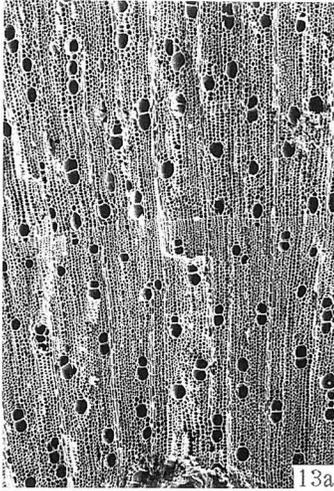


カエデ属の一種 柁目×105 12b

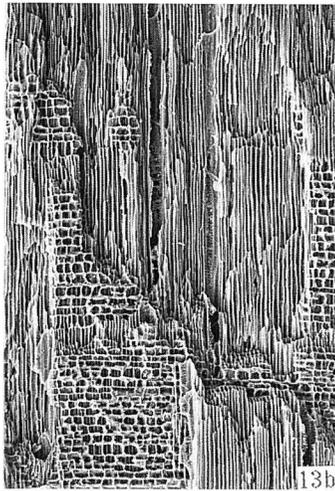


カエデ属の一種 板目×70 12c

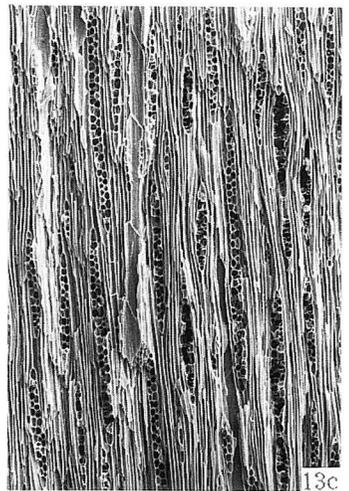
材の顕微鏡写真



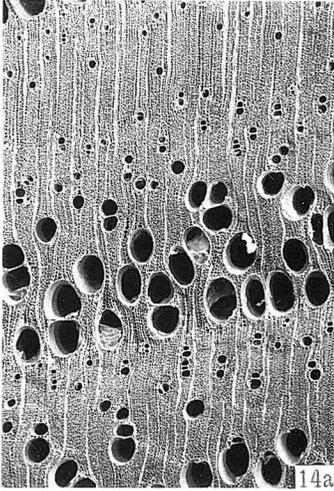
クスノキ属類似種 木口×49



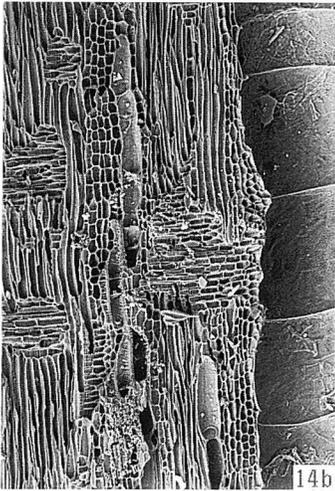
クスノキ属類似種 柁目×70



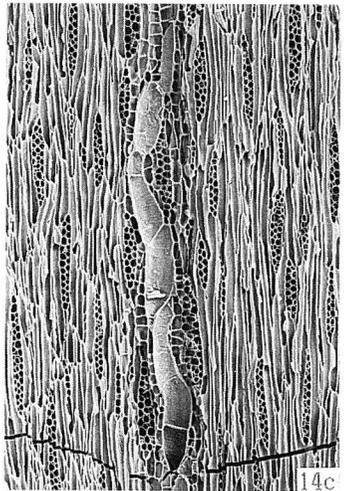
クスノキ属類似種 板目×70



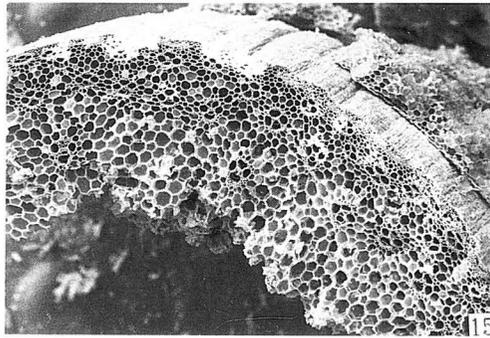
トネリコ属の一種 木口×17



トネリコ属の一種 柁目×70



トネリコ属の一種 板目×70



イネ科タケ亜科の一種 木口×35

材の顕微鏡写真

材の顕微鏡写真 試料番号・出土遺構

図版 71	1 a ~ 1 c	No.56	関口 B 遺跡第36号住居址
	2 a ~ 2 c	No. 4	関口 B 遺跡第 1 号住居址
	3 a ~ 3 c	No.96	関口 B 遺跡第 4 号住居址
図版 72	4 a ~ 4 c	No.28	関口 B 遺跡第24号住居址
	5 a ~ 5 c	No.94	関口 B 遺跡第 1 号溝址
	6 a ~ 6 c	No.90	関口 B 遺跡第 1 号溝址
図版 73	7 a ~ 7 c	No. 2	関口 A 遺跡第 6 号住居址
	8 a ~ 8 c	No. 3	関口 B 遺跡第 1 号住居址
	9 a ~ 9 c	No.34	関口 B 遺跡第25号住居址
図版 74	10 a ~ 10 c	No.22	関口 B 遺跡第23号住居址
	11 a ~ 11 c	No.41	関口 B 遺跡第29号住居址
	12 a ~ 12 c	No.68	関口 B 遺跡第43号住居址
図版 75	13 a ~ 13 c	No.85	関口 B 遺跡第 1 号溝址
	14 a ~ 14 c	No.87	関口 B 遺跡第 1 号溝址
	15	No.72	関口 B 遺跡第52号住居址

柏原遺跡群
関口 A ・ 関口 B ・ 下柏原
(第 二 次)

—長野県小諸市関口 A ・ 関口 B ・ 下柏原遺跡発掘調査報告書—

平成 3 年 3 月 発行

編 集 長野県小諸市教育委員会

発 行 東信土地改良事務所

印 刷 ほおずき書籍株式会社

